

現れる鬼神

響鳴響鬼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界には古来より自然界の脅威《魔化魍》から人々を助ける者達がいた。

彼、新藤 誠も鬼として人々を陰ながら魔化魍から人々を救う為に日本中を旅していた。

そんな彼に、日本最大の学園《麻帆良学園》の学園長から魔化魍退治の要請が入る。

承諾したは良い物の彼は何故か学校の先生をすることに・・・
しかし、学園に来たから彼に待ち受けていたのは、恐るべき敵との闘いの始まりだった。

注意書きですが、かなり内容はぶっ飛んでおります。

響鬼の内容もオリジナル設定が大多数になります。

というか、もはや響鬼の名を借りた別作品じゃないかとツッコまれても可笑しくない所が大多数です。というより自分でも思ってます
(汗)

苦手な方は、ご遠慮下さい。

それでもかまわないという方は、ぜひご覧ください。

目次

設定集

登場人物設定

1

設定・用語集

15

現れる鬼神・年表

22

外伝編《仮面ライダーディケイド『響鬼&ネギまの世界』（不定期）

第一話《世界の破壊者》

30

第二話《秘密結社大シヨツカー》

38

第三話《接触》

52

プロローグ

第一ノ巻《始まる物語》

67

第一章《学園生活編》

第二ノ巻《驕れる魔法使い》

78

第三ノ巻《再会》

88

第四ノ巻《2年A組》

105

第五ノ巻《響く鬼》

113

第六ノ巻《蠢く魔》

119

第二章《吸血鬼襲撃編》

第七ノ巻《動き始める者》

125

第八ノ巻《魔化魍》

135

第九ノ巻《音撃戦士の戦い》

145

第十ノ巻《迫る脅威》

156

第十一ノ巻《忍と鬼》

164

第十二ノ巻《吸血鬼と対面》

175

第十三ノ巻《動き出す吸血鬼》

192

第十四ノ卷 《闇の魔法》

203

第十五ノ卷 《灼熱の響鬼》

220

第十六ノ卷 《清める吸血鬼》

228

第三章 《悪鬼出現編》

第十七ノ卷 《百日鬼》

248

第十八ノ卷 《二人の鬼》

256

第十九ノ卷 《邂逅》

264

第二十ノ卷 《接触》

276

第二十一ノ卷 《鬼殺し》

287

第二十二ノ卷 《闇への導き／図書館島の恐怖》

294

第二十三ノ卷 《怨念声刃》

305

第二十四ノ卷 《響鬼・翔》

316

第二十五ノ卷 《魔法と鬼の道》

331

第四章 《漆黒の樹海編》

第二十六ノ卷 《猛士臨時調査隊》

346

第二十七ノ卷 《出発》

355

第二十八ノ卷 《青木ヶ原樹海》

373

第二十九ノ卷 《殺戮の鬼》

383

第三十ノ卷 《暴食の死徒》

393

第三十一ノ卷 《暴食の魔》

403

第三十二ノ卷 《休息／暗躍》

413

第三十三ノ卷 《又エ》

425

第三十四ノ卷 《終末の樹海》

438

最終章 《雷鳴に輝く京の都編》

第三十五ノ卷 《動き出す者たち》

449

| | | |
|--------|--------------|-----|
| 第三十六ノ卷 | 《行動開始》 | 466 |
| 第三十七ノ卷 | 《幕開け》 | 483 |
| 第三十八ノ卷 | 《血塗れのネギ》 | 504 |
| 第三十九ノ卷 | 《狼の鬼》 | 523 |
| 第四十ノ卷 | 《囚われた姫》 | 533 |
| 第四十一ノ卷 | 《明かされた目的（嘘）》 | 541 |
| 第四十二ノ卷 | 《従者・神楽坂明日菜》 | 551 |

設定集

登場人物設定

名前：新藤 誠

年齢：23歳

所属：猛士関東支部↓猛士遊撃隊（総本部所属）

麻帆良学園女子中等部2年A組副担任社会科担当（臨時教員実習生待遇）

警視庁警備部（出向時）

好きなもの：辛い食べ物、カレー、登山

嫌いなもの：苦い食べ物、機械系（機械音痴）

鬼名：響鬼

詳細：この物語の主人公。気さくな性格だが頑固な面もあり、キレると怖いとか。年上には基本的に敬語を使っているが、親しい間柄はタメ口で話す。年下は普通にタメ口。自分の信念に従って行動する。実は警察官（予備役のような扱いではあるが）。

猛士に所属する音撃戦士で鬼としてのコードネームは先代から引き継いだ【響鬼】。古より代々受け継がれている称号【鬼神】の肩書を持つ。稀に【鬼神響鬼】や【鬼神】と言われる。鬼神に象徴たるある物を所持しているらしいが詳細は不明。猛士遊撃隊に所属し、日本中を放浪して、魔化魍退治をしている。そのため、山でキャンプしたりがほとんどであるため、サバイバル技術は高い。鬼に変身せずに音撃を放つことができる。

4年前にイギリスに赴いていた際にネギと知り合い、昔使っていた練習用の音撃棒を授けた。

ちなみに学校関係は全く行っていないため、理数系は壊滅的学力（歴史や地理は鬼にとって役たつだろうともう勉強している。英語もある程度話せるらしい）。

武器は、変身音叉・音角（音叉剣）、音撃棒・烈火、ディスクアニメル（アカネタカなど）、その他あるが詳細は不明。音撃棒・烈火は作中

で2回も破壊されており、このさきまだ壊れるか不安がある。

能力：鬼棒術、鬼闘術、音撃打、音撃射、鬼導眼、鬼忍術（得意な術は火遁、土遁、条件付きで木遁、水遁は水があれば使用できる）

特殊能力：神威、感知能力、怪力

形態変化：響鬼・紅、響鬼・翔

属性：炎、翔に形態変化で風

キャラクターの大まかなモデルは《スターウォーズ》の《アナキン・スカイウォーカー》。

名前：ネギ・スプリングフィールド

年齢：10歳（数えで）

所属：メルディアナ魔法学校生徒主席で卒業↓麻帆良学園女子中等部2年A組担任英語科担当

好きなもの：お姉ちゃん（ネカネ）、ハーブティ、クッキー、ねぎま串、アンティーク（杖）、誠からもらった練習音撃棒（大切なもの）

嫌いなもの：1人で寝ること、お風呂、一方的な正義

詳細：この物語の準主人公。イギリスのウェールズ出身の魔法使い。魔法界の英雄ナギ・スプリングフィールドこと千の呪文サウザンドマスターの男を父に持つ。

マジメで責任感が強く、英国紳士で礼儀正しい。悩みを1人で抱え込んでしまいがちで、頑固な一面もある。

魔法はもちろん、格闘技（我流）、その他様々な才能を持ち合わせている天才。

昔、誠に会ったことがありその時に貰った練習用の音撃棒を大切にしており、表上の夢は立派マジクな魔法使いだが、内心では音撃戦士《鬼》になりたいと思っており、小さい頃から体を鍛えている。生徒たちを守りたい一心で誠に弟子（仮）入りをした。魔法面ではエヴァンジェリンに弟子入りする予定。

得意魔法は・風・雷・光系魔法が得意。回復魔法は苦手。

名前：神楽坂 明日菜

年齢：14歳

好きなもの：渋いオジサマ

嫌いなもの：ガキンチョ、勉強

所属：2―A組、美術部

詳細：友達思いで面倒見が良く、明るく活発な性格。努力家。少し怒りっぽい所もある。思いついた事はすぐに行動に移す行動力、大胆さを持っている。渋いオジサマは好きであり、タカミチが好きとか。木乃香と同室であり、後から居候で入ってきたネギのお姉さんの存在。クラスメイトである雪広あやかとは喧嘩友達。ネギの魔法を最初に知った人物でもあり、4年前に誠（鬼に変身している状態ではあったが）とも出会っている。

名前：エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

年齢：齢600歳程

詳細：15年前、魔法界を恐怖のどん底に落とした自分物であり、最強クラスの魔法使いである。その正体は600年を生きる吸血鬼であり、彼女は上位種の『真祖の吸血鬼』である。だが、15年前にナギ・スプリングフィールドによって麻帆良学園に封印されてしまい、その時に適当に言った呪文によって登校地獄という呪いを掛けられ、15年もの間、中学生として生活を送っている。この件でナギの事を心底恨んでいる。

とある日に、学園にやって来たとある鬼に屈辱的な敗北をしてしまい、鬼に深い憎しみを抱いていた。

現在は、多少はわだかまりがあるのか、誠とは言い合いながらも自分の家に住まわせている。

誠と同じく、学園の魔法使いからはよく思われてはいない立場でもある。

魔法使いとしては、間違いなく最強クラスの持ち主であり、響鬼に変身した誠をボコボコにした。闇の魔法という特殊魔法で能力値をあげることができ、精神を闇に侵食されるリスクがある（滅多に使わないらしい）。

得意魔法は、氷、闇だが、雷や風系なども使える。

◆麻帆良学園関係者

名前：近衛 近右衛門

所属：麻帆良学園学園長及び関東魔法協会理事長

詳細：学園最強の魔法使い。後頭部と耳たぶが異様に長い。猛士関東支部長 立花勢地郎とは知り合い。

魔法使いと鬼との間にある溝を改善したいと考えており、学園に所属するカルト的な魔法使いに手を焼いている。

人格者ではあるのだが、孫娘によくお見合いの話を持っていくなどがある。

この度、誠を麻帆良学園に教師として雇った張本人。

名前：高畑・T・タカミチ

所属：麻帆良学園女子中等部2年A組担任↓麻帆良学園英語科教員

詳細：麻帆良学園女子中等部の英語科教員。美術部顧問。ネギが来るまではA組の担任だった。

常に落ち着いている。

学園広域指導員でもあり、たった一人で幾多の抗争を鎮圧している為、学園の不良からは

「死デスマゲガネの眼鏡」「笑う死神」とも呼ばれ、恐れられている。

実は、学園に所属する魔法先生の一人で、NGO団体「悠久の風」の一員で、世界中の危険な仕事を引き受けて飛び回っている為、授業は休みがち。

ネギとは、昔ウエールズに会い友達になり、エヴァンジェリンとは中学の頃の同級生だった。

誠とも、友人であり名前呼び合う仲でもある。

昔、鬼と共に戦った経験があるらしい。

名前：自称『正義の魔法使い』

備考：魔法至上主義のカルト的な魔法使い達の呼び名。自分たちこ

それが絶対的正義、魔法が絶対であると勘違いしている連中であり、かつて猛士との確執を作った原因でもある。どさくさに紛れて麻帆良学園を創設したのも、この関係者達。学園長が頭を抱える問題の大きな原因の種でもある。本国にはもつと頭の固い人達がいるらしい。

主な人物はガンドルフィーニ、葛葉刀子、シスターシヤクテイ、高音・D・グットマン、その他魔法先生、魔法生徒

◆猛士関係者

○は猛士で階級的な物 将棋の駒で分かれている。

猛士関東支部

名前：立花 勢地郎

所属：関東支部 支部長（王）

備考：猛士関東支部長と猛士本部の事務局長を兼任しており、彼が経営する甘味処《たちばな》は関東近郊に住む鬼たちのたまり場となっている。鬼たちからは「おやっさん」と呼ばれている。同じ関東支部に所属している香須実・日菜佳の父でもある。近衛近右衛門とは友人でもある。

名前：立花 香須実

所属：関東支部（飛車）

備考：関東支部に所属し、主に鬼たちのサポーターをする役割。はきはきした性格をしており、思った事は口に出す。姉御肌であり、シユウキとゲンキからは恐れられている。

名前：立花 日菜佳

所属：関東支部（金）

備考：香須実の妹で、関東支部の一員。魔化魍や鬼のデータの管理、情報提供などが主な仕事。堅苦しい言葉を使うのも特徴。現在、トドロキと交際している。

名前：戸田山 登巳蔵

年齢：29歳

所属：関東支部（角） 関東十一鬼

鬼名：轟鬼

備考：音撃戦士轟鬼に変身する男。真面目一直線の性格のために時折気合いが空回りしてしまい、周囲にからかわれる事も多いが、後輩の鬼達からは慕われている。誰に対しても「○○つす」と低姿勢で話す。音撃弦を得意とし、雷の属性を持つ。勢地郎の娘・日菜佳と現在交際中である。

名前：嘉納シユウキ

年齢：23歳

鬼名：衆鬼

所属：関東支部（角） 関東十一鬼

警視庁警備部（出向時）

詳細：猛士関東支部に所属する音撃管を扱う音撃戦士。ポジティブな性格で、いつも明るくしている。誠の友人でもあり共に戦う戦友。誠の事をマコツチとアダ名で呼ぶ。自称「世界一のパティシエ」（しかし、誰もそう呼ばない）と豪語する程、菓子作りが得意で実際に資格まで持っている。度々作っては近くの保育所や幼稚園に分けている。関東支部にもなっている甘味処「たちばな」の菓子の新商品の提案と調理も彼がしている。誠も付き合わされて菓子づくりを叩きこまれた。家族構成は両親と義理の弟と妹がいる。父親も音撃戦士であり、弟がその父親の弟子になっている。

衆牙と呼ぶ音撃管を使い、技は「音撃射・衆牙滅裂」。他にも鬼闘術を得意とする。属性は風。鬼忍術も使用できる。

名前：源道 賢二

年齢：17歳

鬼名：玄鬼

所属：関東支部（角） 関東十一鬼

容姿：短髪に藍色の髪に水色の瞳。女顔に見られる。

備考：礼儀正しく、敵にすら敬語を使うほど穏やかな性格。誰とも仲良くなれるタイプ。年下でも敬語を忘れないほどで、『敬語という言葉を人間にしたような奴』。通信制の高校ではあるが、非常に勉強もでき、おまけに家事炊事が得意（というか師匠があまりにガサツで、そういったスキルは鍛えたらしい）。関東十一鬼の一人。現時点で最年少の音撃戦士であり、誠の後輩。

容姿：威吹鬼の姿に酷似しており、全身に金色のラインが入っている。腕には亀の甲羅のような盾が付いている。

武器：日本風の横笛模した音撃武器《音撃笛・海王》、藍色の水属性の鞭《音撃鞭・水覇》と水色の氷属性の鞭《氷覇》、《音撃用小刀・海刃》

属性：水、氷

備考：水、氷属性に特化した鬼であり、鞭といった武器を使う珍しい鬼でもある。音撃斬、音撃射の2つを使いこなせる。鬼忍術は水遁系が得意。ディスクアニマルは中国神話に出てくる四獣がモチーフのを使う。

名前：天宮 鳴矢

年齢：18歳

鬼名：鳴鬼

属性：雷

所属：関東支部（角）関東十一鬼

警視庁警備部（出向時）

備考：誠の世界にいる誠の後輩の鬼で、元はかなりの名家の出身だったが、本人曰く「かたつくるしい」生活が嫌になり14歳の時家出、その後偶然、とある音撃弦使いの鬼が戦っている所に遭遇、その姿に惚れ込みその鬼の弟子になった。表向きは軽い性格だが、意外と熱心な努力家であった一年で音撃戦士になった。

名家出身ということもあり、意外と礼儀に通じている（ただ、いつもの振る舞いのせいか、まったくそうは思われない）。先輩の鬼は年下でも先輩と呼ぶ意外と照れ屋で純情な為、あまり自分が努力してい

る所は人に見せない。

◆猛士東海支部

名前：南雲 真司

年齢：24歳

鬼名：煌鬼

属性：水

所属：東海支部（角）

警視庁警備部（出向時）

備考：鯨（シヤチホコ）をモチーフとした、猛士東海支部代表の鬼。名古屋出身で戦鬼の煌鬼の名を受け継いだ24歳の青年。人懐っこい性格のため様々な方面で多数の友人がいる。（例として花火業者から仏教関係者、果ては外国のエクソシストまで）

東海地方の観光地での土産物売りやツアーガイドを生業としているようである。

また好きな食べ物は味噌カツで味噌カツの味噌にあたる八丁味噌に対するこだわりは友人兼後輩の西鬼の粉物料理に対するこだわりと同じレベル。

「七人の戦鬼」に出てくる七人を深く尊敬し、彼らに匹敵する戦鬼になれるよう修業を続けている。

余談だが、現在の響鬼は忍術が使えると聴いて忍術を修業している最中である。

ヒビキとは性格からして、ウマがあり、年下のヒビキからタメ口をする程の仲で年齢差を超えた仲。

名前：菅原 斗真

年齢：28才

鬼名：鎧鬼

属性：闇

所属：九州支部↓東海支部（出向中）

備考：猛士九州支部から東海支部に出向している28才の青年。顔

には仮面ライダー2号、一文字隼人のような傷跡がある。元々は朗らかによく笑う優しい男だったが、5年前のある事件で親友と恋人のサポーターを喪つてからは笑わなくなり無口になった。

だが、仲間を大切にし、弟子達を一人前にした後でも公私に渡り気にかかるほど根は優しいため弟子達や仲間には信頼されている反面、敵と見なしたら容赦無く殺害しようとする程非情になったため恐れられている。また九州支部随一の示現流剣士で、剣技の弟子も多い。

九州には彼の弟子が数名いるが、いずれも手練れの優秀な戦士だ。その弟子を一人前にする指導力の高さを見込まれ、様々な支部に出向していたが、現在は東海支部に出向している。

名前：森山 茂木

年齢：32歳

鬼名：木鬼^{もつき}

属性：木

所属：東海支部（角）

備考：非常に珍しい《木》の属性を持つ鬼で、容姿は一本角で緑と茶を基調とした姿。右肩から斜めに入るように樹木のような文様がある。鬼忍術《木遁》を使える鬼であり、その力は東京ドームほどの大きさの森を軽々作り出す。しかし、元から体が弱かったため、鬼力そのものがあまりなく広大な森は作れても操ることができない。小規模ならば樹木を容易に操る。頼れる兄貴と言った性格で、時折人を誂う。普段は森林組合の職種に就いている。一時的ではあるがヒビキに木遁の指南を行った。ちなみに先代の木鬼は彼の父や祖父、更には先祖までである。

猛士北海道支部

僧名：烈伸

年齢：35歳

鬼名：凍鬼

属性：氷

所属：北海道支部（角）

備考：白熊をモチーフとした、猛士北海道支部所属の鬼。七人戦鬼の一人。氷の属性を持ち、冷気を操ることができる。仏の道を歩み僧侶となった戦士。先祖にあたる「七人の戦鬼」と呼ばれる初代凍鬼同様神仏と会話することができ、変身前でも念動力が使える。顔が故人の斬鬼似なのは永遠の謎。

猛士九州支部

名前：冴島 翼

年齢：30歳

鬼名：羽撃鬼

属性：風

備考：飛行能力を持ち、両肩に翼がある。鷹をモチーフとした、猛士九州支部所属の鬼。七人戦鬼の一人。鬼になる前はレスキュー隊として活動し、様々な救援活動に従事してきた過去がある。東海支部に出向中の鎧鬼とは友人である。余談だが既婚者。

猛士総本部

名前：和泉 伊十郎

所属：猛士総本部 本部長（王）

備考：猛士の総本部長に就いている老人。和泉伊織、和泉亜子の祖父。先々代の《威吹鬼》、また先々代の《鬼神》でもあり、若いころは最高の音撃戦士であったが現在は引退し指揮をする側になっている。モデルはNARUTOの「猿飛ヒルゼン」。

名前：段木 團藏

所属：猛士総本部 副本部長（王）

備考：猛士の副本部長に就いている老人であり、伊十郎とは幼いころからの戦友。猛士の中でもかなりの武闘派であり、鬼の力を使い他勢力の撲滅を考えている。『日本を護るのは猛士の役目』と常々考えられている。専用の鬼密班も創設している。

モデルはNARUTOの「志村ダンゾウ」。

名前：御影 美緒

年齢：18歳

鬼名：水撫鬼

属性：水

武器：音撃弦・水月

(バイオリンの形状をした珍しい音撃武器。本体を楯にし、弦を剣のように闘う事ができる)

所属：猛士総本部

詳細：18歳ながら、総本部所属の優秀な鬼。見た目は非常に容姿端麗。口調も柔く、やさしい性格をしている。御影家は宗家と親類関係であり、威吹鬼とは親戚でもある。着物を着ているが、普段はラフな格好を好むらしい。

名前：岳氏 学

年齢：25歳

鬼名：知鬼チンキ

備考：東大卒の科学者で、何事にも研究しようとする知的好奇心旺盛な青年、どれくらいかという鬼を研究するために自ら鍛え鬼になるほどである。猛士の技術部に所属しているが研究熱心すぎて、総本部の技術部を抜け出すことが多い。猛士の技術部の小暮とみどりの二人を尊敬している、特に小暮とは一晩も寝ずに話すほど気が合う程。人体実験などもやるがそれは信念をもとに行い、比較的に安全が保障されてる悪魔で合法的なもので、人体改造や非人道実験などは嫌う。作戦立案能力も高いが、誠が関わると本人がロクな目に合わないため、誠が苦手としている人物（嫌っているわけではない）。

最近では魔化魍や魔法、気などの研究にはまっている模様。

鬼としては詳細は、後々明かしていきます。

猛士総本部直轄隠密部隊鬼密班

名前：鷹羽 隼人

年齢：23歳

所属：猛士総本部直轄隠密部隊《鬼密班》組頭

備考：伊賀忍者出身で猛士の隠密部隊であるで《鬼密班》組頭を務める若き忍者。変身忍者嵐ことハヤテとその仲間だったカスミの間に生まれた子供の子孫の一人でもあり、《人間変身の法》の秘術により《変身忍者隼はやぶさ》に変身することができる。高度な忍術を使い分け、猛士や人々を影から護るもう一つの存在。隠密行動故、あまり人前に出ることがないが、ヒビキを始め何人かは会ったことがある。普段は影分身により分身を任務に向かわせて動いている。

名前：羽根井 恵

年齢：21歳

所属：猛士総本部直轄隠密部隊《鬼密班》

備考：隼人と同じ伊賀忍者出身であり、変身忍者嵐ことハヤテとその仲間だったカスミの間に生まれた子供の子孫の一人でもある。いつも着物姿で狐の面を頭の横に付けており、普段は総本部の護衛をしている。隼人と同じく化身忍者へと変身することができる。

名前：変身忍者・嵐

年齢：23歳

備考：初代変身忍者・嵐ことハヤテとその仲間のカスミの子孫であり、隼人や恵と同じ伊賀忍者出身の上忍。隼人と嵐の名をかけて決闘し、襲名した忍者。現在は世界中を旅しており、かつての邪悪の集団である血車党の残党狩りをしているとのことだが詳細は不明。

◆謎の敵対勢力

名前：百目鬼^{トウメキ}

年齢：見た目は20代前半

武器：戦慄奏（篠笛型の武器）

詳細：猛士創立時、最初に鬼祓いされたと記録されている鬼。文献によれば非常に残酷な性格で、自身の力試しの為に城一つ落としたり

記録されている。なぜ、500年前に死んでいるはずの彼女が現代にいるかは一切不明。また、洋館の男女と関連している模様。右目に瞳術《鬼導眼》の模造品を移植している。

名前：洋館の男女

詳細：とある森の奥にある謎の洋館の中で研究を続ける男女。目的は一切不明であり、度々強力な魔化魍を生み出しては、野にはなっている。西洋魔術師の存在を認知しており、何かに利用としているらしい。

名前：音撃戦士・暗鬼

詳細：猛士の音撃戦士だったが、離反し行方不明となっている。猛士が保有する危険リスト《鬼記簿》に名前が載っており、鬼祓いの対象になっている。その他詳細は随時更新する。

ただ現在わかってしていることは、彼が求めるのは最高の殺し合いということだけ。

名前：ウォーター

詳細：青木ヶ原樹海に現れた黒い外套を全身に羽織った謎の女。ブブを従えているようである。今、現在では謎が多いため詳細は不明。

名前：ブブ・ゼゼ・ベル 通称『ブブ』

容姿：体は丸い巨漢な肥満体系で目は赤く、姿は豚で頭に羊の角を二本早し、背中に小さい小悪魔のような翼が生えており、更に口が二つあり、一つは顔に、もう一つはお腹にあるがチャックでしまっている。

性格：のんびり屋でマイペースな性格。片言でしゃべる無邪気な子供のようだが、名の通り常に腹を空かせており「食べていい？」が口癖。知能は低く自己判断で行動するという意思に欠けている。誰かの指示がなければ行動できない性格。

固有能力は材料や質量問わずあらゆる物を無限に食べられること

と、耐久性を生かした猪突猛進な突撃を行い相手を喰らう。

登場人物は随時追加していきます。

設定なども物語が進んでいくにつれ、追加していきます。

設定・用語集

この小説の世界観設定を紹介します。

《猛士》

詳細：陰ながら人々を魔化魍の脅威から守る組織。総本部は奈良県の吉野。表向きはオリエンテリング主催を目的としたNPO団体「TAKESHI」も設立している。世間一般には秘密とされているが、日本政府及び一部の警察組織には存在は知られている。創設されたのは、およそ600年程前と言われている。その原型となる組織は平安時代からあると言われている。京都の退魔組織《京都神鳴流》より古い組織。昔は勢力争いなどがあり、今現在でも友好関係にはない。全国に支部があり、北海道支部、東北支部、北陸支部、関東支部、東海支部、関西支部、四国支部、中国支部、九州支部、沖縄支部、その他支部の編成。

規模はサポーターも合わせればおよそ数千人であり、その中で猛士に登録されている鬼は150人。

日本魔術勢力である関東魔法協会、関西呪術協会とは関係が良好ではなく、対立的な立ち位置にるのが現状。

《猛士遊撃隊》

詳細：新藤誠が所属している部隊。しかし、部隊といっても実際は誠ともう一人別の鬼しか所属していない。主な任務は、各支部から応戦要請があれば向かうというものであり、いわば独立した支部のような物。更に、所属する二名共日本中を放浪という名の旅に出ている。更に行方不明になることも屢々。直属の支部は総本部。

所属者：新藤 誠「響鬼」、もう一人は不明

《鬼戦士及び音撃戦士》

詳細：人間が心身を鍛え上げ、自然の力を身に宿し変異させた『人』を超越した者。元々は古来の陰陽術師が魔化魍を倒す為に、肉体を変化させた姿が始まりとされる。鬼と呼ばれるのも、その姿から醜悪と

恐怖、化け物を倒す化け物として人々の希望を込めて呼ばれている。身体エネルギー、精神エネルギー、自然エネルギーの3つを鍛え上げ高める事で鬼へと変身する事ができる。変身の際には、効率よく変身する為に変身音叉、変身鬼笛、変身鬼弦と呼ぶ道具を使い変身する。特殊能力により《清めの音》すなわち音撃と呼ばれる波動を使い、魔化魍に流して倒す。楽器を使って清めるのは、音撃を効率よく与える為に時代と共に変化した為といわれる。他にも、火、水、雷といった属性を使い攻撃することができる。他にも超能力のような力も使える。並大抵の人間がなれる者ではなく、強靱な身体はもちろん、何より精神力が最も必要になる。鬼に備わるエネルギーの事を《鬼力きりよく》と呼ぶ。ほとんど、オリジナル設定です。

《鬼忍術》

詳細：文字通り忍術である。日本には忍者がおり、忍法と言った普通の人間と逸した能力を使うもの。通常は「気」つまり生命エネルギーを使った忍術を使うが、鬼の身体エネルギーと生命エネルギーを使い、アレンジしたものであり、術の威力は普通の忍術の上を行く。忍術の上位版といった感じで同じ術でも威力が桁違いに違う。しかし、魔化魍に対しては確実に倒せるわけではないので主に牽制用の術、及びそれ以外の敵（妖怪や魔族、または人間相手）に使うことが多い。時代背景と共に衰退しているが、使用者は少ないというわけでもない。何より、鬼ならなくても使え、鬼に変身しても使えるというメリットがある。使用すぎると鬼力を削りやすくなる。

参考：使う術はNARUTO（術）の元ネタというかモロになりました。それとあの人もこの系統の忍術が使えます。ニンニン♪またチャクラの概念は鬼力と同じです。

《木遁鬼忍術》

備考：鬼が作り出した忍術であり、樹木を創造し操る術である。元々は忍術ではなく鬼法术《創造樹林》という木を司る鬼《木鬼》が編み出した術であり、魔化魍との戦闘で失った木々を再生するために編み出された術。先々代の木鬼が術のバリエーションと他にも使用できるように印を結ぶ方法を使用したため、新たに鬼忍術《木遁》と

いう名前にしたとのこと。しかし術の習得が非常に難しく、編み出した《木鬼》の系列でなければほぼ不可能と言われていたが、ヒビキ（ただし、属性の相性は最悪だったらしいが）のみがこの術の習得に成功している。だが、付け焼き刃で習得したのでかなりの条件付きであるらしく、装甲響鬼アームドヒビキと呼ばれる形態になれてようやく力を発揮でき、その際は本家である《木鬼》を遥かに上回るらしい。修行の始めたころは木一本生やしだけで、気絶したらしい。鬼力を大量に消費する。

弱点も多々あり、拘束ように使う樹木も、毒や瘴気をまき散らす魔化魍では腐っていき、炎などには弱い。更に森を作り出す魔化魍《コダマ》に使用すると逆効果に強力になってしまい、使い所が難しい。余談だが、ヒビキは自分なりに木遁のバリエーションを増やしたらしいがどれも凶悪で超攻撃タイプらしい。

参考：モロNARUTOの初代火影こと千手柱間の木遁忍術です。これも私の入れたい忍術でしたので、ネギま！でも木精を操る魔法もありますのでありかと思えます。術の力は抑える気ゼロでいきます。

《鬼眼》

詳細：一定の修行と鍛錬を行った鬼が開眼するといわれる特殊な眼《鬼眼》。開眼した場合は瞳色が赤くなる。魔眼や千里眼のような特殊な眼。ずば抜けて高い動体視力を手に入れることができ、幻術や催眠にある程度の対抗ができる眼である。熟練した開眼者は対象者に幻術や催眠をかけることができる。しかし、鬼力を消費しやすく、魔化魍には幻術も催眠もあまり効果はないため、開眼しても相手の動きを読むくらいで使わない者がほとんど。更に鬼に変身したら使えないという欠陥がある。開眼したものは猛士に報告し、登録するシステムになっている。

参考：NARUTOの写輪眼が元ネタです。というかほぼ写輪眼。違うのは一度鬼になり更に極めれば開眼できることくらいか。

《鬼導眼》

詳細：特殊な条件で開眼することができると言われる鬼眼きがんの上位種。開眼した者は眼に三つ巴の鬼戦士の紋章が出現する。左右の眼

で巴の向きが違い、時計回りと反時計周り。鬼に変身した状態でも使用ができる。開眼すれば特殊な能力が左右の眼にそれぞれ一つずつ宿るが、修行や鍛錬により磨き、制御しなかければ一気に鬼力が削られ、鬼の変身にも影響を及ぼす。術によっては使用すると負担が眼にかかり、出血を起こすものもある。最初の開眼者は初代・鬼（音撃）戦士といわれている。現状でこの眼を開眼した鬼は全国の鬼の中で片手で数えるぐらいしかない。

参考：NARUTOの万華鏡写輪眼が元ネタです。三つ巴なら写輪眼じゃねっておもったんですが、これがいいだろとおもったので。三つ巴って響鬼のマークですから。これは絶対いれたい設定でしたので。変わりにとんでもないデメリットがありますが。

《神威^{かむい}》

詳細：鬼導眼を開眼した誠の両目に宿った能力。左目は自身を別な場所に転移、または異空間に飛ばし回避できる能力。右目は自身以外の対象を空間ごと転移、または異空間に出し入れすることができる。絶大な能力だが、誠はまだ完全には扱いきれてはおらず、使用すると著しく消耗する。

参考：NARUTOのオビトとカカシが使う神威が元ネタです。いや元ネタじゃないですね。モロです。気に入らなかつたらすみません。

《特殊警察官制度》

普通の警察官とは違い、一定の期間だけ警察官として働く制度のこと。制度が始まったのはおよそ2年前からであるが、主な対象者は猛士に所属する者である。いわば、猛士のための制度でもある。公にはこの制度は知られておらず、警察でも上層部しか認知していない程。所属は警視庁警備部と決まっている。特例で刑事部にも配属されることもある。制服を受け取る際は、各都道府県の総務部で支給してもらう。

年齢は現職の警察官と同じ18歳以上からであり、試験も一般の公務員試験と同じものをやり、面接試験、体力試験もある。唯一違うのは、学歴は問わないであり、必要な試験をパスすれば採用できる。そ

の場合は地方公務員だけであるが、大卒は国家公務員になれる。しかし、試験は相当難しいらしい。合格した場合は3週間の研修を行い、警察官の資格を得る(かなりきついらしいが、誠たちは『いい修行だった』で済ましている)。

階級は、いきなり巡査部長からとなっている。

しかし、現在猛士に所属するもので、特殊警察官はあまりおらず、やはり多少の抵抗感がある模様。猛士が警察組織に吸収されるのを懸念しているため。

《鬼記簿》ききぼ

いわゆる手配書のような記録簿で猛士が作成している。それぞれ第壹級、第貳級、第参級のレベルがあり、単に危険な基準というわけではなく、第壹級は音撃戦士の者、第貳級は音撃戦士の弟子にあたる者、第参級はサポーター関連の者である。だが、この記録簿に乗るのは滅多にいないため、現存の警察力では対応できない人物だけが載ることになっている。更にいえば、この記録簿に載る人物はやむおえない事態は抹殺の対象となっている。これはすなわち表沙汰では対処できない者をさすからである。特に第壹級に載る人物は無条件で即鬼祓いとなっている。

《抜鬼》ぼつき

備考：何の理由もなく猛士を脱退した鬼のことを呼ぶ。無断で脱退することは許されるものではなく、危険人物とみなされる。無論鬼記簿に明記される。

《魔化魍》

詳細：自然界にある変化(メタモルフオーゼ)の力を使って童子と姫が育てた怪物。いわゆる妖怪と言われているが、妖怪とは別物であり、その正体はよくわかっていない。妖怪からも恐れられており、食料は人間だが、妖怪を食らって強力な魔化魍になることもある。童子と姫に育てられるもののほか、自然に発生したものもある。発生条件はいまだ解明されていない。夏にしか出現しない人間サイズの魔化魍や、ある一定の地域でしか発生しない小さい分清めの音が響きやすいのだが、分裂しやすいので一度に倒すのが困難。時折、超巨大な

魔化魍も出現することもある。強いものになると気力で鬼石や太鼓を弾いてしまう。世間一般には極秘で倒されており、魔化魍の存在を知られれば日本中が大パニックになるのを防ぐために日本政府や警察に協力をして秘匿している。

《童子・姫》

魔化魍を育てる存在。幼く小さいため自力で餌（人間）を獲れない魔化魍の幼体に与える餌を集めることを主な目的とする。魔化魍に比してその力は弱いのだが、人間にとつては充分すぎる驚異である。しかし、浄めの音を打ち込まず倒す事ができ、強力な武器などで対処が可能。しかし、より強力な者では歯が立たなくなる。

戦闘に際してはそれぞれ怪童子、妖姫と呼ばれる戦闘形態に変身する。さらなる強化形態には武者童子、鎧姫が存在するが、これには童子と姫を直接的な強化ではなくクグツを經由した強化が必要。この状態では、鬼でしか対処できなくなる。

すべての童子と姫は共通の顔を持ち、声は男女が入れ替わっている。人間の血液に当たると推測される体液は白い。

《怨念声刃》 ゴーストセイバー

猛士総本部鬼神神社に奉納されていた武器の一つ。詳しい資料が残っていないため、詳細は不明であるが、元々は鬼の武器ではなく、ある退魔師の武器であったとされる。それが年月が経つにつれ、怨念を宿すようになり、邪悪な武器として語り継がれている。そして、いっしか鬼が手に入れたため、音撃武器として改良を施されたらしいが、怨念に取り憑かれ、殺人や破壊衝動にかられてしまう武器に成り果てる。普通の人間が使えば発狂してしまう。よほどどうかしている人間でなければ持つことすらできない。使用者に力を与えるが、精神と肉体を代償にし、新たな怨念を生み出す。弱点とすれば浄化の力が有効とされる。最後の使用者は音撃戦士・霊鬼。

技は現時点では、斬撃《腐怨》のみ。三日月型の斬撃を飛ばし、かするだけであらゆる物を腐らせる。

《封眼寺派》

関西呪術協会でもかなりの過激な集団であり、西洋魔術師に嫌悪している人が集まっている。時折テロまがいのことやっており、裏の世界に精通している京都府警の公安部から警告を受けているが、聞く耳持っていない（強引に行動すれば、何をしでかさかわからないので、関西呪術協会の上層部が抑えている状況）。調査によれば、極東最強の魔力をもつ木乃香を利用し、何か企んでいるらしい。当然といえば当然であるが、猛士も嫌悪している。

現れる鬼神・年表

???年

天地開闢によりイザナギとイザナミが日本を創造したといわれる。

???年

自然界の脅威《魔化魍》が人間を襲いだす。清めの音の原型が誕生したと言われているが文献が様々なため詳細は不明。

???年

高天原から追放されたスサノオノミコトが出雲国（現・島根県出雲地方）にて、魔化魍・神獸《八岐之大蛇》を封印する。その際、三種の神器の1つ霊剣・天叢雲剣《または草薙の剣、もしくは草那芸之大刀》が魔化魍・神獸《八岐之大蛇》から取り出された。

紀元前700年前頃

イザナギの子孫、初代天王《神武天王》が生まれる。

紀元前617年前

魔法世界誕生？

弥生時代く古墳時代

和琴の原型たる楽器が誕生。この時に音撃に似たような術が誕生し、魔化魍と少数ながら戦っていたとされる。

953年（平安時代）

音撃戦士の開祖にして陰陽師《安倍晴明》が魔化魍に対抗する為に、鬼になる変身術を開発と言われている。初代音撃戦士並びに鬼神の誕生。平安京に魔化魍退治専門の組織の設立。これが後の猛士の原型と言われる。一説によれば、この鬼神は日本神話に登場する神世七代の子孫ではないかと言われている。

1000年頃（平安時代）

音撃（鬼）戦士が恐怖の象徴として見られる。神の使いと言われる神獸《麒麟》が突然現れる。陰陽師派と音撃戦士が共同で封印する。

1200年頃（鎌倉時代）

一部の陰陽師派が独自に組織を設立（後の関西呪術協会の原型）。時を同じく、京都神鳴流（当時の名称不明）の創設。音撃戦士の組織

を京の都から追い出す。音撃戦士かつての遷都《平城京》奈良に組織を移す。

1400年頃（百年戦争時代）

エヴァンジェリン誕生

1500年初期頃（戦国時代）

一部の音撃戦士（鬼）戦士が、鬼の力を使い大名になる者が現れる。魔化魍・童子・姫が集団を作り《血狂魔党》を結成。陰陽師派及び京都神鳴流が対抗するも返り討ちにあい、音撃（鬼）戦士達が《血狂魔党》を壊滅させる。この時、鎧を纏った謎の鬼戦士が目撃される。朝廷から功績を認められ以後、朝廷及び天王（てんのう）と裏で強いつながりを持つ。音撃鼓、音撃奏、音撃弦の登場。

1500年後期頃（戦国時代）

奈良の吉野に《猛士》を創設。一部の一般人が全国の鬼達をサポートし始める。出雲地方で封印されていた魔化魍・神獣《八岐之大蛇》が復活する。中国地方が壊滅的被害を受ける。猛士、鬼を派遣するも退治しきれず再度封印を施す。伊賀忍者と猛士が協力体制に入る。鬼忍術の誕生。

同年

邪鬼と呼ばれる鬼の道にも人の道にも外れた音撃戦士が少数ながら現れたとされる。

1600年頃（江戸時代）

徳川家康が征夷大將軍に任命。江戸幕府が生まれる。変身忍者《嵐》と呼ばれる忍者が、血狂魔党の残党狩りを行っていたと言われる。

1700年初期頃（江戸時代）

江戸幕府、猛士に傘下に入るよう要請するが拒否。これに対応するように、江戸幕府と猛士の間で戦が度々起こる。御庭番衆が猛士の密偵を始める。

1700年後期頃（江戸時代）

京都神鳴流の手違いにより、封印していた神獣《麒麟》が復活し、猛士が再度封印する。これを期に京都神鳴流との関係が最悪になる。

京都が一時焼け野原になり、一般的には《天明の大火》として認知されている。

1800年初期頃（江戸時代）

血狂魔党の残党が蝦夷の地で不穏な動きを始める。当時の鬼神、凍鬼及び変身忍者・嵐と協力し血狂魔党の残党を滅ぼす。

1860年頃（江戸時代・幕末）

黒船来航を皮切りに、外国から日本に訪れるものが続出する。この時、西洋魔術師が東洋に勢力を伸ばすために訪れる。尊王攘夷運動が起こり、江戸幕府が大政奉還を行い、江戸幕府が終焉を迎える。天王主権の明治時代が誕生。

1890年頃（明治時代）

関西呪術協会創設、折り合いが悪かった猛士に一部の術者が襲撃。同時期、日本にある神木《蟠桃》の魔力に興味を持った魔法使い達がどさくさに紛れて学術機関《麻帆良学園》を創設。当時この地に滞在していた一般人や陰陽師達を一部殺害されている。更に認識魔法で、これらが鬼の仕業とされた。

忍者一族の衰退が始まる。一部は猛士に入り、サポーター、鬼として活躍する。

1920年頃（大正時代）

猛士の強硬派が先の事件の件で麻帆良学園を襲撃するが、穏健派と衝突し、未遂に終わっている。これ以降魔法使い側との関係が暗雲になる。

1940年頃（昭和時代）

麻帆良学園に魔化魍が現れ、一般人や魔法使い達が被害を被る。猛士が緊急出動し、無断で麻帆良学園に介入、魔化魍を退治する。魔法使い側は介入行動が猛士の陰謀と指摘する。以後、無意味な争いになる可能性があると判断し、鬼達は一部の陰陽師の協力を得て麻帆良学園周囲に限定的な特殊結界を秘密裏に展開され魔化魍の侵入を極力抑えることに成功する。学生として在籍していた近衛近右衛門が初めて鬼と接触した。

1948年（昭和23年）

第二次世界大戦終結後、日本政府が機能をようやく回復。猛士と秘密裏に魔化魍について情報を共有する動きがある？

1960年初期頃

関西呪術協会の一部の術者、再び猛士を襲撃する。鬼が反撃に出るも、総本部が一部焼け落ちる被害。

1980年（昭和55年）

新藤誠、嘉納シユウキが生まれる。

1983年

魔法世界にて大戦が起こる。ナギ・スプリングフィールド率いる《紅き翼》が大活躍。この時、同行していた中に鬼の姿が？

1988年（昭和62年）

エヴァンジェリン、麻帆良学園にてナギに登校地獄の呪いを受ける。

1993年5月2日

ネギ・スプリングフィールド誕生。

1996年12月頃

ネギの故郷が魔族の集団に襲撃され、壊滅的被害を受ける。この時、ネギがナギの杖を受け取るが、ナギ本人が渡したわけではない？

1998年（平成10年）

日本各地でオロチ現象が発生。魔化魍の異常発生が起こる。日本政府が表面上は自然災害として非常事態宣言を発令する。裏では自衛隊、警察、猛士が協力し魔化魍の退治を行い、事態の収集をする。先代響鬼が戦死、誠がコードネームを引き継ぐ。

1999年

新藤誠（響鬼）がイギリスに赴く。この時、ウエールズにてネギと出会い、練習用の音撃棒を譲る。

2002年某日

エヴァジェリンが謎の鬼と接触する。

同時期、学園を囲んでいた魔化魍用の結界が弱まる。

*****物語本編*****

2003年2月27日

猛士東北支部にいた新藤誠に近衛近右衛門が接触。彼を麻帆良学園の教師に採用する。

同日、イギリスのメルディアナ魔法学校をネギ・スプリングフィールドが主席で卒業する。麻帆良学園で教師として働く卒業課題をもらう。

2003年3月2日

新藤誠が麻帆良学園入り。超包子、学園の魔法使い達に接触する。誠が2年A組の副担任になる。

2003年3月3日

ネギが麻帆良学園入り。2年A組の担任になる。

誠が魔族と接触し、学園に来て初めて鬼になる。エヴァジェリンがその戦いを見る。

2003年3月7日

近右衛門から吸血鬼事件を聞かされる。

魔化魍・ツチグモが現れ、魔法使い達と戦闘を行うも、効果がなく、駆けつけた響鬼に倒される。

桜咲刹那、誠を危険人物とみなす。

2003年3月8日

誠とエヴァンジェリンが最初の戦闘を行うも、誠が《神威》を使い逃走する。

夜20時頃、エヴァンジェリンが誠とネギの寮を襲撃。戦いは避けられないと判断した誠とエヴァンジェリンが激突するも、エヴァンジェリンの闇の魔法が突然暴走する。誠が浄めの音撃を流し、食い止める事に成功し、事件は終焉を迎えた。

2003年3月15日

猛士総本部に侵入者があり、鬼神神社が火事で焼失。多数の道具を盗まれる。

2003年3月16日

謎の洋館にて、百目鬼と謎の男女の接触。近衛木乃香の誘拐計画を企てる。

2003年3月17日

玄鬼が麻帆良学園入りし、誠に新型ディスクアニマルを渡す。威吹鬼は秘密裏に学園に入り、近右衛門に接触する。

2—A組和泉亜子が威吹鬼(和泉伊織)の妹と判明する。この時、ネギと威吹鬼が接触する。

2003年3月18日

麻帆良学園の各学校が修了式(終業式)。春休みに入る。玄鬼が総本部の命により、麻帆良学園に滞在する。昼ごろ、百目鬼と桜咲刹那が接触する。

図書館島にて、玄鬼とネギが接触する。他、のどか、ハルナ、夕映も接触している。

事故により、上記を含む5人が図書館島の地下施設へ行き、魔化魍・オオアリに接触。

ネギが応戦するも、対処できず、玄鬼が倒す。

夕方、刹那が誠を呼び出し、戦闘を始める。この闘いにて、響鬼が新たな力を手に入れる。

同時刻、響鬼(誠)と百目鬼が接触する。

桜咲刹那が連れて行かれる。

2003年3月19日

事故処理後、誠が学園長に事件の概要を説明。学園の魔法使いが誠を非難する。

2003年3月20日

ネギが誠の弟子(仮)になる。魔法に関してはエヴァンジェリンを師として行動する。

2003年3月23日

ネギがエヴァンジェリンに弟子入りを志願。エヴァンジェリンが弟子入りテストを要求。自身の封印解除を条件とした。

2003年3月25日

山梨県の青木ヶ原樹海周辺の村で謎の壊滅事件発生し、多数の犠牲者がでる。この事件は全国的に報道される。現地の猛士のサポートの話によれば、原因は魔化魍の襲撃らしい。

日本政府、至急猛士に調査依頼を要請し、猛士側はこれを受託。臨時調査隊が編成される。

2003年3月26日

調査に行くメンバー《響鬼・煌鬼・衆鬼・鳴鬼》に調査内容が伝えられる。

2003年3月27日

ネギ、誠が学園長から修学旅行の下見の話を受ける。

同時刻、諸事情により、明日菜と木乃香が同伴で付いて行くことに。

同日、キラメキ、メイキ、シユウキと合流し青木ヶ原樹海の調査が始まった。

2003年3月28日

ヒビキ、謎の鬼《暗鬼》と遭遇し戦闘になる。シユウキ、メイキがブブ、ウオーターと名乗る謎の人物たちと遭遇し戦闘になる。どちらも撤退により事なきを得る。

麻帆良学園にてチシキがゲンキと会う。

2003年3月29日

ヒビキ、ネギ、明日菜、木乃香と共に村の調査を行っていた所、謎の合成魔化魍に遭遇。ヒビキが撃破するも、自爆攻撃を行うがヒビキの神威により被害を最小限にとどめた。また、謎の洋館をキラメキたちが発見するも敵の罠にハマるも、軽傷で済んでいる。ヒビキは戦闘による疲労で倒れ病院送りになる。

2003年3月30日

キラメキが樹海での事件を猛士総本部に報告。総本部は日本政府の協力者に大まかな事件の概要を説明。総本部、各支部長を臨時招集。

2003年3月31日

猛士総本部にて支部長クラスによる会議を行う。日本政府は樹海事件を《自然災害》として発表し、事態の収集にあたる。

ヒビキが名古屋の安西病院にて目を覚まし、キラメキから事件の後始末の話を聞く。ヒビキが洋館から持ち帰った地図を解読し、敵の企

みを見る。

2003年4月1日

入院していたヒビキが無理やり退院して、東海支部にて待機していたネギたちと再会する。

分かり次第随時更新予定

外伝編《仮面ライダーテイケイド 『響鬼&ネギまの世界』(不定期)

第一話《世界の破壊者》

《並行世界》・・・現在住んでいる世界とは違う、もう1つの世界である。

全てが崩壊してしまった世界、科学が異常発達した世界、宇宙人と共存した世界など、様々な世界がある。

そしてとある世界・・・《仮面ライダー響鬼の世界》と《魔法先生ネギま!の世界》が融合した世界、いわゆるifの世界である。

この一人の破壊者が訪れる。

果たして彼はこの世界に戦いの火種を招いてしまうのか？

世界の破壊者へDECAD E

いくつもの世界を巡りその瞳は何を見つめるのか？

麻帆良学園都市 光写真館前 3月某日 10:00

ガチャ・・・

「ここが新しい世界・・・なんででしょうか？」

「みたいだな。見てみる。俺もまたジョブチェンジされている」

麻帆良学園都市に突然現れた少しくラシックな雰囲気の漂う写真館。この写真館を営んでいるマイペースにして何があっても動じないであろう老人《光 栄次郎》とその孫娘《光 夏海》。だが、ある日・・・ある居候を住まわせたことで、いくつもの世界を巡る旅人達の拠点となってしまう。

「身分証もバッチリだ。麻帆良学園女子中等部3年A組担任の国語教師・門矢士だとき、どうやらここはいくつもの学校施設が固まってできた巨大な学園都市というらしい。教師以上に動きやすい立場もな

いな」

「なるほど、けど士が先生ねえ？なんだかな〜・・・」

「ふっ、頭脳明晰にして道徳心あふれる俺にはピツタリ職じゃないか・・・おそらく俺は女子生徒人気No.1のイケメン教師と言ったころだろうか」

その居候とはこの二人、夏海と同じ年頃の人が良さそうであるが少し間が抜けてそうな青年《小野寺ユウスケ》。あらゆる世界の人を笑顔にする為、またその笑顔を守る為に《仮面ライダークウガ》として戦っている。

そして初めて来た筈の世界に対しなぜか立場と知識を持つ自信満々な態度が印象的であり、マゼンダと黒の二色で構成されたトイカメラを首にぶら下げた青年《門矢 士》。彼はあらゆる世界を旅し、世界を繋いでいる。

そして、またの名を《仮面ライダーディケイド》。

「わあ！なんだかやたら大きい木がありますよ！」

そう言つて夏海が指差したのは、ここに来て最初に目を引く異常に大きな樹木、生徒たちの間では《世界樹》と呼ばれる巨大な木だ。

「あんなでかい木見たことないぞ」

夏海に釣られて、世界樹の方を向くユウスケ。

カシャツ

士もまたトイカメラを持ち、世界樹を撮影する。

「さて、まずは情報集めだな。この世界が一体何の世界なのか」

「士!!お前先生なんだから学校に行かないと行けないんじゃないのか?」

当てもなくぶらぶら歩き出す士を呼び止めるユウスケ。

「よく見ろ、この時間帯なら普通学生は学校にいるはずだろ」
「えっ?」

士に言われて、周りを見るユウスケ。この学園の生徒であろう女子生徒達が私服で歩いているのが見える。士の言う通り、今日は学校が休みなのであろう。

「せっかく先生なのに休みなんて残念ですね」

夏海が残念そうに言う。土が先生をやっついていおるのを見てみたいと思っっていたりしていた。

「まあ、とりあえずはこの学園を回ってみるだけさ。歩きまわってれば情報なんて自然に入ってくるもんだろ?」

「そうだな!この世界がライダーの世界なら自然と入ってきそうだな」

「そうですね」

この世界を知るために、土、ユウスケ、夏海は麻帆良学園都市を歩み始めた。

女子中等部へと続くところある通学路 10:30

「はあ……もうヤダ」

「あの、エヴァンジェリンさん……掃除を初めてまだ五分も立ってないんですけど……」

「もう疲れた……帰って寝る」

「ちよつと待ちなさいよエヴァちゃん!!この前の件の反省として、この学園を掃除するって新藤先生から言われてるんでしょ!!」

永遠と先が見えない長い通学路で、手に持つ箒と塵取りで道端に落ちているゴミや枯れ葉などを集めている女子3人と子供が1人。恐らく少し前までは、この4人がいる事などなかったであろう、ネギ、明日菜、エヴァンジェリン、茶々丸。

「ふん、うるさいぞ神楽坂明日菜。黙って、私の為に掃除でもしている」

近くにあるベンチに座り、明日菜に指をさして偉そうに指示を出すエヴァンジェリン。

「誰の為に、アンタ達の手伝いをしてると思ってるの!!」

「ふん、だから私のためだろう?」

「違うわよ!!アンタが具合悪いから、今日だけ手伝ってくれて新藤先生にお願いされたからやってるんじゃないのよ!!」

「むぐう!?!にやにを^なしゆる^をき^すき^るき^さま^ま!!」

そう言いながらエヴァンジェリンのほっぺたをつねる明日菜。

「明日菜さん、落ち着いて下さい!!」

「ネギ!!やっぱりの吸血鬼、ちゃんとお灸吸えないと反省しないわよ!!」

「はうっ!」

怒りの形相でネギを睨む明日菜。

少し前になるが、ここで明日菜にほっぺをつねられているエヴァンジェリンが引き起こした麻帆良学園停電事件。彼女は吸血鬼であり、15年前までは悪の魔法使いとして世を恐怖の内に陥れていたが、大戦の英雄にしてサウザンド・マスターと言われたナギ・スプリングフィールドによつて、この地に封印されてしまう。その封印を解くためにナギの息子であるネギの血を頂くために、停電を利用し一時的に魔力を復活させ奪おうとしたが、偶然が重なり誠こと響鬼と戦闘を行ったのだ。

「ええい!!そもそも、私は誠には負けておらんぞ!!闇の魔法の影響がなければ勝っておったのだ!!」

明日菜の手を振り払い、あの時は不戦勝で終わったと主張するエヴァンジェリン。

「何よ!その時、新藤先生に助けて貰ったくせに」

「何だと!!大体、あの場になかった貴様にいわれたくないわ!!」

「おやお落ち着いて下さいよふたりとも」

「(ああ、マスターがあんな楽しそうにしている・・・)」

いがみ合う二人を止めようとするネギ。茶々丸は、楽しそう(?)にしている姿を見ていた。

「おい、こんな場所で騒いでいたらご近所の迷惑じゃないのか?」

「[[[?]]]」

声の主を向く4人。そこには先ほどこの世界を訪れたばかりの士、ユウスケ、夏海の3人だった。

麻帆良学園都市近郊の森 同時刻

木々が生い茂る森の中、腰に音撃戦士専用の装備帯を巻き、森を探索している青年《新藤誠》こと響鬼。

魔化魍を見つける為に、情報があつたこの森におとずれているのだ。

「オオアリがいた痕跡はあるが、もう逃げてるあとだな・・・」

巨大な穴が開いている地面を見下ろしながら、すでにここにはいないと推測する誠。

「ディスクアニマル達からの情報もないから・・・一旦帰って、エヴァ達の清掃を手伝うか」

朝方、明日菜達にお願いしていたので、自分も手伝いに向かおうとこの場を離れようとした時。

「君がこの世界の音撃戦士《響鬼》だね？少年くんとは大分似てないようだけど」

「!!」

いきなり後ろから声が聞こえて、すぐに後ろを振り向く誠。そこには一見して爽やかな高青年にも見えるがどこかふてぶてしさが見られる青年が木にもたれかかるようにいた。

「(気配を全く感じなかった・・・それに何で俺の名前を)・・・お前は？」

気配を全く感じなかった事、そして何より自分の鬼名を知っている青年を警戒する誠。

「そう警戒しなくていいよ。僕は海東大樹。世界を旅するトレ

ジャー・ハンターさ」

青年は自己紹介をしながら、指鉄砲で誠に狙い定めるしぐさをする。

「トレジャー・ハンター？こんなところに一体なんのようだ？」

「知れたことさ。《鬼神》に受け継がれている”ある物”を頂きたいだけだよ」

「!？」

大樹の言った言葉に驚愕する誠。その事は猛士の上層部や一部の人間しか知らないはず。

「お前、一体・・・」

腰にある音撃棒を手をのぼし、臨戦態勢に入ろうとすると

「おっと、動かない方がいい」

そう言つて、2連式の銃《デイエンドライバー》を誠に向ける。

「僕はあんまり争いごとは好まないんでね、できれば穏便に事を済ませたい」

「言つとくが、お前の欲しいものにはここにはないぞ」

「そんなはずはないよ。君の中に眠っている事もすでに知っていることだしね」

「さあ、どうだろうな」

「やれやれ、君はあの世界の少年くんのお師匠みたいな性格だよ」

「あの世界とこの世界とか一体何の話だ？」

「言葉通りだよ、この世界とは違う響鬼に会った事があるのさ」

大樹の言葉から次々と確信的な発言をされ、あまつさえ別の世界などど話すのに誠は逆に呆れ返る。

「次から次へと、とんでもない言葉連発だな。本当にただのトレジャーハンターか？」

「まあ、僕は特別なトレジャーハンターだからね。さて、長話は僕は余り好きじゃないから、早く君の中にある物を僕に渡したまえ」

「断ると言ったら？」

「仕方ないね」

そう言つて、懐から一枚のカードを取り出す。それを銃身の側面中

中央部に設けられたカード挿入口にカードを装填し、側面部をスライドさせる。

『KAMEN RIDE』

電子音と共に、銃口を真上に上げる。

「変身！」

『DIEND』

その掛け声と共に、赤、青、緑の謎の鎧ま纏った戦士の複数のシルエットが大樹に重なる。そして、撃ちだされたライドプレートが頭部に装着される。

世界を回るトレジャーライダーこと《仮面ライダーディエンド》

それが、今の彼の名前だ。

「何だ、その姿……」

大樹の姿が変わった事に驚く誠。

「《通りすがりの仮面ライダー》ってどこかな」

「仮面ライダーだと！それは、TVの話だろ」

「この世界ではそうかも知れないけど、別の世界には存在するのさ」

そう言つて、腰にあるライダーホルダーに手を伸ばし、二枚のカードを取り出す。

「さて、君はかなり厄介な響鬼だからね。少し援軍を呼ぶ事にするよ」
「何？」

ディエンドライダーにカードを装填する。

《KAMEN RIDE IXA》

《KAMEN RIDE DRAKE》

「いつてらしゃい!!」

引き金を引き、発射された弾丸は複数のシルエットに変換され、重なりあうと二人のライダーが現れる。

「ふう……」

頭部がトンボを模しており、左肩がトンボの頭部、胸部と右肩が羽根、右腕が尾を模しているフォルムが特徴のライダー。《仮面ライダードレイク》!!

「その命……神に返しなさい!!」

そして、もう一人。金色の十字架のような仮面が印象的なライダー。《仮面ライダーイクサ》!!

巡りあうことはなかったであろう、ライダー同士の戦いが始まろうとしていた。

第二話 《秘密結社大シヨツカー》

通学路の清掃中に接触した士達とネギ達。

「こんな所でギャーギャー騒いでいたら周りに迷惑がかかるだろ？最近のガキは節度つてものを知らないんだな」

いきなり現れた謎の人物にキツイ事を言われてしまうネギ達。

「な、貴様この私がガキだと!!」

最初に反応したのは勿論エヴァンジェリン。顔を真っ赤にして怒り心頭の様子。

「ちよつと、エヴァちゃん!？」

明日菜が怒るエヴァンジェリンをなだめようとする。しかし、怒るエヴァンジェリンに土が近づくと。

「お前は どう見てもガキだろ?」

「貴様ああ!!絶対許さんぞ!!」

今にも遅いかかろうとする勢いで土を睨みつけるエヴァンジェリン。悔しいがエヴァンジェリンは今は魔法は余り使えない状態。威嚇程度しか出来ないのだ。

「ちよつと土くん!!女の子怒らせるなんて何してるんですか!!光家直伝『笑いのツボ』!!」

夏海が士の言動に起こり、光家に伝わる笑いのツボを押す。

「な!?!あはっはっはっ!!はははは!!ちよ、止めるはははは!!ナツミカ!!はははは!!」

「え、何で急に大笑い・・・」

突然、笑い出す土にポカンとする明日菜。

「ごめんな皆。コイツ、口は悪いけど根は良い奴なんだよ」

「すみません。土くんは少しばかり自分に素直になれないだけですから」

そう言つてユウスケと夏海が前に出て、土を弁明しながら謝る。

「おい!!それ今はっはっはっ!!関係ないあはははは!!だろ!!」

後ろでは笑いが止まらない土が反論するも、笑いながら言っているので何を喋っているのか聞き取れなかった。

「あの、いいんでしょか？後ろの人は・・・」

お人好しなネギはそんな土を見て心配になり、ユウスケとい夏海に声をかける。

「しばらくは反省して貰いますー！」

夏海がジト目で大笑いする土を見つめるのだった。

「くそつ、危うく笑い死ぬ所だった」

顔を青くしながら先ほどの大笑いの苦しさを思い出す土。

「全く、女の子を怒らせたり泣かせたりするのはダメなんですよ」

夏海が軽く怒りながら土に先ほどの言動や行動を注意する。

「私は泣いてはおらんぞ!!」

何故か夏海が言った言葉に反論するエヴァンジェリン。さつきは怒りながら涙目になっていたのだが。

「ねえ、最近エヴァちゃんって前と違って子供っぽいというか・・・」
「マスターは以前までは自身のプライドを優先する余り、少々ひねくれた性格をしていましたが、新藤先生や皆さんと付き合いで性格が明るくなってきているのです」

「へー、まあソツチのほうが可愛くていいけどね」

「(まあ、残りは恐らく新藤先生の浄めの音とやらの影響もあるのでしょうが・・・)」

最近のエヴァンジェリンの変わり様をこそこそ話す茶々丸と明日菜。この二人、いつもの間に仲良くなっていたのか。

「そう言えばまだ自己紹介してなかったね。俺は小野寺ユウスケ!!よろしく!!」

まだ、お互い名前を名乗っていなかったのを思い出し、笑顔で自己紹介するユウスケ。

「私は光夏海と言います」

夏海も同じく自己紹介をする。

「僕はネギ・スプリングフィールドと言います」

「私は神楽坂明日菜です。麻帆良学園女子中等部に通ってる2年生です」

「絡繰茶々丸と申します。明日菜さんと同じ学校に通っております」

「ふん、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。後はそいつらと同じだ」

ネギ達も自分達の名前を言う。不機嫌ながらもエヴァンジェリンも自己紹介をする。

最後に士が自己紹介をするが

「俺は門矢士。この学園の超イケメンエリート教師だ。先行は国語らしいが、まあその気になれば全部教えてやってもいいぞ」

相変わらず偉そうに自己紹介する士にため息をつくユウスケと夏海。

「門矢さんはこの学園の先生だったんですか。僕も同じくこの学園の英語の先生をやっているんですよ」

「へえ、ネギくんは先生をやってるんだ!!……ってええええええええええ!?せせ先生!?!」

何気に聞いていたユウスケだが、ネギが先生をやっているなどどう考えてもおかしいと反応する。見た目からしてまだ小学生くらいに見えるネギ。それが先生をやっているのに夏海も驚いていた。

「おい、ユウスケ。よく考えろ。ワタルやアスムのようなものもいるんだ。この世界じゃ常識なんだろう」

「あ、なるほど。確かにこの世界じゃ常識なのかもな」

ユウスケに耳打ちして言う士。ユウスケもその言葉に納得する。

今までいろんな世界を回ってきたので、先ほどの仮面ライダーキバの世界のワタルや、仮面ライダー響鬼の世界のアスムのように子供ながらもその世界の為に闘う人物もいる。はたまた、シンケンジャーというライダーではないスーパー戦隊が闘う世界だってある。この世界もそう言った世界だとすれば納得する。世界には色々な世界があ

るのだから。

「あのく、やっぱり可笑しいですよ。僕みたいな子供が先生だと・・ユウスケの反応が当たり前の反応と思うネギ。」

「いやいや!!そっか、ネギくん先生なのか、いやはや小さいのにえらいよ!!」

「ええ、そうですか?」

「いわゆる天才少年っての何でしょうね」

「まあ、俺には劣るだろうがな」

先ほどの反応から一点して、妙に納得したように反応する土達。

「(ん?こいつら・・・)」

急に態度が変わった事に違和感を覚えるエヴァンジェリン。先ほどの土達の会話も少しばかり聞こえていたので、少しなかり警戒する。

「所で一つ聞きたい事があるんだけど」

「聞きたい事ですか?」

「えっと仮面ライダーって知ってるかな?」

ユウスケが早速この世界のライダーの情報を調査する。何ともストリートすぎる質問なのは気にしない。

「仮面ライダーってあれですよ・・TVに出てくる・・特撮番組のヒーローですよ?」

「特撮ですか?」

「え・・・仮面ライダー知らないんですか?」

夏海のキョトンとした表情に明日菜が反応する。

仮面ライダーといえば、今でも根強い人気を持つ日本を代表する特撮番組。1号から始まり、Black RXまでが放送されているのだ。こう言った男の子系の番組が実は好きだったりする明日菜が簡単にユウスケ達に説明した(最別な方向に頭を使ってくれればいいのだろうか・・・)。

だが、この世界の仮面ライダーの番組は平成に入ってから行っていない。つまりこの世界には『平成仮面ライダー』という概念は存在しない。

「大体わかった。要はこの世界の仮面ライダーってのはフィクションの中の存在って事か」

「とすると、この世界に俺たちみたいな仮面ライダーはいないって事か?」

「そう言うことですね。前みたいにシンケンジャーのような世界かもしれないですね」

大方の推測をする士達。今回、訪れた世界は仮面ライダーがフィクションの中の世界の話で、実際には存在していない世界だと。

「あのこの世界とかって何の話ですか?」

盗み聞きではないが、つい聞いてしまった明日菜が質問してきた。

「ああ、気にしないで!!こっちの話だから」

「そうですか?」

「ふん、違和感ありすぎるだろ。この女はごまかせても私はごまかせんぞ。貴様ら只の一般人ではないだろう?」

エヴァンジェリンが士達の話聞き、普通の一般人の類ではないと判断して発言をする。さすがに士達の会話が聞こえていたエヴァンジェリンも怪しんでいた。相変わらずの地獄耳である。

「いや、俺達は別に怪しい者じゃないよ!」

「おい、それだと逆に怪しい奴だと思われるぞ」

ユウスケが慌ててエヴァンジェリンの言葉を否定するが逆に怪しさが出ていた。

「まあ、この世界の役目がよくわからないからな。はじめにバラすのも悪くないかもな」

「やはり、貴様らは只の一般人ではないのだな」

「ったく、お前は口の聞き方に気をつけるんだな。お前みたいなチビに貴様呼ばわりはされたくない」

「ふん、御託はいいからサツサと正体を表すのだな若造?」

エヴァンジェリンの上から目線の態度に、今度は士の方が苛立つ。

「しようがねえ、調子に載ってるおこちゃまに少しお灸を据えてやるか」

「おい士!!お前、何も子供相手に向きになるなよ!!」

「そうですよ土くん!!また笑いのツボ押されたいんですか!!」

また、土のいらぬ挑発で先のような展開になるのを止めようとするユウスケ。そして何気に脅している夏海。

その時!!

シユウウウウウ・・・

「!!」

突然、向かい側の道に不可解なオーロラが出現する。

「(あれは以前見たオーロラ!!)」

見覚えのあるオーロラを見て、最近現れた謎の帽子の男が現れた事を思い出すネギ。

しかし、オーロラから現れたのは帽子の男ではなく。

異形の化物集団・・・いや怪人集団だった。

「な、何よあいつら?」

現れた怪人集団に驚く明日菜。

「(馬鹿な、私が探知出来なかったのか!? 一体こいつらは)」

自身の探知魔法に引つかからなかった事に驚くエヴァンジェリン。そもそも目の前の連中はこの場に何の前触れもなく現れたのだ。

「土、あいつらまさか」

「ああ、イマジンにファンガイア、それにあれは魔化魍までいやがるな。まさかとは思うが」

怪人達の姿に見覚えがあった。以前のRXとBlackの世界、そしてアマゾンの世界に現れた秘密結社の存在を。

そして、偶然その会話をネギが聞いてしまう。

「(イマジンにファンガイアはわからないけど。どうして魔化魍を知ってるんだ?この人たちは一体・・・)」

土達の事を不審に思い始めるネギ。

『この世界に破壊者が現れる・・・デイケイド、奴に気を付けるんだ』
以前、帽子の男から言われた言葉がネギの頭に蘇る。まさか、彼らがそのデイケイドと呼ばれる人達なのか。だが、そうするなら正面にいる怪人達は。

そんな事を思っていると、赤いバイザーのヘルメットのような頭部

の額には小さな人面がある怪人が一歩前に出て高らかに喋りだす。

「私は偉大なる大シヨツカー傘下クライシス帝国《海兵隊長ボスガン》。この世界は我々の支配下に入る事になった。光栄に思うがい!!」

そう言つて、後ろにいる怪人達が高らかに叫び出す。

「え、何大シヨツカー? クライシス? でもあれはTVの中の話で... ああ!!」

ボスガンの言う大シヨツカーという単語に聞き覚えのある明日菜は驚く。そしてボスガンの顔と名前を聞いてある事を思い出した。

「どうしたんですか明日菜さん?」

「あいつ、RXに出てくるセコい貴族騎士!!」

「な!! 小娘!! 誰がセコい騎士だ!! 私は誇り高き貴族の騎士だ!!」

明日菜の言葉に反応するボスガン。

「だって、アンタ。將軍の地位を奪おうとしたでしょ!!」

TVで見た知識をそのまま指摘する明日菜。

「なぜそれを? ええい、着いた早々にふざけた娘がいたものだ!! お前たち、手始めにあの連中を血祭に上げる!!」

凶星を言われて、苛立つボスガン。まあ、本当のことだから仕方ないのだが。

ボスガンの命令で、十体いる怪人達が一齐に明日菜たちがいる場所に迫ってくる。

「え、あれ本物? TVとかの撮影じゃなくて」

「明日菜さん下がって下さい!!」

ネギも只ごとではない事態に、士達がいるのも構わず杖を構える。今の状況は緊急事態。魔法がバレるバレないの話ではない。

「はっ、あんな奴ら一捻りにしてやる」

「マスター、魔力が封じられているのを忘れないで下さい」

エヴァンジェリンも茶々丸も臨戦態勢に入る。

しかし、その前に士が前に出てくる。

「貴様、邪魔だぞ!! 死にたくなかったらな!!」

エヴァンジェリンが忠告するも

「それはお前たちの方だ。まあ、差詰めあの連中はアポロガイストの手下の奴らだろ」

「あいつらを知っているのか?」

「まあな。ああ言う連中の対処法は知っている」

そう言つて、変身ベルト《デイケイドライダー》を腰に装着し、ライダーブツカーから一枚のカードを散りだす。それをそのままバックルに装填する。

《KAMEN RIDE》

「変身!!」

《DECADE》

電子音と共に、9つのシルエットが士の周囲に現れ、重なりあつたかと思うと、彼の身体はブラックとマゼンダという個性的な組み合わせで構成されたスーツに包みこまれ、その顔は緑色の瞳といくつものカードが縦に並んだような線が印象的なマスクに覆われる。

「やはり貴様がデイケイドだったか!!」

ボスガンがデイケイドの姿を見る。

「あの人がデイケイド……」

ネギがボスガンの言葉に反応して、デイケイドの方を見る。

「ネギ?」

「どうしましたネギくん?」

その様子を見て、明日菜と夏海が不思議そうに見る。

「マスター……あれは」

「わからん、魔法の類ではない。一体奴は何者なんだ?」

エヴァンジェリンと茶々丸は士が変身したデイケイドを警戒しながら観察している。

すると、デイケイドは再びライダーブツカーから一枚のカードを取り出す。

「化物退治の専門家で行くか」

人型サイズの魔化魍もいるのなら、あのライダーに変身する。

《KAMEN RIDE HIBIKI》

キイイイイン!!

バックルを回転させた瞬間、デイケイドから響く音共に紫色の炎が舞い上がる。

「はあああっ!!」

それを振り払うと、そこに現れてのは・・・

「な!!あれは!!」

「なんで、あの人があの姿になれるのよ!!」

その姿に驚くネギと明日菜。エヴァンジェリンと茶々丸もその姿に驚く。

それはそうだろ。

何せ、デイケイドが変身したのは、自分達がよく知る人物。

新藤誠が変身する鬼

《響鬼》

だったのだから・・・

一方、デイエンドと対峙する誠の目の前に現れた仮面ライダードレイクと仮面ライダーイクサ。

既にゴングは鳴らされている。

ドレイクは先制攻撃と言わんばかりにドレイクゼクターから光弾を発射する。

「いきなり、丸腰の人間を撃つのかよ!？」

横に飛んで木の影に隠れる誠。

「言っただろ? 君はとても厄介な響鬼だつてね。それに君は生身でも十分脅威だよ」

そう言っつてデイエンドはデイエンドライバーにカードを挿入する。

《ATTACK RIDE BLAST》

ダダダッ!

ディエンドドライバーの銃身を強化・分身させるアタックライドカード《ディエンドブラスト》を使い、光弾を高速連射する。

「容赦なしかーなら!!」

高速連射される光弾が自分が隠れている木に当たっていく。そんな木が耐え切れるわけもなく、無残にも穴だらけに貫通していく。誠は高くジャンプして、回避行動をとりながら変身音叉・音角を手にする。

キイイイン

指で弾き、音叉からでる波動を額にかざす。途端に誠の体から紫色の炎が吹き出す。

「はあああああああ!!はあっ!!」

精神を集中し、空中で炎を振り払い、鬼戦士・響鬼に変身する。

「響鬼に変身したか。まあ、生身で倒してもこっちも居心地悪いからね」

「さつき、生身でも脅威とか言つて奴のセリフか!」

音撃棒・烈火を構えて、突撃する響鬼。

すかさず、ドレイクが牽制の為にドレイクゼクターで攻撃を、そして隣にいるイクサもイクサカリバー・ガンモードによる攻撃を行う。

ダダダッ!

「くっ!」

二人のライダーから連射される弾丸を避けていく響鬼。右へ左へ避け、時に空中に避けていく。

その回避している時に、響鬼も烈火弾を発射し、反撃に出る。

「おっと、まさかこれだけの攻撃の中よけながら此方に攻撃してくるとはね。でも、これはどう避けるかな?」

ディエンドがそう言うのと、攻撃をしていたドレイクが右手を脇にあるスライド式のトレーススイッチに手を触れる。

《C l o c k U p》

シュウウン!

「!?トンボがない?」

音声が聞こえた瞬間に姿を消したドレイク。そして・・・
ダダダダダッ!!

「うおおっ!」

突然、後ろから光弾が響鬼に直撃し、火花を散らしながら地面を転がる。

「っ痛・・・何だ今のは・・・!?!」

そう言っている間にも、今度は正面にいるイクサがイクサカリバー・ガンモードで攻撃をしてくる。

「ひびきまづきなさい」

イクサがそう言いながら攻撃を繰り返す。

その攻撃を避けようとするが、再び今度は真横と真上から光弾が響鬼を襲う。

「何!?!どわっ!!」

突然の攻撃にまたしても避ける事が出来ず、火花を散らしながら後ろに飛ばされる。

《Clock Over》

電子音と共に、イクサの隣に現れるドレイク。

「ぐっ! 一体どこから攻撃が」

「君にドレイクの攻撃は見えないよ。クロックアップをつかっているからね」

「クロックアップ?」

「そう! 時間流を自在に行動可能になる超高速移動方法さ。今の君に捉えるのは限りなく難しいよ」

デイエンドが響鬼に先ほどの攻撃を説明する。

「(時間流を移動できる能力だと。要はとんでもなく早く移動していた瞬間って事か? なら、こっちの姿が見えないようにするしかない・・・)」

地面に倒れていた響鬼はゆっくりと立ち上がる。

「さあ、おとなしくお宝を僕に渡したらどうだい? これ以上は弱いものイジメみたいだからね」

「勝利宣言するのはまだ早いで。海東大樹」

「そういう意味だい？」

「反撃開始つてことだ!!火遁・灰積焼!!」

印を結び、口から高熱の灰を吹き出し辺りに蔓延させる。

「熱っT!?何だこの煙は？」

辺りに煙が蔓延し、視界が一気に悪くなってしまう。近くにいるドレイクとイクサの姿も見失ってしまう。

ドレイク、イクサも同様に響鬼やデイエンドの姿を見失い辺りを見渡していた。イクサはスーツのセンサーで煙を分析しようとした途端。

「土遁・地動核!!」

ズズズツ!!

「!?」

地面が突然、せり上がり勢いに任せてイクサが空中に放り出される。

「はあっ!!」

その隙に空中にジャンプした響鬼が炎を貯めた右足をつきだして、鬼闘術・来打蹴ライダーキックをお見舞いする。

「ぐわあああ!!」

直撃を食らったイクサは攻撃に耐え切れず消滅する。

「イクサくんがやられたのか？」

イクサが消滅したのを感じ取り、嫌な予感があったのか後ろに飛び煙から脱出するデイエンド。

「!!」

《Clock Up》

再びドレイクが煙が舞う中、クロックアップを発動させて脱出を試みる。

「まだ、出るなよ!!」

烈火を強く叩きあわせて火花を散らせて、高熱の灰に着火させる。

ドゴオツ!!

「!?」

《Clock Over》

着火した瞬間に大爆発を起こり、クロックアップを発動していたドレイクは爆発に巻き込まれて強制的にクロックアップの世界から戻ってくる。

「大・烈火剣!!」

ズシャアン!!

「ぐあああああああ!!」

怯んでいる隙に、烈火二本を重ねあわせた烈火剣の強化版《大・烈火剣》で斬る。そのままドレイクは消滅してしまう。

あつという間ライダー二人を葬った響鬼。

「やるね。さっきのは鬼忍術って奴か、中々協力的な技だね。まずまず君の事が気に入ったよ」

ライダーがやられたのを気にせず、響鬼が使用した術に興味を示すデイエンド。

「別にお前に気に入られられても嬉しくないがな。それより、残るはお前だけだ。お前には聞きたい事が山ほどある。悪いが、動けないようにして色々聞かせてもらおうぞ?」

そう言うと、響鬼の目元が赤く光る。

「おっと、鬼導眼きどうがんかい? さすがにそれはやばそうだね。そこまで本気になってるって事かな?」

「(鬼導眼まで知ってるのか? 早いところ幻術を……)」

デイエンドに幻術をかけようとするが。

「また、新しい対策でも立てて来るよ。その時は覚悟しておきたまえ」

《ATTACK RIDE INVISIBLE》

新たなカードを装填し、発射するとデイエンドの姿が完全に消えてしまった。

「あ、待て!!」

そう言うが既に姿が見えなくなっていたデイエンドに言っても無駄だった。

「仮面ライダーデイエンド……一体何が起きてるんだ……」

変身を解除し、デイエンドの登場や彼の言う別の世界の話を考える誠。何かが起ころうとしているのではないかと、嫌な予感がして

くる。

「とりあえず、学園に帰ってから考えよう」

ひとまずはネギやエヴァがいる麻帆良学園に向かおうとする。

すると、目の間に前に見た灰色のオーロラが現れる。

「今度は何だ？」

オーロラから何者かが現れる。

「あなたは？」

「俺は………南光太郎。RXの世界から来た仮面ライダーだ」

その男、太陽の子と言われた仮面ライダー……

《仮面ライダーBlack RX》に変身する男

南光太郎だった……

第三話 《接触》

突然目の前に出現した不思議なオーロラから現れた人物。

見た目からして大体40歳くらいか、もしくはそれ以上かもしれない男性。白いジャケットを身につけて威厳ある風格があった。

「俺は南光太郎。RXの世界から来た仮面ライダーだ。君がこの世界の仮面ライダー響鬼だね?」

「え、ええ。まあ、ライダーじゃなくて、音撃戦士なんですけど」

先ほどの戦闘で、もう正体もへったくれもないと思っていた誠は、響鬼と言われて素直に答えた。

「あの南さんでしたか?」

「光太郎でいいよ。君は・・・」

「新藤誠です（名前とかは知らないのか）」

自身の人間の名前は知らないと見る。響鬼の事は知っていても、誰がそうなのかまではわかっていないようだ。何とも不思議な事ではあるが。

「それで、光太郎さん。いきなり何ですけどRXの世界でしたか?それってどういう意味何ですか?」

先程の光太郎が言ったRXの世界という単語に引っかかる誠。デイエンドこと海東大樹との戦闘の際にもあの世界とかこの世界と言っていたので気になっていた。

「うん、世界はいくつも存在しているのは知っているかい?」

「平行世界ってやつですか?」

「ああ、俺もそのうちの一つからこの世界に来たんだ。RXの世界と呼ばれている」

そう彼、南光太郎はこの世界とは違う世界。かつて門矢士ことデイケイドが訪れた世界の人物であり、この世界にある特撮番組《仮面ライダーBlack RX》が現実に存在している世界でもあるのだ（詳しくは仮面ライダーデイケイド第26話、第27話をテエツク!!）。

「(RXの世界・・・さつき戦った奴らも別の世界から来た連中ってこ

となのか・・・)」

先ほど言っていた大樹の言葉を理解した誠。

「でも、どうしてこの世界に？」

「この世界に大シヨツカーの先遣隊が侵攻しているという情報をキャッチしてね」

「大シヨツカー？」

シヨツカーと聞いて思い当たる節があるが、とりあえず光太郎の話
を聞く誠。

「様々な世界の秘密結社が結集して作られた組織だよ。俺の世界に
いるクライシス帝国もその傘下に入っているんだ」

「じゃあ、その大シヨツカーとかいう組織がこの世界に？」

光太郎が言った先遣隊という単語からしておそらくはそうなのだ
ろうが。

「恐らくはもうこの世界に来ているかもしれない」

「・・・そうですか・・・」

だとするならば、ここは魔法使いが集う学園都市。仮に奴らはこの学
園の魔法などを狙っているのならマズイ状況。それに魔化魍達の存
在まで知られれば、状況は悪化する恐れがある。

「なら、早めにそいつらを見つけ出して、倒さない」と

「ああ、俺もそいつらの侵攻を阻止するためにこの世界に来たんだ。
もとより俺がクライシスを食い止められなかったのが原因でもある
んだがな・・・」

拳を握りしめて、顔を険しくする。自分達の世界の問題が、こうし
て様々な世界に飛び火しようとしている。なんとしてもクライシス
の野望、そして大シヨツカーの野望を阻止する為に、南光太郎は世界
を駆けてきたのだ。

その後も光太郎の話聞き、大方の事情は理解した誠。

すると、彼がふとこんな話をしてきた。

「それに、俺はもう一度、彼に会いたくてね」

「彼？」

「ああ、門矢士という、君くらいの青年だよ」

「門矢士？その人も仮面ライダーなんですか？」

「そうだ。世界を旅する少し変わった青年でね。前に一緒に戦った事はあるんだ。彼は今でも別の世界のどこかで旅をしているはずさ」

光太郎が懐かしむように、かつて門矢士こと仮面ライダーデイケイドと戦った事を話す。

「もしかしたら、この世界を訪れているかもしれない・・・」

「世界を旅・・・か・・・」

光太郎の言葉を聞き、何か思いつめる表情の誠。

「どうした？」

「いや、その門矢士は何を目的に旅をしているかと思ってですね・・・俺もここに来る前は世界とは言いませんけど、日本中を旅してましたから」

「この世界にいる怪人を倒す為にかい？」

恐らく魔化魍の事を言っている光太郎。その言葉に少し頷く誠。

「そうですね・・・一旦、町の方に行きましょう。ここじゃあなんですから。戻れば、知り合いますし、少しでも情報交換した方がいいみたいですから」

途中で話を区切り、移動する案を出す誠。誠の突然の話の切り替え用に、少し不自然に思ったが、ここは誠の案に乗った方がいいだろうと判断する光太郎。

二人はひとまず、この場所から離れようとする・・・

しかし、それは叶えられる事はなかった。

シューウウウウウ

「!!」

再び、現られるオーロラに反応する二人。オーロラからは多数の人影の姿が見える。

「何!?!あいつらは!!」

現れた人物達に見覚えがある光太郎が叫ぶ。揺れるオーロラから現れた集団は、光太郎のような人間の姿ではなく、異形の怪人集団が出現した。そして、現れた一体の怪人が光太郎の姿を発見し、驚きの声をあげる。

「貴様はRX!!やはりこの世界に来ていたのか!!」

「それは此方のセリフだ!クライシス帝国の《ゲドリアン》!!先遣隊はボスガンが率いているんじゃないのか!!」

ゲドリアンと呼ばれる怪人は、光太郎の世界にいるクライシス帝国四大隊長の一人、怪魔異生獣大隊を率いる怪魔人である。

そして、光太郎が手に入れた情報では、この世界に来る先遣隊はボスガンが指揮を執り、侵攻しているはず。

「ボスガンはただの囷だ!!俺たち別働隊が動いていたんだよ!!RX!!お前のように此方の情報入手している奴がいるかもしれんからな!!」

「くっ、俺は偽の情報を掴まされたのか・・・」

情報が偽物だと知り、顔を顰める光太郎。

「待て!!ならお前みたいな変な奴らがもうここにきているのか!!」

誠が一步出て、ゲドリアンに向かって話す。変な奴と言われて、ゲドリアンは苛立つ。

いきなり、両手から武器である破壊光線を誠に向けて放つ。

「うわっ!」

後ろに飛び、間一髪で回避する誠。

「人間風情がふざけた事をいいやがって。お前ら!!RX諸共あの人間を殺せ!!」

自身の部下である、クライシス戦闘員《チャップ》、怪魔異生獣《キュルキュルテン》、《ムンデガンデ》に指示を出し、誠と光太郎に抹殺の指示を出す。

「くそっ、あの気持ち悪い奴らは何だ」

構えのポーズを取りながら、戦闘態勢に入る誠。だが、誠の前に光太郎が出てくる。

「光太郎さん!」

「誠くん!ここは俺が相手をする!!君は先に行つて、ボスガン達の侵攻を止めてくれ!!」

少し顔を後ろに向けて、この場を離れるように言う光太郎。

「大丈夫なんですか!」

誠から見れば、相手は今まで会ってきた魔化魍だの妖怪だの魔族とは違う、未知な怪人達。ここは協力し合った方が良いのではと。

「大丈夫だ。コイツらの事はよく知っている!!」

そう言うのと、腰の部分に変身ベルト《サンライザー》が現れる。

「変……身ッ!!」

掛け声と共に、サンライザーからキングストーンの輝きと太陽の輝きが光太郎に仮面ライダーBlack RXへと姿を変えさせていく。

「俺は太陽の子!!仮面ライダーBlack!!アール……エックスッ!!」
RXという文字を腕で表現させながら、力強く自身の名前を言う《仮面ライダーBlack RX》。胴体部分等に緑色の強化皮膚を纏い、左胸部分には自身の象徴でもある「RX」のエンブレムが施してある。

太陽の力とキングストーンの力が合わさった仮面ライダーだ!!

「仮面ライダーBlack……RX」

RXの姿を見る誠。

「さあ行くんだ誠くん!!」

「!!……わかりました!!」

誠はそのまま学園の方に向けて走り出していく。

「逃したか!!まあ先にRXを血祭にあげるとするか!!」

気高い声を上げて、目の前にいるRXをターゲットにするゲドリオン。周りにいる部下たちも一斉にRXを襲い出す。

「大ショッカー……いやクライシス!!これ以上貴様らの思い通りにはさせん!!」

ベルトに手を添えると、グリップのようなものが現れる。

「リボルケイン!!」

サンランザーから赤いダイナモを備えたグリップを引き抜き、同時に長さ1メートルほどの光の棒を生成される。

「はあっ!!」

リボルケインを構え、はじめにチャップを斬り倒していく。見事な剣捌きでチャップの集団を撃滅していくRX。

「何をしてる!!相手はたった一体だぞ!!」

ゲドリアンの怒りの声が飛ぶ。

すぐさまカエルに似た怪人《キュルキュルテン》、それぞれ赤、緑、青の体色をしたキュルキュルテンは口から泡を吐き、RXを翻弄する。

「一気に終わらせる!!キングストーンフラッシュ!!」

サンライザーから強烈な光が発せられる。

キングストーンに込められたエネルギーが放出されているのだ。

何が起こったのか理解できず、未知の衝撃破が3体キュルキュルテン襲い、近くの樹に叩き付けられる。

「おのれ、忌々しい奴だRX!!」

それを見て、RXを忌々しい目で見るとゲドリアン。

「言っただぞ!!お前たちの好きにはさせないとな!!」

リボルケインを構えて、威風堂々たるオーラを出すRXの姿だった。

光太郎と別れた誠は全速力で学園の方に向かっていった。もうすぐ森を抜けて学園都市の方につこうとしていた時、

「はあい!!ちよつとごめんねえ」

「!?!」

突然、現れた白いコウモリのような生き物が目の前に現れる。

「何だお前?」

「私はキバール。覚えなくていいわよ。ちよつとある人から頼まれてね。デイケイドと戦ってもらわよ」

その言葉共に、キバールと名乗るコウモリは誠に近づく。誠も手で追い払うが、小柄なキバールに翻弄される。そのまま、背後に回られ「ガアブ!」

首筋に噛み付く。

「うっ・・・」

そのまま、気を失うように倒れてしまう誠。

「うふふ、さて、楽しくなってくるわね！」

楽しそうにしながら誠から飛び去るキバーラ。そして、突然誠の付近からオーロラが現れ誠を何処かへと飛ばしてしまおう。

一体、誠に何が起こっているのか・・

女子中等部へと続くところある通学路

ここでは、既にボスガン率いる“囷”の先遣隊がネギ達、そしてデイケイドと戦闘を始めていた。

「はあ!!」

デイケイド響鬼にカメンライドし、向かってくるイマジン、フアンガイア、そして魔化魍の相手を翻弄しているデイケイド。9人の仮面ライダーの中でも、身体能力がトップクラスに入る響鬼。そこらへんの攻撃を食らってもカメンライドが簡単には解除されないのが特徴。「つたく、そろそろと雑魚ばかりよこしやがって」

ライドブツカーから一枚カードを取り出し、デイケイドライダーに挿入する。

《ATTACK RIDE ONGEKIBO REKKA》

両手に響鬼専用武器《音撃棒・烈火》が出現する。

「はあっ!!」

烈火を振り下ろし、鬼石から火球の烈火弾を打ち出す。烈火弾は何体かの怪人を倒していく。

その様子をネギ達はジッと見つめていた。

「いいぞ士!!」

ユウスケがデイケイドの戦いぶりを見て、歓喜の声をあげる。

「なんでユウスケは戦ってないんですか?」

最もな事をユウスケに言う夏海。それもそのはず、彼は歴とした仮

面ライダーであり、変身している士と同じく闘う力を持っている。

「いや、なんて言うかももう士一人でいいんじゃないかなあつて。毎度のことだからね」

これまで戦ってきて、殆ど士が倒してしまっているのに今更自分が闘うのもどうかと思っているユウスケ。

そんなユウスケを見てついたため息をついてしまう夏海。

「あの・・・」

そんな二人のやり取りを見ていたネギが話しかけてきた。

その時、エヴァンジェリンが静止する。

「待てぼうや」

「エヴァンジェリンさん？」

「まずは、奴を観察するのが先だ。なぜ奴が誠と同じ鬼に変身するのかをな。それに奴らが言っていた仮面ライダーという言葉も気になる」

今は状況を見定めて行動するべきだと促すエヴァンジェリン。相手はエヴァンジェリンでも会ったことないような連中。まして、目の前にいる士ことディケイドと名乗る男の疑惑もとれたわけではない。そして、何より他者に変身し、同じ力を使うなど、魔法でも早々無い。「確かにそうですね・・・(ディケイドは破壊者って話を聞いたけど・・・本当なのかな)」

鳴滝の言葉を信じるわけでないが、現に士は自分たちを守るように戦っている。更に響鬼の姿をしているだけあつて誠とダブって見えしてしまう。

ともかく、今は妙な事は聞かず、黙ってディケイドの戦いを見る事にする。

しかし・・・

「あの!!あの人なんで響鬼さんに変身してるんですか!!」

「え？」

それを言う前に明日菜がユウスケと夏海に質問したのである。

「明日菜ちゃん響鬼の事知ってるの？」

「え、はい。あの私の先生が響鬼さんですから・・・あつ」

ここに来て、自分が余計なことを言ってしまったと気づく明日菜。自分が鬼であるというのは秘密にして欲しいと誠から言われていたのを思いだす。まあ、状況が状況なだけに、仕方がない事かもしれないが。

後ろを振り向けば、ジト目で明日菜を見るエヴァンジェリンと苦笑いしているネギ、茶々丸はいつもどおりの無表情だったが。

「えっと、つまりここは響鬼の世界なのか？」

「でも、響鬼の世界は既に行きましたよ。どういう事なんでしょうかな？」

明日菜が言った言葉に引っかかるユウスケと夏海。響鬼が登場する世界なら既に行つて、士の役割は終わっているはず。まさか、また響鬼の世界に戻ってきたという事なのか。

一方、戦闘を行っている士の方では、異変が起きていた。

「？何だ」

突然、妙な違和感を感じるデイケイド。その時、デイケイドドライブから響鬼のカードが強制的に飛び出す。

「何?! うわっ?!」

カードが飛び出したのに一瞬隙ができてしまい、一体の魔化魍バケネコの攻撃をうけてしまう。

「土!!」

攻撃を受けた土を見て叫ぶユウスケ。

「くそっ、何で変身が解除されたんだ・・・!!?」

地面から起き上がりながら、響鬼のライダーカードを見て驚くデイケイド。ライダーカードから響鬼の姿が消えていき、ブランクカードになってしまったのだ。他の《ファイナルアタックライドヒビキ》、《ファイナルフォームライドヒビキ》のカードも同様にブランクカードになってしまう。

「どういうことだ。何で響鬼のカードが消えていく」

なぜ、響鬼のカードが消えてしまったのか困惑するデイケイド。その隙を見てか、ボスガンが怪人達に指示を出す。

「今だ!! 奴に一齐に攻撃しろ!!」

ボスガンの指示のもと、怪人達から火の玉や光線、溶解液などが
デイケイドを一気に襲う。

ドゴオツ!!

「ぐああああ!?!」

よけきれず攻撃を受けて吹っ飛ぶデイケイド。

「そんな!?!」

「士!!くっ、変身!!」

さすがのユウスケも応援の為に、アークルと呼ばれる変身ベルトを
出して、変身の構えをとる。

キュイン!!キュイン!!キュイイイイン!!

アークルから光が発せられるとそこにはユウスケではなく、赤を基
調として鎧を纏い、クワガタをモチーフにしたような仮面の戦士。

超古代の人類・リントをグロンギの魔手から守るために戦った伝説
の戦士《仮面ライダークウガ》と呼ばれる戦士だ!!

今の姿はクウガのフォームの一つ、バランスに優れたフォームで、
素手での打撃を中心とした格闘戦を得意とするマイティフォームと
呼ばれる形態。

「ええ!!あの人も変身したわよ!?!」

ユウスケの突然の変身に驚く明日菜。

「大丈夫か士!!」

倒れている士を守るように前に出るクウガ。

「何とかな、だがなぜか響鬼のカードが消えちゃった」

「何!?!はっ・・・士、この世界はどうやら響鬼の世界らしいんだ」

「響鬼の世界?その世界ならとつくの昔に行っただろ・・・」

「でも、明日菜ちゃんはずっき響鬼に変身したお前を見て『響鬼』って
言っただんだ」

「なら、俺達はまた響鬼の世界に来たって事か?だが、響鬼の世界なら
もう終わったはずだぞ」

「そこまで俺は知らないぞ」

大方の説明をするクウガにデイケイドが疑問の言葉を投げかける。

「まあ、まずはアイツらを倒してから色々調べればいいだろ」

「そうだな。俺も久しぶりに戦いぞ」

目の前にいる大シヨツカー部隊を撃滅するのが先決。ファイティングポーズを取るクウガと新たなカードを取り出すディケイド。

「ええい、まら余計なライダーが現れたか・・・ん？どうした？」

クウガが加勢に入ったのを見て忌々しい顔するボスガン。その時、どこから現れたのかクライシス戦闘員《チャップ》が現れ、ボスガンに何かを報告している。

「何!?!ゲドリアンがこの世界に！一体どういう事だ!!先遣隊は私の部隊だけのはずだぞ!!」

この世界に同じクライシス帝国四大隊長の一人である《ゲドリアン》がこの世界に来ている事を知るボスガン。何も知らされていないボスガンは声を上げる。

「ええい!!一旦戻るぞ!!ジャーク將軍に確認を取る!!」

その言葉と共に後ろからオーロラが現れ、撤退するボスガン達。オーロラが消えると同時にボスガン達の姿が消えてしまっていた。

「引いていったのか・・・」

「まあ、何にせよ。とりあえず一安心って所だな」

姿が見えなくなっただけを確かめてそれぞれ変身を解除する士とユウスケ。夏海も敵がいなくなったのを見て、士達に駆け寄る。

「でも、どうして突然、帰っていったんでしょう」

「さあ、まあ何にせよ。この世界での俺の役目も分かった所だしな」
「役目?どんなだよ」

「この世界にいる響鬼に出会って、あの連中を追い出す・・・大体そんな所だろ」

「少し、端折りすぎじゃないか?」

まだ、この世界は響鬼がいると言う事しかわかっていない為、結論を出すのは速すぎるのではないかと指摘するユウスケ。

「そうですね。それにネギくんたちにも此方の事も説明しないと」

そう言っ、ネギ達の方を向く夏海。理解できない事態に驚いてばかりである。

士も「それもそうだな」と言い、「事情ぐらいは説明してやるか」と

相変わらず偉そうに言う。しかし、そんな前にネギ此方に歩み寄って来る。そして、ネギから発した言葉で土が一瞬固まってしまう。

「あの・・・《世界の破壊者》って知っていますか？」

「!!」

《世界の破壊者》。それは土自身が今まで言われていた言葉、世界に必ず行けば最初に言われていた言葉である。

「ちよ、何言い出すんだよネギくん!!土は《世界の破壊者》なんかじゃないよ!!」

「!!土さんが世界の破壊者って、僕言ってますんよ？」

「え!!あつ、いや違うんだよ!!」

ネギの言葉でしまったと言う顔をするユウスケ。確かにネギは世界の破壊者とは言ったが、土が破壊者とは言っていない。何とか弁明しようとするが、もう遅い。

「やめとけユウスケ。そいつの言う通りさ。俺は確かに世界の破壊者って言われているな」

「ちよつと土くん!!」

開き直ったように、答える土に、怒る夏海。

「・・・そうなんですか」

それを聞いて、何かを思いつめるネギ。

「それで、俺が世界の破壊者ならどうするんだ？俺を追い出そうってか？」

「いや、別にそうは思っては・・・」

そう言われて、言葉に詰まるネギ。

「ネギ、何よその破壊者って」

明日菜も初めて口にするネギの言葉に質問する。

「ぼうや、何か隠し事しているなら正直に話せ」

「いや、僕は・・・その・・・」

なんて説明すればいいか困るネギ。いきなり現れた男がそう言っていたなど、信じられるわけがない。

『彼の言っている通りだ。デイケイドは全ての世界を破壊する悪魔だ』

謎の人物の声が聞こえて、声の主の方に一斉に振り向く一同。

「鳴滝……」

士がその人物の名前を呼ぶ。眼鏡・コート・フェルト帽がかぶった中年の男性《鳴滝》。

「その男は世界の破壊者。この世界もディケイド、貴様のせいで崩壊してしまおうのだ！」

士を睨みつけながら豪語する鳴滝。

「違います!! 士くんは今まで世界を救ってたんですよ!!」

「そうだ、それは鳴滝さんだっけ見てきたことだろ!!」

夏海やユウスケが士を擁護する発言をする。

ネギ達には、彼らが何の話をしているのか分からず、どうすればいいか見ていた。

「それはこれからわかる。お前を排除する為に、この世界のライダーがな……」

そう言い残すと、鳴滝からオーロラが現れ、そのまま士を包み込んでしまう。

「士くん!!」

「士!!」

突然姿を消してしまった士に驚く夏海とユウスケ。

「え、あの人どこに行っただの!?!」

「マスター、あの男性の姿も見当たりません。完全に反応が消えています」

「ちっ、次から次へと一体何が起きているのだ!!」

同じく、先ほどから起きる展開についていけなくなっているエヴァンジェリン達。

鳴滝の姿も完全に見失っている。

「……お兄ちゃん?」

何故か、誠の事が頭に浮かぶネギ。何か誠や士の身に嫌な予感がする。

一体、何が起きようとしているのか……

「うわっ!？」

突然、オーロラによってどこかの荒野に飛ばされてしまう土。

「いてて、まったく鳴滝の奴。毎度毎度・・・」

何度も自分の度に妨害してくる鳴滝に悪態をつく土。なぜ、そこま
でして自分の事を敵視するのか。なぜ、自分が世界の破壊者と言われ
れるのか。そんな事が頭の中を駆けめぐっていた。

その時、誰かが此方に近づてきていた。

「誰だ?」

その人物に問う土。

「俺は新藤誠・・・そして、音撃戦士・響鬼だ」

変身音叉・音角を土に見せる誠。しかし、どこかいつもの誠とは違
い、妙に暗い雰囲気漂っている。

「お前がこの世界の響鬼か」

まさか、いきなりこの世界の響鬼に会う事ができた土。しかし、

「ああ、お前がディケイドだな。そして・・・世界の破壊者」

「また、それか。だったらどうするんだよ」

「またも、世界の破壊者と言われてうんざりな顔をする。」

「決まってるだろ・・・ディケイド。お前はここで消えてもらう」

キイイイイイン!!

音角を指で弾き、そのまま額に持っていく。途端に誠の全身から炎
が吹き出す。

「はあっ!!」

それを手で払いのけて、音撃戦士・響鬼に変身する。そのまま、音
撃棒・烈火を手に取り、烈火弾を土に発射する。

ドゴンツ!!

「いきなり何しやる!!」

《KAMEN RIDE DECADE》

攻撃を避けながら、ディケイドライバーにカードを挿入し、ディケ

イドに変身する。

「それが、デイクイドか。破壊者の力、見せてみる!!」

烈火を構えて、デイクイド目掛けて突進する響鬼。

「くそ、応戦するしかねえか」

ライドブツカーを剣モードにして、響鬼を迎え撃つデイクイド。

一体、なぜ響鬼は・・・誠はデイクイドと闘うのか。

「はああああああああああああ!!!」

二人は本来なら闘うべきではないはずだった。

デイクイドと響鬼の対決

果たしてこの勝負が意味することは何のか？

― 続 ―

プロローグ

第一ノ巻《始まる物語》

2003年2月27日 東北地方のとある山間部

美しい木々に囲まれている森。

その森の中を一人の青年が駆けていた。

「はあっ・・・はあ・・・やっと、追い詰めたぞ！」

一旦立ち止まり、目の前にいる二人の人物に話しかける。

一見見た目はごく普通の大人の男女にしか見えないが、

「追いつかれたか・・・」

「追いつかれたな・・・」

なぜか、男性のほうからは女性の声か、女性の方からは男性の声を発してくる。

この二人の男女はただの人ではない。

いや、厳密に言うと《人》ではない。

「お前たちが育てたオトロシを、追いかけてる時に2体も倒したぞ。よくもまあ、今までばれずに育てられたもんだな」

呆れるように二人の男女に話しかける青年。

背中には大きめのリュックを背負い、両手には少し変わった太鼓の撥のような物を

持っていた。

「悪いが、これ以上あんなのを増やさせるわけにはいかないからな。ここで終わらせて貰うぞ」

リュックを地面におき、両手に持つ撥を構える。

彼の名は〈新藤 誠〉。

遙か昔から世に徘徊し、人を喰らう自然界の変異した存在〈魔化魍〉。

そして、その魔化魍を唯一倒すことができる音撃と呼ばれる攻撃を
行い清める戦士である。

人は彼らを《音撃戦士》と呼ぶ。
そして、又の名を

「鬼が……」
そう呼んだ

第一ノ巻 《始まる物語》

「はあー！」

両手に持つ撥を二人の男女に振りかざす。

この撥は音撃棒（烈火）と呼ばれる音撃武器の中ではひととき強力といわれる音撃打を放つ武器である。

二人の男女はそれぞれ横に跳び攻撃をよける。すると男女の姿が異形の姿に変貌していく。

方には特徴となる鋭い角がある形態。

先ほどの男女は人間ではなく、童子・姫と呼ばれる存在。

おもに、幼体状態である魔化魍を育てるのが目的。いわば魔化魍の親のようなものである。

「鬼の血肉を食わせれば、より強力なオトロシが育てられる」
「その血肉をよこせ！」

誠を殺し、その血肉を頂かんとするオトロシの童子と姫が襲いかかる。

「悪いが、お前らに食わせてやるものはねえよ！」

烈火の先端にある鬼石から紅蓮の炎が燃え上がる。

「烈火弾！」

振りおろし、炎の火球《烈火弾》を放つ。

「グッ!?」

「ガッ!!」

突進してきた童子と姫に直撃し、地面に転がる。

「硬いな、並みの童子と姫じゃねえからな」

そう言って誠は両手に持つ音撃棒《烈火》を二つに重ねて意識を集
中する。

「はあああああ!!!」

鬼石から巨大な炎の柱が出現する。

誠はそのまま、まだダメージを受けて立ち上がれないオトロシ童子
に向かって横一文字に振る。

「大！烈火剣!!!」

「!?グギャアアアア!!!」

炎の大剣は童子の上半身と下半身を切断する。

童子は悲鳴を上げて、そのまま炎に包まれ爆発する。

それを見ていた姫は急いでこの場から離脱しようと誠に背を向け

て走り出す。

「逃がすか!!」

烈火剣をおさめ再び、両手に構え一気に姫との間合いを詰める。

「!?」

「遅い!!音撃打・爆裂強打!!!」

ダン!!ダン!!

二回の轟音が鳴り響く。爆発的に強力な打撃を浴びせる。

姫はそのまま吹っ飛び、空中で爆発する。叫びすら与える暇もない強力な音撃である。

「終わった……はあ、変身なしでの音撃はさすがにきついな……」

そう言っつて、先ほど地面に置いていたリュックに音撃棒を入れる。

そうしていると、茂みから誰かが来た。

「やっと追いついた。．．あれ、マコツチ童子と姫は?」

「マコツチじゃない。童子と姫ならさつき木端微塵にしたぞ。っていうか、お前来るの遅いぞシユウキ?」

「マコツチが全速力で走るからだろ!!こつちは追いつくのに必死だったし、したら森のなから爆発音が聞こえて、辿ってきたらもう童子と姫は倒されているわで……」

呆れる顔で言う人物。彼の名は《嘉納シユウキ》。能天気そうな顔をしているが、誠と同じ音撃戦士であり、使う武器はトランペット型。

音撃管と呼ばれる管楽器の音撃武器だ。

「わかったから、早く山を下りるぞ。あとマコツチじゃないから」

そう言っつて、シユウキの横を通り過ぎそそくさと下山を始める誠。

「ちよ、待てよマコツチ!」

「マコツチはやめろっつて言っつてるだろ!!」

しばらくして誠とシウキは下山し、《猛士》の東北支部がある鳴福寺に向かっていた。

猛士ちは誠達鬼が所属している魔化魍を倒すための組織であり、全国の地方に支部があり、陰ながら魔化魍から守っている。

「あれ、門の前に誰がいるぞ」

「ん？・・・おい、あの人おやつさんじゃないか？」

「ほんとだ。なんでこんなところに？」

「もう一人のは・・・人間か？」

鳴福寺の門の前に人影が見える。

一人はおやつさんこと立花勢地郎。猛士関東支部長にして猛士総本部の事務局長を兼任している人物だ。

そして隣には明らかに人間とは思えない頭部をした老人がいた。

あれは・・・ぬらりひょん？

「なんか、今儂のことを失礼な目でみたやつがおるような気がしたのじゃが・・・」

「きのせいじゃないですか？」

「久しぶりだな、響鬼^{ヒビキ}。元気にやってたか？」

「ええ、おかげさまで。ところで、この人は？」

「彼は、私の古い友人でな」

あの後、鳴福寺に入りすぐに客間に案内された誠とシユウキは客間に案内された。

そこには、先ほどの立花勢地郎と、ここ東北支部の支部長と鳴福寺の和尚を兼任している多治見江十郎。

そして、先ほどの妙な頭をした老人がいた。

「紹介が遅れたの。儂の名は近衛近右衛門。麻帆良学園の学園長をしておるもんじゃ」

彼の名は近衛近右衛門。日本でも屈指の学園都市である埼玉県麻帆良市にある学園都市《麻帆良学園》の学園長を務めている。

「麻帆良学園って、あの学園都市の？」

シユウキが一度は耳にしたこととはる名前で思い出す。

まあ、最も彼はそこにある超包子と呼ばれる中学生が経営している店をしっていたからであるが・・

誠も名前くらい聞いたことがあるが、あまり詳しい内容は知らない。

「そして、関東魔法協会の理事長もやっておる」

「!？」

その言葉を聞いて、二人は驚く。

「関東魔法協会って、確か西洋魔法師の・・・」

「そうじゃ、西洋魔法師の日本支部でもある所じゃ」

西洋魔法師・・・世界には魔法を使う者がいる。

彼らは、普段は表の世界にははず、陰ながら世のため人のためにその魔法を使う。

そして、もちろんこの日本にも魔法使いはいる。

本国と呼ばれる魔法使いの国から派遣される魔法使い達の支部でもあるのが関東魔法協会である。

つまり近衛近右衛門が務める関東魔法協会は魔法協会の日本支部であるということだ。

「魔法使い……か」

それを聞いた誠は、少しいやな顔をした。

「まあ、君たち猛士から見れば僕ら魔法使いをあまりいい印象をもっていないのはわかっておる」

学園長はそういって、申し訳なさそうな顔をする。

そう、誠達が所属している猛士からは魔法使いに対していい印象を持っていない。

「まあ、僕らの組織を化け物の集団だの、正義の魔法使いだのの言っておるからの」

そういって、目をつむりながら言う江十郎。

現在、魔化魍を唯一倒せるのは彼ら猛士に所属する鬼だけだ。それを。西洋魔術師たちは魔法を絶対的と考えている者がおり、魔化魍を自分たちで倒せると勘違いしている輩がいる。

いくら万能の魔法といっても、魔化魍はそこらへんにいる妖怪や悪魔とは全く違うのだ。

そして、さらに達が悪いのが、連中は猛士に所属する鬼をも化け物と同等に見ているのだ。

「確かに、前に俺も西洋魔術師を魔化魍から助けたことあるけど、ありがとうの一言もなかったな」

シユウキは昔、魔化魍から西洋魔術師を助けたことがあるが、その時に「化け物が余計なことを」である。

「で、その学園長が一体どんな要件で？まさか、謝罪に来ましたとかではないですよ？」

そう言って、誠は学園長を見る。

「おお、そうじゃったそうじゃった。今日は別の件で来たのじゃ。そのために勢地郎くんにも一緒に来てもらったのじゃ」

「件とは？」

「実は、新藤 誠君、いやヒビキくん。君に麻帆良学園学園に教師および警備員として魔化魍から守ってほしいのじゃ」

「は?・・・ええええええええええええええええええ!!」

いきなりの発言に驚く誠。

「ままままマコツチが教師いいいいいいいい!!」

同様に隣に座っておるシユウキも驚愕の表情をする。

「ちよつと待つてください。なんで俺が教師を!?警備員ならまだしも、学校すらまともに行っていないですよ!!」

「そこらへんは心配いらぬよ。こちらがすべて手配するからの」

「いや、そういうわけじゃなくて。おやっさん!!」

全く、話に通じてないのか、誠は立花に顔を向ける。

「その件はすでに、吉野の本部に連絡をして了解を得ている。何も問題は無い」

「も、問題ないって、俺は何も聞かされてませんよ?」

「すまんの、実は俺は大分前から知っていたのだが、吉野の本部から口止めされての」

そう言つて、江十郎はすまんという顔をする。

「どうやら、この話はだいぶ前に決まっていたらしいが口止めをされていたらしい。」

「本部が・・・あの理由を聞いていいですか?なんで俺なんですか?」

誠が立花と学園長に顔を向け、なぜ自分なのかと理由を聞く。魔化魍なら別の鬼でもよいのではないかと。

「まあ、話を聞けヒビキ。今回の麻帆良学園入りは、麻帆良学園付近での異常の魔化魍の発生が原因でもあるんだ」

立花が誠に事情を説明する。

「魔化魍の異常発生?」

「そうじゃ、ここ最近の学園付近の山中や森で魔化魍の多数発生が目撃されておつて。俺ら魔法使いも警戒にあたっていたのじゃが。何分、魔化魍は俺らでは倒せん。撃退はできても撃破はできんが現実じゃ。俺もすぐさま猛士に協力を要請はしたのじゃが・・・」

「勿論、私たちも魔化魍を倒すのが専門だから要請には応じるつもりだが、今。九州の方で魔化魍が大量発生している。ほかの支部から鬼を借りて倒している状態だ。鬼不足が原因でもあるがな」

現在、九州各地にて魔化魍の異常発生が起きている。オロチ現象とまではいかないが、魔化魍が発生してるのは間違いないため、九州支部に所属している鬼では対処しきれていない。各支部から鬼を派遣している状態である。

「今回の麻帆良学園の発生もそれに関係あると？」

「いや、まだわからん。その事を含めて響鬼ヒビキに調査を頼みたくな。それで」

「まあ、確かに俺が東北支部に来たのも要請があつたから来たんですが、まさか、それが原因で？」

誠はそう言つて、江十郎を見る。

「そういうことだの」

「ようは、人手不足だから、誠を送るつてことですか？」

「おい、人を暇人みたいに言うな。第一俺が離れたら東北支部の方は・・・」

「東北支部なら。もう大丈夫だ。強力なオトロシを2体も倒し、その童子と姫も倒したんだから。あとはシユウキ一人で大丈夫だ」

「え、これから俺一人ですか？俺も関東から派遣されてきたんですが・・・」

「お前の親父からしばらく預かってくれていわれておるからの」

「くうく、親父め」

そう言つて、悔しそうにするシユウキ。

「あの、それで麻帆良学園に派遣される事情は分かったんですが、なんで教師までしないといけないんですか？」

誠がある意味一番聞きたかつたことである。

「それは、実は三月から新しく新任の教師が入ってきての。誠君にはその補佐を頼みたいんじゃない」

「・・・あの、またまた話が見えなんです」

「まあ、いきなり言われたらそう思うじやろうな。理由は麻帆良学園に来てからでいいかの」

「そういう事だから、ヒビキ。すぐに荷物まとめて麻帆良学園に向かうんだ」

「え、ええ・・・わ、わかりました。ところで俺はいったい何の教師なんですか?」

「社会じゃな」

「社会ですか・・・」

まだ、納得していない部分はまだあるが、誠の麻帆良学園入りは決定したのだった。

ほぼ強引ではあるが・・・

「ちなみに、新任の教師はヒビキ君がよく知つとる人物じゃよ」

「俺が? (誰だろ)」

イギリス

メルディアナ魔法学校

「ネギ、本当に大丈夫なの? お姉ちゃん心配で、心配で・・・」

金髪の長髪の女性。彼女はネカネ・スプリングフィールド。

そして目の前にいる赤髪の10歳くらいの少年を心配な目で見つめる。

「大丈夫だよお姉ちゃん。何とか頑張ってみるよ」

そう言つて、心配しないでという少年。

彼の名はネギ・スプリングフィールド。このメルディアナ魔法学校を10歳で卒業した天才少年だ。

そして偉大なる魔法使い《マギステル・マギ》を目指すためにネギに卒業の課題はなんと日本は麻帆良学園で

中学生の先生をすることなのだ。

「弱虫で泣き虫のネギにそんなの無理にきまつてるじゃない!! すぐに泣きついて帰ってくるわよ!!」

そう言つて、ネギを茶化すのは、同じくメルディアナ魔法学校を卒

業したアンナ・ココロファ（通称・アーニャ）である。

「大丈夫だよアーニャ!!それに僕は泣き虫でもないよ!!」

「何よネギのくせに生意気よ!!」

「まあまあ、落ち着いて二人とも。でも日本なんて遠い国には・・・」

そう言つて、二人をなだめるネカネ。

でも、心配なのは変わりない。

「大丈夫だよ。それに日本にはあの人がいるから・・・」

そう言つてネギは自分の腰にぶら下げている茶色を基調とし、先端には青い鬼のような石がある太鼓の撥《音撃棒》を握り占める。

「誠お兄ちゃん・・・・・・・・・・」

物語は今、響き始める・・・・・・・・・・

第一章 《学園生活編》

第二ノ巻 《驕れる魔法使い》

3月2日（日） 午前8：30

—麻帆良学園中央駅—

「ここが、麻帆良学園か・・・」

麻帆良学園中央駅から出てきた誠。

今日は日曜日ということもあり、いつもは雪崩のように学校に駆け込む学園の生徒は見られない。

誠は、つい3日前に決まった麻帆良学園で教師及び学園に現れる魔法魁を倒す警備員として、麻帆良学園の学園長直々にスカウトされ、日本でも屈指の大きさを誇る学園都市にやって来たのだ。

・・・ほぼ強引とも言えるスカウトだったが・・・
ぐうぐ

「ん、そういえば朝飯食べてなかったな」

腹の虫がなり、お腹に手を当てる誠。

東北支部をあとにし、一度関東支部に行った誠は、学園に向かうまでそこで寝泊まりをして、麻帆良学園に来た。朝も早くに出発し、電車の中で駅弁でも買って食べようと思っていたが、つい電車の中で寝てしまったので、結局何も食べない。

「どっかで、朝飯食べてから学園長にところに行くか」

そう言っ、誠は事前にもらっていた麻帆良学園の地図を見ながら、どこかで食事ができる場所がないか探索することにした。

「そういえば、シユウキが《超包子》っていう店に行ってみてとか言ってたな」

東北支部から関東支部に移動するときに、シユウキから

『超包子っていう、女子中学生がやってるめっちゃくちゃうまい中華屋台があるんだ。行ってみて損はしないぞ』

というっており、折角なので、行ってみる事にした。

しばらく歩いてみると、路面電車が止まっているのを見つけ、周りにはテーブルや机が並んでいた。

路面電車からは、香ばしい匂いがしてくる。

路面電車に《超包子》のネームが書かれていたため、ここがシユウキが言っていた店だと思った誠。

まだ、開店したばかりなのか、お客の姿はあまり見られない。すると、誠の方をポンと叩く者いた。

「お兄さんどうしたアル？ここに食事に来たアルカ？」

誠は振り返ると、褐色の肌をし明るいクリーム色の髪を特徴した中国系の少女だった。

「え、まあそうかな？少し朝食がてらに」

「そうだったアルカ！なら、今日のお客様第1号アル！」

そう行つて、少女は誠の腕を掴むとグイグイ店まで引つ張つていく。

「(この子、めちやくちや力強いな・・・)」

引つ張られながら誠は、少女を見る。

そうしてる内に屋台に到着し、背負っているリュックをおろし席につく。

「いらつしやいませ」

「いらつしやいヨ」

席に座るなり、少しぼつちやりした少女と黒髪で2つのお団子頭をした少女がいた。

誠も、女子中学生が経営しているのに半信半疑だったが、まさか本当だったのにちよつぴり驚いた。

「ご注文は何にするアルカ？」

先ほど自分を案内した少女がメニュー表を持ってきた。それを受け散ると中身を見る誠。

「じゃあ、肉まん2つとワンタンスープを」

「かしこまりました」

そう言つて、すぐさま蒸籠の中で蒸している肉まんを2つ取り出し、鍋で煮ていたワンタンスープを器に載せる。あつという間に、注文した料理が完成する。

「どうぞ、熱いので気をつけて下さい」

「ありがとう、パクツ・・・うまい・・・!!」

誠は肉まんを一口食べて、味の美味しさについてうまいと言う。少女の方も、嬉しいのかニコツと笑う。

「お兄さん、ここらへんでは見ない顔ネ？」

そう言つて、お団子頭の少女が話掛けてきた。

「ああ、今日はじめてここに来たからな。一樣明日からこの学園で教師をすることになってる」

1つ目の肉まんを食べ終わり、スープを飲む誠。

「そうだったんですか」

「この時期に赴任してくる先生なんて珍しいネ」

「まあ、普通そうだよな・・・」

内心やつぱりと思う誠。そして、2つめの肉まんを口にする誠。

「そういえば、君たちはここの生徒だろ？」

「そうアル！ワタシは女子中等部2年A組の古菲アル!!中国武術研究会の部長もしてるアルヨ!!」

そう言つて元気いっぱいに自己紹介する先ほどの褐色の肌の少女は古菲と名のる。

「古菲か。俺は新藤 誠。担当教科はおそらく社会科になるはずだからその時よろしく」

そう言つて、手をだし、握手をしようとする誠。古菲もためらいなく手を握る。

「(ムムム、この人凄い握力アル!?手を握っただけでわかるアル)」

「(とても、女子の手と思えないな。そういえば中国武術の部に入ってるって言ってたな)」

お互い握手しただけで力量を図る二人。

「あの私、四葉五月といます。部活はお料理研究会に入ってます」
ぽつちやりした少女は四葉五月と名乗る。

「ワタシは超鈴音。部活は色々入ってるから、紹介しきれないヨ。よろしくネ《新藤先生》」

そして最後に、お団子頭の少女は超 鈴音と名乗る。
余談ではあるが、彼女は《麻帆良の頭脳》と言われるほどの超天才少女なのだ。

「先生って、まだ正式になってないから、少し照れるな」

そう言って、少しうれしいと思う誠。

肉まんも食べ、最後に残っていたワントンスープも食べ終える。

代金を取り出し、超に渡す。

「ごちそう様。とてもおいしかった」

「ありがとうございます♪」

「じゃあ、俺は行くよ。三人とも体に気を付けてな。また食べにくるよ」

リュックを背負い、学園の方に歩いていく誠。

その後ろ姿を見る古菲と超。

「あの人は、ただ者じゃなかつたアル。今度、もしあつたら時は是非勝負を申し込むアルヨ」

拳を握りしめ、武闘家としての血が騒ぐ古菲。

しかし、超は真剣に誠の後ろ姿を見つめる。

「確かにあの人は……只者じゃないヨ……」

「?超どうしたアルカ?」

「!?いや何もないヨ。それより、次のお客様が来てるアルヨ!!」

「ホントアル!!」

そう言って、次のお客様が来たのを確認し、向かっていった。

これが、新藤 誠と超 鈴音、古菲、四葉五月の初の出会いだった。

第二ノ卷 《驕れる魔法使い》

麻帆良学園 学園長室 午前11:30

「どういう事ですか学園長!!」

バンツと、机をたたき、納得の表情をしている褐色にメガネをしている男性『ガンドルフイーニ』。

ここ、学園長室にはこの学園に所属する魔法先生、魔法生徒が全員とはいかないが、学園に主要な魔法使いが今日は似つ曜日だというのに集まっていた。

その理由は簡単。

学園長が督促の通達により『3月付けを持って、猛士より鬼をここ麻帆良学園に派遣することが決まった』という内容。

その内容に納得がいかない、《正義の魔法使い》なる魔法使い達が駆け付けたのだ。

「どうもこうも、すでに決まったことじゃガンドルフイーニ君」

席に着き、真剣な目で見つめる学園長。

しかし、納得のいかない顔をするガンドルフイーニはさらに食いつく。

「なぜ、よりによってあんな連中の手を借りるにです!!魔化魍など我らがー」

「そう言っておるが、魔化魍が発生してから一度も倒しておらぬではないか?この状態が続けがこちらの被害が増える一方じゃぞ」

「ぐつ、だとしても、鬼に頼るのは納得がいきません!!」

「そうです。なぜ学園長はあのような者たちに応援を求めめるのです!!」

ガンドルフィーニを擁護するように、学園に所属する教師・葛葉刀子が言う。彼女は魔法使いではなく京都神鳴流という、世に現れる妖魔を払う先頭集団の一人でもある。

「刀子君、彼らにしか対応できないから応援を頼んだんじゃ。いくら君が京都神鳴流といえ、魔化魍は妖魔ではないのは十分わかつたはずじゃろ」

「しかし!『コンコン』」

反論を述べようとした矢先に突然、扉をノックする音が聞こえる。

学園長は「誰じゃ?」という声

「新藤 誠です。ただいま到着しました。お取込み中ですか?」

ノックしたのは誠だった。

「おお、誠くんか、入ってよいぞ」

扉を開けて、学園長室に入る誠。

誠の登場に一齐に目を向ける魔法使いたち。

「お取込み中でした?人が結構いますが」

「なに、ちょうど君の話をしておた所じゃ」

「俺の?」

「なっ、まさか彼が!」

ガンドルフィーニが気づき、学園長に問いかける。

「そうじゃ、彼が猛士から派遣されてきた鬼・・・音撃戦士・響鬼じゃ」
「えっと、初めまして一様明日からになります、この魔化魍退治のために猛士総本部が来ました。新藤 誠です。鬼としてのコードネームは《響鬼》。明日から教師としても働くのでよろしくお願いします」

とりあえず、学園長から軽く紹介されたので、誠も続けて自己紹介をした。

そして学園長が補足のように付け加えた。

「それからの、誠くんには明日新任で入ってくるネギ・スプリングフィールドくんの補佐もしてもらおう。」

「「!?」」

「ネギ?」

ネギ・スプリングフィールドの名前を聞き、驚く顔をする誠。

「何を考えているのですか学園長!!あのサウザンドマスターの息子に、よりにもよって鬼をつけるなど!!」

「!!よりのもよってどういう意味だ!」

ガンドルフィーニの言葉を聞き、反論する誠。

「黙れ!!我らは《正義の魔法使い》だ。悪の象徴の一つである鬼の言葉など聞く耳はない!!そもそも君がここに来る必要はないのだよ!!魔法魔など妖怪、魔法の力を使い我々が倒す!!」

そう言つて、誠をにらみつけるガンドルフィーニ。他の魔法使い達も同様に誠に目を向ける。

「(今、反論しても聞き入れてはくれないな・・・)」

誠は呆れて、何も言わなかった。鬼を悪と決めつけ、自分たちを正義という連中には今言つても無駄だと感じた。まさか、ここまで自分たち鬼のことを目の敵してるとは思わなかった。

「口を慎めガンドルフィーニくん。先ほども言うたが、これはすでに決定したことじゃ。君たちがどういおうと決して覆りはせんのだ。今日はこれにて解散じゃ。彼の正式な通達はまだ後日に話す。以上じゃー!」

そう言つて、無理やり話を終わらせる学園長。集まった魔法使い達もしぶしぶ納得しない表情ではあったが、学園長室から退室して行った。

ようやく二人きりになり、学園長が謝罪の言葉を述べる。

「すまんの誠くん。せつかく来てもらったのにの」

学園長は申し訳なさそうな顔をする。

「いいですよ。大方予想はしてたんですけど。まさか、あそこまでとは思ってなかっただけですよ。これから大変なことになりそうなのはよくわかりましたけど・・・」

先ほど、会話からこれはそうそう彼らとの溝を埋めるには難しいと考える誠。

すると、誠は学園長が言っていたことを思い出す。

「そういえば、本当なんですかネギがこの学校に教師として入るって？」

「本当のことじゃよ。向こうの魔法学校を卒業しての、《立派な魔法使い》になるための課題が日本の学校で先生をするというのじゃ」

「なんで、先生が課題なのかは疑問ですけど、ネギは確かまだ10歳くらいじゃなかったですか？労働基準法とか・・・」

「ふおふおふお、なあに、そこは心配せんでいい。ここは麻帆良学園じゃからの。誠くんも実際に教師にはなれんはずじゃろ」

反目をみせながら、いじわるそうに見る学園長。そうここは麻帆良学園。魔法使いが住んでいるのだ、子供が教師になるのは、魔法でなんとかするからだろうと思っただ誠。

「まあ、それはそうですね・・・魔法って便利ですね」

「まあの、ふおつふおつふおつ」

「ああ、それで補佐って何をするんですか？」

「うん、ネギくんには女子中等部2年A組の担任をしてもらうつもりじゃ。そして誠くんにはその副担任として入ってもらおうからの」

「ふ、副担任!？」

まさか、自分がいきなり副担任をするとは思わず驚く誠。しかも女子中等部に・・・。

「あれ、2年A組ってたしか、今朝あったあの子たちのクラスだったよな・・・」

今朝、超包子で肉まんを食べていた時にあった3人の少女たちが確か2年A組だと言っていたのを思い出す。

「そうじゃ、その方がサポートしやすいと思つての」

「・・・わかりました。なんとかやってみます。しかし、緊急時は外

部に出る場合もありますが」

「その辺は承知しておる。緊急時は遠慮なく向かってくれ。色々迷惑をかけるがのすまんの」

「いや、いいですよ。．．それより魔化魍の動きを知りたいんですけど」

誠がこの学園に来た本当の目的でもある魔化魍退治の話を出す。

「ふむ、魔化魍発生については最近では活動している話は聞かんのお。じゃが、決まって現れる場所はわかっておる。ここより西にある森の中じゃ。確認しておる魔化魍はクモ型、アリ型の奴じゃ」

「ツチグモとオオアリですね。さっそく、その発生場所に行ってみます」

「そうかの。誰か一緒に生かせようか？」

「いや、発生場所を確認するんで、地図があれば大丈夫ですよ」

「わかった。おお、それと君が今日から住む場所のカギを渡しておこう」

机の引き出しから、カギを取り出し誠に渡した。

それと、魔化魍の発生場所と誠が住む場所を記し地図を受け取る。

「それでは、誠くん。明日から色々大変じゃと思うがよろしく頼むの」「わかりました」

誠はそう言って、学園長室を後にした。

「(ネギ、お前とまた会えるなんてな．．．)」

廊下を歩き、ネギとの再会を楽しみする誠だった。

「．．．．」

その中、誠を見つめる2人の影。

「マスター、彼が？」

耳に不思議な突起物がつき緑色の髪をした少女。彼女は絡繰茶々丸。実は彼女は魔法と科学が融合して作られたガイノイドだ。

「ああ、間違いないだろう。ジジイがわざわざ呼び寄せた奴だから、どんなのかと思ったがただの優男だな」

そして、もう一人『マスター』と呼ばれた人物。彼女の名前は《エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル》。

金髪できれいな長髪の見た目は10歳にしか見えないが、なんと彼女は吸血鬼であり「闇ダーク・エウの福アンシ、エル音トールマスタ」「人形使いマカ、ノスフエラトウ」「不死の魔法使い」「悪おとずれしき音信かいん」「禍音かいんの使徒」「童姿の闇の魔王」など様々な異名を持つ人物であり、魔法界では懸賞金600万ドルもかけられている。すでに600年は生きている歴戦の魔法使いだ。

もちろん彼女のところにも連絡は入っていた。

そして、どんな人物なのかを見るためにわざわざ学校まできたのだ。

今後、自分の障害になるのかどうかを・・・

「まあい。どのみち明日にはあのナギの息子が来る。そいつの血を頂き、この馬鹿げた呪いから解放されれば、再び力が戻る。そしてこの私をなめ腐った鬼など、必ず死んだ方がマシという屈辱を味あわせてやる。その最初のターゲットは貴様だ。新藤誠!!」

恨みがましい目で誠を見つめるエヴァンジェリン。

着いたそうそう、一番やばい人物にターゲットにされてしまう誠。

一体、彼女と鬼の間に何があったのだろうか・・・

第三ノ卷 《再会》

三年前 長野県下高井郡 《志賀高原》

「なあ、明日菜。スキーのコースから大分外れとるんやない？」
「だ、大丈夫よ!!もうコースが近くのはずだから!」

一面に白銀の雪景色が見える、ここ長野県は志賀高原。

冬季長野オリンピックの会場でもあったことある場所であり
スキー場として有名な所でもある。

そして、この雪景色のなかスキー板で滑りながら木の谷間を抜ける
二人の女の子の姿があった。

「それさつきも聞いたで明日菜」

「うっ、そうだったっけ?」

おっとりとした京都弁をしゃべる少女。名前は近衛木乃香。苗字
でわかるかもしれないが、実は彼女。あのようか・・・ではなく、ぬら
りひよ・・・でもなく、麻帆良学園の学園長 近衛近右衛門の孫なのだ。
そして、もう一人、木乃香の前を滑る少女。オッドアイが特徴の名
前は神楽坂明日菜。近衛木乃香とは親友同士の間柄だ。

なぜ、彼女たちがこんな人気もない場所を滑っているのかは・・・

「明日菜が近道やからって、こないな道滑るから・・・」

「ちよっと、木乃香だって行こうって言ったじゃない!」

「そやけど・・・」

彼女たちは今、小学校の修学旅行で長野県に訪れていた。

志賀高原にてスキー教室のさなか、終了時間が近くなり宿泊してい
るホテルに戻ろうとした時に、明日菜が近道して帰ろうと言い出し、
地図で見つけた近道をした結果、迷子になってしまい、現在に至る。
「ん?誰かいるわよ?ちよっと見てくる!!」

「あ、明日菜!」

明日菜が前方に木の近くに人影があるのに気付く。内心ラッキー
と思い、このまま迷子で遭難になったら本当にやばいと思っていた。
しかし、彼女は知らなかった・・・

それは、人ではなく………

「にやおおおお……」

「……え？きやああああああああ!!」

猫の頭をした等身大のバケモノがそこにいた。明日菜はいきなり現れた異形の生物に驚き、腰が抜けてしまう。そして、何よりそのバケモノの近くには無残に食い散らかした鹿の死骸があった。

木乃香も明日菜の悲鳴を聞いてその場に近づく。

「どないしたん明日……菜……」

明日菜と同様に、バケモノに驚く木乃香。

このバケモノが魔化魍《バケネコ》などとは彼女たちは知る由もない。

「にやああ!!」

バケネコは腰が抜けて座り込んでいる明日菜の目もくれず、まっすぐ木乃香の方に走り出していく。

「!木乃香逃げて!!」

木乃香に逃げろと叫ぶ明日菜。

しかし、木乃香はいきなりの事態に足がすくんで動けなかった。

「(だ、誰か助けて!!)」

目をギュツと閉じて、心の中で助けを求める。

今まさにバケネコの鋭い爪が木乃香を引き裂こうとしていた。

その時

「でりやああああああああああああ!!」

「ぐにやあ!!」

誰かの声が聞こえてきて、バケネコが悲鳴を上げてふっとばされるのが見えた。

「早くここから離れろ!!」

誰かが助けにに来てくれた。

明日菜は助けてくれた人物を見る。

その時、明日菜は驚いた。なぜなら突然現れた人物の姿は頭からは二本の角があり、紫を基調とした鎧を身にまとっているのは……

人の姿ではなく・・・

「鬼・・・？」

これが、神楽坂明日菜と近衛木乃香の鬼との出会いだった。

「!?」

突然、目を覚まし布団から体を起こす明日菜。

カーテンからは朝日が入り込んでいる。時計を見れば、ただいま朝の7:00ちょうど。本来なら、もっと早く起きてバイトの新聞の朝刊配りをするのだが、今日は休み。いつもよりはぐっすり眠っていたのだが・・・

「あれ、明日菜起きたん? ちょうど今朝ごはんできたから、起こそうと思ったんよ」

台所からお盆に朝食を載せて歩いてくる寮のルームメイトである木乃香だった。

「あ、うん。なんか、目がさめちゃって」

「ふくん。それなら顔洗ってきい」

「うん、そうする」

そういうと明日菜は洗面所の方に行った。

「あんな夢みるなんて・・・そういえば、あれから3年になるのか。あの人に会ってから」

洗面所に付き、顔を洗いながら先ほどの夢の事を思い出していた。だが、明日菜は決して忘れてはいない。

あの日の事は・・・

その後、朝食をとり学校に向かうために木乃香と一緒に寮をあとにしたのだった――

麻帆良学園中央駅前

「時間はまもなく生徒たちの登校時間。

今は人つ子一人見当たらないこの駅前に、もうすぐ雪崩のように人が湧いて出る。

ホームに長い列の電車が入り、電車のドアが開く。
すると・・・

「！！！！・・・わああああああっ！！！！！！」

ものすごい人数の学生が雪崩のようにホームに押しかけてくる。

日本でも有数のマンモス校の麻帆良学園。その名にふさわしく半端ない数の学生である。

それが、今一斉に校舎目指して駆け出しているのである。
まさにその光景は雪崩のようである。

その雪崩のような人混みの中に小さな影がポツリと現れた。

顔には小さなメガネをかけ、ローブのようなものを纏っている。そして、自分の背丈ほどもある長い杖を背負っていた。見た目は10歳程の赤髪の少年である。

彼の名前はネギ・スプリングフィールドである。

イギリスはウェールズの魔法学校を主席で卒業した天才少年で、魔法使いである。

彼は先ほどまで女子学生で満杯の車両の中にいたからか、少しお疲れ気味の様子だった。

「ふう、やっとついた。日本の女性であんなに元気一杯なんだな．．．
思ってたのと大分違ったけど」

恐らく彼が思ってたのは大和撫子やおしとやかな女性をイメージしたのだろう。

「わっ、もうこんな時間?! 赴任一日目で遅刻はまずいよ．．．」

時計を見て、ここの学園長との待ち合わせ時間が迫っているのを見て、慌てて駆け出すネギ。

ちなみに今の彼は魔法を使っていない。魔法で肉体を強化し脚力を上げるとは可能だ。しかし、ネギはしていない。普通に走った方が肉体面でいい運動になるし、何より体が鍛えられる。魔法を使って肉体を強化しても体力や筋力はあがらないからだ。だから、極力魔法は使いたくないのだ。

そんなお陰で、今のネギはそこれへんにいる10歳時よりかは、遙かに体力や筋力がある。

そうしていく内に、ネギより先に向かっていた学園の生徒たちをどんどん抜いていく。

すると、前方を走っている髪をツインテールにし、鈴の髪飾りをつけた少女を見て、ネギがあることに気づき

ツインテールの少女の隣に並んだ。

少女も気づき

「えっ」

と声をかける。

そこでネギは彼女の顔を見て何かに気がついた。
「あの人、あなた・・・失恋の相が出てますよ?」

先ほど朝食を食べ終え、電車から降りた神楽坂明日菜は近衛木乃香とともに登校していた。

「アスナはあい変わらず足速いなくウチはこれ履いてるゆうに〜」

そう言いながら自分の靴・・・ローラースケートを指さす木乃香。

「悪かったわね相変わらずで!!・・・それにしても、なんであんたが新任の教師の迎えなんてやるのよ?」

「なんや、ようわからんのやけどな。さつき、おじいちゃんから電話でいきなりいわれてな。しかも二人も来るんやて」

「フン。これ以上教師なんていらないわよ。私は高畑先生がいればそれでいいんだから!!」

「アスナの高畑先生好きは相変わらずやなあ・そんなに好きなら告白すればええのに」

「こ、告白って・・・そ、そんなのできないわよ・・・こ、心の準備とか・・・そ、それに私・・・」

途端に顔を赤らめ、モジモジしだす明日菜。

「あはははくやつぱりアスナはからかい甲斐があつてええわく」
「なっ!?ちよ、木乃香、待ちなさいよ!!」

逃げるように先に行く木乃香を顔を真赤にしながら追いかける明日菜。

普段ならここまででは彼女たちにとってはいつもの光景なのだが、今日だけは違った。

明日菜はふと隣に誰かが並んでいることに気づいた。
隣を見ると、どうしたわけか小学生くらいの男の子が隣を併走している

「え?」

疑問に思う明日菜。なんでこんなところに子供が?
と思った矢先……

「あのく、あなた……失恋の相が出てますよ?」
いきなりの失言に込み上げてくる激しい怒り……

「ぬあんですつてく!?このガキいいいいいいいい!!」

そこには怒りの形相の明日菜の顔が。

「えっ!?……あつ、ぐ、ごめんなさい!!悪気はないんです。ついうっかり言ってしまっただけで!!」

その場で必死に謝り出す少年。本人はこれでも真剣である。

しかし、それが余計にわざとらしく見えたのか結果として彼女の怒りをただ煽らせるだけとなった。

「ガキのくせに人様になんてこと言ってくるのよ!!覚悟はできてるんでしょうね?」

「あ、アスナ・・・相手は子供やえ？」

「うっさいわね!!木乃香は黙っててちようだい!!こんなガキに乙女
の心を愚弄されたかと思うと、怒りが収まらないわよ!!」

「(あ、明日菜が乙女?)」

今の木乃香から見れば、明日菜は乙女なんかではなく、般若にしか
見えなかった。

そのまま明日菜は少年の頭をガシツと掴み持ち上げる。

「さあ、覚悟はいいかしら!!」

「え、うわああああああ!!(こ、この人すごい力だ。でも僕だつて
!!)」

そう思うと、ガシツと明日菜の手を掴み引き剥がそうとするネギ。

「(な、なんなのよ、このガキ・・・メチャクチャ力強いじゃない!?が、
ガキなんか・・・!!)」

顔を歪めてネギの逆襲に抵抗する明日菜。

「んぐぐぐ!!」

「こ、このガキいい!!」

必死に抵抗しながらうめき声を上げる二人。一体どすればいいの
だろうと、オロオロする木乃香。

すると、

「おっく!!そこで何をしているんだ、君たち?」

上からの声にビクツと反応する3人。

声が出た方を見ると、白髪の男が微笑みかけていた。

「た、高畑先生・・・」

ネギの頭を掴んでいた手をパツと離す。ネギも突然、放されて「あ
いた!?!」と言って、尻餅をつく。

明日菜が呆然と先ほど声をかけた弾性の方を見る。

白のスーツを着用し、トレードマークの眼鏡と無精髭の男性。彼の
名は高畑・T・タカミチ。

学園広域指導員でもあり、たった一人で幾多の抗争を鎮圧している

為、学園の不良からは

「死デスマスの眼鏡」「笑う死神」とも呼ばれ、恐れられている。

「高畑先生、なんでここに・・・」

「ああ、もうすぐ新任の先生が来るから挨拶にと思ってね・・・」

すると、尻餅を付いているネギに向き直り、

「久しぶりだね、ネギくん」

「いたた・・・え、タカミチ!!」

まさかの二人が知り合いなことに驚く明日菜たち。

「へ？あ、あの高畑先生、そのくそガキ・・・じゃなかった、その子と知り合いなんですか?」

「ん?ああそうだよ。この子とは昔からの知り合いでね。この学校に今日から赴任することになったのさ」

「も、もしかして・・・新任の教師って・・・」

すると、ネギはおしりを手で汚れを払い明日菜たちに向き直り挨拶する。

「申し遅れました。えくと・・・今日からここに教師として着任することになりました、ネギ・スプリングフィールドと申します」

「えええええっ!?!」

少女たちの絶叫が学園に響く。

「ハハハ・・・無理もないね。こんな小さい子が先生だもんな」

「ど、どういうことなんですか!?!こ、こんなガキんちよが先生なんて・・・」

あまりの驚愕な事実について口調が戻る明日菜。

「うくん、それは僕の口からは何ともいえないなあ」

「ほんまにこの子が先生なんですか?」

木乃香も明日菜程ではないが、驚く。

「本当だよ、ネギくんは、こう見えても大学程度の語学力はあるんだから」

「でも、そんなので先生なんて信じられません!!だって、どう見てもガキンチョなんですよ!!」

「ガキンチョじゃありません!!人を見た目だけで判断しないで下さい!!」

ガキンチョ呼ばわりされて怒るネギ。

しかし、今の明日菜には火に油を注ぐだけであり・・・

「うるさくいい、あんたは黙ってなさいよ!!」

そう言つて再びネギの頭をつかみ上げる明日菜。

しかし・・・

「(ま、まずい、くしやみが・・・)ふえ、ふえつくしよん!!!」

ビリビリッ!!

突然、ネギがくしやみをするとう明日菜の制服が破けてしまう。

突然のことに目をポカんとする明日菜。

そして、廻りを見渡す明日菜。

顔を赤らめて、見ないようにしているタカミチ。

苦笑いする木乃香。

手から解放されて、目の前で申し訳なさそうに顔を赤らめるネギ。

ようやく、自分の状況を理解する明日菜・・・

「い、い、いやあああああああああああああああああああ!!!?／／／

おそらく、今日一番の声が学園に響いた。

そして、ちょうどその頃・・・

「なんか、今すごい悲鳴が聞こえたな・・・」

黒いスーツを着用し、赤を基調としたネクタイをつけて学園に向かっていたのは音撃戦士・響鬼こと新藤誠だった。

誠もまた、今日から教師として勤務するので、学園長から支給されたスーツを着用して出勤していた。

ちなみ彼の家は郊外にある一階建ての和風的な一軒家で、なかなか立派な建物だ。

しかし、あんまり広すぎて使っていない部屋がかなりある。

「やっぱりバイク持ってくればよかったな」

猛士から支給されているバイクは現在修理中であるため。麻帆良学園には持ってきてはいない。

そう愚痴りながらも、歩いて学園に向かう誠だった。

麻帆良学園 学園長室

「長旅ご苦労じゃったのネギくん。修行の内容については大方向こちらの校長先生から聞いておるよ。来たばかりで慣れないこともあるだろうが頑張るんじやよ」

「は、はい。よろしくお願いします。学園長先生」

とりあえず、学園長に挨拶を終えてホッとするネギ。

「ちよつと待ってください。こいつが先生ってどういうことなんですか!?!納得できません。」

机をバンつと叩いて抗議する明日菜。

ちなみに現在彼女は冬服の体操服を着用している。

「フオッフオッフオッフオ。そうカリカリするでないぞ、アスナちゃんや。これはすでに決まったことでの、変更はできんのじゃよ」

「で、でも・・・こんな子供が先生をやるなんて・・・?」

それでも納得できない明日菜。

すると学園長から驚愕の発言が・・・

「ああそうそう。ネギ君のクラスは2年A組を担当してもらうことにしたからの」

「えええっ?!?そ、それホントなんですか?!?!?つい先週まで高畑先生が担任だったのに!!」

「あ、アスナく落ち着いてくな!!」

ますます荒れ狂う明日菜を木乃香が必死で諫める。

「ハハハ、ごめんよ明日菜くん。そういうえば、学園長先生。彼の姿がみえないんですが?」

タカミチがキョロキョロしながら学園長に聞く。

「おお、今しずな先生が連れてきておる所じやよ」

「?タカミチ、僕以外にも誰か新しく入るの?」

ネギが彼と呼ばれる人物に心当たりがない為、タカミチに聞く。

「うん、もう一人臨時でね。しかも、ネギくんがよく知ってる人だよ」

「僕が?（一体誰だろ・・・）」

「た、高畑先生!!こいつが知ってるって、まさかまた子供とかじゃ・・・ネギがよく知ってる人と聞き、また子供先生なのではと警戒する明日菜。

曰菜。

「いあや、違うよ明日菜くん。彼は『コンコン』・・・ん?」

扉から誰かがノックをしてくる学園長は「誰じゃ?」と言い。

『源しずなです。新藤くんをお連れしました』

「おお、入りなさい」

そう言っつて、中に入るように言う学園長。

扉が開き、入ってきたのは大人の女性で魅力ある身体をもつ女性《源しずな》。学園の英語科の教員をしている。

そして、もう一人の姿を見て、ネギは驚く。

「(あの人は・・・まさか!)」

見間違えるはずがない。

彼は、自分にとつて兄のような存在でもあった人物。

「遅れてすいません学園長。新藤 誠、今日から教員として頑張らせて貰います」

「うむ、今日からよろしくの誠くん」

「久しぶりだね誠くん、2年ぶりかな?」

「もう3年になるよ、タカミチ。そして・・・」

タカミチと学園長と軽く挨拶をすませ、今だに驚いているネギの前に来る。

「久しぶりだなネギ」

優しく笑みを浮かべる誠。

「うん、そうだね誠お兄ちゃん・・・」

そう言つて、うつすら涙を浮かべて、実に4年ぶりの再会をする誠とネギ。

「ネギくん、知つてると思うが今日から2年A組の副担任を務める新藤 誠くんじゃ。明日菜くん、木乃香もよろしく頼むの」

「え、はい・・・」

「う、うん・・・」

学園長から話かけられて、少し覚束ない二人。

「ん?彼女たちは・・・」

誠は明日菜たちを見る。

「彼女たちは君とネギくんが受け持つ2年A組の生徒だよ」

「そうなのか・・・えっと、多分教室のほうでも自己紹介があると思うけど2年A組の副担任をすることになった新藤 誠だ。これから色々あると思うけど、よろしくな!」

明日菜と木乃香に挨拶する誠。

「ど、どうも・・・」

「よろしくお願ひします・・・」

なぜか、ぎこちなく挨拶する二人。

「あの学園長。私たちそろそろ教室に戻ります」

「うむ、そうか。ではまたの明日菜くん、木乃香」

「はい、失礼しました。」

「じゃあね、おじいちゃん」

そそくさと学園長室を去っていく明日菜と木乃香。

「なんか、そっけないような・・・」

「いや、僕よりはマシだと思うよお兄ちゃん」

ちよっぴり二人の対応にシヨツクを受ける誠。

それをなだめるネギ。

「それじゃ、二人ともそろそろ一限目が始まる時間じゃ。教室の方に。しずな先生案内を」

「わかりました。それじゃ二人ともいきましようか?」

「はい!!」

「わかりました。あ、あとネギ、みんなの前で、さっきの呼び方なしな、ネギ先生?」

「うん、わかったお兄ち・・・じゃなかった。わかりました誠先生」

「敬語まではいらないぞ」

そう言っしてしずなとネギ、誠は学園長室を退出していく。

残された学園長とタカミチは・・・

「まさか、誠くんが来るとは思ってませんでした。話を聞いたときはさすがに驚きましたよ」

「まあ、俺も猛士総本部に大分頼み込んで、立花くんに仲介してもらってなんとか了解を得たからの。どうしても彼の力が必要なんじゃない」

「今この学園にいる魔化魍たちからですか・・・」

「確かにそうじゃが、彼を呼んだには他にも理由がある」

「他の理由? まあ、確かに彼でなくても鬼は他にもいるわけですから・・・」

顎に手をあてて考えるタカミチ。よく考えれば、誠以外にも鬼はいる、なぜ誠でなければならぬのか

「俺は、これからは、いやこれまでがそうしなければならなかったの

じやが鬼と魔法使いと溝を取り払い共に戦っていきたいと考えておる。しかし、魔法使いの中にはどうしても彼らを敵視する者がいる」昨日のガンドルフイーニ先生たちの事を思い出す。この学園だけでもかなりの魔法使いたちが鬼に対して偏見をもっている者達がいる。

「儂が誠くんを態々呼び寄せたのも、彼がそう言った危険な思想を持つものを正してほしいと思ったからじゃ。情けない話じゃが、儂ももう手に負えない事態になっておる。それだけの力を彼は持つておる」

「誠くんには少し荷が重いんじゃないんですか？ネギくんのこともありますし」

「ネギくんにも色々迷惑がかかるじやろう。父親が英雄ならの・・・とまあかくじや、儂は彼に賭けることにした。誠くんには儂の勝手な願いを押し付けて悪いと思つておるがの」

「誠くんは薄々気づいてるんじゃないですか。相当頭が切れますから」

「そうじやといいんじゃないかな・・・なんせ彼は『鬼神』と呼ばれておるから程の男じやからの・・・」

窓から外を眺めながら、思う学園長であった。

はたして『鬼神』とはなんのか・・・

その頃、誠たちより先に出て教室を目指していた明日菜と木乃香。

「なあ明日菜、あの新しい先生なんやけど・・・」

「何よ木乃香、私はまだあんなガキンチョが先生なんて認めてないわ

よ!!私の制服を破いたんだから!!」

「いや、ネギくんのことなんやけど、新藤 誠先生や」

「・・・そうよね、木乃香も思ってるんでしょ?あのひとが・・・」

《響鬼》さんじゃないかって?」

木乃香の疑問に答える明日菜。

なぜ、彼女たちが響鬼の名を知っているのか?

第四ノ巻《2年A組》

麻帆良学園女子中等部2年A組の教室

「ねえねえ、このクラスに新しい担任の先生が来るらしいよ!!」
「えー、ほんとに?」

賑やかな声が聞こえるここ女子中等部2年A組も教室。さっそく今日の一番の話題の新任の先生の話を持ち出す

椎名桜子と、その話を疑う柿崎美沙。

「本当だよ。ねえ朝倉?」

桜子の質問され、振り返る少女。名前は朝倉和美。別名『麻帆良のパパラッチ』と呼ばれている。

「新任の先生の話は本当だよ。しかも二人も入ってくるって話」

「二人?じゃあ、担任と副担任ってこと?」

「そうなるかな」

「男の人かな、カッコいいひとだといいな」

「以外にオカマだったりして」

「ええ、それ嫌だよ」

色々な意見が飛び交う中、ニシシシと笑いながら教壇の近くで新任の先生に罍を仕掛けているのが者が数名。

「新任の先生が二人だと二重にトラップしけるのは間に合わないね」

「しようがないよ、最初に入ってくる先生にかけようよ」

「そうするです」

着々と罍の準備を進めていてのは、春日美空、双子姉妹の鳴滝風香に妹の史伽。この二人見た目はどう見ても小学生にしか見えないが、今はとりあえず言及しないでおう。

「何やってんだか・・・」

罍の仕掛けをしている三人を見ながら呆れる明日菜。

どんな先生が来るかわかってる明日菜。新藤誠はともかく、さすがの皆も10歳の子供が先生が担任とは思わないだろう。

そう考えてる内に始業ベルが鳴る。

みんなそれぞれ自分の座席に戻り、新しく来る先生を待っていた。

「へく、二人は昔から知り合いだったの」

時間は少し遡り、廊下を歩くしずな、誠、ネギは受け持つ2年Aは組の教室を目指していた。

途中で、しずなが「2人は知り合いだったの？」と質問する。

「はい、誠先生とは僕が6歳の時にウエルズで会ったんですよ」

「って言っても、初めて会ったのも最後に会ったのもその時だけなんですけどね」

「あら、そうなの。でも新藤先生はどうしてウエルズに？」

「旅行ですよ、その時にウエルズに言ってネギ先生に会ったんですよ（・・・本当は違うんだけどな）」

本当の事を言うわけにも行かず、しずなには嘘を言つてごまかす誠。

そして、いよいよ教室の前についた三人。

ちやうど始業ベルも鳴り響く。

「（いよいよか、緊張するな・・・）」

「ネギ先生、そんなに緊張しないでリラックス、リラックス。ほら新藤先生も顔が引きつってますよ」

いざ教室の前について、緊張するネギに声を賭けるしずな。そして、同じく緊張か顔をこわばらせている誠にも顔を向けて心配する。

「す、すいません。今から先生をやるって思うとつい・・・」

若干冷や汗を流しながら、表情を堅くする誠。そもそも先生という仕事すらしたこともない誠はどうやって行けばいいんだと、今更ながら思う。なんで先生なんか採用したんだと学園長に文句が言いたくなる誠。まあ、それを了承してしまった誠が言つても意味はないが・・・

「これから、生徒たちと一緒に学んでいけばいいですよ。ネギ先生

と一緒にね。さあ、生徒たちを待たせてるから、入りましょ」

「はい」

そう言つて、ネギは教室の扉を引く。すると、頭上から白い粉が大量についた黒板消しが落ちてきた。

中の生徒も気づき、ニヤニヤしながら頭に黒板消しが落ちるのを予想した。

「あ、ラステル……」

しかし、ネギは黒板消しに気づきつい以小言で反射的に呪文を唱えてしまう。

「(ちよ、おい!?)」

いきなり、呪文を唱え始めたネギに驚き黒板消しを素早くキャッチする誠。

ネギもしまったと思い、あわてて前に歩くが今度は張つてあつた紐に足が絡まり、そのまま前方にあるバケツに頭を突つ込み転がつていく。

「うわあああ『ゴツツ!』あぐつ!!」

そして、最後に教卓にぶつかり尻に吸盤がついた矢が刺さる。

「『キヤハハハハハ!!……あれ……?』」

それを見ていた生徒たちは大成功の声と共に、笑い声が聞こえる。しかし、よく見ればトラップに引つかかったのは子供ではないか。

さすがにマズイと思い、風香と美空が慌てて向かい、

「ごめん、てつきり新任の先生かと!」

「僕、大丈夫?」

クラスの皆も前に行き、トラップに引つかかったネギを心配する。

「でもなんで、子供が?」

「もしかして、初等部と間違えたとか?」

「それにしては初等部の制服着てないよ」

そして、今度はなぜこんな子供がこんな所にと疑問の声が上がる。

様々な憶測が飛び交う中、見かねたしずなが

「はいはい、皆さん。その人は今日からこのクラスの担任になる先生なんですよ」

「「「え?」」」

皆、眼を点にしてしずなが言った言葉を聞く。

ネギはそんな皆を尻目に立ち上がり、自己紹介をする。

「えっと、今日から三学期の間だけですけどこのクラスの担任をすることになりましたネギ・スプリングフィールドです。担当は英語になります。よろしく願います!」

そう言うとお辞儀をするネギ。

しかし、今だにシーンとしているクラスにネギが心配して、

「あの・・・」

と言った瞬間・・・

「「「キヤアアア、カワイイイ!!」」」

その言葉と共に一斉にネギに飛びつく生徒たち。

「ホントに君先生なの!?!」

「君いくつ?」

「どこから来たの?何人?」

「ええつと・・・」

一斉に質問されて、混乱するネギ。

「皆さん、少し落ち着きなさい。ネギ先生もそうですけど、もう一人新任の先生がいるんですよ!」

「「「あ・・・」」」

見かねたしずなが皆を落ち着かせて、もう一人の新任である誠を紹介する。

生徒たちもしずなの方を向く。

「あははは、えつとネギ先生と同じくこのクラスの副担任をすることになった、名前は新藤 誠つて言います。同じく3学期の間になるけど、よろしく願います!」

苦笑いしながらも、しずなの前に出てみんなに挨拶をする。

生徒たちもそれを聞いた瞬間に笑顔になり

「「「カッコイイいい!!」」」

突然の喜びの声。

「オカマやおっさんじゃない!!」

「めちやくちや若い!!」

「顔もイケメンだし!!」

「(イケマン?マジでか・・・それにオカマにおっさん!?どんなイメージされてたんだ・・・)」

イケメンと言われ、ちよつり嬉しく思う。

しかし自分の事が変なイメージされていたのに、内心複雑な思いになる。

「しずな先生。ホントにこの二人が私たちの先生になるんですか!!」

「こんなにかわいい子貰ってもいいんですか?」

「こちら、あげたわけじゃなんですよ。二人ともまだ先生になって日は浅いんですから、皆さんいじめないで上げてくださいね」

「はあくい!!!」

しずなの言葉に、元気よく答える。

「(僕、今日からこのクラスの先生なんでよね)」

「(これじゃあ、新任の先生っていうより転校生みたいだな・・・)」
クラスのテンションに、若干振り回されるネギと誠。

しかし、決して悪い印象ではなかったので、人まず安心する二人。

そんな中、二人を見つめている生徒たちがいた。

「(ふん、ついに来たなネギ・スプリングフィールド・・・)」

ネギを見つめるエヴァンジェリン。

「(あいつ、今絶対何かしようとしてたわよね)」

先ほどのネギの起こそうとした行動に疑問を持つ明日菜。

「刹那、あの先生たちが学園長が言っていた・・・」

「ああ、魔法先生と派遣されてきた音撃戦士・・・鬼だ」

褐色の肌をした長身の少女、名前は龍宮 真名。そして、髪をサイドテールにまとめた刹那と呼ばれた少女。

名前は桜咲 刹那。二人とも学園の魔法関係者であり、学園の警備の担当もしている。

最も、刹那は別の護衛任務があるのだが。

こうして、ネギと誠の新任挨拶は無事(?)に終わったのだった。

「やっと、終わったなネギ」

「うん、なんとか・・・」

自分たちの机の椅子に座っているネギと誠。二人の表情には若干疲れが見える。

「やあ、二人とも、どうだった初日は？」

誠の隣の席に座ったのは、タカミチだった。

「日本の女子中学生ってあんなにパワフルなんて知らなかったよ・・・1限目の英語なんて・・・」

顔をうつむかせるネギ。

あの顔合わせをした後、1限目はいきなりネギの担当の英語の授業だった。

しかし、その時に神楽坂明日菜とのいざこざがあり、あろうことかもたまたまや武装解除の呪文が暴発してしまい

明日菜はクラスメイトの前であられもない姿をさらしてしまう。

その事があり、明日菜から怒りを勝ちしてしまう。

「ははは、それは災難だったね。ああ、そうだ二人にこれを渡しておくよ」

そう言うときタカミチは、ある物を二人に渡す。

「クラス名簿か」

受けとったのは、2年A組のクラス名簿だった。

「これがあればクラスの顔を覚えるのが早いだろ。あと僕が書いたコメントがあるから見ておいた方がいいよ」

「ありがとうタカミチ」

「これがあればすぐにクラスの皆の顔、覚えられるな」

タカミチに礼を言う二人。

「じゃあ、僕はこのあと用事があるから。二人ともまた後でな」

そう言って、タカミチは職員室をあとにする。

「また後でって、このあとタカミチと会う用事と会う事会ったっけ？」

「うーん、どうだろう・・・」

タカミチとこの後で会う約束をした覚えがなく、疑問に思う二人。「そういえば、今日は色々あって聞けなかったけど、どうして麻帆良学園に？僕をサポートするためだけじゃないよね」

ここでネギは誠に、なんで先生になった理由を聞いた。

普通に考えれば、誠は音撃戦士であり本来なら学校の先生などではなく、魔化魍を倒しているはず、そんな彼がネギをサポートするために麻帆良学園に来るとは思っただけじゃなかった。

それを確かめたくて、誠に理由を聞いたのだった。

「ああ、一番の理由は魔化魍だな」

「やっぱり、ここに来たのは魔化魍の退治なんだったんだ」

「そうなるな。麻帆良学園に魔化魍が発生したって要請で学園長から言われてな。あんまりここでこの話をするのはマズイ。俺は今から、学園を巡回することになってるから。この話はまた後な・・・」

そう言っ、鞆に荷物をまとめて椅子から立ち上がる。

「僕も一緒に行ったほうが・・・」

「大丈夫だ、見て回るだけだから。じゃあな」

そのまま、職員室を後にする誠。

「・・・僕も、少し学校を回ってみよう」

ネギも自分の荷物持ち、机に立ってかけている杖を持ち、誠が出て行ったのとは逆方向に向かって行ったのだった。

麻帆良学園郊外とある森 19：46

場所は変わり、ここは学校から大分離れた森の中。太陽は沈みかけ、夕焼けで森の中に赤い日差しが入り込み、不気味さを出していた。その中を歩いて行く二人の影が見える。

彼女、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと絡繰茶々丸だった。

「ふあああ・・・まったく、毎度毎度こう学園の警備にだされてはたまらんな」

あくびをしながら、いつも通り学園の警備のために巡回をしているエヴァンジェリン。

「あと残り14分24秒で交代の時間です。もう少し頑張りましょうマスター」

その、一歩後ろを歩く彼女の従者である茶々丸は言う。

エヴァンジェリンも「わかってる」と言っ、歩いて行く。

「それに、この後あのぼーやと新藤 誠の歓迎会があるとか言っていたからな」

普段慣れ合いが嫌いなエヴァだが、最初くらい出てやろうと思っ、おりこの巡回が終われば真っ直ぐ女子寮の方に向かうつもりだ。

すると、茶々丸のアンテナが突然展開する。

「マスターどうやら侵入者のようです」

「ああ、私も今感じた所だ。どうやら誰かが魔族を召喚したのだろう」
茶々丸のセンサーが何者かが学園に侵入するのを感知する。

エヴァンジェリンも同様に感知する。

「マスター、別の反応から今現在、桜咲刹那さんと龍宮真名さんが戦闘を行なっているようです」

「何？あの二人なら、まあそれほど心配する必要はないだろうが・・・
一様現場に行ってみるか」

「今夜は満月ではありませんので、余り無理をなさらず。今後の計画のためにも」

「わかっている。一様タカミチの奴に報告しておけ」

「了解しました。・・・マスター、どうやら別ポイントで現れた反応があります。」

「何？はあく、仕方ない。私たちが出向くしかないか・・・」

エヴァはやれやれと言った顔をする。

ある計画の為に、あまり無駄な戦闘は避けたかったのだが、一様は学園都市の警備をしている身であるため仕方なく侵入してきた魔族を払いに向かうのだった。

第五ノ巻 《響く鬼》

そして、二人とは違う場所では・・・

「まさか、いきなり魔族に当たるとはな・・・」

CDのような形をしたものを音叉・音角にセットし、録音された音を読み取る誠。このCDは《ディスクアニマル》と呼ばれる、鬼たちの式神のようなものである。主に、魔化魍の情報収集、鬼と共に戦闘することもできるので。学園の廻りを偵察させていたディスクアニマル・アカネタカから先ほど現れた魔族の情報を誠に届けていた所だった。

現場も近くだった為、その場に急行する誠。

茂みを抜けると、そこには既に魔族が学園の方に移動している状態だった。

「随分と多いな」

既に何十体もの魔族達が召喚されていた。姿、形からして大型のタイプと周りには小型の魔族。

すると、一体の魔族が誠に気づいたのか、いきなり大きく尖った口から魔力の光が発射される。

「!!」

光線を躲し、後方に移動する誠。光線が当たった個所には小さなクレータが出来ている。

すぐに腰にマウントしている音撃棒・烈火を手に取り、鬼石に炎を溜め、鬼棒術・烈火弾を放つ。

一体の魔族に着弾し爆発を起こす。衝撃で他の魔族たちに余波が迫った。

それを皮切りに、別の魔族達が一斉に襲ってくる。

「させるか!!」

音撃棒を腰の装備帯に戻すと、両手で素早く印を結んでいく。

そして、大きく息を吸い込むと

「火遁・豪火球の術!!」

一気に噴き出すと、口から巨大な火球が出現する。火球は数体の魔

族を巻き込み、消し炭にする。

そして、もう一度装備帯から今度は右手用の「吽」の烈火だけを持ち、鬼石から炎の刀身を出し「鬼棒術・烈火剣」を発動する。

そのまま、魔族の群れに向かい、炎を纏う剣で魔族達を斬り倒していく。

「調子二ノルナヨ人間ガ!!!」

勿論、黙ってやられる魔族達ではなく、鋭い爪を持つ手を使い誠に攻撃をする。

「くっ!?」

振り下ろされる手を烈火剣で防御する。普通の人間ならば、魔族の腕力で押しつぶされている。誠も足元の地面にヒビが入るほどに押されている。

「大シタ力ダナ人間!ソレニ先ノ攻撃ハ東洋ノ神秘「忍術」ト言ウ奴ダナ?」

「西洋の悪魔が忍術なんて知ってるなんて驚きだな。確かにさっきのは火球は忍術による攻撃だ」

「ナラバ、貴様ハ忍者トヨバレル者力?」

「生憎だが、俺は忍者って分類じゃない。って言っても忍術使ってる時点で忍者なのかもしれないがな!!」

スパッ!!

「グオツ!」

烈火剣の刀身の熱温度を一気に上昇させ、そのまま魔族の手を切り落とす。魔族が怯んだすきに蹴り飛ばす。

「あんまり時間はかけてられないんでな・・・」

そう言つて、誠は腰にかけている音叉「音角」を手に持ち、烈火に軽く当てる。

当てられた音叉から不思議な音色が響く。

鳴らした音叉を額にあてがうと、その発生した音の波動を受け、額に鬼の顔が浮かぶ。

その刹那全身が猛火に包まれ、火塊の中、姿が変わっていく誠。

「はあああああああああああああ・・・はあっ!!」

右手で炎を振り払うと、そこに立っていたのは先ほど戦っていた誠とは違う姿。頭に二本の角を生やしている者。その姿は、世に災いを齎し、人間達から恐れられてきた存在はまさに

鬼

その名が相応しい姿だった。

「貴様、一体何者ダ!？」

魔族が叫ぶ・・・

「俺は、鬼戦士・響鬼^{ヒビキ}・・・お前たちと同じ化物さ・・・」

彼はそう答えると、両手に持っている音撃棒を構えると、一瞬で魔族達の目の前に移動する。

「ナツ!？」

魔族達も突然の瞬間移動に動揺する。

「これで終わりだ!!」

「グオツ、貴様何ヲ!？」

響鬼は目の前にいる悪魔にベルトに装着している音撃鼓・火炎鼓を叩きつけるように取り付ける。余りの力に悪魔の方が後退りしてしまふ。

「音撃打・猛火怒涛の型!!」

掛け声と共に、烈火を振り下ろしていく。

叩く度に、目に見える波動の流れが魔族達に流れていく。

「ナ、ナンダコレハ!?!カガ・・・ガアアアア!?!」

「体ノ力ガ抜ケテイク!?!」

自分たちの力が抜けていつているのを感じている魔族達。

しかし、誠はお構いなしに火炎鼓を叩いていき、最後に両手で一気に振り下ろす。

「グオオオオオオオオオオオツ!?!」

最後の一撃が終わると、その場にいた全ての魔族達が爆散した。

鬼が放つ音撃と呼ばれる攻撃《浄めの音》は本来なら魔化魍に対して行う。

邪悪なる者ならば浄めの音による攻撃は十分可能なのである。

「終わったか、はあ、魔族相手に音撃を使うとやっぱり疲れるな…素直に鬼忍術で倒してれば良かったかも…」

魔族を倒したのを確認した響鬼は、滅多に出会わない魔族との戦いでドツと疲れが来たのを感じた。

「やあ、誠くん。応援に来ただけど、必要は無かったみたいだね」

暗闇から声が聞こえてきた。声の主はタカミチのようだ。

「タカミチ…」

タカミチの方を向く響鬼。

「!!…鬼なってるってことは、それほど強敵だったのかい？」

誠が鬼に変身しているのを見て、顔を厳しくするタカミチ。

「いや、魔族相手だから万が一があると思っただけ。多分下位級の魔族達だろう」

変身を解き、タカミチの方に行く誠。

「そうか、最近どうにも魔族達の侵入が多くなってるからね。学園結界を強化はしているんだが…」

「結界にも、必ず穴があるもんさ、そういつたことに対処していくのが、今の俺達の役目何だろ？まあ早めに召喚した奴を捕まえることが先決だな」

「そうだったね。でも、初日からすまないね」

「元々こういう事を昔からやってきたから。もう慣れてるしな。まあ、俺もいきなりこんな歓迎されるとは思わなかったけど」

初日早々から魔族に出会う誠。あんまりうれしくない歓迎ではあるが。

「ああ、そうだった。あとで一緒に女子寮の方に来てくれないかい？」

「女子寮？なんで」

「それは着いてからの楽しみさ」

タカミチはそう言って微笑み、学園の方に向かって歩いていく。

誠も頭に？マークを出して、タカミチの後を歩いていく。

二人の姿が見えなくなると、暗闇から二人の人影が現れる。

「あれが、ヤツの鬼の姿か」

出てきたのはエヴァンジェリンだ。一步後ろには従者の茶々丸がいる。

そうやら、先ほどの誠の戦いを見物していたようだ。

「ふん、まさか忍術まで使えるとはな。これは案外楽しめるかもしれないぞ茶々丸」

不敵に笑い、どこか楽しそうにするエヴァンジェリン。

「マスター、何やら楽しそうですね？」

「ああ、楽しいさ。奴の苦渋で恐怖に満ちた顔を想像するとな」

そうさ、鬼戦士。この私に対し、舐め腐ったあの鬼と同じ鬼が……あの忌々しい……

『グハッ!?き、貴様……!!』

『はあ、いい加減にしろ。お前みたいな餓鬼に構ってる暇はない』

『ふぎけるな!?グッ、呪いさえ、こんな呪いさえなければ……こんな鬼ごときに……』

『呪いだか、なんだか知らないが。俺はお前に何の興味もねえ。あいつを探しにこんな所まで来たが無駄足だったな……』

『待て、貴様!!許さんぞ、この私を……この私をなめた事を必ず後悔させてやる!!鬼如きが吸血鬼と呼ばれ最強の魔法使いである私にかなわない事を!!』

『自分が最強ってほざいてる奴は案外大した事はないんだよ……覚えておけ餓鬼。それから、あんまり鬼をなめないほうがいい。人間じゃないなら今すぐ消してもいいが、無意味な殺生は俺はしないんでな……じゃあな』

『ふぎけるな……私は最強なんだ……貴様如き鬼風情に負けるはずがないのだ!!思い知らせてやる……私のちからをなあ!!』

『ちっ、いい加減眠ってる餓鬼!!』

『グハアッ!?!』

「(あの日の出来事は、今でも忘れん・・・呪いが解けた時、奴を見つけて出してやる・・・)」

かつて、自分が対峙した事のある鬼。名前もわからず、ふらつと現れたその鬼にエヴァンジェリンは簡単にあしらわれてしまい、あろう事かその鬼にとって自分は眼中にすらなかった。

あれほどの屈辱を受けたのは、この呪いをかけた男ナギ・スプリングフィールド以来だった。いや、ナギ以上の屈辱だった。

「マスター、この後ですが・・・」

「茶々丸、私に馴れ合いはいらん。行くのは辞めだ。あんな脳天気な連中と仲良しごっこなどできるか・・・行くぞ茶々丸」

「はい、マスター」

髪を靡かせ、暗闇の森を歩いていく。
ほこりあるあくのまほうつかい
誇りある悪の魔法使い

それがエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルである。

第六ノ卷 《蠢く魔》

麻帆良学園 女子寮 明日菜と木乃香の寮室 22:30

「木乃香、明日も早いから寝るね」

「うん、おやすみ明日菜」

そう言つて、明日菜は自分の寢床につき、明日の新聞配達のために眠りにつく。

「(はあ、もう今日は本当に最悪な一日だったは……)」

布団にもぐり今日一日の事を思い返す。

今日は明日菜にとつてとんだ災難の日だった。

全てはあの子供教師《ネギ・スプリングフィールド》である。

朝から脱がされ、授業では脱がされ……というか今日は脱がされてしかない。

そして、何よりネギの正体が……

遡ること放課後時……

麻帆良学園女子中等部広場前

夜に行われる歓迎会の食材を買いに行かされていた明日菜。たままそこを通りかかりに見たのは、大量の本を持ち歩いていた宮崎のどかが誤つて階段から落ちているところだった。

『嘘?!』

ふらふら歩いていたから危ないと思つていたが、まさか本当に落ちてくるとは。

急いで受け止めようとするが、距離的に間に合わない。

しかし突然、のどかが地面すれすれで一瞬静止する。その間にあのネギ・スプリングフィールドがのどかを

受け止めていた。

『ふう、よかった。あの一瞬じゃ、とても間に合わかつたからな……あ』

のどかを何とか助けたネギ。しかし、その現場を明日菜が見ていた

のだ。

『あ、あんた・・・!!』

『え、ちよっ!?!』

急いでネギを捕まえると、そのまま近くの茂みに連れ込んだ。

『あああああんた!! 一体何者!? エスパー!? 超能力者!? まさかニユータイプ!?!』

『ふえええ、僕そんな変な者じゃないですよ!! 僕は・・・』

つい、魔法使いと言いつうになるが、咄嗟に口ずさむ。

『何!! あんた黙ってたって・・・?』

明日菜はネギのそばに落ちている杖を見て、少し考えると。

『まさか・・・あんた魔法使いでしょ!!』

『え!?!』

『やっぱり、その反応!! あんた魔法使いなのね!!』

『ち、違いますよ!?! だって魔法使いですよ!! そんなの存在するわけ・・・』

『いや、あんた魔法使いでしょ!! 今朝や授業の時にいきなり服が破けたのもあんたの魔法でしょ!! しばらくくれたてもう遅いのよ!!』

どうやら、自分の衣服が脱がされたのはネギの魔法のせいだと断定し、徹底的に追及するつもりだ。

『お、落ち着いてください明日菜さん! まずは冷静になりましょう?』

なんとか、興奮している明日菜を落ち着かせようとするネギ。

完全にマズイ状態になっているこの状況に焦りまくるネギ、まさか初日から魔法の存在がばれてしまうとは。

必死に打開策を考えるが、最終的に明日菜の記憶を消すこと以外に思い浮かばない。

無闇に人の記憶を消すのは嫌だったネギ。

と、その時

『あれ、ネギさんに明日菜くん。こんな所で何をしているんだい?』

『タカミチ・・・』

『た、高畑先生!!』

ちようどいいタイミングで現れたのはタカミチだった。

『そこに宮崎くんが倒れていたから何事かと思っただけ……何かあったのかい?』

『あ、実はさつき宮崎さんが階段から踏み外して……』

『そしたらネギ先生が助けたんですよ!! いやあ、すごいですね!!』

タカミチが出てきたとたん先ほどまでの態度を豹変する明日菜。

ネギも『(ええええ!! さつきまでと態度が……)』と困惑する。

しかし、ネギにとってはうれしい事態だ。

その後、明日菜はのどかを起こしに行つたあと歓迎会の準備があるため、会が行われるまでネギとは合わなかった。

結局歓迎会でもネギの正体を追及できなかった明日菜。

「あの時は、高畑先生が来たから追及しなかったけど、いずれ必ず正体を暴いてやるわ!!)」

悪魔でネギの事を疑う明日菜。しかし、もし仮にネギが魔法使いとかなら、一緒に赴任してきた新藤誠もそうなのかと思う。

でも、明日菜もだが、今そこにいる木乃香だって、彼は3年前に分たちをあ猫の化け物から助けてくれた鬼ではないかと。

鬼・都市伝説に実際ある話で、自分たちが見えないところで化け物から人々を救ってくれる正義の鬼がいると有名な話である。

明日菜も最初はそんな話は信じていなかったが、3年前の出来事ですその話は嘘ではないと思っていた。

「(もし、あの人があの時助けてくれた鬼なら……お・れい……)」
明日菜はだんだん来る眠気に、意識を手放していった。

同時刻 誠の寮宅

「神楽坂に魔法がバレかかっている?」

「うん・・・実は・・・」

歓迎会が終わり、自分たちの寮に帰り着いたネギと誠。

誠に宛がわれている寮（というか完全に1階建ての一軒家だが）のリビングで、一緒に住むことになったネギと一緒に今日あったことはなしている、明日菜に魔法がバレかかっていることを話した。

「なるほど、宮崎を助けようとしてか」

「極力は魔法を使わないようにしてたんだけど・・・」

「ネギは魔法使いだから、魔法使って人を助けるのは当たり前だろ。肝心な時に魔法使わなくてどうする」

「それは、そうなんだけど・・・」

小声でポツリと言うネギ。

「とりあえず、普通の対応してればいいんだよ。変によそよそしてたら、それこそ怪しいだろう?」

「・・・うん、そうだね。そういえば、さつきから何してるの?」

先ほどから、リビングに置いてあるちゃぶ台の上で教科書とノートを見ている誠にネギが質問した。

「明日の社会の授業の予習だよ。俺も明日、授業するから、先に頭に入れとかないと行けないだろ。第一俺は学校の先生したことないから不安なんだよ。というより学校すら言った事もないけどな」

小さい頃から、とある事情で小中高の学校に言ったことがない誠。常識や必要最低限な学力は独学と師匠から教わった。なので、学校でいざ先生をやる時はどうすればいいのかまだよくわからない。

『やっぱり、学園長を恨むぞ』と小言をいいながら、明日教える範囲を頭に叩きこんでいく。

「確か、資料なら至急されたパソコンにデータが入ってるんじゃない?」

「俺はそんなハイテク機器は使いこなせません」

「え、でもパソコンってそんなにハイテク・・・」

「悪かったな、俺はああいう機械関係がダメなんだよ」

そう言っつて、ジト目になる誠。機械オンチである誠は、パソコン等

のハイテク機器(?)が扱えない。ようやく携帯電話を使えこなせるレベル(それでも、電話しかできないのだが、更に時々壊す)。

余談ではあるが、携帯電話を使用する前は全て公衆電話やディスクアニマルで取っていた。

「あはは・・・それじゃあ、僕明日の御飯の支度しておくね」

「ああ、悪いネギ」

ネギはそう言って台所の方に向かっていく。

「そういえば、この子は・・・」

大の上で、見ていた生徒名簿を見てふと思い出す。先ほど、歓迎会でも会ってるのだが

出席番号5番 和泉亜子いずみあこ

猛士総本部に所属している名門《和泉家》は吉野において代々「猛士」の中核を担ってきた名家。

誠の先輩鬼戦士に威吹鬼イブキこと和泉 伊織という人物がおり、彼も和泉家の出身であり、実力は鬼戦士の中でもトップクラスの力を持つ人物。

以前彼から妹がいると聞かされた事があり、とある理由で関東の学校に通っていると言っており、今回あった亜子が妹では思った誠。

「・・・まさかな・・・」

そんな偶然があるわけないだろ、と考えた事を頭の隅にやり、作業を続けるのだった。

こうして麻帆良学園での長い一日は終わりを迎えるのだった。

麻帆良学園近郊の森林

あたりは完全に闇に沈み、誰もいないはずの漆黒の森の中に蠢く二人の人影。

「大分いい具合に成長したな。魔力を食わせればより強力なツチグモができるとは意外な収穫だった」

「ああ、こいつらが彷徨っているおかげだな」

「どうやら男女がいるようだが、あきらかにおかしい光景だ。」

男のほうから女声が、逆に女の方から男の声が聞える。そして何より、彼らの周りにある食い荒らされた肉片の数々。それはどうやら人間のではないだが。

「ヒッ、ヤメロ!? ナンダコノ怪物ハ!!」

そのすぐそばで、倒れている魔族が1体。体中を糸で絡め取られていた。

そして、その魔族の目の前に大きな影。

巨大な蜘蛛のような形をした化物・・・魔化魍《ツチグモ》

何かを咀嚼しているようであり、何かが砕ける音などが聞こえる。

「ほら、最後の一匹だ。存分に味わえ」

女が指示すると、ツチグモは長い手足で魔族を捉える。

「ヒアアアアア!? ヤ、ヤメロオオオオオオ!? グギャツ・・・」

そのまま、巨大な口の中に入れ咀嚼する。何かが砕ける音や肉が潰れる音などが聞こえる。

すると、ツチグモから不思議に光オーラのようなのが現れる。肉体にも変化が現れる。

「悪いな。お前には柔らかい女の肉が好みだろうに」

「だが、こいつを食えばお前はより強力なツチグモに進化する。我らの肉体も強固なものに」

目の前で起きている変異に喜びの声を上げる男。

魔力と魔族の肉体を手に入れた魔化魍《ツチグモ》の誕生だった。

第二章 《吸血鬼襲撃編》 第七ノ巻 《動き始める者》

3月7日 10:30

東京都葛飾区 甘味処 《たちばな》 及び猛士関東支部

「ええ!?ヒビキさん学校の先生やってるんですか!」

「シューー!!声大きいぞゲンキ」

「す、すいません・・・」

突然の大声を出したゲンキと呼ばれる少年を窘めるシュウキ。

奥の座席の座って話しているのは、先ほど東北支部から帰還してきた音撃戦士・衆鬼こと嘉納 シュウキ。

もう一人は、まだ顔に幼さが残っている16歳の少年。名前は源道賢二。鬼の名は玄鬼^{ゲンキ}。音撃戦士では珍しい音撃響と呼ばれる鞭を使った武器で魔化魍を倒す鬼である。

関東支部に所属しているゲンキは帰ってきたシュウキから話を聞き、ヒビキこと誠がああ麻帆良学園で教師をやっていることに驚いていたのだ。

「ちよつと二人共!店にいるなら手伝いなさいよ!もうすぐ開店するんだから」

「か、香須実さん!」

二人を注意したのはこの店の店員の立花香須実。ここ関東支部でもある《たちばな》の店長でもあり支部長でもある立花勢一郎の娘でもある。姉御的な性格であり、彼女には逆らわない方がいいとシュウキが常々語っているのはまた、別の話。

「ほら早く行った行った!!今日はお父さんも日菜佳といつも来てくれるトドロキくんがいんだから」

そう言っって、彼女うは手に持っているお盆でシュウキの背中を軽く叩く。

「痛っ!俺、さっき東北から帰ってきたばかりですよ!」

もうへとへとで、と言わんばかりの顔をするシユウキ。しかし香須
実は知らん顔とばかりに。

「そんなの関係ないわよ。ほらゲンキくんも」

「僕もですか？でも今日はお休み……」

「いいから早く行く!!」

「は、はいいいいいい!!」

香須実に言われてすぐに店の手伝いに走るシユウキとゲ賢二。

二人は素早く着替えると、台所の方に向かっていく。

「僕はこの後帰って、鍛錬する予定だったのに……」

「まあ、あの人に逆らうのはやめた方がいいからな。それより、お持ち
帰りの注文が入ってるみたいだから早めに作ろう。せっかく来てく
れるお客さんを待たせるのはよくないからな」

そう言うと、手際よく菓子を作っていくシユウキ。

「やる気あるんじゃないですか……」

「え？いや、俺一様ここの専属菓子職人だから。それにどうせ、帰って
もくたびれて寝てるだけだしな。それならもつとクタクタになっ
てから寝るほうがいいだろ。今週のシフトに俺入ってないから」

「でも、最近は変則的に魔化魍が出てきますから。僕も、突然の出勤
も……最近何回かあります」

「まあ、魔化魍を倒すのが俺たちの役目だからな……あ、そういえば
マコツチに修理したバイク届けないといけないんだ。おやつさんに
言われてたの忘れてた……」

ポツと、前に勢地郎にバイクの件の話を聞いていたのを思い出す
シユウキ。

「確か、東北で姫に体当たりして壊したんでしたよね……さすがヒビ
キさんというか何というか」

以前、誠が東北支部に赴いていた際に、妖姫との戦闘の際に、専用
にバイクを壊した事を思い出す賢二。

「そうそう、それで修理に出してたのが終わったから届けてくれって、
どうしようか。麻帆良学園に行つて届けるか」

「でも、あそこは魔法使いたちの本部みたいな場所なんですよね。無

許可に入ったら色々面倒なんじゃあ・・・」

「マコッチがいるから何とかなるだろ。事前に言っとけば事情は話してくれるさ。・・・ゲンキその皿とつてくれ」

「これですか？」

棚にある皿をシユウキに渡す賢二。

近いうちに新たな鬼が麻帆良学園入りする日は近いかもしれない・・・

麻帆良学園 女子中等部2年A組 15:30

「それじゃあ、今日のHRを終わります」

「「ありがとうございました！」」

今日も何事も無く放課後のHRを終えた2年A組のクラス。

この後、生徒達は自分達が所属している部活動等に行ったりなどして放課後を過ごしていく。

この時期は期末試験等が終わり、あと2週間程で終わる2年生最後の学校生活を迎えるだけである。ちなみに期末試験はネギと誠が赴任してくる前に終わっており、結果は、何とか最下位ではなくブルー賞という結果で終わった。

「はあ、今日も来てないや・・・」

生徒達がそれぞれ教室から出て行く中、一番後ろの座席。赴任して次の日から、エヴァンジェリンと茶々丸が出席していない。連絡もなく、ただただ日にちが過ぎていくばかりだった。

「マクダウエルと絡繰の事か？ネギ先生」

ずっと座席の方を見ていたネギに誠が話かける。学校では、公私を分けるとしてネギ先生と新藤先生として呼び合っている。

「うん、僕達が赴任してからずっと来てないから」

「タカミチの話だと、前から度々学校をサボってるって話らしい。一回家にプリントとか届けにいけないだろ」

誠の手に持つ封筒をネギに見せる。エヴァンジェリンと茶々丸が

この5日間で貯めたプリント。来週早々に渡せばいいと思ったが、来るかどうか怪しい為直接渡しに行った方がいいだろうと考えた。

「あ、それなら僕が行くよ新藤先生。二人にはちゃんと学校に来てもらうように言うから」

「それなら副担任になっている俺m「アイヤアアア!!」ドワツ!?」

突然の何者かの飛び蹴りが誠に襲いかかる。咄嗟のことに何とか避けるも後ろの黒板に体をぶつけてしまう。

「ムッ、さすが新藤先生アル!今のを避けるとハネ!」

「く、古菲・・・またお前か」

襲いかかってきたのは古菲だった。実は初めて会ったの時からずっと彼女からマークされている誠。彼は絶対強者であると思っている古菲は彼に戦いを申し込んでいる。

「古菲さん!学校で暴力はいけませんよ!」

ネギも堪らず古菲に注意する。

「ネギ坊主、大丈夫アル。これは暴力じゃなくてちゃんとした試合アルヨ」

「俺はいつから試合を始めてたんだよ・・・」

「あの歓迎会からアルヨ。ワタシの攻撃をことごとく退けた先生は只者じゃないアルヨ!」

「だから、あれは避けるので必死だったって言うてるだろ。しかも、最後は頭ぶつけたしな」

歓迎会の時、飯を食っている誠に何の前触れもなく拳をぶつけてきた古菲。中国拳法の達人である古菲の攻撃を紙一重でかわし続けていく誠に、クラスメイトは驚いていたという。麻帆良学園都市で毎年秋に催される大格闘大会「ウルティマホラ」の2002年度チャンピオンになっている古菲はいわば格闘技においてはトップクラスの実力を持っている。そんな彼女の攻撃を避けていた誠だったが、最後は誰が仕掛けたか知らないが何故かバナナの皮で足を滑らせてコケるといふなんとも情けない姿を晒してしまった誠。まあ、このおかげでクラスに親しみを持ってもらえたのは良かったが。

「とりあえず、俺はお前と戦う気はないし、そんなに俺は強くないか

ら」

「嘘アル。新藤先生はとつても強いアル。武闘家としての勘がそう言ってるアル！」

「勘で俺は判断されるのか・・・」

なんとも根拠がない言い分に軽くシヨックを受ける誠。恐らく何を言っても退けてくれなさそうな古菲にこまる誠。

「古、新藤先生も困ってるヨ。それに今日は店の仕事もあるネ」

「そうだとアルカ？うくん、超が言うならそうアルナ」

その状況を見かねて声をかけたのは超鈴音だった。本当は店番なのではないが、普段は格闘技以外は抜けている古菲は超が言ったことを真に受ける。

「早く行かないと五月が怒るヨ」

「ムムム、それはさすがにマズイアル！新藤先生、今日はゴメンだったアル。でも次こそは勝負してほしいアルヨ！」

そう言って、教室を飛び出していった古菲。

「廊下を走つちやダメですよ古菲さん！」

「だから勝負はしないからって、もういない・・・」

既に姿が見えなくなっていた。

「新藤先生も大変ネ」

「ありがとう超、おかげで助かったよ」

「いやいや、これくらいどうってことないヨ。私も店の手伝いがあるからいくヨ」

「ああ、また肉まん食べに行くから」

「いつでも大歓迎ネ。ネギ坊主も是非また来るネ」

「あ、はい！是非また」

超もまた二人に別れをいうと古菲と同じく自分の店でもある超包子に行く。

二人はとりあえず、一度職員室に行こうとすると。

『新藤誠先生。新藤誠先生。至急学園長室に来てください。繰り返しです・・・』

校内放送が鳴り、誠が学園長室に来るように連絡する。

「学園長室？ちよつと行ってくる」

そう行つて、誠は学園長室に向かつていき、ネギも一人職員室に向かつていった。

麻帆良学園 学園長室 15：40

誠が学園長室に到着すると、中には既に先生や生徒達がいた。恐らくこの学園の魔法関係者であろう。前に会つたことのある顔が何人かいる。最も室内に入ってきた瞬間からすでに睨まれていたが。そんな中、集団のなかに見覚えのある二人がいた。

「桜咲に龍宮じゃないか。なんでここに？」

2年A組出席番号15番の桜咲刹那と同じく出席番号18番の龍宮真名だった。なぜ、二人がこの場所にいるのか不思議に思うと。

「すみません新藤先生。私達も実は此方側の人間なんですよ。同じ学園を警備する者として、言うべきとは思つたんですが・・・」

「先生が私たちの正体に気づけるか試してたんだが、中々気づいてくれなくてな」

そう言つて、誠に弁明する刹那。そして、軽く小馬鹿に言うように誠を見る真名。どうやら、二人は誠が自分達の事を魔法関係者かどうか見抜けるか見極めていたようとしていた。しかし、結局ここに至るまで気づけなかったようだと言判断していた。

「あははは、期待を裏切つてすまないな。何分ここに来て日が浅くてな」

特に怒つたり、驚いたりせずには気さくに返事をする。刹那と真名はそんな返答をしてきた誠の態度を見て、軽いため息を着いた。『本当にこの人で大丈夫なのか』と二人思った。

「そろそろ話を戻してよろしいでしょうか」

どうやら別の話をしていたらしく、葛葉刀子が誠にに言う。どうやら、来る前から何かしらの話をしていたようだ。

「君の話だよ。新藤誠」

「俺の？」

ガンドルフイーニが誠の隣に来て、話を切り出す。

「ここに来てから、何かしら魔化魎の情報はわかったのか？」

「その件の事でしたら、学園長に随時報告してますよ。まだ、何も情報は得られていないと」

「全く、何をやってるんだ君は」

使えないなど言わんばかりの顔するガンドルフイーニ。ここに他の者も同じような顔をする。

彼らとしては一刻も早く魔化魎を見つけ出して、魔法の力で倒しすと考えている。自分達の魔法は万能であると、人を辞め、鬼などという化物になったものなど不要であると。

何度も説明しているが、魔法の力で魔化魎を倒すのは不可能である。いくら魔法で電撃を浴びせようが、炎で焼こうが、氷漬けにしようが、最強クラスの魔法で攻撃しようが関係ない。結局最後はすぐに復活してしまうだけ。

そんなのは無意味だとわからない連中がいる、それが彼ら『正義の魔法使い』である。

誠も今回、麻帆良学園に生息しているであろうオオアリとツチグモの情報などを提供しているが、あまり見ようともしていない。彼らは誠が一刻も早く出現場所を見つけださせようとしているだけであり、情報など端から見るとつもりはない。

まあ、彼らも学園に現れる魔族や侵入者の対応もあるのだろうか、見てる暇もないのかもしれないが。

「二つだけ・確認の為に言っておきますけど、魔化魎が現れても手は出さないで下さい。ここで魔化魎を倒す事ができるのは・・・俺だけです」

「何!? 私達の力が通じないと言いたいのか貴様は!! 万能の力である魔法で倒せない者などない!」

「その通りです。正義の力を使う私たちに倒せないものがないとでも？」

「ここにいる全員に言うようにしゃべる誠。それを聞いた魔法先生

や生徒達が抗議する。別段、ここにいる連中を馬鹿にしているわけでもない。ただ、既に一般人に犠牲者はでている為、彼らが魔化魍と戦闘をし、犠牲を出したくなかった誠。

「いい加減にせんかお主ら!!今はその事を言ってる場合ではないじゃろ!」

学園長も話が段々それていき、彼らが誠を攻めだすのを咎める。学園長に言われ、渋々引き下がる。

「学園長、これ以上彼と話しても無駄なだけです。今日は悪魔で吸血鬼事件の議題が本件だったので、これで失礼させて貰いますよ」

そう言つて、学園長の返事も待たずに学園長室から出て行く先生達、刹那と真名も学園長と誠に会釈するとセ先生達と一緒に退室していく。

「刹那、新藤先生が言っているのは正論だと思いがな・・・」

「それはわかっている。だが、あの人はまだ信用できない。実力もわからない以上はな・・・それに木乃香お嬢様を狙う輩かもしれない。その時は・・・」

手に持っている夕風に力を込める刹那。自分達の副担任とはいえ、完全に誠の事を信用していない刹那。英雄と言われたナギ・スプリングフィールドの息子であるネギならまだしも、腕がたつのかどうかわからない誠に対して警戒心をだしている。そして、何より大切な存在でもあり、命を賭けて守らなければならぬ近衛木乃香に牙をむくならば容赦せず叩き斬る。そう思う刹那。

「相変わらず手厳しいな。だが、あの人は強いさ。恐らくな」

「なぜ、そう思う?」

「さあな。私にもよくわからん」

そんな返答をする真名に?マークを浮かべる刹那。

さつきまで大勢いた学園長室はすっかりいなくなり、学園長と誠しかいなかった。

「すまんの誠くん、呼び出したのに不快な思いをさせてしまつて・・・」
誠に謝罪する学園長。前回も同じような結果で終わっているため、

今回は対等の立場で話あおうとしたのが裏目に出てしまう。

「俺の方も、失礼な発言をしましたから。まだ、ここに来てそんなに日はたつてませんから。よそ者に言われれば・・・」

「いずれわかってくれるはずじゃよ」

「そうなる事を祈ります・・・。。。そういえば吸血鬼事件ってなんですか？」

少し暗くなってきたのを感じたのか、話題を帰る誠。先ほど言っていた吸血鬼事件のことだ。

「実は、君がここにくる前からちよつとした事件が起きておつての。学園の桜通りで吸血鬼が現れて生徒が襲われている事件なんじゃよ」
「・・・それは、ちよつとした事件じゃなくて、大事件じゃないですか？」

普通、吸血鬼に襲われているなんて滅多なことではない。それをちよつとで済ませているのはどうかと思う誠。

「そうなんじゃが、既に犯人の目星は着いておるんじゃよ」
「え？」

「じゃから、誠くんは気にする必要はない。今日は済まなかったの、また何かあったら報告を頼む」

突然、話を終わらせる学園長。明らかに不自然に思ったが、深く聞いても喋るつもりもないだろうと思い、部屋を退出していく誠だった。

いつもなら綺麗な月明かりで有名なここ学園にある桜通り。しかし、今夜は雲に隠れ、まだ時期的に桜が咲くわけもない為、何も無い木の枝が不気味さを出していた。

そして、道の真ん中で倒れている一人の少女。2年A組に所属している生徒 佐々木まき絵だった。

首筋には2つの傷跡が見える。

「悪いな、佐々木まき絵。私の力を取り戻す為に、お前の血を分けて貰った。お礼に我が下僕としてやるから感謝するのだな」

邪悪な笑みを受けべて、佐々木まき絵の血を吸った吸血鬼《エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル》。

「ようやく、待ち望んだ時が来る。待っている、サウザンド・マスターの息子！そして、新藤 誠！」

15年にも渡る学園に縛られている封印がまもなく開放される日は近かった。

第八ノ卷 《魔化魍》

3月7日 麻帆良学園女子寮 医務室 21:30

麻帆良学園の女子寮に用意されている医務室に、先ほど桜通りで倒れていた佐々木まき絵が運び込まれていた。帰りがあまりに遅いで、心配になった同居人の和泉亜子が心配になり、友人の明石裕奈、大河内アキラと共に探しに行った時に、桜通りで倒れているのを発見し、ここに連れて来たのだ。

「まき絵・・・」

ベットで横になるまき絵に声をかける亜子。その周りにも話を聞きつけたクラスメイトが数人集まっていた。

「大丈夫よ和泉さん。ただの貧血だから、食事と睡眠をとればすぐによくなるわよ」

女子寮医務室担当の先生が、心配はいらないと声をかける。亜子もそれを聞いて、少しばかり安心する。

「でも、まきちゃんが貧血で倒れるなんて・・・」

「うん、まき絵は頭はあれだけど、運動神経はいいほうなのに」

まき絵は体操部に所属し、運動神経もかなり良い方に部類。貧血で倒れるなんて聞いたことも無かったため、

明日菜と裕奈が声を漏らす。さりげなくまき絵の頭の悪さを指摘しているが、皆知っているので誰も突っ込まない。

「まき絵さん!」

突然、医務室の扉が開かれて入ってきたのはネギと誠だった。

「ネギ先生に新藤先生、どうしてここに?」

あやかが二人に聞く。

「こつちの寮に連絡が入ってな。佐々木が倒れて運ばれて」

「それで心配になってきたんですよ。あのまき絵さんの様態は?」

「大丈夫ですわネギ先生。ただの貧血だそうですから」

あやかから様態を聞き、そこまでひどいものではなかったため、良かったと安堵の顔を浮かべるネギ。まき絵の様子を見ると、ネギがあるものを発見した。

「(あれは・・・2つの傷跡? なにかに噛まれたような・・・)」
まき絵の首筋に見える傷。まるで、動物に噛まれているようにも見える。

「あの、先生。まき絵さんの首筋になにか傷のようなものがありますんか?」

「? 何もないけど・・・」
「え?」

医務の先生が同じ箇所を見るが、何もないように見える。別段を嘘を行つてるようではなく、ネギの声を聞いた他のクラスメイトも同じように見るが医務の先生と同じような反応をしていた。

「まさか、認識阻害系の魔法? 微量だけど、魔力も感じる・・・ひよつとしてまき絵さんが倒れた原因は・・・)」

一人考えこむネギ。もしかしたら、まき絵が倒れたのはただの貧血ではなく、意図的に血を抜かれた可能性があるのではと推測する。認識阻害まで使っているところを見ると、傷跡を発見されない為にしていると考えるネギ。

「佐々木も寝てれば治るらしいから、お前たちも自分の部屋に戻ったほうがいい」

「は〜い!」

誠が部屋に戻るように言い、彼女たちもそれぞれの部屋に帰っていった。

「和泉も、先生が大丈夫っていつてるから」

「はい、先生まき絵の事、お願いします」

亜子も医務の先生よろしく伝えて医務室を出て行く。

自分たちも出ていこうとするが、ネギがずつと顎に手を当てて考え事をしている。誠はネギの方を掴みそのまま出口まで連れて行く。

「ネギもな・・・」

「わあっ!?! ちよ、ちよつと!」

そして、部屋を退室してしばらく、廊下を歩いていると、誠が話しかける。

「まき絵は誰かに襲われたって考えた方がいいだろ」

「お兄ちゃん気づいてたの？あの首筋の・・・」

「ああ、一般人には見えないようにしたんだろ。誰かわからないが」
誠もあの傷跡には気づいており、ネギと同じような事を考えていた。

「あれは、多分吸血鬼の仕業だよ」

「吸血鬼が？まさか、ここは日本だぞ」

吸血鬼の伝説などは、主に西洋、主に欧州で語られている。ここは極東の国、日本である。誠も実物を目にしたわけではないが、存在してるのは知っている。

「でも、僕達魔法使いがいるなら不自然じゃないと思う」

「確かにそうだが・・・・・・まてよ」

今日、学園長室で学園長が言っていた事を思い出す。

吸血鬼による被害がでていたのか。最初から学園は吸血鬼による仕業と知っていた。

「明日、学園長の所に行こう・・・聞きたいことがある」

「え、学園長に？」

「ああ、今日呼ばれた時・・・！」

「アカネタカだ」

話している内に女子寮から出た誠の前に、学園を偵察させていたディスクアニマル・アカネタカが飛んでくる。ネギもアカネタカの事を知っているためすぐに分かった。なにやら慌てているように見える。

すぐに、ディスクに戻して音叉にセットし、録音されている情報を聞き取る。

内容を聞いた瞬間、誠の表情が強張る。

「!!どうやら、ついに姿を見せやがったか・・・」

「姿？まさか・・・魔化魍？」

「ああ、小屋にカモフラージュして眠ってる。ここから距離が少しあるが、走っていけば問題ないな。しかし、童子や姫は確認できずか・・・とりあえず、吸血鬼の前に本命を倒しに行くか。ネギ、お前は先に『僕も行くよ』あのな・・・」

アカネタカから来る情報を読取る誠。ようやく、魔化魍の尻尾を掴む事ができた。おまけにバレずに小屋の正体が魔化魍であることもわかった。小屋に化ける魔化魍はツチグモ以外にはいない。本来夜行性では無いいため、寝てる間に清められる。しかし、童子や姫の位置が確認できないのは、気になるがもしもの時は虱潰し探せばいいだけ。吸血鬼の件もあるが、ひとまずは自分の本来の仕事である魔化魍の退治に向かうことにする。

ネギには帰るように言うが自分も行くと言ってきた。

「遠くから見てるから大丈夫だよ」

「そんなの無理に『prrrr, prrrr』電話？タカミチ」

携帯電話から呼び出し音が鳴り、画面に高畑・T・タカミチの文字が出ていた。

「はい、もしもし」

『誠くん！今どこにいるんだい！』

電話に出ると、タカミチがえらく慌てたように話してくる。

「今、中等部の女子寮だ。何かあったのか？」

『実は郊外にある森の中に見慣れない小屋があるって、連絡が入ってね』

「ああ、間違いなく魔化魍《ツチグモ》が化けてる小屋だ。今から向かうとした所だ」

『やはりか！それがさつき、学園の魔法先生や魔法生徒達数名が調査に向かったんだ！』

「何!?!いきなり小屋が現れればツチグモの可能性があるって、ちゃんと情報は開示したはずだぞ！」

『それが、どうやら君の話の信憑性が本当かどうか調査しに行ったらしいんだ！』

「なっ!?・・・バカが!!」

今にも壊れんばかりに携帯電話を強く握り締め、あまりの無計画に怒りを顔にする誠。

『僕も今、現場に向かっている所だ！誠くんもできるだけ早く来てくれ！』

「わかった！すぐに向かうから、そっちが早く着いたらできるだけ遠くから牽制するんだ。うかつに近づけばツチグモの餌になる！」

『わかった。すまない誠くん！』

そう言っで電話を切るタカミチ。

事態は一刻を争う状況になる。

「ネギ、もうグダグダ言ってる状況じゃなくなった。もし来るなら絶対俺から離れるな。今、杖もないんだらなお前は」

「子供用のあるから」

そう言っで、ポケットから星形のマークがついた杖を出した。ネギが子供の頃に使っていた杖だ。

誠も一瞬大丈夫かと思っただが、本当にグダグダ言ってる場合ではないので、そのまま現場に駆け出していった。

ネギも誠の跡を応用に走り出していった。

そんな二人を扉の影から見ている人物がいた。

「・・・あの二人、あんなに血相変えてどこにいったのかしら」

「明日菜、まさか追いかけるとか言わへんよね？」

その人物は、明日菜と木乃香だった。実はまだ、部屋には帰ってはならず、ネギと誠の様子を伺っていたのだ。あれから、ネギの事をずっと魔法使いと疑っている明日菜は当然諦めているはずもなく、

ずっと付けていたのである。

「木乃香は部屋に戻ってて、私一人で行ってくるから」

そう言っで、ネギと誠の跡を追っていく明日菜。

「あ、明日菜！うー、ウチもや！」

結局、木乃香ついていくことになる。

この後、二人に襲いかかる人生二度目となる命の危機が訪れようとは二人はまだ思っでもいなかった。

学園からそこまで離れていない森の中で、漆黒の暗闇の森の中に輝いている数々の光が見える。

巨大な何かが、動きまわる音が聞こえ、あたりは砂煙が立ち込めていた。

既に、魔法使い対魔化魍《ツチグモ》の戦闘が始まっていた。

「なぜだ!?なぜ、我々の攻撃は効かないのだ!」

怒号を上げて声を上げる、調査に向かった魔法先生の一人のガンドルフィーニ。手に持つナイフと魔法弾による拳銃の攻撃を先ほどからするが、目の前にいるツチグモに傷一つ付けられていない。

「くっ…これでもくらいなさい!」

高音・D・グットマンが自身に憑依している影の鎧を使い、槍状の攻撃をする。

しかし、全て弾かれてしまい、攻撃が通らない。自身をお姉様と慕う魔法生徒に佐倉メイも火属性魔法《魔法の射手・連弾・火の20矢》、《焰の斧》による攻撃をするも火傷一つもついていない。

数人の魔法使いたちも同じように攻撃を仕掛けるも全く歯がたたない。それどころか眠っているのを邪魔されたのかツチグモは完全にキレており、所構わず突進や、鋭い手足であたりの木を斬り倒している。

そして厄介なのは、ツチグモだけではない。

「くそっ!」

そのすぐ近くで響き渡る、剣撃の音。そこには長い野太刀《夕風》を振るい、異形の姿をした化物ツチグモの童子と戦っていた。素早い動きで、木から木へと飛び移り、素早く動きまわる童子に翻弄されていた。そして、隙あらば右手が完全に鋭い一本の爪による攻撃が繰り出され、刹那は何か夕風で防いでいた。

こちらも神鳴流の技を放ち対抗していくも、攻撃が食らっているが効いていない状態。

「刹那、何とか動きを止められないか!」

「無理に決まっているだろ。相手の動きを見極めるだけで精一杯だ

！」

手に持つライフルで必死に童子の動きを追う真名。魔眼という特殊な目を持っており、察知能力や遠距離から直視、霊体をも見る事ができる物であり、真名はこの眼で童子の動きを追っていた。

しかし、予想以上に敵が動き回る為、得意銃撃も当てられないでいた。

「こうなったら、神鳴流奥義・秘剣・百花繚乱！」

剣から気を分散させて、敵を吹き飛ばす奥義を放つ。全体に広がる攻撃の為、攻撃を仕掛けてきた童子にあたり、地面に落ちる。

真名もその瞬間を逃さず、込められている弾丸を全て撃つ。

「ガアッ！」

一点に手中させた弾丸により、童子の硬い皮膚に亀裂が入った。その部分から白い体液が噴出する。

「止めだ！神鳴流奥義・極大・雷鳴剣！」

続けて、刹那が剣ぶ雷を帯電させた攻撃を繰り返す。

雷が直撃し、攻撃を放った箇所にはクレータができていた。

「やったか」

「ああ、弾丸全てを一箇所に集中的に放った。どんな固い皮膚だろうが、一箇所に攻撃を集中させれば必ず壊せるものさ。それにお前の攻撃を食らってはな」

あれだけの攻撃を食らっては生きてはいないと、判断する真名と刹那。

「どうやら、魔化魍と言っても私達の攻撃が効くようだな・・・所詮は妖怪や魔族と同じというわけか・・・」

「その発言はあれを倒してからにした方がいいぞ。アッチの方が大分マズイ状況だ」

真名が顔向ける先には、ツチグモと戦っている魔法先生達。相当苦戦しているらしく、今すぐに応援に向かった方が良さそうだった。

「新藤先生は何をやっているんだらうな・・・」

「来ない人物を待っていても仕方ないだろ。結局、私達のことも見抜けないのではな・・・それより、無駄口を叩いている暇はないだろ」

「そうだな・・・」

援護に向かう為に、ツチグモの方に向かおうとする刹那と真名。

しかし・・・

「油断だよ・・・」

「!?!」

突然に声が聞こえ、後ろを振り向いた瞬間。そこには、なんと先ほどやられてとばかり思っていた童子が無傷の状態で、此方に向けて爪を振りあげていた。

突然のことに反応出来なかった二人。しかし、瞬間。

「豪殺・居合い拳!!」

今度は目の前にいた童子が突然ふつとばされ、木をなぎ倒している。

「い、今のは・・・」

「大丈夫かい。刹那くん、真名くん!」

「高畑先生」

済んでの所で助けてくれたのはタカミチだった。気と魔力を融合させる技法《咸卦法》により攻撃力を上げて放った居合い剣ならぬ、拳による放つ居合い拳を放ち、童子をふつ飛ばしたのだ。

「油断しちゃダメだ。今の童子に攻撃してもすぐに再生する。今のあれは普通の童子じゃない!」

刹那と真名の前に立ち、飛ばされた童子を見るタカミチ。

「普通じゃないって、どういう意味ですか?」

「普段の童子や姫なら僕達でも十分対抗することはできる。だが、通常の童子や姫の中には特化して強力になるものもいる」

「それが、あれだって言うんですか?」

「恐らくね。僕が放った拳を食らって消滅していないのを見るのはね」

タカミチの言うとおり、童子が向かった方向を見る。そこには、受けた拳の箇所が急速に再生を始めている童子の姿だった。

「な・・・」

再生している姿を見て、驚く刹那。

すると、童子は傷が治るやいなやそのまま現場を離れていく。「しまった。それよりも、やばそうなのは向こうだね。早めに遠ざけないと・・・」

童子が逃げていくのを追いかけてしようとすると、状況から見て、先ほど刹那と真名が応援に向かおうとした方角で暴れる巨大な蜘蛛型魔化魘《ツチグモ》問題だ。

しかし、その場では既に異変が起きていた。

「きやあ!?!」

「メイ!」

佐倉メイが叫んだと思うと、ツチグモが吐き出した蜘蛛の糸が絡まっている。粘着性が強く、簡単には剥がせない糸だ。しかし、突然糸が急速に固まっていく、まるで石のようだ。

「何!?!あれは」

タカミチは驚いた。ツチグモが放つ糸は、粘着性の強い糸であり、あんな石のように固まるのは聞いたことがない。そして、ツチグモは今度は口から紫色の光線を放つ。よく狙っていないのか、明後日の方向に放たれるが、気に直撃すると、一瞬で樹木とその周り数メートルが石に変わる。

「馬鹿な、あれは石化の魔法だ!」

ツチグモが放ったのは石化の魔法攻撃。このツチグモは魔力による魔法攻撃を放ったのだ。それも威力が半端ではない。明らかにおかしいツチグモの攻撃に疑問を受かべるタカミチ。

しかし、考えている場合ではない。メイは今捕まっている状態、あのままではツチグモにくわれてしまう。

「くっ（七条大槍無音拳）」

ツチグモに向け極太レーザーの如き拳圧を放出する技を使うタカミチ。射程は100m以上、この距離なら十分届く、突然の攻撃を食らったツチグモはその巨体を浮かばせ後退する。攻撃の余波で、メイを絡めている石の糸が壊された。

「高畑先生!」

「さすが、高畑先生だ!」

先ほどの攻撃したした人物がタカミチだと知ると、歓喜の声を上げる。どうやら、ようやく此方の攻撃が効いていた事が嬉しいようだ。

そして、チャンスと見るなり、ツチグモに向かう彼ら。

「待つんだ、僕達ではあれを倒せない。後退して、誠くんが来るのを待つんだ！」

「何を言ってるんですか!!今が絶好のチャンスなのですよ！」

堪らず、高音が反論の声を上げる。

「すまないが、今は言い争っている場合じゃないんだ!早く下がるんだ！」

タカミチが珍しく声を上げて、下がるように言う。

悔しいがあれを倒すのはAAAクラスのタカミチでも不可能であり、倒す手段を持つ誠《響鬼》でしか対抗できない。

今は足止めをして時間を稼ぐしかない。

怯んでいたツチグモが再び動き出したのを見て、もう一度先ほどの攻撃をしようとするタカミチ。

しかし、突然自分たちの上を何かが通り過ぎる。そのまま、ツチグモの方に当たり、ツチグモが再度後退させられる。

「あれは、さっきの・・・」

飛んできたのは、つい先ほどの場を離れた童子だった。

そして、その場にいる全員が飛んできた方を見ると、

「悪いが、ここから逃すわけには行かないな・・・」

紫色の炎が上がり、

ゆっくりと近づいていく

「魔化魍!!!」

鬼

の姿があった・・・

第九ノ卷 《音撃戦士の戦い》

鬼……

古来より人々から恐れられてきた恐怖の存在、まさに存在そのものが悪であり、倒すべき絶対の敵。

人々を助ける鬼などいるはずがない……私たち京都神鳴流に属する者はそう教わった……

私もそう思っていた……そして、今私たちの目の前には“鬼”がいた……

紫に燃え盛る炎を払いのけ響鬼に変身した誠。

「桜咲、龍宮。離れている……」

そう言つて、目の前で固まっている刹那と真名に離れるように言う響鬼。

二人の横を通り過ぎていく響鬼。

「あれが、新藤先生なのか？」

真名が響鬼の姿を見て、言葉を漏らす。鬼の噂は聞いていたが、本物を見るのは初めてだった。自分たちが倒してきた妖怪の鬼とは明らかに違っていた。

一方、刹那は彼の姿を見逃さないように見ている。響鬼は他の魔法使い達に見向きもせずにつちグモと怪童子

の方に向かつていく。

「ま、待て!!あれの相手をしていたのは我々だ!君の出る幕hガツ!」
自分たちの事を見向きもせずに、つちグモに向かっている響鬼に声を上げるガンドルフィーニ。しかし、喋るガンドルフィーニに一旦振り向き袖を掴むと、そのまま後ろに向けて投げ飛ばす。飛ばされたガンドルフィーニをタカミチがキャッチする。

「タカミチ、他の皆も出来るだけ離れてたほうがいい」

タカミチや他にいる魔法先生と魔法生徒に離れるように勧告する。

「誠くん……いや響鬼くん!あのつちグモは魔法攻撃をしてくる。気

を付けるんだ！」

「!!・・・、恐らく魔族や妖怪なんかを食べたんだろ・・・」

タカミチの忠告に、何かを思い出す響鬼。魔化魍の中には極まれに、妖怪などを喰らい力をつける特殊な魔化魍がいる。今回のツチグモそう言った類のを喰らったという事の可能性がある。ならば、考えられるのは一つ。ここに来てから現れていた魔族達の残党を捕食したのだろう。

「だが、結局は魔化魍だ。どんなに変わろうがその本質は皮変わらな
い！」

そう言って駆け出す響鬼。それに気づいた怪童子が口から強力な粘着性の糸を吐き、響鬼の体を拘束する。そのまま、響鬼を投げ飛ばそうとするが。

「かかったな。火遁・龍火の術！」

響鬼の口から、炎を吹き出し怪童子とつながる糸を伝っていく。炎がまるで龍の如き姿で怪童子を飲み込む。

「があああああああ?!熱い!!」

悲鳴を上げ藻掻き苦しむ怪童子。ちなみに先ほどの技は火遁と言っているが、出力を上げて操っている鬼幻術・鬼火なのだ。正確には忍術の部類ではないが、同じ系統の術のあるため、この忍術を名乗っているだけである。

「(この術をくらっても爆散しない。武者童子並の硬さや防御力か)」

通常のツチグモの怪童子なら、術一発で爆散し自然物に還るはず。前に強化された武者童子や鎧姫といった戦闘した際に防御力などが桁違いに強化されていた。今回は魔力により身体能力が向上しているという事だと推測する。ならば、それを上回る攻撃をしてやればいい。自身の右手に紫色の炎が吹き出す。

「はあああああああ!!」

そのまま、足に力を入れ一気に怪童子の間合いを詰める。その勢いのまま拳を突き出し、怪童子の腹めがけて攻撃をする。瞬間、爆発が起きる。響鬼の打撃力は最大時5333貫、つまり約20tの力を出すことができる。普通に考えれば、ビルや人間などは一瞬で粉々にな

る威力。そして、縮地による高速移動と炎による能力により加速した威力はそれ以上にあがり、あの威力の爆発を起こした。響鬼の周囲は砂煙が舞い上がっていた。

「す、すごい……」

としか言いようがない威力に戦いを見ていた刹那は思わず声を漏らす。あれが本当に人間が出せる威力なのかと、気を強化してもあれだけの威力の拳撃は出せない。舞い上がる砂煙が上がる中、必死に響鬼の行方を追う。

「刹那、あれを見ろ！」

真名の指し示す方向を見る。砂煙が晴れる中で既に響鬼とツチグモの戦闘は始まっていた。あの一撃で怪童子を粉々にして更にツチグモに追撃をしていたのだ。

迫り来る、鋭く爪を避けながら両手に持つ音撃棒・烈火を構え攻撃の機会を伺っている。

時折、音撃棒から伸びる炎の剣が爪を切り落としていくが、ツチグモの超速再生ですぐにもとに戻る。

「(再生が早い・やはり、魔力の影響か。動きを封じて攻撃するしかない) 土遁・地動核！」

一旦、烈火を戻し両手で印を結ぶ。そして、片手を地面につけるとツチグモの周囲の地面が突然下がる。任意を範囲の地面を上下にする事が忍術《土遁・地動核》。動きを封じ込めたり、相手の不意打ちで使ったり多様性が効く術である。ツチグモの体が響鬼のいる地面と同じ高さまで下がる。すっぽり同じ大きさにハマってしまい、身動きがとれなくなり、爪や口から出す攻撃もできない。

この機を勿論逃さない響鬼は口から鬼火を出し、ツチグモを燃やす。

『ギャアアアアアアア!!』

ツチグモの悲鳴が響き渡る。燃え盛るツチグモに背中に飛び乗る響鬼。暴れるツチグモに振り落とされず、装備帯に装着している音撃鼓・火炎鼓を取り出し、背中に押し込む。手のひらサイズの火炎鼓が回転し、大きくなる。そして、装備帯の烈火を持ち、高らかに上に構

える。

「はあああああああああ！」

一気に振り下ろし、浄めの音である音撃を流し込む。音撃打・一気火勢の型。二本の音撃棒を同時に叩きこむ攻撃。通常の火炎連打の型は交互に約30回程打撃したおす方法を改良した型。長き叩き続けるのは、かなりのリスクを伴うため、極力少ない方法でに攻撃手段である。

「あれが、鬼の攻撃手段か・・・」

真名から見れば、ただ太鼓を叩いてるようにしか見えない。先ほどの攻撃の方がまだ、効いてそうな感じがしていた。しかし、姿は見えないがあんのツチグモは確実にダメージを受けているのはわかる。

「龍宮くん、少し拍子抜けしたのかい？」

いつの間にか、隣にいるタカミチが話しかけてきた。

「ええ、先ほどの炎を吐いたりした攻撃の方が余りに圧倒的でしたので・・・」

「だろうね。でも、彼ら鬼達は遙か昔から、ああやって魔化魍を倒してきたんだ。それが魔化魍を倒す唯一の方法なんだよ。僕達がどんなに強い武器や、魔法を使っても倒せないんだ。だから、鬼は戦っているんだ。僕達と同じように人知れずにね」

音撃棒を振り上げ、太鼓の音を鳴らしツチグモを清めていく響鬼の姿を見ながら言うタカミチ。

「・・・随分、鬼に関して詳しいですね先生。鬼の存在は私みたいな裏社会の人間でも余り知られていないのに」

「僕も昔、一緒に戦った事が会ってね・・・」

どこか懐かしむように顔をするタカミチ。

そんな事を思ってる間に、響鬼の方は、最後の一撃をする為に、力を込めて振り下ろした。

「はあっ!!」

ドンッ!!の音と共に、ツチグモの体に亀裂が入り爆散する。ズズズツと音を立てて、先ほど下げてしまった地面をもとの位置戻して上がってくる響鬼。麻帆良学園に現れた内の一体魔化魍《ツチグモ》倒

された。

全員（タカミチを除く）が息を飲み、鬼である響鬼の姿を見ていた。先ほどの戦闘を見れば、誰しも驚愕しているのだ。常識はずれの拳撃、地面を動かし敵を拘束した技の数々。そして、先ほどされだけ苦労していた魔化魍をあつという間に倒した事にほとんどの者が、様々な思いで響鬼の事を只々見ているだけだった。

響鬼はそんな、彼らの視線を気にすることなく顔だけ変身を解き、タカミチの方に歩んでいく。

「悪いがタカミチ。あとの事任せていいか？近くにネギ達がいるんだ」

「それは構わないけどネギくんがかい？それに達って・・・」

「神楽坂と近衛だよ。俺たちの後を付けたたみたいでな。開けた場所で待機して貰ってるんだ」

どうやらあの時から明日菜と木乃香が尾行しているのに気づいた誠が、ネギと一緒に待機させていたようだ。しかし、それを聞いたとたん刹那が血相変えた顔で誠に近づき。

「木乃香お嬢様がここに来ているのか！一体どこにいるんだ！」

「な、なんだ急に・・・それにお嬢様？」

いきなり食って掛かる刹那に困惑する誠。それに木乃香の事をお嬢様と呼ぶ刹那。しかも、完全に口調も変わっており、まるで敵に尋問でもしているかのようだった。

「貴様如きが知らなくても良い事だ！それより木乃香お嬢様は一体どこにいる!?!」

自身の獲物である夕凧に既に手をかけている。いつでも抜かんとばかりする勢いだ。

「刹那くん！仮にも君たちの副担任でもあるんだぞ！」

余りの態度にタカミチが静止に入る。彼女が木乃香の護衛の為に付いているのは学園長から聞かされており、色々な事情も知っていたが、今のはとても見逃せる言動ではなかった。

「高畑先生。しかし!!」

「刹那、落ち着け。今のは確かに口が過ぎていたぞ」

真名も見かねて刹那をなだめに入る。

「くっ!!木乃香お嬢様!!」

そう言つて、刹那はどこにいいのかわからない木乃香を探しに、漆黒の森の中に向かっていった。木乃香達がいる方とは別の方へ向けて。

「待て!桜咲!!一体どうしたんだ?」

「悪いね新藤先生。あいつと近衛は色々と事情があつてね」

「まあ、別に詮索するつもりはないからいいんだが『キヤアアアアアアアアアア!!』!!」

突然、森の方から響き渡る声。あの声の主は・・・

「神楽坂か!」

「何かあつたのか!?!」

「俺がすぐに行く!タカミチ達はここら一体を警戒しててくれ!」

タカミチ達にそう言うと、誠は声の方に急いで向かつて行く。まるで忍者のように木から木へ飛び移りながら移動していった。

遡ること数分前・・・

誠とネギが魔化魍がいる場所に向かつている途中、走り抜ける森の中で後ろから追ってくる気配を感じ、待ち構えることにした。そして案の定、尾行してきた明日菜と木乃香がやってきたのだった。

場所もまだそんなに近いわけでもないのに、ネギをここに残し、後で迎えにいくという事にして待機して貰いことになった。既に二人

共、女子寮に戻る方向すらわかっていなかったようだ。

そして、現在にいたり

「あの、明日菜さん。もしかしてまだ疑っているんですか？」

近くに石に腰をおろしているネギが、近くで木乃香と一緒に石の上に座っている明日菜に話しかける。内容は言うまでもなく、魔法だのなんだの事だった。

「当然でしょ。私アンタが先生なんてまだ認めてないし、絶対魔法使いだって思ってるから」

キツパリと断言する明日菜。おまけにまだ担任の先生がタカミチからネギに変わった事を根に持っている。

「明日菜はそんな事言わんと、ネギくんこんなにかわええやで？」

「可愛いとか関係ないわよ！大体、コイツはただのガキンチョじゃないのよ!!魔法使いよ魔法使い!!私はしつかりこの目でみたんだから！」

「だから、僕は魔法使いではないですよ！」

「嘘言いなさい！大体さっきの新藤先生だって、ここらへんを只ランニングしてたとか可笑しいじゃない！」

先ほど、誠が明日菜に聞き出された際に、とりあえずランニングしてたと言った事があまりに嘘八百だった為、より疑り深くなっていた。

ネギも何とか誤魔化す言い訳を頭のなかで考えていると、突然、轟音鳴りと向こうの森の方で閃光が見えた。

「うわっ!?!何今の!?!」

明日菜が飛び上がり、轟音が聞こえた方を向いた。

「まさか・・・お兄ちゃんが・・・?」

ネギもまさか、今の攻撃が誠の攻撃なのではと何故か思う。

「ちよつと、ネギ坊主!新藤先生あつちの方に用事があるとか言ってたけど大丈夫なんでしょうね?」

「だ、大丈夫ですよ！」

「本当に?」

なんか怪しいと言わんばかりに疑いの目を向ける明日菜。

すると、木乃香が明日菜の肩を叩き。

「どうしたの木乃香？」

「な、なあ明日菜。あそこに何かおらへん？」

そう言っつて、若干震えている木乃香が指を指す方向を見る。暗くてよくわからないが木と茂みがあるくらい。

「何もいないじゃない」

「でも、何か感じたんや。今」

「ちよつと、やめてよ木乃香・・・ああ、もう私が見てきてあげるわよ！ほら、ネギ坊主それ貸しなさい！」

「あわっ!?ちよつと強引じゃないですか・・・」

木乃香言っつたことにビビる明日菜だが、気の強い彼女は率先して正体を暴きに行こうとする。ネギが持っている懐中電灯を奪うと、木乃香が指した方に向かう。

「さあ、で、出てきなさいよ！」

少しビビりながらも、懐中電灯でそこを照らす、特にだれかいる訳でもなく、木と茂みがあるだけだった。

「ほくら、やっぱり何もいないじゃない。木乃香の考え過ぎだつ・・・て・・・」

そう言いながら、上の方も照らしていく明日菜には見えた。木の枝から此方を見つめている化物の姿が・・・

「ギャアアアアアアアアア!!」

思わず叫んでしまう明日菜。ネギと木乃香も明日菜が突然悲鳴を上げたのに驚き上を向く。

「な、何やあれ・・・」

「あれは!!危ない!!」

木乃香はなんとも言い知れないその姿に恐怖を抱き、そしてネギは木の上にいる化物が突然、明日菜めがけて飛びかかるのを見た瞬間、放心状態の明日菜に向かう。

間一髪で避けたネギと明日菜。ネギは迷うことなく、携帯用を持ってきた子供用の杖を手に持ち、化物に向ける。

「ラス・テル・マスキル・マギステル！魔法の射手・光の10矢!!」

詠唱を省略して光の三矢を放つネギ。今のネギの無詠唱呪文ではこれが出せる限界。光輝く10本の矢の閃光は、化物に向かう。当たった途端に小規模な爆発が起きると、すぐさま明日菜と木乃香に顔向け、

「明日菜さん、木乃香さん今のうちにここから逃げて下さい！」

「な、何やってんのよ！だ、だったらアンタも一緒に逃げなさいよ！」
明日菜もネギのお陰で放心状態から開放され、目の前にいる化物におもちやのような杖を構えているネギに言う。やっぱり魔法使いじゃないと言ってる状況じゃない。早く、あんな訳のわからない化物から離れたほうがいい。

「僕は明日菜さん達の担任なんです!!生徒を守るのが僕の役目なんです!!だから、うぐつ!!」

「ネギ?!」

「ネギくん!!」

話の途中で、化物がネギの首をつかみ、そのまま仰向けになぎ倒す。
「ぐつ!? (なんて力だ！くそっ!)」

力を込められ、窮地に立たされるネギ。何とか振り解こうとしても、余りの怪力に為す術がない。さらにもう片方に手の鋭い爪が、ネギを引き裂かんとしていた。

「ちよ、ちよつと、何なのよ・・・そいつは私達の担任なのよ。は、離しなさいよ!!」

明日菜は落ちていた石を拾い、化物に向けておもつきりぶつける。しかし、化物の固い皮膚に逆に石が砕ける。明日菜も衝撃で尻もちをつく。

「あつ!・・・あつ!!」

すると、化物の口から何かが飛んでくる。明日菜の体を縛り上げる。

「明日菜!?!」

木乃香が明日菜に駆け寄る。

「ぐうぐう」

体を紐のような物で縛られて苦しんでした。木乃香が必死に引き

剥がそうとするが、ビクともしない。

ネギの方にいたってはm窒息寸前だった。あのままでは爪で殺されるより、先に死んでしまう。

「ネギくん!!」

絶対絶命・・・自分ではもうどうすることもできない

誰か・・・

誰か・・・

誰か・・・!!

「誰か助けてえええええ!!」

「はああああああああああ!!」

「!？」

突然の声に驚く木乃香。次の瞬間、ネギを殺そうとしていた化物が

おらず、いつの間にか木に叩きつけられていた。衝撃でそのまま木が後方にへし折れ、倒れる。

いつのまにか明日菜を縛っていた紐もなくなっていた。

「ゲホッ、ゲホッ！・・・う、明日菜さん、木乃香さん・・・？」

首をしめられていたネギも、酸素を一気に吸い込み、思わず咳き込む。そして、ゆっくりと顔を上げる。

木乃香も、そして拘束から開放された明日菜も顔を上げた。

「大丈夫か、三人共？」

そこにいたのは、かつて自分と木乃香を猫の化物から救ってくれた鬼・・・

「ひ、響鬼・・・さん・・・」

その人（鬼）だった。

第十ノ卷 《迫る脅威》

再び、自分達を助けに来てくれた響鬼。

「ひ、響鬼さん……」

明日菜は思わず、かつて自分達を助けてくれた時に名乗ってくれた名前を漏らす。

「…どうしてその名を!?!」

響鬼の方は、なぜその名を知っているのかと驚く。彼女達にその名は名乗った覚えはないはず。

「あ、危ない!!」

「うっ!?!」

木乃香が叫んだ。先ほどの後ろに跳び蹴りでふっ飛ばした化物がいつの間にか後ろにおり、爪で響鬼の背中を切り裂いた。鬼の鎧が切り裂かれ、鮮血が飛び散る。

「お兄ちゃん!?!」

「大丈夫だ、これくらい!?!…妖姫か、ツチグモに食べられたんじやなかったんだな」

ネギの声に心配するなと言うと、気合を入れて背中の中の傷が一瞬で治癒される。そして斬りつけてきた化物の方に振り向く。正体は向この戦闘の中になかったツチグモの姫。ツチグモに捕食されたとばかり思っていたが。

それよりも、先の蹴りで倒されていないのに軽く驚いていた。同じ鬼である、衆鬼が考案した鬼闘術《来打蹴》ライダーキック。昔やっていた特撮物を参考に考えた技。要は只の飛び蹴りだが、鬼の身体能力を合わせた蹴りで放ち、冗談のような威力を誇っていた為、響鬼もそれを習得していたのだ。

「倒す……鬼!?!」

そんな事お構いなしとばかりに妖姫がこちらにかけ出してくる。後ろには明日菜達がいる、ここで避けるに訳にいかないと判断すると、両手に鋭い爪を出し、鬼闘術・鬼爪を発動する。そのまま、此方に向かってくる妖姫に向かって突き刺すが……

「・・・堅っ!!」

妖姫の堅い皮膚により、寸での所で突き刺せなかった。やはり、先ほど倒した怪童子のような防御力を有している。だとすると、同じ戦法なら倒せるかもしれないが、あれは威力がありすぎてすぐ後ろにいる明日菜、木乃香、ネギまで巻き込んでします可能性がある。

そんな事を思ってるのも関係なく、妖姫は腕を鋭く尖らせた爪のように変異させ、まるで刀のようになる。

今度はお返しとばかりに響鬼を貫こうとする。

「響鬼さん!!」

木乃香が思わず叫ぶ。瞬間、響鬼の口が開かれ、紫色に燃える鬼火が妖姫の頭部を目掛けて一直線に放たれる。

「ギヤアッ!?!」

突然の攻撃をくらい、地面に転がりながら必死に頭部で燃える火を消そうとする。

その隙にネギが呪文を唱える。

「(今だ!)ラス・テルマ・スキル・マギステル・風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ魔法の射手・戒めの風矢!!」

ネギの子供用の杖から放たれる11本の矢は響鬼の体を避けるよに向かい、妖姫の体を拘束する。体の自由を奪われ、必死にもがくが前のように激しく動けない。

「ナイスだネギ!!」

タイミングのよい攻撃にネギを賞賛する響鬼。そして装備帯の音撃棒・烈火を握りしめ2つに重ね合わせる。2つの鬼石から炎の刀身が燃え上がり、巨大な炎の剣になる。烈火剣の火力と刀身を大きくする技《大・烈火剣》。

「はあああ!!」

巨大で高熱を帯びた炎の剣となった大・烈火剣で、妖姫めがけて一刀両断!

「グギャアア!!」

火花が一瞬飛び散った瞬間、堅い皮膚を焼き真っ二つ猟団にされる。そのまま白い粉をまき散らし爆散する妖姫。

最後に残っていたのは、それを倒した響鬼のみ・

「お、終わったの・・・」

わずか数分の出来事だったが、まるで長い時間が終わったような間隔になる明日菜。本当に殺されるかもしれない状況が終わり、気が抜けて座り込む明日菜。木乃香も同じように緊張の糸が切れて座り込む。

「大丈夫か三人共!!」

響鬼は明日菜達に近づき、つい顔の変身を解いてしまう。それを見た明日菜と木乃香は驚いた。

「新藤先生（や）!?!」

「やばっ!?!」

うっかり流れで顔の変身を解いてしまったことに誠はあわてて手で顔を覆う。あのまま鬼になって、早く立ち去るべきだったがもう時既に遅し。あまり一般人に正体は晒せたいはいけないのは魔法使用と同じである。まあ、あんな状況で秘密も何もないのだが・・・なんて言う考えしていると

「やっぱりあの時、助けてくれたのは新藤先生だったんですね!!」

立ち上がり、誠に顔を近づける明日菜。勢いで少しのけぞる誠。

「え?あの時・・・?」

予想外の反応に呆然とする誠。しかし、明日菜の言うあの時とは何なのかわからない。

すかさず木乃香が説明に入る。

「覚えてませんか?3年前に長野でウチと明日菜を助けてくれたのを」

「3年前?長野・・・確かに志賀高原でスキー客を助けた記憶があるが・・・!!まさか、それが神楽坂と近衛なのか!!」

二人は顔を立てに振る。まさかあの時、バケネコから助けたのが二人だったとは予想だに思っていなかった誠。世間は広いようで狭いのである。

「だから、先生に会った時になんとなくそうなんじゃないかなって思ってたんですよ。声もなんか似てたんで」

「そうだったのか。なら、怖い目にまた合わせてしまったんだな……俺が全く無警戒だった……」

「そんな、新藤先生が助けてくれてウチら助かったんやし」

「木乃香さんの言う通りだよ！僕なんか最初は手も足も出せなくて……」

「そうなんですよ……でもコイツ私達を魔法で……」

明日菜が話の途中で、ゆっくりとネギの方に振り向く。ネギも「え？」という顔をする。忘れていたのだが、ネギは明日菜と木乃香の前で、魔法を使っているのを……

「あああああんだ!!やっぱり魔法使いだったんじやない!!さつきはバッチリ見たんだからね!!もう言い逃れできないわよ!!」

「ふえええええええ!!ちよ、ちよつと明日菜さん!!」

速攻でネギに喰らいつき、胸ぐらを掴んで持ち上げる明日菜。咄嗟のことで、何も対応ができずにパニックるネギ。さすがにあれを見られてはもう言い逃れできない。

「神楽坂、ちよつと落ち着け」

「止めないで下さい！コイツ魔法で私の制服や体操服、あげくにパ、パ、ンツまで破いたんですよ!!」

「そ、それはまあ、確かに嫌だろうが……」

完全に怒り心頭になる明日菜。まあ、ネギのくしゃみで武装解除の魔法の洗礼を受けてしまえば怒りたくなる。

「でも、明日菜。さつきはネギくんの魔法でウチらを助けてくれたんよ?」

「う、それはそうだけど……」

木乃香の言葉を聞いて、少し落ち着く明日菜。確かに先ほどはネギの魔法がなければ自分達はもつと早くに殺されていたかもしれない。それにネギは自分たちの事を本気で助けてくれたようとしていた。

「神楽坂、事情はどうあれとりあえずネギを話してやれ。今にも苦しそうだぞ」

「え……あ……」

「きゆう……」

胸ぐらを掴まれて、顔真つ青にしていたネギ。息ができなくなっているようだ。明日菜も手を話して、本日二度目になる窒息死寸前の洗礼を受けてしまうネギ。

「大丈夫かネギ？」

「ゲホッ、ゲホッ……うん、何とか……」

「ご、ゴメンネギ……それから……助けてくれてありがとう……」

明日菜が顔を赤くしながらも、先ほどの謝罪と助けてくれたお礼を言った。

「い、いえ生徒を守るのが僕の役目ですから……」

「……何よカツコつけちゃって……」それに……？」

「それに、嬉しかったです。明日菜さんが僕の事を担任って言うって助けてくれようとした事」

「う……私は別にアンタの事……新藤先生はともかくアンタは担任なんて認めてないんだからね！」

ツンデレ全開の明日菜の言葉にショックを受けるネギ。せつかく担任と認めてくれたとばかり思っていたのだが。

「それより、ちゃんとアンタの事説明しなさいよね！まだ、話は終わってないんだから」

「あと新藤先生の話もうチ聞きたいんやけど……」

二人の正体を聞きたくなる明日菜と木乃香。もう言い逃れもできないわけもない所まで巻き込まれているので

「今日はもう暗いから明日話すよ。場所は俺とネギが借りてる寮でって事でいいか？」

そう言つて、相槌をする二人。誠も変身を完全に解き、人間体に戻る。

とりあえず、二人を女子寮の方に送る為、歩き出す――

その姿を後ろの木の影からからジツと見つめている人物がいた。

「お嬢様……」

その人物は刹那だった。つい先ほどの悲鳴を聞きつけ急いでこの場に駆けつけただ、既に事が全て終わっていたのだ。自分が守らなければならぬ存在である木乃香が危険に晒されていたというのに、そ

してその役目を果たしたのがネギと、あの男・

「新藤・・・誠・・・」

——何故かわからないが、あの男の変異した姿を見て私は思った。あれは私と同じ、人の皮を被った異形の化物。そんな存在が気安く木乃香お嬢様に接していいはずがない・・・私でさえも軽々しく接してお方ではない・・・なのに、平然と接しているあの男の姿に怒りを覚えた・・・そして何よりあの力は危険過ぎるのではと、あの戦いを見て私は恐怖さえもした・・・普段、相手をしている鬼とは比べ物にならない力を持っている。

あのままでは、いずれお嬢様に危害が加わるのではと・・・根拠などない・・・だがなぜかそう思う・・・龍宮が聞いたらお前らしくもないと言われるかもしれない・・・それでも

「あの男は危険だ、お嬢様のためにも・・・私が・・・」

新藤 誠を斬る。あの男は強さは確かに計り知れない。だが、所詮は悪意の象徴である鬼に変わりない。魔を滅する為の存在である京都神鳴流の力であれば、討ち滅ぼせるはず・・・どんな悪意や障害から木乃香お嬢様をお守りするのが私の使命なのだから——

この場を去って行く、4人の後ろ姿を見つめながら刹那は心の中で誓ったのだった。

「(桜咲・・・)」

その視線に気づいていた誠。

「(近衛と何かあるんだな・・・)」

「そうか、誠くんが魔化魍を倒してくれたか」

「ええ、見事な戦いぶりでした」

タカミチから先ほどの魔化魍との戦いの報告をしていた。魔化魍を倒したことに安堵の顔をする近右衛門。残るは確認された残り一体のみ。

「それで、ガンドルフイーニ君達は・・・」

「怪我をした人は治療使いが治療にあたっています。自分達の攻撃がまるで効いていなかったのに、ショックを受けてる者もいますが」

「それは仕方ない事じゃ。あれは、儂らの概念を超えておるからの。今回の件で誠くん達、鬼の存在を見なおしてくればよいのじやがの」

今回の件で、魔法は万能ではないという事をわかってくれればと・・・

しかし・・・

「それは、難しくなってきましたよ。誠くんの戦いぶりを見て、より危険視する者が出てきますから」

「そうか・・・それは残念じゃな・・・」

あの戦いを見て、誠の余りの戦闘能力を目撃し、逆に一部の魔法先生や魔法生徒達は警戒心をより深めてしまったのだ。人間誰しも、強力な力を持つ者が現れば警戒はするもの。それが、自分達の敵と決めつけてしまう者ならば尚更。それを聞き、非常に残念な顔をする近右衛門。

「これ以上、誠君の肩身を狭くはしたくはないですが」

「うむ、折角来てもらって、誠君に失望させたくはないからの・・・」

「学園長・・・それとエヴァの件なのですが・・・」

話を切り替えるタカミチ。

「エヴァンジェリンか、あ奴の件も皆が黙ってはいないじやろうな」

最近、騒がせている吸血鬼騒動を起こしている張本人。はつきり言

わせると、この学園に所属する大半の魔法使い達はエヴァンジェリンの事をよく思っていない。彼女は数十年前までは魔法界を騒がせた吸血鬼であり、600年生きてきた中、既に数えきれない程の悪事を働いている。そんな大悪党が住んでいるのに対し黙っているわけがない。そもそも、今まで何もなく放置していたのは、学園長の助力とサウザンド・マスターのナギのおかげ。ナギがエヴァにかけた呪いにより彼女は全盛期の頃のような力は出せなくなっているので、危険はないと学園長がこれまでずっと言ってきたからだ。エヴァも学園の警備員として、やってくれているので皆も何も言わなかった、だが・・・「エヴァももう限界でしょう。あれから15年が立ちましたから・・・」ここに封印されて、あれからもう15年が経過していた。エヴァももう限界が来ているはず。そして、ナギの息子のネギがやってきてその血縁である血を狙うはず。

「これも、ネギ君の最初の試練じゃと思いたいのじゃが・・・」
「試練にしては、相手があのエヴァでは分が悪すぎます。いくら、封印されてもエヴァは歴戦に魔法使いです。今のネギ君ではまだ・・・彼もネギ君についています」

「もしもの時は儂らが何とかする。それに、そこまで誠君に押し付けるわけにはいかん。魔法使いの問題は儂ら魔法使いが解決するべきじゃ・・・」

机から立ち上がり、月明かりで輝く外の景色を眺めながらそう言う学園長だった。

しかし、この時二人は思っていなかった・・・
エヴァンジェリンと誠が激突するなどは・・・

第十一ノ巻《忍と鬼》

3月8日（土） 麻帆良学園近郊の森林地帯 6：30

まだ、肌寒く感じる3月の季節。普段あまり人が近寄らないこの森のなかを木々をわたって移動する影が見えた。

「よっ！……とっ！……」

忍者少女である長瀬楓は今日も森の中を木から木へ縦横無尽に跳び回っていた。

休日になると必ずこの森に来て、忍者としての鍛錬をしている。日ごろの鍛錬は決して忘れはしない。

女といえども心は忍である。墮落した生活に溺れることは許されない。

忍とは元来そういうものだと思うし……彼女自身もそうありたいと思っている。

それに案外こうした鍛錬も習慣になると楽しくなるものなので彼女もそう思っている。

現に彼女自身、あまり表には出さないものの日頃の修業の成果を試してみたくてウズウズしている。

現代のご時世、戦国、江戸時代に活躍してきた忍者などは時代と共に廃れていく一方である。忍者などは必要でないこの時代では肩身が狭いのだ。

「風が心地よいでござるな〜」

現在木々の間を高速で走り抜けている人間が話しているとは思えないほどのほほんとした口調の楓。

普段、マイペースである彼女らしい一面。

そんな彼女の腹からグウ〜と音が鳴った。

「？……そろそろ朝飯の時間でござるか。そういえば少し腹も空いてきたでござる。川で魚でも獲るとしようか」

朝早く来ていたため、まだ朝食を食べていなかった楓。魚を獲りに川に向かった。

「おろ？・・・誰かいるでござるな」

いつも、魚を獲っている穴場に來た楓。しかし、途中で何かに気づき、近くの木の枝の上で一旦足を止めた。普段人が來ないこの川に誰かがいるのが見えた楓。よく見れば、その人物は逆立ちをして、腕立てをしている。両手ではなく片手で。しかも親指だけで・・・

「すごいでござるな・・・相当な筋肉がない限りできないでござるよ・・・」その様子を見ていた楓は驚いていた。それも程なく終わったように、今度は川の方へ歩いていく。ちらりと、その人物の顔が見えた。

「！新藤先生ではござらんか・・・」

その人物は自分のクラスの副担任の新藤誠だった。まさかの人物に驚く楓。普段から誠の事を只者ではなそうだと思っていた楓。

「うゝむ、しかし何かしらの達人でござろうか・・・むっ!？」

様子を伺っていた楓は、誠の行動に驚いた。誠が川に流れている水の上を歩いていた。あれは、忍法・水蜘蛛の術。足に気を集め水上を自在に移動する忍術だ。まさか、この学園で自分以外に忍術を扱える人物がいるとは思わなかった楓。

その時、

「さっきからその木から見ているは誰だ・・・」

「!?(気づかれていたでござるか・・・)」

誠が楓がいる方を見ていた。気配は完全に消していたはず。しかも、最初からバレていたようだった。

ここは素直に出て行った方が良さそうだと楓は木から飛び降りる。

「いやゝ、バレていたでござるかゝ」

悟られないようにいつも通り、のほほんとした態度で誠に歩いていく。

一方、その人物が楓だと気づいた誠は驚いた。

「長瀬！・・・なんでこんな所に？」

「それは、こちらの台詞でござるよ。新藤先生こそ。それにその忍術……一体先生は何者でござるかな？」

片目を開き、誠を見つめる楓。警戒は怠らず、いつでも攻撃できるように、忍ばせている苦無に手を付けられるようにしている。先ほどの質問で誠も黙っている。

「(困ったな……まさか長瀬が見ていたなんて。でも、この系統の術を知ってるって事は、長瀬は忍者の末裔かなんかか……おまけにすごい警戒されてる……)」

楓の質問にどう答えようか迷う誠。そもそもここに来ていた理由も。体を鍛えなければ鬼の力を維持できない為、こうした誰もいない場所で修行していた誠。こんな森の奥まで人は入ってこないだろうと思っていたが、まさか自分のクラスが来ているとはは思わなかった。

しかし、楓の格好のほうが、何者だって言いたい。どう見ても忍び装束である。第一、今自分が水の上で立っているのを術と言っているの、忍者だとすぐに分かるのだが。

そう思いながらも、どうしようかと考えていると……

グウゥ……腹の鳴る音がした。

「？」

「忘れていたでござる、拙者腹をすかせてここに来たのでござった……」

どうやら、楓のお腹の音だった。さっきまで張り詰めていた空気も、この音で壊れてしまう。

「……一緒に食べるか？」

楓の話聞き岩場まで歩いていく。そこには誠が釣ったであろう岩魚が2匹あり、手に持つと楓に見せた。

「……では、お言葉に甘えるでござるよ」

「いやはや新藤先生が鬼戦士とは驚いたでござるよ」

「こつちは、長瀬が甲賀忍者の方が驚いてるよ。まだ、そんなに若いのに中忍だとはな」

「中忍と言ってもまだまだ修行中の身でござるよ」

岩魚を食べながら、お互いの事を話した楓と誠。甲賀忍者の楓は鬼や魔化魍の存在は知っていた。

そもそも、忍者と猛士との関係も昔は深かった。江戸時代にかけては特に協力体制にあったと当時の書物では記載されている。鬼戦士が使う鬼忍術と言われるものも、忍が扱う忍術を伝えられ、鬼達が改良したものだ。

しかし、大政奉還後、明治時代に入ってから忍は近代化と共に衰退していき、現在でも少数の一族しか生き残っていない。現在では、すっかり表にも出ずに、山奥で暮らしているのだ。勿論、猛士に所属する鬼の中にも忍者出身はいるので、誠も忍者の存在は普通に知っている。楓自身も、故郷に残されている古い巻物や書物などで鬼戦士や魔化魍の知っていたのだ。最も、本物に会うのは初めてだが。

「しかし、鬼である新藤先生が何故このような学校で教鞭をとっているのをござるか？」

「それは、まあ・・・色々だ。その件は聞かないでくれると助かる（この後、神楽坂と近衛に色々言わないといけないからな）」

ようは、面倒なだけであるが。

「うーん、わかったでござるよ。あまり、詮索するのは迷惑でござろうから。その代わりではなんでござるが、新藤先生に一つ頼みたい事があるのをござる」

「頼み？？できる範囲ならいいぞ」

「拙者と一つ手合わせしてはござらんか？食後の運動も兼ねて」

手合わせ、つまり自分と戦ってくれと言う楓。

自分の実力がどのくらい通用するか、試したいのだ。あれだけで、
誠

「……わかった。あまり詮索してくれなかったお礼だ。でも、お互い怪我しない程度だからな」

「心配ご無用でござる。できれば、先生も本気で来て欲しいでござるよ……では」

そう言つて、立ち上がり誠と距離をとる楓。

そして、いきなり楓が十人に増える。忍法・影分身の術。幻覚や幻でもない実体を持つ分身を作りだす忍術であり、習得するのは難しい高等忍術の一つ。

「「まいる!!」」

分身した楓が、それぞれバラバラに誠に襲い掛かる。手に持つ苦無を投げる。

「つと!!」

誠はそれを半身になって避け、水辺の方に走る。

「隙ありでござるー!」

その避けた所に一体の楓が殴りかかった。誠は体を捻って避けた。今度は別の楓が蹴りかかる。そして、またそれを誠が避け、別の楓が攻撃するが続く。一旦、楓達は近接攻撃を止め、誠を囲むように円になる。

「「これは避けられるでござるか。火遁・火炎弾の術!!」」

分身楓たちは、印を結び口から火炎を吹き出す。それぞれが発動した術は一つになり円を描く炎壁になる。そのまま誠に向かって炎の壁が迫る。この状況では、足の気を解き水中に逃げるか、上空に高くジャンプするしかない。どっちに逃げてもすぐに動けるようにする。

しかし、誠は両手で印を結ぶと、

「水遁・水陣壁!!」

周りにある川の水が一気に立ち上がり、水の壁ができる。その壁は火炎の壁にぶつかり一気に蒸発する。当たりに水蒸気で出来た霧があたり覆う。それを近くの木の上から見ている本体の楓は状況を観察していた。

「まさか、水遁の術を使えるとは……しかし、霧の中でも、気配を読めば……」

「わかるか？」

「なっ!？」

突然、後ろから誠の声がし、後ろを振り向く。

「俺が声をかけなかったら、やられていた。俺の勝ちだな」

「それで……ござるな。拙者の負けでござる」

素直に負けを認める楓。誠の言う通り、この場で声をかけなかったら本当にやられていた。勝負はあっさりとついてしまった。

「しかし、水遁の術を使うとは凄いでござるな新藤先生」

「いや、俺は水遁系の術はあんまり得意じゃなんだ。うまく制御できなくてな。今のはとりあえずやってみたってだけだ。俺も、まだ術の鍛錬積まないといけないんだ」

「それでも、あれだけの水の壁を作るのは凄いでござるよ。しかし、先生の本気を見れなかったのは残念でござるな」

「本気をだしてないのは長瀬もじゃないのか？」

「いや、新藤先生の本気を出したかったでござるが、その前に負けたでござるから……しかし、先生はどうやってこちらの居場所がわかったでござるか？先ほどより気配は完全に消していたはずでござるが」「感知能力が高いだけだよ俺は。鍛えていけばそう言った能力も身につけられる。まあ、自然に身を預るみたいな感じにな」

「うーむ、中々難しいでござるよ。拙者も、気配は探っていたでござるが、先生のは全く気づかなかつてござるよ。それにあれほどの地点からこの場所まで一瞬で移動したでござるからな……拙者もまだまだ修行しなければならんでござるな」

「あれだけ、高密度の影分身を十体もできるのは十分凄と思うけどな……」

そう言つて、木から飛び降りる誠と楓。

「先生は行くでござるか？」

「ああ、ネギの朝飯まだ作ってないから、それに今日は色々と用事があつてな」

「また、手合わせして貰えるでござるか？」

「その時次第だな・・・」

「・・・その前に古と一度、手合わせしてほしいでござるよ」

古菲と友達である楓は、前々から誠と手合わせしたいと言っていた。

「・・・確かに相手をしないと毎日襲われるからな・・・でも、今日の事は言わないでくれよ。食いつきそうで後が面倒な事になりそうだからな」

今日は、お礼も兼ねて相手をしてあげたが、ああ好戦的に申し込まれるのは、あまり嬉しくない誠。

「大丈夫でござるよ。拙者、口は堅い方でござるから、では先生さつきはござ馳走と手合わせありがとうでござる！」

そう言つて、誠とは反対方向に向かう。

「ああ、長瀬」

「何でござる？」

「修行もいいが、森で変な化物に会ったら、迷わずにげるんだ」

「わかったでござるよ」

楓はそう言つと、煙を出して姿を消した。

「わざわざ、煙出さなくてもいいだろ・・・しかし、長瀬楓か・・・」

苦笑いしながらも、あの年であれだけの分身や術が使いこなせるのに関心した。

「・・・それにしても2―Aは本当に、色々な奴がいるんだな・・・」

そう思い、誠は一人、家に帰るのだった・・・

「へく、アンタそのマジなんたらになる為に、学校の先生やってるんだ」

「マジステル・マジですよ。明日菜さん・・・」

「う・・・わ、わかってるわよ」

誠とネギが借りている一軒家の寮宅のリビングにて、明日菜と木乃香に自分たちの正体や事情等を説明していた。余り深い事は言わず、簡単な内容だが。木乃香の祖父である近右衛門が魔法使いであると、いう事を知らなかったのはさすがに木乃香も驚いていた。これは、少しやばいと思っただが「なんや〜ほなウチも魔法使えるんやろか〜」とか言っつて、すぐにすんなり受け入れた。木乃香の適応力に驚いたネギと誠。

「でも、先生になってマジストロ・マジになれるもんなん？」

「近衛、マジステル・マジだ」

「あははは、先生をやるのは、マジステル・マジになるための課題のよ
うな者ですから」

「つまり、受験資格みたいなもんなん」

「そういう事ですね。僕以外に卒業した生徒も色々な課題をだされて
いますから」

先生を務めてマジステル・マジになれば世話はない。先生をやるのは、マジステル・マジになるための課題であり、それを達成してからマジステル・マジの資格を得るための試験を受けられる仕組みになってる。ネギ以外の卒業生も課題を出されている。幼馴染のア
ンナ・ココロファも古い師をする課題を出されている。

「まあ大体の事情はわかったわよ。魔法の事は内緒にしてあげるか
ら」

「ありがとうございます。バレたら、オコジョにされますから」

「あははは、オコジョにされるのはさすがにきついよな・・・」

オコジョになったネギを想像する誠。そもそも、そんな小動物にされるのは自分でも嫌である。

「そんな時は、ウチが飼ってあげるから大丈夫だよ」

「木乃香が言うのと、冗談に聞こえないわよ」

サラツと怖いことを言う木乃香に突っ込む明日菜。

「でも、新藤先生もその昨日のまかもう…でしたっけ？その化け物つてまだ、学園にいるんですか？」

話を变えて、誠の話に移る明日菜。誠もある程度の事は話している。本当なら、一般人に鬼や魔化魍の存在を言うのは秘密だが、あそこまで関わられど、逆にいわないでおくとまた、着いてきて危険な目に合わせる可能性があるるので説明することにしたのだ。

明日菜の質問に、うぐんと顎に手を当てて言う。

「そうだな、あと一体潜んでるって話だ。でも、その魔化魍は地中に潜んでるのが多くてな。見つけ出すのは結構大変なんだ。その魔化魍が地上にでるのを待つか、寝床を見つけるかだな。まあ最も後者の方法で見つけるのはかなり骨が痛いから、地道に待つしかないのが現状だ。今も偵察に出してるしな」

「なんだが、とんでもないのが潜んでるんですね」

「ああ、だから昨日みたいに興味本位で着けるのはやめろよ」

そう言っつて、明日菜と木乃香に釘を打つ誠。二人も「は〜い」と言っつて返事をする。本当に大丈夫なのかと心配になる。

「とりあえず、俺から話して上げられるのはこれくらいだ。後は全部秘密にしとかないといけないから」

「もっとお話し聞かせて欲しかったんにな〜」

木乃香が残念そうな顔をして言う。でも、これだけの話だけでも大分わかったことも沢山あったのは良かったと思う木乃香。

「じゃあ、俺は学園長に用事があるから」

「学園長に呼ばれてるのお兄ちゃん？」

「いや、俺のほうが用事があるんだよ。それと、これマクダウエルの家に届けてくるから」

そう言っつて、ダイニングのテーブルにおいてある2つの封筒を取る。名前の欄には《エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル》と《絡繰茶々丸》の名前が記されていた。

「エヴァちゃんに会いに行くんですか？」

「ああ、学校に全然姿見せないからな。プリントやらが沢山溜まって
るんだよ。あと絡繰のものな」

「あの二人は1年の頃からよく休んでるんですよ・・・羨ましい」

「明日菜さん学校はちゃんと行ってくださいよ」

明日菜のボソツとした一言に突っ込むネギ。はつきり言っただけが嫌いな明日菜にとっては、学校なんて楽しみなのは体育とタカミチが担当だった英語くらいである。

「でも、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんの所に行くなら僕も・・・
「まずは副担任の俺が行くよ。それでダメならネギってことでいいだ
ろ。それよりも・・・」

そう言うとネギに顔を近づける。

「お前、また風呂に入ってないだろ？」

「ギクツ!？」

「なんですって!?!くんくん・・・ちよつとアンタ少し臭くいわよ!!」

「明日菜よくわかるな。ウチ全然臭わへんけど・・・」

明日菜もネギに近づき、匂いをかぐ。昨日の戦闘で地面に倒されて
おり草や泥の匂いがする。

「なんで風呂に入らないのよ。まさか風呂が嫌いとか言うんじゃない
わよね?」

「・・・いや・・・その」

「何よ」

何かを言いたそうにするネギだが、中々言おうとしない。明日菜も
気になり、耳を少し近づけるとネギがボソボソと明日菜に事情を言
う。すると

「はいはい、じゃあ行きましようねお風呂に」

「ちよ、ちよつと明日菜さん!」

そのまま、ネギを担ぎ上げる明日菜。どうやら本当に風呂が嫌いな
ようであり、それを聞いた明日菜が無理やりにも風呂に連れて行く
事にした。

「せっかくだから、女子寮の風呂がいいわね。あそこは昼間でも入れ

るし、何より広いから」

「今からお風呂に行くん？」

「このお坊ちゃんがお風呂嫌いらしいのよ」

「あれま。いかんよネギくん。女の子の前は綺麗になつとかんと」

「いや、それはそうですけど。お風呂ならこの・・・」

「いいから行くの!!新藤先生、ちよつとコイツを風呂に入れてきますんでー!また、後でー!」

「あ、ああ・・・よろしく頼む・・・」

明日菜の行動の速さに少し驚く誠。内心、余計な事いわなければよかったかと思ってしまう。しかし、さすがに人前で風呂に入つてないのは色々と悪いだろうと思つて言つたのだが。

「じゃあ、俺は言つてくるから。ネギの事よろしく」

「はあい!」

「ちよつと、僕まだ行くとは・・・」

「ガキンチョは年長者のいうことを聞きなさい!!」

「ふぎや!」

哀れネギ。この時はさすがにネギがかわいそうに見えた。その様子を見届けると誠は先に寮を出て、エヴァンジェリンと茶々丸がいる家に向かつて歩いていく。

「はあ・・・」

今日は、午前中だけでこんなに騒ぎになるとは予想外だらけのことに誠は軽いため息をついた。

しかし、誠はまだ知らなかった・・・

「マクダウエルと絡繰の家は・・・あの林の向こうか・・・」

この選択肢が自分にとって大きな激突を招いてしまうことに・・・

第十二ノ卷 《吸血鬼と対面》

麻帆良学園都市 エヴァンジェリンの家 10:50

「マスター……何者かがこの家に向かってきています……」

「何？また、タカミチの奴が告げ口にも来たか……」

ベットで横になりながら、すぐそばで立っている茶々丸の報告に体を起こし耳を傾けるエヴァンジェリン。夜行性である彼女は普段はベットで寝ていることが多く、主に動くのは夜の時間帯。今日もベットで一日中横になり、夜になるのを待っていた。

「この反応は……どうやら新藤先生のようにです」

「新藤誠だど？まさか。ジジイの奴が余計な事を……」

まさか、学園長が誠にエヴァンジェリンの正体を告げ口したのではと思うエヴァンジェリン。エヴァンジェリンの問題などは、主に学園長とタカミチが対応している。その為、ここ数日間でもタカミチが警告を込めてこの家に来ていた。学園長がまさか、誠に話したのかと思うエヴァンジェリン。

「茶々丸、外の様子を見ろ」

「はい、マスター」

そう答えた茶々丸は窓際に歩いて行き、カーテンの隙間から外を眺める。望遠レンズにもなる眼を使いこちらに向かってくる誠の様子を見る。Yシャツにスーツのズボン、ジャケットを着用していた。手には封筒が2つ持っている。

「どうやら、何かの書類を届けに来たと思われます。新藤先生の手封筒が見られますので」

「(封筒だと……) ふん、大方学校で溜まったプリントかなにかを届けにでも来たか。奴も一様は副担任だったしな」

誠が赴任してたった一日しか会っていないが、そこはちゃんと覚えているエヴァンジェリン。今更何を届けようが、かれこれ15年も学校に通っている彼女にとってはもう見たくもない紙くず程度のプリント。これだけでは判断できないが、エヴァンジェリンの予想通り、誠は単に学校に登校と溜まったプリントを届けに来ただけ。

「マスターどうなさいますか？」

窓際に立つ茶々丸は対応をどうするべきか、指示を待っている。

「適当にあしらっておけ、奴と会うのは力が完全に戻ってからだ」

「了解しました。マスター」

エヴァンジェリンの命令に従い、寝室の扉に歩いていく茶々丸。

「（・・奴を血祭に上げるのは坊やの血を頂いてからだ。そして完全復活した私の力を思い知らせ、鬼風情が最強の魔法使いである私の足元にも及ばんということにな・・・・・）」

かつて受けたある鬼から受けた屈辱を晴らすために、そして自分がかつて世界最強の悪の魔法使いである栄光を取り戻すためにも、今はジツと耐えて今夜行う計画のためにも。この苦渋に満ちた15年の歳月を取り戻す為に・・・・・

そう思いながら眼を閉じる・・・・・

「（ふん、本当に忌々しい奴だよナギ・・お前が言った光など私には所詮無理な話だったのさ。あんな男に惚れていたなどとは今更ながら虫唾が走る。この学園結界や馬鹿げた呪いなどのせいで・・・・・この呪いが及ばないのは精々あの別荘ぐらい・・・・・!!）」

しかし、突然何かを思い出すエヴァンジェリン。

「いや、待て・・あの空間ならば学園結界も封印も余り影響はない・・：ククク、私とした事が封印を解くことばかり頭に浮かんで手っ取り早い方法があるのを忘れていたわ!!」

「マスター？」

突然、ベットから立ち上がり嫌な笑みを受けながら叫ぶエヴァンジェリン。何事かと茶々丸は振り向く。

「茶々丸、新藤誠を私の別荘に案内しろ」

「よろしいのですかマスター？」

「何、今日の計画に備えて少し準備運動をしようと思ったんだよ。フフツツ」

口元を歪ませて笑うエヴァンジェリン。こういう場合のエヴァンジェリンはよからぬ事を企んでいる顔だと自分のデータメモリーの情報から推測する茶々丸だった。

「おおい、いないのか？ 副担任の新藤だ。マクダウエル？ 絡繰？」

エヴァンジェリンと茶々丸にプリントを届けに家まで来た誠。立派なログハウスの家に眼を奪われながらも、玄関まで歩き、木製の扉をノックする。しかし、さつきから返事がない為、留守の可能性がある。

「仕方ない。また学校行つた帰りによるか・・・」

そう言つて、先に学校に向かうことにし、家から離れようとする。

その時、扉がゆっくりと開き、ギギギツと音をたてる。

「すみません新藤先生。出るのが遅くなつてしまつて」

出てきたのはメイド服を着用している茶々丸だった。

「いや、てつきりいなと思つてな」

「申し訳ありません。所でここにはどういったご用件で？」

「用も何も、絡繰とマクダウエルがこないからプリントがたまりにたまつてるんだよ。それに学校を無断欠席してるから、何があつたか様子を見に来たんだよ」

質問してきた茶々丸に素直に答える誠。赴任したばかりで先生のせの字もまだわからない誠だが、学校を無断で休むのはダメぐらいはわかる。それにネギと一緒に受け持つクラスの生徒なら尚更注意は必要になる。

「そうでしたか、それはご迷惑をお掛けしました。どうぞ中にお上がり下さい」

「いいのか？俺はただこれを届けに来たのと、顔を見に来たけなんだが」

「マスターが中でお待ちしております。どうぞ遠慮なくお上がり下さい」

「(マスター?) マクダウエルがか？まあ顔見るぐらいだからな」

茶々丸のマスターという単語が引つかかるが、とりあえずエヴァンジェリンがいるなら一言声をかけるぐらいはしよう。その後、ネギに話してれば行くだろうと考え。茶々丸の言葉通りに家の中に入っていく。

中に入るとそこには様々な人形が乱雑に、不規則に置かれ、異様な雰囲気醸し出している。ファンシーと形容してもいいだろう。あまり人の家をジロジロ見るのは失礼だが、誠もこの光景には眼を奪われた。

「(こんなに人形がある家は見たことないな・・・)」

「どうかしましたか新藤先生？」

「中々いい趣味だなって思ってたな」

「全てマスターが集めた物です。こちらです」

そう言つて、奥にある扉を開けて誠を誘導する茶々丸。階段は下に向かっている。

「(地下室か、この家見かけより凄い構造してるんだな)」

そう言つて、黙々と下に降りていく。ようやく到着したかと思うと、そこには台の上に乗ったある物が目に入る。

「これ、ボトルシップみたいだな。よく出来てる」

上に置いてあるのは、サッカーボールより少し大きいくらいの瓶の中に、小さなジオラマのような模型があった。ボトルの中に船の模型がるボトルシップのような物のようだ。中には城にも見える建物が見える。

しかし、ここに入った方がいいが、この部屋にはこれ以外何も無い。

「絡繰、マクダウエルはどこにいるんだ？」

「その中でお待ちしています」

そう言つて、茶々丸は先ほどの水晶に指を指す。

「はい？この中に、冗談にも程が・・・なっ！」

誠は茶々丸の言葉を冗談だと思い、水晶に方に近づく。すると突然、地面に魔法陣が浮かび上がる。そして、誠は声を上げる暇もなく、あつという間に姿を消してしまった。

そして気がついたら誠は見たことのない場所に立っていた。

「な、なんだ・・・ここは・・・」

いきなりのことにうまく言葉が見つからない。ようやく出た声もここがどこかわからない。

そしてゆっくりと辺りを見渡す。

上を向けば青い空に白い雲、ここを照らしている太陽の姿。下を向けば小さな砂辺もあればそこから広がる一面の青い海がある。まるで南国のプライベートビーチのように思わせる。

辺り一面は先が見えない水平線。誠がいる場所は海に浮かぶように作られている白い建物から伸びる手摺もない石橋の先にある円筒状の塔の上。すぐ下には畳に書かれた五芒星が描かれている。そして、それを確認した誠は先ほど見たジオラマの模型を思い出す。

「ここ、さっきのジオラマの中か？」

そう言いながら、目の前にある石橋の上を歩きながら辺りの景色を目に焼き付ける。

そして、気がつけば隣に建っている塔まで来ていた。中央には大きな白い塔。まるでアメリカの首都ワシントンD・Cにある《ワシントン記念塔》のようだ。そこを中心にあるように巨大な魔法陣がある。

その時・・・

ズウウウウウ・

「!？」

突然自分の後ろから殺気を感じる誠。

殺気の放つ方を振り向くと

「ようこそ、新藤誠。我が別荘に・・・」

「マクダウエル・・・」

空中を佇み、此方を見下ろしているエヴァンジェリンの姿がそこに

あつた。

その可愛らしい少女の姿から放たれてるとは思えない。想像を絶する威圧感を出ている。彼女の金色の長髪が風でなびいているが、より一層この場の恐怖心をかき立てている。

と、エヴァンジェリンはそう思っている。

「お前……魔法使いだったのか。それに俺の事知ってるようだな」
「まあな、貴様の事はジジイから連絡があつたからな。鬼のことも学園で集められるだけの情報は知っているさ。まあ最も、貴様ら鬼風情の力では最強である私の足元にも及ばんことがわかつただけだがな」
そう言つて、ゆつくりと誠の方に近づいていくエヴァンジェリン。
エヴァンジェリンの挑発ともとれる発言に特に誠も怒るわけでもなく。

「……で、俺をこんな所に呼んだ理由は何だ？今日はただ、お前と絡繰が休んでる間の溜まつたプリントとかを届けに来ただけなんだが」
エヴァンジェリンの方に向かって、今日来た理由を述べる誠。そんな態度にエヴァンジェリンは少し苛つきながらも。

「ふん、私の殺気を受けてそんな脳天気な事を言っている貴様の平常心さは褒めてやろう」

上から目線の発言をするエヴァンジェリン。まあ、実際本当に上から見下ろしているのだが……

「別に褒めて何も出ないから。それに俺の質問に答えてもらつてないぞ」

「知れたこと、ちよつと今夜の為に少し肩慣らしをしておこうと思つてな」

「肩慣らし……魔法の事か？悪いがお前もさつき言つたけど、俺は魔法使いじゃないから相手にならないぞ」

「……貴様、それは私如きでは貴様の相手にはならんという事か？ええ？」

眉間にしわを寄せて、誠の発言に反応するエヴァンジェリン。エ

ヴアンジェリンの解釈だと、お前では俺の相手にはならないと聞こえたようだ。

「おい、何か勘違いしてるみたいだが。お前が思っている事なんて言っていないぞ。それに俺は別段お前が弱いとか言ってるわけじゃないから……?」

誠も先の発言を勘違いしているエヴァンジェリンに弁明する。

しかし、既にエヴァンジェリンの耳に入っていない。

「ハハハッ!! 貴様といい、あの鬼といい……私の事を侮辱するのが余程好きと見えるな……鬼風情がこのエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに向かって……」

蘇る記憶の中、誠より以前に会ったことのある一人の鬼。まるで自分のことなど眼中にないと言わんばかりの態度、そして発言の数々。封印状態とはいえ、自分では手も足も出せず、無様に敗北したあの日。

あの日以来、鬼戦士の事を憎み、いずれ恐怖を与えてやると誓ったエヴァンジェリン。

それは、自身がかつての最強の魔法使いであるというプライドが今のエヴァンジェリンを駆り立てていた。

明らかにエヴァンジェリンの様子がおかしいのに誠も顔つきが変わる。

「よくほざいたなあ!!」

シュツ!

「っ!?!」

突然、エヴァンジェリンが消えたかと思うと、誠の目の前に現れ鋭い爪で切り裂こうとする。咄嗟に体を横に逸らして攻撃を回避する。そのまま飛びエヴァンジェリンと距離をとる。よけきれなかったのか、誠の頬に傷ができていた。

「いきなり何してんだ!! 今の避けなかったら首が飛んでたぞ!!」

エヴァンジェリンの攻撃を非難する誠。いきなり戦闘行為を行い、先ほどの攻撃は本気で避けなければ首が飛んでいた。

「ちっ、今のを避けたか。大した反射神経だな新藤誠。だが、今の貴様を殺った所で意味がない。さっさと鬼に変身したらどうだ?」

「何だと・・・」

「まあ最も貴様が鬼になった所で、私と貴様の力の差は天と地程だがな!!ハツハツハツ!!」

悪魔でこの場において最強なのは自分と言い張るエヴァンジェリン。この空間ならば学園結界や呪いはある程度遮断できる。つまり、今のエヴァンジェリンは全盛期とほぼ同等の力が出せる。

しかし、人間体である誠をここで倒しても意味がない。鬼なった誠を完膚なきまでに捌り殺しに、自分の力を思い知らさなければならぬ。早く、鬼に変身する事を促すエヴァンジェリン。

「・・・悪いが、俺はこんなくだらぬ事のために鬼の力を使う気はない」「なんだと・・・貴様!」

しかし、誠からの返答はNOだった。誠から考えれば今の相手は魔化魍でもなければ、魔族や妖怪などではない。

それに向こうがやる気満々でも、こちらには敵対する理由が全くない。

それに対してエヴァンジェリンの方は、今行っている事がくだらぬいと言われ、誠を睨みつける。

「さっきも言ったはずだ。俺はここに来たのはお前と戦いに来たわけじゃない!プリント届けと学校に来いと言いに来ただけだ!!子供相手に戦う興味はない!」

「貴様あ・・・ほ、ほざきおつたな若造がああ!!」

誠の発言についてキレるエヴァンジェリン。あまつさえ自分の事を子供と言い張った誠。ここまでコケにされてもう我慢の限界だった。

「このエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを前にしてよく言い張ったな若造。 齢600年を生きた私に向かってよく戯言を言ったよ新藤誠!」

「な、600年!?!」

見た目はどう見ても少女にしか見えない。しかも600年生きているなら、自分の数十倍は生きている。流石にエヴァンジェリンの発言に驚く誠。

「マクダウエル……お前、ただの魔法使いじゃないのか。一体……」

「ハッ!! 貴様の哀れな脳味噌に刻んでおけえ!! 我が名は吸血鬼^{ヴァンパイア}エヴァンジェリン!! 最強・無敵の・悪の・魔法使いさ!!」

高らかに、自分の正体を叫ぶエヴァンジェリン。

「吸血鬼だと……」

「どうした? 吸血鬼と知って、恐怖でもしたか?」

「違う、お前が吸血鬼だつて言うのなら……最近学校で噂になつてる吸血鬼騒ぎはお前なのか?」

学園長が言っていた吸血鬼事件。もしかして自身が吸血鬼と言つたエヴァンジェリンが犯人なのかと。

「ちつ、ああ、そうだよ、私の力を取り戻すために、息のいい乙女の血が必要だったのにな」

ここでも自分の事ではなく、吸血鬼事件の事を聞いてくる誠^{マコト}に舌打ちするも、質問したことには素直に答えるエヴァンジェリン。

「力? お前の力なら現に今使つてるだろ?」

「ふん、貴様は知らないだろうが、私はこの学園にある呪いをかけられているんだよ。インフェルナス・スコラスティクス 登校地獄という馬鹿げた呪いだ。そのせいで、最強種である私の力は非力な下等生物である10歳の人間になつ

ているんだよ!!」

自身の忌々しい呪いを誠に説明する。言えは言うほど、その言葉に怒気が混じっている。

「……見た目も完全に少女のようにしか見えないんだけどな……」
「何だと貴様あ!!」

誠のポロツと出た言葉に反応するエヴァンジェリン。さつきから怒ったり楽しんだりと感情に忙しいエヴァンジェリンである。

「大体、マクダウエル。さつき自分の事、最強とか言つてたが何でそんな呪いにかかったんだ? 第一、今のお前はあの呪いが本当に効いているのか。どうみても普通の人間の動きではなかったぞ今のは」

「はん!! ここは私が魔法で作った魔法世界の中だ。ここまでは呪いの

影響が及ばん。それから呪いの事ならジジイやタカミチにでも聞くんだな。まあ、最も貴様は生かして返さんがな」

「何でそんなに俺を目の敵にしているのかはとりあえず今は余所に置いておく・・・要するに外の世界で自分の力を取り戻す為に、女子生徒の血を吸って力を高めてた・・・大体こんな感じだろ」

「さつき言った言葉でよく理解したな。伊達に先生をやってるだけはあるじゃないか・・・確かに貴様の読み通りさ」

エヴァンジェリンは地面に下りて、誠に向かって言う。

「だが、この呪いを解くためにはある奴の血が必要なんだ。乙女の血だけではだめ何でな」

「ある奴の血？」

「貴様は知る必要はないさ!! さあ始めるぞ新藤誠!!」

「うっ!!」

エヴァンジェリンから発する魔力で強風が発生する。

「私の力が鬼に勝っているというのをな!!」

「何べんも言わせるな。俺はこんなふざけた事のために鬼にはなるわけにいくか! 第一、何でそんな鬼にこだわる!!」

「知れたこと、私の力が貴様たち鬼如きに勝っているのだというのを証明するためさ!!」

全く持つて、一方的な意見に誠は何ともいえない顔になる。

「何だそれ・・・お前の力を誇示する事なんかにつき合ってられるか」
「言っておくがこの空間からは抜け出せんで。ここは一日たたないと出られない様になっているんでな」

「はあ!?! なんだそれ、一日って・・・」

「だから、存分に貴様をいたぶってやるから感謝するのだな。だから死にたくなければ鬼なるんだな!!」

「断る!! 俺は自力でここから抜け出すからな!!」

断固として鬼になる事を拒否する誠。さらにはここから抜け出す宣言をする。

「はっ!! 私から逃げるのは不可能さ新藤誠! 貴様が鬼にならんというなら、無理やりにも出させてやろう。氷神の戦槌!!」

マレウス・アクイローニス

呪文を唱えると、巨大な氷塊が現れる。エヴァンジェリンはそのまま誠がいる地点に巨大な氷塊を放つ。

「くっー！」

誠は高く飛び上がり氷塊の直撃を避ける。標的を失った氷塊は地面にぶつかり、クレータができる。氷塊も衝撃で周囲に飛び散る。

「まだだ！．．．来れ氷精、爆ぜよ風精・氷爆！！」

突然、辺りに砕けていた氷が爆発する。

「何!?ぐっ．．．」

凍気と爆風が誠を襲う。予想外の攻撃に両手でガードして爆風を凌ぐも、着ているジャケットが凍気の影響で白く氷つく。辺りも白く凍えるように寒くなり、誠の吐く息も白くなる。先ほどまで南国のように温かい空気など嘘のようになる。着ていたジャケットもエヴァンジェリンの攻撃で完全に破けている。それを脱ぎ捨てて、普段呪術で隠している装備帯を出現させる。そして、ぶら下げている音叉・音角を手取る。

「ついにやる気になったか。いいぞ、貴様の全力を見せて見ろ。それを私が完膚なきまでに叩き潰してやろう!!」

エヴァンジェリンはそう言って、魔力を高めていき呪文を唱える。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック!!氷の精霊66頭、集い来たりて敵を切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の66矢!!」

66もの氷の矢がエヴァンジェリンから放たれ、不規則な軌道を描きながら誠の方に向かっていく。

それを見ていた誠は、握りしめる音叉に力を込める。すると、音叉の姿が刀のようになる。

「通すと思うか、鳴刀・音叉剣!!」

《音叉剣》は音叉に特殊な呪術を施すことで形態を変えることで現れる刀。伝承では戦国時代の鬼が編み出した術とされている。

誠は躲せる矢は躲し、躲しきれない矢は音叉剣で氷の矢を斬り落としていく。そのまま、エヴァンジェリンがいる空中に向けて、飛び上がりエヴァンジェリンに斬りかかる。

「くっ!!レフレクシオー氷楯」

軽く20mはあるはずの空中に飛び上がるとは。エヴァンジェリンは咄嗟に障壁魔法を放つ。

ガキンツ!!

音叉剣と氷楯がぶつかりあう。攻撃は通らず、氷の楯で跳ね返されてしまう。誠はそのまま重力に従い落下していくが、そばにある石柱に張り付くように留まる。

一方、エヴァンジェリンの氷楯には亀裂が入っており、ゆっくり砕けていく。

「なっ（馬鹿な・・・私の氷楯が。たった一振りで砕けただと・・・しかも単純に力押しだけで・・・くうう!）」

まさか、自分の防御魔法がたかだか力技の一振りで損傷してします事にエヴァンジェリンは驚いた。しかし悪魔で自分が優位なのは歴然としている。

「ま、まあ、それぐらい力がなくては甚振がいないからな・・・ん？ 奴はどこに行った!？」

いつの間にか誠の姿がどこかに消えていた。キョロキョロと周囲を見渡す。

すると、向かいの塔に向かって石橋を走っている誠の姿が見えた。

「貴様あ、待たんかああ!!」

そう言いながら誠の方に飛んでいくエヴァンジェリン。

一方、誠の方は自分が最初に現れたあの魔法陣がある場所に走っていた。

「一日たたないと出られないとか、そんなわけあるか」

例えエヴァンジェリンの言っている事が本当だとしても、自分はこのことをするためにこの学園に来たんじゃない。無用な戦闘は避けるのが今一番の最善の策。しかし、ここはこの塔と向かいの塔以外何もない。こんなところに丸一日いたら絶対エヴァンジェリンと戦闘になる。それは極力避けたい誠。

「新藤誠!!男なら正々堂々と戦わんか!!」

後ろからエヴァンジェリンが迫ってきている。更に追撃と、またしても氷の矢が誠に迫っていた。しかも100本以上はあるであろう

氷の矢が。

「あれだけの数はさすがに音叉剣では落とすきれいな・・・威力は強いが、仕方ない」

攻撃を躲しきれないと判断した誠は、一旦停止し、エヴァンジェリンの方に体を向ける。両手で素早く印を結び、大きく息を吸い込み吐き出す。

「(火遁・豪火滅却!!)」

瞬間、誠の口から噴き出した大量の炎が壁の如くエヴァンジェリンに押し寄せる。

誠に向かっていった氷の矢はすべて蒸発する。

「な、なんだと!？」

それを見ていたエヴァンジェリン驚きの声を上げる。真つ赤に染まる炎の壁がエヴァンジェリンに向かってくる。今から防御の魔法を詠唱をしてはとても間に合わない。

空中に飛翔し炎の届かない位置まで退避する。炎はエヴァンジェリンの別荘まで行き大爆発を起こす。建物の上部をめぐりつつまわっている。それを見たエヴァンジェリンは口をポカンとあけて茫然となる。

「あ・・・あれだけ炎を魔力も持たない人間が出しただと・・・」

塔の上部を破壊する威力の炎を吐き出してくるとは予想外だったエヴァンジェリン。

「げほっ、げほっ・・・威力は結構弱くしたつもりだったんだが・・・うまく制御できてないか・・・」

自分が放つ技で咽ている誠。あれで威力弱めとは全力で放つたらどうなるのだろうか。

「ぐう、おのれ、手加減したつもりだったとでも言うのか!!」

「なんて、地獄耳だ・・・ようやくついた・・・」

誠の声が聞こえたのか、恐ろしい地獄耳である。誠は最初にいた場所に到着する。地面を触ったり、魔法陣に触るが何も起きない。

「くそ、やっぱり本人じゃないといけないのか?」

「出られないといったはずだ!!」

「!ええい、こうなったら!!」

こちらに高速で飛んでくるエヴァンジェリン。反撃にでる事にした誠は腰の音撃棒・烈火を手に取る。器用に烈火を回転させながら、構える。

「貫ったぞ!!」

瞬時に誠の目の前に現れるエヴァンジェリンは爪が誠の腹に食い込む。

「ぐっ・・・がはっ!」

爪で刺されて箇所から出血し、口から血を吐き出す誠。吐き出した血がエヴァンジェリンの頬にかかるも、フツと笑いながら深々と刺さっている爪を更に食いませていく。

「どうやら避ける暇もなかったか・・・」

「いや・・・これでいいのさ」

「何だと? 貴様・・・」

「お前もしつこいからな。少し痛い目に会うが、勘弁しろよ」

「(まさか、わざと受けたのか!?)」

攻撃を受けてまで、誠が何か仕掛けてくると確信したエヴァンジェリン。早く誠から離れようとするが、向こうの方が動きが早かった。

「音撃打・爆裂強打!!」

二発の音撃の打撃がエヴァンジェリンの体に打ち込まれる。

「ぐはあああっ?! あっ、ぐっ!!」

攻撃を受けたエヴァンジェリンは地面を倒される。途端に地面でもがき苦しみ始める。

目に見えない波動がエヴァンジェリンの体を駆け巡るような間隔が襲う。

「な、なんだこれは!?! 魔力がうまく結合できない・・・力が抜けていくようだ、貴様あ一体何をした!?!」

完全にうつ伏せの状態が悪鬼の如き形相で誠に言い放つエヴァンジェリン。

「音撃を打ち込んだ。ぐっ、威力は・・・弱めにしといたから死ぬことはない。でも、少しの間は魔法が使えなくなるがな・・・はあっ・・・」

血があふれ出る腹部を手で抑えながらエヴァンジェリンに行った内容を話す。そして、左目に手を添える。

「(これ以上付き合ったら本当にやばいな)・・・悪いがマクダウエル。俺はここで抜けさせてもらうからな」

「何!?馬鹿が、グツ・・・うう、ここから出られんといったはずだ・・・!!」

顔を上げて誠が言ったことを否定しようとするエヴァンジェリンだが、誠の抑えている左目の手を見て驚く。手の隙間から血が流れている。更にその部分を中心に誠の体が段々吸い込まれいく。

「はあ・・・俺はあんまりこの術は使いたくなかったんだが、魔法で作れた空間じゃあしようがねえよな・・・ぐっ、お前の事情はまた後でネギと一緒に聞いてやるからな」

「待て新藤誠!!」

「《神威》!!」

その言葉を最後に誠の姿は完全に姿が消えてしまった。

残されてエヴァンジェリンは手を握りしめて奥歯を噛み締める。

「ぬぐぐぐ!!のああああああああああ!!」

エヴァンジェリンの咆哮が轟く、魔力を最大限に上げて誠が打ち込んだ音撃を弾き飛ばした。衝撃であたりの地面にひびが入る。

「この私を・・・この私をここまで舐めた態度、許さん・・・許さんぞお!!覚悟しているお新藤誠!!今夜、必ず貴様を血祭にあげてくれるわああ!!」

先ほど起きた誠の不可解な術など気にすることも忘れ、一人残されたエヴァンジェリンの怒りの雄叫びが響くだけだった・・・

ズズズツ!!

「ぶっ……げほっ、がはっ……ここに飛んだのか……はあ……」

突然、自分が住んでいる寮の前に現れ、地面を滑る誠。程よく止まると、そのまま仰向けになる。

出血している左目の手を退けると、その瞳には3つの巴紋が浮かび上がっていた。その形は響鬼が音撃鼓の紋章に似ていた。その眼も直にもとの瞳に戻っていく。

「次はこっちだな……はああ!!」

左目の出血が止まると、次に腹部の傷を治すために気合を込める。シウウウつと傷から白い煙があがり傷見る見るふさがっていく。

傷がなくなったのを確認し、そのまま家の中に入る。先ほどの空間移動(?)した術の影響なのか、大分疲労状態の誠。そのままりビングのソファアに座り込んだ。

「……鬼導眼なんて、久しぶりに使ったな……やっぱりこの眼はもつと修行しとかないとダメか……大分鬼力を持つてかれた……」

久しぶりに使用したときされる《鬼導眼》きどうがんと呼ばれる誠の変化した眼。

どうやら魔眼と言った特殊な眼と同様な物であると思われる。しかし、空間を移動するなど普通の魔眼とは違う代物であると思われる。

「やばい……ちよつと休んで学校に行こう……その前に学園長に連絡を……」

そう言いながらも眼をつむつて夢の世界に入ってしまった誠。

昨日の魔化魍による戦闘により遅い就寝か、それとも今朝ははりきって早起きして修行に向かったのが祟つのか。加えてあのエヴァンジェリンとの戦闘の影響なのか、すっかり眠りにつく誠。

結局この後、ネギが帰ってくるまで誠は起きることはなかった。

しかし、エヴァンジェリンとの本気の戦いはまだ終わっていないかった。

その時はあまりに早く・・・すぐに起ころうとしていたのだ・・・

その頃、この麻帆良学園にある人物の侵入者がいた

いや、ある動物が・・・

麻帆良学園高等部のとある女子更衣室で・・・

「キヤアアア下着泥よお!!」

「イヤアアア!この白いげっ歯類下着を脱がすわよ!!」

「こつちこないでく!!」

「やめてえええ!!」

更衣室で着替えをする女性陣が大騒ぎする中、その集団からままと逃げおおせた小さい影があった。

つた。

「いやはっはっは!!・・・今日も大量に収穫だぜ。それにしても日本つて国は良い下着を作ってるぜ。この感触が溜まんねくや。ぐへへへ」

白い体毛の見た目かわいらしいイタチ、もといとんでもない変態オコジヨが一匹。

実はこの変態オコジヨ、この後とある形で大活躍することになるのは、誰も知らない・・・

「・・・イギリスのウェールズで捕まりそうになったときはどうしようかと思ったが、なんとか逃げられたぜ。しかし、兄貴に知らせが入る前に何とか接触しねえとな・・・」

このオコジヨは名を・・・アルベール・カモミール。

第十三ノ卷 《動き出す吸血鬼》

麻帆良学園 女子寮付近 16:30

「はあひどい目に合いました・・・」

ぐったりした顔でトボトボと歩いていくネギ。

明日菜に連れて行かれネギは女子寮の大浴場に直行。

しかし、運悪くその時にクラスメイトたちがやってくるというアクシデントがあり、一緒に入るはめになっていしまう。しかし、そこで起きた《ネギ先生洗いつこ大会》が突如勃発し、徐々に生徒たちのスキャンシップがセクハラまがいのものになっていったのに彼は気付いていなかった。

そして、ようやく気付くころにはもう事態は収拾できないレベルに・・・

結果、生徒たち女体の海に飲み込まれることに慣れていないネギではろくに抵抗することもできず、明日菜がようやく事態の異常さに気付き救出するまではある意味混沌な思いをするハメに・・・

その後、何人かの生徒の下着が謎の白い小動物によって勝手に脱がされていくという事件が発生する。とんでもない大騒ぎとなるが、その時ネギは完全に先の件で放心状態でそれどころではなかった。

「まったく、とんでもない目にあつたわよ・・・」

「あはは、皆すごかつたなあ」

会もお開きとなり、本当に疲れましたという表情で明日菜が溜息をついた。その様子を見ていた木乃香もちよぴり面白く見ていたのは内緒。

「でも、みんな僕のためにやってくれたから、嬉しかったです」

「へえ・・・」

ネギが笑顔で答えるが、アスナはやはり少し不安があるようだ。

「でも、あの下着泥棒はなんやったんやろうな？」

「知らないわよ。全く何だったのよ」

「（そういえば・・・あのととき何人かの下着が勝手に脱がされて大騒ぎになつたけど・・・ネズミって言つてたかな？なんかあの感じ覚えが

るんだけどなく)」

ネギが何だったかなくと記憶を探っていくと。

『随分景気悪そうな顔してるじゃねえか兄貴?』

「!？」

突然聞こえてきた声にネギは周囲を見渡す。

「だ、誰?!」

「え?」

「下だよ、下!」

ネギが足元からの声にふと目を向けると・・・

「あ・・・!？」

「へへ・・・。俺っちだよネギの兄貴。アルベール・カモミール!久しぶりさー兄貴!」

そこにはネギのウェールズにいたころの数少ない友達の一人がいた。

「カ、カモ君!!」

「お、オコジョがしゃべった・・・」

「ひゃわあ、かわえええな」

驚きの声を上げるネギと、不可思議なものを見て唾然とするアスナ、そして喋ったことなど気にする事なく素直に率直な感想を言う木乃香だった。正直、普通に考えて非常識すぎる状況になんく受け入れている木乃香はある意味凄いかもしくない。

.....

「・・・そこで、畏にはまった俺っちを助けてくれたネギの兄貴で。俺っちはその心意気に惚れたのさあ!」

「ふうんそんなことがあったんだ。あんたも良いところあるじゃない」

「あ、あははは・・・」

「それで、カモくんは何で麻帆良学園に来たん?」

「それは勿論、兄貴のパートナー探しのために遙々この日本に来たん

ですよ!!」

「え?」

ビシっとした表情で言うカモ。

「実はネカネさんに頼まれてましてね」

「お姉ちゃんに?」

「そうなんすよ。それで兄貴に会いに来たんすよ」

「ちよつと、一体何の話してるのよ。パートナーって・・・」

「姐サン。魔法使いには魔法使いミニステル・マジの従者っていう、魔法使いを助けるパートナーがいるんですよ」

魔法使いミニステル・マジの従者とは立派な魔法使いマジステル・マジのパートナーであり、それをサポートする存在である。魔法使いの世界に伝わるお伽話で、立派な魔法使いマジステル・マジを守り助けた一人の勇敢な戦士に対する呼称であると伝えられている。しかし、現代では魔法使いの異性になることが多く、そのまま結婚することが多い。

戦闘中は呪文を詠唱する魔法使いは無防備である魔法使いの剣、盾となり戦うことが本来の存在意義であるが、上記のように最近専ら恋人探しが大多数である。

「ほえ、魔法使いにはそういうのがあるんや」

そう言った話が大好きな木乃香は興味津々に聞く。

「あの、ここで魔法の話はマズイですから・・・ここは一旦帰りましょう?」

こんな平凡な場所で、喋るオコジヨや魔法なんて単語がでるのは非常にマズイので、一旦寮に帰ろうと促すネギ。明日菜と木乃香も納得して、ネギが住む寮へと向かうのだった。

「あ、何か晩ご飯のおかず買ってからにせえへん?このままネギくと新藤先生の家でウチ何か作るえ」

「本当ですか!ありがとうございます。あくお兄ちゃん帰ってるかな?」

「もう帰ってるんじゃない?」

「兄貴、誰ですかい?そいつは?」

「カモくんは知らないんだったね。来たら紹介するよ!」

3人と1匹は晩ご飯の食材を買いにスーパーによりネギが住む寮へと向かうことにした。

途中、またもや3-Aの一部の面々に出くわし、軽いアクシデントが発生。あやかがネギを連れて寝泊まるのではとんでもない勘違いが発生し、あやかと明日菜が大乱闘が起きる事態が起き、帰宅する時間が大幅にかかってしまった・・・

麻帆良学園都市 某所 19:50

『マスター、学園都市メインコンピューターのハッキングが終了致しました。いつでも電源を切ることができます』

「よし、準備ができ次第すぐに電源を落とせ・・・」

『はい、マスター』

どこかの教会の塔の上で、佇むの影。エヴァンジェリンだった。

「ふん、奴が逃げてくれたお陰であの別荘に余計に一日過ごすハメになったわ。忌々しい」

悪態をつくエヴァンジェリン。誠との戦いの後、別荘では一日立たないと出られないため余計に一日過ごすハメになったのだ。

「(しかし、奴はどうやってあの空間から抜け出したのだ？あそこは上級の魔法使いでも脱出するのは不可能な空間なはずだ・・・)」

あの時、誠はそうどうやって抜け出したのか考えるエヴァンジェリン。自身が作り上げたあの別荘は魔法理論上は一日たつて出る以外は脱出不可能な空間である(まあ、おかげでエヴァンジェリン自身も出られないようになってしまっているのだが・・・)。

その空間を簡単に脱出した誠に疑問が次から次へと浮かぶエヴァンジェリン。しかし、もういやになり考えるのをやめる。

「ちつ、もういいわ。奴が何をしたかのど、倒してしまえば問題ない事なのだからな」

そう、ネギの血を頂き、この呪いを会場し蘇った力で今度こそ誠の息の根を止めればいいだけの話。最も今から行おうとしている学園停電計画により、全盛期に近い力を出すことができるのだが。

『マスター、学園都市の電源を落とします。これでマスターの魔力は戻ります』

「よし、さてと、そろそろ下僕たちを使うとするか・・・」

茶々丸からの連絡を受け取る。

パチンと指でフィンガースナップを起こすエヴァンジェリン。それと同時に学園の明かりは一斉に消えていく。

麻帆良学園 女子寮 大浴場

大浴場にて本日二度目となる風呂を満喫していた2―Aの仲良し運動部4人組のまき絵、亜子、祐奈、アキラ。

「はあ、やっぱりこの一日に二度風呂入るっていいね」

「そうだね。でもネギくん今日は大変だったね」

「せやねく、ネギくんめっちゃぐったりしとったもん」

今日起きたネギの事を思い出す亜子。あの状況は確かに大変だった。

「ねく、今度は新藤先生も誘わない?」

「ええ!?でも、新藤先生は年上だよ?」

「大丈夫だよアキラ、水着でも着てれば。ああいうタイプは絶対女の子の体見たら慌てるタイプだよ」

笑いながら言う祐奈。どうやら今度は誠をターゲットにするみたいだ。

「あははは、ちよっぴり気にはなるけど・・・あれ、まき絵どないしたん?」

先ほどからそこで突っ立っているまき絵に不思議に思い声をかける

亜子。祐奈とアキラもまき絵に気づく。

「う……あ……」

「どうしたのさまき絵、湯船につからないと風邪引くよ?」

祐奈がまき絵に近づき一緒に入るようにいうと。

『行け、我が下僕』

まき絵の頭の中に誰かが語りかけてくる・

ゆっくりと振り返るまき絵。

「……」

ニイつと笑うまき絵。

しかし、そこにいたのはいつものまき絵ではなく。

鋭い八重歯をはやし、エヴァンジェリンの忠実なる下僕とかした

佐々木まき絵だった……

それと同時に大浴場は一瞬で暗闇に包まれた。

同時刻 誠とネギの寮宅

「うわっ!!ちよつと新藤先生に服、血まみれじゃない!」

「どうしたのお兄ちゃん!?ボロボロだよ!!」

ソファで眠っていた誠を発見するが、腹部にかけて服が血で染まっているのに驚く一同。玄関付近も血があつたのにも驚いていたが。

「うん?……あれ、ネギに……お前らも……もう帰ったのか?」

騒ぎで起きた誠は目をこすりながら応対する。まだ、寝ぼけているようでもある。

「先生怪我とかしとらんの?」

「怪我?ああ、これか。これは、その……ああ!!」

木乃香が心配そうに声をかける。どうやら自分の今の服装が血が付いているから怪我を負っていると思っただろう。今は完治しているが、実際に怪我をしていたのは事実なのだが。

誠もなんて言おうかと思うと、偶々壁にかけている時計に目が入った瞬間、眠気が一気に冷めた。

時刻は、19:50 外はすでに暗くなっていた・・・

今日は学園長に会う約束をしていたはず・・・すでに、時間が過ぎてしまっていた。

「しまった・・・少しだけ休むつもりが、こんな時間まで眠っていたなんて・・・」

携帯電話を見れば何件か着信履歴が入っており、相手は勿論学園長。

「(あとでかけ直そう：はあ、マクダウエルの件とかあったのにな：)」
心のなかでため息をつく誠。

仕方ないので、謝罪も兼ねて折り返し連絡するしかない。

「新藤先生大丈夫なんですか?」

「あ、ああ。この血なら心配ない。もう治ってるから・・・」

「それなら、いいんですけど」

「でも、何でそんな怪我してるの?お腹のところなんか穴あいてるよ」

「まさか、昨日のが襲ってきたん?」

大丈夫という言葉を聞き、一先ず安心する三人。しかし、今度は何でそんな怪我をしているのか気になる。よく見れば腹部の服は穴が空いている。どう見てもただごとではないのは明らか。まさか、昨日の魔化魍と戦って怪我をしたのではと思う。

「違う違う。これはちよつとあれで・・・とりあえず服替えてくるから!」

そう言っつて、脱衣室に向かっていく誠。

「何があつたんだろお兄ちゃん」

「治ってるみたいだから、心配とはなさそうだけど・・・」

「うん・・・あれカモくんは?」

「あれ、さつきまで僕の肩に・・・」

さつきまでネギの肩にいたはずのカモがいなくなっているのに気づく木乃香。

一体どこに消えたのか・・・

一方誠は脱衣室について、すぐに上着を脱ぎ新しい服に着替える。

『おうおう、そこの旦那!』

「ん?」

突然、どこからか声が聞こえてくる。誠は声の方に向く。そこには、白いオコジヨ、ネギの友達のカモだった。

「なんだこの変なイタチは?」

「俺たちはオコジヨだ!それも由緒ただしいオコジヨ妖精だぜ!」

イタチと勘違いされて憤慨するカモ。

「で、そのオコジヨ妖精が何のようだ?」

「あれ、随分驚かないんだな」

「今更、動物がしゃべろうが驚くか。喋る動物なら実際に会ったことがあるからな・・・で、そのオコジヨ妖精が何のようだ?」

てつきり驚くかと思つたが、全く驚く素振りを見せなかつた誠に拍子抜けするカモ。

誠はしゃがみ込み、カモとの目線を合わせながら、カモに聞く。

「知れたことよ、アンタはネギの兄貴の兄を名乗ってるらしいじゃねえか。アンタみたいな優男にネギの兄貴が務まるか俺たちが試してやるんだい!」

「いや、別に兄と名乗ってるわけじゃない。ネギがそう呼びたいって言うてるから、そう呼んでるだけだぞ。大体何でお前にそんな事言わないといけなんだ?」

「決まってるさ、俺たちが兄貴の使い魔だからだい!使い魔たるもの常に主の身辺状況を把握するには当たり前なのさ!」

ビシッと、指を指し堂々とした顔をして宣言するカモ。

「それが、一体何の関係があるんだ?俺の事をそう呼ぶのはネギがそう呼んでるだけだと言っててるだろ。それから学園側はお前がネギの使い魔だつて把握してるんだらうな?」

「ギクッ!」

誠にその事を指摘されて、狼狽するカモ。

「後で、学園長に連絡することがあるからその時一緒に聞いとくからな」

「!!(マ、マズイ!調子に乗ってこの旦那に強気なところを見せて上下関係を作ろうとしたが、大失敗だったぜ・・・それにこの学園長とも知り合いかよ!ネカネの姉さんからの手紙を没収してもダメじゃねえか!?)」

誠のことを兄と呼び親しんでいるネギの話聞き、ここは一発ガツンと言いい、上下関係を作っておけば後々便利だろうと考えていたカモ。が、目論見は見事に失敗。はつきり言うが人を見た目で判断したカモが馬鹿なだけであるが・・・というか相手が悪すぎた。ちなみにネギは誠が鬼であるというには一言も言っていない。

しかも、この学園長とも知り合いであり、自分がここへ来た事がバレれば、面倒な事は間違いない。

カモは必死に何かこの状況打開する策はないかと考えていると、突然、脱衣室の電灯が切れてしまい、部屋が真っ暗になる。

「何だ?電球でも切れたのか?」

まだ、ここに来てあまり立っていないのですぐに切れるわけがないはずなのだが。

「あ、新藤先生。こつちも切れたみたいで。多分停電みたいですよ」

声の主は明日菜だった。どうやら脱衣室だけではなくこの家全体の電気が落ちているようだ。

しかし、ブレーカーのあるところに向かうがスイッチを上げても電源が入ることはない。

「停電はこの家だけじゃないのか?外の街灯も消えてるぞ」

「本当だわ。あそこの消えてる」

窓から外の様子を見ると、外の道路の街灯も消えていた。どうやらこの家だけじゃなく、ここら一体が停電になっていると推測する。

「何かあったのかな?」

「兄貴!!こいつはただの停電じゃないぜ。電気が消えて途端、とんでもねえ魔力を感じたぜ!!」

カモが異常な魔力を感知したのをネギに報告する。

「まさか、どこにもそんな魔力は……!!」

「ネギ、近衛を頼む!!この家から出る!!」

「きやつ、し、新藤先生!」

突然、巨大な魔力の力を感じ取るネギ。しかもこの建物周辺から。誠もそれを感じたのか、急いでこの家からですよに言う。誠は窓を開けると隣にいる明日菜を抱えながら飛び出す。明日菜も突然のことに顔を赤らめる。

ネギも同様に木乃香を抱えて家の外からでる。

『………マレウス・アクイローニス 氷神の戦槌』

何者かの呪文を唱える声が聞こえた瞬間、家の上空から巨大な氷塊が家を押しつぶす。出るのが一歩遅ければ完全にぺっちゃんこになっていただろう。

「くう、大丈夫か神楽坂?」

「は、はい……何なんですかあのでっかい氷は?」

明日菜が目を向ける先には、家を押しつぶしている氷塊の姿。

「木乃香さん、大丈夫ですか?」

「う……うん……」

「兄貴、木乃香姉さん気絶してますぜ」

一方ネギの方は先ほどの衝撃で木乃香が木を失っていた。

「まさか、これは……」

そして、あの氷塊に見覚えがある誠。

「やあ、あの時は良くも逃げてくれたな新藤誠?」

「!!」

声が聞こえる方へ振り向く一同。

氷塊の上で、こちらを見下ろす人物。

「あ、あんた!」

「エ、エヴァンジェリンさん!」

ネギと明日菜が驚きの声を上げる。

そこにいたのは、自分たちのクラスにいる生徒のエヴァンジェリン

だ
っ
た
・
・
・

第十四ノ卷 《闇の魔法》

「システムの復旧はまだか!？」

「ウイルスプログラムの影響で、システムの復旧に時間を要します!!」
「くそ、闇の福音め!!」

とある部屋の一室で、突然起きた停電の対応に負われている魔法先生達。生きてる電力で、何とかシステムの復旧を行おうとするが、侵入しているウイルスプログラムにより復旧は困難を極めている。

そして何より問題なのは、学園結界である。先ほど起きた停電により、学園を覆っている結果が弱まってしまっているのだ。この学園の結界は電力により維持しており、電力がストップしている状態では、結界を維持できなくなってしまう。学園結界が弱まれば、魔族や妖怪と言った類の侵入を容易にさせる事になり、現に今は学園の警備の為に、通常の倍以上に人員が緊急要請により動いている。

「学園長が今のままで、あの吸血鬼を野放しにするからだ! 早いとこ、本国の魔法協会に突き出していればこんな事にはならなかったんだ!」

「早急に闇の福音を捕えて、正義の裁きを受けるべきだ!」

一人の大学部に所属する魔法先生達がそう叫ぶ。既にこの事態を起こしているのがエヴァンジェリンであるというのはわかっている。停電が起きた瞬間にエヴァンジェリンの魔力が急激に上がったのを感知したためだ。

この学園に所属する魔法使い達は常々、魔法界で大悪と言われるエヴァンジェリンがいるのかが不思議でならなかった。一部の者は本国に引き渡して、処刑すべきだと言う過激派もいたが、その度に学園長から既に罰を受けて償っていると言われ続けてきた(魔力を封じられていた上に、学校に永遠に通い続けねばならない呪いによって)。

だが、ここ数ヶ月で彼女が起こしたであろう、吸血鬼事件ですでに我慢の限界だった。そして、今回のこの騒動。もはや、黙認できるレベルではない。

「今はそんな事を言ってる場合じゃないだろ。早くこの電力を復活さ

せて結界を復活させなければ、ここに住む人たちに被害が出るんだぞ！」

そう言つて、活気になる彼らを促す男性。彼は大学部の魔法先生の一人でもある明石教授。2―Aに所属する明石裕奈の父親でもある。現在この場を指揮している。

「しかし、明石教授！こんな混乱を招いているのは彼女が原因なんですよ！現に、今あのネギ・スプリングフィールド先生の所に向かっているとの情報も！」

そう言つて明石教授に突つかかるシスターシヤクテイー。彼女だけでもなく、この場にいる魔法先生や生徒達がそう思っている。だが、今はエヴァンジェリンより早くこの学園の結界を復活させるのが再優先事項であり、学園結界が復活すれば、問題も大方解決されるはず。

「明石教授の言う通りですよ、今は早くこの結界を正常に戻す事が先決です。それに、ネギ先生の場所には新藤先生も一緒にいるらしいですから」

そう言つて、明石教授と同じように彼らをなだめる中等部に所属する瀬流彦先生。彼と一緒にいるのは鬼（音撃）戦士の誠がいるのだ。そう簡単にはやられたりはしないだろうとの考えでのこと。だが、この発言で逆に……

「あの鬼は危険過ぎる！そもそも奴がエヴァンジェリンに手を貸して、ここまでの計画を仕組んだんじゃないのか!？」

「大体、現に新藤誠はネギ先生と一緒に暮らしているそうじゃないか」「それを利用してエヴァンジェリンの計画に賛同したんだ。所詮は鬼、人間ではない者の考える事はわからんな！」

ついには、とんでもない発言を繰り返してくる魔法先生達。今回の件で全くといっていいほど関係ない誠まで疑われている始末。先日、倒された魔化魎《ツチグモ》との戦闘を目撃した一部の魔法使い達は彼の鬼としての危険性と警戒心がより一層高まっているのだ。そんな彼がこの件に深く関わっているのではと、被害妄想もいところの発言である。というか、誠がここに来たのは悪魔で魔化魎を退治しに

来たのを忘れないで頂きたい。

「いい加減にするんだ!!口ばかり動いてないで、手を動かすんだ!!僕たちは学園を守る魔法使いだぞ!起きている件は事態が終わってからでも十分だろ!!」

我慢できなくなりつい声を上げてしまう明石教授。彼も自分のたった一人の娘でもある祐奈の事が心配である。今まさに学園は危険な状態といってもいいくらいであり、もしかしたら祐奈にも被害が及ぶのではとつい思ってしまった、つい感情的になっていしまう。

「す、すまない。早く作業に戻ろう・・・」

「明石教授・・・」

隣で作業をしている瀬流彦先生はバツの悪そうな顔している明石教授を見て心配になる。

急いで事態の収集をしなければ、そう思う瀬流彦先生だった。

麻帆良学園都市 誠とネギの寮宅 20:10

「な、なんでエヴァンジェリンさんが!?!」

「それに、そのでつかい氷だしたのエヴァンジェリン?」

突然、家を押しつぶした氷塊の上に登場したエヴァンジェリンに驚くネギと明日菜。ネギの肩に乗るカモに至ってはブルブルと震えていた。

「ふっ、その通りだよ神楽坂明日菜」

そう言って、明日菜が言ったことに素直に答えるエヴァンジェリン。

「エヴァンジェリンさん魔法使いだっただんですか!?!でも、学校では全

然魔力を感じられなかったのに・・・」

初日にエヴァンジェリンと同じ教室にいたネギは彼女から魔力は感じられなかったのに疑問が浮かぶ。

「その原因は、おそらくマクダウエルにかけている呪いのせいだろう」

「呪い？一体何の・・・」

誠がネギにエヴァンジェリンの事情を説明する。例の封印だとか呪いとかの原因ならば、感知できないのは当たり前だろうと。

しかし、一体何の呪いでそんな事にと思うネギ。それを聞いていたエヴァンジェリンは忌々しそうにしゃべりだす。

「お前の父親が原因だよぼうや」

「え？父さんが？」

「そうさ、魔法世界の英雄にしてサウザンド・マスターと言われたナギ・スプリングフィールド。奴に負けた私はこの麻帆良学園に封じ込まれたのさ。私の魔力全てを封印してな」

「ネギのお父さんに？でも何でそんな事に・・・」

「あああああ姐さん!!あの女は闇の福音ダーク・エヴァンジェリンって言われている吸血鬼!!しかも懸賞金600万ドルのとんでもない悪の魔法使いっすよ!!」

「600万ドル!?!」

カモがエヴァンジェルの説明を震えながら説明する。実際15年前に姿を消して、噂ではサウザンドマスターが葬り去ったとか流れていたが、まさかこんな所にいるとは夢にも思わなかったカモ。彼は逃げたしたい一心だった。

そして、それを聞いていたネギ、明日菜、誠は驚いた。なんで、そんなヤバイ人間がこの日本にいて、学校生活をしているのかと。

「ほう、その小動物。やけに私の事をしってるじゃないか。お礼に蠟人形にして私のコレクションに加えてやろうか？」

「ヒイツ!!」

エヴァンジェリンにそう言われ、ビビりまくるカモ。

「そんなことより、エヴァンジェリンさん。あなたの目的は一体何なんですか？」

「(兄貴・・・俺たちの命はそんな事でかたづけられるのか・・・)」

ネギの何気ない発言にショックを受けるカモ。本人も悪気があつて言ったわけではないだろうが。

「目的か、何簡単なことだよ。ネギ・スプリングフィールド。貴様の血を頂くためさ」

「ネギの血!?!」

「僕の・・・血?まさか!!」

エヴァンジェリンの言葉に疑問でるがネギ。そして、その言葉を理解し冷や汗が流れる。

「マクダウエルは、封印したサウザンドマスターの息子であるネギの血を頂いて封印から解放されるって魂胆だろ・・・お前が言つてたある奴つてネギの事だったんだな」

誠が別荘でエヴァンジェリンが言つていたえを思い出す。とある人物の血を頂き、自身にかけられている封印を解除する為にと。とある人物とはナギの血縁者のネギの事だったのだ。

「ああ、そうさ。そして今宵、私は力を取り戻し再び外の世界に君臨するのだ!!悪の魔法使いとしてな!!」

「そんな事は、僕が許しません!!エヴァンジェリンさんの担任として、生徒が悪いことをしようとしているのを止めます!!」

「全く、とんだ甘ちゃんぼうやだな。今の私は貴様の生徒ではない、敵だ!!貴様を殺そうとするな。そして、新藤誠、貴様もだからな。あの時は逃がしたが、今度こそ息の根を止めてやるよ!!」

「なんで、新藤先生を狙うのよ!それにあの時つて、新藤先生が血が出てたのつてアンタのせいなの!!」

血を頂くのに、ネギの命を狙うならまだしも、なぜ誠まで狙われようとしてるのか明日菜にはわからなかった。そして、エヴァンジェリンの言つた言葉にも引つかかった。もしかしたら誠の服が血濡れになっていたのは彼女が原因なのでは。

「それがどうした、もういい加減おしゃべりも終わりにするぞ。さあ、ネギ・スプリングフィールド。まずは貴様の血から頂くぞ!!・・・氷爆!!」

バリント!!

エヴァンジェリンが乗る氷が砕ける。

「きやつ!?!」

「くつ、デフレクショア風障壁!!」

「これ、あの時の魔法だな!!」

氷の破片がネギ達に振りかかる。気絶している木乃香もいる為、避ける事もできない。ネギは無詠唱で風の障壁を展開し、防御する。

「そうこなくてはな、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!!氷の精霊20頭、集い来たりて敵を切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の20矢!!」

追撃とばかりに氷の矢がネギ達に遅いかかる。

「ラス・テル・マ・スキル・マガステル・光の精霊20頭、集い来たりて敵を射て。魔法の射手・連弾・光の20矢!!」

ネギも光の矢を放ち、攻撃を相殺する。衝撃で爆風が周りに及ぶ。

「ぎよええええええええ!!?あああ兄貴、逃げましようぜ!!」

エヴァンジェリンに勝てるわけもないと、ネギに逃げるように言う。

「カモくんはどこかに隠れてて!!」

「言われもなくそうしますぜ兄貴!!」

そう言つて、サツサとこの場から逃げるカモ。

「やるじゃないか、ぼうや。ん?どうやら我が下僕達もついたようだ」
「下僕?」

すると、突然エヴァンジェリンの目の前に現れる5人の人影。その人物が現れると、ネギ達はまたもや驚愕する。

「大河内に明石!!」

「まき絵さんに亜子さん!!」

「それに茶々丸さんまで!!」

現れたのは、2―Aに在籍する祐奈、亜子、まき絵、アキラそして茶々丸が現れたのだ。突然のクラスメイトの登場に驚く。

「どういう事ですか、一体!?!」

「マクダウエル、明石たちに何かしたな!」

明石たちから妙な力を感じとり、もしかしたらエヴァンジェリンが操っているのではと思う。

「言っただろう。私に下僕になったと。知らんか、吸血鬼に噛まれればそいつを意のままに下僕にすることができてるのを」

「まさか、まき絵さんをはじめに祐奈さんたちを襲ったんですか!？」

ならば、真っ先に噛まれているまき絵を操って祐奈たちを襲って吸血鬼にしたのなら話はつく。

「そういう事さ。それと、茶々丸は違う。茶々丸は私の魔法使いの従者だ」
ミニステル・マギ

「え、茶々丸さんが!」

「どうも、ネギ先生、新藤先生、神楽坂さん」

そう言つて、ネギたちに一礼する。

「(そうか、確かに絡繰はマクダウエルの家に行ったんだ。そう言った主従関係だつてわかつてじゃないか)」

マクダウエルの家に行った時に、絡繰が一緒に住んでいるのならミニステル・マギと言つた関係なのは気づくはずだった。

「さあ、我が下僕たちよ。そいつらを捉えろ」

「りようかい、ごしゅじんさま」

エヴァンジェリンの言葉と共に、こちらに降りてくる祐奈、アキラ、亜子、まき絵。

「ちよつと卑怯じゃない!!まきちゃんたちはアンタのクラスメイトなのよ!!」

「ふつ、その小動物が言つてただろ。私は悪の魔法使いなんだよ」

「ネギセンセ・・・」

「一緒にアソボ」

「新藤センセイ、エエコトシヨ」

「ウフフ」

じわじわとこちらに向かつてくる4人。

「うう、祐奈さんたちはただ操られてるだけだから、迂闊には手が出せないよ」

「何とか眠らせるか気絶させるしかないな。それに吸血鬼化を直して

やらないといけない」

「でも、どうしたら……」

「方法ならある」

「え？」

明日菜の言葉に答えるようにそう言いうと、誠は目をつむる。

「(鬼眼!)」

「!!」

そして、目を見開くと祐奈たちが突然倒れる。

「何が起きたの? って先生目が赤いですよ!?!」

祐奈たちが倒れたことに驚く明日菜。誠が何かしたのかと思いを顔を見れば、瞳が赤色に変色していた。

「心配するな、瞳術……俺はちよつと特別な眼を持つてるんだ。明石たちは幻術をかけて眠ってもらってる。ついでに彼奴等にもかけてやりたいが、そう簡単にいく奴じゃない」

そう言つて、上を見上げる誠。相当強力な幻術でもかければ何とかなるだろうが、誠はそこまでするつもりは毛頭ない。エヴァンジェリンとは本当に一戦やらなければならぬかもしれないからだ。

「ちつ、貴様のその眼。やはり魔眼の類か何かか。私の別荘から逃げ出したのもその眼のおかげだな」

「さあな。それよりお前がやったことは許されることじゃないぞ」

「エヴァンジェリンさん、これ以上は……」

「うるさい奴らだ、ついて来い。ふさわしい決戦の舞台に移動しようじゃないか!!」

そう言つて、エヴァンジェリンと茶々丸は上空に飛翔する。しかし、ここで、茶々丸の足や背中からブースターが出てきて飛んでいるのに呆然となる3人。

「神楽坂、絡繰って何者なんだ……」

「えつと……あれ? あんまり気にしたことなくて……」

「ロボットって奴でしょうか……さすが日本ですね」

それぞれが思った事を述べる3人。ここに来て、茶々丸が何者なのかと思う。

「つて、彼奴等どつか行ってる。急いで追いかけないと！」

「それなら僕の杖に乗って。空を飛んでいくほうが早いよ」

「ちよつと待ってよ！私も一緒に」

「神楽坂はここで待ってる。近衛の事を頼む」

気絶している木乃香をこのままにするわけにいかない為、誰かがこの場に残らなければならない。

「でも、こんな暗い場所にたった二人じゃ」

周りを見渡せば先ほどのエヴェンジェリンの攻撃で、荒れ果てている。家もお釈迦状態で、街灯も停電により消えている。

「お前たちを残してはおくわけないだろ。《影分身の術》」

ドロロンツ!!

印を結ぶと、白煙と共に誠の隣にもうひとりの誠が現れた。

「ええええええええ!!せ、先生が二人!!」

いきなりの事象に驚く明日菜。

「これは、俺の影分身だ。一人くらいなら精巧な分身ができる。じゃあ頼むぜ分身の俺」

「ああ、任せろ」

誠の言葉に答えるように言う分身誠。なんとというかなかなかシユールな光景でもある。

そして、ネギと誠は杖に乗りエヴェンジェリンと茶々丸の後を追っていく。

残された明日菜と気絶した木乃香。そして分身誠。

「あの・・・新藤先生って忍者でもあるんですか?」

「いや、俺は鬼だから・・・忍術は使うけど・・・」

麻帆良学園都市 麻帆良湖付近

エヴァンジェリンと茶々丸を負っている誠とネギ。案内されたのはこの学園にある巨大な湖・麻帆良湖。

決戦の舞台となるこの場所についた瞬間に戦闘は始まった・・・

「くっ・・・とっ！」

「やりますねネギ先生」

こちらはネギと茶々丸が格闘戦を行っていた。スタイル的に魔法使いであるネギが茶々丸と格闘戦を繰り広げているのは不思議な光景である。

基本的にはネギは後衛型の魔法使いではあるが、魔法の補助と我流の格闘術で何とか茶々丸と接近戦を繰り広げていた。これも小さいころから体を鍛えていたおかげである。

そこから少し離れた場所では誠とエヴァンジェリンの戦闘が繰り広げられていた。本来ならば、誠が前衛でネギが後衛と言うスタイルでの戦いのはずだが、エヴァンジェリンが必要以上に誠を狙ってきたため、このような対応になっているのだ。

「・・・闇を従え吹けよ常夜の氷雪。テンペスタース・オブスクランスの吹雪!!」

「火遁・火龍炎弾!!」

強力な吹雪と暗闇の嵐と火が龍の如き火炎弾がぶつかり合う。

あたりに冷気と熱気によりできた白い煙によりあたりを覆う。

「ハアッ！」

「っ！」

エヴァンジェリンの五指で鋭利な黒い爪が光沢を放つ。人の肉を骨諸共引き裂くだけの硬度と斬れ味を持ったそれは天然の刃。

上体をやや仰け反り、誠は紙一重でエヴァンジェリンの魔爪を躲していた。

「相変わらず長い爪だな。切ったらどうなんだ？」

「貴様を八つ裂きにしたらな!!」

軽口とも本気とも取れない物言いをエヴァンジェリンは苛立ち気味に斬って捨てた。今度は十指分の爪が月下に踊る。

十本の斬撃が、瞬き一回毎に何百と振るわれる。その攻撃一つ一つを鬼眼で見極めてかわしていく。

「(馬鹿な……この高速の斬撃をすべてかわしているだと……!!)」
自身の攻撃がかわさえているのに驚くエヴァンジェリン。そして、攻撃を繰り返す、腕を誠の手で受け止められる。

「マクダウエル、もう止める。あの時言っただ。俺はお前と戦う気はないと」

「ほざけ若造、私も言っただ。私は最強で、鬼如きに劣ってはいないというのをな!!」

「うわっ!」

誠を力任せに湖の方に放り投げるエヴァンジェリン。かなり飛ばされてしまうが、体制を何とか空中で立て直し水面に立つ誠。

「純粹に私の力を思い知るがいい!!」
リック・ラク・ライラク
ク。来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を……こおる大地!!」

氷の鋭い柱が誠の水面から突如現れる。

「何!?!しまっ!?!」

咄嗟に空中に逃げようとするが、左半身まで氷が迫り身動きがとれなくなってしまう。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラク。来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。闇の吹雪!」

再び、吹雪と暗闇の嵐が誠を襲う。先ほどのように火遁による攻撃を使用にも半身が氷漬けで印も結べない。咄嗟に、腰の変身音叉を手にとる。

同時に闇の吹雪が誠に直撃する。

「お兄ちゃん!?!」

「マスター……」

轟音が鳴り響き、ネギと茶々丸が戦闘をやめて湖の方を見る。攻撃による硝煙と冷気があたりを埋め尽くす。

「終わったか……ちっ、結局鬼にならなかつたか。馬鹿な男だ……ん?」

誠がいた地点の様子を見ていたエヴァンジェリン。これでもし倒したのなら、あまりに呆気無い。

だが、突然冷気が一気に暖かい空気変わる。そして、それが一気に振り払われるように消え去る。

そこには、鬼に変身した誠の姿……響鬼の姿だった。

「お前が……本気で俺を殺そうとするなら……こつちも本気で行くぞ……」

「ふっ……ふはははは!! そうだ……それでいい!!」

響鬼になった瞬間に威圧感、異形の姿、見るものを震わせるのがエヴァンジェリンにはわかった。

「……」

その姿を眼にしエヴァンジェリンは構えを執る。同時に一つの呪文の詠唱を完成させる。

眼前の敵を葬るのに相応しい魔法、力、そして技。かつて最強と言われた自分の力が勝っているのを、証明するために、あの時受けた屈辱をこの鬼に返してやると。

詠唱の段階から既にここら一体の湖は氷結を始めていた。

「……アントス・バゲドウキリオン・エトーン千 年 氷 華」

完成した瞬間、一気に放散されようとする力。冷気系呪文の中でもこれは最上位の一つに数えられる広範囲凍結魔法。顕現しただけであらゆる全て、万象悉くを例外なく氷結、凍結、凝結させる。

見る間に湖を氷に変えるその魔法は、しかし未だエヴァンジェリンの小さな掌の上に在った。暴発寸前のひとえに純粋な力を手放さず、凝固させ定着させ、収束する。圧縮させ濃縮させ、集中する。

「術式固定」
スタグネット

それは球形に廻り荒れ狂い暴れ廻る。『千年氷華』という魔法がただの力に成り果てていく。

それをさらなる高みへ昇華を意味する。すべてを氷結させる権化を手に、握り、躊躇いなく――

「掌……握！」

その球体を潰し、溶け合わせる。掌から腕を通し身体へ駆け抜け全身を支配する。力を取り込んだ。

麻帆良湖が凍っていく。気候と気象を独占し、湖上全ては再び極寒へと様相を移ろった。否、今までのそれは児童戯。真の冬が麻帆良学園を支配したのだ。

この夜、麻帆良湖は全域が氷で覆われた。都市を囲み大橋を浮かべる全域、全領域である。

アルマ・テイオー・ネムクリュスタリナー・バシレイア
術式兵装『氷の女王』

怜悯な光を身に纏う少女に氷華の花弁が寄り添っている。

本来、契約によって精霊を縛り、その力の一部を借り受けているだけに過ぎない魔法という技術を用いながら、あるうことか少女は己自身を『氷の女王』と為した。

故に禁呪の名は……

マギア・エレベア
闇の魔法

自身の命を、魂を、呪いさえも力に変える悪魔の魔法である……

同時刻・・・とある森

『オオオオオオアアア、アア、アアア、アアアア!!』

突然よ咆哮。地の底から夜空の果てへ届かんばかりの獣ケダモノの声が漆黒の森に響く。

振り返るまでもなく現れた敵を倒すためにいる桜咲刹那は背後から迫る巨大な怪物と、同じく巨大な鉄棍の存在を察知する。

「神鳴流、奥義——」

先刻振り下ろした刀の刃を返し、身体を半身に反転、背後へ視線を投じる。

そこにあるのは醜悪な面貌、口の端から牙が突き出し、頭には三本の角を頂く、全長優に三メートルを超える人でも獣でもない正真の化物。誠たちとは違う、妖怪の鬼だ。

「斬鉄閃」

刀は折れず、棍は二つに断ち斬られた。それだけでは終わらない。鉄棍を斬り進んだ刀の切先から物質化した斬撃が奔る。一閃の光として飛翔したそれは鬼の身体を真つ二つに寸断した。

「・・・残りはこれだけか」

刹那を取り囲む異形の鬼たち。束の間の静寂は鬼共の騒々しい足音が掻き消した。十二匹全てが一気呵成に少女を襲う。それぞれ得物を手に手に、小さな生命一個を殺戮する為に。

「神鳴流奥義……………」

迫り来る鬼。それを前に、左右に、後ろにしてなお、少女が乱れることはなく。気を練り上げ、身体を強化し、得物をも研ぎ澄ます。間合いは全方位。あらゆる角度へ向けて斬撃を浴びせかける。

「百烈桜華斬!!」

百の烈風となった斬撃は鬼の十二匹を蹂躪した。間隙の存在しない斬撃の雨は鬼の軀と言わず頭と言わず手足までも斬り刻み、もぎ取っていった。鬼は消し飛び、立っているのは少女一人となった。

「……………ふう」

静かに息を吐く。そうしてきよろきよろ辺りを見回すと、程なく夕風の鞘を発見した。交戦に入る際、抜刀した鞘は邪魔にならぬような隅に置いておいたのだ。何分、敵が悠長にこちらの戦闘準備を待ってくれる訳もないので、半ば放り捨てるような形になってしまった。

その時、置かれた鞘のさらに奥で立ち並ぶ林から物音が立った。落ち葉や小枝を踏み付ける乾いた足音だ。

「！」

瞬間、刹那は迅速に刀を構える。

警戒のレベルは五分をやや上回る程度。無駄な力を抜き、より自然体を心掛ける。

そんな腹積もりを整えている内に足音の主は林の中から姿を現した。

それを見て、刹那は構えを解いた。

「龍宮か」

「やあ、刹那まったく今夜は入れ食いだな。いつもなら標的を探すだけでも一苦勞なのに待っているだけで網に掛かる」

やってきたのは真名だった。彼女もまた、こことは別の場所で戦闘を行っていたのだ。

「ああ、侵入から襲撃までほとんど躊躇いが感じられない。学園に対する明らかな威嚇行動だ」

「ふふっ、こちらとしては手取りが増えてなかなか美味しいんだがな……………」

冗談交じりで言っている真名。しかし、朗らかに微笑んでいた表情は鳴りを潜め、視線はすでに明後日の方向へ——否、公園の全体を囲うように林立する雑木林よりもさらに遠く、湖の畔に位置するここ『麻帆良湖緑地公園』真名の特殊な眼……魔^{イヴイル・アイ}眼は注がれている。

「……………まさか、マクダウエルがこんな事態を起こすなんてな。予

想外だったよ。お陰で、今日は非番だったのに、出る羽目なるとはな」
「だからこそ私達がここにいる。だが、確かにエヴァンジェリンさんには困った。こんな時にお嬢様の命に何かあったら……」

「相変わらず近衛が一番だな」

「当たり前だ……」

相変わらずの刹那に、フツと軽く笑う真名。

「しかし、妙だと思わないか？」

「何がだ？」

「今や学園結界は完全に開放され、もはや学園に上位の悪魔や魔物、妖の能力を抑えつけるだけの力は何も無い。にも拘わらず、侵入してくる式神や魔族の数は緊急召集された魔法教職員・魔法生徒、そして雇われの私や刹那だけで十分補っている。てつきり私は大量に侵入してくるかと思わな……」

「縁起でもないことを言うな！」

声を荒らげ、思わず刹那は真名を睨んだ。

「心配ない。さつきも言った通り、どういう訳か敵さん学園の外で二の足を踏んでいるようだ。餌を目の前にしてお預け食らった犬みたいに行儀良くな……」

「ああ。それに送り込まれて来る鬼はどれも知能を持たない低級の式神だった。今なら高位の魔物を学園内で召喚することもできるだろうに」

「まるで、何かを恐れているようだ」

不可解という理解と明瞭な不安で、堪えきれず刹那は真名を見詰めた。

どうしてか、真名は笑みを浮かべたままだった。

「もしかしたら妖共は恐れているのかもしれないな」

「龍宮……?」

「今まさに学園から開放されようとしている^{マクダウエル}吸血鬼の強さを……或いはあのひともな……」

最後に真名が何を言おうとしたのか刹那には分からない。

「何かが、起こるのか……」

「いや、もう始まってるとみただい」
「え？」

刹那が問い返す暇もなく極寒が麻帆良湖を覆ったのを……

第十五ノ卷 《灼熱の響鬼》

「あれは、一体……」

茶々丸との戦いも忘れ、上空に佇む一輪の氷華と化したエヴァンジェリンを見るネギ。発動した魔法を自分自身に取り込む魔法は今まで見たこともない。

「マスター……」

同じくエヴァンジェリンが闇マギア・エレベアの魔法を使用し、それを見て心配する茶々丸。あの技は禁術と言われた魔法である事を知っていた茶々丸。大丈夫とわかっていても、どうしても主であるエヴァンジェリンの事が心配になる。

そんな二人を尻目に、鬼と化した響鬼誠と氷の女王と化した吸血鬼エヴァンジェリンの戦いが始まろうとしていた。

「発動した魔法を自分に取り込んだのか……」

「ああ、貴様が鬼になったお礼だ。滅多に見れるものではないから感謝するのだな!!」

「!？」

エヴァンジェリンが人差し指を響鬼に向けた瞬間、周囲の氷から氷槍が無数に襲いかかる。

響鬼も腰の音撃棒・烈火を取ると氷の槍を叩き落としていく。

「ハッハッハッハッ!!周囲に満ちる氷は全て我が支配下!貴様が必死に防御してもこの無制限に出てくる氷の槍をいつまでしのぎきれるかな?」

彼女の言うとおり、氷の女王と化した今のエヴァンジェリンには湖は愚か空気中の水分までもが彼女の支配下であり、ありとあらゆる物を瞬時に凍らせる力を持っている。そして、何よりこの氷の女王最大の特徴は上位呪文以下の魔法を無詠唱無制限で放ち放題と言う、恐るべき能力であること。どんなに下位な魔法でも圧倒的物量では上位魔法と大差ないのである。

「くっ!はあっ!!」

そんなことも露知らず、砕いても砕いても出てくる氷の槍を相手にしている響鬼。目にも留まらぬ速さで叩き落としているので、何をしているのかすらわからない。

そして、攻撃を避ける為に一旦空中にジャンプする。

「ふっ!!」

それを待っていたのか空中にジャンプした響鬼の目の前に瞬動で移動してきたエヴァンジェリンが現れ、胸部目掛けて拳をぶつける。

「ぐっ!?これは……」

衝撃が全身を駆け抜けるような感覚が遅う。更に、拳からは氷結魔法により体が凍りつき始めていた。

「どうだ、じわじわと凍りついていく気分は？」

「気分だと?特にない……な!!」

「何!」

エヴァンジェリンを振り払い、地面に着地した響鬼は氷結した箇所を手で払う。

「効いていないと言わんばかりの態度だな。忌々しいやつだ!!」

そんな彼の態度を見て、苛立ちを覚えるエヴァンジェリン。再び周囲の氷を操り、響鬼に攻撃する。

「そう何度も同じ攻撃を喰らうか!!」

印を結び、口元の口を開かせて大きく息を吸い込む。

「(火遁・業火滅し!)」

術を発動しようとした瞬間、足元から氷の柱が現れ響鬼の腹部に直撃し、体がくの字に曲がる。そして、そのまま空中に放り出される。

「言っただろう、ここら一带は私の氷の支配下だと!!」

「ぐっ、まさかあんな離れた位置からでも操れるのか……なんて魔法だ)」

腹部を抑えて、エヴァンジェリンの言葉に耳を傾ける。闇の魔法、マギア・エレベア発動した魔法を自分に取り込み我が物にする魔法。これほどまでの力を発揮できるのに驚きを隠せない響鬼。氷を自在に操れる者は同じ鬼戦士の凍鬼や吹雪鬼ぐらいだと思っていた。

しかし、今のエヴァンジェリンは恐らくそれ以上なのではと。

「まだ終わらんぞ!!」

そう言つて、今度は氷壁を響鬼を囲むように出現させる。そして、同様の氷柱を次々だし、響鬼を圧倒する。

「させるか!!」

向かってくる氷柱を拳に力を込めて砕いてく。しかし、完全に氷壁に囲まれている為、攻撃の大本であるエヴァンジェリンを止めなければ向かってくる攻撃はやまない。

「マクダウエル術者本人を何とかしないと・・・接近して持ち込むしかない」

途中で氷柱を壊すのをやめ、瞬動を使いながら氷を避けていく。そして指示しているエヴァンジェリンに接近する響鬼。だが、既にエヴァンジェリンは次なる攻撃を準備していた。

「かかったな新藤誠」

「何?」

氷壁の天辺に着地した瞬間、腰から下が氷が覆われ、それは先ほどの比ではなく硬く強固に氷壁と一体化指定しまう。だが、まだこの程度なら砕けないわけではない。

しかし、エヴァンジェリンの狙いは悪魔で足止めをする為・・・
「来たれ、とこしえのやみ、えいえんにひょうが!!（これで、終わりだ新藤誠!!あの世で私の力に恐怖している!!）」

絶対勝利宣言。この魔法を受けて生きていた者は一人もいない。

エヴァンジェリンが唱える魔法。それは術者が任意によつて固定した150フィート四方という広範囲に摂氏-273・15度・・・絶対零度の極低温空間を創り出す魔法。即ち、完全凍結殲滅呪文。

「(マズイ、この魔法は!!)」

始める目にする魔法だが、響鬼には非常に危険な魔法だと理解する。方位された内界は極寒の地獄と化した。大気中の水分、微生物、果ては湖面から湖底まで全てが氷結していく。いくら鬼でもこの桁違いな氷結は受けたことはない。

「(こうなつたら!!)」

響鬼は何かを決意する。突如、響鬼の体から白い煙が吹き出す。

「ふん、何か始める気だろうがもう終わりだ!!」

今更、何をしようがもう遅い。すでに、麻帆良湖の水面で巨大な華が蕾を開いていく。湖全土を覆わんばかりに急速拡大する花卉。

湖上の華が、また一輪咲いていく。

絶対零度の只中で、生身の血肉などいとも容易く凍り付き、肉体のあらゆる機能は静止していく。

それでも響鬼は踏み止まる。

精神集中……自身の奥底に眠る灼熱の炎の気呼び起こす為に……

「はああああああああああああああああああ!!」

やがて、体から出る白い煙が真っ赤に燃える炎へと変わり、周囲から襲いかかる絶対零度の世界を寄せ付けいない程の灼熱の炎が響鬼を包み込む。

ジュワツ……

自身を拘束していた氷が溶けるのではなく蒸発していく……

「何……何が起きている!?!」

発動している魔法に異変が生じているのに気づいたエヴァンジェリン。

「馬鹿な、溶けているだど!?!」

絶対零度を誇る氷結魔法が溶け始めた事に。

自然界の法則すら無視したこの氷結魔法が溶かされていく事など。今までそんな事をされてことすらないエヴァンジェリンは驚愕し、言い知れない恐怖心が襲った。

ありえないありえないありえない……ありえない!!

否定の言葉が頭を駆け巡る。

そして、響鬼の巨大な氷華は突如発生した高熱により、崩壊を始める。

砕ける氷の中を紅の炎を燃やしながら、歩み寄ってくる響鬼の姿。

先ほどとは、明らかに雰囲気が違う。

全身が烈火の如き紅色に変色している。
仮面は目にあたる部分がサングラスのように黒くなっている。

「あの姿は一体……」

エヴァンジェリンとの激突を見ていた茶々丸は響鬼の突然の変化に困惑していた。

遠くからでもはっきり見える程の一点の赤い炎の輝き。それはまさしく響鬼が強化した姿。

自身に備わっている赤外線サーモグラフィで検知するが、すでに計測不能の文字が出ている。

備わって言えるサーモグラフィで図れる最大測定温度は2000℃。それがすでに測定不能という事は、今の響鬼はそれを超える熱度を有していることになる。

完全な氷とかしているエヴァンジェリンには余りに不利な状況に茶々丸は助けに行くべきだと分析する。

しかし、エヴァンジェリンは絶対に手出し無用と言われており、どうするべきか悩んでいた。

そして、ネギもまた、その光景を目にしていた。

「(間違いない。あれは……響鬼・紅……お兄ちゃんが言った、強化形態だ)」

以前、誠自身から聞いたことがある響鬼のさらなる変身。響鬼・紅……

だが、あれになるのは夏限定しか変身しないと断っていたはずだと、考えるネギ。

肩を上下に落としながら、息を整える響鬼。

そして、ゆつくりと片膝をつく。

「やっぱり、土壇場で紅になるのは体に応えるな……魔化魍以外に紅になるなんて、予想外だった」

そうこの響鬼・紅は本来は鍛え上げた体を、更に鍛え上げて強化する変身。本来は夏に出現する等身大魔化魍に対抗するための姿。

先ほどの噴出した炎は《灼熱の鎧》と言い、その名の通り灼熱に燃え上がる炎を纏い防御する紅の時のみ使える特殊な術。炎の温度は正確には図られていないが常時5000℃と言われており、近づくだけで一瞬で塵になりはてる恐ろしい鎧である（だが、あまりに周りに被害が出るはた迷惑な術である為、滅多な事がない限りは使わないことにしている）。

そして通常形態の紅は身体能力の強化と共に炎属性がより一層強まっているが、身体への負担が強く、どんなに鍛えようとも1時間程度しか変身できない。

本来なら数分で息が上がる事はあるが、今回はその形態になる為に、体を鍛えていない。つまり無理やり紅形態に変身したのである。この状態では1時間どころか、10分も形態を維持することすら難しく、かなりの負担が体にかけていた。

だが、今回のエヴァンジェリンの攻撃を防ぎ、破壊するにはこれしかなかった。神威で飛ぶこともできたが、それではこの氷を破壊することにはつながらない。

「あれで、マクダウエルがおとなしくなっていればいいが」

先ほどの拳撃でエヴァンジェリンが気絶でもしていてくれればと願う響鬼。ちゃんと加減はした。気絶はしないでも動けなくなるかと間違いないだろうと。

——ぐわあああ……っ!! 何だこの痛みはっ!?

——……まさか、鬼……あんな鬼にやられたと言うのか!?!……この私が?

第十六ノ卷 《清める吸血鬼》

ズワアアアアアアアアアアッ!!

「エ、エヴァンジェリンさん!? こ、これは一体……」

突然のエヴァンジェリンの咆哮と共にあふれだす魔力。事態の飲み込めないネギは変わり果てたエヴァンジェリンに戸惑いを浮かべる。

「これは……闇の魔法が暴走を!!」

「ぼ、暴走!?!」

事態に気づいた茶々丸が告げる。

「あの『闇の魔法』は魔法を取りこむことで強大な力を手に入れることができる半面、術者であるマスター自身の魂を対価として払わなければならぬのです。ですから、発動している間は魔法がマスターの身体や精神を少しずつ侵していくわけです。普段のマスターならば、闇の魔法に恐らくそこまでとられる事などありませんが、今のマスターは完全に怒りで我を失っています」

茶々丸が重々しくエヴァンジェリンに起きている事態を説明する。

「そ、そんな! それじゃあ、あのままだとエヴァンジェリンさんは……」

そんな事を聞かなくても、賢いネギにはエヴァンジェリンがどういう風になるかは想像はつくが、

「今のマスターは精神を完全に闇に飲み込まれた凶暴な殺戮マシン。おそらく目の前にいる新藤先生を殺すまで止まらないでしょう」

「一体どうすれば……」

こんな状況に一度も立ち会ったことのないネギはどうすればいいのか考える。

「方法は一つだけです。学園結界を復活させ、マスターの魔力を抑えるしかありません」

「それなら、早く結界を……」

「それはできません。学園結界を解除する為に学園の電力をダウンさせています。復旧まではおそらくあと20分はかかると思います」

「そんな……くっ」

学園結界が復活するまでエヴァンジェリンはあのまま、事態がこんな事になったのはエヴァンジェリンが原因であるが、自分は今は彼女の先生。

「……でも、ここに居ても何にもなりません。それに、今のエヴァンジェリンの苦しんでいます……」

——助けてあげたい……

ろくに会話もしたこともないが、自分が先生なった以上は絶対に救いたい。エヴァンジェリンが自分の命を狙われていようと関係ない。ネギの純粹なる思いだった。

ネギは杖に乗り、エヴァンジェリンと響鬼がいる場所に向かう。

「……」

茶々丸はそれを止めず、ネギの後を追うように飛んで行く。茶々丸も自分の主^{マスター}を助けたい思いは一緒だった。

「ガアアアアアアアアアアアア!! コロシテヤルウウウ!!」

氷の瓦礫を魔力で吹き飛ばし、雄たけびを上げてエヴァンジェリンが全身の再び魔力を解放。

「ぐっ、なんて力だ!？」

それに対し響鬼は咄嗟に防御の体勢をとる。

たちまち周囲一帯を激しい光が包み込み、大きな衝撃波が生まれる。

ドドオオオオオツ!!!

激しい爆発音と共に、エヴァンジェリンが作り出した氷河が、消し飛んでいた。

「マクダウエルはどこに・・・」

爆煙の中、エヴァンジェリンの姿が見えなくなり、警戒する響鬼。

「ハハハハハ・・・ハーツハツハツハツハツハツ!!!」

狂ったように笑うエヴァンジェリンの声が聞こえたかと思うと、爆煙の中から魔法の射手を滅茶苦茶な軌道で向かってきた。正確に狙われていないため、滅茶苦茶に来る矢を避ける響鬼。

「とっ・・・マクダウエル、一体どうしたんだ？」

あの豹変したエヴァは明らかに正気を失っていた。先ほどまでとは明らかに違う。あれではまるで血に飢えた猛獣。何かしらの原因があるはず。

「まさか、あの魔法・・・術者の精神まで蝕んでいるっていうのか？だとしたら、マクダウエルが危ない!!」

原因があるとすれば、先ほど発動した魔法を自身に取り込む禁呪^{マジック・エレベーター}の魔法だと。術者の人格そのものまで変えてしまう程なら、明らかにエヴァンジェリンの精神状態は異常な程危険のはず。もしかしたら、あのままの状態が続けば廃人同然になる可能性もある。

急いで、エヴァンジェリンを止めなければと移動しようとしたその時、

「ミツケタゾ、オニイイイイ!!」

ジュツ!!

「なっ!?」

突然のエヴァンジェリンが現れたかと思うと、響鬼のすぐ横の氷が蒸発した。更に周囲の温度が一気に低下している感じがする。よく見れば右手からは、ビーム状の剣が手の先から出現していた。

エヴァンジェリンが発動させているの魔法は『エクスキューションソード』と呼ばれている触れたものを気体へ強制的に相転移、つまりは蒸発させてしまうというとてもない魔法。更に相転移させたれた物質は大量の熱を奪うので、効果範囲内の温度は急激に下がる。響鬼にあたりはしないが熱を奪われてのもこの効果によるもの。

「完全に理性なんて物は吹っ飛んでるみたいだな」

近くから見ればよくわかる。目が完全に血走っていて、今にも危険な状態だ。

「ハアアアア!!」

ジュワン!!ジュワン!!

右手のエクスキューションナーソードを振りまわしながら響鬼を攻撃する。単調な攻撃な為、簡単に避けることができるが、逆に迂闊にエヴァンジェリンに近づけないでいた。

「(仕方ない!!)」

ガシユンツ!!

両手に構えた音撃棒・烈火でエクスキューションナーソードを受け止める。

ジュウ・・・ピキ・・・ピキ・・・

嫌な音が烈火から聞こえる。烈火の撥の基部に亀裂が走っていた。撥に使われているのは、屋久島の縄文杉という樹齢3000年以上と推測されている世界でも類を見ない樹から削りとった樹を使用している。特殊な波動を帯びていると言われる樹から作製した烈火にそう簡単には亀裂が入るなどありえない話だった。それほどまで、エヴァンジェリンの魔法《エクスキューションナーソード》は強力な力があるという事になる。

「はあ!!」

「グワアツ!!」

これ以上受け止めていたら、本当に烈火が折れてしまう可能性がある為、腹部に蹴りを入れてエヴァンジェリンをひるませる。

「(マクダウエル・・・今、助けてやる!!) 音撃打・・・灼熱真紅の型!!」

怯んだエヴァンジェリンに烈火を振り下ろしていく。《音撃打・灼熱真紅の型》は響鬼・紅の状態の時のみ撃つことができる音撃打。叩くと同時に炎の気で出来た火炎鼓が現れる。

「グアアアアアアアアツ!!」

「はあああああああああああああああああ!!」

響鬼の流す清めの音の波動を受け、苦しむエヴァンジェリン。しかし、エヴァンジェリンの体中に纏った文様が引いている。

音撃が有する清めの音は、魔化魍を倒すだけでなく、邪な存在を浄化し、祓う事ができる。

今、エヴァンジェリンに存在する邪悪な存在。マギア・エレベア闇の魔法で現れたエヴァンジェリンの闇の精神を浄化する。

「ガ、ガアアアアア!!!」
ベキッ

「ガッ!!」

しかし、苦しみに耐えかねたのかエヴァンジェリンが音撃を放つ響鬼の顔面目掛けて拳を放つ。

避けることもできず攻撃を受けてしまい清めの音を流す作業が途切れてしまう。

「うっ……まずい、紅が維持できない……」

まだ、数分しか立っていないのに急激な疲労が襲ってきた。無理やり紅に変身したツケが来たようだ。紅を維持するのに限界を迎えようとしている。早期に決着を付けなければ、体が動かなくなってしまう。

「オニイイイ!!シネエエエエエエ!!」

大分、闇の魔法の呪縛を抑えたはずだが、エヴァンジェリンは自身の鋭い爪を光らせて、まだ攻撃しようとする。

「!!」

ドゴッ!!

咄嗟に響鬼も鬼爪を発動させて防御する。だが、エヴァンジェリンの驚異的な力が響鬼にのしかかり、地面の氷にクレータができて、今にも崩壊しそうだ。

その時……

「ラス・テル マ・スキル マギステル!!セブテンデキムスピリトウスアエリアーレス風の精霊17人
ウインクム・ラアクティ イニクム・カブテントサギタ・マギカアエール・カプトウーラエ
縛鎖となりて 敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢!!」

「ガッ!?ナンダコレハ!!」

17本の風属性の矢がエヴァンジェリンを拘束する。咄嗟にこと

にエヴァンジェリンは何が起こったか理解していない。

「これは、ネギ!!」

「お兄ちゃん、大丈夫?」

放った人物はネギだった。ネギは杖から降りると、響鬼の隣に立つ。

「お前、何で来た!!ここは危険だぞ!!」

「エヴァンジェリンさんの僕の生徒だ!!生徒が危険に陥ってたら助けるのは当然でしょ!!」

怒鳴る響鬼に反論するように言うネギ。

「・・・でも、マクダウエルはお前の命を狙ってたんだぞ?」

「そんなの関係ないよ。それに命狙われたてのお兄ちゃんも一緒にしょ?」

「ふつ、言ったなネギ・・・」

皮肉を皮肉で返されるとは。

「新藤先生・・・」

「ん?絡繰・・・」

茶々丸も遅れて、響鬼のもとにやってくる。

「申し訳ございません。誠に勝手な事とはわかっていますが・・・マスターを助けて上げてください・・・」

そう言つて、深々に頭を下げる茶々丸。こういう事態に陥ったのはすべてこちらに責任があるのはわかっている。しかし、エヴァンジェリンがああなつてしまつては、もう自分のちからではどうにもできない。自分たちが戦っていた相手に助けを頼むのは、虫のいい話。だが、茶々丸にはこの状況を打開するにはネギと誠（響鬼）に頼る以外なかった。

「元からそうするつもりだ。安心しろ」

「そうですよ茶々丸さん。エヴァンジェリンさんは絶対に助け出しますよ」

「新藤先生・・・ネギ先生・・・ありがとうございます」

「ああ・・・でもお前たち二人は罰として、学校中掃除だからな。これ今決めたから」

「それ、今言うこと?」

「今、言つとかないと忘れるだろ・・・」

こんな時に何を言ってるんだと、困惑するネギ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バキン!!

「!!!」

エヴァンジェリンを拘束していた魔法が力任せに破壊するエヴァンジェリン。

「邪魔ダアアアアアアアアア」

片手をこちらに向けると、氷の飛礫が向かってくる。

「(鬼火!!)」

口から鬼火を吹き、こちらに来る氷を溶かしていく。

「(すみませんエヴァンジェリンさん、少し痛いですけど我慢してください!!) ラス・テル マ・スキル マギステル!! ウーヌス・フルゴル 闇夜切り裂く

一条の光 コンキデンス・ルクテムイン・メア・マヌー・エンスイニミークム・エダットフルグラテイオー・アルピカンス 我が手に宿りて敵を喰らえ 白き雷!!」

続いてネギが稲妻をエヴァンジェリン目掛けて放射する。

ビリビリッ!!

「グアアア!!コ、コンナコウゲキイイイイイイ!!」

魔力を放出して、稲妻を弾き飛ばす。

「な!?!」

「あいつに生半可な攻撃は効かないぞネギ!!俺がマクダウエルに音撃を流し込んで抑えこむしかない!!」

「音撃を?」

「ああ、大分打ち込んだはずなんだが・・・大した魔法だよあれは」

おそらく、もう数発で押さえ込めるはず。先ほどより、攻撃の威力が弱まっている。

すると、

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!! ウエニアント・スピリトウス 来タレ氷精・ グラキアーレス 闇ノ オプスクーランテース 精!!」

「あの魔法は・・・さっきのか」

何の魔法を出す気なのか分かった響鬼は印を結ぼうとすると。

「い、今のは・・・」

「絡繰か・・・」

爆煙が立ち込める中、それを見つめる影が一つ・・・

「・・・お許しください・・・マスター」

腕の付け根から覗く銃口から煙を吹かせながら茶々丸は呟いた。その表情がどこか暗雲とした表情に見えた。

愛すべき主に背後から攻撃してしまったことなのか・・・

だが、それ以上に彼女は警戒心を露わに油断なく煙の中を睨んでいた。

「やはり・・・さして効いていませんか」

茶々丸の目の前で煙が晴れる。すると、受けた傷が見る見るうちに治癒していく、無傷のエヴァンジェリンが現れた。

「傷が！まさか、あれが吸血鬼の再生能力」

あれだけの爆発ならば、大分効いていたはずだが、エヴァンジェリンには真祖の吸血鬼特有の再生能力がある為、無意味だった。不老不死というのは伊達ではないようだ。

「グウウ・・・」

傷が治り、さしてダメージを受けなかったとはいえ、まさかの不意打ちを喰らったせい、エヴァが茶々丸を憎しみのこもった目で睨みつける。

「グルルルウウウウウ・・・」

獣のように唸っているところを見ると、どうやら茶々丸のことが認識できていないようだ。

完全に茶々丸を単なる敵と見なしている状態だ。

「(マスター・・・とうとう、私のことがわからないくらいにまで堕ちてしまわれたのですね・・・)」

内心で変わり果てた主の姿に悲しみを覚えながらも、響鬼とネギにお願いした。そして自分もエヴァンジェリンを止めるために攻撃に加勢したが、逆に無意味だったようだ。

その時、

「危ない茶々丸さん!!」

「う……ん……ここは!?!ひゃ、冷たい!!」

エヴァンジェリンが目を覚ますと、突然冷たい感覚が全身を襲った。

「眼が覚めたか……あんまり暴れるなよ、こっちはお前をおぶって泳いでるんだからな」

「き、貴様!!な、何をしている!?!」

気づけば、自分は鬼の姿から人間に戻っている誠におんぶされるように、湖を泳いでいた。電力が戻ったのかあたりは街の光で湖が輝いていた。

「何って、沈んでたお前を引き上げて、岸まで泳いでるんだよ。あと、お願いだから暴れるのはやめてくれ。俺も結構、体力とかその他諸々限界だから……」

少し後ろを向いて、エヴァンジェリンに眼をやる誠。ここで、エヴァンジェリンが下手に暴れれば、落としてしまう可能性がある。正直、エヴァンジェリンを背負っているのも結構きつい。

「……冷たい……」

「?……ああ。お前が作った流水とかそこにあるからな。早めにあがらないと低体温症とかなったらかなり危ないからな」

周りには砕けて浮いている氷が流水となって、そこら中に無残に浮

いている。今の湖は非常に水温が低くなっている。

「私は負けたのか……お前に……」

先ほどまで、誠と戦っていたはず。しかし、途中から記憶綾ふやで記憶の整理がつかない。自分が、誠の攻撃を食らって氷壁にぶつかってからの記憶が曖昧だった。その時……確か、闇の魔法に精神を飲まれて。

「……私は闇の魔法に精神を奪われたのか……ふっ、何が最強の魔法使いだ……自分が作った魔法に乗っ取られるなど……」
どうやら、闇の魔法の呪縛で暴走したのだろうと推測するエヴァンジェリン。

何が最強の魔法使いだ。自分自身を制御できもしないで。目的も忘れて、ただただ戦う殺戮マシーンと化した自分が恨めしく思った。

「あれだけの魔法を放つ事ができれば、充分最強だと思うけどな」

「うるさい!! さぞかし気分がいいだろうな貴様は!! この私を倒して、英雄になるのだから!!」

誠の言葉が気に入らなかったのか食い入るエヴァンジェリン。

「はあ? 英雄?」

「私を倒したんだ!! この学園にいる『正義の魔法使い』共に引き渡すのだろうか? そうすればお前は学園の危機を救った英雄になるのだからな!!」

涙目になりながら、叫ぶエヴァンジェリン。もう何かもどうでも良くなった。自分の力を過信して、自らが生み出した魔法に乗っ取られて、あまつさえ敵として戦った誠に助けられているなど。

そして、待ち受けているのは自分のことを目の敵にしている、学園に巣くう自称『正義の魔法使い』たち。おそらく、本国の連中でもやってきて、吸血鬼用の魔法でもかけて殺されるか、もしかしたら人体実験の材料にでもされてバラバラにれさるかだろう。もう自分の運命など決まったも同然。

しかし、誠からの返事は全く違った。

「何でお前を引き渡すんだ? 第一学園の危機って、別に電力が落ちてるだけだろ? 病院とか気にしてるんだったら大丈夫だ。あそこは非

常用電源とかあるからな。あと、被害被ったの俺だけだから、大した問題ないから安心しろ」

「……は？」

何言ってるんだコイツみたいな顔をするエヴァンジェリン。

「ふ、ふぎけるな!!何を言ってるのだ貴様は!!アホじゃないのか!!」

「み、耳元で大声だすな……」

大声で耳がキーンとなり、片手で耳を押さえる誠。

「私は貴様やネギのぼうやを襲ったんだぞ。そして、クラスの奴らを襲った!!それだけでも充分、学園の脅威になっているだろうが!!」

「……やっぱり自覚あるんじゃないか」

「え？」

誠の言っている事が理解できないエヴァンジェリン。自覚?自分のやってしまったことか?

「自分がやったことを悪いって自覚しているなら……それだけでいい」

「……私は悪の魔法使いだ。自分がやったことが悪いってわかって当然だ」

「そういう自意識があるなら、それでいい。ただやってしまった事には、ケジメはツケないと行けない」

「ふん、偽善者の言うセリフだ。貴様も所詮、私に光に生きろって言いたいのだから?」

かつて、自分を封印したナギが言った言葉を自傷気味に言った。

「……別に光に生きるとかなんとか必要はないだろ。大体、何が光で何が闇とか、そんなのは個人の立場で変わるんだよ。だから、別にお前に光で生きろとか言うつもりはない。生きる道なんて人それぞれだ」

「……」

誠に言われ、黙るエヴァンジェリン。

「まあ、長いこと生きてきたお前に言っても意味ないだろうがな……自分より長く生きてるエヴァンジェリンならこれくらいはわかっているだろうと思った誠。

しかし・・・

「う・・・グスツ・・・」

「・・・泣いてるのか？」

突然、泣きだしたエヴァンジェリンに驚く。

「う、うるざい・・・グスツ・・・」

涙で鼻声になりながらも強がって見せようとするエヴァンジェリン。

そこには悪の魔法使いと恐れられた吸血鬼としての面影はない。年相応の少女にしか見えなかった。

背中に顔を押し当てて、声を殺しながら泣いていくエヴァンジェリン。

一頻り泣きやむとエヴァは自嘲気味に語り出す。

「私は何も・・・自分からこうなりたかったわけではない・・・いきなり吸血鬼という宿命を負わされて、周りは私のことを化物呼ばわりだ。そんな苦痛から逃れるために、いつのまにか私は自分でもわからないことをしていた。いつしか、それが今の私を確立させていたのかもしれないな。悪を行って人々から忌み嫌われている存在に・・・闇の世界に・・・」

「私もかつてはナギの言う光のある世界に憧れた事があった。でも、それは私には無理だった。『正義の魔法使い』が目を光らせるこの学園では、大人しく普通の生活を送っていても過去に犯した罪によって貼られた『悪の魔法使い』というレッテルは付いて回る。時折、そんな視線からどこか遠くへ逃げ出したくなることもある。だが、逃げようにも封印がそれを許してはくれない。・・・どんなに言い繕ったところで結局は私がかごの中の鳥なのだ。こんな状況でどうして『光に生きる』なんてことができるんだ？」

エヴァンジェリンの嘆きが誠に伝わってくる。

エヴァンジェリンの境遇には確かに同情の余地がある。結果的に、

エヴァンジェリンに封印の約束をしておいてそれを無責任に放棄したナギにも問題がある。

「(ナギ・スプリングフィールドか・ネギのこともそうだが・・・)」
誠は内心でナギに苛立ちながらも、エヴァンジェリンの話に耳を傾ける。

「・・・ナギが死んだと聞いた時、私は光に生きること諦めた。だからだろう・・・かつての自分に戻りたかった・・・孤独であっても、闇の中に居ても、自由気ままに生きていたかつての自分に。・・・それがいつしか心の支えになっていた。だから私はこれまで誇りだけは失わずに生きてきた。・・・そんな時だ、あの鬼が現れたのは・・・」
「鬼?」

「ああ、突然現れて私をあしらった奴だ。私はそれがたまらなく悔しかった・・・自分が最強だというのをな」

「(だから、俺を狙ったのか・・・一体誰だ?)」

エヴァンジェリンの話聞き、今回の大本の原因が分かった誠。しかし、この麻帆良学園に来たのが俺以外にいたとは。事情を知りたいが今はエヴァンジェリンの話聞いてあげるのがいいだろうと。

「・・・そんなことを俺に話してどうする?」

「・・・一人くらい胸の内を知ってもらってもいいかと思つてな。何故かわからないが、今はお前に知っていて欲しかった・・・それだけだ・・・」

エヴァは小さく怒ってみせるが、彼女自身が言うようにその表情はどこか心地よい顔をしていた。自分らしくない。だが、なぜか誠になら話てもいいと思つてしまっただけだ。

「そうか・・・」

清めの音を流し込んだ影響か、エヴァンジェリンの心にあつた何かを取り払つたのか。それはわからないが今のエヴァンジェリンは確かに変化があつたのは間違いない。

「?」

すると、エヴァンジェリンが背中に密着するように抱きついてきた。

「き、気にするな。寒くなっただけだ……」
「ふっ」

「な、何がおかしい!？」

顔を赤くして、怒るエヴァンジェリン。

「別に、もうすぐ岸につくからな」

もう目の前には岸が見えてきていた。

「……」

エヴァンジェリンはゆっくりと眼をつむる。

「(……暖かいな……こいつの背中は……)」

冷たい水につかっているとうのに、なぜか、誠の背中が暖かった。人の背中にこんな事をするのは生まれて初めてだと思おうエヴァンジェリン。

気がつけば、岸に付く前にはエヴァンジェリンは深い夢の世界に入っていた。

*

「気が付いたかい？」

気がつけば自分はベットの上で眼を覚ました。どうやらここは自分のログハウスのようだ。近くの椅子にはタカミチが座っていた。

「タカミチ……なんでここにいる？」

「君の様子を見に来たんだよ……海外出張から帰ってきり早々に学園長からの連絡を頼まれた際にね」

「どうやら、学園長から連絡事項を頼まれてここの来たようだ。概ね、学園長も今回の所業に目をつむれきれなくなって、ついに処罰でも決定でもしたかと。」

「ふっ、私を処刑にでもするのか?」

「え?」

エヴァンジェリンの言葉を聞いて、キョトンとした顔をするタカミチ。

「何を言ってるんだいエヴァ。僕が学園長に頼まれたのは、ちゃんと学校にくるようにと、今回の事件の反省としてボランティアとして学園の広域掃除だよ」

「なんだと!?!」

「たったそれだけで、今回の事件が片付くはずがない。絶対におかしい。」

「ああ、学校の掃除は誠くんの要望だからね。じゃあ、僕はもう行くよ。どうやら大した後遺症もないようだからね」

「ちよつと待てタカミチ!!」

エヴァンジェリンが納得しないのかタカミチを呼び止める。扉からであろうとしたタカミチはエヴァンジェリンの方を向く。

「誠くんやネギくんに感謝するんだよ。特に誠くんね。君の処遇の件で彼は……土下座してまで君の事を必死に庇ったんだからね」

「!!アイツが?」

「だから、本当に誠くんとネギくんに感謝するんだよ」

そう言っつて、タカミチは部屋を出て行ってしまった。

部屋に残されたエヴァンジェリンは天井を見つめていた。

すると、再び扉が開く音がする。

「やっと眼を覚ましたか」

入ってきたのは誠だった。右手には何やらビニール袋が握られていた。

「新藤誠……」

「はあ、フルネームでなくていいだろ。誠でいいよ、マクダウエル」

無愛想に名前を呼んだエヴァンジェリンにため息をつきながら、タカミチが座っていた椅子に腰掛ける。

「なら、私のこともエヴァと呼べ誠……………」

「わかったよエヴァ」

そう言つて、ビニール袋からりんごを取り出し、ポケットから出したナイフで皮を剥いていく。

「別に貴様に感謝してないからな……………」

「はいはい……………」

「本当だから!!」

「わかったよ」

「ちゃんと聞いているのか貴様!!」

ムクツと起き上がり、適当な返事をする誠に食いかかるエヴァンジェリン。

「ほら、りんご。腹減ってるだろ?」

「え……………」

グウウ……………」

突然、お腹の虫が鳴り、顔を赤くするエヴァンジェリン。誠は切つたりんごを皿に載せて、エヴァンジェリンに差し出す。エヴァンジェリンは素直にそれを受取、一口、また一口と食べていく。

「そういうえば、茶々丸はどうした?」

先ほどから、姿を見せていない茶々丸のことを聞く。

「茶々丸なら、学園の掃除に行ってるよ。お前の分も含めてな。タカミチから聞いているだろ?」

「ああ、その事か……………」

「そう、あと……………俺、この『家』で生活する事になったのも聞いているだろ?」

「ブグウウウウウウウウウ!」

「ぶはっ、目にりんごが!」

突然の誠の発言に驚愕するエヴァンジェリン。食べていたりんごを吹き出してしまう。

「ゲホツ、ゲホツ!!な、そんなことは聞いてはおらんぞ!!」

「何?タカミチ、伝え忘れたのか?」

顔をタオルで吹きながら、つぶやく誠。

「質問に答える誠!!なんで貴様がこの家で暮らすのだ!!ここは私の家だぞ!!」

「はあ?人の寮をぶち壊してくれたのは誰だったけ?」

「う……私だ……」

氷塊を誠とネギが暮らしている寮に落として壊したのは他ならぬいエヴァンジェリンだ。

「おかげで住むところがないんだよ。俺は別にテントでも買って暮らせばよかったけど。学園長がどうしてもって言うからな」

「ぐ、おのれあのボケじじい」

「そういうわけだからしばらくお世話になるからな」

「ふぎけるな!!大体きs「エヴァンジェリンさん!!良かった元気見たいですね!!」ぼうや!?それになんで貴様らも!!」

すると、今度はネギがエヴァンジェリンの部屋に入ってきた。後ろには制服を着た明日菜と木乃香もいた。

「なんでって、エヴァちゃんが心配だから来てあげたのよ。3日も学校来ないから」

「3日だど!?!私はそんなに眠っていたのか!?!」

「そうですよ、眼を覚まさないと心配で……」

「もうエヴァちゃんのせいで、このガキンチョを私たちの部屋に預かることになったんだからね!」

「な、私のせいだというのか!」

「いや、だから家を壊したのはエヴァだろ」

「ぐぬぬぬ!!」

本当の事を言われて、口をつぐむエヴァンジェリン。もう完全に遊ばれている状態だ。

でも、その表情はどこかうれしそうな表情にも見えた。かつて他人と距離を置いていたエヴァンジェリンが、人と付き合っていく素晴らしさを分かちあつていくのだから……

そして、エヴァンジェリンと茶々丸の二人しかいなかったこのログハウスに新たな同居人が増えることになった。

彼の名前は新藤 誠

またの名を

響 鬼

第三章 《悪鬼出現編》 第十七ノ卷 《百日鬼》

3月15日（土） 23：20

奈良県南部吉野 猛士総本部（総本山）

漆黒の闇に閉ざされているはずの山間の集落に、紅蓮の炎で燃え上がる神社《鬼神神社》の姿があった。

周囲には火を消そうとする集落の消防団や、緊急出動した消防隊の姿、そしてこの集落・・・いや猛士総本部に所属する人達の姿が見えた。

「火の勢いが強くて、現在の装備では消化しきれません!!」

一人の消防隊員が、猛士総本部に所属する人たちに状況を報告する。

消防団の小型ポンプ車、消防隊の消防車が3台駆けつけているが、神社から出る火を消化しきれないでいた。

火の勢いも留まる事を知らず、近くに隣接する倉庫にまで飛び火しそうな状況だった。

「情けない!!この火を消すのが君たちの仕事じゃないのか!!装備だ何だ言っただけで、自分たちの力でこの火を消そうとは思わないのか!!」

そう言っただけで、消防隊員に説教する人物は、猛士総本部の開発局長《小暮耕之助》。様々な音撃武器を編み出した人物であり、昔は音撃戦士として魔化魍と激闘を繰り広げた歴戦の猛者である。が、少々精神論破者なの、気合や根性で何とかなると考えている人でもある。

「小暮さん、消防の人たちも一生懸命やってるんですからそう言うのはちよつとどうかと思うツスよ」

小暮の言った事を、どことなく咎めるのは、偶々、総本部におとずれていた関東支部に所属する音撃戦士《轟鬼》こと、戸田山登巳蔵。熱血漢で正義感あふれる真面目な性格であるが、少々イジメられるタイプでもある。誠達に若い鬼達の先輩にあたる。

しかし、そんな少々生意気な事を言う戸田山に反応する。

「なら、トドロキ。お前が今すぐ行ってあの火を消してくるんだ」

「お、俺がツスか!?無理ですよ!!」

燃える神社に指をさして、いきなり無理難題をふっかけてくる小暮。それを聞いて無理と即答する戸田山。

いくらなんでも無茶すぎである。

「このままだと、隣の倉庫まで飛び火する!!あそこには保管されている音撃武器や重要な古い文献だってあるんだ!!あれが燃やされるのは何としても阻止せねばならん!!」

普通に駆けつけている消防に音撃などと発言するが、ここ奈良県吉野郡吉野町は古くから猛士との付き合いがあるため、住んでいる町の住人は殆ど存在を知っているのだ。

そして、小暮が火を消してくれと頼むのは、神社のすぐ近くには音撃武器を保管している倉庫がある。今、現在も火の影響を考慮し、中にある物が急ピッチで移動させているが、量が多いため難航しているのが現状だった。

「そもそも、何で急に火が上がったんですか。あそこの神社って火の手が上がるなんて考えられないですし・・・」

「・・・あれは人為的な火災だ。それを起こした奴の姿を見たのもいる」

今からほんの30分前、いきなり鬼神神社が爆発を起こり、駆けつけた猛士の人たち数人は何者かに気絶させ、逃げ去った者がいるのだ。フード付きの外套を纏っており、顔もわからず男なのか女なのかもわからなかったが。

「恐らくそいつが今回の火災を『引き起こした犯人・・・』という事でしようね」

「水撫鬼（みなづき）くん!」

小暮の言葉に続くように話しかけてきたのは、猛士総本部に所属する音撃戦士・水撫鬼（ミナヅキ）と呼ばれる着物姿の綺麗な少女。本名は御影美緒。まだ、18歳であるが非常に優秀であり、早くに師から独立した鬼でもある。武器は音撃弦・水月と呼ばれるバイオリン型

の音撃武器を使用する。

「それにこの炎、明らかに呪術のような力で燃えていますよ。あれだけ水を浴びせて消えないのはおかしすぎますし」

美緒がこの炎が特殊な呪術で炎が燃やされていると指摘する。かれこれ10分は放水しているが火の勢いが増すばかり。装備が少ないとかの問題ではなさそうだ。

「あの神社を爆発させて、何のメリットが・・・」

「あそこには、危険極まりない武器などを奉納し、封印している神社だ。かつて鬼の道はずれ邪な鬼へと成り果てた者達の武器がな」

長い歴史の中、全ての鬼が人々を救う為に戦ったわけではない。悪の道に走り、自分のためだけに鬼の力を使おうとする者がいる。そう言った者達の怨念とも言える物が宿った音撃武器などがあり、安全の為に今尚燃えている鬼神神社に奉納という形で封印されているのだ。

「既に、いくつかの武器や道具が盗まれているのが確認されている」

「ええ!? それじゃあ、早く取り返さないとマズイじゃないっすか!!」

小暮の言葉に驚く戸田山。もし、それが魔化魍の手に渡りでもしたらかなり面倒な事態になってしまう。

「あの、それで盗まれた物は確認されているのですか?」

美緒が小暮に聞く。顎に手を起き、うぐんと考えている小暮。どうやらそこまではまだ確認されてはいないようだ。

「盗まれた物は一つだけだけど確認されているよ」

「? イブキさん・・・!!」

燃える神社の方から現れたのは鬼に変身している威吹鬼こと和泉伊織だった。所々から煙が上がっており、どうやら燃えている神社の内部にいたようだ。

「さっき、内部を確認してきましたが、奉納されている部屋は完全に破壊されていました。それから、火が止まらなかった原因はこれでしょう」

威吹鬼は顔だけ変身を解き、手に握っている札を小暮に見せる。既に半分程燃えてしまっているが、何やら文字のような物が書かれている。

「これは？」

「陰陽で使用される札の一種でしょう。これから炎が溢れるようになっていましたから」

「こんな小さな物があの火災を」

火元の原因がこんな小さな札だというのに驚く戸田山。神社の方も威吹鬼が出てきてからは炎の勢いが収まっていた。

「しかし、その御札が原因とするなら、使用したのは陰陽術師という事ですよね」

「それは、まだ終わってから調べないとわからないけど、破壊された部屋の中には手つかずの状態の物が散乱していました」

封印されている部屋は完全に破壊されてはいたが、中にあった武器や道具は殆どが手つかずの状態であった。恐らく火災では消失はないだろうが、鎮火しだい再封印する必要はあるだろう。

「じゃあ、盗まれた一つというのは？」

「恐らく……400年前に鬼祓いされた鬼が使用していた武器《戦慄奏》……」

「戦慄奏。やけに嫌な名前前の武器ですね。誰の武器何ですか？」

戦慄奏と呼ばれる武器。確かに名前だけで、あまりいい響きはしない。

「確か、残っている書物によると名前は……《百目鬼（ドウメキ）》」

燃え盛る神社の前でその人物を名を語る威吹鬼。

しかし、この事件が後にとんでもない事態に発生するとはこの時は、まだ知る由もなかった。

3月16日(日) 0:20

とある場所の洋館

「首尾よくいったみたいだな」

森のなか佇む洋館。その中に実験道具などが羅列している部屋にいる3人の人影。そのうちの和服姿の男性が机に座っている、目玉が全身に施された趣味の悪い着物を着た女性に話かける。

「そうねえ、まさか今の猛士があそこまで警備が薄いのは驚いたけどね。あんな簡単に侵入できるなんて、随分と生易しい時代になったのね」

ケラケラ笑う女性。

「でも、戦慄奏を取り返させればどうでも良かったけどね。やっぱり私にはこれが一番しっくりくるのよね」

そう言つて、懐から篠笛のような笛を取り出す。篠笛はまるで真っ赤な血のように色彩をしていた。

「だが、意外だな。てっきり何人か猛士の人間を殺すかと思つたが」
和服の男の近くに佇む、和服の女性が座っている女性に話しかける。

「まあね。総本山を壊滅させても良かったけど、まずはこの目に慣れたかつたからね」

そう言つて、右目に手を当てる。そして、手を離すとそこには三つ巴に光る赤い瞳が浮かんでいた。

「その目はまだ試作品だから、大切に扱ってくれよ。鬼の目をコピーするのは大変なんだからな」

「わかつてるわよ。でも、この目は凄いわね。目があつただけで、相手が気絶するんだから」

そう言つて、自分の目を撫でるように触る。

「だが、その目も所詮は模造品。本物には程遠い。なんとかして本物を手に入れたいものだ・・・これが残りの盗みだして来たものか？」
和服の女性は机に無造作に置かれている袋を見つけて、机に座っている女性に質問する。

「ええ、私が欲しかったのはこれだけだけど、残りは使えそうな物持ってきたから。それ使つて、何か新しい魔化魍かクグツでも作つたらど

うかしら?」

「そうだな、怨念や邪悪な気が宿っている物を使えば、新種の魔化魍でも作れそうだが。今は別の魔化魍を作っている」

「別の? 一体何を」

「それは、おいおい伝えるさ。それより、また頼みたい事があるんだが、いいか?」

「別に構わないわよ」

すんなり承諾すると、和服の男性が、懐からある物を女性に渡す。

「何これ? なんか勾玉みたいだけど」

緑色をした勾玉を受取、興味津々に見つめる。

「それは特殊な波動を流した勾玉だ。名前がそうだな《鬼封じ》とでも付けるか」

特に名前を付けていなかったのも、即席で名前を付ける和服の男性。

「鬼封じ? これ何に使う物なの?」

「鬼の力を一時的に抑えるものだ。以前、猛士の武器を奪った時の資料から解析したものだ。確か《装甲声刃》という武器だったな」

以前、偶然入手した猛士の武器《装甲声刃》のデータから開発した勾玉であり、効力は鬼の力を抑えるという代物。

「へえ、でもこれをどうしろっての? まさか、鬼を一人封じて連れて来いとか?」

「いや、連れてくるのは《近衛木乃香》という娘だ」

「近衛? まさか、陰陽師一族の子孫か何か?」

近衛という苗字に聞き覚えのある女性。

「お前がいた時代では、確かそうだったが、今は関西呪術協会という組織の長をやっている一族だ。今回はその長の娘を連れてきて欲しい」

「目的は? そんな小娘一人連れてきて一体どうするの?」

「ある目的の為に、利用するだけさ。その娘が持っている膨大な魔力が必要なんだ」

「へえ、魔力ねえ。で、その娘がいる場所は? それからこの鬼封じが何で必要なかしら?」

魔力と聞いて、何か思うあたる事がある女性。とりあえず居場所と勾玉の使用目的を聞き出す。

「場所は、麻帆良という西洋魔術師が居座る土地だ。西洋魔術師がかなりいるから、警戒するんだな」

「アツハハハ!!それなら、そいつら皆殺しにしてあげるわ。警戒するぐらいなら、殺って方がいいわよ。なんなら、魔化魍引き連れて、食わせてあげましょうか?」

警戒と言う言葉を聞いて、何か可笑しいのか、急に狂ったように笑うと、恐ろしい発言をする。いかにも、敵ではないと言っているようだ。

「必要なら何体か引き連れて行けばいいさ。麻帆良には偵察も兼ねて2体程向かわせているが、既に1体が鬼に倒されている」

その言葉を聞いて、少し驚く女性。

「鬼を嫌ってる西洋魔術師が、鬼を入れてるわけ? 一体どういう風の吹きまわしなの?」

「さあな、だが今回来ている鬼がああ《鬼神》だ」

「!!」

鬼神という名を聞き、顔つきを変える女性。

「へえ、鬼神がねえ。ならこの鬼封じをくれたのも納得できるわね。西洋魔術師ならともかく鬼神は目障りになるわね。でもちようどいじゃない。ついでにそいつの本物の《鬼導眼》をもぎ取れば」

そう言つて、机から降りると出口がある扉に向かって歩き出す女性。

「魔化魍は連れて行かないのか?」

「気が変わったわ。私一人で十分よ。あ、それからこれ持つて行くから」

そう言つて、猛士から盗み出した武器の一つを持つていく女性。

「成果を期待している。百目鬼」ドウメキ

「まあ、最悪この小娘の死体を連れてくるかもしれないけど、そこは気をつけといてね」

和服の男性の言葉に答えるように、口元を釣り上げて笑うドウメキ

と呼ばれた女性。

そう彼女こそ、500年前に猛士により鬼祓いされたはずの鬼《百目鬼》であった。

なぜ、500年の時を経て、現代にいるのかは今はまだ知る由もない……

第十八ノ卷 《二人の鬼》

3月17日(火) 15:00

麻帆良学園女子中等部2年A組

本日最後の授業である社会の時間。担当は勿論、教壇の椅子で教材用のDVDを生徒達と見ている青年《新藤誠》。3学期終了間際に赴任してきた為、主だった授業の内容があらかた終わってしまったているので、こうした社会科のDVDや抜き打ちテスト(生徒からは不評)などを授業で主に行っている。

DVDと言っても、《その〇歴史が動いた》というN〇Kの歴史番組を見せているだけなのだが。

「まあ、堅い教材用の見るよりこうしたTV番組の方が生徒達も見やすいだろ」

誠の選択もあながち間違っではないなかった。教材用の見せた時より、興味津々に見ている。と言っても出てくるカッコイイ俳優の男たちに興味が出ているのは誠は知らない。

「(また、桜咲と龍宮は休みか・・・)」

座席の方を見て、空席が2つ。刹那と真名が座る席だ。真名は昨日は来ていたが、刹那は来ていなかった。というより刹那が学校に現れていないのが多い。やっと不登校だったエヴァと茶々丸が来たのに、「今度はあの二人か」と。

まさか、四六時中学園の警備に回っている訳はないだろうなと思っただが、真名から「違う」と言われたので、それ以上追求はしていなかった。ただの風邪と言っていたが本当かどうか怪しい所。それに聞こうにも、真名はともかく刹那とはあの日(魔化魍退治)以来どうも、誠を避けている傾向が見えていた。まあ、自分を嫌っていようが、学校ぐらいには出てもらいたい。どうにも座席が空いているのは、悲壮感が漂っている。テンションは高いが、決して悪いクラスではないので、31人全員が揃って欲しいと思う誠。

しかしその中で、たった一人だけ机に突っぱねて寝ている人物が一人。

「Z z z . . . Z z z . . .」

「はあ . . .」

そして、こうした授業で必ず寝ている明日菜。ため息交じり机に近づくと、周りの生徒もクスクス笑いながら見ていた。

「起きろ、明日菜。寝るなら授業が終わってからいくらでも寝ていいから」

「Z z z . . . Z z z . . .」

声をかけても、構わず眠る明日菜。肩にさわり揺らしても起きる気配が全くない。これで何度目になるか、毎回授業で眠る明日菜に頭を痛める誠。最後は結局、叩き起こすはめになるのではと。あんまり強引な事は好きではないので、どうすべきか考える。因みに名前で明日菜を呼ぶようになったのは、明日菜がそう読んでほしいとの自発的に言ってきたから、木乃香についても同様だ。何だかんだで、この二人はいい意味で様々な事件に巻き込まれているから（魔化魍やエヴァ襲撃で）。

「新藤先生、明日菜を起こすとっておきの策があるよ」

「策?」

そう言っただけに出たのが明日菜の左隣の席に座る柿崎美砂。若干意地悪そうな顔をしているが . . .

「ゴニョゴニョ . . .」

「え、それ本当に言わないといけないのか?」

「当然でしょ先生。このままだと明日菜起きないわよ?」

「 . . . それは困る じゃあ、言うぞ」

正論を言われて、仕方なく明日菜の耳元に近づく。何故か周りの生徒達も此方を見ている。

『まさか、生徒たちこの展開読んでたんじゃないだろうな』

と思いつつも、明日菜に言った言葉は。

「高畑先生が結婚するってよ」

「なんですってええええええええええええええええ!!」

ガバッ!!ドゴッ!!

「うゝっ!」

その言葉を聞いた瞬間、明日菜は覚醒し机から勢いよく立ち上がるが、至近距離にいた誠の顔面に頭がクリンヒットしてしまう。後ろに仰け反り、片手で顔面を抑える誠。

「ハハハハハハハッ!!」

途端に生徒達の笑い声が出る。

「高畑先生が結婚するって……あれ？新藤……せんせい……」
全く状況を掴みきれていない明日菜。しかし、後ろで顔を抑える誠を見て、冷や汗が出る。

「あ……すな……授業で寝るのはやめろ」

鼻を抑えて、明日菜を見る誠。

「あははは……すみません」

そう言つて申し訳なさそうに謝罪する明日菜。誠はついでに柿崎の方を向き。

「それから柿崎、もっとマシンな起こし方を教えてくれ」

「まさか、明日菜がここまで飛び起きるなんて思わなくて……」

「そう言う問題なのか……」

冗談抜きで鼻が折れるんじゃないかと思った。まあ、載せられてしまった誠が言うのは何だが。そうしている内に終了のチャイムが鳴る。

「あ、もう終わりか。結局、俺が授業受け持つてから殆ど寝てたな……」

「あれえ、そうでしたっけ？」

「そうだっけじゃなくて、そうだろ!!」

結局、誠が赴任してきてから殆ど授業で寝ていた明日菜であった。

16:30

麻帆良学園女子中部職員室

生徒達がそれぞれ部活動や帰宅する時間帯。3学期が終わる件や春休みの内容などが議題の職員会議も終わり、職員室から退室しようとした矢先にネギからとある事を聞いていた。

「新学期からも継続して3―Aの担任をするのか？」

「うん、さつき学園長先生からそう言われたんだ。本当は最終課題を出して、正式な教員にするはずだったんだけど。色々あったから」

「ああ、エヴァの件とかか」

エヴァの件や魔化魍退治などの事件を思い出す誠。その後も、ちよつとした事件なども多々あった（高等部とのいざこざや、木乃香のお見合い妨害した件などしようもない事件ではあったが）。

その件もあり、学園長として当初出すはずだった課題は『エヴァンジェリンを不登校を直させる』という物だったらしい。本当にそんな課題で大丈夫かと思ったが、一緒に暮らしている誠からすれば、あす意味難しいものかもしれないと最近少し心の中で思っていたりした。だが結局は学園長の思惑とは裏腹にエヴァは誠と対決することになり、危うく学園の存亡の危機にまで発展する事態になっていた。

「なるほど、それで課題どころじゃなくなったから、とりあえず3年に進級しても継続して担任をやるって事か」

「後からまた別の課題を出すって話だけどね。お兄ちゃんの方はどうなの？」

「俺か？」

ネギは引き続き、課題保留という形で3年A組に進級した彼女達の担任を継続する事になったが、誠はどうするのか不明だった。誠も書類上では教育実習生となっている。

「さあな、退治するのを倒したらここに留まる必要はないからな」

「やつぱり、そうだよな」

誠が麻帆良学園に来ているのは魔化魍退治で教師をやっているのは隠れ蓑みたいな物である。魔化魍を麻帆良学園から退治すれば、留まる理由はない。再び日本全国を回り、魔化魍を退治する事になる。

それを聞いて、残念そうな顔をするネギ。

「まあ、そうなるかどうかはわからないがな。全然姿を見せないからな」

「隠れてるとか？」

「それにしても音沙汰が何のが逆に気になる。別の地方に言つてると

は限らないしな。じゃあ、今日はもう上がるから」

椅子から立ち上がり、荷物をまとめる誠。

「うん。僕の方も通知表の整理が終わったら帰るよ」

「そうか、じゃあまた明日な」

そのまま、職員室を後にする誠。残ったネギは、生徒達の通知表にコメントを書き込んでいる作業を続けながら、先ほどのやり取りを思い出す。

「(そうだよね、お兄ちゃんは魔化魍を退治する為にこの学園に来たんだから。役目を終えたら帰るのは当たり前か。結局、『弟子にして』なんて言えないで終わっちゃうな)」

ネギの心の内にあるもう一つの夢。それは立派な魔法使いではなく、誠と同じ音撃戦士、すなわち《鬼》になるという夢を持っているのだ。

6年前の故郷が悪魔に襲撃された事件、そしてネギが鬼という存在に初めて会った事件でもあった。

同時刻

麻帆良学園女子中等部 学園長室

誠が学校から帰る同じ時間帯、中等部の学園長室。客人用に設置されているソファアームに座り、何やら表情が重い近右衛門。そしてその席に向かい合うように座っている青年がいた。

「まだ情報が不足しているので確定という訳ではありませんので信憑性はかなり薄いですが」

「わかっておる。しかし 猛士の宗家でもある和泉家の君がこの地まで訪れているのだ。緊急を要する事態だというのはわかっておるよ。イブキくん」

そう言って、目の前にの青年に顔を向ける近右衛門。目の前の青年は猛士の中核たる宗家の人物《和泉伊織》こと音撃戦士・威吹鬼だった。

「此方も情報をそれなりに集めてはいるのですが、まだ、本部の事件も片付いていませんから」

「ふむ、猛士の総本部でもある吉野に武器の強奪とは相当な手練のようじゃの」

一度だけ猛士総本部に訪れた事がある近右衛門は伊織から聞いた、強奪事件が信じられなかった。あそこは鬼独自の呪術結界が張っている為、そこら辺にいる並みの人間の侵入などまずできない。はたまた自分達魔法使いでさえもやすやすと入れるものでもない。

「敵の正体も今の所は不明ですが、魔化魍側の動きにも変化がありましたから」

「それが、先ほどの情報じゃな。じゃがなぜ魔化魍が木乃香を狙うのかはわからんのお」

猛士が得た情報。関西地方のとある場所でディスクアニマルによる情報収集の最中、半壊状態で見つかったディスクアニマルの情報を解析した結果。断片的ではあるが、現在調査を行っている《謎の男女》に関する情報だった。そして録音した会話の中に《近衛木乃香》の名前が出てきたのだ。

「二様、関西呪術協会には連絡しましたが、取り繕ってはもらえませんでした。行ったそばから門前払いを受けてしまっただけ」

近衛と聞き直つ先に思い浮かんだのが、京都の名門《近衛家》。そして西日本の魔術一派《関西呪術協会》の総本山の長を務めているのが、「ふむ、儂ら魔法使い達もそうじゃが、関西は特に猛士に対しての敵対心は強いからの」

近衛家でもある。しかし、伝令を伝えようにも、関西呪術協会は過去のいざこざから猛士を毛嫌いしている者が殆どあり、情報を信じてもらえないどころか取り繕ってすらくれない。仕方なく、彼女の祖父でもあり麻帆良学園学園長兼関東魔法協会の理事でも近右衛門にこうして情報を伝えているのだ。

「ともかく、情報を伝えてくれた事は感謝するよ。此方も何か情報があれば伝えるようにするからの」

「わかりました。そでじゃあ僕も一度関東の方に戻りますので」

ソファアールから立ち上がり、学園長に一礼し、退出しようとする

「妹にはあわなくていいのの?」

「!!……妹は、亜子は僕の事を嫌っているの、無理に会っても
気まずくなるだけですの」

2年A組に在籍している生徒出席番号5番和泉亜子は伊織の妹な
のだ。

「そうかの。いや引き止めてすまんの。誠くんとは?」

「ここには内密で来ていますので、まあ誠くんにも必ず伝えなければ
なりませんけどね。それでは先の件よろしくお願いします」

伊織は学園長室から退出していく。一人残った学園長は自分の椅
子に座り目をつむる。

「これは、何か大きな事が起きそうじゃの」

タカミチからの報告により、木乃香が魔法の存在を知ってしまった
らしい。様々な偶然が重なったとはいえ、木乃香にはそう言った世界
とは遠い世界で幸せに暮らして欲しかった。

「これは、誠くん達にまた迷惑を駆けてしまいかもしれんの……」

麻帆良学園 世界樹前広場 17:08

麻帆良学園のほぼ中心に位置する巨大な樹木《神木・蟠桃》のそば
にある広場。スペイン広場のように長い階段が目立つその場所に、一
番下の階段で座り、誰かを待っている誠の姿が見えた。

「そろそろ待ち合わせ時間だな。新型のディスクアニマルがどうの
言ってたけど、一体何なんだろうな」

近くの時計台の時計で時間を確認しながら、今朝方関東支部のゲン
キ(玄鬼)から電話の事を思い出していた。内容は、以前誠が壊して
しまったバイクの修理が終わったからという内容だった。しかし、バ
イクは宅配する事らしいので、直接会う必要がないのだが、直に渡し
たい物があるらしい。何でも、猛士の技術者《滝澤みどり》が開発し
た新型ディスクアニマルを渡したいとの事だった。

「ヒビキさん、待たせましたか？」

後ろから、声をかけられて振り返る誠。声の主はここで待ち合わせしていたゲンキだった。

「いや、ちょうど今来たところさ。久しぶりだなゲンキ」

「ええ、ご無沙汰です。ヒビキさん」

久しぶりに再会する二人の音撃戦士。最後にあつたのは大体3ヶ月くらい前、関東に誠が応援に向かっていたのが最後だろうか。現関東十一鬼の一人であり、若干16歳ながら、数々の魔化魍を倒している実力者である。

「いきなりだから、この学園長に言って無理していれてもらったかな。何か変な妨害とかなかったか？」

「ご心配なく、何も問題もなく学園に入りましたよ。途中、誰かに見られている気配は多数ありましたけど。」

「気配か、まあここにいれば誰かに見られているのは感じるな。ところでその袋なんだ？それが新しいディスクアニマルか？」

ゲンキが手に持っている袋に眼をやる誠。

「違いますよ。これはただの食材ですよ」

「食材？」

「ええ、せっかくヒビキさんと会ったんで夕食は僕が作ろうかと。それに噂の子供先生に会いたいですからね。確か、今は寮に住んでいるんですよね？」

「ああ、その事なんだが・・・」

寮が破壊されている事を教えていなかった誠。今はエヴァンジェリンの家にお世話になっている身である。

「今俺・・・生徒の家に泊まってるんだ・・・」

「・・・え？」

第十九ノ卷 《邂逅》

エヴァンジェリンのログハウス 19:20

エヴァの家は基本的には西洋風のログハウスではあるが、主であるエヴァの趣向によりリビングに一室に畳を敷いた和室が設けられている。そこに置いてあるちゃぶ台で焼きを楽しんでいる誠、賢二、エヴァの姿が見えた。今夜は茶々丸がメンテナンスで留守で、少しさびしい感じではあったが。

「総本部で盗難事件だと・・・！」

食事を楽しむ中で、賢二が言った言葉に驚く誠。先週起きた事件であり、既に総本部や各支部でも警戒態勢に入ってるとの事。そんな事になっている事など知らなかった誠。

「鬼共の中枢本部に泥棒が入るとは、随分平和ボケした組織だな」

ここぞとばかりに嫌味を言うエヴァ。相変わらず、鬼に対しての敵対心は多少あるらしい。

「生姜ないだろ、俺達の敵は人間じゃなくて魔化魍なんだから。吉野は基本的に魔化魍の攻撃も入る危険性はないからな」

「まあ、あそこは総本部と言っても、引退した鬼や古い武器を収める場所でもありますからね。鬼じゃない人間が持つても価値の無い物でしょうし」

誠の言葉に続くように賢二が付け加える。吉野は古くから聖域のような土地でもあり、あの付近では魔化魍が出現したり発生したケースはなかった。勿論、悪行渦巻く妖怪のような類も攻めてくるような事はなかった。最も、魔化魍ではなく人間が攻めてきた事は多々あるが。

「所で源道賢二。貴様もそこにいる誠と同じ鬼だったな？」

「そうですね。あと、僕の事はゲンキって読んで下さい。普段からそう呼ばれてるので、エヴァさん」

話の主旨を変えて、賢二に話をふるエヴァ。自分より小さいエヴァに貴様呼ばわりされても怒るわけでもなく、しかも普通にさん付けで返す。年齢的に見ればエヴァがずっと年上でもあるが。

「そんなのはこの私が決める。それでゲンキ」

「(ゲンキって呼ぶのかよ)」

とか何とかいいなだら、賢二の事をゲンキと呼ぶエヴァ。

「貴様の鬼はどんな鬼なんだ？」

「え、どんな鬼・・・ですか？しかし・・・」

それを聞いて、賢二は言葉を詰まらせる。余り鬼の情報を外部の人間に言うのはと思う。先ほどの話も誠の言葉について釣られて行ってしまった。最も話を切り出したのは賢二の方だが。

「いいよエヴァに話しても。俺も答えられるだけは言ってるから」

「ええ!!マズイですよヒビキさん。あまり僕達鬼の事を喋っちゃ」

「この一部の魔法使い達なら言う気はないが、エヴァにはお世話にさせて貰ってるし。まあ、家を壊したのはその真祖の吸血鬼様だな」

そう言っただけでエヴァを見る誠。エヴァも「まだ言うか・・・：貴様もしつこい男だな」と言っている始末。

「吸血鬼？あの、何の話ですか？エヴァンジェリンさんって普通の女の子じゃあ・・・」

「何を言っているのだ貴様？私をそこら辺にいる下等生物(人間)と一緒にするな。まあ、聞いて驚け、私は誇り高き悪の魔法使いにして、最強の種族《真祖の『ただのお子ちやま吸血鬼だよ』!!何を言ってるのだ貴様!!」

エヴァの事を知らない賢二に、自身の恐ろしさを教えてやろうと名乗り口上を言おうとするが、誠に遮られてしまい、怒るエヴァ。こうなっては誠の言うとおりにお子ちやま吸血鬼である。

「ええええ!!吸血鬼!?あの伝説の!!」

さすがの賢二も空想上でしかなかったと思っていた吸血鬼が目の前にいる事に驚く。しかも口には出さなかったが《こんな小さい少女》が。

「ふん、どうだ。吸血鬼と知って恐れたか？」

前に同じようなセリフを言うエヴァ。ちなみに誠はこの発言を華麗にスルーしている。

「本物の吸血鬼にあえるなんて光栄ですよ!!」

「え……いや……その……」

恐怖所か、何やら憧れを抱くような目をされて逆に驚くエヴァ。恐れられたりする事はあっても、光栄なんて言葉聞いた事はなかった。まるで、自分が芸能人にでもなったかのような気分だ。若干、顔がほんのり赤くなる。

「まさか、この日本に吸血鬼がいるなんて驚きました。しかし、何でこの日本にいるんですか？それに学生をやっているようですが」

「!!」

賢二に言われ、一瞬思考が停止するエヴァ。自分が好きだったナギを追って日本に来たはいいが、逆に返り討ちにあい、この麻帆良学園に封印されて、女子中学生をやっていますのど、言いたくなかった。というか、自分にとっては地雷発言。誠もその事はわかっていて、すかさず賢二に近づき、事情を説明する。

「え、そうだったんですか。それは、かわいそうですね……」

事情を聞き、複雑な感情になる賢二。自分は余計な事を聞いてしまったなと思う。

「ふん、笑いたければ笑え。私はもう慣れたわ」

そう言っただけで肉にがつつくが、やさぐれているようにも見えないエヴァ。気まずい雰囲気になり始める場に誠がエヴァを慰める。

「まあ、ネギもお前の封印を解くために頑張ってるんだ。それにもしもの時はお前を縛ってる封印の精霊を倒せばいい話さ」

「よくもまあ、そんな事を軽々しく口にできるものだ」ヒョイツ

「人の肉を取るなよ……」

何気に誠が取っていた肉を取るエヴァ。

「すみません、僕が余計な事を聞いてしまっただけ」

「気にするなといっただろ。もし気になるなら、お前の肉をよこせ」

「おい、野菜食べろよ」

「人の家で飯を食ってるんだから文句を言うな」

「その原因を作ったのはエヴァだろ」

「貴様がもつと警戒していれば、壊されずにすんだのだ」

「俺のせいなのか・・・」

突如、言い合いを始めるエヴァと誠、賢二の何の事かサツパリわからず困惑する。

「それで、僕の鬼でしたね」

「そうだった、誠のせいで話題がそれてしまっていたな」

「それはお前が勝手に逸らしたんだろうが」

「あはは。僕はヒビキさんと違って、音撃棒は使いません。僕は音撃笛って言う笛型の武器を使って魔化魍を倒しています」

そう言つて、横長いフルートのような音撃笛「海王」を見せる賢二。「ならお前は、遠距離タイプの鬼というわけか？」

「まあ、当たらずといえども遠からずですね。時々は前に出て倒すこともありますし、水や氷系の攻撃で格闘戦に持ち込む事もありますね」

賢二が変身する《玄鬼》は水、氷属性を有した鬼でもある。鬼忍術も水遁系が得意でもあり

「ほう、ならば私との相性は言い訳だな。私の得意魔法も氷だからな」

「そうなんですか」

「まあ、俺との相性は最悪だったけどな」

「ふん、そもそも貴様の能力がそうかしているからだ。全身から5000℃の炎が燃え上がるなど、魔法使いに早々おらぬわ」

先の戦いで見せつけてくれた、響鬼・紅の灼熱の鎧の事を指摘するエヴァ。誠から簡単な説明を受けたが、余りにデタラメすぎる能力に啞然としていたエヴァ。実際本当に5000℃なのかすら怪しいらしい。もしかしたら、10000℃・・・ともかく考えるだけで恐ろしい。

《灼熱の鎧》使ったんですか？あれは周りに被害がでるから使わないうって言つてませんか？」

一度だけ、灼熱の鎧を使った現場に居合わせた事がある賢二。その時は余りの火の勢いで山火事になりかけたり、自身が死にかけた事を思い出す。

「緊急事態だったんだよ。もしならなかったら俺が氷のオブジェにさ

れてた」

とはいえ、誠もあの時は―273℃という、極寒の氷の世界一歩手前まで行っており、逆に誠も死を感じたのは事実。

「それは凄いですね。僕もそこまで凄い氷はだせないですよ」

「ふん、それはこの私が世界最強の魔法使いだからな。それぐらいは造作もないさ」

「そうだな・・・俺には負けただけだな」

エヴァに聞こえないようにボソツと事実を述べる誠。実際そうだったのだが。しかし、あれはエヴァの闇の魔法の暴走が重なった為、本当の所はわからない。

「何か言わなかったか？」

「いや、それでゲンキ。俺に水系の指南してくれないか？」

「僕がヒビキさんに指南ですか！」

突然の誠の発言に驚く賢二。実力から言えば、自分より遥かに高い誠にものを教えるのは少々気が引ける賢二。

「無理ですよ。ヒビキさん水系の技使えるんじゃないですか？」

「使えるけどうまく制御ができなくてな。《属性変換形態》も視野にいれてるんだが・・・」

「属性を変えるのは相当難しいですよ。習得できたのはそんなにいないそうですから」

属性変換形態、自身が鬼になる過程で手に入れる属性を別のものに変換する術。簡単に言えば、炎属性を水属性に変換するようなもの。しかし、これはそんな簡単に習得できるわけでもなく、元々鬼に宿る属性を変えるのは至難の技。しかし、習得さえすれば攻撃のバリエーションが増えるメリットもある。

そしてこれとよく似たのが《属性強化形態》。すなわち、属性を更に強化させる物。響鬼・紅のように強化して変身する術だ。習得も属性変換形態よりかはやりやすいが、必ず習得できるものではない。

誠もここ最近で、属性変換形態に着目しているのだ。

「おい、私の目の前で理解できない話をするな!!」

何の話をしているのか全くついていけないエヴァが誠に言う。

「悪い悪いこの話はまた今度にするよ。そういえば、ゲンキ。新型ディスクアニマルの件なんだが」

ようやくここに来て、ゲンキが態々届けに来た新型のディスクアニマルの話を出す誠。

「ディスクアニマル？お前が持っていた式神モドキのCDのやつか」

ディスクアニマルと聞きピンと来なかったエヴァだが、すぐに誠がいつも腰にぶら下げているCDだとわかる。

「式神モドキって、ちゃんとした式神だぞ。それでその新型ってどんな奴なんだ？みどりさんから何か伝えられてるだろ？」

「それが、これをヒビキさんに渡すだけいって言われて。詳しい説明は言ってくれなかったんですよ。説明書を入れてあるから」

賢二は自分のバックから木箱を取り出し誠に渡す。木箱を受取、結つてある紐を解き、箱を開ける。中には緑色を基調としたディスク一枚と紙があった。

「説明書ってこれか。えっと『装着型ディスクアニマル・緑黄大鷹。鬼の能力向上を目的とした新型のディスクアニマルである。使用方法は鬼に変身すればわかる』・内容これだけか？」

「装着型ですか、初めて聞くタイプ見たいですね」

説明書と言つても、簡単な文章で済ましており、要は使ったらわかると言つた感じのまとめ方。

「みどりさんにしては珍しくアバウトすぎるしな」

「どうこう言わず、書かれています通り使えばいいじゃないか誠。私もそれに多少は興味があるからな」

「・・・そうだな。使えばわかるって言つてたしな。明日にでも試しに使ってみるか」

緑黄大鷹をディスクに戻し、食事に戻る誠。

「あ、僕今日これが終わったら帰ります」

「今から関東支部に戻るつもりか？泊まっていけばいいじゃないか」

「おい！何勝手に決めてる！」

自分の家のはずなのに、勝手に話を進める誠にしかめっ面で反論するエヴァ。

「食事まで用意してくれて、謝礼も無で返す気か？」

「ふん、生憎私は悪の魔法使いだからな。そんな善人がやるような事はせんさ」

鼻を鳴らし、あくまで自分は《悪》と強調するエヴァ。「はあ」とため息をついて相変わらぬエヴァの様子を見る誠。

「エヴァさんの言うとおりですよ。無理に泊まるのはよくないですからね。ご厚意に甘えられなくてすみません」

「まあ、ゲンキがそう言うなら仕方ないな」

「……………」

頭を下げて誠の厚意をやんわりと断る賢二。それを見ていたエヴァは何かを思い、賢二に言う。

「いや、その……せつかく食事まで用意してくれたからな。泊めてやらんことはないぞ」

そつぽを向いて、突然の意見変更をするエヴァ。

「さっきは悪が何とか言ってなかったか？」

「う、うるさいな!!家主の私が良いと言っておるのだ!泊まっていけ!」

「あ、ありがとう御座いますエヴァさん」

結局、賢二を家に泊める事にしたエヴァ。なんだかんだ言っただけエヴァもちゃんと受けた善意は返すのが当然とは知っている。前のエヴァだったらもしかしたらこんな事はしなかったかもしれない。恐らく……………」

麻帆良学園中央駅付近 19:50

「ふう、予想より時間がかかっちゃったな」

既に辺り暗くなっており、普段賑わっている中央駅も昼間程人の姿が余り見られなかった。生徒達の通信簿の記入に予想以上に時間が

かかってしまい、帰宅する時間が大幅に遅れていた。既に居候している明日菜から苦情の連絡が入っていた。

「また、明日菜さんに怒られちゃうな」

そう言いながら駅に向かうネギ。しかし、ちゃんとネギが帰宅するのをちゃんと待っている明日菜と木乃香。なんだかんだ言ってもネギの事を見ているのである。

所で話がかわるが《ネギの使い魔》と自称していたオコジョ妖精のカモだが、実はあのエヴァの事件の後、ネギの姉のネカネから連絡があり、カモが下着泥棒の罪で脱走していると連絡が入り、気をつけるようにと言われた。最も、それ以前に手紙が来ていたのだが、カモがもみ消していた。

事情を知ったネギは「罪を償って」といい、カモを強制送還させたのだ。まあ、もとよりカモも使い魔を利用して、仮契約を結ばせて金を取ろうという悪どい事を考えていたので、弁明の余地もなくイギリスに送り返したのだが。

「えっと、定期はつと・・・『あれ、ネギくん？』？亜子さん」

改札口を前にして、定期券を探すネギ。その時、自分のクラスの生徒の亜子がいた。どうやら部活帰りのようだ。

「亜子さん今帰りですか？」

「うん、サッカー部もうすぐ大会が近くてな。皆気合入って、練習してたら遅くなってるな。ウチもマネージャーとして頑張ってたらな」

「そうだったんですか。マネージャーも大変なんですか」

「ネギくんほどやないよ」

二人は改札を通り、行き先も同じ女子寮なので、一緒のホームに向かう。近くのベンチに腰をかけ、電車が来るのを待つ。

「そういえば、ネギくんも新藤先生が学校に来てからもう大分立ったんやね」

「そうですね。あつという間でしけど。とても貴重な時間でした。引き続き2Aのクラスを担当できてとても嬉しいです」

課題が残されてはいるが、引き続き2—A組もとい3—A組の担任する事が決まっているネギ。クラスメイトもその事を知っており、歓

喜乱舞していた。

「でも、新藤先生は現在不明ってどういう事なんやろうね」

「そう・・・ですね。僕も詳しく聞かされていなくて・・・」

本当は事情は知っているが、言うわけにもいかず、適当にはぐらかすネギ。春休み期間中に魔化魍を一掃すれば誠は学園から出て行くからだ。春休みでも決着がつかなければ、残留という事になる。

「ふくん、一緒にまた授業できたらええな。新藤先生の授業おもしろいからな」

と言っても、明日菜を起こしたりと殆ど授業といえる授業はしていないのだが。しかし、前の社会科の担当の先生よりは良かった。

「そうなんですか。僕も新藤先生みたいに楽しい授業ができたらいいですけどね」

「ネギくんの授業もとってもおもしろいよ。英語の授業苦手やってけど、最近好きになってきんやから」

「あはは、そう言ってもらえると嬉しいですよ」

談笑しながら、電車が来るのを待つ亜子とネギの二人。すると、まだ二人しかいなかったホームに誰かが入ってくる。ネギと亜子はその人物に目が入る。

「!!」

その時だ、亜子が驚いた表情をしたのは。

「なんで・・・こんな所に・・・」

「亜子さん・・・」

亜子の表情が変わった事に疑問を抱くネギ。それは向かいにいる人物も同じだ。

「・・・亜子・・・」

驚いた表情でそして悲しそうな声で亜子の名前を呼ぶ青年。

「亜子さん、お知り合いですか?」

状況が読めないネギは亜子に質問する。

「知り合いも何も、この人はウチの兄貴なんや・・・」

「ええ!? 亜子さんのお兄さん!?!」

まさかの亜子の兄だったとは、思わず驚くネギ。しかし、そんなネ

ギにお構いなく、亜子は立ち上がり兄も前に立つ。

「なんでこんな所におるんや！お兄ちゃんは奈良にいるんやなかったん!!」

「用事があつて麻帆良学園に來ているんだ」

「用事つて何なん。まさか、魔化魍とか鬼とかの問題持ち込んだんやないやろうな!」

まさか、亜子の言葉から《魔化魍》と《鬼》の単語がでるとは思わ
ず、驚愕の表情のネギ。すると、亜子の前にいるこの兄はまさか誠と
同じ鬼なのではと。

「それは・・・亜子には関係ないことだよ」

「関係ないってなんやそれ、妹のウチに言えへんことなん!もう鬼と
かは沢山なんや。お兄ちゃんが持つてくるのは鬼の問題ばつかりな
んやから、そのせいで上のお兄ちゃんは・・・」

「亜子、その話はもうしないって・・・」

「なんでや、鬼になったばつかりに死んでもうたんやで!それを今
更忘れていろつて言うん?」

「!.....」

亜子に劍幕に言われ、何も言い返せない。それを見越してか、亜子
が走つてホームから出ようとする。

「あ、亜子さん!」

「ごめんネギくん、ウチ次の電車で帰るから」

そう言つて、青年やネギから逃げるようにホームから出て行つた。

残された二人。ネギは恐る恐る、亜子の兄に声をかける。

「あの.....」

「ごめんね。妹とは色々あつて、僕の事を嫌っているんだ。君がネギ・
スプリングフィールドくんだね。誠くんから聞いているよ」

「やつぱり、あなたも鬼なんですね」

誠の名前が出てきた時点で、やはり彼が鬼だとわかるネギ。

「僕は和泉伊織。鬼名は《威吹鬼》だ」

「イブキさんですか。あのそれで、差し支えなければいいんですが、
どうして.....」

既に鬼である誠が麻帆良学園に来ているのに、新たな鬼が来ているのに疑問が浮かぶネギ。誠も今日、伊織が来るという話はしていなかった。

「今は少し言えないんだ。学園長先生から伝達が入ると思うから」

そう言った時、ちょうど伊織が帰る電車が到着した。そのまま、電車に乗り込もうとした時、帰り際にネギに言う。

「亜子の事、よろしく頼むね。君みたいにしつかりした先生なら大丈夫そうだ」

「あ、いえそんな・・・」

自分よりしつかりしてるように見える伊織に思わず声を漏らすネギ。

「それから誠くんにもよろしく伝えてといてくれる？」

「わかりました！」

そのまま、プシユウと扉が閉まり、電車が出発して行った。

残されたネギは先ほどの亜子と伊織の事を思い出していた。

「亜子さんとイブキさん・・・何かあったのかな。あんな亜子さん初めてみたな」

初めて見る亜子の様子に正直驚いていたネギ。

一体、和泉兄妹に何があったというのか。今の自分ではどうすることもできないネギだった・・・

麻帆良学園中央駅付近の公園

街灯だけが照らす夜の公園。そして、公園何に設置しているブランコに座っている亜子の姿が見えていた。

どこか、表情が暗く、普段から明るい彼女から想像できない姿だった。自分の兄、伊織にあってからどうも気分が優れなかった。

「.....」

ふと自分の肩に手をかける亜子。自分の背中にある、とある傷跡。自分と伊織の深い溝が出来てしまった原因。自分は実家を離れて、ここ麻帆良学園に生活するきっかけでもあった。

「もう、沢山や．．．．鬼なんて．．．」

果たして、亜子の言葉の真意とは．．．

第二十ノ巻 《接触》

3月18日（水） 11:30

麻帆良学園女子中等部2年A組

「では、皆さん。また新学期に元気にお会いしましょう！」

「「はあ〜い！」」

「（だから、小学生かよ・・・）」

「（バカばつかです・・・）」

ネギの言葉に元気よく反応する生徒達。そんな様子を呆れながら見ている千雨と夕映。

今日は2年A組として、学校生活を送る最後の日。今日は修了式。r終業式しか行事はないので、昼で授業は終わるのだ。そして、明日からは待ちに待った春休みが始まる。

みんなそれぞれが休み期間中を利用して。遊んだり、部活なりをして過ごすだろう。

「ネギ先生、この後の事なのですが」

皆がそれぞれ、教室から出て行く中。図書館組ののどか、夕映、ハルナがやってくる。

「どうやら学校が終わった後、何か用事があるようだ。」

「図書館島の整理でしたね」

「って言っても量が多くて、ほんの一部しか行わないんだけどね」

《図書館島》明治の中ごろ学園創立とともに建設された、麻帆良湖に浮かぶ世界最大規模の巨大図書館であり、学期が終わった日から3日間、図書館内の書棚の整理を図書委員、学園統合図書委員、図書館探検部が合同で行う、かなり大規模な書棚整理があるのだ。とはいえ、図書館島は余りに広大すぎるため、殆どが一般開架書庫及び、閲覧室に限られており、地下に眠る貴重書庫の整理は一切行わない。そして今回、図書館探検部でもある3人（のどかは図書委員も兼任）がネギに貴重な体験として誘ったのだ（実際はのどかとネギをくつつける作戦があるのはネギものどかも知らない）。

ネギは特に断る理由もなく、世界最大規模の図書館島のそれも書庫

整理という仕事にに滅多にあう事もないので、疑いもなく承諾したのだ。

「木乃香も誘ったんだけど、占い研究会があるって言ってたからね」
同じく図書館探検部でもある木乃香も誘ったのだが、自身が部長を務める占い研究会があると言い、今日の書棚整理を断っていたのだ。
「まあ、木乃香さんは明日は来ると言っていましたから。今日は私たちだけで行きましょう」

「そうですね。今日はよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願います・・・ネギ先生」

顔を赤面させるのどか。それを見てニヤニヤするハルナと、ホットコーラなる怪しげな飲み物を飲む夕映が見ていた。

「のどかつたら、相変わらず顔赤くしちゃって」

「とりあえず、今日は様子見ということ。何も進展がなければ明日はこちらから動くです」

何やら怪しい動きを見せるハルナと夕映。

そうこうしているうちに教室から生徒達が次々と退出していく。

「ああ！ネギ先生、休日はどうか私の家でお茶会を開きましょう！」

突然、ネギの手を握り高らかに宣言するあやか。

「は、はい、是非一緒に・・・」

鬼気走るあやかの言葉に、苦笑いしながら了承するネギ。それを聞いた瞬間、あやかは至高の笑みを浮かべる。

「まあ、本当ですよ！ああ、この雪広あやか！最高の紅茶とお菓子を用意して待っていますわ！そして、最後には私達の愛のs『何いってんよ！このシヨタコン女！』ぎやふん！」

あやかかともない発言を言う前に明日菜が飛び蹴りを食らい、床に倒れる。

「い、いきなり何をするんです明日菜さん！」

「アンタの危険極まりない発言を止めてあげたんでしょ」

「何が危険極まりないですか！あなたのような凶暴な野生人に言われたくありませんわ！」

「誰が野生人ですって!?!」

「あら、自覚がないんですの？かわいいそんな野生人ですこと」

「言ったわねこのシヨタコン女！」

「なんですってこのオジコン！」

大乱闘寸前の明日菜とあやか。もう毎度のような恒例行事のような二人の喧嘩にあたふたするネギ。

その時、教室の扉が開く。

「明日菜に雪広。何騒いでるんだ？教室の外まで声が響いてたぞ」

「新藤先生」

入って来たのは誠だった。学園長に呼ばれていて帰りのHRに参加出来なかったが、どうやら今帰ってきたようだが、教室が騒がしいので急いできたようだ。そして、もう一人は。

「こらあお前たち！学校が終わったからと言って教室内で騒ぐとは何事だ！」

「(鬼の新田ああ！)」

怒号が教室内に響く。声の主は学園広域生活指導員をしている新田先生。生徒からは《鬼の新田》と言われ恐れられている。因みにネギは新田が苦手である。

どうやら、誠と同じく騒がしい2-Aの教室に来たようだ。

「全く、お前たちは毎度毎度馬鹿騒ぎを起こしおって！ネギ先生もネギ先生です！」

「は、はい……ごめんなさい」

新田に注意され、言い返せないネギ。

「まあ、新田先生。生徒たちも明日から春休みなんで浮かれていたんですよ。注意は自分がしておきますから」

「うむ、頼みますよ新藤先生」

誠にそう言くと、教室から離れていく新田先生。そして、明日菜とあやかに近づく誠。

「相変わらず元気一杯だな二人共。騒ぐのはいいが、もう少し場所を選んでな？」

「あははは……ごめんなさい」

「申し訳ございません新藤先生」

軽く明日菜とあやかを窘める誠。そんな誠に素直に謝罪する二人。
「じゃあこの話はもう終わりだ。二人は昼から部活があるんだろ。行かなくていいのか?」

「あ! 放課後提出する絵があったんだったわ!」

「私も馬術部の集会があったんですわ。ネギ先生、新藤先生それではまたお会いしましょう」

そう言つて、教室から出て行くあやか。

「じゃあ、ネギ。本屋ちゃん達に迷惑かけちゃダメよ」

「大丈夫ですよ明日菜さん!」

「おお、お姉ちゃんやつてるね明日菜?」

ニヤニヤしながら、明日菜を茶化すハルナ。

「茶化さないでよパル! じゃあ新藤先生、また!」

「ああ、またな」

そして明日菜も教室から出て行った。

「すみません、新藤先生。また助けられて」

「気にするなよ。それよりHRに終わっている見たいだな」

「ええ、先ほど終わりました。これからネギ先生と図書館島の書庫整理に行く所です」

「あのデカイ図書館のか?」

直接図書館島に行ったことはないが、あの島事態が巨大な図書館と聞いていたため、認識的に大きな図書館という感覚はあった。しかも、そのの書庫整理となるなら相当大変な作業になるのではと思った誠。

すると、ハルナは誠に書庫整理の簡単な説明をする。

「なるほどな。まあ、怪我しないように気をつけてな。じゃあ、昼から外回りがあるから。またな」

そう言つて、教室から退出して行った誠。

「(あ、結局亜子さんや威吹鬼さんの事聞きそびれた...)」

昨日の件の事を聞こうと思ったネギだが、結局聞けず仕舞いだつた。

3月18日(水) 12:40

麻帆良学園都市世界樹前広場

「やはりこの樹は特殊な樹ですね。特殊な波動を感じる。いわゆる魔力というのですか」

世界樹を見上げながら、何かを感じる賢二。何かと不思議な力を敏感に感じてしまうのは鬼なつた必然なのか。そもそもこの学園に入って色々違和感を感じていたのだが。

所で、なぜ賢二(玄鬼)が麻帆良学園にいるのかはというと。

遡ること4時間前。ちょうど誠やエヴァンジェリンが学校へ行く時間帯。総本部から連絡があった。

*****回想*****

「それは総本部の正式な決定って事ですか……はい……はい……わかりました……!!玄鬼もですか!?!それは一体……はい……わかりました。本人にはそう伝えます。では」

「どうしました?」

「総本部から伝達だ。俺は引き続き麻帆良学園の在駐。期間は不明だそうだ」

「不明ですか?でも、魔化魍を倒せばって話じゃ」

「総本部は魔化魍を倒しても、麻帆良学園に在駐しろだ。しかも、ゲンキ。お前も麻帆良学園にしばらくいる事だそうだ」

「僕もですか?それは一体……」

「総本部長の話だと、この前の強奪事件が原因だそうだ」

「強奪事件と麻帆良学園に在駐の関係がいまいち掴めないんですが」

「今回の強奪事件が麻帆良学園に関連してるって事らしい。まだ情報が不十分だがな」

「襲撃した犯人が魔法関係者とかですか?」

「さあな、とりあえず。本部が何か摘むまで警戒してろって事さ。総本部や各支部も警戒体制だそうだ」

「まさか、強奪事件がそこまで発展してるなんて……」

「ともかくゲンキ」

「はい？」

「今日からどうする？」

「……どうすると言われても、いきなりですからね。ヒビキさんはエヴァさんの家に泊まれば良いといっていましたけど」

近くのベンチに座り今後のことを考える賢二。とりあえず、今後は誠の魔化魍探しを手伝うの先決だろう。しかし、この学園は魔化魍だけが脅威ではない。

「(この学園は魔化魍だけでなく、妖怪や魔族と言った類のほうが多いようですからね)」

誠やエヴァンジェリンもこの学園には色々な魔族や魔法使いたちが度々ここに召喚してくる事を言っていた。

これからのことも誠と詳しく相談したほうがいいだろう。

「とりあえず、学園の調査を兼ねて回ってみましょう。まずは図書館島から調べてみましょう)」

自分はまだ麻帆良学園には滞在するとは全く思っていなかった為、ここの土地に関する情報が不足している。誠にも聞いてみたが、誠自身も麻帆良学園に関してはまだ知らない事がたくさんあるらしい。となれば、ここは自分が動いて情報収集を当てるのが一番。学園のパンフに乗っている図書館島に行くのが良いだろうとかんがえる賢二だった。

麻帆良学園都市龍宮神社南門前 13:30

麻帆良学園で一番大きい神社《龍宮神社》。ここの一入娘である龍宮真名は学校生活が一旦終わり、春休みに入るため、学生寮ではなく

実家でもあるここ龍宮神社に帰宅していた。春休み期間中はここで巫女として働き、夜になれば学園の警備員としての仕事が始まる。ようはいつもとあまり変わらない生活が始まる。

「おや、今日は珍しい人が来てるじゃないか。どうしたんだい新藤先生?」

神社に入るために門を潜ろうとした時、階段部で座っている誠の姿が見えたのに真名が珍しそうに見ていた。

「今日は龍宮に用事があったな」

「おや、生徒を口説くのは教師として悪いんじゃないかい先生?」

「冗談はよせ、間違ってもそう言った感情は生徒達にはないから安心しろ」

「ふふ、わかってるよ先生」

冗談交じりにいうが、誠が至ってまじめに答えたのについ笑いをこぼす真名。どうやらこう言った冗談は真に受けるようだ。しかし、本人は気づいていないのか、不思議そうな顔をしている。

「それで、私の用事ってのは何かな」

「龍宮もそうだが、桜咲のことだ」

階段から立ち上がり、真名に近づく誠。

「私と刹那にかい?」

「言わなくてもわかるだろ。もう学校は終わったけど、二人は学校に出席していない日がここ最近多かったからな。様子見に来たんだよ」

「その事か。学園長先生には話を通しているから新藤先生が心配することはないよ」

学校に関しては学園長も容認しているので、これと言って問題は無い。こう言ったことは誠やネギが来てからではなく、タカミチが担任をしている頃からこういった事が多かった。しかし、誠は真名の言い分を聞いて、やつぱりかという顔をする。

「昼間から警備させてるのか。この学園は大人よりも子供の方が実力的に上って事なのか?」

「さあね。なんなら私と一線交えて実力を確かめるかい?」

「遠慮しとくよ。俺が戦う相手は魔化魍や妖怪なんかだ」

真名の言葉に否定的な言葉を返す誠。

「だが、前に楓と手合わせしたそうじゃないか。楓とはダメで私とはダメなのかな新藤先生？」

「長瀬の奴、あの事話したとか。あの時はちよつとした事情があったからで、それに手合わせしなくても龍宮が十分強いってのもわかるよ」

以前、麻帆良学園郊外の森で楓と手合わせした事を思い出す。最もお互い本気を出した戦いではなかったが。

「褒め言葉として頂いておくよ。そろそろいいかな先生？」

「ああ、悪かったな。でも、新学期からはちゃんと登校するんだぞ。ネギも困ってるからな」

「ふふ、そうだな。新学期からは気をつけるよ」

「それから、警備の仕事もほどほどにしておくんだ。お前はまだ学生の身なんだからな」

龍宮の方に歩み、真剣な表情で注意する誠。

「悪いな先生。私は仕事人なんでね。報酬をもらった分はちゃんとやり遂げる主義なんだ」

あくまで自分は依頼を受けて、学園の警備を行っている。いわゆる【ビジネス】。報酬を貰えれば、きちんと行うのが真名のもつとう。

「お前も裏の世界の人間って事か・・・」

「そういう先生もじゃないのかい？鬼は人知れず魔化魍と戦っている」と聞いたよ」

以前、タカミチが言っていたことを指摘する真名。自分も誠の言うとおり裏の世界の人間、かつては東南アジア諸国の紛争地域、いわば戦場にいたこともあるほど。そんな表沙汰に出来ないような事をした事ある真名にとって、魔化魍という化物を人知れず倒している鬼もまた、裏の世界の住人ではと。

「そう言われたら、そうなのかも知れないな。まあ、俺は別段隠す必要はないと思うんだけどな」

そう言うと、誠はそのまま真名の横を歩いていく。

「またな、龍宮。今日は話せてよかったよ」

「私もだよ先生、こんなに話したのは初めてじゃないか？」

その言葉を聞き、一旦足を止める誠。よく考えれば確かに真名と会話したのはこれが初めてなのではないかと。

「あんなに期間あったのに、沢山話したのがこれだけじゃあ、先生失格だな」

「本業が先生じゃあ生姜ないさ」

「慰めの言葉として受け取っておくよ……あ、それから最後に聞きたいんだが」

振り返り、聞きそびれていた事を聞く誠。真名も「何かな？」とい、誠の質問を聞く。

「桜咲がどこにいるか知らないか？」

麻帆良学園都市郊外 森林地帯 13:34

「神鳴流奥義《斬岩剣》！」

目の前にある巨大な岩を自身の愛刀《夕風》を振るい、真つ二つにする。崩された岩は轟音と共に地面に落ちていく。疲労感が来たのか、片膝をつき、夕風を地面に置く刹那。

「はあ……はあ……まだだ……」

額から出る汗を拭い、夕風を再度握りしめる。

修行を始めてから一体何日経つのか。あのエヴァンジェリンが起きた事件からだったか。それとも、鬼というのを初めて見た日だったか。ほんの数週間前の話なのに、刹那にとっては既に遠い日の事のように思っていた。

「(もつと強くならなければ……今のままでは……あの男を斬ることなど……)」

自身が危険な人物と認めた男《新藤誠》。あの魔化魍との戦闘、そしてあのエヴァンジェリンと直角以上の激戦を繰り広げていたのを。

はつきり言えば、もはや異常としか言い様がないその強さに、あの場
にいた魔法関係者は恐怖している者さえいた。そして、勿論刹那もそ
う思っていた。

いや、刹那が思ったのはそれだけじゃない。

—自身が守るべき存在の木乃香。その木乃香の周りにあの危険な
力を持つ鬼がいていいのか？—

—今は危害を加えなくても、今後ある可能性があるのではないか？

—それに何より、同じ人外の存在でもある新藤誠がやすやすと木乃
香の周りにいていいはずがない—

「(なぜだ、なぜあの男はあの御方にやすやすと接触ができる。あの姿
を見られれば誰しも恐怖は抱くはずなのに……)」

刹那自身が持つ最大の秘密。それを木乃香に知られれば自分は消
えなければならない。だが、新藤誠は普通に木乃香の前に鬼の姿を晒
している。自分では成し得なかった事を平然とやってのけるように。
それに木乃香は別段恐怖のような顔を抱いてはいなかった。そう思
うと、自然と刹那の心の中に怒りや憎しみの感情が現れていた。

《嫉妬》

刹那自身は気づいていないだろう。それが、誠に対して嫉妬心を抱
いている事に。

「(私は……あの御方を守る。お嬢様はあの男の危険性を理解して
いないだけだ。だから、私が早々に駆除しなければならぬ……
だが!)」

……今の自分の実力では、あの鬼には勝てない……
それは自分でもわかっていた。だから、今力を磨く以外に方法はな
かった。木乃香を学校以外で守る以外は修行に時間をあてるも、どれ
だけやってもあの鬼に勝つ糸口はなかった。

何か決定的な方法があれば……

「はあ〜い。なんだかお悩みのようね」

「!!」

突然、後ろから声が聞こえてくる。声がした方に素早く振り向く

と、そこにいたのは、綺麗な着物を纏った女性が立っていた。

「貴様、一体何者だ！」

夕凧を構えて、得体のしれない女性に剣を向ける。

「そんなに警戒しないで。私はドウメキ。あなたの味方だから」

笑みを浮かべて、刹那を見る女性《ドウメキ》

果たしてこの出会いは、一体何をもたらすのか……

第二十一ノ卷 《鬼殺し》

「ドウメキ……だと……」

突然登場した《ドウメキ》と名乗る女性に警戒する刹那。何の気配もなく、突然現れた人物に警戒しているのだ。

「そんなに警戒しないでちょうだい。私はあなたの味方よ」

刹那の行動を見て、手のひらを広げて自分は的ではないとアピールするドウメキ。どうやら、交戦の意思ないようだと判断した刹那はひとまず夕風から手を離す。しかし、いつでも対応できるように警戒は怠らない。

「それで、ドウメキと言ったな。一体何のようが会ってこの麻帆良学園に来た？それに私の味方とはどういう事だ？」

「言葉通りよ。私はあなたに協力してあげようとこの学園に来たんだから」

「……なぜ、私に協力する？生憎だが、どこの誰かもわからない人間の事など信用するつもりもなければ、協力されるいわれはない」

突然のドウメキの言葉に否定の言葉を出す刹那。いきなり現れた人物に、協力すると言われても信憑性もない。そんな安々と人の事を信じない刹那だった。

「それはあの《鬼》を倒せる物を持ってきたとしても？」

「!!」

ドウメキの言葉に驚く刹那。その様子を見たのかドウメキは刹那の方に歩み寄る。

「あなたの大切な人を守るために、その鬼が傷害になっている。違わない？」

「……だとしたらどうだと言うのだ」

率直に事実を言われるも、反論の言葉を言う刹那。それを聞いてドウメキは自分の素性を明かす。

「私はね関西呪術協会に所属してる陰陽師なの」

「関西呪術協会!?西の者だったのか……まさか、木乃香お嬢様を狙って……」

まさか、目の前にいるドウメキが関西呪術協会所属に驚く刹那。西の者と聞き、つい自分が護衛している木乃香の名前を出す、「大丈夫よ。私はそう言う目的じゃないの。それに護衛の者がそんな安々と護衛対象の名前を出すのはいけないわよ？」

「っ……」

ドウメキに致命的な事を言われて言葉に詰まる刹那。しかし「気にしないで」とドウメキが言うと、話の続きを言う。

「私がここに来たのはあなたの協力になりたいって言ったでしょ？私の目的はこの学園にいる鬼……新藤誠を倒してほしいのよ。この《鬼封じ》を使ってね」

そう言うとうドウメキは懐からある物を取り出す。それは淡い緑色をした勾玉だった。

「《鬼封じ》？それは一体……」

「名前通り。これは鬼の力を封じる勾玉よ」

「鬼のちからをだど？鬼の力を封じる術などあったのか？」

鬼の力を封じる力など、初めて聞いた刹那。それに恐らく陰陽関連の系統のはず。なぜ、ドウメキがそんな物を持っているのか疑問だった。

「それは言えないわ。これは特殊な術を使っている物でね。いわゆる企業秘密ってわけなの」

「……そんな怪しげな物を簡単に使うわけにはいかないな。それになぜ、新藤誠を倒すのだ？」

正体も明かせない道具など、信用性がない。それに、なぜ彼女は新藤誠を狙うのかもわからなかった。

それを聞いて、目をつむるドウメキ。すぐに目を開けた時、目とあった刹那が一瞬不思議な感覚に襲われた。

「ん……なんだ」

一瞬のことで、何が起きたかわからない刹那。そんな事をよそにドウメキは口を開く。

「事情も言えない女の言うことなど、聞けるわけもないわね。私はね、新藤誠に家族を殺された過去を持っているの」

「!?」

突然の衝撃発言に驚愕する刹那。

「余り思い出したくないけど、これは本当のことよ。あなた、鬼が所属している猛士と関西呪術協会の折り合いが悪いのは知ってる?」

「え、ええ。創設時から折り合いが悪いというのは・・・」

自分が所属している京都神鳴流もそうなのだが、関西呪術協会と猛士の関係は悪い。神鳴流の文献や師範代も常々言っていた事だった。

「私の両親はね、鬼との溝を改善しようとする人だったわ。でも、志半ばで殺されたの・・・あの男《新藤誠》にね!」

目をキツと開き、恨みがましい表情をする。

「あの男が・・・あなたの両親を・・・」

「信じるか信じないかはあなたの自由よ。でも、これは紛れもない事実。私の目の前であの鬼は私の両親を消し炭になるまで燃やしたのだから・・・」

「っ・・・」

その言葉を聞き、一瞬想像してしまう刹那。以前、響鬼が見せた炎を見たことがあるので人間など消し炭にするなど簡単であろう。

「やはり・・・あの男はそういう人間なのか・・・」

普段は気さくに生徒達と接しているが、本性は人の命を何とも思わない真正正銘の鬼・・・いや悪鬼羅刹という名が相応しい存在だと。ドウメキの話が本当なら、自分が思っていたことは間違いなかった。

「最低だと思うわ。私の個人的な復讐の為にあなたを巻き込むのだから・・・」

「それは・・・でも、なぜ私ののですか?ここには、学園長先生だっています」

「この学園で信用できるのが、あなただけだったと思ったからよ」

なぜ、自分だけを信用できると言うのか。ここには学園最強の魔法使いの近右衛門もいる。自分に相談ではなく、学園長に言えばいいのではと。

「鬼にはね。鬼眼っていう特殊な瞳術を開眼できる鬼がいるのよ」

初めて聞く言葉に首をかしげる刹那。

「私も詳しくは知らないのだけど、鬼眼は特殊な瞳術といわれて、相手の攻撃を読んだり、幻術にはめたりする事ができるらしいのよ」

「!!先読みや幻術を……」

そんな特殊な目を会得する事ができるのを初めてしつつ刹那は驚く。仕事仲間の真名も魔眼という特殊な目を持っている。まさか、鬼にもそうした特殊な目を持っているとは。

「そして、その鬼眼の上位種があるらしいのよ」

「上位種？」

「ええ、名は《鬼導眼》。まさに神の目といえる物でね。この世の法則すら無視できる力を有しているらしいわ。その中に操られている事すら気づかせない術があるらしいのよ」

「相手に気づかせせる事なく……まさか、学園長がその術に？」

「かもしれないって話になるわね」

もし誠がその目を開眼し、術を会得しているのなら、近右衛門は既に操り人形のような物になっているのではと。そう考えれば考える程、自然と誠にこれまで抱いていた不信感などが高まる。なら、自分が

「いいでしょう。私も大切な人を守らなければなりません。どの道、あの鬼は危険な存在でした。あなたのご両親のためにも、私があつた鬼を切り捨てます」

ためらう事なく、木乃香の為に、そしてドウメキの為に誠を斬ると決意する刹那。

「……そう、ありがとう。でも、ごめんなさい。あなたにこんな汚れ仕事を押し付けてしまって。私にもっと力があればいいんだけど」

自分が話を切り出したとはいえ、要は誠を殺害するという事。そんな事をまだ若い刹那にやらせるのに、負い目を感じるドウメキ。

「構いません。私は裏の世界の人間です。いずれはこうなる事になるのは覚悟していました。あなたが負い目に感じる必要はありません。それから、私にその《鬼封じ》の勾玉を……」

「ええ、あなたにならこれを託せるわ。それから……」

そう言つて、鬼封じの勾玉を刹那に渡す。そして、何かを思い出したように別の赤く光る勾玉を差し出した。

「これは？」

「恐らく使う事がないかもしれないけど、もしもの時はこれに強く気を送つてね。あなたの約にたつはずだから」

「どうやら、何かの武器か術のようだ。刹那をそれを受け取り、2つの勾玉を手で握りしめる刹那。」

「じゃあ、私は行くわね。お忍びで来てるから、ばれたら色々almazイから」

「わかりました。必ずや、鬼を討ち取りますから」

「ありがとうございます。また会いましょう・・・」

「そう言つて、薄暗い森へ入つていくドウメキ。気づけば、既にドウメキの姿は見えなくなっていた。」

一人残つた刹那。

「これを使えば・・・ふっ・・・新藤^鬼誠、貴様の化けの皮が剥がし、必ず私の手で葬つてやろう・・・」

守らなければならぬ者の為、人の命を平気で奪う邪悪な鬼を倒すために、計画を練る刹那だった。

だが、刹那は気づいていなかった・・・

それが悪へと誘う凶悪な罠であるという事を・・・

既に自分がかかっているというのに・・・

彼女は気づけなかった・・・

「ぶっはあ、やっぱり悲劇の女を演じるのは気持ち悪いわね！」

既に麻帆良学園から大分離れている土地で、溜め込んでいたのを吐き出すように喋るドウメキ。先ほどの凛々しい顔とは思えないほど、邪悪な笑みを浮かべていた。

「全く、単純な小娘だったわね。あんな嘘っぱちを信じるなんて、ほんっと馬鹿な人間よね。あ、半分は人間じゃない感じだったわねあの小娘」

近くに石に腰を駆けて、先ほどのやり取りを思い出すドウメキ。そう、今のは全てが彼女の演技であり、言ってる事は全てウソなのだ。「この眼も、効くかどうか不安だったけど案外ちよろいもんね。模造品でもあれだけ効くんだから」

右目に移植している模造品の鬼導眼に手を添える、先ほど刹那にとあり幻術をかけたのだ。それも、本人があまり違和感なく。

「瞳術《鬼幻心》。本物には劣るとは思ってたけど、中々の代物よね。洋館の奴らもいい仕事してるわよ」

先ほど、刹那にかけた幻術《鬼幻心》きげんしん。恐らく本物の術より威力が弱いようだが、どうやら予想以上の効果がでたようである。

「(自分でも気づかない内に洗脳されてるなんて、夢にも思っていないでしょうね。まさに神のちからね鬼は。早く、本物がほしいわね)」

そう思い、石に寝っ転がるドウメキ。その時、誰かが近づくと気配を感じる。

「……………」

「なんだ、アンタだったの」

現れたのは黒い装束を全身に纏い、手には様々な計器がついた錫杖を持つ人物だった。見知った人物なのか。一旦起き上がるが、すぐに寝転んでしまう。

「アンタみたいなのって、基本全然喋らないから嫌いなよね。何考えてるかかわかんないから」

「……………何を考えている」

「お、珍しいわね。アンタ喋れるの?」

黒装束の人物は基本的には喋れるのはやらないらしく、珍しく口を開いたのに珍しがるドウメキ。

「何を考えていると聞いている。なぜ、指示された通りにしない」

「うるさいわね。ただ奪っていくだけじゃつまらないでしょ?それに、一緒にあの邪魔な鬼神を葬れる機会なのよ。それに本物の鬼導眼が手に入るかもしれないんだからね」

そう言って立ち上がり、歩いて行くドウメキ。

「アンタたちも、さっさと人工の魔化魍でも作ってなさいよ」

「言われなくても……………わかつている」

「いちいち、間を空けなくていいでしょうが」

そう言って一旦黒装束の人物に振り返るが既に姿はおなくなっていた。

「まあいいわ。あの小娘の同行も気になるしね。一体どんな事を見せてくれるのかしらね」

口元を尖らせて、邪悪な笑みを浮かべるドウメキ。

この先、麻帆良学園で何が起ころうとしているのか……………

第二十二ノ巻 《闇への導き／図書館島の恐怖》

麻帆良学園女子中等部 学園長室 15:20

「木乃香と桜咲にはそんな関係があつたんですか・・・」

女子中等部に用意されている学園長室。用意されているソファーにかけながら、近右衛門の話聞いていた誠。以前からずっと気にかけていた、刹那と木乃香との関係についてだった。あの後、真名と別れた後、少し寄り道（超包子で食事）し、近右衛門と会う約束をしていたため、訪れていたのだ。

「刹那くんには木乃香と友人として接して欲しいと言つたんじやが・・・彼女はそれを頑なに拒んでおつての。『自分は決してお嬢様と密接になつてはいいいわけがない』つと言つての」

ずっと小さい時からの友達で、木乃香を大切に思っていた刹那だったが、ふとことで木乃香が危険な目にあつてしまう。それを負い目に感じている刹那が、今は陰ながら木乃香を守っているということだった。

「でも、桜咲はそれでよくても木乃香の方はきついだらうに」

刹那はそう思つていても、肝心の木乃香の方は心を痛めている。小さい頃はとても仲が良かったのに、中学に入る同じクラスになるも、刹那が一方的に避けているため、自分の事が嫌いになつたのではと思つている。

「そうじやの。しかし、刹那くんにも、刹那くんなりの考えがあつてのことじやろうからな。木乃香の護衛を任せるなら、何も刹那くんだけには頼まん。刹那くんより強い実力者はおる。しかし、木乃香の事を体だけではなく心をも守ってくれるのは刹那くんだけじゃと思ひ、護衛を任せたのがそもそもその話じやつた・・・」

「そうですね・・・でも、悪いことをしましたね。木乃香に魔法がバレてしまったのは」

申し訳無さそうにする誠。事故とはいえ、既に今月の初めから木乃香には魔法の存在がバレてしまつている。近右衛門や父でもある近衛詠春は、木乃香には普通の女の子として育てて欲しかったと思つて

いた。事情を知らなかった誠は、申し訳ない事をしたと思っていたが、近右衛門は怒ることもなく『木乃香を守ってくれてありがとう』と言われただけだった。無論、その場に居合わせたネギと明日菜の事もお礼を言われた。

「いいんじゃないよ誠くん。木乃香も恐らくはうすうす感づいていたと思っておったからの」

「まあ、鬼の存在を知っていたのは驚きましたし、まさかあの時助けた女の子が明日菜と木乃香なんて気づかなかったですけど」

長野での事件を思い出す誠。この学園に来て明日菜と木乃香から聞かされるまでは、まさかあの時の子供が二人だったとは夢にも思わなかっただろう。

そう考えていると、携帯電話のバイブ音を鳴る。

「すみません学園長。電話が」

そう言って、一度部屋から退出しようとするが、近右衛門は「ここに出て構わんよ」と言う。それを聞き、誠は「ありがとうございます」と言って電話にでる

「もしもし、新藤ですが」

『ご無沙汰してます。桜咲刹那です』

「桜咲か、誰かと思ったよ」

電話の相手は刹那だった。見覚えのない電話番号だったので、誰かと思っていた誠。

『以前、高畑先生から伺っていたもので』

「そうだったのか。それで、何か要件でもあるのか？」

『ええ、今日の夕方、先生に話したいことがあるのですが』

「話したいこと？何だ」

『電話ではあれですので。六時頃に大学部の方の森林公園で落ち合いたいのですが』

「(大学部の？あそこは人通りが少なくて魔族や妖怪がよくでるって場所だったよな) ああ、わかった。六時だな。そこに行くよ」

『あろがとうございます。では、また・・・ブツツ』

そう言って、電話を切る刹那。疑問点は残ったが、指定された時間

と場所に向かうことにした誠。

「電話、刹那くんからじゃたかの？」

「ええ、何だが俺に話す事があるそうです。何の内容かはわかりませんが」

「ふん、刹那くんが誠くんに話し合いをかの・・・」

「何か心配でも？」

「いや、特に気にするの内容ではないからの」

何か思い当たる節があるようだが、関係はないだろうと考える近右衛門。

誠も「そうですか」と言っ、用事も済んだので学園長室から退室していくのだった。

「(刹那くん、もしや誠くんを・・・)」

以前から誠の事をよく思っていなかった刹那。何度も学園から誠を追い出すべきだと他の魔法関係者達と同様に訴えてきた刹那。木乃香の件が危険にさらされる可能性もあっており、何か起きてからでは遅いと言われてきているが、近右衛門自身も孫娘である木乃香が危険な目に会うのは避けたい。しかし、だからこそ「刹那くんが木乃香を守っておくれ」と言い、刹那に信頼の意味を込めて頼んでいる。刹那もその際はしぶしぶ了承したが・・・近右衛門が懸念している事は・・・

それは刹那と誠が戦いを起こすのではないかと言う不安だった・・・

しかし、その不安は数時間後に現実の物になってしまったのだ。

それが木乃香・・・そして麻帆良学園や猛士をも巻き込んだ大きな事件の幕開けだとも知らずに・・・

「流石に図書館島、本を整理するだけでも一苦勞ですな・・・」

「まだ、半分も終わってないけどね」

上着を脱ぎ、カッターシャツの袖を折り曲げて、本の整理を淡々とこなしているネギ。同じく本の整理をしているハルナ。昼から始めた書庫の整理作業もまだ半分も終わってはいない状況だった。

図書館本館の裏に建てられているここ書庫棟は古い本を置いてある棟でもある。ネギ達が担当しているのはここ第1書庫室。一番本の出し入れが多い書庫室でもある。

「ハルナがよりによって、一番ハードルの高い第1書庫室にするからです」

近くの本棚に本を入れる夕映がハルナに愚痴っている。

「生姜ないでしょ、まさか一番最初に引いたくじがここだったなんて。誰も予想だにしてなかったわよ」

「そうだよ夕映。ちよっとくじ運が悪かったただだよ」

のどかもハルナにフォローを入れるも、夕映は追い打ちを駆ける。

「甘いですよのどか。ハルナは前々からこう言ったくじには滅法弱かったです。今回はどうしてもいいいますからハルナにくじを任せましたが、今度からはハルナ以外がくじなどをするべきですね」

「ぐはっ、アンタまさかそこまで言う?」

「言うべき時には言うておくべきかと」

「あははは、でも僕がこんな貴重な本を見れたのはとてもいい経験でしたよ」

第1書庫室は、重要な本や珍しい本なども扱っている書庫室でもあり、一般ではお目にかかれない本などもあるのだ。そう言ったのを担当できるのはある意味名誉なことでもある。

「う、ネギ先生はそういうのでしたら・・・」

夕映もネギの発言で食い下がる。と、ここで作業をしていたハルナが近づき、耳打ちをする。

「ちよっと夕映。それよりのどかとネギ先生のラブラブ大作戦はどうするのよ。結局昼からぶっ続けでやってたけど」

「本に整理するのに手一杯で忘れていました。今日は諦めて明日に結構するべきです」

「明日もこんな調子なんじゃ・・・」

「まあ、こつちが心配せずとも、あの二人結構いい雰囲気だしでるです」

そう言つて、のどかとネギの方を見る二人。一緒になつて本の整理をしており、手を出さなくても今のままでも十分いい雰囲気を出している。本の事になれば誰とでも仲良くなれると考えているのどからしい行動でもある。

「そうだね。あのままなら、一気に告白までもつていけるかもね」

「そこまではいかないと思いますが・・・??」

その時、夕映が書庫室の窓の外に誰かがいるのが見えた。

「どうしたの?」

「今、廊下の方に誰かいたです」

「廊下?他の連中は本館の方の整理のはずだけど」

「見た感じでは、ここの生徒の制服ではなかったです。私服のような格好でしたし」

一瞬だけだったが、学園の指定校の制服ではなかったと言う夕映。

「もしかして不審者とか?」

「もしかしてでもなくても、気になったら即行動です」

そう言つて、廊下の方に向かう夕映。しかし、ハルナが夕映の行動を静止する。

「ちよつと待ちなつて夕映。あんたの好奇心旺盛の行動はいいけどさ。何かあつたらどうする気よ」

「大丈夫ですよハルナ。確認にいくだけですから」

「どうかしましたか?夕映さん、ハルナさん?」

「二人ともどうかしたの?」

二人の行動に気がついたネギとのどかが来た。

「夕映が廊下の方に誰かいるつて言つてね」

「誰かつて、誰です?」

「それをこれから確認しに行くんです」

「で、でももし怪しい人だったら・・・」

夕映の大胆な発言に少し怯えるのどか。

「大丈夫ですよのどか。何かあればすぐに逃げればいいだけですよ」

「それが人間ならね・・・」

「ど、どう意味ですかハルナさん」

急に怖い顔になったハルナに質問するネギ。

「さつき思い出したんだけど、この書庫棟には出るらしいのよ・・・あれが」

「あれって・・・」

「決まってるでしょ・・・幽霊よ」

「ゆ、幽・・・霊?」

「(また、始まったです・・・)」

お決まりのパターンなのか、ハルナは都市伝説やら噂話が大好きなのである。時たまに、変な噂話や都市伝説を話してクラスメイトをがらせている(主に鳴滝姉妹とのどかだが)。

「ここはね昔、ある男子生徒が飛び降り自殺をした場所でもあるのよ・・・」

そう言つて次々と書庫棟の恐怖怪談を始めるハルナ。それを聞く度にネギとのどかは恐怖の顔に染まる。

それを見ていた夕映は完全に呆れていた。

一方、夕映が廊下の方で見た人影というのは・・・

ほんの数分前・・・

「どうやらここは本館のほうではないみたいですわね・・・」

誰がいるわけでもないのに敬語で状況を説明してくれているのは、麻帆良学園に滞在することになった源道賢二・・・玄鬼であった。

学園の探索という事で、真つ先にここ図書館島を訪れていた賢二であったが、図書館館内の迷路のような空間に迷ってしまったようで、本館とは違うここ書庫棟の方に入ってきてしまったようだ。

「誰もいないみたいですわ、今日はもう帰りますか。今度はヒビキさんに案内して貰ったほうがいいですね」

そう言うと、今まさにネギ達が整理をしている書庫室の前を通り過ぎて行ったのだ。

そして、現在につながり……

『じよ、冗談はやめてくださいよハルナさん!』

『私は冗談は言っていないわよネギくん。これは全て真実……』

『ひう……』

『の、のどかさん!』

「?ネギ……」

誰かの話声が聞こえて来る。その中に聞こえたネギという人物の名前に聞き覚えがある賢二。

「もしかして、ヒビキさんが言っていたネギ・スプリングフィールドくん?」

誠が言っていた、少年ではないかと。少し気になり書庫室の入り口へいく。

書棚の間から顔を出して、話声が聞こえてくる方を見る賢二。そこには3人の女生徒と赤髪の子供の姿が見えた。そのまま、ネギ達の方に歩いて行く賢二。

「すみません。君、もしかしてネギ・スプリングフィールドくんですか?」

「え?」

急に呼ばれて振り向くネギ。ハルナ達も賢二の方を向く。

「ちよ、誰あの爽やか系女顔のイケメンは!」

「何言ってるかわからないですよハルナ……」

現れた賢二に興味津々のハルナとそれを見て呆れる夕映。そして、賢二が現れてからハルナの後ろに隠れているのどか。

「あの、ネギは僕ですけど。あなたは?」

「初めまして、僕は源道賢二……えっと、新藤誠さんの知り合いのついでいえばわかりますかね」

「え、おにい……新藤先生のお知り合いの方ですか?」

「ええ、君の事は以前から誠さんから聞いていてね。この学園に来たら一度挨拶しようと思っていました」

「新藤先生にこんなイケメンの知り合いがいたなんて・・・」

誠の知り合いと名乗る賢二の登場で場の雰囲気が変わる。数分と立たぬ内にすぐに打ち解けていくネギ達。男性恐怖症ののどかも賢二とすぐに仲がよくなった（賢二が本好きというのも関係があったが）。

「所で、源道さんは新藤先生とはどう言った知り合いなのですか？」

夕映のポツと出た一言が賢二の言葉をつまらせた。

「しまったな。知り合いっていえばそれで済むと思いましたが。何の知り合いか考えていませんでしたね・・・ヒビキさんの趣味といえば・・・うくん）!!登山家仲間です」

「登山家仲間ですか？ 渋い趣味を持っていますね」

「あんたの仏像マニアよりかはよっぽどマシでしょうに・・・」

咄嗟に嘘を言つて場をごまかす賢二。嘘は好きではないが、賢二自身も魔化魍を退治しに山に登ったりも多くながち登山仲間には嘘ではない。実際、富士山に登ったり、魔化魍退治にあの劔岳にも登っている（勿論、誠や他の鬼戦士の仲間と一緒にだが）。

「（お兄ちゃんと知り合いつて・・・もしかして、この人も鬼なのかな？ それに僕の事を聞いてるってことは・・・）」

ネギの予想は間違つてはいなかった。勿論、賢二はネギが魔法使いだというのを知っている。しかし、場所が場所なので、お互い本当の事はいえないでいた。

賢二も今になって「あとから言えばよかったかな」と思っていたりする。

ふと、ハルナがまたもやよからぬ都市伝説の話始める。

「そういうえば、この書庫室には地下図書室につながる秘密の入り口があるそうなんですよ」

「秘密の入り口？ それは聞いたことないですね」

「おっ、珍しく食いついてきたね」

ハルナの発言に耳を傾ける夕映。普段ならハルナの言う都市伝説なら殆ど聞かないが、図書館島の構造に関する事は聞くのであった。

「地下図書室？ 本館の方に入り口がありませんでしたか？」

「噂なのですが、図書館島にはダンジョンのように広大な地下空間があり、今ある本館の地下図書室の更に下にあると言われているです」
「でも、それはあくまで噂だから誰も信じてはいませんが」

夕映の言ったことに補足を入れるのどか。彼女自身も幻の地下空間の話に興味があつた。

「その地下空間への入り口はこの書庫棟にあるということですか？」

「そうよ。それも、今私達がいるこの第1書庫室にね」

「で、その入口はどこにあるのですか？」

「……それがわかったら苦労はしないんだけどね」
「わからないって事ですか」

結局うわさ話でしかなかったのかと少し落胆する夕映とのどか。
そう思っていると、終了時間の6時に近づいていた。

「もう時間じゃん。この話はまた今度つてことで、早く本を書棚に戻そ」

「僕も手伝います。何かの縁ですし」

「本当ですか？助かります！」

賢二も残りの本の整理を手伝ってくれるのだった。

麻帆良学園都市大学部 森林公園 18:00

麻帆良学園の端の方に置かれている大学部の学校施設。その更に奥にあるのがここ森林公園。しかし、まだ日は昇っているのに、この森林公園は妙に薄暗い雰囲気を出していた。それにほとんど手入れがされていないのか、雑草などが茫々に伸びている。明るい雰囲気が出ている麻帆良学園ではお目にかかれない光景だ。

そして、この付近は魔族や妖怪の類が現れる場所でもあるが、学園の結界と最近貼り直した特殊な結界で最近は出現していないらしい。

そんな場所に、刹那から指定された時間通りにやって来た誠は少し
苔が生えているベンチに座っていた。

「(思ったより薄暗いな……こういう場所ってあんまり好きじゃないんだよな……)」

辺りを見渡して、そう考える誠。本人は全否定しているらしいが、
誠はホラー系などが苦手である。そんなの考えなければ何ともない
が、何故かふと思いつくと不安に駆られる事があるとかないとか。

『マコツチは幽霊が怖いからね。そんなマコツチに恐怖を払拭する菓
子をつくつてきたから是非食べてくれ!』

「(!?なんでシユウキの事を思い出すんだ俺は。それに俺は別に幽霊
なんて怖くねえ……)」

突然、戦友の顔と言動を思い出す。因みにその時、食べたお菓子は
なぜか《カステラ》だったが……

すると、誰かが近づいている気配を感じた誠。

「お待ちせしました新藤先生。早い到着でしたね」

公園の入口から歩みよってきたのは、右手に愛刀の《夕風》を持った
刹那だ。

「いや、俺も今ついたところだよ。それで、早速何だが、俺に話したい
事って?」

誠が話を切り出すと、刹那はゆっくりと誠の方に近づいていく。

「実は先日、森の中を警戒していたらある物を見つけたんですよ」

「ある物?」

「ええ、もしかしたら先生と同じ鬼戦士の持ち物ではないかと思つて
ですね」

「何?どんなの何だ」

誠が聞くと、刹那はポケットから赤い色をした勾玉を見せる。誠は
それを受け取ると、マジマジと見つめる。その時、誠は気づいていな
かった。刹那の口元がニヤついていたのを。

「これは……?!?」

しかし、時既に遅し。

「ぐあああつ!?、これ・・・は・・・!!」

突然、赤い勾玉から赤い稲妻が誠を覆う。途端に誠は苦しみだす。明らかに力が封じ込まれていく感じがある。何とか取り払おうと鬼力を込めようとした瞬間。

斬!

「なっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

袈裟切り・・・

誠の左肩から右の脇腹にかけて、刹那の持つ夕風が切り裂いていた・・・

ブシャツと傷から血が吹き出す。

一瞬、何が起きたのかわからなかったが、すぐに現実に帰還する誠。

一步、また一步と後退し、傷口を抑えて刹那の方を見る。

「こうも簡単に引つかかるとは思いませんでしたよ。エヴァンジェリオンを倒したというのは間違いじゃなんですか?」

血のついた刀身を払い、物足りなかったと言う面構えて誠を見る刹那。

「桜咲・・・お前・・・ぐうっ」

稲妻を発生している勾玉が誠の手から離れようとせず、体の動きを鈍らせていた。

先ほど受けた斬撃が、致命傷らしく出血が止まらない。

「あなたは危険すぎます。木乃香お嬢様の為に・・・・・・・・・・・・・・・・死んでもらいます・・・」

次なる斬撃が誠に止めをさそうとしていた。

第二十三ノ卷 《怨念声刃》

「新藤先生、木乃香お嬢様の為に……死んでもらいます」
振り下ろされる夕凧が誠の体を切り裂こうとする。

「くっ！」

何とか後ろに飛んで躲すが、バランスを崩して、尻もちをつく誠。

「桜咲、お前……」

「新藤先生……いや、悪しき鬼。貴様の存在が危険なのだ。今ここで私が息の根を止めてやる」

そう言つて、殺気を出して夕凧を再度構える刹那。勾玉の力でうまく身動きが取れず、地面に片足を付けて刹那を見る誠。

「木乃香の為に……と言つたな」

「!? 鬼風情が気安くお嬢様の名を口にするな！」

自分の守るべきの人物の名を、憎むべき人物に言われ怒りを露わにする刹那。それを見た、誠は赤い稲妻が走る体を立ち上がらせる。

「お前がやろうとしているのは、木乃香の為に人を殺そうとしているるって事なんだぞ」

「ふん、人間ではない貴様が言つた所で何になる。木乃香お嬢様の安全の為に死んでもらう。その何が可笑しい」

切つ先を向けて、誠に言う刹那。

「もう言つてる事が意味不明だ。木乃香が俺を殺せとそういつたのか？ 違うだろ。自分の為に人を殺せなんて木乃香はそんな事は言わないはずだ」

「貴様が木乃香お嬢様の何を知っている！」

「お前は木乃香の何かを知っているのか？」

「何!？」

「短い期間だが人を見る目は持っているつもりだ。今のお前は木乃香の意思なんて関係なく自分の不利益な相手を殺そうとしているだけだ！」

短い期間だが、木乃香や明日菜たちとは他の生徒と違い何かと絡む事が多かったため、木乃香の性格などはわかっているつもりだ。そし

て、明らかに目の前にいる刹那は自分の都合で木乃香の名前を借りて殺人を行おうとしている。

しかし、そんなのは関係ないといった顔をする刹那。

「私が危険だと判断したら、それはお嬢様にとって危険な事。その何が悪い？それに貴様は死んで当然だ。人間を殺してきた貴様がそれを言うのか？」

「俺が人間を殺しただと？」

刹那の発言に耳を疑う誠。

「そうだ、私はとある人から聞いた。貴様のせいで両親が殺されたのだとな。この鬼封じの勾玉もその人から貰ったものだ。仇討ちを……してほしいとな！」

そう言つて、夕風を突き立て、誠を貫こうとする。だが、刀は誠の体を貫くことはなかった。

咄嗟に右手で刀を止めたからだ。誠の右手からはポタポタと血が滴り落ちる。

「何!？」

不意の攻撃を止められた事に思わず驚く刹那。引き抜こうとするも、刀がびくともしない。かなり強い力で握られているからだ。

「ふんっ」

「うわっ!？」

誠が腕を振ると、そのまま夕風を持った刹那の体ごと飛ばす。刹那は放り出され、近くの砂場に落ちる。

「くっ、貴様!？」

すぐに体勢を立て直し、誠を見る刹那。誠は体に走る激痛をこらえながら、刹那を見る。

「ぐ……桜咲、お前のやっている事は間違ってる！」

「ふん、鬼の分際で説教とは。もういい、貴様とのおしゃべりはこれで終わりだ」

ここからは、言葉など不要。誠を始末し、木乃香の安全を確立させる。今の刹那にはこの事だけしか頭になかった。明らかにいつもの自分らしくない行動に刹那は疑問にすら思ってもいなかった。

「神鳴流奥義・斬鉄閃！」

シユパツ！

螺旋状の斬撃が誠の方に向けて飛ばされる。単純な軌道だが、現在の状態の誠にとっては脅威だった。ギリギリで見切り避ける。近くに設置している電話ボックスが綺麗に切断され、破壊される。

「器物損壊だぞ！」

「そんな戯言を言う余裕があるとはな！神鳴流奥義・斬空掌・散！」

手の先から、気で作った弾丸のようなのが誠を襲う。

「土遁・土流壁！」

高速で印を結ぶと、地面から土でできた壁が現れる。しかし、すぐに鬼力で練り上げた土壁が崩壊する。

結局避けるしなくなり、無数に飛んでくる弾丸を避ける。何発かが誠の体に辺り、血が滲む。

「うまく練れない。この勾玉、鬼封じと言ったか……こんな代物が今までどこにあったんだ！」

痛みに耐えながら、自身の力を抑えている勾玉の事を考える誠。

そんな事をよそに、次々と攻撃を繰り出してくる刹那。それをかわしていく誠。

「どうやら、貴様がエヴァンジェリンに勝てたのは何かの間違いだったようだな！今の貴様なら始末するのも容易い！」

先ほどから、攻撃を躲すことばかりする誠に自信に満ちた言葉を漏らす。だが、その考えは甘かった。

「確かに俺がエヴァに勝てたのは偶然かもしれないが、今のお前に負ける俺じゃない！はあああああああああ!!!」

その言葉に反応したのか、誠の体を縛り付ける稲妻を払いのける為に、全身に力を込める。雄叫びと共に、勾玉に亀裂が走る。同時に、全身からの出血もひどくなっていく。

「な、なんて気力だ!？」

肉眼でも確認できる程の気の波動が誠から溢れ出るのを見た刹那は驚愕した。うまく力も出せないはずなのに、ここまでの力を出せる誠に恐怖する刹那。だが、同時に攻撃のチャンスでもあった。

「だが、これで終わりだ。神鳴流奥義・極大・雷鳴剣！」

刀身に雷をまとわせた奥義を誠目掛けて振り下ろす。雷の閃光が誠に一直線に降り注ぐ。

パキンッ！

と、同時に誠を縛っていた勾玉が砕け散る。しかし、無情にも雷の閃光は誠を飲み込んでいく。

雷が落ちたのも同様の攻撃。公園に設置されて街灯は全て使い物にならなくなり、公園もすでに半壊している状況だった。

「ぐっ……はあ……はあ」

直撃を食らったはずの誠だが、まだ息はあった。先ほどの攻撃でできた岩陰に隠れ。右手には刀身から煙が上がっている音叉剣が見えた。咄嗟に音叉を変化させて、音叉剣を避雷針にして直撃を避けてよ。うだ。だが、そんな離れ業をしても無事なわけもなく右腕がやけどのように焼けただれている。更に先ほどの刹那の一撃をくらい、完全に消耗してしまっていた。この状況はある意味エヴァンジェリンと戦闘した時より重傷の傷だった。

「桜咲……京都神鳴流。妖魔を払う古くから京都に伝わる剣術集団とは聞いていたが、こんな大技を出してくるとはな」

自分がこういう状況だというのに、素直に刹那の力量を認める誠。

「（鬼が気に食わないなら、まだわかるが。それが木乃香と何の関係があるんだ……）」

刹那の言っている事が、理解できていない誠。鬼が気に食わないのは麻帆良学園に来て既に承知済み。だが、今まで誠に遅いかかってきたのはエヴァンジェリンくらいだ。

「（学園長は木乃香を守って欲しくてお前に託したんじゃないのか？ お前も木乃香を守りたくて、護衛をやっているはずだ……！）」

岩陰から顔を出し、刹那の様子を見る。誠の姿を見失っているのか、先ほどから辺りをキョロキョロとしている。今の刹那は正気ではないし、許される事ではない。このままでは自分が危険と判断したら、所構わず襲うのではないかと誠は思った。そして、先ほど言った、誠が仇という話。誠には全く見覚えのない事だった。

「(･･････考えられるのは後にしよう、今は桜咲を止める事を考えるんだ)ぐつ････」

残った疑念が切り捨て、今は刹那の暴走を止める事を考えるのみ。しかし、鬼封じの力を解き放つ際に予想以上に鬼力を放出したため、うまく傷が治りきれていなかった。

「ははは･･････鬼神の名が型なしだな････」

改めて、自分の異名を持つ「鬼神」の名を思いだす。全国最強の鬼にのみ許された名。ただし、それは表上はそうしているだけにすぎず、本当はもつと別の意味を持っているが。

「見つけたぞ!」

ザンツ!

誠が身を隠していた岩が真つ二つになる。すぐさま刹那が夕風を振るうも、右手に持つ音叉剣で夕風を止める。

「(くつ、私の一撃を止めた!しかも片手で!?)」

不意をついた自分の一撃が止められるとは思わず、更に夕風より遙かに短い音叉剣で、しかも片手で止められたのに驚く刹那。気で身体能力も上げているのにもかかわらず。

「これ以上は、周りに被害を増やすだけだ。俺が気に食わないなら直接学園長に言っつて、追い出せばいいだろ」

「ふぎけるなよ鬼。貴様が学園長を操つて、ここに居座っているのはわかったいる」

「はあ!?!」

またもや、刹那の口から出てきた内容に呆れるように驚く誠。次から次へと見に見えるの発言に、呆れ始めていたのだ。しかし、次の一言で誠の表情が変わった。

「貴様の持つ鬼導眼と呼ばれる眼でな!」

「!!･･････どこでその眼の事を････」

「ふん、やはり持っているのだな。やはり貴様は危険な存在だ!」

「俺の質問に答えろ!誰に聞いた!」

声をあげる誠。鬼導眼の存在は猛士に所属している者しか知らなはずであり、その眼の危険性と奪われる可能性から極秘扱いとなつ

ているはず。なぜ、部外者のはずの刹那の口からその名前が出てきたのか気になる誠。何より、鬼導眼を開眼しているのは全国で誠を含めたたったの数人程度。

「そんな事貴様に言う筋合いはない！」

一旦距離をとり、技の構えの姿勢をとる。どうやらもう何を言っても無駄なようである。刹那の様子を見て、誠は決着を付ける事にした。

「神鳴流奥義・斬岩け!？」

岩をも両断する斬撃を誠に振り下ろすも、技が決まる前に刹那の左腕を掴み、そのまま地面に押し付ける。夕凧もそのまま近くの地面におちてしまう。

「ぐっ・・・」

「いい加減にしろ!!質問に答えたくないならもうそれでいい!・・・。だが、今回の事は学園長には報告させて貰うからな。今回の行動はあまりにも常軌を逸してる行動だ」

「ふざけるな!木乃香お嬢様に仇なす鬼が!あまつさえ学園長にまで手をかけているくせに!」

「本当に桜咲刹那か?学園長から聞いた内容と大分違うぞ・・・」

学園長から聞いた刹那の行動や性格とは余りにかげ離れている事に疑問を抱く誠。そんな事を余所に必死に誠から離れようともがく刹那。しかし、腕力で圧倒的に勝っている誠に叶うわけもない。

すると、刹那は残っている右手を伸ばし、懐に入れている別の勾玉を取り出し、握りしめて気を送る。

「(また、あの勾玉か)」

まだ、力を封じる勾玉を出したと思った誠は、また喰らえば危険な状態になると判断し、刹那を気絶させようとした瞬間。

「何!？」

突然、腕を振り払われ、投げ飛ばされる誠。体勢を立てなおして、刹那の方を向くと、そこには先ほどそこにいた刹那の姿がなかった、不意に上空を振り向くと、そこには漆黒の翼を囀し、夕凧ではない漆黒の剣を握った刹那が誠を見下ろしていた。特徴的だったサイドテ―

ルはなくなり、髪が刹那の顔を隠していた。

「桜咲、まさかお前。普通の人間じゃなかったのか・・・」

「私は鳥族と人間のハーフだ。本当は白かったが、今は黒くなっているな・・・それよりも」

そう言つて、自分の翼を見る刹那。そして、再度誠の方を向くと、握りしめる剣を誠に向ける。そして

キュインツ!!

謎の音が発し、刹那が一瞬にして姿が消えた。そして、気がつけば誠の至近距離におり、剣を横一文字に斬る。咄嗟に音叉剣でガードする誠。しかし、先ほどとまで状況が違い、力では勝っているはずの誠が押されていた。

「ぐっ!?」

「フハハハハッ! どうしたオニイ!!」

高笑いをする刹那。普段の彼女からは想像もつかない変わり様である。その時、誠が刹那の握りしめる剣を見て驚愕した。

「(!!この剣、まさか怨念声刃か! 鬼神神社に奉納されたはずじゃなかったのか!」

刹那が握りしめる剣『ゴーストセイバー怨念声刃』。猛士が所有している武器『音撃増幅剣・装甲声刃』アームドセイバーによく似た形状をしている武器であり、古くからある武器で元は普通の刀であったが、いつしか形を変えて今の形状になったとされる。だが、魔化魍やこの武器で殺されてしまった人、或いは鬼の怨念を溜め込んだ武器であり、使用者に絶大な力を与えるが、逆に精神を狂人へと変えてしまい、普通の人間が使えば発狂死してしまう。前使用者でもあり鬼払いされた音撃戦士《霊鬼》が使用して以来、回収に成功した猛士が鬼神神社に封印していたのである。

かつて、この武器を持つ鬼と対峙した事ある誠はこの武器の危険性を理解していた。

「馬鹿野郎が! 今すぐその武器を手放せ! 死ぬぞ!」

「はっ! それは貴様を殺してからだ!」

全く聞く耳を持たない刹那。すぐさま攻撃の行動に移り、空中を飛翔しながら突撃する。

「くそっ！」

考えている余裕はなく、音撃棒・烈火を取り出し、清めの音を打ち込もうとする誠。

「あの剣に清めの音はかなり打ち込まないと。弱くなった所で、封印を施すしかない！」

ゴーストセイバー 怨念声刃に清めの音は効果が薄く、本気で封じ込めるならかなりの量を打ち込まなければならぬ。それほど、すさまじい怨念があの剣には宿っているのだ。

そして、音撃棒を構えて、突撃してくる刹那に向けて防御の構えをとった瞬間。

ビキビキ・・・バキンッ!!!

「!?」

攻撃を防御した瞬間、両手に持つ烈火の柄から亀裂が走り、鬼石を残して粉々に砕け散る。エヴァンジェリン戦による損傷がゴーストセイバー怨念声刃の攻撃をうけて、砕けてしまったのだ。

「死ねええ！鬼がああああああああああ!!」

ゴーストセイバー 怨念声刃を突き立て、無防備になった誠目掛けて突き刺そうとする刹那。だが刹那は気づいていなかった。誠の片眼が三つ巴に変化していくのにな。

なんと、攻撃は誠の体を突き刺す所かすり抜けていってしまった。

「何だと・・・」

突然の事に驚く刹那。確かに自分の攻撃は誠を仕留めようとしたはず。慌てて振り向くと、そこにはひどく呼吸が乱れている誠の姿があった。そして、ここで刹那が誠の眼に変化があるのに気づく。

「それが鬼導眼か。さっきのすり抜けていくのはその眼の力か？」

「さあな。それより早くその剣を捨てろ。本当に死ぬぞ」

「この剣さえあれば私はもうだれにも負けることはない。お嬢様を真にお守りできる力を持ったんだ」

「ふざけるな!!その力、いずれ自分をも見失い。目に映るもの全てを殺し回る代物なんだぞ。木乃香をも手に掛けてしまうことにもなる！」

「私が木乃香お嬢様を手二掛ケル？ふぎケタ事を抜かすなよ鬼が！そのふぎけたカラクリを解いて、今すぐ叩き斬ってやる！」

口調が途切れ途切れにおかしくなっているのがわかる。それでも、刹那は誠を殺す事に執念を燃やし、剣を構える。

「止める刹那。それ以上やれば、お前を敵と見なければならぬ」

誠ではない声が聞こえる。後ろを振り向くと、そこには愛用のガバメントを構えた真名の姿があった。

「龍宮、ナゼニコニイる？」

「午後からのお前の様子が妙だったからな。悪いが尾行させてもらっていた。最初から止めようと思っていたが、新藤先生が予想以上に奮戦してたからな。様子を見させて貰っていたよ」

「なら龍宮、私にソレを向けてイルのはドウイウ意味だ？」

「言葉とおりだ。先生の言うとおりお前の行動は常軌を逸している。このままでは、学園を敵に回すことになるぞ」

「構うもノカ、木乃香お嬢様に仇なす者は例え神だロウと斬り捨てル。龍宮、勿論お前モだ。この鬼を擁護するナラ、ココデお前も殺す」

「新藤先生だけではなく、私まで殺すと言い出すか。そうまでして近衛嬢を守りたいのか・・・」

「当然だ。お嬢様ヲお守りスるのが、私の使命なのだ。それを邪魔する奴は誰でアロウと許さナイ」

ついに、真名に剣を向けて、今にも切り捨てんとする刹那。真名ももうこれ以上は無理かと判断し、ガバメントの銃口を向け、魔眼を発動させる。しかし、そんな状況をこの男は黙っているわけなかった。「何度言わせればわかるんだ！そんな事をして木乃香が喜ぶと思つてのか!!・・・ゴホッ、ゴホッ!?!」

刹那の発言について、キレた誠が叫ぶ。急に叫んだため、傷口が痛み思わず咳き込み血を吐き出す。

「ふぎケルなよ、私は間違っていない。災厄をもたらす悪しき鬼が、お前を殺せば。全てが上手く行くンダ。だから、私に殺され口おおおおおオオオオおお!!!」

もおう反論するだけの思考が残っていないのか、ゴーストセイバー怨念声刃から漆黒

のオーラが現れ、刹那を覆っていく。そして、そのまま刹那の叫び声に反応するかのように剣から三日月型の斬撃があたり一体に放たれる。

「くっ、龍宮！その攻撃を食らったらダメだ！」

「わかってるよ先生。あの攻撃が不味そうなのは見てわかる……!?」

誠の忠告を素直にとる真名だったが、攻撃を受けたまわりの木や街頭、遊具が腐っていくのを見る。

「あの斬撃は、腐怨ふおんと言って、使用者の声に反応して斬撃を飛ばす攻撃だ。勿論攻撃をしてるのはあの剣に込められた怨霊共の叫び声がエネルギー体となって排出されてるだけだがな、少しでもかすれば体が腐っていく」

「そんな恐ろしい武器があるとはね。先生の組織はずいぶん危険な物をお持ちのようだ」

「だから、封印してんだ。誰の手に渡らないようにな……」

それほどまでに危険な武器がなぜ、刹那に渡っているのか、理解できない誠。考えられるのは一つ。

「(あの強奪事件か……)」

猛士で起きた強奪事件。あの事件で、怨念ゴーストセイバー声刃が盗まれたのなら、話をつくかも知れない。なら、一体誰が刹那に渡したのか。そう考えている間にも刹那は次なる攻撃を仕掛けてこようとする。

「こうナツタラ一気二人纏めて吹き飛ばす！神鳴流決戦奥義！」

「!?あの攻撃は、先生ここは一旦距離をとったほうがいい！」

刹那が出そうとする技がわかった真名は急いで、逃げるように言う。しかし、誠は逃げるよりも立ち向かう事を選び、鬼導眼に意識を集中させる。

「真・雷光剣!!」

剣先から出る電気エネルギーを誠目掛けて落とす。広範囲に攻撃を及ぼすこの奥義は誠と違う位置にいる真名にも影響が及ぶ。二人纏めて葬り去る大技を出し、黒い雷は誠の元に一直線に放たれる。先ほどのとは違い、例えすり抜ける技をつかっても、攻撃を止めるわけではない。しかし、刹那の考えは尽く崩された。

「(神威!!)」

キユイイイイインツ

眼から血が涙のように流れると、向かってくる稲妻が、突然謎の歪みに引きずり込まれていく。そして、完全に稲妻は消されてしまい、攻撃が不発に終わってしまった。

「何だど!？」

「攻撃が消えた．．．．」

稲妻が消されてしまった事に、驚く刹那と真名。一方、誠の方は、音叉剣を通常の音叉に戻す。そして、自分に手に軽く当て、響鳴を起す。

「桜咲、これ以上のその武器もお前も野放しにはできない．．．．」

音叉を額に当てて、意識を集中させる。額から鬼の顔が浮かび、体から紫色の炎が燃え上がる。

「うううううう．．．．はあっ!!」

右手で炎を払いのけて、誠は響鬼へと変身を遂げる。そして、空中で佇む刹那を見上げる。

いつもなら腰に携帯している音撃棒・烈火があるはずだが、今はない。

響鬼は、音撃棒なしではたしてどう戦うのか？

「(はん．．．．鬼神。見せてもらうわよ？アンタの鬼としての戦いをね)」

そして、近くの森の木から響鬼達の様子を見る影。

「はあ．．．．はあ．．．．せっちゃん!!」

何かに惹かれるように、響鬼達の元へと向かう木乃香。

戦いは終幕へと近づいていく．．．．

第二十四ノ卷 《響鬼・翔》

誠と刹那が対決を始めて、数分後……

麻帆良学園女子中等部学園長室

「おじいちゃんに呼ばれてんの、すっかり忘れてもうてたわ……」

そう言いながら、学園長室に向けて廊下を歩いて行く木乃香。占い研究会の部会も終わり、いざ寮に帰ろうとした時、今朝方学園長から呼ばれているのを思い出し、向かっていたのだ。要件は恐らく、お見合いなどの話だろうと思っていた。

「（おじいちゃんもいい加減諦めて欲しいなあ。付き合う人ぐらい自分でも選べるんに……）」

などと思いつつ考えている内に学園長室の前まで到着していた。そのまま、ノックして室内に入ろうとした時、室内から学園長の声が聞こえた。

『なんじゃと?!刹那ちゃんと誠くんが戦っておるじゃと?!』

「え?」

声を上げて驚く学園長の言葉に耳を疑う木乃香。なぜ、刹那と誠が戦っているのかと。木乃香はそのまま中の声が聴こえるように聞き耳を立てる。

『先ほど、龍宮くんから連絡が入り、既に交戦状態との事です』

別の声が聞こえてくる。声の主からして恐らくタカミチであろう。口調からして、若干焦っているようにも聞こえる。

『うむ、やはり恐れておいた事態になってしまったかの……』

恐れていた事態。木乃香には学園長が何を言っているのかわからなかった。

『学園長……』

『二人が戦闘を行っている場所はどこかの?』

『大学の外れにある森林公園です』

『急いで、現場に魔法先生達を向かわせるのじゃ。事が大きくなる前に対処せねば。高畑先生も現場に急行してくれんかの。ここからならそう遠くはないはずじゃ』

「(大学部・・・!!)」

何を思ったのか、それを聞くと木乃香は廊下を駆け出していく。何が起きているのかはよくわからない。だが、なぜか木乃香の心のなかで嫌な事が起きるのではないかと思った。

そんな思いを張り巡らせながら、木乃香は誠と刹那が激戦を繰り広げる現場へと走って行く。

麻帆良学園都市大学部 森林公園

「神鳴流奥義・斬鉄閃!!」

空中から飛翔する刹那は、剣先に込めた気を放出し地上にいる響鬼を攻撃する。怨念声刃から放たれる斬鉄閃は勿論、ただの気を飛ばす攻撃ではない。怨念声刃に込められた怨念をも放出しているのだ。

「くっ！」

空中から飛んでくる斬鉄閃を避けて、反撃の糸口を探している響鬼。戦いは響鬼の方が劣勢という状況だった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

攻撃を避ける度に、響鬼の息が上がってきている。はじめに受けた鬼封じによる体力と鬼力の消耗。まだ完全に扱いきれていない鬼導眼による神威の連続使用。そして、刹那に食らった最初の攻撃がまだ完全に治癒していなかったのだ。早期決着の為に鬼に変身したが、ここに来てツケが回ってきたようだ。

「どうしたオニー！動きが鈍イぞ！」

だが、今の刹那にそんな事情などは関係なく、次々と攻撃を繰り出してくる。空を飛ぶ刹那にとっては、獲物を捉える鷹のように見え

た。

「刹那……先生、もう見てられない。加勢させてもらおうよ！」

銃口を刹那に向けて発砲する真名。しかし、弾丸は刹那にあたる事なく全て切り落とされる。

「神鳴流に飛び道具ハ通用しないゾ。忘れたのか龍宮？」

「忘れてはいないさ。だが、今のお前程度なら当たると思っただけだよ」

「何？」

挑発ともとれる真名の物言いに反応する刹那。

「聞こえなかったのか？今のお前程度なら当たると思っただけだ」

「貴様……」

「新藤先生の言うとおりだ。今のお前は以前のお前ではない。近衛嬢を守るなど甚だしい……ただの弱い人間だ。昔のお前はそんなに弱くはなかったはずだ」

刹那とは共に戦ってきた戦友として、今の刹那はとても目を当てられない有り様だった。敵と判断した者は徹底的に排除する。そんな考えをする刹那に、真名は響鬼が行った通り、人を守る資格はないと。「黙れ龍宮。そこノクたばり損ないの鬼カラ殺すつもりダツタガ、先にお前から始末シテやる」

「刹那……」

刹那の言葉に何とも言えない感情を抱く真名。今の刹那にとって、真名も殺す対象としか見ていないのだ。

「やめろ龍宮。今の桜咲に何を言っても無駄だ」

「新藤先生」

ゆっくり立ち上がり、真名に話かける響鬼。既に全身傷だらけで隙間から血が出ている。自然治癒が追いついていない状況だった。

「あの剣を持った時点で、桜咲は既に魂を食われている。まともな話などできる訳がない……」

「じゃあ、一体どうすれば……」

「……」

目の前にある砕けた音撃棒をみる響鬼。

既に、頼みの綱の音撃棒を破壊されて、音撃を打ち込むことができず、怨念声刃の邪気を取り払う事ができない。刹那を傷つけずに抑えこむ方法はこれしか思いつかなかった。あとは、使用者本人を戦闘不能にする以外にない。しかし、それは遠からず刹那を殺すことにもつながらる。

はつきり言えば、響鬼が本気で殺しにかかれば刹那は確実に死ぬ。だが、今の響鬼に刹那を殺すことなどできない。響鬼が倒さなくてはいけない敵は魔化魍であり、敵ではない刹那を倒す理由など全くない。

『だから、甘えんだよ……誠』

「(!!……………龍鬼)」

突然、頭の中に語りかけるように聞こえてきた声。昔、鬼神の名を賭け、島一つを壊滅させるまで決闘を行った鬼《龍鬼》。

『理由なんざいらねえだろ。向かってくる敵は殺す。そんな甘い考えだから、お前は”本当の鬼”になれないんだよ』

「(・俺とおまえは違う……)」

龍鬼の言葉を否定し、現実に戻る響鬼。

そして、装備帯から下げているディスクアニマルを取る響鬼だが、ここで新たに貫つた新型ディスクアニマル《緑黄大鷹》をとる。

— 鬼に変身すればわかる —

手紙にはそう書いていたと思ひ出す。結局、試してみる時間もなく、どんな事が起きるかわからない。

「(迷ってる暇はない。みどりさんあなたを信じます……)」

音角を緑黄大鷹に当てて起動させ、緑黄大鷹がディスクモードからアニマルモードに変形する。

瞬間、響鬼から竜巻のような風が発生する。

「せ、先生!？」

近くにいた真名が突然響鬼から発生した突風に驚く。

「なんだこの風は……バランスが……!」

空中に佇んでいた刹那も同じだった。強風でバランスが崩れて立

て直そうとしていた。

一方、竜巻の中にいる響鬼に変化が訪れていた。

「緑黄大鷹が大きく・・・!!」

竜巻を起こしていた緑黄大鷹が突然大きくなり、サッカーボールほどの大きさになった瞬間に突然バラバラのパーツになる。そしてそのパーツは響鬼の鎧になるように装着される。

左右にわかれた翼は両肩に、頭部は響鬼の頭部と一つになり、鷹をモチーフにした仮面へと変化する。

続いて胴体、尾のパーツは胸部と背中に鎧として装着する。

そして、腰の装備帯に、呪術で封印されていたのか突然音撃管が装備される。

同時に全身が深緑色を基調とした色へ変色する。

そして、

シュバツ!!

竜巻が収まる瞬間、何かが飛び上がる音が聞こえたかと思うと、先ほどまでいた響鬼の姿がなかった。

「ドーン行つたあ!」「どこだ」!?!」

突然姿を消した響鬼を探す為に地上を見渡す刹那だが、上空から響鬼の声が聞こえ上を向く。

そこには先ほどまで地上にいた響鬼の姿ではなく、両肩から翼を生やし、刹那と同じく空中に飛翔している響鬼の姿だった。

その姿は、伝説の鬼の一人《羽撃鬼》の姿に酷似していた。

「(このディスクアニマル。装備することで形態変化するフォームチェンジディスクアニマルだったのか・・・それにこれは)」

自身の形態変化した姿に驚く響鬼だったが、ここで一つ気づいたことがあった。

自分が会得している炎の属性がなくなり、新たに風の属性に変換されていたのに響鬼が驚いた。

《属性変換形態》習得が難と言われていた属性の変換を緑黄大鷹の力

で完成させた響鬼だった。

響鬼・翔かける

それが、響鬼が紅に次ぐ新たな形態変化の名。フォームチェンジ

「くっ、ダカラどうした！飛べたらから私ニ勝てル理由ではナイダロ！！」

同じ土俵に來た響鬼が氣に食わない刹那は、翼を羽ばたかせ攻撃をしてくるが、響鬼は両手で印を結び、大きく息を吸い込む。

「風遁・大突破！」

響鬼の口が現れると、吸い込んだ息を大きく吐き出すと、刹那めがけて強烈な突風が襲う。

「うあっ!？」

さすがの刹那も、響鬼が出した強風に耐え切れず、地面に落ちる。しかし、地面に落ちる寸前に体勢を立て直し、上手く着地する。

「風遁が上手く扱える・・・風の属性に変換できたからか」

風遁の鬼忍術は、術を発動できても上手く制御できなかった響鬼だが、翔へと形態変化した今の響鬼は風遁を制御できるようになった。た。

「お、オノレ。鬼風情が私と同じ空を飛ぶなど許セルカ！ハアアアアアアアアア!!」

今度は自分が響鬼に見下されるように見えた刹那は、怒りを爆発させ、怨念声刃に氣力を送る。それに答えるように怨念声刃から黒いオーラが再び刹那を覆う。

「(不味い、侵食がかなり進んでるのか！威吹鬼さん力を使わせてもらいます!)」

腰に装備している響鬼・翔専用音撃管《翔風》を手に持つ。因みに突然腰に装備された音撃管に驚かないのは、そこまで気にしている余裕がないからである。

響鬼は翔風に、音撃鼓から音撃鳴へと変化した《響風》を《翔風》に

取り付ける。

「(あの武器に鬼石はいらない)」

音撃管での攻撃が鬼石を打ち込んで技を放つが、怨念声刃に鬼石は不要である。そして、音撃管《翔風》に息を吹き込む。

「音撃射・疾風一閃！」

響鬼は自分流オリジナルの音撃射を編み出していないため、同じ鬼戦士・威吹鬼の技を使用して清めの音を出す。

「な、ナンダこの風は!?!がああああああああああ!!」

響鬼の音撃管《翔風》から放たれた疾風一閃が刹那を覆い尽くす。清めの音が怨念声刃から放たれる怨念を浄化していく。その余波で怨念声刃を持つ刹那が地面に倒れて苦しむ。

「刹那……」

その様子を見ていた真名は複雑な思いで見ている。

「ああああアアアああ!!こ、コンなモノっ!!!」

攻撃を物ともしないかのようになり、気力で攻撃を耐えようとする刹那。何をそこまでして刹那を駆り立てるのか。必死な形相で怨念声刃に気を送るも、響鬼から放たれる清めの音がそれを無効化してしまう。そして徐々に怨念声刃から黒い波動が消えていく。

「貴様の思い通りにさせるかあ!!」

「!!」

力を振り絞り響鬼に漆黒の翼を広げ、飛びかかってくる刹那。

今の響鬼は技を放っている最中であり、今攻撃を喰らえばもろに食らってしまう。

それに気づいた真名は銃を刹那に向ける。

もう黙ってはいられなかっただろう。既に照準は刹那の頭部に向けられていた。

「(!?)」

それに気づいた響鬼が、真名の攻撃を止めようと技を解こうとした瞬間。

片手で頭を抑えて、錯乱状態になる刹那。自分が守るべき、敬愛する木乃香に自分が最も知られたくない秘密を知られて、堪らず叫び声をあげる。

「み、見られた……お嬢様に……わ、わわ私の醜い姿を……や……ヤツのせいだ……ヤツの」

膝をついて、目の焦点が完全にあつてない状態になる刹那。今の自分の姿を見られて正気をなくしてしまったのだ。そして、焦点のあつていない目で響鬼を見る刹那。

「せつちゃん、どないしたん!?!」

明らかに正気ではない刹那の今の状態に、心配になる木乃香。

「安心して下さいお嬢様……お嬢様に仇なす邪悪な鬼は……私が殺すつ!!」

「せつちゃん……」

今の刹那が明らかに普段見せる態度とは全く違うのに木乃香は恐怖を感じた。昔、一緒に遊んでくれた刹那の面影はかけらも残ってはいなかった。木乃香に言わせれば、響鬼よりも刹那の方が邪悪な鬼に見えた。

そして、再び立ち上がるとフラフラの状態で響鬼に向かっていく。
「……して……ヤル……殺し……やる……」

呪詛の言霊のように、霞む声で言いながら歩く刹那。既に怨念声刃の力は浄化され、しばらくは効力を失っている状態だった。

「桜咲……」

そんな刹那の姿を見て、虚しく思った響鬼。守るべき者が目の前にいるというのに、そこまでして堕ちていく刹那に理解できなかつた。それは、戦友でもある真名も同じだった。

「鬼……貴様の……せいだ……せいだ……
!!!」

ゆっくりと歩き、怨念声刃を響鬼に向けていた刹那が、突然糸が切れた人形のように倒れる。

「せつちゃん!!」

突然、倒れた刹那にそばまでよる木乃香。真名も心配になり、刹那

の近くにいく。

今度は何が起きたのかと、響鬼も行こうとした。

「キャハハハッ！良い物が見れたわねえ」

気高い笑い声を上げながら森の方から現れる人物。和服を着ており、全身が目玉の模様をした趣味の悪い着物を着ているが、見た目は綺麗な女性だった。

「誰だ貴様」

突然現れた人物に、真っ先に銃を向ける真名。

「私にそんな物騒な物向けないでよ………」

「殺されたいの？」

「!!」

最後の言葉を聞いた瞬間、とてつもない殺気を当たられた冷や汗を流す真名。これまでに感じたことのない殺気が真名の体を掛けめぐる。思わず銃を下ろしてしまう。

「(何なんこの人……めっちゃ怖い……)」

そばにいた木乃香も、彼女の存在に恐怖した。

「うんうん。素直な子は好きよ？それにしても、随分と甘い戦いをしてるわね鬼神？」

「!!」

女性が響鬼の方を向き話しかける。鬼神と呼ばれ、反応する響鬼。

「お前一体誰だ……」

出た言葉がこれしかなかった。

「ドウメキ百目鬼。あなたと同じ鬼よ」

「ドウメキ百目鬼……」

百目鬼と名乗った女性の名前に聞き覚えのある響鬼。だが、思い出そうとする前にドウメキが話を続ける。

「さっきの戦い見させて貰ってたけど、何なのあの戦い？本当に鬼神？」

「なんだと？」

「今のアナタならその小娘を瞬殺するのは簡単なんじゃないの？それをジリジリと無駄に時間だけ引き伸ばして。向かってくる敵はズタズタに引き裂いて殺すのが礼儀でしょ？」

ドウメキから放たれる言葉が、普通に人間が出すような単語ではないのに恐怖を感じた木乃香。あんな言葉、ドラマや映画だけの言葉だち思っていたからだ。

「ちよつと待て、戦いを見ていた？どういう意味だ……」

ドウメキの言葉に違和感を感じた響鬼。初めから響鬼と刹那が戦うの知っていたかのような発言だからだ。

「どういう意味って、私がその小娘に鬼神のアンタを殺すように仕向けたのよ」

「!!」

ドウメキの言葉に反応する響鬼、真名、木乃香。

「あ、アンタがせつちゃんをこんなにしたん!!」

怒った声で、ドウメキに叫ぶ木乃香。そんな木乃香に顔向けるドウメキ。

「せつちゃん？ああ、ハーフの小娘のこと。そんなになつたのは結果的に小娘のせいですよ。まあ、そんな状態になったのは最終的に私がしたんだけどお」

「貴様、刹那を操っていたのか？」

「操る？まあ、そんなもんなのかしらね。でも、その小娘。自分が操ら

れているなんて自覚はしてないでしょうけど」

「(自覚がないだと……まさかあの最強幻術) 鬼幻心か!!」

「あら、まさか一瞬でそこまで出るなんて。鬼神は伊達ではないよね」

一瞬で術の正体を見破った響鬼に、若干驚くドウメキ。だが、逆に響鬼の方は驚いていた。

「鬼幻心はもう失われた術のはずだ。それにその術を使えるのは」

「最強の眼《鬼導眼》をもつ鬼戦士だけ。でしょ?」

「……お前一体……」

ますます、ドウメキの正体がわからなくなった響鬼。今いる全国の鬼の中にドウメキなんて名前は聞いたことすら無い。それに全国でも十ともいない鬼導眼の持ち主ともなれば尚更だった。

「さてと、私あんまりおしやべりはすきじゃないから、単刀直入に言うわね。その京都弁のお嬢ちゃんm私と来てもらおうよ」

そう告げた瞬間、木乃香の腕に抱いている刹那が突然眼を覚まし、怨念声刃で木乃香に斬りかかる。

「!!木乃香!!」

「え?きやあつ!!」

それに気づいた響鬼が一瞬で木乃香の元に飛び、刹那の攻撃からかばう。背中を斬られるも、緑黄大鷹の鎧で守られる。そのまま木乃香を抱きしめ、距離を取る。

「ちっ、腕か足をぶった斬ってやろうと思ったのに、使えない小娘ね」

そう言つて、目が虚ろになっている刹那の隣に立つドウメキ。どうやら彼女を完全に操つて、木乃香を攻撃させたのだ。

「お前、木乃香が狙いだつたのか……」

「ええ、そうよ。ついでに言うと。あなたの鬼導眼も欲しいのよ鬼神?」

「鬼導眼だと?何を企んでる……」

「そこまで言うつもりはないわよ。おとなしく両目を抉りとつてくれれば済む話でしょ」

クスクスと笑いながら、その美しい顔から想像もできない言葉が出

てきて、言い知れない恐怖がこの場所を覆う。

「さてと、さっさとそのお嬢ちゃんと鬼導眼を渡してくれない『 Bannon !!』?」

話の途中で、ドウメキの頬を何かがかすめていく。

「べらべらと喋る口だな。私の戦友をそんなにして只で済むと思うなよ。」

話の途中で、銃でドウメキを攻撃した真名。

クールな表情でドウメキに告げるが、内心では怒り心頭だった。ここまで刹那を壊したドウメキが許せなかったのだ。しかし・・・

「余程、消し炭になりたいようね・・・小娘え!!」

そう言っていると、片目が三つ巴の瞳に変貌し、真名にピントをあわせる。

「まさか!」

響鬼はドウメキが何をしようとしているのか一瞬で理解すると、食い止めようと翔風をドウメキに構えるが。刹那がそれに割いるように入る。

「あまで『豪殺・居合拳!!』!」

技を発動した瞬間、ドウメキと真名の間にはすさまじい衝撃が走る。

衝撃で土煙があがり、当たるが何も見えなくなる。

「大丈夫かい誠くん?」

「タカミチか・・・どうしてここが?」

響鬼の隣に降り立ったのはタカミチだった。先ほどの攻撃もどうやらタカミチの攻撃によるものだったようだ。

「龍宮くんから連絡を受けて君たちを止めに来ただけど・・・」

「もう終わった後だ・・・それより、早くアイツを倒すぞ。刹那が操れている」

「刹那くんが?まさか・・・」

「変になってたのはあの女・・・ドウメキって鬼の術だ」

「鬼・・・本当なのかい?」

まさか、この事態を起こしているのが響鬼と同じ鬼が引き起こしてとは思わず驚くタカミチ。今の響鬼の姿の変化も聞きたい所だが、そうも言ってられる状況ではなかった。

「本当も何もあの女が自分で鬼って言ってるんだ。それに・・・」
鬼導眼まで持っているのなら鬼ののはほぼ間違いないと内心思った響鬼。

一方、ドウメキは思わぬ攻撃で、自分の攻撃が止められたのにイライラしていた。

「つたく、一体誰が私の攻撃を・・・こうなったら、ここら一体を吹き飛ばそうかしら?」

そう言いながら、懐から変身音叉《殺戮》を取り出すドウメキ。その時、頭の中に声が響く。

『戻れ、ドウメキ。他の魔法使い達がその場所に集結している』

「!あんだ、どこから見てるわけ?それに他の連中が来た所でどうなるっての。皆殺せば済む話でしょ?」

『予定が変わった。その少女を連れて一旦洋館に來い』

「はあ?あのお嬢ちゃんはどうすんのよ?」

『その少女を連れてくれば、そっちから来てくれるさ』

「・・・了解わかったわよ。ほら行くわよ小娘」

ドウメキの声に従うように、刹那は後についていく。

その時、砂煙の中から響鬼とタカミチ、真名が現れる。

「待て!!どこに行く気だ!」

「もうバイバイの時間ってことよ」

「逃すと思ってるのかい?」

「ええ、逃げるわよ」

タカミチの言葉に反応するかのようには、右手に持つ札を見せると足元に魔法陣が浮かび上がる。

「(あれは転移魔法符!?)」

ドウメキの持つ札の正体に気づいた真名。魔法界でも高値で売られている転移魔法符。なぜ、魔法とは無縁のはずの鬼が持っているのか。

「待って!せつちゃんを連れてかんといて!」

それを見た木乃香は、悲痛な叫びをあげる。刹那は木乃香の事など無視してドウメキについていく。

「愛しの剣士様を取り戻したかったら、自分で来ることね。お・姫・様？」

そう告げると、ドウメキと刹那は魔法陣の中へと消えていった。

「せつちゃん……」

刹那を連れて行かれ、その場でへたり込む木乃香。

「木乃香……」

そんな木乃香を見てることしかできない響鬼であった……

第二十五ノ卷 《魔法と鬼の道》

3月20日（金） 16：10

麻帆良学園都市 エヴァンジェリン宅

すでに時間は夕方になりつつあるこの時間に、この家に住んでいる誠が1階のリビングのソファで寝転んでいた。本当ならこの時間は、学園にまだいるはずの魔化魍《オオアリ》を探索しなければならないといけないのだが、二日前に起きた事件の裏で、同じく鬼である源道賢二《ゲンキ》がオオア리를倒したのだ。

概要はゲンキから聞かされたが、図書館島でちょっとした事件があり、2年A組の図書館3人娘《ハルナ、のどか、夕映》、ゲンキ、ネギが地下空間に入ってしまった、一時遭難状態に陥ったとのこと。その際に、オオアリがその場に居合わせ、襲われてしまうが、ゲンキが鬼に変身して倒したというものだった。（その際に、居合わせた3人の記憶は学園側の指示で忘却呪文により消されたとのこと）

「ネギ……」

責任感の強いネギは、恐らく自分を追い詰めているのではないかと心配になる誠・

「ヒビキさん」

「ゲンキか……」

階段から降りてきた賢二。両手には水の入った桶とタオルが入っていた。

「エヴァの様子はどうか？」

「熱は引いたみたいです。茶々丸さんが持ってきた薬が効いたみたいですね」

そう言つて賢二はそのまま台所まで歩いて行き、桶に入った水を流す。

今朝からエヴァンジェリンの具合が悪く、茶々丸の診断では風邪とというのがわかり、2階の自分の部屋で療養していたのだ。今、現在茶々丸がメンテナンスで外出しているため、居候のみであるゲンキが看病していたのだ。

「でも、吸血鬼も風邪を引くんですね」

桶を洗いながら、自分が思った疑問を言う。

「エヴァは封印されている状態だと、10歳の女の子と変りないそう
だ。この前は花粉症にかかってたしな」

「そうだったんですか・・・あ、そういえば、エヴァさんからリクエ
ストです」

台所からリビングに戻ってきた賢二がメモらしき紙を取り出す。

「リクエスト？」

「『おかゆを持ってこい。味付けは卵がいい。勿論、下で暇してる誠に
作らせる』だそうです」

そう言って、紙に書いたメモを誠に渡す賢二。

「別に暇してるわけじゃないのにな、しかも味付けまでリクエストか
よ」

そう言いながらも、賢二と入れ替わる形で台所に向かう誠。賢二は
そのまま誠が寝ていたソファアに座る。

ふと机の上を見ると、一枚のディスクアニマルと折れた音撃棒・烈
火が置かれてあった。

「ヒビキさん、音撃棒は・・・」

「大丈夫だ。今回はそのディスクアニマルに助けられたよ。さすがみ
どりさんだ。まさか、空を飛べることができるとはディスクアニマルを開
発するなんてな」

そう言って、緑黄大鷹の力によって、形態フォームチェンジ変化した事を話す誠。し
かし、賢二が気にしているのはディスクアニマルもそうだが、音撃棒・
烈火のことだった。

「この烈火は、ヒビキさんの師から受け継いだ大事な物じゃないです
か」

賢二はこの烈火が先代の響鬼が使用していた音撃棒だと知ってい
た。それが、刹那との戦闘で砕かれてしまい、音撃棒としての役目を
果たせなくなっているのだ。そして何より、誠はこの音撃棒には思い
入れがあったから、尚更、賢二は心配になったのだ。

「形あるものはいずれ壊れる。それに音撃棒は武器なんだ、壊れるの

は必然だろ。元から色々ガタが来てたからな、一回作りなおす必要があったからな」

「ヒビキさん……」

「大丈夫だって、いざとなればそこらへんの木を使つて修理するさ」

と笑いながら誠は言うが、この音撃棒・烈火に使用されたのは霊木と呼ばれる屋久島にしかない樹齢数千年と言われる縄文杉の木を使用して作られている。一番しつくり来るのがこの木を使用した音撃棒であり、他の木では上手く清めの音を出すことができるのだ。

「(鬼石を使わず、音撃を体から発することができればな……)」

いずれにせよ、今の誠が鬼として使用できる武器は響鬼・翔状態の翔風だけである。元々、得意分野は音撃棒なため、早めに解決しなければいけない。

そう思っていると、玄関の扉が開き、入ってきたのはメンテナンスで外出していた茶々丸だった。

「おかえりなさい茶々丸さん」

「ただいま戻りましたゲンキさん。すみません、少し時間がかかってしまいました。マスターの容態は？」

会釈して、室内に入る茶々丸。

「大丈夫ですよ。茶々丸さんが持ってきた薬がよく効いているみたいです。今はヒビキさんがエヴァさんにおかゆを作ってる所ですから」

「そうですか、新藤先生には感謝しなければいけませんね」

「別にいいぞ茶々丸。エヴァが俺を指名らしいからな」

ひよいと台所から顔を出して話す誠。

「それより、大丈夫だったのかメンテナンスの方は？」

「はい、おかげ様で問題はありませんでした」

「そうか、よかったな」

何もなかった事に笑みを浮かべた誠。そのままおかゆ作りの方に戻る。

「手伝います新藤先生」

「そうか？なら……」

おかゆは10分も立たず出来上がった。

「ふうく、ふうく・・・ほら」

「あむ・・・冷たいぞ」

「なら、自分でやってくれよ」

「居候の分際で態度がでかいぞ貴様。私は病人であり、この家の主だぞ？」

「はあ・・・そうだったな。俺が悪かったよ。ほら！」

「!!びやかかもによ!!あひひゆいいではないやいか!!」

おかゆが出来上がってすぐに、エヴァの元に向かった誠。渡して退散しようとしたが、エヴァに止められ『ダルい、食わせろ』と言われて、しぶしぶ食べさせているのだった。

「うう、舌がヒリヒリする」

コップに入った水を飲み、舌を冷やすエヴァ。

「だから、自分で食べた方がいいって言っただろ。俺ならこれくらいは十分だがな」

「くつ、どうやったらそんな熱いおかゆが食べられるのだ」

「俺は熱いのが好きだからな」

「素晴らしいながらおかゆを食べようとする誠。」

「それは私のだぞ」

「冗談だよ。で、俺に何か用があるのか?ゲンキや茶々丸を下に追いやってまで」

「ふん、大方昨日のことですてくされているのではないかと思つてな」
誠からおかゆを奪うと自分で食べ始めるエヴァ。昨日のこと言われて、眉が反応する誠。

「別にふてくされてない。ただ、これから色々面倒な事になっていくのを考えていると、どうもな・・・それに、俺もこの学園じゃあ大分肩身が狭くなったなって思つてな」

昨日、刹那やドウメキの件で学園長から招集された誠。二人だけで状況の確認と検討をするはずだったのだが、どこから聞きつけたのか学園の魔法使い達が現れ、今回の騒動の発端は全て誠が招いた結果だ

と言ったのだ。

『わかってしているのか！貴様のような鬼がほいほい入るから今回のような事件が起きたのだ！』

『学園長もこれでわかったでしょう！この鬼が学園にいただけで、迷惑になるのだということをして！』

『落ち着かんか。今回の事件の発端が誠くん一人で起きたというのは余りに軽率すぎるぞい。じゃからこうして彼と今後の検討をしておったのじゃ』

『今後の検討なら我々とすればよろしいでしょう！桜咲くんがさらわれて我らも気が気でないんです。それに今回の事件を起こしたのが、鬼と聞きましたよ！』

『我々としては、この鬼が学園に招き入れたのではないかと判断している所ですよ』

『じゃから、その考えが軽率だと言っておるではないか!!』

『学園長、構いません。確かに今回の事件は桜咲を止めきれなかった責任は俺にあります。敵が鬼であったという事実も変わりはありません』

『誠くん……』

昨日の件を思い出す誠。

「ふん、貴様もわかっただろ。この学園に蔓延る正義に溺れた哀れな魔法使い共を」

「正義だとか何だとか言ってる場合じゃないだろうに。それに、今回の件で猛士も麻帆良学園を黙認できない事態になっただろうな」

「桜咲刹那が使用していた武器の件か……」

エヴァの言葉に相槌をうつ誠。刹那が使用していたゴーストセイバー怨念声刃。

「ああ、本部にいる鬼威吹鬼に確認して分かった。あの武器は盗みだされた物だとな。それで、今回持っていたのが学園に属している桜咲だった」

「つまり、貴様ら猛士の連中は麻帆良学園の関係者が襲撃に入ったと考えているわけか？滑稽だな。麻帆良は鬼、猛士は魔法使いの性にし

ているわけだな。くくくつ」

何か面白いのか笑みを浮かべるエヴァンジェリン。誠も、なぜエヴァンジェリンが笑っているのか想像がついていた。

「何も今すぐどうこうなどしてないだろ。それにお前にとってもどうなろうと知ったことじゃないんだろ？」

「わかってるじゃないか」

「いやでも、わかるよ。お前の性格からしてな。さて、俺はもういくぞ。全部食べたらまた呼んでくれ。皿取りに来るから」

そう言つて、椅子から立ち上がり扉の前に歩いて行く誠。そんな時、部屋から出ていこうとする誠にエヴァンジェリンが話しかける。

「それより、早く私を封印している精霊共をさっさと倒して欲しいものだな」

「ネギが頑張つて封印を解いてくれるだろ」

「今のぼーやでは、100年はかかってしまう。貴様が精霊を倒して貰った方が早そうだからな」

「ネギなら、すぐに解いてくれるさ」

「……私はまだ待つのはつかれたのさ」

そう言つて、珍しく顔を落とすエヴァンジェリン。熱の影響なのか、はたまた別の理由なのか。

「エヴァ……」

「ふん、さっさと下に行け。邪魔でおかゆが食えないだろ」

「なんだそりゃ」

すぐにいつものエヴァンジェリンに戻るのであった。

麻帆良学園都市 世界樹前広場 17:20

世界樹前広場の大階段に座っているネギ。周囲は夕日の光で朱色に染まっていた。

徐ろに顔を伏せて、何か考え事をしているようだ。

刹那が謎の鬼に誘拐されてしまったこと……

魔化魍に対して、自分が余りに無力であったこと……

それとも、自身の担任としての責任を感じていたことなのか。

僅か一日で起きてしまった事件に、色々こんがらがり、気持ちの整理がまだできていなかった。

「……………はあ」

そして、出てきたのがため息。まだ10歳にも見たないのに、重いため息だった。

既に17:00を過ぎており、本来なら明日菜と木乃香の部屋に帰り、書類などをまとめなければならぬが、部屋には昨日から塞ぎ込んでいる木乃香がおり、どう接していいかわからなかった。担任として、何かしてあげなければならぬはずなのだが、今のネギには何をそうすればいいのかわからなかった。

「ネギ、何やってるのよ？こんな所に塞ぎ込んで」

「明日菜さん……」

そんな時、後ろから声を掛けてくれたのはちょうど夕刊を配っている途中の明日菜だった。

「帰ってもいないからどこにいるかと思ったらこんな所にいたのね」

そう言つて、ネギの隣に座る明日菜。

「すみません、何か色々な事が起きて、気持ちを整理してたんですけれど。中々、收拾がつかなくて」

「もしかして、桜咲さんや木乃香、本屋ちゃん達の事？」

「……………はい。僕は彼女達の担任の先生なのに、何も出来なくてただ見てることしか出来ませんでした」

「でも、結果的に本屋ちゃん達は助かったんでしょ？」

「そうですけど、助けたのは僕じゃありませんし……………」

「誠先生と同じ鬼の人？」

「はい、ゲンキさんって言う鬼でした。とても強くて、手も足も出なかった魔化魍を一撃で倒してくれました」

そう言つて、一昨日の件を言うネギ。その時の自分が不甲斐ないの

か、思わず手に力が入る。

「でも、魔化魍は鬼にしか倒せないって言ってたじゃない」

「それは・・・そうですけど。でも・・・」

「どうにも、納得できないのか、考えこむように塞ぎこむ。」

「アンタ、まさか『生徒も守れない自分はダメだ』とか思ってるんじゃないでしょうね?」

「ど、どうしてわかったんですか!？」

「今、まさに自分が思っていることを言われて驚くネギ。まさか明日菜は読心術者ではないかと一瞬疑うネギ。」

「そんなのわかるわよ。普段のアンタを見てたらね」

「あははは。明日菜さんには叶いませんね」

「それ、どういう意味よ?」

「え!?!別に深い意味は・・・」

「何よ深い意味って!」

「いだだだだ!頭をぐりぐりしないで下さい!」

「そう言つて、明日菜は再び夕刊の配達に戻る。ネギもついていくことになり、二人並んで麻帆良学園都市の住宅街を歩いていた。」

「そういうえば、ネギはどうして魔法使い目指してるんだっけ?やっぱ事前に言つてたお父さんの影響?」

「え、ええ。そうでしたね」

「明日菜の質問に歯切れが悪く返事をするネギ。その対応に不思議に思った明日菜。前にネギの口から、英雄とまで言われたネギの父親に影響されて魔法使いになり『偉大なる魔法使い』を目指しているのを。」

「僕は・・・優柔不断なのかも知れません」

「え?」

「夕刊をポストに入れ終わると、急に意味深の発言をするネギに思わず首をかしげる明日菜。」

「自分で自分を偽ってきた、最近ちよくちよく思ってたんです」

「ど、どうしたのよ急に?」

「ちよつと、聞いてもらつていいですか?」

「いいけど」

急に真剣な表情で話かけてきたネギに、少しドキツとする明日菜。ちやうど夕刊も配り終えたので、ネギの話聞くことにした。二人は近くに公園により、ブランコに腰をかける。

「僕はお父さんの顔は知りません。生まれてから一度も、周りの皆は死んだって言ってました」

「でも、あんたのその杖はお父さんのなんでしょ？どうやって貰ったのよ？」

ネギがいつも肌身離さず持っている魔法使いの杖。その杖はネギの父親のナギが使用していた杖であり、明日菜はナギからネギに渡ったものだと思っていた。

「この杖は、僕がまだ4歳だった時に、ヒビキさんから頂いたんです」
「ひ、ヒビキさんって誠先生から!？」

まさかのヒビキという名前に驚く明日菜。だが、ネギは慌てて顔を横に振り否定する。

「ち、違いますよ！先代のヒビキさんですよ。お兄ちゃんの前のヒビキです」

「せ、先代？ヒビキさんは誠さんで、そんなもって前のヒビキさんが……?」

脳味噌がフリーズしてしまい、混乱する明日菜。そんな明日菜にネギがわかりやすく説明する。

「えっとですね。今いるヒビキの名を持っているお兄ちゃんは、先代に名乗っていたヒビキって言うコードネームを引き継いで名乗ってるんですよ」

「つまり、今の誠先生のヒビキって名前を、前に名乗っていたヒビキって鬼の名前を受け継いでるって事？」

「そうです」

落ち着いて思考を張り巡らせ、理解した明日菜。まだ、あやふやな部分はあるが。

「じゃあ、その杖を貰ったのは昔のヒビキさんから貰ったっていう意味？」

「はい、昔、僕の村が魔化魍や魔族に襲撃された時に助けしてくれたんですよ」

「はあ!？」

再び、衝撃の発言に驚く明日菜。そんな話を一度も聞いたことがなかったので、余計に驚きを露わにする。ネギもしまったという顔をして、慌ててごまかす。

「ちよ、ちよつと、それどういう意味よ!アンタの生まれ故郷襲われたの!？」

「ちちち違いますよ。冗談ですよ、冗談。あははは」

「なあんだ冗談なの?でも、今結構マジな顔をしてたわよ」

「そ、そうですか?」

明日菜の頭が単純なのか、すぐにネギの冗談を真に受ける。

「(つて、そんなわけないでしょ。本人もうっかり発言みたいだし、あんまり追求するのは可愛そうだし。ネギが自分から言ってくるのを待つしかないわよね)」

だが、明日菜は嘘だとわかっていた。ネギの慌てぶりから見ても、あまり追求するのは酷だろうと思いついて、ネギの冗談に乗ることにしたのだ。襲撃という物騒すぎる言葉が出て、色々聞きたいことはあった。「えつと、なんだっけ?」

「その、前に先代のヒビキさんが僕が住んでいた村に訪れた時にこの杖を渡してくれたんです」

「へえ、でも何でその人(?)がお父さんの杖を持っていたのかしら」

ナギと鬼を繋ぐものが全くわからないので、検討のしようもない。

「なんでも、昔お父さんから渡されたらしいって言ってましたね」

ネギが、その時間いた内容をそのまま言う。深い理由まではネギは聞いていなかったし、当時そこまで聞く余裕がある状況ではなかったのだ。

「なら、誠先生に聞いて、その先代の人に聞けばいいんじゃない?」

「あ、それは『もうこの世にいない』」

明日菜の質問にネギが答えようとした時、どこからか声がする。気づけばブランコのすぐ目の前にビニール袋を下げた誠の姿があった。

「お兄ちゃん！」

「いつのまにいたんですか？」

いきなりの登場に驚く二人。

「さっきだよ。ちょうど二人の姿が見えたから寄ったんだよ」

そう言つて、ネギの隣に空いているブランコに乗る誠。そして、先ほど明日菜が聞こうとしていた話を続ける。

「先代の響鬼は5年前にこの世を去っている」

「お兄ちゃん……」

「あの、すみません」

「別に謝ることはないさ。いきなり現れた俺が悪いんだから」

不味いことを聞いたなど思い謝る明日菜に、軽く促す誠。

「ネギ、自分に罪悪感を抱かなくていい。誰だつて失敗はあるし、物事がスムーズに行くなんて思つてない」

「でも、僕は自分の生徒を守れなかった。前も木乃香さんや明日菜さんが魔化魍に襲われた時も、最後はお兄ちゃんが来てくれなかったら」

「ネギ……」

以前、ツチグモの姫に襲われた時の事を話す。あの時も、最後は誠が駆けつけてくれたのでなんとかだったが、来てくれなければ全員殺されていたのかもしれない。

「あまり自分を責めるな。前も、今回もそうだがネギの援護があったから魔化魍を倒すことができたんだ。自分にもつと自信をもつていい」

「でも……」

誠の言葉を聞いて、まだ多少は自分の性だと思ふネギ。

「ネギがまだ小さい時に、前にも言ったな『強くなるなら、自分を鍛えるしかない』つてな。今の自分に不満があるなら、鍛えるしかない。努力は決して裏切らないし、何より自分を強くしてくれる」

「でも、どうすればいいのか……」

「一人でやれることには限界がある。誰かを師事に持つのが一番いいかもな。今のネギには」

今のネギには、誰か師についてやり、導いていく必要があるのではないかと思う誠。誰しも、教えを受けて初めて自立し、技術を磨くもの。それが魔法だろうが、なんだろうがそれらは全て共通するもの。独学でも身につけてる者でも、色々な人から技術を盗んでいく。誠も師を持ち、鬼へとなったのだから。

「それってお師匠を持つってことですか？」

「ああ。それが一番いいと俺は思う。今の自分の状況に痛感しているネギなら尚更だと思うし・・・悪い少しお節介だったか？」

少し、余計なお世話だったかなと思いい、苦笑いする誠。あんまり柄じゃない事を言って、若干恥ずかしかったりする。

「ううん、お兄ちゃんの言ったとおりだよ。今の自分を変えるには、誰かを師にもって初心に帰る時なんだと思う。最近、痛感したんだ。魔法だけじゃなく、色々な事を学ばないといけない。僕は先生として生徒を守らないといけないんだって」

「でも、師に持つって一体誰に教わる気なのネギ？」

ふと、素朴な疑問を浮かべる明日菜。明日菜もこの学園にどれだけ魔法使いがいるかは知らないが、誰を師に持つかが気になった。

「魔法なら、エヴァンジェリンがいいんじゃないのか？」

「エヴァンジェリンを!?だ、大丈夫なんですか!？」

確かに最強クラスであるエヴァンジェリンを師に持てば力がつくのは確かではあるが、もとより性格が色々アレであるため、明日菜は心配になる。というかゲームで例えるなら、ラスボスを倒すはずの勇者がラスボスに弟子入りを御願いをするも同然でもある。

「多分、大丈夫だろ。まあ、最後はどうなるかはわからないが・・・」
「誰を師に持つかは僕が決めるよ。でも、エヴァンジェリンさんに弟子入りは考えてたよ」

「本気なのネギ? エヴァンジェリンさんって、アンタのお父さんとか恨んでたんじゃないの?」

「わかってます。でも、エヴァンジェリンさんは根は悪い人じゃないって思ってますから」

一度命を狙われたことがあるのに、エヴァンジェリンを信じると言

うネギ。まあ、実際は根は悪ではないのでネギの言ってることは合ってるといえは合っている。

「でも、その前にどうしても師に持ちたい人がいるんだ」

「誰だ？」

誠がそう言うのと、ネギは立ち上がり誠の前に立つ。そして

「お兄ちゃん、いや『響鬼』さん。僕を弟子にしてください！」

突然の弟子宣言に思わず固まる誠。隣にいた明日菜もネギの言葉に驚いていた。そして、すぐに冷静な表情になる誠。

「それは、鬼になりたい・・・そういうことと受けていいのか？」

「うん、そう受け取って貰って構わない」

誠も立ち上がり、ネギに対面するように向きあう。今までに見せたことない厳しい表情に、明日菜は思わずつばを飲み込む。ネギの方も、本気と言った表情で誠を見る。

「確かに、お前には才能もあるし、努力家だというのも承知している。それにお前が鬼になりたいっていう夢を持つてるのも知っている」

「(え、そうなの?)」

明日菜も知らない事実を聞き、顔には出さないが心の中で驚く明日菜。話が飛びすぎてついていけないのだ。

ネギも別段、誠に指摘されて驚く様子はない。

「だか、お前は魔法使いだぞ？鬼になれば、魔法協会から白い目で見られるし、正直猛士もお前が鬼になると聞けば、黙ってないだろ。特に今の状況ならばな」

ネギは英雄《ナギ》の息子であり、いわば魔法界の期待の星でもある。そんなネギが鬼になり、猛士に鞍替えしたと知れば、黙っているわけもない。勿論、魔法使いを余り快く思わない猛士も同じでもある。鬼の力を魔法使いが手に入れたと知れば、此方も黙ってはいないだろう。そして、今の状況、魔法使いと猛士はにらみ合いが始まるうとしている。

そして、何より誠の立場も悪くなるは明白。まだ、弟子をとったこ

とのない誠が、最初の弟子が魔法使いと知られば、誠の立場も悪くなってしまうからだ。

最も、誠が心配してるのは自分のことよりネギのほうだが。自分は別段悪くなるうが構わないと思ってる。

“元から猛士の一部は誠の事を快く思っていない連中もいるのだから”

「状況が状況だ。今は桜咲を救出する方を優先したい。正式な弟子になる話は保留でいいか？」

「うん。僕もすぐに答えがもらえとは思ってなかったから。今は刹那さんを取り戻さないと、木乃香さんがずっと悲しんだままだからね」

まだ、大きな問題。連れされた刹那を救出しなければいけない。大事な生徒であり、何より木乃香の大切な友人でもあるから。

「戦い方なら、教えてやるよ。俺はちゃんとした型はないが、みよう見まねでだが」

「わかった。それだけでもうれしいよ」

「ところで、誠先生。そのビニール袋なんですか？」

「エヴァから頼まれたアイスクリームだ。冷たいのが食べたいとか言ってるな（そして、なぜか俺指名）」

「でも、これ溶けてるんじゃないや・・・」

「本当だ・・・」

山梨県富士河口湖町近郊富士箱根伊豆国立公園《青木ヶ原樹海》

?? : ??

外界の人間の侵入を拒むように深く森が生い茂る森《青木ヶ原樹

海》もしくは《富士の樹海》とも呼ばれている。本来なら、観光地として有名であり、周りには富士山を囲むように西湖、精進湖、本栖湖等の湖があり、森林浴にはぴったりの場所であるが、この場所は《自殺の名所》や怪現象でも有名な場所でもある。

そして、“魔化魍”の異常形態の確認される場所でもある。そのため、ここ数年は猛士を通して日本政府内閣府はこの樹海への出入りを禁止にしている。それほどまでにこの樹海は危険があるのだ。この樹海に入れるのは政府に許可されたものか、猛士に所属する者だけである。

そんな誰もいないはずの森に、黒装束を纏い、メーターのような杖を持つ男性と彼にひざまずくように構える二人の男女。その後ろにはまるで合成獣キメラのような様々な魔化魍が合体したような怪物がいた。

「もうまもなく、又エは完全体になります」

「もう少し、お待ちください」

二人の男女はそれぞれ正反対の声色を発し、謎の男（黒）に報告する。すると、謎の男（黒）は懐から何かの塊を取り出し、二人の男女の喉奥に押し込める。

二人の男女はうめき声を上げながら、凄まじい気を出していく。

「もう、まもなく完成する。この合成魔化魍が成功すれば、次は本格的に動く事ができる」

謎の男（黒）の見つめる先にいる合成魔化魍《又エ》が怪しく眼を光らせていた。

新たな脅威の誕生は麻帆良学園だけではなかった。

悪鬼出現編

—完—

第四章 《漆黒の樹海編》 第二十六ノ巻 《猛士臨時調査隊》

3月26日（水） 10：20

東京都葛飾区 甘味処《たちばな》及び猛士関東支部 地下室《猛士の間》

「調査任務？」

関東支部の地下に設けられている鬼達の司令部《猛士の間》にて、何やら会議を行っている関東支部の面々。

支部長である、立花勢地朗が今朝方、総本部からの連絡を話していた。何かしらの調査を依頼らしく、話を聞いたシュウキが質問した。

「ああ、総本部から緊急の伝達でな。山梨県の青木ヶ原で未知の魔化魍が現れたらしくてな」

「未知の魔化魍に青木ヶ原。もう青木ヶ原ってだけで既に悪い予感はあるんっすけどね」

青木ヶ原が元から、とんでもない地であることを知っているトドロキは悪い予感しか思い浮かばなかった。魔化魍以前に、ここ数年で森の雰囲気人が寄せ付けない暗黒の世界になっているからだ。

「それで、その未知の魔化魍ってなんなすか？」

未知の魔化魍と聞き、今日は珍しく席に参加している音撃戦士・弾鬼が勢地朗に質問する。ちなみ親友の音撃戦士・勝鬼も揃ったの参加だ。

「地元のサポーターの話だと、その魔化魍は今までに見たこともない魔化魍だったそう。村に突然襲撃してきたらしくてな、そのサポーターも重傷を負って入院しているんだがな」

「昨日のニュースで言った、壊滅した村ってその村だったんですか」
昨日の昼時にあったニュースの内容を思い出すシュウキ。昨日の今朝方から昼にかけて青木ヶ原樹海近郊の村が壊滅的被害を受けた報道があり、原因は不明。死傷者が何人も出ているというニュースで全国的な放送でもあった。だが、魔化魍のしわざなら政府が何かしら

の情報操作で原因を不明にしてるのだろうと思ったシユウキ。

「既に死者も出ている。総本部からの要請でもあるが、直接日本政府からの要請でもあるんだ。既に村周辺から数キロは警察によって封鎖されている。あの付近に入るれるのは我々、猛士の人間だけだ」
「うーん、大方の事情はわかりましたが、青木ヶ原の周辺なら担当は東海支部の鬼達の範囲じゃないですか？」

シユウキが具体的な目的はわかったこと言うが、なぜ関東支部の鬼達をと思った。勿論、行きたくないわけではなく、単純な質問だった。被害が更に大きくなる前にその未知の魔化魍を倒したいのは皆同じだった。

「タイムリングが悪いというか、ヒビキが今いる麻帆良学園で事件があったのは前に伝えたな？」

「あの盗まれた武器が、魔法使い側が所持してたって話ですか？」

「あれ、俺が聞いた話だと京都の神鳴流剣士が所持してたって聞いたっすよ」

先週に麻帆良学園で起きた事件の話をする勢地朗。既に各支部にはその話は伝わっており、上層部はかなり深刻な問題にしているのだ。猛士が封印している武器を使用していた。この内容だけでも十分問題であり、更にそれを影で操っていたのが鬼であるという話だ。情報不足もあり、まだ総本部も状況をつかめていないが、総本部の立場としては、魔法使い側が糸を引いていると考えている。逆に魔法使い側は猛士が事件の糸を引いていると考えており、にらみ合いの状態になっているのだ。

更に、悪いことにそれを使用していたのが京都神鳴流の剣士という事がわかり、京都神鳴流からも睨まれるというややこしい事態にまで発展しているのだ。

「京都から近い総本部、関西、東海支部は今も厳戒態勢を敷いているらしい。ないとは思うが、念の為に襲撃に備えてな。人手を遠くには派遣できないそうなんだ。特に東海支部はな」

「確か、佐久島に現れたバケガニとヨブコ、そのほかの魔化魍の退治でしたよね」

前に東海支部にいる猛士のメンバーから話を聞いていたシヨウキ。「ああ、かなり厄介な敵だからな。数人の鬼達が現地で活動をしているんだ」

「最近、島に現れる魔化魍が増えてますからね。俺もこの前、八丈島に行ったばかりですからね」

東京の南海上287kmに離れた位置にある八丈島。そこに現れたツチグモを退治し、つい2日前に帰ってきたダンキは漏らす。

「まあ、ともかくだ。向こうの問題もあるが、今は青木ヶ原樹海にいる魔化魍の調査及び退治が先決だ。それで、向かってもらうメンバーなんだが」

そう言うと、既にメンバーが記載されたリスト表を出した。

「あれ、もう決まってるんですか?」

「いやな、既に総本部がメンバーを選出しているんだ。関東支部からはシユウキ、お前が選ばれている」

「俺ですか?」

名前を呼ばれて反応するシユウキ。自分は呼ばれないだろうと思っていたからだ。

「え、まさかシユウキくん一人ってことないっすよね?」

シユウキしか名前を呼ばれなかった事が疑問に浮かぶトドロキ。てつきり自分が行くのかと思っていたりしていた。

「恐らくはシフト表から適任者を選んだんだと思う。他の鬼は今現在、海外遠征組が二人いるから、他にフルで動いているメンバーで今、比較的シフトが空いているシユウキが一番動きやすいと考えたんだと思うんだがね」

「俺たちもシフトは開いていますよ。シヨウキ共々」

「俺たちもそれに同行させて貰いたいですよ」

納得がいかなかったのか、調査隊のメンバーに入れてほしいと頼むダンキとシヨウキ。

「お前たちは二人は遠征に行ってもらおうから」

「え、遠征・・・?」

「ああ、小笠原諸島父島」

「はあああああああああ!!」

いきなりの遠征の話に、驚愕する二人。しかも、場所は日本の最南端にほぼ位置する島國小笠原諸島。ちゃんとした東京都に属する町であるため、れっきとした関東支部の管轄地である。

「よかったじゃないですか。小笠原といえは海亀肉やマンゴーパツシヨンフルーツ、グアバを使用した酒なんか有名ですよ」

「素晴らしい知識ありがとうシユウキ。でも、おやつさん。この前も八丈島に行ってきたばっかで、またすぐに遠征って言うのは……」

「鬼としての使命だ。早く倒せば観光とかできるだろ」

「いや、観光はうれしいですけど……」

まさかの遠征任務に微妙に納得していない二人。

「それと今回は一人同行者がつくことになってるんだ」

「え!? 誰ですか!! (可愛い子ちゃんか?)」

ダンキがなぜか食いつく。男二人で遠征なんて、なんと花のない話だと思ひ、勝手に美人の女性でも同行させてくれるのかと勝手に思うダンキ。

だが、その思ひは一瞬で崩壊する。

「この私だ!!」

「!?!?!」

階段から声が響き、慌てて声の方を振り向くと

「いいいいいいいい!! こ、小暮さん!?!」

なんとそこにいたのは、総本部の開発局に所属する。間違ひなくこのメンバーが恐れる人物《小暮耕之助》がいた。

「全くお前たち二人ときたら、自分が鬼であるという自覚がないのか!」

「いや、自覚はあるんですけど……」

「それに、なんで小暮さんが来るんですか?」

「何? 私が行ったら、何か悪いことでもあるのか?」

「いえ、何もありません!!」

二人揃って返事をする。

「おやつさん、どうして小暮さんが?」

とはいえ、本当になぜ彼ほどの重役が小笠原に向かうのか気になったシユウキ。

「なんでも、新型音撃武器の為に小笠原に向かうそうだ」

「新型ですか？」

「そうだ、私が作り出した最高の武器《装甲声刃》を超える傑作だ。そのためには、自然界にある特殊な波動を浴びせる必要があるんだ。日本には自然豊かな場所は日に日に減ってきている。そこで私が眼につけたのが、小笠原諸島だ。広大な海に囲まれ、希少な木々や動物達に囲まれている。あの島はいずれ世界遺産に登録されるだろう」

演説染みたように言う耕之助。途中から小笠原諸島を褒めることを言っているが。

「まあ、詳細については完成したら伝えるさ。今日ここに来たのは私の同行に参加するお前たち二人を鍛え直すために来たのだ」

「はい!？」

耕之助の発言に驚く二人。

「俺達、十分鍛えて・・・はっ、まさかまた俺たちを実験台にするんじゃない・・・」

数年前に装甲声刃の実験台にされて、ひどい目にあったダンキ達。まさか、またあの惨劇(笑)がよみがえるのではと思ったダンキとシユウキ。そう思った二人は逃げるように、地下室から去って行く。

「俺たち、用事を思い出したんで帰ります!日程が決まったらまたご連絡を。それじゃあ!!」

「シユウキがんばれよ!!」

「待たんか馬鹿者共!!」

逃げるように去る二人をどこから出したのか警策を取り出し、二人を追いかける耕之助。

「よかった、あのひとに何か言われるんじゃないのかと心配したつすよ」

そう言っつて、安堵の声をだすトドロキ。トドロキも耕之助の事は今でも多少苦手なのである。

「あの、所で調査隊なんですけど、他には誰が・・・」

「ああ、そうだったな」

話が途中で飛んでしまい、耕之助の登場というハプニングがあり、話の路線を戻す。

「東海支部から煌鬼キラメキくん、それから北陸支部に派遣してる鳴鬼メイキが調査隊のメンバーに選出されている」

「伝説の戦鬼の名を継ぐ鬼が参加つすか。優秀なメイキくんやシユウキくんも参加とは、本格的な少数精鋭って感じつすね」

「俺、そんなに優秀じゃないですよ」

「またまた」

恥ずかしがるシユウキを茶化すトドロキ。まあ、本人もまんざらでもないって表情をしているが。ちなみにトドロキも立派に戦鬼の名を継いでいるのだが。

「それから、ヒビキが臨時招集で参加することになった」

「(マコツチが?) それは、本格的に精鋭ですね」

現・鬼神の響鬼、伝説の戦鬼の名を受け継ぐ現代の煌鬼、関東屈指の実力者の衆鬼、鳴鬼の計4人の鬼戦士の調査隊。このメンバーだけでも、とんでもないドリームメンバーでもある。

「調査は明後日から始める。集合場所は静岡県富士市の新富士駅だ」

そう言つて、詳細が記された紙を渡す勢地朗。

「頑張るつすよシユウキくん!」

「わかりました。俺がいない間、弟の面倒御願いします」

「わかつてるつすよ」

調査隊メンバーの一人、嘉納シユウキこと衆鬼が動き出した。

新潟県新潟市のある場所の旅館《鬼童楼》兼 猛士北陸支部 1

7:10

和風で作られた古風漂う立派な旅館《鬼童楼》。ここは表上は旅館として建てられているが、裏では猛士《北陸支部》としての機能を併

せ持つ旅館でもある。

そして、現在この北陸支部に関東支部から派遣されている鬼《鳴鬼》の姿があった。

「俺が調査隊のメンバーにですか！いや、是非行かせて下さい！キラメキさん、シユウキさんやヒビキさん達と一緒にに行けるなんて最高つスよ！」

先ほどの青木ケ原調査隊のメンバーの話を持ちでシユウキから話を聞いている鳴鬼。本名は天宮鳴矢。ヒビキの後輩的な立場であり、直接師弟関係はないが、ヒビキ達を尊敬している人物。

「でも、青木ケ原樹海って、ヒビキさん大丈夫なんですか？ヒビキさんああいう場所苦手なんじゃ・・・」

『大丈夫、大丈夫！マコツチは時と場合は考えるよ。多分！』

「多分っスか・・・うくん、もしもの時が俺たちが勇気づけられないといけないっスね」

何気にヒビキ（誠）の事を馬鹿にしてるように聞こえるが、メイキが響鬼を尊敬しているのは本当である。

「ともかく、調査隊の件了解したっス！先輩方に遅れを取らないように全力で望ませてもらいます!!」

新たな音撃戦士・鳴鬼。雷を操り、魔化魍を倒す彼が果たしてどのような闘いを見せてくれるのか？

埼玉県麻帆良市麻帆良学園都市 エヴァンジェリンのログハウス

18:20

「まさか、キラメキの方から電話が来るなんてびつくりだよ」

『まあ、ヒビキに電話かけるなんて滅多に・・・いや、今回が初めてなものな。いつも、公衆電話とか、ディスクアニマルで連絡とってたからな』

ログハウスの外で、意外すぎる人物からの電話があり、話している

誠。その人物の名は同じ音撃戦士でもあり、伝説の戦国時代の鬼戦士の名を継ぐ《煌鬼》からだった。誠が以前、東海支部を訪れた時に知り合い、お互い気さくな性格からかすぐにウマがあった。更に、誠は同じく伝説の鬼戦士《響鬼》の名を受け継いでいることもあり、仲がいい。

「それで、どうしたんだ？」

『ああ、恐らく総本部から連絡が来てると思うんだが』

「青木ケ原樹海の件だろ。この前のニュースは見たよ。壊滅的被害だそうだな」

同じくニュースを見て、状況を知っていた誠。

『東海支部の配置が甘かったのが原因でもあるんだがな、支部長も嘆いていたよ』

「鬼不足だからな、生姜ないって一言で片付けるわけにはいかないがどうもな・・・」

近年鬼不足から、日本全体をカバーする事が難しくなっているのだ。更に海外に現れる魔化魍退治に臨時で出動する鬼もおり、どこも手一杯なのだ。そして、今のあまりよろしくない状況もある。

『やっぱり来てたか』

「今朝方、総本部の威吹鬼さんからな。俺もこつちの問題もあるんだがな・・・」

そして、今朝方、ネギの稽古をしている時にイブキから連絡が入り、青木ケ原樹海の調査の話が来ていたのだ。

『礼の襲撃事件から続いている問題か、色々難しい情勢だな。魔法使いってのは』

「まあ、全員が目の敵にしてるってわけじゃないさ」

『そうか、そうだな。悪いなこんな時間に』

「いいさ、また、明後日会った時に色々話すよ」

『ああ、じゃあなヒビキ』

そう言って、電話を終えるヒビキ。

「青木ケ原・・・樹海か・・・」

何かを懐かしむように空を見上げる。

本当なら、再びあの禁断の地に足を踏み入れるのは避けたいと思っ
た誠だった。

第二十七ノ卷 《出発》

3月27日（木）

麻帆良学園世界樹広場前 6：20

早朝の朝日が照らし出す時間。

世界樹広場前の付近にある芝生で、組手を行っているネギと誠。

正式ではないが、ネギを鍛える為に誠の弟子（仮）という形を取っている。

「多少荒っぽいが、スジはいいな。飲み込みも早いし、さすがに天才少年って呼ばれるだけはあるなネギ？」

「こんのまだまだだよ。お兄ちゃんの動きに追い付くだけで精一杯だし、魔力も多少借りてるから」

芝生に寝っ転がり、疲れた様子のネギ。

「まあ、ネギはまだ体が成長の途中だからな。でも、普通の同年齢の子供を遥かに超えた身体能力は上回ってるよ」

「そうかな？」

誠の発言に、少し恥ずかしながらも返答するネギ。魔力を多少は使用しているとはいえ、既に今のネギの身体能力は平均的な10歳の子供を遥かに上回っているのは間違いない。

「でも、今のままじゃ、父さんが施した精霊を倒せるとは思えないよ」「エヴァンジェリンを封印している精霊だからな。どんな物かが見えないから分からないが、強力な精霊なのは確かだろうな」

数日前、エヴァンジェリンに正式に弟子にして欲しいと御願いにいったネギ。それを聞いたエヴァンジェリンは当然、受け入れるわけもなかった。『私は弟子はとらん』と一言で返されてしまう。

しかし、ネギは諦めず最後には土下座までしてエヴァンジェリンに頼み込む。

『御願いますエヴァンジェリン！僕をあなたの弟子にしてください！』

『ふん、さつきも言ったが、私は弟子はとらん。面倒くさいからな。それに一つ言っておくが、仮に私の弟子になるという事は悪の下僕にな

るといふことだぞ?』(悪人全開)

そう言つて、ネギの頭に足を置いて悪人顔でエヴァンジェリンは喋る。近くで見えていた誠や賢二は呆れていた。隣にいる茶々丸に至つては無表情である。

『あ、悪の下僕ですか・・・?』

踏まれている頭を上げて、エヴァンジェリンの言つた言葉を復唱するネギ。

『そうだ。お前達魔法使いが大好きな『正義』とやらに反する行為だぞ?それに貴様は英雄の息子。悪の女王たるこの私に弟子入りする事、事態が間違つた行為ではないのか?』

『いつからエヴァは“悪の女王”になつたんだ?』

『いつからでしょうか?』

『おい!そこの話聞こえているぞ!』

ヒソヒソとエヴァンジェリンが言つた言葉を確認している誠と賢二。

『まあ、ともかくだ。私の下僕になるという事がどれだけ貴様らの正義に反するかという事だ』

そう言つて、足を退けてネギを見るエヴァンジェリン。

先ほどの発言もエヴァンジェリンなりの配慮だった。ナギの息子であるネギがエヴァンジェリンの弟子になれば、あの正義好き集団が黙っているわけがない。ナギの事はいけ好かないが、息子であるネギには対しては多少は差別的な意識はあつた。

『(悪いなぼうや。私は正義など安々と使う連中側にいる人間は嫌いなんだな・・・まあ、ぼうや自身に比があるわけではないがな)』

そう思い、ネギにあきらめて貰おうとするエヴァンジェリン。

しかし、ネギの回答は・・・

『構いません!僕、悪の下僕だろうがなんだろうが構いません!僕を弟子にしてくださいエヴァンジェリンさん!!』

『なっ!?!』

『それに、僕。エヴァンジェリンさんのこと悪い人だとは思つていません。いい人だと思つています』

『なっ・・・』

まさかのネギの発言に驚くエヴァンジェリン。

『確かにエヴァンジェリンさんはとても優しい方ですからね』

『はい、マスターは元からとても優しいお方ですから』

ネギの言葉に同調するように納得している賢二と茶々丸。その言葉が聞こえたのか、顔を赤らめるエヴァンジェリン。

『エヴァンジェリンさん・・・』

『くっ、そんな眼で私を見るなぼうや。このままじゃ、この雰囲気は流される。ん？くくく、いいことを思いついたぞ（わかったよぼうや。弟子入りの話は聞いてやる』

『ほ、本当ですか!!』

エヴァンジェリンの回答に喜ぶネギ。

だが、次にエヴァンジェリンに発した言葉にネギの顔が強張る。

『ただし、私の弟子になる条件として、弟子入りテストを受けてもらう』

『テストですか。わかりましたどんなテストが来ようが必ず合格してみせます!』

『ふん、威勢だけはいいな。テストの内容だが・・・』

『ええええええええ!!』

テストの内容に驚愕するネギ。

そして、時は戻り誠とネギが修行している場所に戻る。

『私を縛っている封印を解除しろ。そうすればぼうやを弟子に迎えてやるよ』か・・・』

エヴァンジェリンが弟子になる条件として提案したテスト内容があまりに難易度が高いことに難色を示すネギ。エヴァンジェリンを封印したのは父親であるナギが施したもの。エヴァンジェリンでも封印を解除できず、この15年間もの間苦しむことになった。

前に起こした事件がある意味一番の千載一遇のチャンスでもあつ

たのだ。

一番確実な方法はネギの血を提供することだが、それではネギが死んでしまうので弟子入りの話が何の意味もない。誠が提案したのが「だが、学園長たちになんて説明すればいいんだろうな」

エヴァンジェリンが封印されているのは、元々悪事を働いていたエヴァンジェリンに罰として与えた物。話を聞けば学園長が学園の警備員欲しさにナギに頼んでエヴァンジェリンを送り込まれたとか。

しかし、かれこれ15年もこの場にいればエヴァンジェリンも不満が貯まるのも無理はないが・・・

ともかく、エヴァンジェリンの封印を解除する際は学園長に一言言う必要がある。

人格者の学園長なら事情はわかってくれるだろう。

問題なのは、学園の魔法使い達だろうが・・・

「まあ、色々問題が増えたが、とりあえず鍛錬はここまでにしよう。朝食を食べたら、昼から移動しないといけないからな」

「うん」

色々問題が山積みになったが、ここで考えても仕方ないと思った誠。一旦帰ろうと移動しようとした時、誠の携帯電話が鳴り、誰からか電話が入る。画面には学園長の文字が映し出されていた。

「(学園長?) はい、新藤です」

『おう誠くんすまんの。こんな朝早く』

「いえ、大丈夫ですよ。それで何かありましたか?」

『うむ、10時くらいに学園長室に来てくれんかの? ネギくんも一緒に』

「ネギも一緒にですか? わかりました。10時ですね」

『すまんの。じゃあ待つとるからの』

そう言つて、電話を切る近右衛門。

「電話何だったの?」

「10時に学園長室に来てほしいだそうだ」

「学園長室に? 何かあるのかな」

「さあ?」

とりあえず、一旦それぞれの帰る場所に向かう誠とネギであった。

麻帆良学園女子中等部 学園長室 10:00

そして、時間は約束の10時。それぞれスーツを着込んで学園長室へと向かった二人。

そこで近右衛門が切り出したのは。

「修学旅行の下見!？」

「場所は・・・関西地方全域ですか」

学園長室に用意されているソファーに腰掛ける誠とネギ。今朝方、近右衛門から直接呼び出しがあり、話に伺った二人だが、彼の口から出たのは4月にある修学旅行の下見に行つて欲しいという内容であった。

それを聞いた誠は、呆れるように聞き返す。

「あの学園長、こんな大変なときに修学旅行の下見つて言うのは・・・」

「ふむ、誠さんの言いたいことはわかつておる。じゃが、学園内に留まっておつても刹那くんの情報が入らんじゃろ?」

「それはそうですね・・・」

確かに、刹那が連れさられて数日。何の情報も手に入れられないまま日に日に時間が過ぎていくばかりだった。麻帆良学園から基本離れることが出来ないネギと誠。誠に至つては緊急事態が発生すれば、天下御免で学園から離れることができる。

「まさか・・・学園長」

近右衛門の言いたいことがわかった誠。

「わかつたかの? 今回の下見の件は学園外部からであるための建前じゃよ。ネギくんと誠くんは学園からは基本離れられんからの」

「なるほど、確かに学校の一貫として生徒たちの修学旅行先の事前確認とかなら学園から出られますからね」

近右衛門の言葉で、提案の内容を理解したネギ。

「関西地方なら、猛士総本部も近いからな。有意義な情報も得られる可能性もある」

「そっか、確か奈良って場所にあるんだよね」

「うむ。しかし、京都にはくれぐれも気をつけておくれ。向こうの先方は大分キリキリしておるからの」

「京都ですか？しかし、なぜ・・・まさか市役所とか・・・」

京都といえば、外国人からのネギからしてみれば一番行ってみたい場所でもある。古い城下町の町並みや、世界有数の古い遺跡などでも有名であるからだ。近右衛門の言う先方

「関西呪術協会ですね」

誠が、間違いなくそこだろうと思ひ発言する。ネギに至っては『何それ』つと言った顔をしていた。

「やはりわかったかの」

「ええ、京都Ⅱ関西呪術協会みたいなものですから」

「あの、関西呪術協会って」

よくわからないネギは誠に質問する。

「関西呪術協会はな、大雑把に言うとな日本の陰陽師って呼ばれる集団の組織みたいなものだよ。まあ魔法使いの関東魔法協会の完全な日本版って所か」

「ふおっふおっふおっ。まあ大分大雑把に言うともう少ししれんの」

あながち間違っではない誠の説明に、苦笑いする近右衛門。補足として、更に説明を加える。

関東魔法協会と関西呪術協会の長同士は仲がようのだが、肝心の下にいる者達は尽く西洋魔術師と東洋呪術師を嫌悪してる連中が多い。特に関西呪術協会の連中が。

近右衛門もいい加減に、西と東でのいざこぎを何とかかしたいと思っ
て入るが何かと問題が多く余り進展していかないのだ。

そして、断トツで問題なのは、猛士との関係だった。

歴史的に見て、猛士と関西呪術協会の関係は修復不可能なレベルまで達している。一度、戦争までなりそうな関係にまでなっているのだ。

元々、京都に本部があつた猛士を追い出したのも関西呪術協会の前進的な組織が行つたこと。そのため、本来京都に支部を設置をするべき関西支部を大阪に置いているのだ。魔法使いのネギならまだしも、鬼である誠が京都入りなどと知れば、関西呪術協会からの襲撃がある可能性は高い。

「そんなに仲悪いんだ。その関西呪術協会と猛士は」

初めて知つた関西呪術協会の現状に、ただただ驚くネギ。

「まあ、全く配置できないって状況じゃないから。今、一部の猛士のメンバーが京都で任務についてるって話だ」

京都での不穏な地脈の流れの調査を行っている関西支部の女性の鬼《水無月鬼（本名 水瀬奈月）と数人の猛士のメンバーの事を思い出す誠。誠自身は彼女には会つたことはないが。

「儂からも向こうの長には連絡はしておくが、何が起るからわからんからの」

「まあ、何かあれば何とかしますよ。でも、ここまで手配してくれて感謝します」

「いや、本来なら総動員して搜索させるべきなんじやろうが。余り下手に動くことができなくなっておるからの」

関西呪術協会、関東魔法協会、そして猛士。3つの組織がにらみ合いの状態が続いており、あまり下手に動けないのだ。

「刹那さんは僕達の生徒です。助けに行くのは当然ですよ学園長。それに・・・早く刹那さんを連れ帰らないと木乃香さんがずっと悲しんだままですから」

「ネギくん・・・すまんの」

刹那と木乃香が昔、仲が良かったのを気にかけていた近右衛門。自分の孫が悲しんでいる時に、何もできないのが悔しかった。だからこそ、今信頼におけるネギと誠にこの話を持ちかけたのだ。

「それと、この下見ですけど。俺は猛士から調査の任務が重なってま

すので、終了してからの探索になると思います」

「うむ、此方も何か手伝えればと思うんじやが。何分、頭の堅い連中ばかりでの・・・」

既に魔法使い達でも話題に上がっている青木ケ原樹海周辺の事件。関東魔法協会としても、何かしらの協力をするべきだと考えるが、学園に所属する一部の魔法使い達は魔化魍なら猛士に任せればいいという者がいる。それよりも、刹那の件の事件でどう猛士側に責任を取らせるかを考えている始末である。

「仕方ないですよ。魔化魍関連は猛士の専門分野ですから」

そう言つて、気にしないで下さいと言う誠。

こうして話も纏まり、部屋から退出する誠とネギ。

しばらく、歩いてから誠が学園長に伝えようとした事を思い出した。

「あつ、しまった。学園長にエヴァンジェリンの件言うの忘れてた」

「そうだ。下見の話に聞き入つてて、僕も忘れてたよ」

修学旅行の下見の話で、すっかりエヴァンジェリンの封印解除の話を忘れていた二人。

「困つたな。学園長確か、俺達に会つた後、イギリスの魔法協会に行くつて言つてたな。多分、もういないぞ」

「下見に帰つてきてから、伝えるしかないよ」

「そうだな」

12:40 麻帆良学園 女子寮 食堂

「ネギと誠先生が関西に行く!?!」

「うんうん! さつきネギ先生と新藤先生が話してるの聞いたんだよ! ねえ史加!」

「はいです!」

女子寮にある食堂で、昼食を摂っていた明日菜と木乃香。そんな二人に鳴滝姉妹がどこから情報を入手したのか、誠とネギが関西に修学

旅行の下見に行くと言う話をする。

当然、その場にいる2―Aの生徒達はその話題を聞きにきた。

「ねえねえ！関西って事はやっぱり京都か大阪かな！」

「毎年、生徒の投票で決まってるって聞いたけど、京都に決まってることかな？」

「私は宇宙にしたんだけど、やっぱり無理だったのかしら？」

「ちず姉。それは流石に無理だと思うよ……」

「まあ、下見でしたら私もご一緒に連れて行ってくだされば！」

と、様々な感想を述べる生徒たち。

「カンサイには強い奴が一杯いるアルカ？」

「さあ、どうでしょう。まあ歴史的にも古い町ですからね。侍などがいるのではないですか？」

「サムライアルカ！聞いただけで強そうアルナ！」

修学旅行を別の見方で見ている者もいるが。

「明日菜達知らなかったの？ネギくんからそんな話聞いてなかった？」

まき絵が明日菜と木乃香に質問する。

「え、ううん。そんな話今始めて聞いたわよ」

「ウチもや」

「という事は極秘だったって事？これは何かありそうだにやあ？」

小悪魔つぼく、八重歯を尖らせる祐奈。一緒に暮らしている明日菜や木乃香にも知らされていなかったのなら、秘密裏に下見に行くつもりだったとかがえる。

最も、ネギと誠が今日知ったのは彼女達は知るよしもなかったのだが。

そうこう騒いでいる内に、食堂に噂をすればなんとやら。ネギと誠が入ってきたのだ。

それを見た瞬間、彼女達が飛びかかるように二人に近づく。

「ネギくん、新藤先生！修学旅行の下見に行くって本当？」

「関西地方ってのも本当？」

「ええ!?どうして皆さん知ってるんですか!？」

なぜ、今日聞いたばかりの話を生徒達が知っているのか驚くネギ。「やっぱり本当なんだねネギくん！どうして極秘裏に行こうとしたのかな？」

「おいおい、別に極秘裏に行くわけじゃないぞ。俺たちもさつき学園長から聞いたんだから」

「え、そうなんですか？」

祐奈の質問に答える誠。

「はいはい！新藤先生！いつ頃下見に行かれるんですか！」

手を上げて、誠に質問する朝倉。生徒達も気になるのか、誠の言葉に耳を傾ける。

「俺は今日の昼から先行して出発するつもりだ。ネギは後から合流するつもりだ」

「じゃあ、ネギくんは後から一人でいくんですか？」

「そうなるな」

「はあっ!？」

それを聞いた途端、あやかがフラツと倒れる素振りをする。突然の出来事に、困惑するネギと誠だが、周りの生徒は何が起きるか予想はついていた。

「ネギ先生！」

「は、はい！」

突然、手を握られ眼をキラキラさせるあやかに冷や汗を流すネギ。「初めての日本で、しかも関西へ一人で行かれるとはなんて健気な。でも安心して下さいまし！この雪広あやかが最高の警備体制でネギ先生をお連れし、そして夜は濃厚な愛を『アンタ一体何言ってるのよ!!』アベシツ!？」

あやかが禁断の領域まで突入しようとした時、明日菜の渾身の蹴りが頭に直撃し、床に倒れて、そのまま眼を回して完全に気絶していた。「おい、明日菜。いくらなんでもやりすぎだぞ」

「このシヨタコンはこれくらいししないとすぐに復活するんですよ！」

見かねた誠が明日菜を咎めるも、本人は気にするどころかやりたりないと言った感じだった。

気絶したあやかはとりあえず、同じ部屋にいる村上夏美と手伝いでまき絵が連れて行った。

結局、数分の間は修学旅行の下見の話で盛り上がり、ようやく話が終わったのは13時頃になっていた。

ネギ、誠、明日菜、木乃香以外の生徒達が皆それぞれの用事で行った。

「そういえば、いいんちよさん大丈夫でしょうか？」

「いいんちよがあれくらいでくたばる訳無いでしょ。それよりネギ、アンタなんで同じ部屋にいる私達まで黙ってたのよ？」

そう言つて、ネギにチョークスリーパーをかける明日菜。掛けられたネギは慌てて弁明する。

「ちち違いますよ明日菜さん！僕達も今日聞いたばかりなんですから！」

「え、そうなんですか？」

そう言つて、顔を誠に向ける明日菜。

「ああ。まあ、本当は下見つてのは建前なんだがな。それと、ネギがそろそろやばそうだぞ？」

「え？あつ、ごめんネギー！」

誠から指摘されて、チョークスリーパーをかけているネギを見ると、顔を青くして今にも天に上りそうな表情をしていた。慌てて、手を離しネギを解放する。

「はあ、もう少しであの世に旅たつ所でした・・・」

「ごめんネギ。私早とちりで・・・」

「あはは、気にしないで下さい明日菜さん」

謝罪する明日菜に、やんわりと受け答えるネギ。

そして、先ほどの誠の言葉が気になったのか、木乃香が質問する。

「あの、さっきの建前言うんわ・・・」

「・・・桜咲の搜索だ」

言おうか言わないか、迷ったが木乃香には話したほうがいいと考え、事実を伝えた誠。次に出てくる言葉が何となく予想でき、案の定、それを聞いた瞬間、木乃香が誠に詰め寄り懇願した。

「お願いします誠先生！ウチも一緒に連れて行って下さい！」

「木乃香……」

やはり来たかと思ひ、木乃香の頼みに考える誠。刹那を見つけて取り戻したい木乃香の気持ちもわかつている誠だが、もしかしたら敵地まで乗り込む危険性だつてある。現に敵の狙いが木乃香である可能性だつてある。

「私からも御願ひします誠先生」

明日菜も木乃香の同行を御願ひした。明日菜も最近ようやく元気を取り戻してきた木乃香が、また暗くなることは避けたかったのだ。

「お願いします誠先生！」

涙目になりながら、頭を下げる木乃香。

「……ダメだ」

誠からの言葉はNOという返答だつた。

「今この学園から出ないほうがいい。だが、必ず桜咲は取り戻してくる。これは絶対約束する」

そう言うと、木乃香たちから立ち去るように食堂を出て行く誠。誠から断られて、今だに頭を下げたままの木乃香。

「木乃香さん、あのお兄ちゃんも木乃香さんの気持ちはわかってますよ」

「ちよつと、ネギ。あんた何追い打ちかけるようなこと言つてんのよ」

「ええっ!?僕は別にそういうつもりは……あぐぐ!?!」

誠の言い分を弁明しようとしたネギだったが、逆に追い打ちをかけるようになってしまったと思つた明日菜は、再びネギにチョークスリーパーをかます。

「ええよ。ウチ氣にしてへんから」

「へ?」

顔を上げた木乃香が、涙を拭いて心配ないと言う。てつきり落ち込んでいると考へていたネギと明日菜だったが、あまり落ち込んでいるような表情をしていなかったため、キョトンとし顔になる。

「誠先生やったら、ああ言うやろうなつて思つとたもん。でも、誠先生がああ言つてもウチは諦めへんで!『諦めたらそこで試合終了』つて

安西先生が言っただもんな」

「安西先生なんてこの学園にいたんですか？」

「スラムダンクの中の先生よ」

明日菜が何を言ってるのかサツパリ分からないネギ。まあ、日本の有名な漫画の世界の登場人物なので、イギリス人のネギが知らないのは当然であるが。

「でも、それでどうする気よ木乃香？」

「方法は一つや。ネギくん」

そう言つて、ネギを視線を向ける木乃香。

「あの、僕が何か……」

嫌な予感がし、後ずさろうとするネギ。しかし、それより先に木乃香が腕を掴み引き寄せる。

「ネギくん、誠先生は何時に出発するんや？」

「え？お兄ちゃんが出る時間ですか？ど、どうしてそのことを……」
てつきりネギに付いて行くと感じていたネギ。だが、なぜか誠が学園から出る時間を聞いてきたのだ。

「木乃香、アンタまさか……」

木乃香の考えが何となくわかった明日菜。普段おバカな明日菜だが、こう言つた時だけ妙に頭が冴える。

「自分の足で誠先生を追っかけるんや。自分の足で進んでいかんと意味あらへんからな」

「危険よ木乃香、一人でなんて。それだったら私も行くわよ！」

無謀とも言える木乃香の言葉に、明日菜が共に行くと言う。

「明日菜……でも……」

「でもじゃないでしょ？その桜咲さんとはあんまり仲が良いとはいえないかったけど、木乃香の友達なら私の友達なんだから。それに同じクラスメイトだしね」

「……ほんま敵わんな明日菜には」

「それに、ネギも一緒に来てくれるしね！」

「そうですよ僕も……ええええ!?!」

流れに乗つて、続いてしまふネギだが、明日菜のぶつ飛んだ発言に

驚愕するネギ。自分はそんなことを一言も言っていないはず。

「何よ、困っている人を助けるのが魔法使いの仕事じゃないの？それにアンタは私達の担任の先生でしょ？」

「そ、それはどうですけど」

明日菜に言い寄られて、何も言えなくなるネギ。

「(どうしよう。お兄ちゃんの話だと木乃香さんは狙われてるって話だし、それに第一、僕が仮に同行したとして、明日菜さんと木乃香さんを守ることもなんてできるの?)」

そこが一番懸念していることだった。今の自分では力不足だからエヴァンジェリンと誠に弟子入りを申し込んだのだ。

そう考えていると、ふと誠が出て行った扉の付近に誰かがいるのが見えた。その人物は先ほど、食堂から出て行ったはずの誠だった。

「(お兄ちゃん?)」

そう思うと、誠はネギに向かって無言でサムズアップをした。

『一緒に面倒みてやるから。安心しろ』

ネギには、そう言っているようにも見えた。誠はそれだけすると、再びそこから姿を消した。

「(もしかして、話を聞いてた?)」

そう考えたネギは、再び明日菜と木乃香に向き直し。

「わかりました！僕が責任を持ってお二人をお連れします！」

「ほんまにええのネギくん！」

「大丈夫です木乃香さん。刹那さんは僕にとっても大切な生徒ですから」

「さすが、ネギ！期待してるわよ！」

「はいー！」

こうして、既にバレているが、誠に付いて行く為にネギ、明日菜、木乃香は行動を起こすのだった。

そして、それを認知している誠は。

「しかし、焔鬼たちになんて言おうか」

青木ヶ原樹海に探索任務のため、先に先行していくはずだったのだが、ネギ達もついてくるならどこかで時間を潰してもらわなければならない（最も、木乃香は刹那を探すと行ってきそうだが）。

「誠くん」

「タカミチ。何かようがあつたのか？」

外を歩いていると、誠が来るのを待っていたのか、タカミチの姿が見えた。

「実は誠くんに伝えたい情報があつてね」

「情報？」

「恐らく、関係はないと思うけどイスタンブールの魔法協会からある魔法使いが研修として派遣されたんだけど、行方がわからなくなっているんだよ」

「イスタンブールか。そんな遠くから派遣されてるのに、何で行方不明なんだ？」

イスタンブールといえば、トルコの最大の都市でもある場所。そんな遠く離れた場所から派遣されている魔法使いがなぜ行方不明になっているのか疑問に思った。

「此方側で調査の結果、関西呪術協会の過激派『封眼寺派』と呼ばれる集団関わっているらしいんだ」

『封眼寺派』？聞いたことないな。関西呪術協会は元からどこも同じような思想もってるからな」

「まあ、それも一理あるかもね」

皮肉めいたセリフを吐く誠に苦笑いするタカミチ。

「それで、その過激派がどうしたんだ？俺よりタカミチ達の関東魔法協会のほうに関係がありそうだがな」

「それがそうでもないかもしれないんだ。その『封眼寺派』は木乃香くんを狙ってるんだよ」

「何？木乃香を……まさか、この前の事件はそいつらが糸を引いているのか？」

『封眼寺派』は木乃香の中に宿る莫大な魔力を利用し、西洋魔術師に一泡吹かせようとする輩がいる。それを聞いた誠は今回の事件がその

連中が引き起こしているのかと質問した。

「それはまだわからない。だが、最近妙な行動を起こしているという噂があるんだ。さつきも言った派遣された魔法使いと組んでね。それにこれから君が行く青木ヶ原樹海の事件。余りに出来すぎじゃないか？」

『封眼寺派』かどうかはわからないが、青木ヶ原の件は恐らく魔化魍が引き起こした物だと猛士は考えている。まあ、それがわからないから調査に行くんだがな」

今回の青木ヶ原の事件が関西呪術協会の過激派『封眼寺派』の起こした事件だとしても、具体的に不明なので実際に現地に言ってみなければわからない。今わかっているのは、『魔化魍の仕業であろう』なのだから。

「まあ、もしその『封眼寺派』が今回の一連の事件を引き起こしたんなら。黙って見過ごすわけにはいかないがな」

もし、本当に『封眼寺派』が関係しているなら、潰す覚悟を決める誠。既に死者も出ており、見過ごせる状況を超えていたからだ。

「まあ、これから何かしらの情報があったら連絡するように伝えるよ。僕も学園でできることはするつもりだから」

「わかった。頼むよタカミチ」

「それと、心配する必要はないと思っただけど、

そう言っつて、お互い別々の方向へと歩いて行く誠とタカミチ。

出発の準備のため、エヴァンジェリンのログハウスへと向かう誠。

愛知県名古屋市長 観光案内総合所《コーチンあいち》及び東海支部

13:00

『……以上の件から青木ヶ原近郊で起きた村の壊滅事件について、山梨県警は以前として原因不明というコメントしか発表しておりません。同様の回答についても警察庁も同様の意見を示しており、現在調査チームを派遣中とのこと。村民の半数が亡くなった事件か

ら五日間。現場では警察による封鎖が行われており、近づくことすらできない状況です……」

名古屋市にある観光案内総合所があるビル。ここは猛士の東海支部としての機能を併せ持つ施設でもある。そして猛士の人間が密会を行われる一室で、青木ヶ原周辺の事件の報道を伝えているTVを見ているキラメキ。

他の構成員たちはこの案内所の仕事を兼任しているため、今この部屋にいるのはキラメキ一人だった。

「関東でも、今朝からそのニュースなっかかりですよ」

キラメキが声に反応すると、午前中に東海支部に到着していた同じ探索班のシユウキとメイキがやってくる。

「支部長との話は終わったのか？」

「はいっすー！シユウキさんがお菓子の盛り合わせをプレゼントしたら、職員さん達喜んでたっすよ」

先に東海支部の支部長に挨拶しに行ったシユウキとメイキ。おみやげとしてシユウキが作った《たちばな》が最近出品したシユークリームを出したら、案内所の職員達は喜んでいた。たちばなのお菓子はスイーツの雑誌にも掲載されるほど有名なのだ。

「お菓子持ってきてたのか？」

「ちよつと、作りすぎちゃって。キラメキさんもどうですか」

「いいのか。悪いな、ありがたく頂くよ」

そう言うと、シユークリームの袋をキラメキに取り出す。それを受け取り、食べるキラメキ。

「うん、うまいなこのシユークリーム」

「感想ありがとうございます！」

もうすぐ、青木ヶ原樹海の調査へ向かう為に、東海支部で集合した3人。あとは新富士駅に来るヒビキ誠と共に探索任務に行くだけであり、ここで少し休憩していたのだ。

「でも、ここの鬼は大分いなんっすね」

「今はどこも出払ってな『ガチャ』？ガイキさん」

「案内所が大分騒がしかったが、何かあったのか？」

部屋のドアが開かれて、入ってきたのは顔に傷がある男。ガイキと呼ばれる九州支部に所属している鬼だ。

名前は菅原斗真と言い、音撃戦士・鎧鬼に変身する鬼だ。今はここ東海支部に出向という形で駐在している。

「ええ、今朝言つてた調査隊のメンバーがお菓子をおみやげで持ってきてたんですよ。それで、どうやら喜んでくれたみたいで」

「そうか。うん」

そう言うと、シユウキとメイキの方を見るガイキ。

「どうも、関東支部のシユウキです。初めましてガイキさん」

「同じく、関東支部のメイキツス！以後よろしく御願います！」

「ガイキだ。よろしく……」

軽い自己紹介を終えると、ガイキはそのまま奥の資料室に向かっていった。

「何か難しい感じの人ツスね」

「キラメキさん、あの人は？」

「九州支部から出向している鎧鬼さんって言う鬼なんだ。少し気の難しい人なんだが、根は優しい人なんだ。さっきのは多めに見てやってくれ」

先ほどのガイキの態度を、色々と事情を知っているキラメキが弁明する。

「そういえば、ヒビキさんって何時に来るんですか？」

「予定だと、16時には新富士駅に到着と言ってたな」

「だとしたら、先にまって他方がいいんじゃないですか？合流したらすぐに山梨県警に行かないといけませんから」

「そうだな。キャンプ道具一式と食料を積んだら、すぐに出発するか」

シユウキが運転してきたワンボックスカー《不知火式号》で出発の準備を進める3人だった。

いよいよ始まる青木ヶ原樹海の探索が始まろうとしていた。

第二十八ノ卷 《青木ヶ原樹海》

静岡県富士市川成島 新富士駅 15:10

調査隊の待ち合わせ場所に指定されている新富士駅で、もうすぐ到着する最後の一人、ヒビキを待っていたキラメキ、シユウキ、メイキの3名。

「現地に入る前に、県警に行かないといけませんね。制服や手帳貰ってませんし」

「必要な書類とかは持ってきたのか？あそこでは確認してなかったが」

「後ろのトランクに入れてますよ。俺のとメイキ、そしてマコツチ：：じゃなくてヒビキの分も」

サムズアップの要領で後ろを指すシユウキ。

「全く、面倒ツスね。俺達は政府から許可受けて行くっていうのに：：車の後部座席で頭に腕を組みながら、これから色々と誓約的な作業があるのに、若干面倒臭がっているメイキ。

「仕方ないだろ。封鎖されている周辺はマスクミがいるんだから、いきなり俺たちが行ったら何者だって思われるだろ」

運転席に座るシユウキが面倒臭がっているメイキを窘める。

そして、ふと駅の玄関を見たメイキは見覚えのある顔が出てくるのが見えた。

「あ、ヒビキさんのご到着見たいっすよ」

出てきたのはヒビキだった。まるで登山に行くかのような格好をし、周辺の雰囲気溶け込んでない服装だった。これが、日本中を旅している時のヒビキの格好なのだ。

一同はヒビキが現れたのを確認し、迎えに行こうと車から出るも、すぐにヒビキの後ろにいる少年少女に気づく。

「あれ、誰ツスか、あの子達？」

「ヒビキの連れじゃないよな・・・」

ヒビキについてくるように現れたのはネギ、明日菜、木乃香なのだが、彼女達を知らないキラメキとメイキは当然のような反応をする。

「あの子、まさかネギくんか？」

しかしシユウキだけは、ネギと会ったことがあるので、すぐに思い出す。隣の二人は頭に？を浮かべながら、ヒビキたちに近づいている。

「あ、誠先生。誰か近づいて来ますよ」

「ん？」

明日菜がシユウキ達が近づいてくるのが見えて、ヒビキに声をかける。

反応したヒビキはすぐにキラメキ達の方に振り向くと、既に近くまで着ており、最初にキラメキが話掛けてくる。

「久しぶりだなヒビキ。2年振りになるか？」

「まだ1年半だぞキラメキ」

「そうだったか。まあ、元気そうで何よりだ」

「俺もさ。ミナズキさんにはちゃんと会ってるのか？」

久しぶりの再会で軽い会話をするヒビキとキラメキ。

キラメキの恋人であるミナズキ（現在は神無月鬼^{カンナツキ}）の話題を出すヒビキ。

「仕事が忙しいからたまにしか会ってないよ。それに今は、ミナズキじゃなくてカンナツキだ」

「え？・そうなのか？」

ミナズキが、カンナツキに改名したことを知らなかったヒビキは軽く驚いた。

そんな軽く話していると、メイキがすぐに近寄ってくる。

「ご無沙汰ツスヒビキさん！まさか、こんな早く再会できるとは思ってなかったツスよー！」

「メイキは相変わらずだな。まだ北陸支部にいるのか？」

「そんなんツスよ。北陸は今人手不足でから・・・ああ、鬼不足でしたツスね」

明るく、対応するメイキにどこか懐かしさを感じたヒビキ。

「それで、ヒビキ。あの子達は一体・・・」

「ああ、実はな・・・」

キラメキたちに事情を説明している頃、ネギたちはシユウキと会話をしていた。

「久しぶりネギくん。ウエルズ以来だね」

「はい。まさか、シユウキさんにお会いできるとは思ってませんでしたが」

そう言つて、お互い再会の握手をする二人。

そんな様子を見ていた明日菜と木乃香は、新幹線の中でヒビキから大まかな今回の調査の事情を聞いていたので、すぐに名前を思い出した。

「この人、ヒビキさんやネギが言つてたシユウキさん？」

「お！俺のこと知ってるの君たち？」

初めて会つた明日菜に、名前で呼ばれたのに反応するシユウキ。明日菜と木乃香は、まず自己紹介をする。

「初めまして、麻帆良学園女子中等部2年の神楽坂明日菜と言います」

「(麻帆良学園？まさか、マコツチの生徒かな?)」

麻帆良学園と聞き、恐らくヒビキの生徒ではと直感が告げたシユウキ。

「同じく、近衛木乃香と言います」

「(この子、京都の子かな?)」

京都弁訛りの語尾に反応したシユウキ。関東の方に集中的にいるため。関西弁が少し珍しかったりしていたのだ。シユウキもすぐに自分の名前を名乗った。

「さっきの反応だとわかつてると思うから改めて言うけど、俺の名前はシユウキ。マコツチと同じ鬼だ」

場所が場所なので、最後の部分は小声で自分の正体を言うシユウキ。

「マコツチ？つて」

「それは勿論、誠のこ『マコツチはやめろつていつも言ってるだろ』痛っ!？」

頭に軽いチョップをかますヒビキ。シユウキと一番付き合いの長いヒビキだが、このアダ名だけはどうにも気に入らないヒビキ。言う

度に、ツツコミをかましているのだ（ただ、最近はいよいよ疲れてきたのか、余り反応しなくなっているが）。

気づけば、メイキとキラメキ、そしてヒビキがそばにいた。何やら、キラメキは神妙な顔をしながらネギ達を見ていた。

「あれ、そういえばなんでネギくんたちがここに？」

ここでようやく、ネギ達がなぜここにいるのか疑問に浮かんだシユウキ。

これから行く場所は、危険地帯であり女子中学生などが入っている場所ではないはず。それに、大方の事情を知っているなら、なぜいるのかわからなかったシユウキ。

「事情はヒビキから聞いたよ。今回は、“特例中”の“特例”で“特別”に同行を認めるからね。一緒にいる時は絶対に勝手な行動はしないように、調査が終われば好きにしていいいから。お兄さんとの約束だ」

そう言つて、ネギ達の同行を認める有無を話すキラメキ。余談ではあるが、今回の調査班の班長はキラメキであり、本来なら到底認められるはじがなく、早々に麻帆良学園に帰るべきなのだが、ヒビキから大方の事情を聞き『木乃香が敵から狙われている可能性があるから、できるだけ目の届く範囲にいた方がいい』と言つてきたのだ。どの道、追いついても付いてくることになるのはわかつていたからだ。キラメキも最初は難色を示すが、キラメキ本人も総本部から《近衛木乃香が現在起きているいざこざの関係者かもしれない》と伝達がきていたため、ヒビキの意思もくみ同行を認めたのだ。

「あ、ありがとうございます！」

ネギが代表するようにお礼を述べる。

「よし、じゃあ三人とも、車に乗ろっか。メイキ、荷物を頼む」

話は纏まったのを見計らい、シユウキがネギ、明日菜、木乃香を車に案内する。

「了解ッスよ。さあ俺に手荷物を」

「あ、いいですよ」

「これくらいウチらでももてますから」

「大丈夫、大丈夫！これくらい男として当然さ」

そう言つて、明日菜と木乃香の荷物を持ち車に向かうメイキ。明日菜と木乃香もすぐに後を追つていく。

一方、ネギはヒビキ達の元に向かい、改めてお礼を言っていた。

「すみません。大変な時に無理な御願いを聞いてもらつてしまい」

「過ぎたことは仕方ないよ。ほら、彼女達を見てなくていいのかい？彼女たちの先生なんだろう？」

「は、はい！」

キラメキに言われて、急いで車の方に向かって行くネギ。そんな後ろ姿を見ていたキラメキがヒビキに話かける。

「あの子が、ヒビキの気にかけている子か。まだまだ、これからって感じだな」

「ネギはまだ修行中の身だ。これから逞しくなつて成長していくさ」
「でも、真つ直ぐでいい目を持つてる」

以前からちよくちよくヒビキからネギのことを聞いていたキラメキ。直接あつた事はなく、先ほど行つた通り『ヒビキが気にかけている少年』程度しか認識していなかったのだ。今回はじめて会つて、キラメキにとっては中々の好印象だった。

「ネギくんがおかしな連中の思想に染まらないことを祈るかぎりだな。ヒビキはまずないと思うが、麻帆良学園の西洋の連中には気をつけろよ」

「流石にあんな連中は初めてだが、思想に染まることはないだろう。会つてみればわかる。連中はどうかしてるってな」

「マコツチがそこまで言うとは、余程の奴らなんだな」

「まあ、麻帆良学園の学園長や他の魔法使いたちはいい人なんだけどな……マコツチはやめろ」

既にヒビキは麻帆良学園に所属する《自称・正義の魔法使い》たちには失望している。いよいよ、言いがかりもエスカレートして来たので、対処するのが面倒臭くなっているのだ。こっちが低姿勢で行けばつけあがる連中なので、失望しているのだ。そして、ついに先日的事件でヒビキは《頭のイカれたエゴイスト集団》と考えられるように

なった。学園長には申し訳ないと思うが、あの連中をどうにかしない限り、改善は不可能だと思いうヒビキ。

「じゃあ、学園に留まる理由なくなったら早々に退去か？」

「そうなるだろうな。まあ、クラスの生徒達と別れるのは寂しいがな」
なんだかんだ言つて、先生としてやって来たのは正直面白かったヒビキ。人に教えるのは本格的に初めてであり、剩え教師として教壇にたつことなど思っていなかったので、戸惑っていたが、今となってはとても勉強にもなった。ネギは引き続き、新生3—Aの担任として、教師を続けるが、ヒビキはまだ未定なのである。学園にいる魔化魍は退治しているので留まる必要はないが、今起きている事件での関係か、ゲンキまで滞在することになっており、正直この先どうなるかはわからない状況ではあるが。

「あ、シユウキ。俺の書類持ってきたか？」

「勿論さ。久しぶりだから、探すのは苦労したけど」

「でも、今のヒビキは先生だから、バレたら逮捕されるんじゃないのか？」

「まだ、教育実習生だから問題ないだろ」

「まあ、あの学園に法律もくそもないだろうがな・・・」

そんな話をしながら、三人は車に乗り込み、新富士駅を後にするのだった。

◆ 山梨県甲府市丸の内 山梨県警察本部 17:50

新富士駅を出発し、東名高速道路を経由して、到着した場所は青木ヶ原樹海・・・ではなく、なぜか山梨県の警察の中枢《山梨県警察本部》だった。用意している駐車場で待っているネギ、明日菜、木乃香は、初めて訪れておる場所に緊張していた。

「新藤先生達が行つてからもう十分たつけど、なんでこんな所に来たんやろか？」

「そんなのはこっちが聞きたいわよ。ネギは何か聞いてないの？」

「僕も、てつきり樹海の方にそのまま行くかと思つてましたから・・・」

三人とも、なぜこの場所に来たのかイマイチ理解できていない。移

動している時も、この場所に来るなど全く話しておらず、軽い世間話や、樹海での調査の内容の真面目な話ばかりで警察本部に行くなど全く話していなかったのだ。

「……あれ、新藤先生達じゃない？」

「ほんまや。でも、なんかお巡りさんの格好してるえ」

それぞれが疑問に感じていると、気づいていなかったがすぐ近くまでヒビキたちが来ているのに気付く明日菜。なぜか、警察官の制服を着ており周りに溶け込んでいたため近くまで来ているのに全く気づかなかったのだ。

ヒビキたちは車の扉を開けて、乗り込んでいく。運転するメイキは車体にパトランプを取り付けていた。

「悪いな待たせて、すぐに出発するからな」

そう言つて、何事もなかったかのように出発させようとするヒビキ。しかし、すぐに明日菜が食いつく。

「ちよ、ちよつと待つてください新藤先生！みんなもですけど、なんで警察官の格好してるんですか!？」

「え？何でつて」

「まさか……コスプレとか？」

「ハハハハッ、木乃香ちゃん、これはコスプレじゃないよ。れつきとした警察官の制服だよ」

まずないと思うが、恐る恐るコスプレかと聞く木乃香。軽く笑つて、コスプレではないと反論するシュウキ。車はそのまま、県警を出ると、目的地の青木ヶ原樹海へと向かっていく。

その車中では、状況が理解できないネギたちに説明するヒビキたち。

「『特殊警察官』？」

聞きなれない単語に、眉をひそめる明日菜とネギ。

「ああ、一定の期間内だけ警察として活動できる警察官のことだな。まあ、俺達『音撃戦士』専用の職種みたいなもんだ」

『特殊警察官制度』とは、およそ2年ほど前から採用している予備自衛隊のような形式をとった警察官のことである。自衛隊と違い有事の

際に動くのではなく。特殊な事情で警察官としての責務を果たす必要ができた場合に、現職の警察官と同じ権限をもつことができる。最も、この特殊警察官というのは、猛士に所属する人物を対象とした制度であるが、警察官としてなっているのは全国でもまだ少ない。公には、その制度の事は知られておらず、警察組織上層部及び内閣府だけ認知しているのです、一般の警察官でも知らない者もいる。

「え……それじゃあ、新藤先生って今は本物の警察官ってことですか!？」

「さつきからそう言ってるだろ……もう5回目だぞ」

半分呆れ顔で明日菜を見るヒビキ。

しかし、なぜ警察官なのか疑問に浮かべるネギ。

「俺達の猛士は世間一般にはオリエンテーションのNPO組織として活動しているんだ。でも、魔化魍とかの被害が出てきた時に、俺達に言われても誰も信じないんだ《避難して下さい》とか言ってもな。昔からそう言った問題は結構あったんだ」

キラメキが補足するように説明する。彼の言う通り、猛士という組織は表向きはアウトドアなどのオリエンテーションを目的としたNPO団体であり、一般的にはなんの権限もないのである。魔化魍などの被害で進入禁止などの警戒をだしても、殆どの人は信用してくれない。そう言った場合は警察や消防に依頼するのだが、時間や手続きが色々面倒が発生するため、非常に困難だった。それを解決するために生まれたのが《特殊警察官》なのである。

「警察官の言うことのほうが皆信用してくれるからな。少し悲しけど」

やはり裏方で動いているので、世間の人はそう言ったことを信用しようとはしない。それが世間の常識であると少し痛感しているキラメキ。

最後は結局、国家権力を頼るしかない状態に、苦々しい思いがある。「まあとりあえず。警察なら怪しまれず樹海のほうにいけるんだよ。あの周辺にはマスコミとか沢山いるらしいから」

情報で、封鎖地域はマスコミが屯しているのを知っていたシユウキ

はなぜ警察官として動いているのか話す。

普通に入っただけいけば、大騒ぎになる可能性があるからだ。

「でも、ウチらはどうすれば・・・」

木乃香が自分達はどうすればいいのか聞く。自分達は、周りから見れば女子中学生と小学生が乗っており不自然極まりない。

「そのブルーシートかぶせて、カモフラージュするから大丈夫だ」

「あ、そうなんだ」

ヒビキの意外にあっさりとした回答に苦笑いするネギ。

既に周辺は漆黒の夜へと近づいていき、不気味な夜へと向かおうとしている。

目的の場所の青木ヶ原樹海はもうまもなくだった・・・

そして

山梨県富士河口湖町近郊富士箱根伊豆国立公園《青木ヶ原樹海》近郊の事件が発生した村 19:20

ここから10km離れた地点で、封鎖を行っている場所を無事通過したヒビキたちは、ついに問題の村へと到達した。ここから車で10分も立たない場所には青木ヶ原樹海がある。

しかし、村に入って車から周辺を見ていたヒビキたちは絶句した。

「・・・これは・・・予想以上の光景だな」

キラメキが周辺の村の状況を見て、予想していた被害を超えているのに思わず声が出てしまう。

唯一残された村の街頭が不気味に村の悲惨さを照らしていた。

何かえぐられたように破壊されている家は何件もあり、道路は所々が陥没、大きな穴がある。

そして、何より、街頭と車のヘッドライトが照らしている場所には、血痕が多量に飛び散っているのが見えた。周辺に遺体はないが、魔化魍が食べたのか、救助しにきた消防や警察が回収したのかわからないが、それでもありえないほどの血の量だった。

明日菜と木乃香も、まるで映画のセットではないかと思うぐらいの光景に息を飲んだ。

「とりあえず、この村の役場に行こう。そこが今夜の泊まる場所になってるからな。メイキ、場所はここだ」

「わかったッス」

運転してるメイキに地図を見せて、役場へと車を走らせる。道路が所々陥没しているため、慎重に進めていく。

「……………」

周囲の光景を見て、ネギは何か思い出すように悲しく見ていた。

「(ネギ…………)」

ネギの過去が複雑なことを知っているヒビキ。

もしかしたら連れてくれべきではなかったかもしれないと今更思ってしまうのだった。

第二十九ノ卷 《殺戮の鬼》

3月28日（金）

青木ヶ原樹海 野营地 10:10

夜が明けて、早い時間に青木ヶ原樹海に入った猛士臨時調査隊。開けた場所に野営の設置を行い、準備を進めていく。

総本部から支給された、偵察用ディスクアニマルを大量の展開させ情報収集を開始する。

「こんなに飛ばすんですか？」

上空や地面に展開しているディスクアニマルの数を見て、驚いている明日菜。数は200を超えているのではないというぐらいだった。「樹海は広大で、迷う可能性があるんだ。それに、こうやってディスクアニマルたちに情報収集させたほうが便利だからね。動きも早いし」大きなケースに入っているディスクに鬼笛を吹かせて、展開させているシウウキ。

今、現在この野営にしているのはシウウキ、メイキ、明日菜、木乃香の4名であり、ヒビキとキラメキ、そしてネギの3人は樹海の内部へと足を踏み入れていたのだ。

「あの、ウチも何か手伝えることは・・・」

ただ、何もしないまま待っていることはしたくなかった木乃香。無理言ってまで同行を認めてもらっているため、何か手伝えたいと思っただのだ。

「困ったな。あまり木乃香ちゃんに無理させるのは不味いだろうし。俺やメイキも彼女達の護衛任されてるから、ここでジツとしたほうがいいんだけどな」

それを聞いたシウウキは、ヒビキから護衛を頼まれており、下手に動かれるのは不味いと思いついてしまう。

しかし、それは明日菜の方もいえたことであり、野営するときも『手伝わせて下さい』と言ってきたのだ。その際はヒビキがやんわりと断っていた。

「よしっ、なら明日菜ちゃん、木乃香ちゃん。昼食の支度をお願いでき

るかい？食材はたくさんあるから」

「ウチ、料理なら得意やから任せて下さい！」

「わ、私は……」

料理が苦手な明日菜は若干難色を示すも、木乃香に手を引つ張られて行き炊事道具がある車に向かう。

「シユウキさんディスクアニマルの展開おわったスよ」

別の場所でディスクアニマルを放っていたメイキが戻ってきた。

「後はマコツチと交代するのを待つだけか……」

そう言つてテントの近くに置いてあるレジャーテーブルの椅子に座る。

「あれ、昼飯の準備は？」

「木乃香ちゃんと明日菜ちゃんに頼んだよ」

「あの子達にツスカ？じゃあ俺たちは」

「……ここで番つてことだな。二人を守りながらな」

そう言つて、飯盒で米を洗っている木乃香と明日菜を見た後、周囲の樹海を見渡すシユウキ。

「特に異常がなければ、夕方には戻ってくると思うツスね」

「そうだな。早期に解決してくれのを祈るしかない。ディスクアニマルたちも何かいい情報でも持ってきてくれればいいんだがな」

上空を見ながら、周囲に放つたディスクアニマルたちの航跡を見るシユウキ。

今は何も起きず、無事に調査が終わつて欲しいと祈るだけだった。

だが……

「クンクン。ウマそうなおいだ。アイツらたべていいよね？」

すぐ近くまで、新たな敵が迫っているのにまだ気づいていなかった。

樹海の奥へと進んでいたヒビキ、キラメキ、ネギの三人。

周囲は深い木々が生い茂り、もうすぐ昼間だというのにあたりは薄暗い明るさだった。

「なんだこれは・・・」

ヒビキが移動中になぎ倒されている木々を見て足を止めた。

それに釣られるようにキラメキとネギも木々を見る。何かがぶつかった後のようにも見える。

「何かが無理やり通った後だな」

痕跡を見て、何か巨大な物が通ったと推測するキラメキ。オトロシやツチグモのように巨大な魔化魍ともなると、あたり構わず全てをなぎ倒して移動していくのがある。

「地中を移動していると思っただがな。どうやらそうでもないらしいな」

「ああ、木の倒れ方から大きさを推測して・・・おそらく身の丈40尺（約12m）以上つてところか」

周囲の荒れ具合を見て、敵の分析を始めるキラメキとヒビキ。

「（それにしてもこの足跡・・・）」

ヒビキが見つめる先には、この場所を通ったであろう怪物の足跡を見た。

様々な足跡が残されており、一度に何体か通ったのだらうと思うヒビキだが、何か引つかかるものがあつた。

「（確か襲撃してきた怪物は一体のはず。なのに、この足跡の数。まさか、他にもいるというのか）」

現地のサポーターの話では敵は大型の怪物であり、突如として、地面から現れて村の破壊行動をおこしたとのこと。だが、ヒビキの思ったとおり、話によれば一体しか現れていない。

「どうしたヒビキ。何か気づいたのか？」

「いや、特にこれとはな。それよりネギは」

そう言つて、同行していたネギの姿が見えないのに気づいたヒビキ。

少しあたりを見渡すと、近くの大きな岩の上で立っているネギを見

つけた。

「(やっぱり、魔力の気配が微弱だけど感じる。もうこの辺のはず・・・)」

一方ネギはというと、眼を瞑り何かに集中しているようだった。

実はこの樹海に入ってから妙な魔力の感じがすると行って、ヒビキたちに同行していたのだ。キラメキにしろヒビキにしろ魔力の感じは今ひとつわからないのだ(ヒビキは麻帆良学園に来てから、大方の魔力の感じはなんとなく感じるようになったと言っていたが・・・)。「ネギ、何か感じたか?」

岩の上に立っているネギを見ながら、様子を伺う。

「この周辺に魔力の残留を感じるよ。やっぱり気のせいとかじゃなかったんだ」

「そうか・・・魔法の系統はわかるか?」

「さすがにこれだけの魔力だけじゃ・・・」

微弱な魔力の痕跡だけでは、どの系統の魔法を使われたか判別はできない。しかし、なぜ人の出入りできないはずの青木ヶ原樹海で魔法の痕跡があるのか疑問に思うヒビキ。それに魔法関係者がここに訪れているのなら、関東魔法協会に連絡が入っているはず。ヒビキはそう言った件は学園長から聞かされていないため、学園長ですら認知していないだけの可能性もある。

「それが今回の事件と何か関係があるかどうかだな」

魔力の痕跡があったとしても、それが今回の事件との関連性があるかはまだ不明である。

周囲を見渡しても、先ほどの荒れた木々以外は異常は見られなかった。

ふと上空を見上げれば、シユウキたちが放ったであろうディスクアニマルの群れが見える。

「あれ、ディスクアニマルですか? あんなに一杯・・・」

同じく見ていたネギが驚きの声を上げた。いつもはヒビキが持っているのを数体しか見たことがなかったからだ。

「普段はあんなに沢山は飛ばさないんだが・・・」

「それほど、今回の件に力を入れてるってことさ。ん？」

キラメキが付近を再度見渡した時、足跡のすぐ近くに粉碎されている何かを見つけた。

「これは……」

残骸を手に取り何かを思うキラメキに、話しかけるヒビキ。

「何かあったのかキラメキ？」

「これを見るヒビキ」

「これは、ディスクアニマルか？」

キラメキが見つけたのはディスクアニマルの残骸だった。

何かに踏まれているかのような壊れ方をしている。

「この色……瑠璃狼か。ひどい壊れ方だな」

手に持っているディスクアニマル《瑠璃狼》を見るヒビキ。フレームが完全に押し曲がっており、色と頭部の部分がなければ、判別できない状態だった。

「可笑しくないか。これを散開させて、まだそこまで時間は経っていないはずだ。なのに、この現場で破壊されている」

「つまり、この跡はつい先ほどにできて、ここを調査していた瑠璃狼が謎のデカイ何かに踏み壊されたってことか。なら、まだ近くに？」

「そう考えて間違いないだろう。だが、これを壊したのはそいつだけじゃないみたいだな」

「?どういうことだ」

「さっき渡したのは一部の破片だが、こっちを見てみる」

そう言うと、残りの断片をヒビキに渡すキラメキ。

「これは、何かで切られたように寸断されてるな」

「さっきの残骸にも微かだが切られてる箇所がある」

残りの断片は先程渡したのとは違い、鋭利な刃物で切られている物だった。角度を変えてみれば、先ほどのと今手元にあるのは同一のものだとわかる。誰かが故意に切っている可能性が高かった。

「ってことは、この付近にまだいる可能性が高いな」

「だな。だが、そう言った気配が全くないってのもあるんだけどな」

そう言いながら周囲の気配を探るがここにいる三人以外の気配は

感じられなかった。

その時だった。

ヒビキが偶然向いた方の木々の隙間で何かが動くのが見えた。それを見てすぐにその咆哮へと駆け出していくヒビキ。

「お、お兄ちゃん!?!」

「ヒビキ!!」

突然駆け出していくヒビキに驚く二人。

「誰がいるのが見えた!?!この森に俺たち以外はいないはずだ!」

ヒビキの言葉に一瞬戸惑うもすぐさまヒビキの後を追っていく。

「グエエエエ!!」

しかし次の瞬間、突然何かの叫び声が聞こえる。

「!?ネギくん伏せるんだ!!」

「え?うわつ!?!」

キラメキがネギの頭を抑えて地面に伏せる。何かがすぐ上を通り過ぎる。すぐさま近くに地面についたのかドスンと音が鳴る。急いで上を向き状況を確認するキラメキ。

そこにいたのは、雀を大きくしたような黒い怪物といえる存在だった。

「な、なんですかあれ!?!」

巨大な雀の登場に驚くネギ。

「あれは夜雀っていう大型飛行タイプの魔化魍で、滅多に出くわす奴じゃない」

「珍しい魔化魍ってことですか?」

正面にいる巨大な鳥型魔化魍《夜雀》を見ながらキラメキに言うネギ。

「まあな、俺も文献でしか見たことがない魔化魍だ。ヒビキなら出くわしてるかもしれないがな」

夜雀は森の奥や暗い洞窟の中に潜む魔化魍であり、人里に顕れることが全くないほどである。しかし、非常に凶暴な行動が目立ち、森に迷い込んだ人間や動物、はたまた妖怪と言った類を捕食する。活動する時間は主に夜に動く。生息地も不明であり、古い文献でも詳しい内

容も記載されておらず、鬼達でもこの手の魔化魍に出会うことがない。全国を放浪していたヒビキなら出会ったこともあるかもしれないが。

「グエエエエエ!!!」

鋭いくちばしをキラメキとネギに向けて威嚇している夜雀。

「もしかしてこの魔化魍が?」

「わからない。だが、情報とはまるで違う奴だからな(しかし、こんなすぐ近くまで来ていたのにまるで気が付かなかったとはな)」

あれだけ大きな魔化魍が現れれば、何かしらの気配を感じるはずだが、夜雀がすぐそばまで来るまで気が付かなかった。

しかし、過ぎたことをいつもでも考えるわけにはいかない。キラメキは音撃戦士。目の前に現れたのは魔化魍。ならば、彼がするべきことはただ一つ。

「ネギくん、悪いけどこれ頼むよ」

「え?」

そう言つてキラメキは警察官の制帽をネギにかぶせる。

今更であるが、ヒビキもキラメキも警察官の制服を着用している。

「無くしたら大変だからな。頼むよ」

「は、はい」

そう言うと、キラメキは装備帯にぶら下げている変身音叉を手にする。

そして、指で音叉を弾き、音叉を共鳴させ、額へと移動させていく。

「煌鬼!」
キラメキ

その言葉と同時に額に鬼の顔が浮かび上がった瞬間、周囲に金色のオーラが包み、それを手で振り払う。

頭部が鮎鉾シヤチホコにかみつかれた様なエキセントリックな外観をしており、全身が金色を基調とそた派手な色をしていた。

「グエエエエエエエ!!!」

煌鬼を見た瞬間、威嚇するように奇声を上げる夜雀。そのまま真正面にいる煌鬼に突撃する。煌鬼はすかさず音叉を取り出す。

「音叉剣!」

音叉剣に？化させて、食いかかろうとするくちばしを抑えて正面から食い止める。しかし、夜雀の力が一步大きいのかジワリジワリと後ろに後退させられる。

「キラメキさん！」

それを見ていたネギが杖を構えて攻撃しよとする。

「グエツ!!」

しかし、それが見えていたのか夜雀は翼を大きく広げると、漆黒の翼からまるで手裏剣のように羽がネギ目掛けて飛び出していく。

「くつ、デフレクシオー風楯！」

咄嗟に風の障壁を発動させて、攻撃を防御する。

「ネギくん……このおお!!」

何とか体制を立て直し、夜雀を押しかけす。

「グエツ!」

急に力をかけられて一瞬よろめく夜雀。その隙に、煌鬼は音叉剣を地面に突き刺すと、両手で印を結ぶ。

「水遁・水龍弾!!」

口の部分から水龍を吐き出し、夜雀を飲み込む。高水圧の水の威力に巨体の夜雀でも踏ん張ることができず、そのまま後ろに流されていく。

「す、凄い……」

煌鬼の攻撃の威力に息を飲むネギ。自分の靴などが濡れているのも忘れるぐらいだった。

「大丈夫かいネギくん？」

「は、はい。大丈夫です！」

ネギに声を掛ける煌鬼。ネギも我に帰り、すぐさま押し流した夜雀の方を向く。

「(マズいな。初手をとることはできたが、初めてのタイプのやつだからな。早期決着をつけるべきだな)」

夜雀の能力が不明な以上は長期戦は不利と判断する煌鬼。両肩に取り付く専用音撃武器《音撃震張・列盤》に手をかける。しかし、突然周囲が黒い霧が覆い始めた。

「なんだ・・・これは・・・」

よく見れば、先ほど押し流した夜雀の方から霧が発生していた、
一体、何が起きているというのか・・・

一方、何者かがいた場所へと急行していくヒビキ。

木から木へと飛び移りながら移動していき、さながら本物の忍者の
ような動きだった。警察官の格好で。

しかし、突然後ろ方から何かの奇声が聞こえてくる。

「ん？あの叫び声は・・・っ!?」

一旦地面に降りて、声の主を思い出そうとするヒビキ。

そのときだった。手裏剣が突然、ヒビキの体に突き刺さったのだ。

「がはっ・・・」

血を吐き出し、地面に倒れるヒビキ。

すると、誰かがヒビキのすぐ近くまで降りてきた。顔を包帯で覆い
隠し、サングラスをかけ、服装は忍び装束のような黒い服装をしてい
る。そして、ゆっくりとヒビキに近づいていく。

「・・・この程度か、鬼神・・・」

拍子抜けしたのか、少し残念そうな声で言う謎の人物。

目の前で倒れているヒビキに両手にもつ血塗れの剣を構える。

「悪かったな。この程度で・・・」

「!!」

突然、上から声が聞こえすぐ上を向くと、そこには先ほど倒れたはずのヒビキが木の枝に逆さになるように立っていた。それと同時に
先ほどまで倒れていたヒビキが木の丸太に早変わりする。

「・・・変わり身・・・か」

術のネタがすぐにわかったのか、何かを納得する謎の人物。

「先に聞いとくが、誰だアンタは？一応今警察官だから、緊速《緊急速
捕》だつてできるぞ。今のは殺人未遂だからな（まああの手の輩には
絶対通じないだろうがな）」

すでに怪しき充分の格好をしている人物に思うヒビキ。どう考え
ても裏の人間だろうと思った。

「……………殺す……………」

「(やっぱり…………?)」

案の定の回答に内心ため息をつくヒビキ。

しかし、ここであることに気がついた。

「(あれは…………音叉剣か?)」

その人物の手に持っているのはなんと音叉剣だった。さすがにこ
れには驚いた。

「(どういふことだ。じゃあ、あいつは鬼なのか?…………待てよ!)」
ここでヒビキは思い出した。

以前猛士の危険リストの第壱級欄を読んでいた際に、とある人物の
特徴と自分を襲ってきた人物とよく似ていたのだ。

その者の名前は…………

「あんき暗鬼……………」

「鬼神…………俺と最高の殺し合いをしよう……………」

包帯からわからないが、明らかに笑っているような雰囲気を出して
いた。

殺戮のみを楽しむ殺人鬼とよんでも過言ではない、音撃戦士・暗鬼。

思わぬ敵との出会いに、眼を細めるヒビキ。

「行くぞ…………!!」

音叉剣を構えてヒビキ目掛けて飛びかかるアンキだった。

第三十ノ卷 《暴食の死徒》

「っ!!」

ガキンツッ!ガキンツッ!

刃と刃がぶつかり合う音が森に響く。

しかし、その攻撃の中には樹木や岩など、ところかまわず攻撃しているものまであった。

明らかにヒビキを狙つての攻撃のはずだが、よく読めないアンキの攻撃にヒビキは一旦距離をとり、相手の出方を見る。

「……………」

それを見たアンキは沈黙を保ち、ヒビキを見据える。木の影から入るの太陽の光が不気味に血の錆びた音叉剣を輝かせている。

一方ヒビキの方は、動きやすいようにと防弾チョッキ、拳銃及びホルスター類を取り外していく。

「二つ聞いていいか?」

体を身軽にして、臨戦態勢の状態になったヒビキはアンキにあることを聞こうとする。

シュパツッ! カキンツッ!

しかし、有無を言う前にアンキは手裏剣を投げつける。咄嗟に音叉剣で防ぐヒビキ。

どうやら、話し合う気はさらさら内容だと感じるヒビキ。

相手は討伐に来た鬼の猛者たちを殺害した鬼である。気を引きしまなければこちらもただでは済まない。

音叉剣を逆手に持ち構えるヒビキ。

「……………殺す……………」

何かボソツと聞こえた瞬間、包帯の隙間から見せるアンキの瞳がヒビキをとらえた。

「(何だ?急に体が重くなった……………!!)」

体が妙に重くなったのを感じたヒビキ。そして、アンキはその隙を逃さず縮地を使いをヒビキの首を刈り取ろうとする。

「くっ!」

紙一重で避けて、攻撃を躲すヒビキ。避ける際に斬撃をお見舞いする。顔に巻いている包帯に切れ目が入る。

お互い通り過ぎるように再び距離をとる両者。すると、先ほどの体が重くなる感覚がなくなったのに気づくヒビキ。

「(今のは金縛り系の術だったのか?)」

アンキが何かしらの術を施したと推測するヒビキ。その推測は間違っていないかった。アンキがヒビキにかけたのは《心の一方》。江戸初期に誕生した秘術の一つであり、使用者の目と目があった者を金縛りにすることができるのだ。だが、ある程度の耐性をもっている者には効きづらい。ヒビキは・・・というよりある程度の実力を持つものなら術の威力を下げることができる。元は暗殺を目的とした術なのだから。

逆にアンキは攻撃を加えたはずが、逆に反撃の一太刀を貰い、軽く驚いている切られた箇所を手を触れるアンキ。すると、微かに見える口元が鋭く尖っているのが見えた。

「悪いがお前にきく「俺を殺せるかあ?」」

プシューアツ

「なっ!?!」

再び話を始めようとした時、突然のアンキの言葉と共に全身から血が吹き出す。その光景に思わず驚愕の声を上げるヒビキ。すると、メキメキと不気味な音をたてながら、まるで全身の皮が剥がれていき、骨格がむき出しになっていくようだ。まるで昆虫の変態のように、空を破り脱皮のように見える。あまりの光景にただ見るしかなかったヒビキ。

そこにいたのは、全身は血のように赤く、そこに骨のような白い模様がしかれている、まるで皮膚が剥がれた生物のような姿をした二本角の持つ鬼だった。

「(想像以上だな・・・それに・・・)」

独自の頭部や姿をもつ鬼の中でも、グロテスクな変身しかり、ひときわ不気味さと異形ともいえる姿に驚く。そして何よりこの暗鬼は手に持っている音叉剣を戻さず、変身音叉なしで変身した。音叉なし

で鬼に変身するということは、鬼の力を完全に制御しているということ。それはすなわち人間としても、鬼としても、更なる高み・・・大げさかもしれないが神に近づいたと至ったということでもある・・・だが、そうではない場合もある。

牛鬼・・・憎悪、憤怒により、鬼の力を誤った鬼がなる“魔化魍”である。変身音叉による補助も関係なく変身し、理性も知性もなく人々を食いつくす化け物になる（ここ数年で確認されているのは九州支部の乗鬼ジョウキと呼ばれる鬼が牛鬼に変貌している）。

そして、もう一つが《邪鬼》と呼ばれる牛鬼以上に危険な存在である。ある意味で音撃戦士としての鬼を越えた存在だが、それは邪悪な存在であり、人間体に留まった狂気の塊でもある。

それらの接点が今目の前にいる暗鬼に当てはまるかといえば、不明ではあるが、少なくともただの鬼ではないと判断したヒビキは音叉剣を音叉に戻し近くに木に共鳴させる。

「・・・殺す!!」

ヒビキの変身など待つ気がないのか、音叉剣を構えて突っ込む暗鬼。気づいたヒビキは額に音叉を持って行くと、高くジャンプする。紫の炎がヒビキを包むと、同時に腰に下げている緑黄大鷹を展開する。それと同時に突然の疾風が暗鬼を襲う。一瞬グラつくがすぐに体制を立て直す。

「なに?」

上空を見上げた暗鬼は展開した緑黄大鷹はそのまま響鬼の鎧となるように装着されるのを見る。

— 響鬼・翔 —

風属性となり、飛翔する力を手に入れた響鬼の姿だった。

響鬼は翼を展開させ空中を飛翔する。その間にも音撃管・翔風で暗鬼を射撃する。

「はっ!」

しかし、それを物ともせず、素早い動きで弾丸をかわし、木に足をつけ響鬼にいる上空へと移動する。

達人でさえもその桁外れの移動速度をだしている暗鬼を視認する

以前のエヴァンジェリンや刹那の時の戦いとは違い、目の前にいる奴は初見からわかるように危険人物。猛士から鬼祓いを出されており、その鬼ですら殺している人物に慈悲とは無縁だった。情報は欲しいが暗鬼が何か喋るとは到底思えなかった。響鬼も目つきを鋭くし、音叉剣と翔風を構える。

お互い睨み合っただけで、周囲の木々が震えている。だが、その沈黙も一瞬で終わりを告げる。

突然、周囲に黒い霧が現れる。

「この霧は……」

「……ちつ、あの糞鳥。所詮魔化魍か……」

すると、暗鬼はその霧が何かわかったようで、響鬼とは反対方向にある木に飛び移る。

「どこに行く!」

「邪魔が入った。それだけだ……次に会ったらお前を確実に殺す」

先ほどまで、殺気丸出しだった暗鬼とは思えないほど冷静な口調でそう言うと、高くジャンプし姿をくまます。響鬼は逃がすまいと追おうとするが、黒い霧に阻まれる。鬼導眼で感知しようとした時。

「クエエエエエ!!」

「!?あれは……夜雀か!」

何かの鳴き声が聞こえて、声の方を振り向くと、黒い霧に紛れるように全速力でこちらに向かってくる魔化魍・夜雀だった。夜雀は響鬼を視認したのか、急に止まった衝撃で砂埃をまき散らす。

「逃すかあつ!!!」

そして、その跡を追ってくるように、煌鬼とその後ろを杖に乗り追跡していたネギだった。

「煌鬼!ネギ!」

「お兄ちゃん!ここにいたの!」

「探したぞ響鬼。ってなんだその姿は?まるで羽撃鬼さんのような……」

響鬼の隣に立つように着地する煌鬼とネギ。煌鬼は姿が変貌している響鬼に驚く。ぱっと見が戦鬼・羽撃鬼にそっくりだったのだ。色は

違うが。

「緑の響鬼だ。洒落てるだろ」

「緑に響鬼？まさか、属性変換か？」

「さすがの観察眼だな。色々説明してやりたいが、今は目の前の黒雀を倒すのが先だ」

黒い霧を纏う夜雀を見る響鬼。

「お兄ちゃんやっぱり知ってたんだ」

「え？」

ネギの言葉に首をかしげる響鬼。煌鬼が言っていたように、響鬼が夜雀を知っているのは当たっていたようだ。

「それよりあの黒い霧は何なんだ？いきなり吹き出して、姿をくらまして」

「あれはただ逃げるために噴出してる霧だ」

「それだけなの？」

「ああ、だが夜雀の羽には注意しろ。触れたらしばらく眼が見えなくなる」

そう言うと、夜雀は翼を大きく広げると羽が矢のように振りかかる。三人はそれぞれ別の方向に避ける。

「お前が言ったから、攻撃してきたんじゃないのか！」

「俺のせいだよ！うおっと」

煌鬼の皮肉を聞いて反論する響鬼。先ほどまで、本気の殺し合いを展開しようとしたのが馬鹿っぽく思えてきた。

「ネギ、あいつの動きを捉えられるか！」

「やってみるよ！ラス・テル・マ・スキル・マギステル。一風の精霊30人。縛鎖となりて敵を捕まえろ。魔法の射手・戒めの風矢！」

杖から放たれた30の風の矢が夜雀を捉える。全身を捕縛されて、激しく抵抗する夜雀。

「ぐっ！」

すさまじい力に引っ張られて、何とか踏ん張るネギ。その隙に二人の鬼は攻撃準備に入る。

「行くぞ煌鬼！」

「ああ！」

響鬼は翔風、煌鬼は両肩の烈盤を手取る。翔風から三発の鬼石を夜雀に打ち込む。

「音撃射・衆牙滅裂！」
おんげきしゃ しゅうがめつれつ

息を吹き込み、翔風から衆鬼の技《音撃射・衆牙滅裂》を浴びせる。

「音撃拍・軽佻訃爆！」
おんげきひょう けいちようふばく

煌鬼は、両手にもつ烈盤をシンバルのように打ち合わせ、同じく夜雀に清めの音を流し込んでいく。

竜巻の如く発動させた二人の音撃を喰らい、近くにある岩場まで吹っ飛ぶ夜雀。

「グエエエエエエエエツ!?」

ドゴツ!!

耐え切れなくなり、爆発と共に塵芥となり自然に還る夜雀。残ったのは夜雀だってであろう白い砂だけだった。

「終わったか……」

「はあ……はあ……」

先ほどまで、夜雀を食い止めてくれていたネギは息を切らして地面に座り込む。自分より遥かに大きい夜雀を小さな体のネギが食い止めていたのだ。疲れるのも当然だった。

「大丈夫かネギ？」

「うん、なんとか……すごかったよ」

先ほどの二人の音撃を見て、圧巻したネギ。

「いい勉強になったか？一旦戻ろう。さつき凄いのが出たからな。色々説明がいる」

暗鬼のことや夜雀のことなど、わずか数十分で起きた件を整理する必要があった。

「そういえば、響鬼。その格好もそうだが、ここに何かあったのか？」

「色々だ。予想外の奴がいた」

「予想外？」

「ああ、それは「お兄ちゃん！煌鬼さん！」どうしたネギ？」

煌鬼に先ほどの件を言おとした時、ネギが二人を呼ぶ。

「ものすごい魔力がするんだ。明日菜さんたちがいる野営から！」
「何!?!」

思わず二人の声がハモる響鬼と煌鬼。

「今出たのか？魔法使いか？」

「わからない。だけど、とても強力な魔力だよ」

「向こうにはシュウキもメイキもいるはずだが」

「念の為に援護に行こう。この樹海はやばいのがいる」

そう言って、明日菜たちがいる方向に歩いて行く響鬼。

「やばいのって何だ？」

煌鬼がそう言うのと、振り向いて言う。

「……鬼記簿第一級欄《暗鬼》がいたんだよ」

「本当か……」

青木ヶ原樹海 野営地 12:03

「いだけきまあす!!」

ドゴオツ!!

「ぐおっ!」

「シュウキ先輩!」

つい数分前に現れた謎の肥満体型の化け物に襲われていた野営組。気配もなく有無を言わず「たべていい？」とだけで、いきなり明日菜と木乃香をくおうとしたのだ。

間一髪で二人を助けだしたシュウキ。

そして、今に至る。

「こいつ、太ってるくせになんて素早いんだ」

シュウキが攻撃を避けて、そのまま岩に突っ込んでなんとか抜けだそうとしている敵に言う。体は丸い巨漢な肥満体系で目は赤く、姿は豚で頭に羊の角を二本早し、背中に小さい小悪魔のような翼が生えている、とても人間とはいえる姿ではなかった。

「悪魔つてのはああいうの言うんだろーな」

「でも、なんか思ってたのと違うっすけど・・・」

よく本とかTVで見る悪魔の姿とはイメージがかけ離れていたのだが・・・

「シユウキさん・・・」

二人の後ろにいる明日菜と木乃香が心配そうに声をかける。だが、その裏腹に彼女たちの足が震えていた。

無理もない、最初に攻撃を受けたのは彼女たちなのだから。

「大丈夫だよふたりとも。君たちの先生に約束したからね」

「まあ、ここを任せられた俺達の責任もありますからね」

「それを言うなよー！」

そういいながらも、二人は音撃管《衆牙》、音撃真弦《烈鳴》を構える。

「ううん、あうっ！」

目の前にいる悪魔(?)は岩から抜け出し、フラフラになりながらシユウキたちを向く。

「お前ら、じっとしてろよ。食べられないだろー！」

なんとも気が抜けるような声で喋る。

「誰が、お前みたいなのデブに食われるかよー！」

「おで、デブじゃない。おでの名前はデブだ！」

デブと言われて反応したのか、悪魔は自身の名前をわざわざ教えてくれた。

「何か、あのデブってやつおつむが弱いのか？」

「かもしれないですね。なんか動きも子供っぽいというか・・・」

威力の強い突進攻撃などをかましてくるが、非常に猪突猛進の行動だった。だが、逆にパターンが読めず、まるで子供が戯れているようだった。おまけに食い意地が張っているのか、食うことしか脳がないようである。

「おい、お前の目的はなんだんだー！」

「もくてきっ?もくてき?なあにそおれ?」

口に指を食わえて、?マークを浮かべるデブ。

「……こいつ、ぶっ倒していいっすか？」

「バカ、倒すなら目的吐かせてからだ」

ふざけた対応に、若干こめかみ辺りに筋を浮かべるメイキ。それを見てたしなめるシュウキだが、目の前にいるふざけた姿にふざけた対応になんともいえない感じになる場。

「ああ、思い出した。そこの女連れて行くんだあつ！」

そう言っつて、木乃香の方を指さすブブ。それを見て一瞬ビクつく木乃香。

「(木乃香ちゃんを？ どういうことだ……まさかこのブブつて悪魔は)」

木乃香を名指して狙いに来たということは、ブブはヒビキの言っつていたドウメキの関係者ではないかと思つた。昨日の樹海付近の村での就寝の際にヒビキがシュウキやキラメキたちに事情を話しているのを思い出す。

狙いは『近衛木乃香』

ただ、それだけだった。狙いはわからない。

それが、今回の青木ヶ原の件との関係などわからない。

「メイキ」

「はい？」

「あの悪魔を生け捕るぞ。絶対に彼女たちを守るぞ」

「わかつてるっすよ。とっ捕まえて洗いざらい吐かせましょう」

二人は変身鬼笛、変身鬼弦を構える。

「くるの？くるの？なら、たべていいよね？」

向かってくる敵を倒すため、関東十一鬼が二人《衆鬼》と《鳴鬼》が動く。

第三十一ノ卷 《暴食の魔》

「もうすぐシユウキたちのいる野営だ」

樹と木の合間を抜けながら、自分たちの野営へと向かっている響鬼達。まだ到着まで距離があるが、微かにだがドオオン、ドオオンと何かの音が聞こえてきた。

「この音、まさか戦闘が？」

「あまり考えたくないがな・・・」

爆音とも取れる音を聞いて、すでに戦闘が始まっているのでは推測する煌鬼。それに同調するように相槌をうつ響鬼。

「明日菜さん、木乃香さん・・・」

響鬼におんぶされているネギが不安そうな声で、二人の心配をすする。すぐにでも、杖に乗って明日菜たちのいる野営へと飛びたかったが、響鬼から上空での移動は危険すぎると言われ、早い移動手段として響鬼の背中に収まったのだ。

「ネギ、今はシユウキ達を信じるんだ」

「お兄ちゃん・・・」

響鬼にそう言われるが、心のなかではやはり心配だったネギ。しかし、今更どうこう言っても生姜ない。今は響鬼の言う通り、シユウキとメイキを信じるのみ。

「急ぐぞ響鬼！」

スピードを上げ始める煌鬼。煌鬼自身も先ほどの響鬼の話聞き、心配になっていた。

暗鬼・・・この名前を聞いた時は、響鬼の悪い冗談かと思った。

「もし、響鬼の話が本当なら。暗鬼は退却したって話だが・・・」

「煌鬼、前に暗鬼の鬼祓に行つたのお前だったな」

鬼記簿の資料に暗鬼の鬼祓に向かった鬼の名前に煌鬼の名前が載っているのを覚えていた響鬼は煌鬼に聞く。煌鬼は思い出すように話す。

「ああ、後方支援で応援に来ていた・・・結局は何もできなかったがな・・・」

煌鬼は暗鬼に一度だけ会ったことがある。1年前に行われた暗鬼の鬼祓いと戦いであった。

当時、後方支援ということで応援に駆けつけていた煌鬼。しかし、その戦闘で見たのは壮絶なものだった。前線に向かった関西、九州、四国支部から鬼祓いとして招集された鬼（音撃）戦士4名の内、3名が死亡し、1名が再起不能の重症を負わされる事態になり、煌鬼が駆けつけた時、すでに退却しようとする暗鬼を見たのだ。

血に塗れたその姿は、まさに羅刹悪鬼と呼ぶにふさわしかった。本当に同じ鬼なのかと疑った……

その暗鬼がこの森にいる。それだけでもう充分危険なのはわかっていた。

「俺も直接戦闘したわけじゃないからハッキリわからないが、あの時戦死した鬼は全員ベテラン揃いだった。実力的には俺以上のな。それをものの数分で殺した……」

「たった一人で……」

ネギも鬼の力がどれだけ凄いかわかっているつもりだった。相手が手練の鬼が沢山いて、それをたった一人で倒したのに驚くネギ。

「(百目鬼につづいて暗鬼……なぜ今になって行動を見せるんだ?)」
百目鬼にしろ暗鬼にしろ、ここ数年表舞台上が上がってこなかった鬼である。それがこの時期に動き始めたのが謎だった。

『はあああああっ!!』

森の奥から微かに誰かの声が聴こえる。

「この声、シユウキか!」

「もう近くだ。スピードを上げるぞー!」

声の主がシユウキとわかり、更にスピードを上げる響鬼と煌鬼。

**

響鬼たちがまもなく到着しようとしている頃、ブブと戦闘を行っていた衆鬼と鳴鬼。

「はあああああつっ！」

シュンツッ！ダユンツッ！

「うおっ!？」

衆鬼の拳がブブの腹に入るが、分厚い肉が攻撃を弾き返す。

「うう、ちよつといたい．．．」

ブブは軽くお腹をさすると、すぐに衆鬼たちを見る。

「今のでちよつとかよ」

割りとは本気で放ったつもりだったが、あまり効いていないのを見て、手に力を込める衆鬼。鳴鬼も音撃真弦「烈鳴」を構えて、先ほどから斬りかかるも。

ザシュツッ！シュウ．．．

「くそっ！こいつどんだけ再生能力高いんだ！」

斬っても斬ってもすぐに傷が再生し、ダメージが通らない。更にブブの攻撃も強力な一撃ばかりであり、パンチ一発一発が重く、地面に亀裂走らせる威力だった。

「おまえらの相手疲れた」

カツ！

ブブの口から紫色の光線が衆鬼目掛けて放たれる。衆鬼は右足に鬼力をためて、一気に踏み切り光線を避ける。

「明日菜ちゃん、木乃香ちゃん何かに掴まってるんだ！」

衆鬼の言葉を聞き、一瞬「え？」と思うがすぐに言われた通り近くにある樹の幹をしつかり掴む。

その間に両手で印を結び、大きく息を吸い込む。

「風遁・大突破！」

吸い込んだ息を一気に吐き出し、強烈な突風がブブを襲う。

「きやあつ!？」

そこまで近くにいないはずの明日菜達の場所まで風が吹き荒れる。しかし、ブブは「あううう」と言うだけで、術があまり効いていないようではなかった。

「紫電爆拳！」

しかし、鳴鬼は突風の風圧を利用し風に乗りながらブブ目掛けて鬼

闘術・紫電爆拳を打ち込む。スピードとパワーが合わさった紫電爆拳がブブの土手っ腹に直撃し。

バチツ！ドゴツ！！

「あうううっ！！」

直撃した瞬間に雷撃が炸裂し、後方に吹っ飛んでいく。そのまま岩にぶつかると、衝撃で岩が粉々になる。

「どうだ鳴鬼？」

「手応えはあったっス。でも油断はできないっスよ」

砂煙が立ち込める方を見る衆鬼と鳴鬼。

その予想は的中だった。ゆっくりと動く丸い巨体がシューウつと音をたてて、中身が飛び出していた臓器や骨が再生されていく。

「あいつ、あれだけの傷も再生するのか・・・」

何事もなかったかのように、頭をかきながらこちらに歩いてくるブブ。

「もうおわり？おわり？じゃあたべていいよね？」

そう言つて、にやけながらこちらに向かってくるブブ。攻撃が全て瞬時に再生されてしまつては最悪、長期戦になる可能性もある。

ここはこの戦闘の爆音や煙で気づいた響鬼たちがここに駆けつけてくれるのを待つか・・・

「いや、ここは奴の再生能力が無限かどうかはまだわかっていない。幸いあの豚野郎の動きは恐ろしく鈍い（鳴鬼、ヤツに來打蹴ライダーキックをお見舞いして音撃を流しこむ）」

「わかったっス！」

まだヤツの再生能力が無限かどうかはわかっていない。ここはゴリ押しでも、攻撃を喰らわせるしかない。それに相手恐らく魔族。音撃による攻撃に掛けるしかない。

そして二人は右足を突き出し、自身の属性を集中させる。

「なあに？」

なにか動きがあったのを確認したブブ。すると二人は同時に走り出していく。そして空高く飛び上がり、そのままつきだした右足をブブ目掛けて打撃を与える。

「ダブル・来打蹴ライダーキック！」

「あうはうあはやあああ!!」

風と雷の属性を浴びた飛び蹴りを喰らい、再び吹っ飛ぶブブ。今度は先ほどの拳撃とは比べ物にならない。大玉のように転がっていくブブの体は岩、樹を砕きなぎ倒していく。

「す、凄い……」

「ほええ、凄い攻撃や……」

戦闘を見ていた明日菜と木乃香はただただ驚くだけだった。以前、響鬼やネギの見たことがあったが、ここまで凄い戦闘は初めてだった（ちなみに二人は響鬼とエヴァのトンデモバトルを見ていない）。

「ちよつとズレてたぞ。練習サボってたな？」

「あの技はあんまし使わないっすから。どっちかというとなんは足より拳ですから……」

そう言っつて、拳をつきだしてアピールする鳴鬼。「ああ、そういうばそうだったな」と衆鬼は思い出し、吹っ飛んでいったブブの方を見る。

「鳴鬼援護を頼む。衆牙滅裂でいつきに終わらせる」

「わかったっすよ。俺の雷遁で動けないようにします」

二人はトドメを指すべくブブの元に向かおうとした。

「なんかもう決着かしら？」

「そ、そうみたいやね。凄い爆発したからなあ」

明日菜と木乃香は完全に二人の戦闘に見入っていた。

だからこそ気づいていなかった。

「そうね。終わりよあなたたち」

後ろにいる人物に

「え？」

不意に話しかけられ、マヌケな声を出す明日菜と木乃香。黒の外套の謎の人物が手を差し出そうしている。二人の声に気づく衆鬼。

「しまった!」

「くっ!!」

鳴鬼も気づくが、距離が若干遠く間に合わない。衆牙を外套を纏う人物に抜けるが射線上に明日菜がいて射てなかった。

その時、無数の光の矢が外套の人物を妨げる。咄嗟に手を引っ込め、距離をとる。

「明日菜さん!木乃香さん!」

「ネギ!誠先生!」

「ネギくん!」

二人が目にしたのは杖を構えたネギをおんぶしている響鬼だった。遅れるように煌鬼が到着する。

「やっぱり敵はここを嗅ぎつけていたのか」

「衆鬼、鳴鬼状況は?」

二人を守るように前に出る響鬼とネギ。煌鬼は衆鬼と鳴鬼に状況を聞く。

「簡潔に言おうと、もう一匹いましたけどアツチに吹っ飛んでいます」

親指で、ブブが吹っ飛んでる方向を指す衆鬼。そして新たに現れた敵の方を見る。

「関東十一鬼の衆鬼、鳴鬼。東海支部最強の戦鬼・煌鬼、鬼神・響鬼。そしてサウザンドマスターの息子ネギ・スプリングフィールド。さすがにこれだけのメンバー相手にするのはきついわね」

エコーの掛かった声で判別しづらいが、口調からして女なのだろうか。しかし、そんなことよりも目の前の謎の女はここにいるメンバーの名前を知っている。

「なんで俺達のことを知っている?お前は一体」

「悪いけど今は答えられないわ。ブブ!」

女はブブの名前をを呼ぶとブブは元気一杯の声で答える。

「はぁ〜い！」

ドスンツと音を立てて、あれだけ離れた位置から跳躍してきたブブ。しかし、まだ先ほどの攻撃を受けた傷が再生の途中であり、所々骨がむき出しになっていた。

「随分やられてるわね」

「うん、あいつらがやったんだ。おでたくさん死んだ。でもウオーターが来てくれたからへっちゃら」

まるで子供のように喜んでるブブ。どうやら女の名前はウオーターと呼ばれているようだ。

「なら帰ってから沢山食べるといいわ」

「やったあ！」

両手を上げて喜んでるブブ。するとウオーターは手に札のようなのを出す。札に六芒星の文様が描かれていた。

「あれは転移魔法符！」

「逃げる気か！」

ネギが札を即座に転移魔法符だとわかると、翔風を構える響鬼。しかし、それを物ともしないのか反撃するような素振りを見せないウオーターは響鬼たちに言う。

「また会いましょう」

そう言い残すと、完全に姿を消してしまう。

「ネギ、近くにあの魔族の魔力の反応を感じるか？」

「ううん、何も感じない・・・かなり遠い場所に転移したのかも」

ネギも完全にブブの魔力の反応をロストする。衆鬼たちもあたりを見渡すが見えるのは樹や岩ばかり、気配も完全に消えていた。

「完全に逃げられたな」

「みたいだな。悪いマコツチ。油断してた・・・」

ネギ達の援護がなければ、明日菜と木乃香は完全にアウトだった。珍しく顔を落とす衆鬼。

「結果的には助かったんだ。お前らしくもない。それよりも今はあの魔族たちだ」

「……だよなあマコツチ!!なははは!あの豚みたいな悪魔何だかなあ」

「(こいついつかしばく。あとマコツチじゃねえ)」

ハイテンションでポジティブ。これが衆鬼である。

「大丈夫でしたか明日菜さん、木乃香さん」

「うん、なんともないわよ」

「ネギくんが助けてくれたらなあ。ありがとうな」

ネギは心配になっていた二人の元に向かい安否を確認するも、ふたりとも大した怪我もなかった。

しかし、若干小刻み足を震わせているようにも見えた。

それを見ていた響鬼は、拳を握りしめる。

「(怖かったんだな二人とも……!!)」

ふとネギの方を見ると、彼の右手も拳を力強く握っていた。ネギも悔しかったんだろう。自分の生徒を危険な件に巻き込んでしまったのを。始まりは全て自分が招いてしまったのだから。

「響鬼、一度この樹海を出たほうがいいだろ。まだあのさっきの連中が本当に撤退したかどうかわからないからな」

煌鬼がこの樹海から脱出し、村への戻る案を出す。これを聞いて響鬼は考えこむと、すぐに返答をする。

「そうだな。ちょうどディスクアニマルたちも戻ってきたみたいだし」

衆鬼たちが放ったディスクアニマルたちが戻ってくるのが見えた。

しかし、その量が半端無く多かった。

「あれ全部俺達がやるのか?」

「どんだけ飛ばしてんだお前ら……」

「あるだけ全部(約250体)」

持ってきたディスクアニマルを戦分飛ばしていた衆鬼だった。

全部飛ばすと充電が大変になるため、分けて飛ばすはずだったのだ。

3月28日(金) 17:20

麻帆良学園都市 世界樹広場 とある喫茶店にて

「なにい!?!ヒビキの奴、今学園にいないのか?」

ドンつと机を叩き、立ち上がるチシキこと岳氏 学。

麻帆良学園の近くに森の川に流れ着いたチシキは古菲と楓と真名に拾われたが、すぐに気を失ってしまい、病院に運ばれたチシキはただの疲労と空腹だと判断されて丸一日眠ってしまっていた。

そしてつい一時間前に目が覚めたチシキは、エヴァンジェリンの花粉症の薬をもらいに来ていたゲンキとたまたまばったり会い、身元引受人ということで退院したあと、こうして喫茶店で話をしていたのだ。

「え、ええ。今は外部に出ていますけど。チシキさん聞いてないんですか?」

「俺は麻帆良学園に向かうので頭一杯だからここ最近の情報は……それよりもなんでゲンキくんがここにいるんだ?」

「そこからですか……」

「いやあ、ヒビキがなあ麻帆良学園に行くつてのは聞いてただけど。その後、色々あつてしばらく放浪してただよ」

ヒビキが麻帆良学園に行くといつて、とある実験のためにおいかげようとしたが準備もできていなかったため、色々やっているうちに迷ってしまい、川に流れるはめになつてしまったらしい。

「しかし、わざわざ麻帆良学園に来た目的がヒビキさんだけなんですか?」

「ああ勿論。麻帆良の頭脳と言われている人物に会いに来たのさ」
「麻帆良の頭脳ですか?」

どっかで聞いたような聞かなかったようなと記憶の中を巡るゲンキ。確かヒビキがクラスのなんとやら……

グウ……

どこからか腹の虫が鳴る音がする。

「ああ、俺だ。そういえば腹減って倒れたの忘れてた。どこか美味しい店とか知ってるかい？」

空腹で病院に運ばれたのを思い出すチシキ。点滴だけでは腹が膨れないのだろう。腹が減ってはなんとやらと先に食事を済ませようと考えた。チシキに聞かれて「うくん」とかかんがえると、やはりここはヒビキおすすめの店であるあの店。

「それなら、ここへ行けばいいですよ」

そう言っただけでチシキは財布の中の食券をチシキに渡す。

「超・・・包子？」

「ヒビキさんおすすめのおいしい中華の屋台なんですよ」

紹介したのは、学園NO1屋台《超包子》。ゲンキも一度ヒビキに連れられていったことがある、味は文句なしの最高の味だった。

「へく。ゲンキくんはいかないのか？」

「僕は『prrrrr! prrrrr!』電話?すみません少し席を外します」

そう言っただけで、席から立ち上がり、携帯電話に出るゲンキ。電話の相手は茶々丸からであり、どうやら今日は外で外食なさってくださいとのことだった。エヴァンジェリンの看病で今晚の夕食を買ってなかったらしい。

「どうやら一緒に食べることができそうです」

「よし!3日間食べてないぶん取り戻さないと!」

「そんな食べてなかったんですか!？」

予想外の発言に驚くゲンキだった。

果たして超包子に向かった二人の運命は？

第三十二ノ卷 《休息／暗躍》

3月28日（金） 18：30

麻帆良学園 超包子がある露店広場

春休み真っ最中なのか、それともいつもの賑なのか。今日も超包子には沢山の人が四葉五月の料理を美味しそうに食べていた。勿論その中に、空腹でたまらなかつたチシキと紹介したゲンキの姿があった。

「美味い！ホントに美味い！」

目の前に用意された炒飯、餃子、春巻き、肉まんを食べながら素直に感想を漏らすチシキ。隣でラーメンを食べていたゲンキは「紹介してよかった」と思った。

「ゲンキくん、これは本当に美味しいな。一体どうやったらこんな料理が・・・やっぱり美味しい」

レンゲに掬っている炒飯を見ながら、目を輝かせて食べる。

「この焼き加減といい、調味料の絶妙なスパイス。俺も料理にはそれなりに煩いんだが、この料理は文句のつけようがない。元々中華料理というのは火が命とよく言われているんだが、この料理の火加減はそれを見事に出している。この炒飯に一番重要なこのパラパラ感のある食感を出すのはひとえに簡単とは言えない。なぜなら本当にやろうと思えば、秒単位の時間と最適な温度がいるからな。前に中国の鉄人料理人の本を読んだ時に・・・etc」

突然、料理の科学知識を語りだすチシキ。それもどこからであるのか、次々と難しい話をする。

「(ははは・・・凄いな。やっぱりヒビキさん達の言ってた通りの人だな)」

若干苦笑いを浮かべながら、黙々と語りだすチシキを見るゲンキ。

彼は探究心の塊のようなものであり、興味を持つものを徹底的に研究する。今語っている料理の話も実際に自分で料理本や自伝を読みあさり、それを実行している（料理の味も美味しいが、本人はそれだけ

が料理じゃないと言っている)。

チシキは東京大学工学部及び特例で理学部にも席を置いており、東大ぎつての天才科学者ともいわれている。だが、科学者でありながら精神論や非論理的なことも受け入れている変わった人物でもある。科学者にとつて非科学的なことは嫌う傾向だが、最もチシキは鬼なのでそこらへんはすでに非科学的なのかもしれないが。

—なんだが、難しい話をしていきますねお連れの方—

「あ、四葉さん。ごちそうになつてます」

声をかけてきたのはこの超包子の料理を切り盛りしている四葉五月だった。両手で持つている皿には注文していた焼賣が載っている。

—はい、ご注文頂いた特別焼賣です。熱いので気をつけて食べてくださいいね—

そう言つて再び厨房の方に戻つていき、別の注文の料理を調理する。

「・・・あるからして料理は最後はやはり気持ちを込めて作るのが一番なんだ・・・あれ、俺何いつてんだろ?」

「ようやく終わりましたか。熱を込めて話してましたよ」

「いけねえ、また悪い癖が・・・」

興味があることはなぜか話してしまうチシキ、今度は味わつて食べようと思ひ、箸を進める。

すると、ゲンキが気になることを質問してきた。

「あの、それでさつき言つてた会いたい人物つて誰かわかつてるんですか?」

『『麻帆良の頭脳』の話か? 勿論だとも、彼女には直接じゃないが聞いたことがあるんでな』

「彼女? 女性の方ですか?」

「まあ、女の子つて言つたほうが正しいかな?」

「女の子なんですか?」

「うん、半年くらい前に東大であつた量子力学の定例講義の時に、麻帆良大学の研究チームが来てな。量子理論を纏めてくれたのが、その麻帆良の頭脳とよばれている女の子らしいんだ」

当時にごことを思い出しながらゲンキに話すチシキ。しかし、ゲンキは科学単語にちんぷんかんぷんであるため、よくわかつてはいなかった。

「よくわかりませんが、量子って結構難しいんですよ？」

「俺も量子理論にはあんまり興味が無いんだが、量子理論を纏めてのが14歳の女の子って聞いたときはびっくりしてな。元から科学力はぶっ飛んでるなとは思ってたが、まさか構築式を完成させたのがその娘ってのには驚いてな」

元から麻帆良学園の科学力が可笑しいというのは薄々感づいていた。明らかにオーバーテクノロジーだというのに外部には全く情報が入らず、マスコミも騒ぎもしない。チシキ自身も猛士の鬼密班きみつはんから聞いて概要を知ったのだが。

「それで興味を持ってこの麻帆良学園まで足を運んだんだよ。鬼の研究とかの話聞いてもらおうと思ってるな」

「えっ、それ本気で言ってるんですか!？」

「声が大きいぞ。あと俺は本気さ」

衝撃的な発言をするチシキに驚愕するゲンキ。猛士の技術を公開とは、鬼の秘密を公開するという事に繋がる。猛士の情報を外部の人間に、しかも今問題を起こしかけている麻帆良学園の人間に教えるのは大問題。

「・・・何かあったのか？」

「チシキさん、少しお耳いいですか？」

「え、何？」

事情を知らないのか、今起きている事態を耳元で説明する。鬼神神社や、麻帆良学園での一件を聞き、眉をしかめるチシキ。

「それ本当か？」

「本当です。恐らく僕がこの学園に派遣されたのも・・・」

「まさか、そんなことになっていたとはな。確かにそれはマズイな・・・」

猛士総本部を離れて約3ヶ月、北海道から東北にかけて異常発生した魔化魍の調査に向かっていたが、後半はチシキ一人で調査を行った

結果行方不明になってしまい、本人には猛士からの情報も入らなかったのだ（余談だが、ヒビキが東北に急遽応援で呼ばれたのは意外にこれが原因だったりもする）。調査書は東北支部に提出しているが、そのときはすでにヒビキも麻帆良学園入りしており、向かったこともその時間いたのでここまでやってきたのだ。なぜ、川から流れてきたのかは不明だったが。

食事も終わり超包子を後にして、再び世界樹周辺を歩いていた。

「そういえば今ヒビキたちは例の樹海にいるんだよな」

「ええ、まだいるはずですが。連絡も特に入っていないので。何かありましたか？」

「実はこれをヒビキに渡したかったんだがな」

懐から何かを取り出したチシキ。それは青い円盤《ディスクアニマル》だった。

「それは？」

「ふん、これはな。これまでのディスクアニマルの常識を覆す新型ディスク「それって形態変化のディスクアニマルですか？」って何で知ってるの!？」

「以前、みどりさんが同じのをヒビキさんに届けてるんですよ。僕を通してですけど」

「まさか、みどりさんが先に完成させていたとは・・・」

同じく科学技術班にいた先輩であるみどりに先を越されていたのに驚くチシキ。基礎理論こそ共に考案したが、その時は最終的に属性を何にするかで揉めたらしく最終的にどちらが先に完成させるかということになったらしい（実は実験台にされていたヒビキにとっては大迷惑だが、戦闘に大いに貢献したので知ってもさほど気にはしないだろう）。

「どうするんですかチシキさん？その天才少女にでも合うんですか？」

「……うーん。どうすつかねー。ヒビキがいる前提で動いてたから」

（この人にとって、実験の物事はヒビキさん主体で動いているんでしょうか……）

若干呆れながら話を聞くゲンキなのであった。

まだ夕暮れの時間だというのに、あたりは夜のように暗かった。

降り続ける雨が原因だろうか。雷を伴う雨が、半壊している村へと降り注ぐ。その暗闇の中にポツリと明かりを灯している建物がある。

建物の入口には『・・・村役場』の看板が見える。それはこの村にある村役場の建物だった。

樹海への滞在は危険だと判断した臨時調査隊のメンバー達は、再びこの役場へと滞在場所を変更したのだ。

村にはすでに、電気等のライフラインが停止しており供給などはされてはいない。すでに電柱や鉄塔などもなぎ倒されているからだ。だが、この役場は緊急時に自家発電による供給ができるようになっていたため、電気による心配はなかった。水に関してもここは井戸水を利用しているため、問題はなく、何よりこの役場に関しては被害があまりなかった。

ここ村役場の会議室に利用していた調査隊のメンバー達。昼間のうちに食べるはずだった明日菜と木乃香が作ってくれたカレーを食べ終えて、ひとまずの休息をとっていた。

『現在ここ青木ヶ原樹海では、警察による封鎖作業が継続され、村への侵入ができない状況が続いております。昨日、警察により調査隊が村へ入ったとのことですが、それ以降の連絡が入っておらず、今なお村への被害の原因がわかっておりません』

会議室に備え付けられているテレビでは、壊滅事件のニュースが流れていた。

「だろっうな、まだ調査終わってないからな」

テレビを見ていたキラメキはため息混じりに言う。番組では、警察からの発表が未だに行われていないことに批判的な報道をしている。つまるところ、この批判内容は全て自分達の状況がおこしているものだ。

『続いてニュースです。財団鴻上フアウンダーシヨンによるスマートブレイン社の吸収合併において鴻上会長による記者会見が・・・』
「キラメキさん、ちょっといいですか?」

シユウキがキラメキに声をかける。テレビを消して、メイキとシユウキがいるところに行く。

すぐ近くにあるホワイトボードには青木ケ原樹海の地図が貼られており、様々な色の押しピンが刺さっていた。すでにかなりの数の押しピンが地図に貼られ、ほとんどが埋め尽くされていた。

「大方ディスクアニマルたちからの情報を纏められたツスカね?」

最後の押しピンを指すと、一度シユウキの方を見るメイキ。シユウキも相槌を打つと、地図を見渡す。

「やはりキラメキさん達が言ってた、何がか通り過ぎた後っていう場所がから空きですか・・・」

「ディスクアニマルの残骸もこの辺で見つかってる。恐らくこの場所になにかある」

そう言つて、一箇所だけ不自然に押されたいない箇所を指すキラメキ。

「明日の朝、俺とシユウキ、メイキでこの場所に乗り込む」

「俺とメイキですか? マコじゃなくてヒビキは?」

調査班のメンバー選出にヒビキが入っていないのに疑問に思うシユウキ。メイキも同様に思った。

「ヒビキはこの場での調査に回ってもらう。ネギくんや彼女達の件もあるからな」

昼間に襲撃してきたブとウオーターとかいう連中についてだ。狙いは間違いなく木乃香だということもわかってる。

「魔法関連ってことですか?」

敵は魔族と魔法使い(?)であり、自分たち鬼にとっては、ある意味未知の敵でもある。

「ああ、昼間襲ってきた敵はどうやら魔族ってのらしい。この場ではつきり言うが俺達は魔法との関連が余りない。正直対応もよくわからない」

魔法使いとの確執があると言っても、お互い表沙汰にはでないため余りあうことがにのだ。特に東海支部に所属しているキラメキは、魔法というより関西の呪術者の妨害を受けるほうが多い。

「なるほど、だとしたらヒビキさんは適任かもしれないツスね。魔法使いの総本山の麻帆良学園での経験があるのなら」

「その通り、ヒビキ自身も魔族と戦闘を行ったことがあるらしいからな」

「そんなのが襲ってくる麻帆良学園って警備が甘いんツスカね？」

「さあな、ともかく今の俺達は早急にこの事件の原因を調べる必要があるのは再確認してくれ。もし魔化魍の仕業なら尚更だ。確実に対処する」

「了解しました」

決着は明日で決めると改めて意気込む三人の鬼であった。

「でも、どうして奴らは木乃香ちゃんを狙うんだろうな？」

「そうツスね。見た目は普通の女の子にしか見えないんツスけどね」

なぜ、あのブブやウオーターは木乃香を狙うのかわからなかった。

それに報告のあった百目鬼についても同様だった。

「あの娘はきつと何か特別なんだ」

「特別って言うと、何がですかキラメキさん？」

「いや、それは・・・わからん」

「ええ・・・」

何か確信したかのようキラメキが言うが、結局は勘だったようだ。だが、一つだけ引つかかることがあった。

「(近衛か・・・関西呪術協会の長も確か近衛って苗字だったよな)」
東洋呪術最大の勢力《関西呪術協会》。それを統べる長の苗字も《近衛》ではなかったかと思うキラメキ。

「まったく、相変わらずお風呂がダメなのねアンタは。流すわよ」

「すみません明日菜さん。あ、目に入ってます」

職員用風呂場では、ネギと明日菜と一緒に風呂に入っていた。風呂

嫌いのネギを明日菜が無理やり連れてきた。木乃香もくるはずだったが、誠に話があるといい明日菜一人で連れていたのだった。「ちゃんと洗わないと臭いわよ。ただでさえ、今日動きまわったんでしょ」

「あははは、森の中走ったり飛び回ったりしましたから・・・」

大した怪我ではないが、所々に擦り傷がある。明日菜たちの場所に杖に乗りながら移動しており、あの狭い木々の中を飛んできたのだ。途中で木にぶつかりそうになったり、岩場に激突しそうになっている。「気をつけなさいよね」と明日菜に言われ、苦笑いするネギ。

「そういえば木乃香さん大丈夫でしょうか？あれから元気がありませんでした」

風呂から上がり、服に着替えるネギ。即席で作ったバスタオルの仕切りの向こうにいる明日菜に木乃香のことを聞く。遅めの昼食を食べている時に、テレビの内容を見ていた木乃香の顔は暗かった。

「木乃香、今回ついてきたことかなり後悔してたらしいから・・・」
「でも、木乃香さん本人は刹那さんを助けてって気持ちはあつたはずですよ。それに今回の事件も木乃香さんのせいなんかじゃありません。お兄ちゃんたちもそう言ってました」

今回起きた事件は木乃香に落ち度は全くない。刹那にしてもそうだが、木乃香本人が起こしたくて起こしたわけじゃない、百目鬼という謎の鬼が起こしたことだ。そのことはネギは勿論、明日菜や誠たちも承知のことだ。

「・・・ともかく、今は木乃香さんを元氣付けることをしましょう。相談に乗れば、元氣になってくれますよ」

「そうね。あ、でも木乃香いま誠先生の所にいるはずだけど・・・」

「・・・やっぱりしっくりこないな・・・」

木乃香と明日菜が利用している宿直室の隣、習字や生花などの習い事で利用している和室で音撃棒の作成をしていた。樹海からの帰り

によさそうな樹から何本かとっていたのだ。先端に鬼石を取り付けて手触りを確認なりをしていたが、自分の感覚にあつていないのに痛感していた。暗鬼たちの襲撃で、出せる手は全て持っておきたい考えたヒビキ。会議に出席していなかったのも、会議が始まる前から、翌日の動向をキラメキと相談していたのだ。

「・・・装甲声刃を常備する必要はあるな。今後のことを考えれば」
現在、総本部に返却している小暮耕之助の最高（今の所）傑作の音撃武器《アームドセイバー装甲声刃》。かつてヒビキ自身も使用していたが、性能を抑えた量産型の制作のため返却していたのだ。声するらも音撃に変える驚異的な性能を有する剣であるが、波導が強すぎたため、オリジナルはヒビキと先代のヒビキにしか使用できない。今後の戦いでは必ず必要になると感じたヒビキは装甲声刃の入手を決めようとした。それにしても、ネギの奴遅いな・・・風呂に入るのにどんだけ掛かっているんだ？」

かれこれ30分はたっており、ネギの風呂嫌いは知っているが、まさか一人で入れないわけではと思うヒビキ。

その時、部屋のふすまが開かれる音がする。ネギが帰ってきたと思いい、顔を上げるとそこにいたのはネギではなく木乃香だった。

「木乃香。どうした？」

「先生・・・ウチついてこんほうが良かったんやないかな・・・」

「何言い出してるんだ？桜咲を取り戻すためにここまで来たんじゃないのか？」

ヒビキの前に座ると、突然の木乃香の発言に眉を顰める。

「この村の人達・・・家族も亡くして、村にも帰れへんになって・・・それなのに先生達に迷惑をかけて、こんなでせつちゃんを助けるやなんて・・・ウチ」

目に涙を貯めて、今まで貯めこんでいたかのように吐き出す木乃香。先ほど、テレビに写っていた自分たちのいる村の住人達のニュースの内容を思い出す。

「木乃香・・・」

「昼に襲ってきた人も、ウチが狙いなんや。せつちゃんを連れてった

百目鬼つて鬼も、ウチが狙いやった・・・やから」

「・・・だから、自分が全部悪いって思ってるのか？」

「・・・っ」

これまで、起きたことは全て自分に繋がっていると思ひ、全ての元凶だと吐露する木乃香。それを聞いた誠は作業をやめて、木乃香を向く。

「木乃香、自分を追い込むのはやめるんだ。お前がここまで来たのは桜咲を助けたいからだろ？」

「やけど・・・ウチ自分のことばかり考えて・・・皆に迷惑までかけて・・・」

「迷惑とか。ここにいる全員はそんなこと思っていない。それにお前がここでくじけたら・・・連れ去られた桜咲はどうなる？桜咲は木乃香の大切な友達なんだから」

「・・・先生・・・ウチ」

「困ったことがあったら人を頼っていいんだ。俺や、勿論そこにいるネギや明日菜もな」

木乃香の後ろに視線を送る誠。木乃香も同じように後ろを向くと、そこにはネギと明日菜がいた。どうやら二人の会話を聞いていたようだ。

「誠先生の言う通りよ木乃香。私はアンタが心配で力になってあげたくてここまで来たんだから。迷惑なんて全然感じたくないわよ！」

「明日菜・・・ごめんなウチ、何か色々起きてもうて・・・」

涙を拭いても、止まらない涙を明日菜が手で拭う。そのまま明日菜に抱きつき泣き出す木乃香。木乃香はもう迷わないだろう。大切な親友を助けるために。

青木ヶ原樹海最深部 謎の洋館

「うあわあああああああ!?!」

頭を抑えながら何か怯えている少女の姿《桜咲刹那》。

「見られた!!・・・このちゃんに!・・・あああああああああ」

焦点が定まらない瞳で、自分自身の秘密を知られたことにひどく同様している刹那。百目鬼に連れて来られていらい、ずっとこの状態が続いている。ただただ何かにおびえている。

「いや、いやや・・・そんな目で見んといて・・・」

怨念声刃の影響もあり、今の刹那には木乃香から激しく嫌悪の目で見られている幻影を見ているのだ。

そして、その様子を口元に笑みを浮かべている百目鬼の姿があった。

「その半妖どうにかならない？ずっと叫んだままじゃないか？」

試験官を片手に持つ和服の姿をした洋館の男が、藻掻いている刹那を見て言う。

「生涯ないでしょう？鬼幻心が不完全で完全には支配できないんだから。放っておいたら死んじやうかもしれないし。もつといい眼を作ってほしいものね」

「あれ以上の出来は不可能だ。それに今は鬼達の襲撃に備えるべきだし。ここはもう放棄するよ」

「あら、又エの方はもういいの？」

「これ以上の改良は不要だね。たらふく人間を食わせたから、なんなら鬼たちの相手をさせようか？」

子供っぽく言う洋館の男。魔化魍を合成させた合成魔化魍。5年前に作り出したヤマアラシとウブメを合成させたナナシを作り出したが、大した成果もなくこれ以降は作られることがなかった。

「その悪魔くん経由から手に入れた魔族の魔力を合成させている。5年前のとはわけが違う。実験体にしては傑作に入るよ」

そう言いながら、隅っここのほうで人間の腕のような物に齧り付いているブブを見る。

「ちよつとウオーター。そんな所でたべさせちゃダメでしょ？」

「申し訳ありません百目鬼様。昼間の戦闘で大分やられてしまったので・・・」

ブブのすぐ近くにいる深いローブを羽織るウオーターに呆れながら言う百目鬼。それに答えるように深々と頭を下げるウオーター。

「私達だけならそのロープとっていいんじゃないの？」

「このロープを脱ぐのは百目鬼様と二人の時だけです」

「ふくん、そう言ってくれるのは嬉しいけど。まあいいわ、じゃあ作戦を立てようかしらね・・・って言っても、又エを鬼たちがいる村に向かわせるだけだけどね」

部屋にある窓から見つめる先には、巨大な体を持つ合成魔化魘《又エ》。休眠状態なのか、ぴくりとも動かないでいる。

「この洋館内部にも、強化した魔化魘も徘徊してるし、中にはいくつか仕掛けがあるから迂闊に入れば大爆発。鬼でも粉々になるだろうね」
そう言うのと洋館の男は立ち上がり、机の上に置いてある手のひらサイズの石をとる。

「一足先に京都に行くよ。この***の封印石はできるだけ近くに置いておきたいから」

手に取る石を大事そうに懐にしまうと、そのまま部屋から退出していく。

「はいはい、そんな石ころ探すために半年もこんな樹海にいたなんて大したもんね。ウオーターあなたは猛士に一度戻りなさい。本部の動きを監視するのよ」

「しかし、鬼神たちの動きは。それ以前に近衛木乃香の件は・・・」

「気にすることないわ。もう生きているのが確認されればいいから、両手両足ぶった斬って、回復術でも施せばいいらしいし、あの魔化魘にも多少の知能はあるから大丈夫でしょ」

「では、百目鬼さまはこれから？」

「私も京都に向かうわ。勿論その小鳥ちゃんも一緒にね」

そう言って、端の方で怯えている刹那の方を見る百目鬼。百目鬼が何かに見えたのか「ひっ」と声を出す刹那。

「京都へ？では協会の方へ？」

「ええ、〃 関西呪術協会〃を軽く捻りに行ってくるわ」

第三十三ノ卷《又エ》

3月29日(土)

《青木ヶ原樹海》近郊の村 9:30

S i g e ヒビキ

今日もまた生憎の雨模様。不明箇所への調査に向かったキラメキたちを見送ったあと、俺はこの村の調査に乗り出していた。村の所どころにある陥没している穴に懐中電灯を当てては様子を探っている。穴に入ろうにも、完全に落盤でふさがっているため、先には進めなくなっていた。

「これで、残る穴はあと一箇所か・・・」

全部で4箇所あるうちの3つはすでに見終わっている。残りの1箇所も同様な状態であるならば、この村での調査はほぼ皆無に等しくなる。そうなれば、ここでやるべきことは村の被害状況になる。警察用の雨合羽を身にまとい、とりあえず穴の付近を使い捨てカメラで撮影していく。何? デジタルカメラ? そんなハイテク機器が使えると思うか? 世の中はまだフィルムの時代なんだ。

「誠先生。終わりましたか?」

「ああ、もうこれ以上は調べられないからな」

上に上がると、様子を見ていた明日菜達が声をかけてくる。昨日の連中がいつ襲ってくるのかわからないから、できるだけ俺やネギの近くにいたほうがいい。と言っても、4人で行動したほうがいいだが、「穴は落盤で向こうには進めない。最後の1箇所もこんな調子なら、ここでの調査はほぼ建物の損害状況だけだな」

「なら、キラメキさんたちの調査が頼みってこと?」

「そうなる・・・かな」

ネギの言うとおり、キラメキたちの方に調査の結果を期待したほうがいいかもしれない。たとえ穴が塞がっていなくても、ネギたちと共にはいけない。危険性が高過ぎるからな。

「ともかく、雨が強くなる前にもう一箇所に向かおう」

そう言って、俺を含めた4人はもう一箇所の場所に向かうことにし

た。木乃香の表情も昨日に比べれば幾分か楽になったように見える。しかし、さつきからなんか雑音というか何か・・・

「なんか、鳥が沢山飛んでるわよ」
「ん？」

明日菜が上空を見てそういうと、俺もそれに反応して上空を見る。先ほどまで森の方に雨宿りしていた野鳥達の群れが上空一杯に飛んでいた。

「ほんまや。鳥は雨の日は飛ばんはずなんやけどなあ」

「さつきまでは飛んでなかったのに」

大小様々、野鳥の種類も違うのが多いな。鳥は本能的に何かを感じると聞いたことがる。例えるなら地震などがいい例だ。もしかしたら、村での事件が起きたときも野鳥たちが騒いだかもしれない。

「一回役場に戻ろう。何か胸騒ぎがする」

俺がそう言うと、三人も納得して首を縦にふる。その時だった。突然、地面が揺れだした。

「え、地震!？」

「にしては、規模が小さくないですか？」

普通の地震にしては揺れが小さいのに疑問に感じているネギ。だが、小さい揺れもドンドン大きくなっている。

「誠先生! あれ!」

木乃香が何かに気づき指を指す。その先には、地面が大きく盛り上がっている。それはこっちに向かってきていた。あの方向は、最後の穴がある方向だ。

「走れ!」

「え?」

「いいから早く!」

だが、それを言った瞬間。まるで爆発するように地面の土が空高く盛り上がる。衝撃で舞い上がった砂煙や石などが雨のように振りかかる。

「ペッ、ペッ。砂が口の中に・・・」

明日菜が口の中に入った砂を取っている。正直そんなことやって

る状況じゃないぞ。

「言ってる場合か、ネギ二人を遠ざけてくれ」

「お兄ちゃんは!？」

俺のやることは、やって来たコイツの相手に決まってるだろ。雨合羽を脱いで装備帯を出し、腰の音撃棒《烈火(修復ver)》を手にする。三人も遠くに行くように、反対方向に走って行く。その時だった。砂煙から白い糸のようなが飛び出してきた。

「これはツチグモの糸か?」

烈火剣に変化させた音撃棒で糸を斬る。間違いない、これはツチグモの糸だ。ならばこの村を襲撃したのはツチグモってことになるのか。しかし、ツチグモは地面の中を移動したりはしないはず。もしかしたら、新型、亜種などが生まれたかもしれない。だが、そう思ってる内に今度は砂煙からは針が飛んでくる。

「やばいー!」

予想外の攻撃に後ろにいるネギ達に向かっている針に、烈火弾で対抗する。ネギ達も何が起きたのかと俺の方を振り向く。そんなの気にせず早く走れというが、ネギ達は何か恐ろしい者でも見るかのような表情になっていた。何を見てる?」

「な・・・なんだコイツは・・・!!」

振り向く先には、砂煙が晴れてやって来た奴の全貌が露わになる。

こんな奴見たことがない。一言で言ってしまうえば、もう姿が滅茶苦茶だ。先ほど放った糸も、針もツチグモやヤマアラシの物だと分かった。1つの球体(さらにその球体には目玉が多数ある)に吸収されているようにそれぞれの頭部が突き出すようになっていた。それ以外にも、見た目がなんの魔化魍の童子なのかわからないのや、魔族の類と思われる者もいる。確認できる魔化魍だけでも、ツチグモ、ヤマアラシ、オオナマズ、オオアリの頭部が見れる。全長はざっと5mは軽く超えてるな。

「魔化魍なのか・・・っ!？」

あんな魔化魍は今まで見たことがない。すると、球体部分に口のようなものが開き、空気を吐き出すように口を閉じた瞬間、衝撃のよう

なものが俺の体にあたり、一気に後方に吹き飛ばされた。

「誠先生／お兄ちゃん!!」

三人の声が聞こえた気がするが、俺の体はネギ達を飛び越えて民家の2階の窓に突っ込んだ。

side out

「はあっ．．．はあっ．．．何だ今のは？」

家屋に飛ばされたヒビキは、瓦礫を押しつけて起き上がる。謎の力があの巨大魔化魍から発生したのか、自分に何が起きたのかわからなかった。破壊された壁から巨大魔化魍の方を向くヒビキ。

「お兄ちゃん大丈夫なの！」

「ああ、なんとかな」

「って先生！頭から血が．．．」

明日菜がヒビキの頭から血が流れているのを見て心配そうに声を出す。

「これぐらいなんともない。それより、ネギ。明日菜と木乃香を連れて早く離れろ！」

「わ、わかった！明日菜さん、木乃香さんこっちに」

ヒビキが声を上げてまでネギ達に離れるように言っているのに、ネギは明日菜と木乃香と共に離れようとする。

「う、うん」

「でもネギくん、誠先生は．．．」

「わかってます。でも、僕達がいたらお兄ちゃんの邪魔になるだけです」

後ろを振り向いて、巨大魔化魍の方を見るネギ。恐らく自分がいもできることがない。悔しいが今はヒビキの言うとおり、二人を守りぬくの優先すべき。ネギは二人を先導するように家屋の角へど移動していく。

だが、それを逃さんとばかりに巨大魔化魍は再びツチグモの糸を吐き出し捕らえようとする。

「火遁・豪火滅却！」

印を結び終えたヒビキが口から炎を吐き出す。壁とかした炎はツ

チグモの糸などたやすく焼き、巨大魔化魍ごと包み込んでいく。しかし、炎など物ともせず、まっすぐに向かってくる。

「(やはり魔化魍だから効かないのか・・・なら)」

大型魔化魍相手に鬼忍術はほぼ効果がない。ヒビキは音撃棒《烈火》をもう一度手に取り、鬼石から炎を燃焼させる。

「はあっ!!」

2階から飛び降りながら、烈火弾を巨大魔化魍に向かって振るう。烈火弾はオオアリの頭部に直撃するも、大したダメージは与えていなかった。だが、ヒビキの本命はそれではなかった。

「はああああああーはあっ!!」

走っている最中に音叉を共鳴させて、響鬼へと変身していたのだ。そのまま巨大魔化魍に突っ込んでいく。

すると、再び球体の口が大きく開く。そして、先ほどと同じように空気を吐き出すように口を閉じた瞬間。

「ぐはっ!?!」

またも見えない攻撃が響鬼を襲う。そのまま数十メートル後方にふつとばされるも、何とか地面に足をつけて踏ん張るが、巨大魔化魍の攻撃の手は緩めない。針、酸、糸あらゆる魔化魍の攻撃が響鬼を襲う。

「うおっ!だっ!」

魔化魍の猛攻を避けて避けて避けまくる響鬼。電柱、木などを盾にしながら攻撃を回避。

砂煙が周辺に立ち込めていく。咄嗟にコンクリート製の建物の壁に隠れる。

「くそっ、まるで弾幕だな」

ヤマアラシが放つ数万の針の猛攻を見て、思わず言葉を漏らす響鬼。見ればみるほど、悍ましい姿をしている巨大魔化魍。

「さっきの衝撃は空気砲か何かか・・・」

最初に受けた謎の衝撃について考える響鬼。先ほどの口の開き方や閉じ方を見て、空気を吸い込みそして吐き出して攻撃をしていた。つまりは空気砲の容量で攻撃をしている。だが、その速度は恐ろしく

早く、攻撃が全く見えない。

「待てよ、空気で攻撃してくるなら煙を立てれば見えるかも」

見えないのなら、煙を立てて空気の流れを見るようにすればいいのではと考える。

と、突然何かの衝撃で壁が破壊される。巨大魔化魍の上部にいる魔族タイプの口や刺青が光ると、紫色の光線や矢が飛んでくる。

「あれは魔法の矢か！」

次は魔力による攻撃を仕掛けてくる巨大魔化魍。この攻撃のパートナーは麻帆良学園で対峙したツチグモの変異種と同じだった。だが、あれはツチグモ自体が撃ってきたのであって、魔族が体をつきだして攻撃してきたわけではない。攻撃を回避しながら、思考を巡らせる。

「このままじゃ、村が滅茶苦茶になる」

気づけば、周りは来た以上に瓦礫の山と化している。これ以上被害を出すわけにはいかないが、この場を離れば更に被害がでる。なんとかこの場で倒すしかない。だが、巨大魔化魍の攻撃は通常タイプのより強力。まだどんな能力を持っているのかも不明であり、何もわからない状況。

「あの目玉の球体のやつ。あれに取り込まれてるって考えて間違いないだろ・・・それに」

赤黒い球体の周りに飛び出している魔化魍達。どういう理由であんな姿になっているか不明だが、この村を襲撃したのは間違いないと確信した響鬼。攻撃を回避している時に響鬼は確実に見えた。空気を放つ瞬間に口を開いた中に、人間の骨や、消化しきれていない肉など見えた。

目的がどうであれ、あんな魔化魍を野放しにすればこれ以上に被害がでる。

ドゴンツッ!

再び、空気を放ち響鬼の咄嗟に隠れた壁を破壊する。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

声を上げ、烈火剣を構えて巨大魔化魍に突撃する響鬼。針や糸、魔

法の矢が一気に来るが空中にジャンプし、攻撃を避ける。

「(鬼火!)」

口から鬼火を出して牽制する。その間に、ディスクアニマル《緑黄大鷹》を展開させて響鬼・翔に形態変化する。音撃管・翔風を巨大魔化魍に圧縮空気弾を連射する。しかし、大したダメージは与えられない。攻撃で硬直している隙に上部の魔族が腕を刃に変化させて斬り裂いてくる。

ガキンつと音を立てて、音叉剣でガードする。

「はあっ!!」

そのまま力任せに魔族の刃ごと切り裂く。紫色の帰り血が響鬼の体にかかる。次に翔風を本体に押し付け装填した鬼石の弾丸を5発打ち込む。だが、突然目の前に巨大な口が現れる。

「何!!がっ!?!」

開いた瞬間、強力な空気砲が響鬼を直撃する。メキメキと音を立てて、後方の木々を薙ぎ倒し、地面にたたきつけられる。直撃を食らった響鬼の胸部から煙が上がっており、緑黄大鷹の装甲に亀裂が入っていた。

「あゝっ．．．ぶほっ．．．うおあああああ!」

先ほど食らった空気砲などとは比べ物にならない威力を受け、思わず胸に手を当てる。数十トン以上の衝撃を響鬼はモロに食らってしまったのだ。だが、その痛みを気合ではねのけ、翔風を音撃モードに変形させ《音撃射・疾風一閃》を放つ。

「ぐぎいおあさおいうあjつさじpっjぽj!!!」

何の悲鳴なのかわからない雄叫びを上げて、苦しむ巨大魔化魍。

しかし．．．

「ぎゅうおあksぢばおいうsdbほあああああ!!」

バシユツ!!バシユツ!!

巨大魔化魍が再度雄叫びを上げると、体内に打ち込んだ鬼石を弾き出したのだ。巨大魔化魍に突出しているオオナマズが何かの動作を起こす。振動波をだしているのだ。ゆつくりと地面が揺れだしている。

オオナマズは振動波を放って地殻に変動を起こして地震を発生させることができる。更なる破壊を行おうとする巨大魔化魎に、響鬼が何をしようとしているのか理解し、翔風から圧縮弾を放つ。

しかし、突然魔法障壁が展開され攻撃が防ぐ。

「障壁ーくっ」

魔法をつかってくるのなら障壁も使用してくるだろうと予想していた。揺れはまだ収まっていない、次第に大きくなってくるはず。

「これ以上させるか」

形態変化を解除し、響鬼の状態に戻すと音撃棒を構える。

「俺にはやっぱりこれだな・・・!!」

そのまま勢いよく駆け出し、音撃鼓を取り外す。巨大魔化魎は再度強力な攻撃を行い、響鬼を倒そうとするが攻撃を全力で回避する。だが、途中で攻撃を食らっているが、構わず突撃する。

「うおおおおおおお!!」

音撃鼓・火炎鼓のスイッチを最大にして押し付ける。

よおおおおお!!

火炎鼓が回転し、4 mほどの大きさになる。火炎鼓を取り付けられて、必死にもがくが身動きが取れなくなる巨大魔化魎。

「はあああああああ!」

気合の声を上げる。両手を大きく上げ、清めの音を流し込もうとする響鬼。だが・・・

バキッ!!!

「!?!」

火炎鼓に叩き付けた瞬間、音撃棒の柄が粉々に砕け散る。柄の部分が響鬼の力に耐えきれず、砕けただのだ。先端に取り付いていた鬼石が無残にも地面に落ちる。

その隙を逃さず、巨大魔化魎は火炎鼓を気合で破壊し、その巨体で響鬼に体当たりする。

「ぐおおおおお・・・!!」

押し倒された響鬼に、巨大魔化魎がのしかかり、とんでもない重量がかかる。押しつぶされないように両腕に力を込めて、必死に潰され

るのを防ぐ。

巨大魔化魍から飛び出しているオオアリが響鬼を食べようと大きな口を開ける。

その時だった。

ヨウイス・テンペスターズ フルグリエンス
「雷の・暴風!!」

雷を纏った暴風が巨大魔化魍の体を押し出す。軽くなった隙に響鬼が腕に力を込める。

「うおおおおおおおらああああ!!」

巨大の体を押し出し、脱出する。そしてすぐに雷の暴風が放たれた場所を見る響鬼。

「ネギ、何で来た!」

「やっぱり心配で、ごめん!」

「馬鹿・・・でも助かったよ」

建物の上にいるネギの所まで、ジャンプした響鬼はすぐにここまで来たことを問うが助かったことも感謝する。

「明日菜たちは?」

「私達はここです」

後ろを振り向くと、明日菜と木乃香がすぐそばにいた。

「一体どうやって・・・ぐっ・・・」

ここは屋根の上であり、ネギならまだしも、女子中学生がこんな所まで上がれるはずがない。思わずツツコもうとするが、胸に激痛が走る。

「先生!」

「大丈夫だ。ちよつと胸に來ただけだ・・・」

仮面越しで表情がわからないが、相当激痛がきていた。だが、痛みなど言ってる場合ではない。

「お兄ちゃん、音撃棒は?」

「砕けた・・・もうこれしかない」

現地修復ではやはりダメだった。音撃棒を失った今、響鬼に残されたのは音撃射による攻撃だけ。しかし、緑黄大鷹は先ほどの攻撃でディスクに亀裂が走っていた。次に同じ攻撃を喰らえば、砕けるかも

しれない。だが、今からキラメキたちに援護に来てもらうには距離がありすぎる。選択肢はこれしかのこされていなかった。

それを見たネギは、何かを決心したかのように腰に手をやる。

ネギがここに来た時からずっと巻いていた装備帯の音撃棒を手に取り、響鬼へと差し出した。

「……これを使って」

「これは……お前にやった」

それはかつて響鬼が使用し、ネギへと譲った音撃棒。

練習用音撃棒《篝火》

柄の部分は漆黒であり、先端の鬼石は赤く染まっている。すでに5年以上前に役目を終えた音撃棒であったが丁寧に手入れが施され、新品同様にも見えた。

「それってネギが大切にしていたやつじゃ」

ネギが寝泊まりしているロフトに趣味で集めているアンティーク品の中に一際大切そうに壁に飾っていたものだった。明日菜や木乃香もネギが手入れしているのを度々見ていた。

「いいんですよ。今のお兄ちゃんにはこれが必要だと……」

今の自分では、悔しいがああ魔化魍を倒すことはできない。

「ネギ……っ！」

小さな揺れが起き、砂煙が舞う方を向く響鬼。雷の暴風の直撃を食らったがはずだが、再生能力で抉られた部分を治癒している。周囲の家屋を破壊しながら、雄叫びを上げている。

「……わかった。使わせてもらう」

迷っている場合ではないと思い、篝火を受け取る響鬼。強く握りしめ、かつての武器を一瞬懐かしむ。

「三人とも、俺の後ろにいろ」

その言葉と共に響鬼の体から、白色の煙があがる。ネギはすぐに明日菜と木乃香を後ろへ下がらせる。

「えっ！ネ、ネギ！誠先生どうしちゃったの!？」

「なんか急に煙があがるとるけど……」

いきなり、煙が上がったのに驚く二人。

「大丈夫です。明日菜さん、木乃香さん」

ネギはすぐに響鬼が何をやろうとしているのかわかり、二人を後ろへ下がらせる。

「はああああああー！」

集中を高めるために、声を上げる。そのまま屋根から飛び降りる響鬼。

全身を紅に染め上げ、眼の部分はサングラスのように黒くなっていく。炎の属性を極限まで高めた響鬼の強化形態《響鬼・紅》だ。

「（修行しきれていない体じゃ紅の維持時間は短い。ならー！）」

ドスンと音をたて地面に着地し、両手の中指と人差指を十字に交差させ印を結ぶ。

「影分身の術！」

影分身の術を使用し、響鬼が三人に増える。

瓦礫を吹き飛ばし、巨大な体を移動させるヌエ。融合している魔化魍、魔族が分身した響鬼にそれぞれ攻撃をする。

「土遁・土流壁！」

印を結び分身響鬼は土流壁で飛んでくる針と糸を防ぐが、魔族の魔力の光線で破壊される。しかし、すぐさま別の分身響鬼と本体響鬼が《鬼法術・鬼火》でヌエの体を燃やし尽くす。紅により強化された鬼火はヌエの動きを封じる。融合している魔族が消し炭になっているが、この炎では確実に魔化魍を仕留めることはできない。響鬼たちはヌエを三角形になるように囲むと、そのまま炎の中にいるヌエに突撃する。

「（灼熱真紅・地の型！）」

三人の響鬼が音撃棒・篝火で清めの音をヌエに向けて流していく。紅の形態では音撃鼓を使用せず音撃打を打てるため、変わりに音撃打を打ち込むたびに紅蓮色の三つ巴の模様が浮かび上がる。

「sじゃいhdふあいおooooooooooooooooお！！」

三人による同時音撃をくらい、声にもならない雄叫びを再び上げる。

ピキッ、バキッ

「!?」

微かだが、亀裂の入る音が聞こえる。振るっている篝火に亀裂が入っていたのだ。

だが、もうそれにかまっている場合ではない。

「はあああああああああああああ!!はあああ!!!」

最後の一撃を食らわせた瞬間、模様が魔化魍に浮かび上がり爆発する。清めの音を流され土塊へと戻っていく魔化魍達。同時に分身響鬼たちも消えていく。

「はあ……はあ……はあ……」

紅を解き、通常形態へと戻る響鬼。紅形態の影分身は体力を費やす大技。ただでさえ修行をまともに行っていない状態なら更に身体的にも精神的にも疲労がでる。なんとか、響鬼への変身状態を保つのでやっとだった。

「倒したの?」

屋根の上から様子を見ていた明日菜が口を漏らす。

「どうやらそのようですね……」

「誠先生大丈夫やろか」

煙が周囲に上がる中、片膝をついている響鬼を見て心配そうに見つめる木乃香。

「あれは!?!」

ネギがふと又エがいた場所を見て驚愕した。煙が晴れた場所には、直径3mほどの漆黒の球体があったのだ。響鬼もそれに気づいたように、ゆつくりとそれを見つめる。

「なんだこれは……」

あれが融合していた魔化魍の正体とでも言うのか。見たこともない球体が内部で渦を巻くように駆け巡っている。

その時、突然巨大な爆発音がなり、地響きがする。

音がなる方を見つめると、そこは今朝方キラメキたちが向かった場所から黒煙が上がっていた。

「何アレ……爆発?」

「あそこはシユウキさんたちがいる場所ですよ」

ネギたちもその場所を見つめる。森の木からは鳥達が一斉に羽ばたいていた。

「はっ!!!」

響鬼は何を思ったのか、先ほどの球体の法を振り向いた。すると、球体が小さくなりドンドン凝縮していく。

爆弾・・・・・・・・

頭にそれがよぎった。

痕跡も残さぬために、これを送った奴が予め仕掛けていたとしたら。

一気に30cmほどになった瞬間、球体から光が溢れ出す。

刹那、全てが閃光に包まれた

第三十四ノ卷 《終末の樹海》

3月31日(月) 9:05

奈良県南部吉野 猛士総本部 会議室・鬼の間

「由々しき事態だな……」

張られた弦のような緊迫感が漂う総本部にある会議室にて、長らくの沈黙を破るかのように一人の男性が口を開く。猛士総本部副部長を務めている顔の半分を包帯で巻いている男性《段木團蔵》だ。現在猛士総本部会議室・鬼の間にて先の樹海の件に関しての緊急会議が行われていた。それぞれの振り分けられた椅子には各支部長が勢揃いしており、猛士を担う重役が集まっていた。

「本部の強奪事件に引き続き、麻帆良での強奪武器の使用、そして今回の樹海事件……どれもこれも都合がよく起きているではないか」

「何が言いたい團蔵？」

團蔵の言葉に反応するように隣に座る老人、猛士総本部長《和泉伊十郎》が眉をしかめ反応する。

「すでに感づいているだろう伊十郎。今回の事件の発端が魔法使い共ではないかということだ」

「それは……少し軽率な発言ではないですか？」

團蔵の言葉に反論するように、咄嗟に立ち上がる関東支部長兼事務局長を務めている《立花勢地郎》が言う。

「まだ事件の全容がわかっていない内に彼らの仕業にするのは……」
「ならば麻帆良の人間が怨念声刃を使用し、樹海での魔族や魔力の使用痕というには一体どう説明する？この日本で魔法を使う勢力など魔法の総本山の麻帆良学園以外になかろうに」

「……それはそうですが……」

團蔵の言葉も最ものことだと思いつつも納得がいかない勢地郎。それを見てか東北支部長の多治見江十郎も意見を述べる。

「團蔵殿、麻帆良の件は鬼が糸を引いていたという報告が入っているようですが、その件も考慮しての発言か？」

「多治見、現れた鬼はこの世に存在するはずない鬼《百日鬼》だ。あの

鬼は500年も前に死んでいる。報告した者が誤認したとしか思えん」

「しかし、報告をしたのは新藤誠。現・鬼神の響鬼が見間違いをしたとは・・・」

若干髪の毛が後退しかかった男性、北陸支部長《尾久旺太》が両腕を組んで、机の上で該当ページを見て意見を言う。麻帆良学園での事件に内容だった。

「ふん、そもそもあんな若造に鬼神の名を名乗らせるのが間違いなのだ」

誠の名が出て不機嫌になる團蔵。

「その話はすでに決まったことだぞ團蔵。あ奴の鬼神の襲名は、お前が推薦した龍鬼と一騎打ちをした上で決まったはず。今更その話をほじくり返すのはやめるんじや」

「・・・」

伊十郎に言われ、なんとも言えない表情をする團蔵。すでに誠の鬼神の名を名乗るのは正当な決闘の上で襲名している。

「（まあ、まだあ奴のことを完全に信用していないのはまだ何人もおるがの・・・）」

未だに無言のままの各支部長たちの何人かは誠を信用しきれていない者いる。

「本部長、麻帆良側や関西呪術協会から何かしらのコンタクトは？」

コの字型に配置された机の端に座っている九州支部長代理の《冴島翼》こと七人戦鬼の名を継ぐ音撃戦士《羽撃鬼》^{ハバタキ}が他勢力の状況を聞く。ちなみに音撃戦士でもあるハバタキがこの会議に出席しているのは、九州支部長が現在病氣療養のため、出席不可能であるため臨時で呼ばれたのだ。

ハバタキの質問に、不満そうな顔をする伊十郎。

「・・・麻帆良側も理事長が離れていて連絡のしようもない、関西に至っては京都に入ることも許さんなどと言っている」

—京都に入るなど？

—いつから京都は奴らの土地になったのだ？

―常識外れにもほどがあるぞ―

伊十郎の言葉を引き金に各々が関西呪術協会への不満の言葉を口にする。

「鬼密班の報告によると協会側の陰陽師たちも不穏な動きを見せているようですが・・・」

「さしずめ封眼寺派の連中が騒いでるだけであろう。何も恐れることはない」

ハバタキの意見をバツサリ切り捨てる團蔵。ハバタキも「そうですか・・・」と言つてそれ以上はいわないことにうした。

「（これはかなりやつかないことになりそうだな・・・）」

やはり納得がいかないハバタキ、内心尋常ではない事態の予感がしていた。ここ数年の間は、魔法使い側とは極力大きなぎごぎもなく経過してきた。しかし、ここ最近になり、急速に対立関係が目に見えて明らかだ。まるで、誰かが意図的にしているように。

「（ヒビキの方も重傷を負ったって聞くし）」

「・・・タキ・・・ハバタキ！」

「！トウキさん」

すぐとなり座るこの場にお袈裟を着た余り似つかわしくない格好をした人物。北海道支部長代理で出席していた《海晴徹》こと同じくハバタキと同じ七人戦鬼の一人《凍鬼》。戦国時代から続くを寺院を継ぐ仏の道を行き、外道を嫌う僧侶である。

「どうした神妙な顔をして」

「顔に出てましたか。いえ、今起きている事件の数々が何か嫌な予感して・・・」

「だろうな。俺もここにずっと前から、不吉な予感がしていた」

「予感ですか・・・」

「ああ、『悪しきモノ来たる』。そう仏の声を聞いた」

「またそれですか・・・」

トウキは仏を極めし鬼でもあるため、神仏の声を聞くことができ・・・らしいが、余り誰も信じようとはしないとかが。

「まあ、ヒビキやキラメキたちも手痛い傷を追ったのは驚いたがな。

今回の事件は、5年前の《オロチ騒乱》以上になるかもしれない」
「他勢力まで関わってるなら尚更でしょうね。その前にこつちも色々もめてるみたいですけど・・・」

中央に位置する席では本部長たちの論争が行われていたのだった。
この会議が終わるのはまだかかりそうだ・・・

『少年、誰かこないかしつかり見張っててくれよ?』

『こんな樹海の奥に人なんか来ないですよヒビキさん。早くここを出たいぐらいですよ』

『お、少年はこういう場所は嫌いか?』

『別に嫌いと言うわけじゃ・・・それよりもさつきから何やってるんですか?石をそんなに積み上げて・・・』

『なあに、ちよつとした物を隠すために結界を作ってるのさ』

『結界?何を隠してるんですか?』

『むかしくし倒された怪獣の一部さ』

新藤 誠は眼を覚ます。眠りと覚醒の中間的地域というものが存在しなかった。目を開けた時にはヒビキは既に覚醒の中樞にいた。目を覚ましてあたりを見回したとき、自分が今どこにいるのか一瞬わからなかった。

「・・・」

改めて見回した時、今自分がいる場所は病室のベットのうただたことだった。薬品の匂いがし、左腕には点滴の針が刺さっている。その時入り口のドアが開かれ、誰かが入室してくる。

「おや、目が覚めたかい?」

入ってきたのは、物腰が柔らかい白衣を着た初老の男性だった。誠は虚ろな目でその人物を見る。意識がぼやけているも、すぐにその人物が誰かがわかった。

「安西先生……」

「久し振りだね。君に会うのも、ここで入院するのよね」

そう言いながら、ベットの付近にある椅子に腰をかける男性。《安西郷蔵》。名古屋市にある個人病院《安西病院》の院長をしている人物であり、猛士のサポーター（クラスは銀）でもある。

「あなたがいるということは、ここは……」

「私の病院だよ。重傷を負った君たちをここに移動させたんだ。君たちの体を他の病院に任せておくのは危険だと思ってね」

「そう……ですか……君たち？」

ここで、ヒビキは一気に記憶が蘇る。自分がどこで何をやり、仲間たちがどうなったかを。

「アイツらはーっ痛!？」

体を起こして、安西医師にネギたちのことを聞こうとするが、激痛がヒビキの体を駆け巡る。今気づいたが、患者服の下は包帯が巻かれており、腕には点滴の管がさしてあった。

「無理しちやいかんよ。君が一番の重傷患者なんだよ？安心しなさい、他の人達は今東海支部にいるよ」

「東海支部？」

「うん、つい一時間前まで子どもたちが見舞いに来ていたんだがなね。キラメキくんたちが連れて行ったよ。あの子達も軽傷だけど安静にしているほしいからね」

「キラメキが……」

そう言われ、ゆっくりベットに体を預ける。あれだけの大爆発で軽傷だけで済んだのなら幸いだったことにひとまず胸を撫で下ろすヒビキ。

ふと、壁に掛かっているデジタル機器の時計が目に入る。時刻は午

前10:23. 25秒 日付は3月31日……

「3月31日!？」

確か、自分が最後に記憶していたのは3月29日のはず。単純に考えればヒビキは3日間眠っていたことになる。

「それだけ君の体が疲労回復と治療に専念していたということだよ。しかし、君の自然治癒力と頑丈さには驚かされるね。普通の人間ならとつくに死んでるよ」

皮肉にもとれる台詞を言い安西医師はヒビキの腕に打っている点滴の針を抜き、傷の手当をする。

「何をすればあれだけの傷を追うことができるんだい？高いビルから何回も落ちたような怪我だったよ」

「厄介な魔化魍が相手だったので……」

腕をさすりながら、合成魔化魍との戦闘を思い出すヒビキ。安西先生の言う通り、本当にビルから叩き落とされたような衝撃を何発も受けたような感覚。今ままで見てきた魔化魍とは比べ物にはならない、というより全く未知の魔化魍との出会い。更に魔力を宿した攻撃まで繰り出す始末。

「そうか。まああまり無茶はしなさんな。それから君はあと1日は安静にしているんだよ？」

そう言つて、椅子から立ち上がり部屋から退出しようとする安西医師。

「それから、ヒビキくん」
「？」

足を止めて、何か重要なことを告げるように口を開く。

「君もわかっていると思うけど、これ以上鬼になるのを続ければ。君は人間に」

「それはわかってます。でももう遅いです。その領域に片足突っ込んでまるから」

安西医師が何を言うのかわかったのか、言葉を遮るように言う誠。その言葉に安西医師は「余計な心配だったね」と言つて病室から退出して行った。一人病室に残った誠は、ふいに直ぐ側にある机に置かれているTVのリモコンをとり、そのままTVの電源をつける。

『……村の壊滅被害について小野寺官房長官による公式見解が午前

11時からとなっております。これまでわかったことの情報を整理しますと……』

TVのニュースでは誠たちが調査に向かっていた樹海付近の村の調査の件で発表の報道をしていた。この数日でどうやら情報を警察を通じて内閣府へと渡ったようだ。だが、政府があのある出来事を正直に発表するとは思えなかった。

「……あとは猛士の上層部に任せるしかないな」

そう言つてTVを切つて、リモコンを無造作に机に置く。

「(右目が痛む……)」

あの時発動した鬼導眼の瞳術『神威』で又エの体ごと飛ばしたところまでは記憶している。咄嗟だったため、まだ扱いきれいな神威でかなり無茶をしたのか、右目に痛みがあった。

「神威を完璧に使えこなせるようにしないとな……」

鬼瞳眼に宿った神威の能力は左右の眼で用途が違う。左目は自身を別に場所に転移、または異空間に飛ばし回避できる能力。右目は自身以外の対象を空間ごと転移、または異空間に出し入れすることができる。攻撃や回避に使えば絶大な能力ではあるが、誠自身は神威の能力をまだ完璧に使えこなせないでいた。何よりまだヒビキ自身も能力を全容をわかつてはいない。

それから何分かしたのち新たな来客がくる。

「ようやく眼を覚ましたのか」

「キラメキ……」

いつの間に入ってきたのかキラメキが現れる。頭には包帯が巻かれ、顔には絆創膏が何枚か貼られていて見た目から痛々しい姿だった。

「大丈夫かキラメキ？」

「それはこっちの台詞だ。お前のほうが重傷患者なんだぞ」

「あははは、さつき先生にそれ言われたばかりだよ」

安西医師に言われたことをキラメキに言われ、思わず苦笑いをとばす誠。キラメキは先ほど安西医師が座っていた椅子に座る。

「先生に連絡があつて飛んできたんだが、思ったより元気そうで何よ

りだ」

「少し全身が痛むがな」

「だろうな。俺達も手酷くやられたもんだ」

「何があっただんだ？」

ヒビキは又エが爆発する直前にキラメキたちがいる場所が爆発したのが気になっていた。

「完全に罠だった。あそこにあっただのは猛士が前から追っていた《謎の洋館》そのものだった。周囲には魔化魍や童子たちがうようよしていてな」

「魔化魍が？」

「ああ、勿論魔化魍を見逃すわけにはいかないから全部倒したんだが、中にはヨブコや見たことない魔化魍も少数ながら確認されたよ。入手した情報は東海支部経由で本部には伝わってる」

「未知の魔化魍に洋館の出現か。怪しいな」

「そう思うだろ？それであの洋館で気になるものを見てな」

「気になるもの？」

「洋館に入って、ある部屋に入った時に壁にこれが貼られてたんだ」

キラメキがポケットから一枚の紙を取り出しヒビキに渡す。受け取ったヒビキは折り曲げている紙を広げる。それは日本地図が描かれた地図だった。

「これは……」

「それを見つけた瞬間に大爆発が起きてな。洋館は粉々に吹っ飛んで跡形も無い」

「思い出すように言うキラメキ。」

「シユウキとメイキは？」

「大丈夫さ、俺が咄嗟に庇ったからな。お陰で三人の中で一番のけが人は俺さ」

「結構な爆発だったが、よくそれだけで済んだな」

かなり威力の爆発だったため、正直キラメキの怪我ぶりから半信半疑なヒビキ。もしかしたら自分以上の重傷ではと思った。

「水を大量に吐き出した。咄嗟に出たのがそれでな、気づいたら俺た

ち三人は水浸しで外に放り出されてたよ。そのときだ上空で大爆発が起きたのは」

「それは俺だな」

キラメキも自分たちの爆発以上に起きた大爆発の感想を漏らす。当事者であるヒビキが思わず答える。

「ネギくんたちが言ってたんだが、ゴチャゴチャした魔化魍と戦ったんだろ？」

「ああ、見たことない、まるでゲームに出てきそうな合成獣キメラのような魔化魍だった。おまけに魔法攻撃をしてきた」

「魔法？」

ヒビキの発した単語に眉を顰めて反応するキラメキ。

「魔化魍がとうとう魔力を手に入れたのか？」

「さあ、あれ一体だけだったし。前にも麻帆良に現れたツチグモも魔法攻撃をしてきたから、魔族か魔法使いでも喰って力を付けたって可能性もある」

「前にお前が報告したやつか。そういえば、百目鬼とかいう昔いた鬼もいたとか。一体何がどうなってるやら。お前も他に何かあれば……」

「……少し待ってくれないか？色々起こりすぎて俺も情報を整理したいんだ」

「すまん、悪かったな。こつちも本部やら支部やらに調査の報告やらで色々あつて情報が欲しかったんだ」

「だろうな。お前にしては珍しく聞いてくるからな」

いつもなら余り人にはグイグイ聞いてこないキラメキに珍しがるヒビキ。キラメキ自身もそれを自覚したのか、少し落ち着く。

「ひとまず、その地図が何を示すのか知りたい。何かわからないか？」

そう言われ、改めて地図を見るヒビキ。日本地図に何かのマーキングのような丸印が北海道から九州にかけて5箇所あった。

「……いや、さっぱりだ」

地図を下げて首を横にふるヒビキ。地図が何を示すのか検討もつかないとヒビキに言われ、キラメキも残念そうにする。

「そうか、お前なら何か知ってるかと思ったんだがな」

「悪いなせつかくの手がかりを・・・」

「気にするなよ。これコピーとって全国の支部に送って情報を求めるから」

ヒビキが持っている地図を指さして言うキラメキ。すでにこの地図が情報を求めるために各支部に資料を送っていたのだ。

「じゃあこれ本物か？」

「ああ、一応呪術的なものがないか見たが特になかったがな」

「ならこれ借りていいか？俺もじっくりみてみたい」

「それは助かる。何かあればすぐに連絡を頼むな」

キラメキは立ち上がり、持ってきたカバンの中からファイルを取り出しヒビキが寝ているベットの横の机に置く。ファイルの題名は《青木ヶ原樹海調査報告書》とシールが貼られていた。

「俺が作った報告書用のファイルだ。読んでけよ。ディスクアニマルたちが撮った写真とか貼り付けてるから」

そう言い残しキラメキは部屋から退出していった。「(ネギたちの様子聞くはずだった!)」と内心しまったと思うも、キラメキからもらったファイルを置いて先ほどの地図に眼を通す。先ほどと同じようなの印しか載っていない。

「(まさかな・・・)」

何を思ったのか、瞳を鬼導眼に？化させる。神威使用で負荷をかけたせいか一瞬、ズキツと眼にくる。すでにキラメキの話で呪術的な物はないと聞いて、疑うわけではないがただのなんとなくであった。

「ててて・・・!?!」

眼を抑えて地図を見て驚愕した。先ほどまでの赤印しかなかった地図に文章が現れた。

・ 高の玉 《釧路湿原》 済

・ 志の玉 《八甲田山》 済

・ 之の玉 《黒部峡谷》 済

・ 八の玉 《青木ヶ原樹海》 済

・ 俣の玉 《琵琶湖》 済

・ 遠の玉 《麻帆良》

・ 呂の玉 《近衛木乃香》

・ 知の玉 《和泉亜子》

「・・・何だこれ」

それしか言葉にでなかった。そしてヒビキは一瞬で理解したこの地図が指し示す場所も、あの時樹海の調査の話が来てから気づいておけばよかったと。なぜ、この場所がやつらに知られているのか全く理解できなかった。いやそれ以上になぜ、この玉の場所に麻帆良と彼女たち二人の名前が載っていたのかわからなかった。

「どういうことだ・・・あの玉の場所は俺しか知らないはずだ。それにこの残りの3つの場所、和泉に木乃香に麻帆良？こんな場所に封印した覚えはないぞ」

見に覚えのないとある玉の封印場所が変更されているのに困惑するヒビキ。だが、上記の5つの場所は済と書かれている。わざわざ地図に書いているのは何かの罫があるのではとかんがえる。しかし、この地図は鬼導眼による瞳術で読んでいる。つい思いつきで使用しただけであつたため、他の手段でも解読ができるかもしれない。陰陽術、あるいは魔法でも。

「罫だとしても、恐らく樹海で潜伏してやがったのもこいつが目的だったのか・・・」

恐らく樹海の封印していた玉も強奪された可能性が極めて高い、いやほぼ間違いない。

「・・・こいつら」神獣」復活させて何企んでやがる・・・」

地図を掴む手に思わず力が入るヒビキだった。

新たな脅威、本当の戦いが始まるのはこれからかもしれない・・・

漆黒の樹海編

—完—

最終章 《雷鳴に輝く京の都編》
第三十五ノ巻 《動き出す者たち》

4月1日（火） 11:50

麻帆良学園 世界樹前広場

「はあくネギくんも新藤先生も関西に行つてから連絡ないね」

「そうだよね。連絡ぐらいあつてもいいのに」

広場にある喫茶店のオープンテラスで、項垂れるようにテーブルに顔を伏せている祐奈とまき絵。向かい側に座っているのは亜子とアキラ。2―Aの運動部4人組だ。春休みも残り僅かとなり、普段行っている部活動もここ3日間は休みになっていた。

「それなりに忙しいってことじゃないかな？」

「でも、今日でもう1週間やろ？さすがに掛かり過ぎやないん？」

カップに入っているジュースを飲みながらアキラの言葉に反応する亜子。ネギと誠が出発してもう1週間近くなつていた。特になんの情報もなく日にちが過ぎていき、今日まに至っている。更に明日菜や木乃香もいつの間にか女子寮からいなくなっており、噂によればネギたちの後を追つていったのではと（情報源は麻帆良のパパラッチと朝倉和美だが）。

「朝倉の話が本当なら今頃明日菜たち京都とかでエンジョイしてるかも」

少し羨ましい感じにまき絵が言う。それを見た亜子が元気づけにまき絵を励ます。

「帰つてきたら一緒に遊びにいけばいいやん」

「そうだよ。春休みももうすぐ終わるから近いうちに帰ってくるから」

「・・・それもそうだね。その時は新藤先生も一緒に連れてかない？」

「いいね。新藤先生って意外に面白い反応とかするからね！」

「そうそう。前の社会の授業の時とかさく・・・」

再び彼女たちらしい和やかな雰囲気になる。

そんな彼女たちの様子を遠目ながら見ている人物たちがいた。

「マスター、紅茶のおかわりをオーダーいたしますか？」

「頼むぞ茶々丸。お前は？」

「じゃあ、僕もエヴァさんと同じヤツを」

祐奈たちがいる喫茶店とはまた違う喫茶店でお茶をしていたゲンキ、エヴァ、茶々丸の三人。ゲンキは本を読みながら時折彼女たちの様子を見ていた。

「それにしても誠のやつも何を考えているのだろうか。いきなり和泉亜子の様子を見れなどは」

紅茶の入ったカップに手をとり、自分たちがここにいる理由を言うエヴァ。今朝方、ヒビキからゲンキに電話があり、急遽《和泉亜子》の様子を見守っていて欲しいと連絡があったのだ。

「それはわかりません。詳しい内容も特になかったですから・・・ただ、彼女を見ていて欲しいとしか」

本を読むのをやめて、エヴァの方を向くゲンキ。本人も今朝方、ヒビキから連絡がありエヴァのクラスメイトである和泉亜子の様子を見て欲しいとの内容だった。だが、なぜ彼女の様子を見るのかわからなかったゲンキがヒビキに理由を聞くが、「理由は帰ってから話す」としか言わなかった。

「しかし、よく理由もなしに奴の頼みを聞いたな？」

内容のない頼みを聞いたゲンキに疑問を感じたエヴァが質問する。

「まあヒビキさんはこれまでも何回か理由もなしに頼むことがありましたけど、最後は必ず理由を言ってくれてましたから。それに本当に偶にですし」

「ふん、信頼か？くだらんな」

ここぞとばかりに人間達が信じる、そう言った言葉を馬鹿にするように言うエヴァ。それを聞いたゲンキは軽く笑みを浮かべて言う。

「そう言っただけでエヴァさんもこうして付いて来てくれるじゃないですか」

「ぶっ!?馬鹿違う！面白そうだから付いてきただけだ！」

飲んでいた紅茶を盛大に吹き、顔を真っ赤にしながらゲンキの言っ

た言葉を訂正するエヴァ。それを見て軽く微笑むゲンキ。それを見たエヴァはまた何か言いたそうだったが、めんどくさくなったのか再びカップに手を付ける。

「だが2年も一緒にクラスメイトをしていたが、和泉亜子から特別な何かを感じるようなものはないがな」

「特別な何かですか？　そういえばネギくんやヒビキさんの受け持つ2―Aって、一般人ではない人がいるって言ってましたね」

「まあな、私を含め人間じゃない奴も紛れ込んでいるくらいだからな」
長年培ってきた観察眼というやつなのか、エヴァは自分が再び学生をやるはめになった時。すでに今いる自分のクラスメイトのメンバーがこれまでの生徒たちと違うのに気づいてた。

「それが今回の誠の発言と関係があるかわからないがな」

「そう…ですね」

ヒビキの申し出が意味することが未だにわからないゲンキだが、今はとりあえず和泉亜子の様子を見ることしかできなかった。

「（ん？　和泉って……まさかね）」

猛士 関東支部 12:40

「うくん、シユウキくんたちの報告があつた魔化魍の資料はないですね」

「古い文献にもそれらしいのはいわね」

関東支部の司令部『猛士の間』にて、保管されているファイルを読む香須実と日菜佳の二人。ディスクアニマルからの映像などを参考にして、遭遇した魔化魍などの資料を見ていたが、響鬼が対決した謎の合成魔化魍の情報は載っていないかった。

「全くの未知の魔化魍ってことですかね？　この夜雀って魔化魍も滅多にでない希少なタイプみたいですし」

樹海に現れた雀のような魔化魍『夜雀』。載っている文献資料も江戸時代に記された物であり、正直な話『魔化魍』なのかすら怪しい存

在であつたが、近年遭遇した鬼の話により魔化魍である確定された逸話がある。

「凄い……これって三人分身で行う天地人の型だよなシユウ兄？」
「滅多に見れない技を出すってことはこのごちゃ混ぜの魔化魍はそれほど強力ってことか……」

香須実と日菜佳の対面に座るようにパソコンのモニターを眺めているシユウキ。そして、すぐそばで一緒に記録映像を見ているのは、彼の義理の弟である《嘉納カガリ》。僅か13歳ながらすでに鬼の変身能力（鬼名はまだ決まっではない）を有している将来を期待する音撃戦士である。自分の先輩でもあるヒビキの戦闘をマジマジと見て、時折驚きの声をあげていた。シユウキに関しては、見たこともない合成魔化魍の脅威に素直な感想を述べる。

「所々乱れてるけど、魔族みたいなやつだな」

度々砂嵐になる映像から合成魔化魍の特徴を考察する。ヒビキとの戦闘に居合わせたネギたちの証言もあり、魔界に巣食う怪異《魔族》が同じく融合しているのを。

「魔族ってことは魔法使いが噛んでるってこと？」

「少なくとも可能性はあるな。俺が樹海であつたブブとか言うのも魔族だったし」

メイキと共に木乃香を狙う、丸い豚のような魔族《ブブ》との戦闘を思い出すシユウキ。まるで子供のような言動や行動をとり、かつて遭遇したことがある魔族とは一味違った印象だった。それと同時に現れた《ウォーター》と名乗る人物のことも思い出す。自分たちでも全く感知ができず危うく木乃香や明日菜を危険に晒すところでもあり、予知できなかつた事態に対処できなかつた自分が不甲斐なかつたと感じる。

映像の方に戻り、ヒビキが魔化魍に清めの音を流し終えた瞬間に謎の黒い球体へと変貌し、何かを叫ぶ声が聞こえたが、そこで完全に映像が途切れてしまった。ディスクアニマルに残された情報はここまでのようであり、あとはキラメキが作成した報告書に目を通す。

「洋館も跡形もなく吹き飛んで、残つたのはあの村の被災者たちの嘆

きと悲しみだけか・・・」

「シュウ兄」

顔を暗くし、いつもポジティブで皆を明るくしていたシュウキとは思えない雰囲気だった。誰かが悲しみ、苦しむ姿を見るのを嫌うシュウキにとつて今回の事件の結末は後味が悪かった。昨日も被災した村の人達の避難所に足を運びとしたが、まだ傷も癒えておらずおやっさんに止められてしまい、全開になるまでは事務的作業に映っていた。幸いか、関東圏の魔化魍の発生はそこまで多いというわけではないためダンキ、ショウキ、ゲンキ、メイキが抜けている状態でもシュウキを除いた六名でもシフトで回している状況だった。

「悩んでも仕方ないよシュウ兄。今は私達にできることをしようよ。きつとヒビキさんたちがこの事件の元凶を突き止めてくれるから」

「カズラ・・・」

シュウキたちの対面にすわるように少女。カガリと同じシュウキの義理の妹《嘉納カズラ》。危なっかしいカガリのサポーター的役割をしており、同じくサポーターの先輩でもあり香須実の弟子的存在だ。滅多にみないシュウキの落ち込みを見て、励ましの言葉をかける。

「私達も気持ちは一緒だから。そう落ち込まず、いつものシュウキくんらしくないよ」

「香須実さん・・・そうですね。少しでも誠たちの助けになる情報を集めましょう」

カズラや香須実の言葉に少しだけ元気付けられて、再び情報収集を再開する。

猛士 東海支部 応接室 15:20

「これはまた酷くやられたもんだな・・・」

机の上に置かれている大破した音撃棒・烈火と半壊状態の音撃棒・

篝火を見て感想を漏らす短髪の男。持ち手や柄の部分が完全に使い物にならなくなっており、もはや武器として使える状態ではなかった。

「ま、使った本人も酷くやられたみたいだがな」

そう言つて目の前にいるまだ体に巻いている包帯姿のヒビキを見て言う男。本来ならここにヒビキがいるのは非常に可笑しい話であり、まだ数日は入院する必要があるのだが本人が無理やり退院してきたのだ。ここに来た瞬間にネギやキラメキたちは驚愕し、すぐに安静するべきだというのが『もう治つた』と言いはりこの場にいるのだ。まだ包帯があるのだが・・・ヒビキによれば見せかけらしい。

「こんなのは傷のうちには入らないですよモツキさん。もう殆ど治つてますから」

「相変わらず自然治癒力はトップレベルだな」

ヒビキの言葉を聞き、フツと笑い浮かべるこの男は、ここ猛士東海支部に所属する森山茂木もりやまもぎこと音撃戦士《木鬼》であり、短い期間ながらヒビキが師事していた人物だ。樹木を創造し操ることができる希少な術を使える鬼でもある。

「音撃棒は特殊な樹木の幹でなきや強度がもたない。特にヒビキのような強い波動を持つ鬼ならな」

折れた烈火を手に取り、壊れ具合を見るモツキ。

「今の状態じゃあ、魔化魍を清めるのは無理だろ？新型のディスクアニマルも半壊つてキラメキに聞いたが」

「・・・敵の能力を完全に見誤つてた俺の責任です。折角作つてくれたのに」

「資料でも見たが、拘束させるならなんで《木遁》を使用しなかった？今のお前なら・・・」

「あれは装甲アームドになれてようやく物にできる鬼法術、じゃなかつた鬼忍術ですよ。それに俺がそこまで強固な樹木はできませんよ」

《木遁》とは《木鬼》のかなり前の先代が編み出した鬼忍術。魔化魍との戦闘により破壊された森林を再生するために編み出された術であり、本来は鬼法術《創造樹林》という術であり厳密には鬼忍術ではな

いのだが、先々代が多種多様に改良を施した際に印も使用することから新たに鬼忍術《木遁》という名にしたのだ。樹木を使い魔化魍を拘束したり、攻撃を与えて音撃を流し込むのが歴代木鬼のスタンスとなっており、この術を使えるのは編み出した木鬼の系列以外不可能と思われていた。だが、ヒビキは木鬼から直接手ほどきを受け、条件がかなりついたが半年の修行で物にしているのだ。

「それにあの状態で木遁なんて思いつきませんよ。倒すことで精一杯でしたし」

「あれだけ修行して、木像まで作るまでに使いこなせたのに。勿体ないぞ」

「ちゃんと破壊された森には使ってますよ。前にみたいすぐに倒れるようなことはなくなりましたし・・・」

樹木を創造し活性化させるのはそれ相応の鬼力を使うため、木鬼のように専用の修行を行っていないヒビキは使う度に鬼力切れになるとのこと。それでも修行し始めの頃よりかは物にしているようだが。

「ハハハッ！前は地面から木一本出すだけで気絶してたもんな」

懐かしの修行時代を思い出し、笑うモツキ。ヒビキにしてみれば余り思い出したくもない記憶ではあるのだが・・・

「もういいじゃないですか木遁の話は。それより、頼んでたやつは・・・」

「悪い悪い。そう怒るなって、ほら」

顔をしかめるヒビキに少しからかい過ぎたかと軽く罪悪感を覚えるモツキ。手元に置いてあった布で巻かれた物をヒビキに渡す。受け取り巻かれた布を取ると、中には樹木の幹が二本あり、ちょうど音撃棒に使用できる長さだった。

「この支部に保管してた縄文杉の木だ。予備用で保管してたから状態はそれなりにいいが、すぐ採取したのと違うから強度も脆くなってる可能性があるから注意しろよ？」

ヒビキが受け取ったのは東海支部に保管された縄文杉の木の幹だった。はじめはエヴァンジェリンの断罪の剣というトンデモ魔法を防御、次に刹那の怨念声刃の一撃を防ぎ完全大破、最後は青木ヶ原

樹海で現地調達した木を使用するも一撃で大破し、何度も何度も破壊されたは堪らなくなったヒビキがモツキに連絡をとり、望みをかけて堅牢な樹木の予備がないか尋ねた所、不幸中の幸いか縄文杉の幹があったのだ。東海支部は他の支部に比べ太鼓の音撃を扱う鬼戦士が余りいないため予備として保管されていた。

「わかりました。無理言つてすみません」

「いいさ、でも自分でちゃんと調達してこいよ？さつきも言ったが強度はお前が前に使つてたやつより格段に低くなつてはるはずだ」

余り期待しないほうがいいと釘を指すモツキ。ヒビキは相槌を打ちながら布で巻き直していく。

そんな様子を見ていたネギは、心配そうにヒビキを見ていた。初めてヒビキ・・・もとい誠に会つた時も傷だらけだったのを思い出す。

まだネギが6歳になり魔法学校に通い始めた頃・・・

『お兄ちゃんどうしたの!?傷だらけだよ!!』

故郷の森の中で、血だらけの青年がいた。

『・・・俺に近づくな・・・』

かすれる声で、自分を見つけた少年を追い払うように睨む。それでも目の前の少年は臆することなく青年のことを助けようとする。

「どうしたのネギ?」

ボウつとなつていたネギを見て声をかける明日菜。

「!なんでもないですよ明日菜さん」

「嘘、今アンタ何か考えてたでしょ?誠先生見ながら」

明らかに普通じゃない反応をしたネギをジト目で見える明日菜。

「その、毎回お兄ちゃん最後は傷だらけだなあつて思つて・・・」

エヴァンジェリンの戦い、刹那との戦い、そして今回の樹海での戦いでもヒビキは必ず傷を負ってきた。恐らく本人には日常茶飯事のことかもしれないが・・・

「でも、包帯とか巻いとるし。まだ病院に追つたほうがええんやないかな・・・」

木乃香もヒビキの包帯姿を見て痛々しそうに見えた。自分たちも多少はかすり傷などを負ったが、すでに傷も見えないくらいまで治っていたのに対し、ヒビキはあの爆発の後ではどう見ても1週間程は入院していないと可笑しい傷だった。

「誠先生って凄いタフってことなのかな？でなきや納得がいかないわね」

「タフというか自然治癒力が凄いんじゃない？」

明日菜が時々発するお馬鹿発言にボソツとツツコミ苦笑いするネギ。

「そんな難しい言葉わかるわけないでしょ！」

「ちよ、何でいきなり怒るんですか!?つ、つねらないでください！」

ネギの声が聞こえ、馬鹿にされたと思いい頬をつねる。

「何やってんだお前ら・・・」

「ヒャアツ!?って誠先生!!」

気づけばいつの間にもヒビキがネギたちが座っているソファアのすぐ後ろまで来ていた。びっくりした明日菜は思わず立ち上がる。「そんなに驚くか・・・」と軽くショックを受けながら開いている木乃香の隣に座る。ちようど向き合う形になる。

「誠先生ほんまに大丈夫なん？」

「大丈夫だって、ここに来た時言っただろ？こんなただの飾りだって」

そう言って頭に巻いている包帯を外していくヒビキ。傷らしい傷は見当たらず完全に完治しているように見えた。

「それよりこれからのことなんだが・・・」

ヒビキの言葉を聞いて三人の顔が強張る。

その時、扉の開く音が聞こえて、誰かが入ってきた。ちようど真正面になるようになっていたヒビキは入ってきた人物を見て目を見開いた顔を浮かべていた。ネギたちも後ろを振り向くとそこにいたの

「……誰？」

なんとも素っ頓狂な言葉を最初に吐いたのは明日菜。と言っても、その言葉はまっとうな意見ともいえる。本当に誰なのかわからない

かったからだ。無論、その場にいるネギと木乃香も同様だ。

ただ一人、ヒビキを除いて：

「チ、チシキ・・・」

「よう久しぶりだなヒビキ。相変わらず大暴れしているみたいだな？」

ヒビキがあまり会いたくはない人物でもある同じ鬼戦士のチシキであった。



京都府の近郊の山奥のとある神社に続く参道。春に入り比較的夕方でも明るいこの時間帯だが、深い木々のせいで不気味なくらい薄暗い。そんな場所に数人の翔る足音が聞こえ、何かを探している数人の人影があった。

全員が袴姿の集団であり、その中には腰に野太刀を下けているものちらほら。

「この周辺に鬼が出現したと情報が入ったが、どうやら空振りのようだな。我ら神鳴流を呼び寄せておいて！」

一人の神鳴流剣士が悪態をつきながら、近くの石を蹴る。

関西呪術協会の暗部から自分たちのいる周辺に魔化魍と鬼が現れたと情報が入り、数人の陰陽術師と神鳴流剣士を引き連れて急行してきたのだ。

「自分たちが魔化魍を”封印”し、鬼を葬るために――

が、結果的に対象の魔化魍もおらず、人の気配さえ感じられなかった。

「仕方ない、一旦総本山に戻り情報を集めよう。いつまでもこんな場所に留まるわけにはいかん」

「そうやな。今は厳戒令が出されてるさかい。あまり本山の警備を手薄にはでけへんからな」

関西呪術協会は麻帆良学園及び猛士の不穏な動きを聞きつけ、不測の事態に備え厳戒令を発動しており京都に入ってくる他勢力の賊に

対して厳しい対応で処理している状態であり、協会の本部である総本山にも結界が展開され蟻一匹侵入することすらできない。そのせいもあるのか、猛士総本部からの伝令の手紙や使者の接触などもできない状態になっているのだ。使者に至っては門前払いというレベルではなく、威嚇攻撃する始末。何が彼らをここまでにするのかは不明だが、不要な争いを避けたい猛士にとってはかなりの痛手になっていた。

「これは暗部から聞いた話だが、木乃香お嬢様が鬼と共に行動しているとのこと聞いたんだが」

「な！お嬢様が鬼と!？」

更に悪いことに、暗部が入手した情報によれば関西呪術協会の長の娘でもある《近衛木乃香》がよりによって鬼と行動を共にしているということだった。

「ああ、しかもあの《鬼神》が共にいるそうだ」

「!!!!」

鬼神という単語を聞き、一瞬固まる面々。

行動を共にしているのはあの《鬼神》。

暗部が入手した情報では、猛士の鬼が全国でただ一人だけ名乗ることができる最強の鬼の呼称であり、いわば象徴的な名。言い方を変えれば《猛士の最高戦力》と言っても過言ではない。人間誰しも、強大な力を持つ者に恐怖を感じる。なによりここにいる面々が鬼神の名前に敏感なのは、数十年前に関西呪術協会の強行派の呪術者たちが猛士に襲撃をかけた際に、僅か一人の鬼が100名を超える呪術者達を返り討ちにした。それこそが《鬼神》の名を持つ鬼だったのだ。故に彼ら……というより関西呪術協会は《鬼神》という存在を恐れている。

「だが話によれば此度の鬼神は若造との話だぞ」

「詳細は暗部が調査中らしいが、どうやら歴代最年少の鬼神だそうだ」
「危険な芽は早めに潰しておくのがいいかもな」

現在の鬼神が史上最年少であるということ以外詳細は暗部でも情報を集めきれておらず、それ以外は不明だった。わかるのは容姿くら

い。

「しかし、お嬢様にはあの小娘が護衛を務めているとはず。一体何をしておるのだ」

西を裏切り、東に付いた裏切り者の神鳴流の小娘が護衛をしているとのことだが、肝心の本人はいないとのことだった。本来なら腕のいい護衛なら関西呪術協会にも神鳴流にもいたが、長がどうしても言い決めたのだ。当然ながら、多くの者は猛反対の意見を出したが了承したのが協会のトップ。ならばそれが協会の意志として組むしかなかった。だが結果はどうだ。刹那は現におらず、肝心の護衛対象の木乃香は鬼と行動し、更には傷を負っていると聞く。

「全く、恩を仇で返しただけでなく護衛任務の放棄とは、初戦は半人前の小娘。長にはほど程失望がつかない」

とんだ人選ミスだと言わんばかりに悪態をつく陰陽術師。

「まあ、それは一理あるが、今は本山に戻ることを優先にしよう。長が変わっても神聖な本山だけは代わりはないからな」

隣に立っている、別の陰陽術師が促すように言う。と随時この場から離れていく。

すでにこの場には人っ子一人いない

はずだった・・・

「ふう・・・どうやら行ったみたいね」

「そうみたいですわ・・・」

そう、この場にはすでに先客がいたのだ。すぐそばにある生い茂る茂みが幻のように消えていく。そこには二人の男女が地を這うように伏していた。二人はあたりを確認しながら立ち上がると泥や落ち葉を手で落としていく。

「まさか、陰陽師の連中がこんなに早く来るなんて」

「予想外でしたね。カンナツキさんがあとすこし童子と姫を倒すのが遅かったら、俺達も敵と勘違いされてましたよ」

彼らがここに来るほんの数分前まで彼女、音撃戦士《神無月鬼》は

ディスクアニマルからの情報を元に周辺にいたツチグモの童子と姫を退治にやって来ていたのだ。

「勘違いじゃなくて、本気で私達ごと殺る気だったわよあの連中」

そう言うとかンナヅキは陰陽術師たちが去っていった方向を見る。

「それにしても正文くんの幻術は凄いわね？目の前に現れた時はヒヤヒヤしたわ」

「安心してください、俺の幻術は伊賀の上忍でも見抜けないほどの折り紙つきですから」

施した幻術を自信満々に語っている青年は猛士鬼密班に所属する服部半蔵の名を継ぐ若き伊賀忍者《服部半蔵正文》。京都に極秘裏に滞在しているカンナヅキを補佐するために行動を共にしているのだ。

「それよりも彼らの話は本当なのかしら？というよりなんでそんな情報漏れてるの？」

暗部がそこまでの情報を有しているのに内心驚いていたカンナヅキ。しかし、その考えは正文の言葉で即否定される。

「恐らくワザと情報流してるんですよ。猛士・・・というより鬼密班がよく使う手ですよ。情報を流して相手の出方を見る。そのほうが相手がどう動くのかわかりやすいつて組頭がよく言っていましたから」

「ふくん、やっぱり元忍者が多く所属してるだけあって情報戦は得意みたいね」

「みたいじゃなくて、俺は忍者ですけど・・・」

ジト目でカンナヅキを見つめる正文。鬼密班の構成員は元忍びのものがほとんどであり、厳密には忍者という呼称はないが、忍者という言葉にはなみなみならぬ思いがある。その顔を見て思わず苦笑いしながら謝るカンナヅキ。

「でも、こつちも隠れながら魔化魍を倒さないといけないのは歯がゆいですね。おまけに向こうが封印した魔化魍を倒すのもしないといけないなんて」

「いざいざを起こさないためには仕方ないわ。こつちも余り面倒沙汰は起こしたくないし」

関西呪術協会の呪術者たちでは魔化魍を浄化することは不可能だ

が、封印術による魔化魍封印は可能だ。

だが封印が永遠に続くことは不可能であり、魔化魍は自力で封印を破り再度人間達に災厄をもたらす。そうした情報を鬼密班が入手し、鬼が極秘裏に対処に向かうという手段を取っている。関西呪術協会という組織が創設して以来、この手段で京都での魔化魍との戦いを行ってきた。

「いきなり斬られるのはさすがに勘弁してほしいんだから・・・」

何かを思い出すように顔を顰めるカンナツキ。

彼女も前に神鳴流剣士たちと鉢合わせし、危うく斬り捨てられるところだったのを何とか逃げ延びたこともあった。友好的にしたいが、話を聞いてもらえないのでは正に話にならない。

「私達も戻りましょう？こんなところに長居は無用だし」

「そうですね。また戻ってきたら面倒ですし」

そう言つて二人はこの場から退散を始める。

生い茂る森を抜け、竹やぶまで入ると整備された参道が見える。ここまで来ればすでに一般人もいる神社通り。二人は近くの駐車場に停めてあるワゴンに乗り込み帰路へとつく。

「そういうえば、ヒビキくんの話をしてたけど。彼もこの京都に来るのかしら？今は東海支部にいるって聞いたけど」

運転席に座り車を発進させて間もない頃に、先ほどの陰陽術師たちの話をする。話によれば関西呪術協会の長の娘と行動を共にしているということ。

「ええ、例の樹海の調査で臨時メンバーに選ばれたらしいですから。でも怪我して入院してるって聞きましたけど」

「キラメキくんから聞いたんだけど、無理やり退院してきたらしいわよ。傷全部治してきて」

「ははは、相変わらず凄い生命力ですね・・・」

ヒビキの化け物染みた生命力を知っている正文は思わず苦笑いをする。

「でも、鬼神であるヒビキさんが京都に入れば大騒ぎになるんじゃないですか？」

「そうね。協会は鬼神という存在を恐れてるからどんな妨害行為をするかわからないわ。ま、あの話だと大分過小評価されてるみたいだけど」

《鬼神》という異名が誕生してから約1000年もの歴史の中《響鬼》・・もとい《新藤誠》は歴代鬼神の中で最も若い鬼であり、実力ともにまだ未熟であるというのが関西呪術協会の考察。そもそも、協会側が入手した情報では、先代鬼神が直に誠を指名したため、実力云々ではないと推測しているのだ。

「(それに鬼密班の情報だと、京都には本部を襲撃した鬼がいるって話も聞く。恐らくヒビキさんは間違いないと来ると思うけど)まあ、ともかく俺達は俺達で自分たちの任務をこなしましょう。あんまり長居しているとキラメキさんに怒られそうですから」

笑みを浮かべながら、茶化すようにカンナヅキに告げる。すでに猛士の人間の殆どが知っているが、キラメキとカンナヅキは恋人同士であり、たまにこうして茶化されている。

「ちよ、ちよつと何言ってるの!?!お、大人を誂うなやめなさい!?!」
「そ、そこまで動揺しなくても・・・」

顔を真っ赤にして、声を震わせながら怒るカンナヅキ。

普段はクールに振舞っているが、どこかなりきれないカンナヅキであつた。

京都府 某所 同時刻

京都市中心街から離れた山奥で今は使われていない寂れた神社の本殿内で怪しげな集団が何やら揉め事をおこしていた。

「一体どういうことや!木乃香お嬢様の身边に鬼が、それも《鬼神》やなんて!」

「ああもう、そんなに騒がないくていいでしょ?」

胸元を強調した振り袖を着ている関西弁の女性が目の前にいる目玉が描かれた着物の女性《ドウメキ》に突っかかるように言い合っていた。彼女は《天ヶ崎 千草》。関西呪術協会に所属する《呪符使い》と言われる分類の陰陽術師であり、過激派《封眼寺派》にも属してい

る要注人物であるのだ。

突つかかる千草にめんどくさそうに返答するドウメキ。

「何言うとるんや！《鬼神》言うたら、いわば《猛士》の最高戦力やないか！そないな化け物が木乃香お嬢様のそばにおるやなんて・・・」

猛士との関係が悪い関西呪術協会だが、暗部による情報収集は行っているため鬼たちの情報も入ってくる。関東魔法協会はさほど脅威に感じていないのか不明だが、関西呪術協会にとっては《鬼神》の存在は脅威と捉えていた。そもそも陰陽にとって《鬼神》という呼称事態が悪しき呼び名であるのだ。

「アンタ馬鹿じゃないの？東の連中に一泡吹かせるとか言っというて、たかだか鬼一人にビビってどうすんのよ。これだけの手練がいればアンタの計画も成功するでしょ」

「な、そ、それはそうやけど・・・」

千草自身が今回の計画のために雇った助っ人達。計画が想定より早めに繰り上がったが、望み通りの人員を揃えることができた。更に関西呪術協会の一部の上層部（封眼寺派の面々）の協力もあり、応援まで準備しているとのこと。東で好き勝手している魔法使い勢力を排除し、関西呪術協会の力を知らしめる。そして大戦で亡くした両親の仇をとるために計画を立ててきた。無論これが関西呪術協会の反乱行為だというのもわかっている。それでも千草が動いた。

だが、千草にとって、恐らく関西呪術協会が知ったら驚くだろう。なにせ鬼が魔法使い側に就いているという実態に。今回の戦いに鬼・もとい猛士の介入などは余りしたくはないことであり、彼女にとってはそのが一番の厄介事だった。何よりも最高戦力の《鬼神》がいるなどは。

「だから私達、鬼も協力するって言ったでしょ？魔法使いは私たちにとっても目障りなんだし」

だからこそ、ドウメキとの協力要請は何よりも嬉しいことだった。彼女は猛士を抜けた鬼《抜鬼》（何の理由もなく猛士から去っていく鬼の呼称）であるため、猛士とは関係なかった。鬼の存在は目障りだが、

自身の計画のためになら構わなかったのだ。

「・・・そうやな。今更騒いでも仕方あらへん。計画は予定通り実行や」
「それでいいのよ。私達はアンタの計画どおり鬼たちをお嬢様から引き剥がす作業を行うから」

「頼むな。ウチらは英雄の息子を軽く捻って木乃香お嬢様を攫うことにするさかい」

そう言うと、千草は一足先に大社から出て行く。その後続くように白髪の少年、黒髪でニット帽をかぶった少年、ゴスロリ服を纏った少女も続く。

「全く残念ですね。神鳴流の先輩である刹那先輩と斬り合いがしたかったのに、まさかこちら側にいるとは」

ゴスロリ服の少女が残念のそうに自身が握る刀の刀身を舐めながら言う。同じ神鳴流剣士として、先輩でもある桜咲刹那との斬り合いを楽しみうにしていたが、肝心の張本人がドウメキの操り人形とかしているのを残念がったのだ。会った時などうつろな目でまるで生気がなかった。

「ふん、あの女が何企んどのかは知らんが、興味はあらへん。今は東の連中を葬るのが優先なんやからな」

なんであろうと、こちらは利用できるものは利用する。今の彼女にはそれしか頭になかった。

だが彼女は気づいていなかった。

自身が協力している鬼が・・・

ただの抜鬼ではないことに

第三十六ノ巻 《行動開始》

4月2日（水） 9：48

『・・・のぞみ154号。博多行が参ります。黄色い線の内側にお下がりにください・・・』

構内アナウンスが流れ、太陽の日の中で尚強烈に輝くヘッドライトの光と共に、流線型の車体がホームに滑り込んでくる。春休み真っ最中とのこともあり、ここ名古屋駅新幹線ホームでは子供連れの親子や、旅行者の人だかりができています。子供はやはり新幹線に興味があるのかデジカメなどで写真を撮ったり、手を振ってる子供がちらほら。

「・・・」

ネギもまた日本に来て初めてとなる新幹線に顔には出さないまでも、興味深々にホームに入ってくる新幹線を眺めていた。それを見ていた明日菜は「やっぱり内心は子供ね」と小声で言う。

本人もこんな事態でなければ、記念になにか残しておきたいものだが。

「誠先生大丈夫やろか。先に行ってもうたけど」

先に出発して行ったヒビキのことを気にかける木乃香。

「心配ないぜ木乃香。逆にアイツは一人の方が安心できる。集団での行動でヒビキの行動制限をつけるより、一人の方がアイツもやりやすいんだ。普段から一人で戦ってるからな」

京都に入る際に、チシキが立案した作戦は『陽動作戦』。先行してヒビキが先に京都に入り、関西呪術協会の行動を見ると言う物だった。その間にネギたち時間をずらして京都に入ると言うもの。端から見れば単純すぎる作戦だが、京都に入ると言うのがヒビキであるというのが重要だった。

ヒビキが鬼神であるという事は関西呪術協会の周知の事実であり、先行して入っていけば否応にもヒビキの方に目が行く。すでに東海支部にいる時点で、周囲に協会の暗部が動いてこちらの動きを観察しているのもわかっている。

「でも、刹那さんを取り戻しに行くはずだったのに。こんなに大きな話になるなんて思わなかったな。そんなに鬼と魔法使いたちって仲が悪いのね」

そのこともあるが、ネギはチシキとヒビキの会話を思い出す。

『人数が増えれば、それだけ危険が増える。お前だってそれくらいわかるだろ?』

『確かにわかってるさ。だがヒビキ、彼女たちの意思を組んでここまですて連れてきたんだ。ヒビキだってその娘達のことを組んでこの場にいるんだろ?それに樹海まで連れて行き、こうして皆無事にいるってことは守り抜いたってことだ。最もお前や他の鬼は怪我追負つたみたいだが』

『それは治った。だが今度は樹海の時とは違う。京都はあの組織がいる、俺はともかくネギまで狙われる可能性だってある』

『仮にも鬼神の名を持つてるにしてはえらい弱気な発言だな』

『物事は計算どおりにいかないんだよ』

『俺の計算はあたるぜ。お前が実証してくれてる』

話を少し変えるが、猛士鬼密班が掴んだ情報によるとドウメキと呼ばれる鬼が京都にて関西呪術協会の陰陽術師たちと密会をしているという情報が入っていた。恐らく刹那も共にそこにいるのではないかと推測し、京都に入りそこで決着をつけると考えていた。だが、京都に鬼と西洋魔術師が共に入れば、当然仕切っている関西呪術協会が黙ってはいない。学園長から関西呪術協会のことを大方聞いていたヒビキは、西洋魔術師であるネギが入れば更に危険が迫ると判断し麻帆良学園に帰るように言ったのだ。関西呪術協会、ドウメキや魔化魍が共闘しているかは定かではないが、同時に2つ、もしくは3つの勢力を同時に相手にしなければならなくなり、明日菜や木乃香を守りきれぬ可能性が低くなっていく。

『だから、堂々と入れればいいんだよ。そこら辺は考えてある』

『何を考えてるって?言っとくがお前が考える結末は必ず俺に降りかかったくるだろ。魔化魍を倒した時も、罨とか言って俺ごと嵌めたことだってあったし』

『それはヒビキの驚異的な身体能力を計算に入れたことだ。現にお前は俺が考えた全ての作戦を成功に導いている。終わりよければ全てよしってやつだ』

『とても科学者の言葉とは思えないな』

『科学者の本文について聞きたいなら聞かせてやってもいいぞ?』

『そんな話してないだろ!お前が語り出したら長くなるだろうが!!』

『物事を説明するには順序がある、そして最後に結果を語るそれが科学だ』

『いい加減やめろ!今はネギたちの話を――』

「で、結局皆で京都に行くことになったのよね。言いくるめられてる誠先生初めてみたかも」

あの後、チシキとヒビキの論争が続いたが、頭脳明晰かつ口達者なチシキとの言い合いではヒビキでは分が悪く、結局チシキの作戦とやらを信じて皆仲良く京都に向かうことになった(というより、ヒビキ自身も彼が来た時点で何かしらあるだろうとは思っていたので半分諦めていたかもしれず、これも一種の信頼とでも思っておこう)。

終わったあとはグツタリとしたヒビキを見て、いつもとキヤラが違つて見えて何か新鮮さを感じた明日菜。いつも気さくに振る舞つて時折クールに見えるが、戦闘になれば全力で戦いに挑む姿を見ている明日菜からすれば、新たなヒビキの一面を見れて内心よかつたよ思っていた。

「あははは、お兄ちゃん。科学とか理学系は全然だめなんですよ。もしかしたら明日菜さん以上に悪いかもしれなませんよ」

「そうなの!?!」

若干馬鹿にされてるように聞こえたが、あのヒビキが自分よりダメとは想像できなかった。てつきり何でもできるんじゃないかと思っていたからだ。文系では天と地ほどの差があるが、理数系では明日菜よりひどいかもされない。更に話に聞けば、機械オンチであることも初めて知り、パソコンどころか携帯電話するらまともに扱えないとの

こと。段々と自分が思っていた人物像がゆっくり崩壊していくのを感じた明日菜だが、反面うれしいことでもあった。誰しも弱点つてのはあるもんだと。

「(誠先生って、昔どんな感じだったかしら?)」

少しばかりヒビキのことが知りたくなった明日菜であった。

「……………」

「どうしたネギくん?」

「いえ、なんか誰に見られてるような気がして…」

周囲の建物から視線を感じたネギは少しばかりキョロキョロと見渡す。

「その感覚はあってるよ。いい察知能力だ」

「チシキさんも気づいていたんですか?」

「まあな。裏方でも仮にも鬼だから」

近くに居合わせたチシキも同様の気配を感じていた。駅のホームにいる一般人ではない、裏の人間の気配を二人は感じたようだ。

「まあ、こんな人の多い場所で下手に動かないだろ。人数も大分減ってるようだし……………」

東海支部をずっと監視していた人数が大分減っているのを感じれば、半分以上はヒビキの方に向かったと推測するチシキ。とりあえず陽動作戦は半分は成功しているといえる。

「(さてさて、京都に到着してからは…………ん?)」

京都に到着してからの行動を確認しようとした時、ふとネギの顔見たチシキ。堅い顔をし、何か考えている姿だった。

「(この感じ…………)」

ネギも何かわからないまでも、視線のようなものを感じとっていた。

「(関西呪術協会の人達が僕達を監視してるってことかな…………)」

恐らくチシキやヒビキが言っていた通り関西呪術協会の暗部という者が自分たちの行動を見ているのだろうと。やはり木乃香の正体は関西呪術協会のお嬢様というのは間違いない。

先日の夜遅くにヒビキと東海支部を訪れていた鬼密班の『空鬼』と

いう鬼から関西呪術協会の情報を聞き、木乃香の正体も知った。そして、木乃香を狙う一派の名も。

『木乃香たちを頼むなネギ』

ヒビキたちが出発する直前に見送る際に言われた言葉を思い出し、自然と握りしめる拳に力が入る。敵は西洋魔術師も嫌う連中であり、今度は不測の事態にヒビキは助けに来ない。今度こそは自分が生徒達を守りぬかなければならない。

「ネギくん」

「はい、っ!？」

肩に手を置かれ振り向いたネギだが、不意に頬を人差し指で突かれる。振り向くと軽く笑みを浮かべているチシキ。

「そんな堅い顔してたら有事の時に対処できないぜ。気楽とはまではないが少し肩の力を抜いたほうがいいじ？ここに居るのは君だけじゃない。俺だっているし、ここにはいないがクウキも俺たちの行動を見てる。それに楓も手練だ」

「……でも心配なんです。何か胸騒ぎがして」

「胸騒ぎか。魔法使いの直感とでも言うのかな？」

「チシキさん、あまりこの場でその単語を言うのは」

不意に発したチシキの言葉に注意するネギ。魔法は世間一般には秘匿されているが、もはや一般人の明日菜や木乃香たちにバレているのは否定できないが。まあ事態が事態なので、忘却魔法など使ってる場合ではない。というよりネギもそんな魔法を生徒たちには使いたくはなかった(のどかたちが巻き込まれた図書館島の事件は学園側の意向でネギの意見など通りもしなかったが)。

「ちよつとネギ、チシキさんも新幹線出ますよ!？」

「遅れて舞うよ!」

「やばっ、ちよつと待て!」

「乗ります乗ります!」

話をしている内に新幹線の発車時刻が迫っている事に気づかず、明日菜と木乃香が呼びに来る。気がつけば木乃香新幹線に乗り込んでいた。二人も慌てて新幹線に乗り込み、ギリギリのところで扉が閉ま

る。

3人はそのまま指定されている座席へと座る。コール音が鳴り響き、ゆつくりと京都市行きの新幹線は発車していく。

「(とりあえず、京都駅まで行ったら即カンナヅキやニシキたちに連絡だな。現状から言って敵は関西呪術協会一派と見て間違いなし、謎の鬼『ドウメキ』の存在もある。敵が近衛家のお嬢さんが狙いなら、何か復活でも目論でるのか？俺たちが京都に向かっているのをとづくに知ってるはず)」

目を瞑り、敵の動向を考えるチシキ。当初の目的から大分離れてしまったが、チシキも曲りなりにも鬼だ、今回の事件に鬼、そして魔化魍が絡んでいるということもあり自分も協力し、いち早く事態を収集したかった。

早く自分の研究に戻りたい気持ちは少しあるが……

「(やはり自分たちのテリトリーである京都に入って攫う算段と考察するのが一番だな。まったく、関西呪術協会の上層部が抑えてくれれば、鬼だけ追えるのに……)」

謎の鬼だけでなく、関西呪術協会の一派の相手までしないとイケない事態に悪態をつくチシキ。封眼寺派と呼ばれる一派を抑えるのは関西呪術協会の役目のはず、なのに今もなお抑える行動も見せておらず、本山ばかりの警備を強めるばかりとのこと。

「(それに一番の厄介事は間違いなく彼女木乃香だな。ある意味こっちはJOKERを持つてるわけだし)」

関西呪術協会のお嬢様である木乃香が鬼と行動しているとあれば、猛士にとっては嬉しくはない話。彼女に何かあれば猛士が叩かれるのは必須。安々と危険な場所に放り込ませた関東魔法協会も叩かれるだろうが。

猛士にとつては危険すぎるカードを握っているため、どう対処するかは難しいところ。最悪、関係を更に悪くする可能性がある。余り政治的駆け引きはしたくないチシキ。というより専門外なので、こんなことを考えるのは好きではない。本心では関西呪術協会などはつきり言ってもいい組織と思っっている。あくまでも自分は猛士

れず、文字通り突然目の前に現れたのだ。ヒビキ自身も平静を装うがいきなり現れた少年に驚いていた。

「君が鬼神、新藤誠かい？それとも響鬼と呼んだほうがいいかな？」
「!!」

自分の正体を知っている少年に警戒を強める。

「俺のことを知っているみたいだが、誰だ？」

「僕はフェイト・アーウエルンクス。君個人に興味がある者さ」

フェイト・アーウエルンクスと名乗った少年。興味があると言っているが無機質な眼で言われても余り説得力などないが、ヒビキ自身に興味があると聞き眉を顰める。

「それから邪魔が入らないように追手は僕の方で処理させてもらったよ」

数十人の気配が一気に消えたとなると目の前のフェイトと名乗る少年が倒したということ。それなりの手だれのはずだが、フェイトは物の数秒で片付けたということになる。

「それで俺個人に興味ってどういうことだ？」

「今後僕達にとって邪魔な存在になるかどうか。それから」
「っ!？」

目の前のいたはずのフェイトが突然消えて、気がつけば懐に現れ凄まじい威力の掌底を喰らう。咄嗟に事態に防ぐことができず後ろに吹き飛び、後方の木にぶつかり衝撃で軽くめり込むヒビキ。そのままもたれかかるようにズルズルと座る。

「“神の名を持つ鬼”の実力を見たかったんだが……この程度なのか」

簡単に懐に入れ、反撃もなく攻撃が簡単に当たり、決着がすぐについたことに若干期待ハズレといった風に吹き飛んだヒビキの方を向くフェイト。

「4年前に英国でSランク魔術師の賞金稼ぎを”殺した”というのは間違いだったのかい？」

座り込んでいるヒビキの方に歩いて行き、事前に調査したヒビキの経歴を言うフェイト。しかし、ヒビキは気絶しているのか反応がな

い。それを見たフェイト軽くため息をつき、手をかざし高等魔術『永久石化』をかけようとする。

「やれやれ、どうやら本当に期待はずれだ。わざわざ依頼人の眼を盗んでくる価値もなかったみたいだよ、今後のこともあるから君にはご退場願おっ!?!」

しかし、フェイトの言葉は途中で遮られることになった。突然真下の地面が割れ、強烈なアツパーがフェイトの顎にクリンヒットしたのだ。しかし、自身の障壁が働き緩和させることに成功し、距離をとり後退するフェイト。再度ヒビキの方を確認すると、そこには先ほど木に倒れていたはずのヒビキが何事もなかったように立っていた。木にもたれかかっている方はいつもないか丸太に変わっている。ふと見れば、先ほどまでフェイトがいた場所とヒビキが倒れていた場所に穴が空いている。

「なるほど、咄嗟に変わり身を使い、穴を掘って攻撃してきたわけか。君に対する評価を少し上げないといけないね」

「勝手に人を評価してた奴に言われても嬉しくはないがな。だがさっきの攻撃を防がれるとはな」

確実にとらえたと思ったが、堅い障壁に挟まれて攻撃に手応えないことにヒビキは驚いた。

「僕もそれなりに力を込めたはずなんだけど、無傷とはね」

逆にいえばフェイトの方も顔には出さないが、自身の掌を受けて平然としているヒビキに少しばかり驚いていた。しかし、ヒビキの方は最初の一撃を喰らったのは本当であり、腹部あたりに痛みが軽く走っていた。

「ところでお前人間じゃないだろ?」

「どうしてそう思うんだい?」

「明らかに人間の感じがしないからだ。さっきの一撃も魔力を込めた拳だった。魔導生命体ってやつか?」

最初の時に、人間とは違う感覚を感じたヒビキ。攻撃を貰ったときも魔力のような力の流れを感じ取り彼が魔法を扱う生命体ではないかと。

「まあ仮にそうだったとしても、君には関係ないことだ。今は君の実力を知りたいだけだからね」

フェイトはそれだけ答えると、どこから出したのか巨大な石の大剣を構える。

「あくまでしらを切るってことか。こつちもお前の正体を明かさせてもらうぞ」

装備帯から二対も音撃棒・烈火を構え、臨戦耐性に入るヒビキ。

刹那、二人がかけ出した瞬間凄まじい轟音が鳴り響いた。

「ぐっ！」

迫り来る高速の剣捌きを何とかやり過ぎしていくヒビキ。それに對し、何の反撃もないヒビキ。この攻防がすでに何十分も続き、正直フェイトは段々と興味が失せていた。

「つまらないね。最初の攻撃は中々強力だったのに急に弱腰とは」

最初に喰らった拳は中々強力であり、自身でも最強を誇る障壁に衝撃が走るほどだった。魔力も使えない人間がここまでの威力のパンチを放つたことにフェイトも驚いた。しかし、今は完全に後手に回る戦法ばかりをとるヒビキ。

「弱腰で結構だ。敵の能力を見定めるぐらい常識だろ？」

そう言って、石の剣を一気に烈火で跳ね除ける。そのままかなり高くジャンプする。その時、フェイトが森の奥の何かに気づく。

「なるほど、そう言ってこの開けた場所に誘導してきたってことか」「！」

フェイトに言われ、反応するヒビキ。気づけば森を抜け、広い草原のような場所に二人はいた。

ただ闇雲に逃げまわっていたわけではなく、開けた場所に誘導するのが目的だったがフェイトに見破られる。余りこういった敵を嵌めたり誘い込んだりする作戦が得意ではないヒビキ（昔チシキに「頭の回転は速いが、作戦立案能力は皆無」とか言われたこともある）。

周囲は生えた雑草しかなく、お互い向き合うように立つ。すると、握っていた石の剣を消すフェイト。

「（何する気だ？）」

自らの武器を消したことに警戒を強める。その時、フェイトの足が微動したのが見えた。瞬間、ヒビキの後ろに立っているフェイト。すでに右手を上げて何かをしようとしている。咄嗟のことに驚愕するが、すぐに左腕を振り上げようとするも。

ミツレ・グラデー・オラシディアーニ
「千刃黒耀剣」

フェイトがそれだけを唱えると、突然背後に無数の剣が具現する。それを見たヒビキは鬼眼から一気に鬼導眼を開眼する。

「(あの眼は・・・)」

瞳が変わったのを見たフェイト。一方ヒビキは起動を読み回避しようとするが、余りに密接に剣が迫り避ける場所がない。ならばと、左手に持つ音撃棒・烈火の鬼石に炎を灯すと一気に振り払い、自身に向かう剣を吹き飛ばす。一瞬爆炎で視界がくらむフェイトだが鬼導眼状態のヒビキには問題ない。フェイトも予想外の回避方法に一旦距離を取ると、新たな呪文を詠唱する。フェイトの口元が動いているのに気づくヒビキ。呪文詠唱。やはり西洋魔術師だと理解し、魔法詠唱させまいと一気に間合いを詰める。

フノエー・ベトラス
「遅い、石の息吹！」

しかし、一歩早くフェイトの詠唱が終わり指をヒビキに向け、石化するガスを噴出する。勿論そんな魔法だとも知らないヒビキは構わず突っ込んでいくが、こちらも移動しながら印を結んでいく。魔法なのだから、ただのガスではないと思いつちらも同じ土俵に出る。

「火遁・灰積焼！」

口から火薬を帯びた灰を吐き出し、石化のガスを逆に包み込んでいく。灰はそのままフェイトがいるところまで迫り、包み込んでいく。灰を出しきったあと、音撃棒を再び構え火打石の要領で火花を散らせる。火薬に火花が飛んだ瞬間爆発が発生し、フェイトが放った石化のガス諸共吹き飛ばす。煙が晴れると、爆風を物ともしていないかのようにならぬフェイトが立っていた。

「障壁で防いだのか。大した硬さだな」

「褒めても何もできることはないけど。さっきの灰は忍術による攻撃だね？悪いけどその程度の威力じゃ、傷一つつけられないよ。それど

「ころか僕の体に触れさせることすらできないよ」

挑発とも取れる発言に反応するヒビキ。言動といい、フェイトの目的が今ひとつわからない。

「お前何がやりたい？俺に興味とか邪魔とか・・・」

「それが知りたかったら本気を出すことだ。まだ鬼の姿になっていないからね。このままじゃ消化不良で君を石像にするはめになりそうだよ。」

「だからってはいそうですねかと鬼になるほど・・・（エヴァと同じやりとりしたような）」

言葉の途中で前にエヴァンジェリンと動揺のやりとりをしたのを思い出すヒビキ。

そんなことなど知る由もないフェイトは一瞬隙ができたヒビキに瞬動で間合いを詰め、最初と同じように掌底の一撃を与えようとするも、寸でのところでヒビキの持つ烈火で食い止められる。

「やはりその眼は魔眼の類か。さっきのといい、僕の動きや場所を正確に見れる優秀な眼を持つてるようだ。それに魔力や気とも違う流れの波動を感じるけど、鬼特有の力か？」

接近してヒビキを観察するフェイト。紅く左右違う巴を模した瞳、何かわからない力の波動がヒビキの中を駆け巡っているの感じ取る。牽制とばかりにヒビキはもう片方の烈火で攻撃に出るが、魔法障壁で完全に防がれる。尋常じゃない硬さの障壁に歯を食いしばりながら力を込めるヒビキ。しかしヒビキの怪力も人間体ではさすがに限界がある。そのまま一旦後退して距離を取ろうと飛ぶも、フェイトは更なる追撃を加える。

ドリュエ・ペトラス
「石の槍」

「っ!？」

ヒビキが着地した瞬間に石の槍が突出する。咄嗟に体を捻り避けようとするが、石の槍が脇腹を掠め出血する。着地するがそのまま地面を転がっていく、追撃とばかりに再び《千刃黒耀剣》を発動させる。何とか転がって刃を避けようするも、数力所斬られ血がにじみ出る。それでも尚刃は向かってくる。これが決まれば全身バラバラになる。

装備帯の音叉を掴み、烈火に当てて共鳴させる。

「はああああああああああ!!」

額にかざした音叉がヒビキの体を変貌させていく。紫色の炎が舞い上がり、一気に振り払い爆風で刃を吹き飛ばす。

「それが、鬼か。人間離れした姿だ。魔族や妖怪と言った類に似ているね」

資料で見た写真より禍々しく見えるその姿に率直な意見を述べるフェイト。獣化、いや肉体変化に近い形の変身であると推測する。最初は冗談かと思ったが人間鍛えればあそこまで変貌できるものだと、内心驚く。遠回しに化け物と同じ扱いの言葉を受けるも特に気にしていない様子の響鬼。

「褒め言葉として受け取っておく。お望み通りの展開になったが、コツチにも色々聞きたいことがあるからな」

ゆっくりと立ち上がり、フェイトを見据える。先ほど受けた傷も完全に治癒されいつでも全開の状態にする。消耗するが鬼導眼の同時使用し、臨戦態勢の構えでフェイトの攻撃を迎え撃とうとする。

目の前のフェイトが自分を狙っていると発言しているとしても、可能性として木乃香を狙っているものもある。そこまではないとは思いますが、もしかしたら百目鬼や魔化魍たちにつながる人物かもしれない。フェイトが西洋魔術師であるということが気にかかっていた。百目鬼が麻帆良学園を去って行く時に転移魔法を使っていると聞き、西洋魔術師の存在が視野に入れていた。自分を襲った理由は別段どうでも良かった。刹那を連れ戻すという目的もあるが、響鬼が一番気にかかっていたのは謎の洋館から唯一の手がかりであるあの地図だけだった。

「折角変身してもらったのに、悪いけどそろそろ時間みたいだ」

「はあ?」

もつと力を見てみたかったが響鬼が予想以上に粘ってしまったため、雇い主クライアントが自分がいけないことに気づく頃だと思ったフェイト。所詮隠れ蓑として利用しているにすぎないが、手を結んでいる鬼にも興味がある。あくまで最強の名を持つ鬼神の実力の一旦を見れただけで

も充分だった。

「次に会うのを楽しみにしているよ」

フェイトはその言葉だけを残してゆっくりと地面に沈んでいく。

「逃すか！木遁・樹縛っ」

巳の印を取り、フェイトを拘束する術を発動しようとするも先に完全に姿をけしてしまふ。自分が持つ感知能力もフェイトの気配は感じられなかった。結局鬼に変身したのが無駄に終わってしまった響鬼。結局、何がしたかったのかわからないままになり、後見が悪く感じる響鬼。念の為に顔だけ変身を解除し、歩き出す。

「そういえば、暗部を片付けたとか言ってたな」

フェイトがはじめに言った言葉を思い出し、様子を見るために気配が途切れた地点に向かう。

時間はそれほどかからず、俊足でもものの数分で到着する。

「な、これは……」

到着した響鬼は絶句した。当初は気絶でもされて気配が感じなくなっただのかと思っただがそれは大間違いだった。

全員石の槍で腹を貫かれ、動かぬ死体へと変わっている光景だけだった。



同日 18:08

すでに夕日が見え、季節に咲く桜が美しく彩りされた土地に中央に巨大な大社を中心に規則正しく配置された屋敷がある一件見れば広大な神社。表向きは『炫畏古社』という神社ではあるが、裏では日本の魔法勢力の1つである『関西呪術協会』の総本山となっている場所。普段ならば巫女が行き来したり、観光客が参拝などしたりするが、今は一般人の出入りは禁止され、あらゆる場所に腰に刀を差した剣士や狩衣姿の呪術師、周囲の森には忍装束の姿の暗部が警備を行っている。濃密な守護結界まで展開され賊一匹入れない警戒態勢だった。

現在の関西呪術協会のそう取らざる負えない状況に陥っていた。内部勢力の不穏な動き、近衛木乃香の所在、猛士の勢力が京都で何か

しらの行動を起こしている事態、そして新たな情報で鬼神を偵察していた暗部達は何者かに殺害されている件。関西呪術協会は今正にごった返しの状況だった。

そして、この事態に対し、緊急招集された幹部たちの会合が行われている屋敷の間。上座に座る関西呪術協会の長『近衛詠春』を筆頭に12人の幹部が険しい面構え話し合いをしている。

「長、一刻も早く木乃香お嬢様の奪還を優先すべきです！これ以上鬼側の好き勝手させるのは関西呪術協会の永劫の恥！これ以上犠牲者を出す前に！」

感情混じりに現状を吐き捨てる一人の幹部。猛士の鬼たちを監視する目的で出していた暗部が何者かに殺害され、生還者は誰一人として帰ってこなかった。死亡した暗部達が監視対象としていたのは京都にただ一人先行として入っていた響鬼だったのだ。只でさえ、ピリピリしている情勢下でついに死人が出ってしまった。これ以上の犠牲が出る前に鬼を京都から排除し、過激派が木乃香を攫う前に熱りが冷めるまで本山で護衛すると。更にこの際、木乃香を麻帆良学園に戻さず京都に永久的に移住させるべきとまで言う者も。

「願わくば、過激派の粛清後は猛士への責任追及をするべきです。向こう側も自分たちがお連れている方がどれだけ重要な人物なのかというのを」

「作用、何の通達もなく勝手にお嬢様を連れ回したあげく負傷までさせるとは。それに話によれば『英雄の息子』も同行。関東魔法協会の理事は一体何を考えているのやら。おっと失礼、長の義父でしたね」

ネチネチと遠回しに長を侮辱しているように言っている、長の座る上座に最も近い男。幹部の内の一人である『菅原忠昭』ただあき。幹部全員の中で30代前半と最も若いながら、関西呪術協会の副長を務める人物なのである。簡単に言ううならば関西呪術協会のNo.2とも言える男だ。

長である近衛詠春は、忠昭の言葉をただ聞くだけであり顔色一つ変えず、会合の内容を聞いていた。その態度にムツとした忠昭。

「ふん、あの傀儡では関西呪術協会を率いるのは所詮不可能。やはり

次期長は菅原家当主のこの菅原忠昭なのだ。そのために天ヶ崎には早めに近衛の小娘を攫ってきてもらわなければならん。やつを失墜させるためにもな。いやもう半分以上は失墜していたな)」

不敵な笑みを浮かべ、着々と進んでいるクーデター計画のために早期に行動に移すべきだと判断を決めていた。

そんな忠昭の顔を見つめている一人の初老の男性。名を大河原甚之助。長く関西呪術協会に使えてきた重鎮であり、近右衛門とは旧知の間柄。そして関西呪術協会の中で数少ない猛士に理解を示す人物でもある。

「忠昭め、お前の好きにはさせぬぞ」

忠昭が邪悪な野望を持つていることを見抜いている甚之助。自身も早めに行動を移さねば、先手を取られれば鬼や関係のない者たちまで被害を受ける可能性もある。最悪捕縛されれば猛士との交渉材料になりかねない。何とか彼らが利用している拠点の場所まではバレてはいないはず。猛士側も魔化魍と組んでいる抜鬼達の討伐のため、京都で色々と行動を起こすこともわかつていたが、今動かれるのはマズイ。何とかこの会合で警備重視の方に傾くのを願う。木乃香の安全は鬼達に任せたいほうが良いと考えている。

そして時間を割いても結局何も進展しないまま会合は終わりを迎えていた。

「継続して本山の警備を嚴重にしてください。それから一刻も早く封眼寺派の者達の捕縛を」

詠春はそれだけを言い残して、大広間から出て行く。決まったのは継続して本山の警備重視と封眼寺派の搜索だけ。一体何のために集まったのかと不満をぶち撒ける幹部。こうした詠春の態度が下の者たちの不満を募らせているのだ。詠春が長となつてからというもの、東の魔法勢力である近右衛門の言いなりになるかのように、まるで下部組織的な扱いを受けてきたことに関西呪術協会という組織は腹を立てていた。

「皆の者不満等があるでしょうが、今は長の言う通り本山の警備と反乱分子の捕縛を優先しましょう。責任云々はその後でいくらでもで

きます。何かが起こればすぐに本山に連絡が入りますし、今は犠牲になつた暗部を弔わなければ」

忠昭の言葉に皆が「副長がいうのであれば」と言う。一介の剣士の身分で近衛家に婿入りし、長として居座り魔法使い鼻肩している詠春のことは幹部共々失望しているが、陰陽師の名家でもあり菅原家の当主たる忠昭のことは有望と思つている。やはり皆どうしても家柄というものを気にするもの。特に名門揃いの関西呪術協会では。

「しかし、鬼どもめ。まさか暗部を殺害するとは」

「それはまだわからぬぞ。追つていた暗部が何者かに殺害されたとの情報だけ。安易に鬼を敵と断定するのは軽率すぎる」

一人の幹部の発言に反応した甚之助が注意する。

「ですが甚之助殿。それ以外に誰が暗部に手を掛けるというのです？」

「情報が錯綜している内に決めるなど言つておるのだ！」

「まあまあ、甚之助さん。これ以上内部で揉めるのはやめましょう」

声を上げてきた甚之助をなだめるように言う忠昭。話の中に急に入られ顔を顰めるが、相手は組織の副長を務める人物。いくら自分が年齢が上だろうと関係ない。すぐに謝罪をし、去るように退出していく。残りのメンバーもそれぞれの持ち場に戻っていく。

「ふふ、もうすぐ新たな関西呪術協会が始まる……」

一人残つた忠昭は口元を歪ませ不敵に笑う。

『Prrrrr! Prrrrr!』

「ん？電話か？」

懐に入れてある携帯電話の着信音が鳴り響き電話にでる忠昭。袴姿に携帯電話とは時代は変わりつつある証明であるかもしれない。

「もしもし。これはこれは！わざわざ貴方から連絡をくれるとは……近衛の娘の居場所？それは誠ですか。そのような情報をくれるとは……わかっていきます。事態が収束次第合流しましょう……」

“團蔵”殿」

第三十七ノ卷 《幕開け》

4月2日（水） 19：25

「んも、いつになつたらあのイケメン軍団を襲うの？」

「イケメン軍団って、どこがよ？アンタちやんと目的わかつてんでしようね？」

時刻はすでに7時を回りあたりは暗くなり、不気味さが漂う森の中に朽ち果てたような神社の跡。その寂れた境内内で、体をクネクネさせながら喋るスキンヘッドの女・・・というよりオカマな男。素っ頓狂な発言をするオカマを見るドウメキ。スキンヘッドに付けまつ毛、口紅、見るからに屈強な肉体を持つ男性。ドウメキが集めた抜鬼達の内の一人であり、名を《釜鬼》^{かまき}。本名は谷熊大吾朗というなんとも男らしい名前だが、本人はその名を言われるのを嫌っており《カマ子》と名乗っている。

「何言ってるの！写真見たけどなんともキュ〜とな子たちじゃない☆特にこのネギきゅんはとつても素敵な子に育つわ〜。チュツ♡」

ネギが写っている写真に口づけするカマキ。端から見ればものすごく気持ち悪いはずだが、ここに集まるメンバーの殆どは社会不適合者ばかりなので特に誰もそう思わない。そんな様子を見ていた一人が不気味に笑いながらカマキに言う。

「イヒヒヒ。そんなガキのどこがいいんだか、オカマの気持ちはわからんわからん」

「ちよつとアンタ！陰気なガリガリ君にオカマの何がわかるのかしら！」

すぐ近くであぐらをかいて座っている男性の発言にムツとなるカマキ。発言どおり男性は体格が細く、むしろガリガリで服装は全身を黒いフードで覆っている。彼もまた、ドウメキにより集められた抜鬼の一人《陰鬼》^{いんき}。

「どうせならこの娘達を甚振る方が面白そうだ。こんな奴に用はないさ」

「こんな乳臭い小娘どものどこがいいのかしら!?!アタシには到底理解

できないわ!」

「静かにできねえのか?」

騒ぎ始める二人に殺気を飛ばす顔を包帯で覆い、忍び装束を纏ったアンキ。青木ヶ原樹海で殺し甲斐のあるヒビキを寸での所で邪魔が入って以来、ドウメキからずつとこの場所に待機状態だったため不満が最高潮だった。只でさえ殺戮衝動を抑えるを我慢しているのをふざけた二人の言い合いで不満が溜まっていた。

「あくらやだ。好戦的な男はきらいじゃないけど。顔見せない子は嫌いよ。大体なんでアンタ包帯なんて巻いてるわけ」

そう言っつてアンキの包帯のことを指摘するカマキ。包帯のことを言われて癪に障ったのかアンキがカマキを睨む。

「下衆なオカマ野郎は黙ってろ」

「日本語わかるかしら? アンタの言葉今ひとつ理解できないわ」

アンキの言葉を聞いてカチンときたのか、カマキがゆっくりと近づいていく。ピリピリとなる二人の空間に蚊帳の外になりつつあったドウメキが入り静止する。

「いい加減にしなさいアンタたち。敵とやりあう前から内輪揉めどうする気よ? これ以上騒ぐとここから消えてもらうことになるけどいいのかしら?」

さすがに癖の強すぎる面々が揃ってることもあり、ドウメキもイライラしながらも沈めようとする。さっさと殺した方がつとり速いがここにいるメンバーは今回の作戦には必要であり、今後とも利用しなければならぬ。刹那のように《鬼幻心》を掛ける必要するない(そもそも模造品でしかない鬼導眼の鬼幻心では彼らには効かない)狂った連中であるため、基本的に金と欲をチラつかせれば言うことを聞いてくれる。

「はくわかったわ。女のアンタの言われるのはカチンと来るけど。今回はビジネス。今はアンタがボスだからいうことを聞くわよ」

「ふん、それでいつ鬼神とコロシアイができる?」

アンキだけは話が通じないのか、未だにヒビキとの戦いを所望する。血に染まった音叉剣を握りしめ、今にもここにいるメンバーを斬

りかからん雰囲気。

「それなら・・・あら？」

何か言いかけた時、窓の隙間から何かが入ってくるのを見たドウメキ。ゆつくりと紙の翼を羽ばたかせたのは折り鶴の式神。どうやら千草がよこした連絡用の式神のようであり、折り鶴がひとりで一枚の紙へとなる。紙には何やら暗号らしき文字が書いてある。

「へく、あの呪術師の娘。小娘の居場所突き止めたみたいね」

手紙の内容が木乃香たちの場所が判明したのだとわかり関心するドウメキ。思ったより速い特定に千草の評価を少しばかり上げる。余り時間が掛るなら居場所特定はこちらがしようとしたが「そんなのはこちらか手に入れるゆえ。待つといってください」と千草が挑発するように言ってきたのだ。大方こちらの情報や力などを誇示するのが目的であろうが。

「それは朗報じゃなあ。なら鬼を引き剥がす作戦に移るのかしら？」

そんな思惑など関係ないかのように、ようやく自分たちが動くことができることに喜びながらドウメキに聞くカマキ。このままこの場所にいるのは窮屈すぎて嫌になっていたのだ。同調するようにアンキとインキも同じような気持ちだった。

「そうよ。でもその前にアンタたちに伝えておくことがあるから」

ドウメキがとあることを語りだす。それはカマキ達が知らされていた計画とは全く違う内容であり、今回の千草が企てた作戦を根本から覆す物だった。

「アンタ、ド汚い性格してるわね。あの呪術師の娘、逆上して襲ってくるんじゃない？自分たちが使おうとしていたのが実はなくて、代わりにとんでもない物復活させるから」

「まあ逆上したらしたで構わないわ。あの女には最後に生贄でもなつて貰うつもりだし。最も下準備だけには付き合ってもらわないと困るのは事実。さすがに術式の発動はあの女の力があるのよ」

魔力関連については、ドウメキと結託している謎の男女も魔法技術を本格的に着手したのは最近であるため、魔力を利用した封印術式は

まだよくわかっていないため、どうしても呪術師や魔法使いの技術が必要になる。

◆ たとえ封印されているのが千草の“望む神”でなくとも。

同日 20:06

少しばかり苔が生えている瓦葺きの寺院。正面の門から寺院の周囲を囲むように配置されている土壁が用いられている塀。外見上は特に変わりない、京都ならどこでもありふれた寺の1つ。しかし、この寺院には肝心の住職も修行僧もない。なぜならこの寺院を利用しているのは京都で極秘裏に活動している“猛士の鬼”が拠点として使用していたからだ。

「遅い！遅すぎるやろ！ヒビキの奴一体何やつとんのや！」

星輝く空に向かって特徴的な関西弁で叫ぶ一人の青年。彼の名は西野新弥、またの名を音撃戦士「西鬼^{ニシキ}」。戦国時代に活躍した七人の戦鬼の一人『西鬼』の名を継ぐ者なのだ。彼は現在、猛士関西支部から事態收拾のために応援としてやって来ていたのだ。

「ちよつとニシキさん、こんな場所で大声出さないでください！」

突如寺院を出て叫び始めたニシキを追いかけように出てきたのは、カンナツキのサポーターを務めている鬼密班の正文。この付近は民家も少なく、四方を竹やぶで覆われているが、下手に妙なことを起こせば関西呪術協会や京都神鳴流に悟られる可能性がある。この寺院は関西呪術協会で幹部をしている者が提供しているものなので、反猛士派が多い協会でその人物が危険に晒されるかもしれない。

「お前心配やないんか!?集合時間なんかとつくの昔に過ぎてるんやで！アイツに俺のたこ焼きを食わせようと思っただんに！」

「そ、そんなことで叫んでたんですか・・・」

「そんなことやて!?ヒビキの奴、俺が前に食わせたたこ焼きを『普通』とか言ったんやぞ！お好み焼きもそうや！それにシユウキの奴も、俺のお好み焼きにケチつけやがるし、あの菓子職人にも俺の粉物食わせる必要があるんや!!」

なだめようとすするも、見当違いな心配をしていたニシキに軽く呆れ

る正文。大阪人のニシキ。たこ焼きやお好み焼きと言った粉物に凄まじい執着心を持つている。ちなみにライバル広島風らしい。

「もう我慢できひん！俺は行くでえ！」

「待ってくださいニシキさん。ここにどどまるようにチシキさんやカシナツキさんに言われたじゃないですか！それにあの魔法少年や生徒さんたちを守る任も受けてるんですよ！」

今にもヒビキを探しに行かんと飛び出しそうなニシキを何とか食い止めようする正文。

「落ち着いてくださいニシキさん。私達が妙な行動を起こすのがどれだけ都合悪いか、わからないあなたじゃないでしょう？」

寺院の入り口から誰かがくる。ラフな格好であるが、どこか大和撫子な雰囲気を漂う一人の女性。ニシキと同じく応援として猛士総本部から来た鬼の『水無月鬼』だ。ニシキが寺院からの入り口の方に行くのを目撃して、まさかと思い追いかけてきたのだ。

「ミ、ミナツキさん」

「ミナツキ・・・やけど、余りにも時間がかかりすぎやろ。連絡も入ってへんし、これは何かあったとしか」

ミナツキの言葉に言い分もわからないわけではないニシキだが、納得はできなかつた。やはり口ではああは言ったが、ヒビキのことが心配で仕方なかつたニシキ。ヒビキとの付き合いはそこまで長くはないが、同じ鬼として魔化魍を倒す仲間^{せんゆう}。

「正文くんの言う通り、私達はここで彼女たちを守ることに。それが第一のはずです。本格的に動くのは明日以降ですし、それに・・・ヒビキさんが簡単にやられるわけじゃないじゃないですか。あの人は鬼神なんですから」

どこか信頼、尊敬といった言葉でヒビキは大丈夫というミナツキ。その言葉を聞いて、ニシキも参ったって顔で寺院の方に歩いて行く。正文もその後についていく。ミナツキのすぐ横まで行くと。

「へえ、そうやな。ここで俺一人が騒いだ所で仕方あらへんな。やけど、やけにヒビキのこと信頼しとるなミナツキ？まさかこれか？」
ニツと笑い、小指をたてるニシキ。それを見たミナツキはほんのり

顔を赤くする。

「な、何言ってるんですか!? 違いますよ。私は単にヒビキさんが誰よりも強いってことを・・・」

「余計に否定しとるんが、気になるな?」

「ニシキさん、茶化するのはそこまでですよ。たこ焼きでも何でも食べさせてやりますから、早く戻ってください! 貴方をほっとくと勝手に暴走するんですから」

両手でニシキを押すように前進させる正文。「な、何するんや!? お前もカンナツキさん茶化しとったやんけ!」と言い、正文も反論するように寺院の中に入っていく。再び鎮まり帰った外の世界。

「・・・」

一人残ったミナツキはなにか思いつめるように周囲を見渡していた。それが済んだのか、彼女も寺院の中へと消えていった。



同日 20:26

作戦開始時刻まで残り数時間。ドウメキは人知れず境内を後にし外へと出て行く。月など出ておらず薄暗い参道の石畳を歩いて行く。手入れもされていない石畳は隙間から雑草が生えている始末。そして柱に亀裂が入っている鳥居まで差し掛かると、一人の男性が腕を組み鳥居の柱にもたれかかるようにいた。顔に刺青を入れてはいるが、誰もが振り返るような綺麗な顔つきをしている。男性の姿を見て、意外と言った顔をするドウメキ。

「あら、遅かったわねロウキ? もっと早く来るかと思っただけど」

名前を呼ばれるや否や、ドウメキを射殺すよに睨みつけるロウキと呼ばれる青年。過去のいざこざで猛士を追放された音撃戦士《ロウキ狼鬼》。特殊な呪術ですでに100年以上を生きており、人間を守る立場の鬼でありながら人間嫌いであり、その行く末を見つめている立場にいる鬼。こうして表に出て行くことなど滅多にないのだ。そんな彼がこうして呼び出されている。

「驚いたな。冗談かと思ったら本当にこうして生きてるとは思わな

かった。貴様はとつくの昔に死んでいるはずの鬼だからな」

「それはお互いさまでしょう？100年以上も生きて、少しは人間の価値観でも変わったのかしら？」

面識があるのか、初めてあったような雰囲気を出さず話す二人。しかし、ロウキの方はそういう知り合いのような感覚ではなく、射殺するように込めて話していた。

「大した女だよ。刹那を人質に使ってこんなところまで連れてくるとはな」

「言うじゃない。でもあの小娘の記憶除いて正解だったわ。まさか、人間嫌いのアンタが知り合いだったなんて。ってあの小娘人間じゃなかったわね」

「貴様…」

ドウメキの言葉がよほど気に触ったのか眼を細めて、今にも飛びかからんとする。しかし、ドウメキは軽く笑みを受かべ、手を挙げる。それに反応するかのように、鳥居の影から野太刀《夕風》を携えた刹那が現れる。腰にはしっかりと怨念声刃が携帯されており、その瞳はうつろで光がなかった。

「！」

「妙なこと起こせば、その小娘を自害させるわよ」

その言葉と共に、夕風の刀身を自分の首筋に持つていく刹那。

「どこまでも腐ったやつだな。鬼幻心で心を掌握したあげく、完全に意識を乗っ取ったか」

「褒め言葉としてうけてとっておくわ。それに鬼幻心を使ってるなんてよくわかったわね。さすがに長生きしていると違うのかしら？」

「わかるさ。本物とは遥かに程遠い力だ。所詮は偽物の鬼導眼、まがい物で出せる術なんてたかがしれてる」

挑発するように、ドウメキに向けてメンチを切るロウキ。もし本物の鬼幻心の瞳術ならば、無意識に発動者の術中にハマっているはずだと。完全にクグツのようになってる刹那を見て確信したのだ。

「だから本物が欲しいのよ。ま、今はそんな話をしにアンタをここに連れてきたんじゃないわよロウキ？」

「ならまず刀を降ろさせろ」

それを聞き、ドウメキが刹那に眼をやると、そつと夕風を下ろす。

「刹那を人質にとつて、俺に何をさせたいんだ？」

「本当にその小娘のことが大切なのね？正直、向かわせた時は腕でも切り落とされてるかと思つたけど」

弄つたらしく話すドウメキに苛立ちを隠せないロウキ。

「俺を無理やり連れてきて何をさせる？」

「色々やってほしいけど、まずは鬼神を抹殺してほしいって所かしら？」

「何だと？鬼神を…」

あつさりと要望を口にしたドウメキ。その内容に眼を丸くして驚くロウキ。鬼神、つまりヒビキの殺害依頼。

100年以上を生きているロウキにとつて、歴代鬼神の中で唯一短い期間ではあるが修行をつけたことのある鬼でもある。

「無理に抹殺する必要はないわ。牽制でも充分感謝するほうよ。■■■

■の封印を解除するまでね」

「!? 貴様今何の封印を解くといった!」

ドウメキのある単語に反応したロウキ。

「何って、■■■■よ■■■。アンタなら時代的にギリギリ見てるんじゃない?」

「神話の魔化魍まで引張だして何を企んでる。あれを制御するのは不可能だぞ、いくら魔化魍と手を組んでいる貴様らでもな」

ドウメキが復活させようとしているものがどれだけ危険な魔化魍か知っていたロウキは、無駄だと忠告するが。

「その辺は心配ご無用。別に制御する気はないわ。ただ復活させればいいだけだから」

どこか遠い空を見上げて、どうでもいいと言つた風に言う。それを見たロウキは追求する。

「何を企んでる…」

「それをアンタが知る必要はないわ。さあどうするの?拒否つて小娘をここで自害ショーでも始める?」

「っ…」

困惑するロウキのすぐ隣まで行き、語りかけるように回答を待つドウメキ。眼を閉じジツと考えるロウキ。人質に取られたような刹那に対して、特別な思い入れがある。どうしても見殺しにできるような存在ではない。

「(ヒビキ：悪いがお前を利用させて貰うぞ)」

そして、決まったのか眼を開けドウメキを見据える。

「いいだろう。お前の傘下に入ってやる。だが忘れるな？刹那に何かしらあったら、その時はお前の存在をこの世から消し去る。他の鬼や、魔化魍どももな」

「いい返事ね。その時になったらお手柔らかにしてほしいものだわ」

そう言つて、ロウキの後にするように歩いて行くドウメキ。近くにいた刹那もそれに続くようについていく。それをただ見つめていくことしかできないロウキ。

「ふふっ、たった一人の小娘のために傘下に入るなんて。とんだあまちゃんなこと」

多少は抵抗されると思ったが、ロウキがすんなりと入ったことに笑みを浮かべる。しかし油断はできない、相手は歴戦の鬼であり、本気でやりあえばドウメキも無事では済まされない。それだけ狼鬼は強力な鬼なのだ。だからこそ、その相手を鬼神に当てることにしたのだ。猛士から追放され、フリーで活動をしていた狼鬼を。



同日 20:48

時間は少し進み、寺院内部の畳敷きの客間ではネギ、チシキ、カンナツキが四角いちゃぶ台を囲むように座っている。カンナツキはどうやら携帯電話で誰かと電話をしているようだ。

「そうですか。はい、わかりました。それではこの場所で待っていますので、気をつけて」

通話を終え、携帯電話をしまうカンナツキ。ネギが口を開き、内容を訪ねる。

「あのヒビキさんの同行は…」

立場はお兄ちゃんなどとは呼ばず、ヒビキの名を出して聞くネギ。どうやらカンナツキはヒビキの行方を聞いていたらしく、難しい表情で電話の内容を伝える。

「ヒビキくんが通った京都の山中で彼の携帯電話やら血のついた上着が見つかったそうよ。それに関西呪術協会の暗部の遺体も付近で見つかったって話らしいわ。最も遺体は協会が回収したって話らしいけど」

「遺体…ですか」

「あつ」

遺体という言葉に思わず言葉を詰まらせるネギ。公私は分けているつもりだったが、まだ10にも満たない子供の前で言うべきではなかったと、ついしまったと言う顔をするカンナツキ。しかしネギは「気にしないでください」とやんわりと返した。

「こう言った事態は前にもありましたから」
「…」

ネギの表情からはとても10歳が出せるような顔つきではなかったのに、カンナツキは内心驚いた。

話を戻そうとチシキがカンナツキに内容を聞く。

「ジンギは他になにか言ってた？敵の情報とかは」

「それだけみたいよ。関西呪術協会の残りの暗部が動いてるらしいから、あまり大きくは動けないみたい。聞いたら関西支部から京都に入るだけで苦労したみたいよ。ニシキくんと同じようにたこ焼き屋に扮して潜入すればよかったのに」

この場にはまだ来てはいないが、カンナツキの要請により応援として派遣された総本部のミナツキ、関西支部のニシキ。そして最後の一人が『仁鬼』と名乗る鬼。

「ニシキの奴が一人で突っ走ってきたんだから生姜ないだろ」

本来ならニシキと共に京都に入るつもりだったが、手違いでニシキが先に京都に入ってしまったため、ジンギが後から追いかけるように向かって行ったのだ。

「(確かにあの人ならやりそう)」

今日をはじめてあったはずのネギがなぜかチシキの言葉に納得する。それもそのはず、ここに到着してからニシキの暴走とも言えるたこ焼き談義やら、関西呪術協会への強行突入しようとするなど。いろんな意味でぶっ飛んだ人だというのがネギの感想だった。そして先ほど、ヒビキ捜索のために単独で行こうとした(しかし、ネギも探しに行きたかったのは事実であるが、明日菜たちを守るのが自分の役目だと押し黙った)。

「少し話を整理しようか。抜鬼の件、関西呪術協会、ヒビキの行方不明やらで目的がわからなくなってきたからな」

段々と状況が変わっているため、一度整理しようとする案を出すチシキ。了承するように相槌をするネギとカンナヅキ。今最も優先するべきことは

1. 桜咲刹那の救出
2. 近衛木乃香の護衛
3. それに関連していると思われる抜鬼の捕縛、もしくは鬼祓いの遂行

の3つであり、木乃香に関連している関西呪術協会の過激派による動きは猛士側には本来関係のない事態であり、安全策を取るならば木乃香を関西呪術協会に保護させるのがつとり速いが、幹部であり猛士のサポーターでもある甚之助の話によれば、詳しくは説明はなかったが、本山は信用できる状態ではないとのこと。猛士側での保護が良いと逆に要請されたのだ。

「下手に動かさず待ってるところか。少なくとも、情報が足りないうちに行動するのはやめたほうがいい」

「そうね。一応正文くん経由で鬼密班からの情報も入っていないみたいだし、待機がいい判断かしら」

「(まあ、知ってても奴らが情報なんてくれるとは思えないけどな)」
警察で言う公安的な役割もつ鬼密班が情報なんて開示するとは思っていないかったチシキ。個人的に鬼密班のことは快く思っていないかったのだ。

「じゃあ行動は明日になるまではなしってことですか」

「まっ、そういうことだな。ヒビキのことも心配だが、今は彼女たちの方が優先だ」

「…」

わかっていたことだが、やはり心配なネギ。

「そういえば、明日菜ちゃんたちなにしているのかしら？」

「確か、ミナツキさんたちと寢床準備するとか言っていましたけど」

「もう寝る時間か？」

ネギの言葉に、壁に掛けている古時計を見るチシキ。すでに10時を回ろうかと言う時間帯。

「そういえばクウキくんからの連絡は？」

もう一人、チシキたちをずっと影から護衛していた空鬼くうきの動向を聞くカンナツキ。チシキたちが到着してからは、偵察に出て行ったらしい（らしいとは直接クウキに会っていないから。そもそも彼は名を示す通り、本当に空気のような存在であり、共にいても気づかないくらい存在が薄い。しかしその影の薄さは鬼密班で重宝しているのだが…）。

「ヒビキに関しては何も無いな。アイツは今協会側の偵察に出てるから、何かあれば連絡が入るはずだ」

「そう。ネギくんの方は？」

「麻帆良学園の方はてんやわんやだそうですね。木乃香さんを京都に入れたことがとんでもない問題になってるらしく、関西呪術協会からの抗議の連絡で」

すでに麻帆良学園から出て数日が経過しており、木乃香や明日菜がいなくなっているのはすでに知れ渡っていた。更に関西呪術協会にすでにリークされたため、いつ狙われるかもしれない木乃香を簡単に出し、猛士の鬼たちと行動を共にさせ、拳句の果てに死にかけた（樹海事件参照）との件が問題となっていたのだ。お陰で学園は関西呪術協会からの抗議の電話やら何やらで切羽詰まった状況になっている。イギリスの出張から急遽帰還した学園長は後退した髪が更に薄くなるぐらいの気持ちだろう。学園長としても、只でさえ折り合い

の悪い関西呪術協会との関係が悪くなるのは避けたい事態だった。外部にネギ達を出した件がここまでの大事になっているのは全くの予想外だったようだ。

「猛士総本部も同じ状況だな。ミナツキの話だと、関西呪術協会は今にも猛士を総攻撃しそうな勢いで抗議の内容を送ってるらしい。向こうはこつちの話を取り合おうともしなかったくせにな。勝手な連中だ」

障子戸を開けて、吐き捨てるような台詞を吐き部屋から出て行くチシキ。

部屋に残ったカンナツキとネギはなんとも言えない表情になるのだった。



同日 22:05

「まずいな……全く身動きがとれない」

森の茂みに伏せながら身を隠していたヒビキ。辺りは暗く、周囲の景色どころか人の姿も確認できないはずだが、人が行き来する気配を感じ取っていた。恐らくフェイトと名乗る少年が処理した暗部の死体の件でヒビキを血眼になって探しているのかは定かではないが、ここで下手に動くのは得策ではない。

「(くそつ、こんなことしてる場合じゃねえのに)」

フェイトとの戦闘後、急いでネギたちが行っている寺院へと向かうはずがとんだ足止めをくらってしまったことに、苛立ちを募らせていた。上着も脱ぎ捨て、連絡手段の携帯電話もおいてきてしまっている。神威で飛ぶにしても、長距離を移動するのに鬼力を大量に消費する可能性があるため、使うかどうか躊躇っていた。このまま堂々と出て行って暗部と一戦交えるにしろ、余計な時間を使いたくわなかった。

「……」

「神威で一時的にでも離れるべきか……」

「……」

「リスク承知で使いたくはないが……」

「……」

「……あの、いついました。クウキさん？」

ここに来てヒビキはようやく気づいた。いつのまにか自分のすぐ隣で、さも当たり前のように伏せているクウキと呼ばれる人物に。先ほどまで、というよりまるで空気そのものといったも過言ではないほど、存在感がまるで感じられなかった。見るからに服装なども質素な格好で、密偵には持つてこいの格好をしている。

ヒビキ自身も感知能力はそれなりに高いが、この男だけにはそれらを感じられない。

「……い……あ……」

「??」

ヒビキの質問に対して、何か口元がモゴモゴと動いているが全く聴き取ることができないほど小さい声。何を言ってるのかはつきりしると言われても可笑しくないが、ヒビキは彼、鬼密班に所属する《音撃戦士・空鬼》のスタイルだということを熟知しているため、特に怒るような素振りを見せない。名古屋からずっとネギや木乃香たちを護衛していたのだから。

《ほんの数分前》

「あ、そうですか……」

どこからだしたのか、メモ帳のようなものに書き記すクウキ。わかりにくいのが、これがクウキのコミュニケーションの取り方である。

「ヒビキ…探したぞ」

「！ジンギさん、どうして？」

そしてもう一人、ゆつくりと匍匐前進でヒビキとクウキが身を隠している茂みに現れる人物に驚く。キリッとした表情に、顔の真ん中辺りに一文字の刀傷が特徴の人物。西鬼と同じく猛士関西支部に所属し、猛士でもトップクラスの剣を得意とする《音撃戦士・仁鬼（ジンギ）》。余談だが、名前の通り、仁義に熱い性格でもある。

「お前をずっと探してたんだぞ？血塗れの上着や携帯が見つかったから、急いでな」

「ああ、そういえば放置したままでしたね。急いでたんで…でも、ジン

ギさんこそどうして京都に？」

「チシキの要請でな。ニシキと共に応援として来たんだ？聞いてないのか？」

「鬼が来るとは聞いてましてけど、それがまさかジンギさんなんて。それにニシキもいるんですか……」

実力の高いジンギが来てくれたことに心強いと感じながらも、共に来たというニシキの名を聞き、顔を顰める。前にニシキ……というより関西支部に所属する鬼の応援に来たことがあったのだが、散々な目にあつたことがあり、いい思い出がなかった。当然ジンギもそのことを知っているので、ヒビキの愚痴ともいえる言葉をスルーしながらも、今現在の状況を確認する。

「まあヒビキを見つけたのは良かったが、関西呪術協会の連中の動きも活発化してるな」

「きつと、暗部の死体の山が発見されたからでしょう」

ジンギの話聞き、すぐさま殺害された暗部の人間のことだろうと理解するヒビキ。すぐに返答が返ってきたことにジンギは驚く。

「誰がやったかわかるのか？」

「西洋魔術師ですよ。それも凄腕の。一戦交えましたが逃げられませんでした」

フェイトと名乗る西洋魔術師の少年のことを話す。間違いないだろうが、フェイトがやったとのこととも一緒に伝える。

「ここに来て西洋魔術師の登場か。どうなってるんだ一体……」

「こつちが聞きたいですよ。樹海での一件以来……麻帆良学園……いや、猛士に盗みが入ってから状況がガラツと変わりました」

一連の事件の発端が猛士に盗みが入ってからはないかと推測するヒビキだが、そんなのをいくら考えたところで今の状況が変わると思わなかった。

「ああ、ヒビキ。その件なんだが、鬼密班からある情報があつてな」

「情報？なんです？」

「猛士の入った盗人の話だが、それを手引した者がいる……」

「手引？要は裏切り者ってことですか？」

「そうだ。それでその人物が…ミナズキらしいんだ。彼女が猛士を裏切っている可能性がある」

「!?」

ジンギの放った言葉に驚愕するヒビキ。水撫鬼^{ミナズキ}。本名を御影美緒^{みかげみお}。若干18歳で猛士総本部に所属する鬼であり、ヒビキ自身も何回かしか会ったことはないが、容姿端麗で、実力も折り紙付きと非常に優秀な鬼だというの知っていた。更に御影家は宗家である和泉家と親類関係という血筋を持つ。もともと御影家はすでに彼女一人しかないのだが。

そんな彼女が猛士を裏切っているという内容が、ヒビキはにわかには信じられなかった。それにあまりに簡潔すぎて何を裏切っているのかもわからなかった。

「それは確かな情報なんですか?」

「鬼密班組頭が掴んだ情報だ」

「(隼人が…)それは一体…!?」

ジンギに詳しい内容を聞こうとした瞬間、突然クウキが苦無を片手に動き出す。

“見つかった”

クウキが動いた瞬間に、瞬時に理解したヒビキとジンギはその場を離れる。案の定、離れた瞬間に苦無が何本か地面に突き刺さる。茂みから飛び出したヒビキは、樹木の枝に飛び乗る。ジンギも変身音叉を音叉剣を?化させ、臨戦態勢をとる。すでに漆黒の森の方からは金属音が数回響き渡り、それを照らすように火花が飛び散っている。

「ヒビキ、理由が知りたいのはわかるが今はチシキたちがいる寺院へ向かうのが先決だ」

「ですね。その話が本当なら、寺院にはミナツキがいるはずです」

「だから、お前に話したんだ。理由はわからんが、ニシキたちに連絡がつかないんだ」

「急行しますよ。でもその前に、ここの暗部連中を何とかしないと」

聞きたいことはあるが、今はこの暗闇での戦闘をどう切り抜けるのが先決かと考える。やはり先の考え通り、ここで暗部と一戦交えてで

もネギたちのいる場所に向かうしかないのか。

「ヒビキ、先にいけ。ここは俺とクウキが食い止める」

「何言ってるんですか。少なくとも30人以上はいますよ」

暗部の数が一個小隊くらいいる中、それをたった二人で相手するというジンギ。無茶ではないかとヒビキはいうが、ジンギはヒビキの方を向き、無言で見る。

“早く行くんだ”

ジンギの眼差しを見て、そう感じ取ったヒビキ。一瞬拳に力が籠もるが、ヒビキは頭を軽く下げてその場から瞬時に移動を開始した。それを見届けたジンギは音叉剣を構えるとおもむろに振るう。気づけばジンギの足元には真つ二つに切り裂かれた苦無の残骸が転がっている。

「不器用ですまんなヒビキ。説明が下手くそで」

ヒビキに謝罪しながらも、向かってくる暗部の元へ全力で駆け行って行くジンギ。次の瞬間、金属の弾き合う音が響く、駆け出していくジンギの足元には暗部の投げた苦無が落ちていく。それを見た暗部は数人現れ、集団でジンギを襲う。

「はあ!!」

刹那、ジンギが一気に暗部を駆け抜けていった瞬間。暗部たちは糸が切れた人形のように次々と地面に倒れていく。

「な、何が…」

地面に倒れた暗部の一人が何が起きたのか理解できず、ジンギの方に顔を向ける。

「安心しろ。ただの峰打ちだ」

それだけ告げるとジンギは再び駆け出していくのだった。

「うわっ!?!」

「こいついつのまに後ろに!!」

場所は変わり木々に飛び移りながら戦っているクウキと関西呪術協会の暗部たち。しかし、向かってきたクウキの相手をしているはずだったが、いつのまにか姿がおらず、気づけば後ろに回られて次々と昏倒させられていく。

一方、ジンギに促されネギたちのいる寺院へと向かっていたヒビキ。木から木へ、時折降りては無規則に移動していた。体力を使い、何人かの暗部を牽制するのはこれが有効できたと判断する。

「(この森を抜ければ、あとは一直線だ)」

森を走りもう十分くらいはたっただろうか、そろそろ森から抜け一般道がある道へと出ることができる。そうなれば、あとはそこを一気に下っていけばネギたちのいる寺院へとたどりつくことができる。

「はあい♪鬼神！お久しぶりね？」

「!!ドウメキ……」

どこから現れたのか、暗闇の中から不気味な着物を見の纏った女性。今現在この混乱した状況にある意味作り出した張本人《百日鬼》。ずっと尻尾を掴むことができなかつたのに安々と現れたことに驚くヒビキ。

「そんなに急いで、何かあるのかしら？」

甘ったるく一度聞いただけで覚えてしまうような口調でヒビキを見るドウメキ。そんな彼女を睨みつけ不機嫌そうに受け答えるヒビキ。

「決まってるだろ。下衆なお前から彼女たちを守りに行くんだよ。だがな、まさかお前の方から出向いてくれるのは好都合だ。とっ捕まえて、連れて行った桜咲を解放してもらおう」

今すぐにも寺院に向かうべきなのだが、ここで決着をつけることができれば、刹那の解放やこの一連の混乱した情勢を沈静化できる糸口になるかもしれない。ここは寺院にいるチシキたちを信じるしかない。ヒビキは？化させた音叉剣と音撃棒・烈火を構え、いつでも攻撃できるようにする。

「あらやだ。好戦的な男はきらいじゃないけど、鬼神。あなたの相手をするのは私じゃないわ」

「どういう意味だ？」

「すぐにわかるわ。そうでしょロウキ？」

ドウメキが徐ろに近くの樹木を見る。同時にロウキという名を聞

き、眉を顰めるヒビキ。その何は聞き覚えがあった。いや。聞き覚えなどでは済まされぬ相手。ヒビキもドウメキが見る方向へと眼を移す。

樹木の影から現れた人物。顔に刺青を入れ、肌を隠すようにコートを羽織った青年。

「ロウキさん……」

かつてヒビキが一度だけ鍛えてもらった音撃戦士・《狼鬼》。

「悪いなヒビキ。恨みはないが、お前にはここで退場してもらう」

刹那、無常にも彼が一瞬で振るった斬撃がヒビキを襲う。

「!?」

間一髪で避けたヒビキ、すぐさま烈火を構える。

「なんであなたがこんなところに!?!」

「それを知る必要はない!」

次々と来る斬撃を交わしながら、なぜここにロウキがいるのか問いただすヒビキ。しかしロウキは問答無用と攻撃の手を緩めるつもりがない。振り下ろされた音叉剣を烈火でクロスさせながら食い止める。

「どうしたヒビキ。お前の力はその程度なのか?」

「くっ、質問に答えてください!なんであんな奴と共にいるんです!」

「二度は言わないぞ!」

「があっ!?!」

腹に蹴りを入れられ、後ろに飛ばされる。樹木に激突する。その隙を逃すまいと、ロウキは追撃しようとする。

「火遁・豪火球の術!」

真正面からくるロウキに対し、鬼忍術で対抗するヒビキ。口から放たれた巨大な火球がロウキに迫っている。

「そんなのが俺に効くと思ってるのか!?!」

音叉剣を振るった瞬間、斬撃が火球を消し去ってしまう。しかし、消しきった火球からヒビキが現れ、そのままロウキに向かう。

「っ!!」

「はああっ!!」

ヒビキも音叉剣を握りしめ、ロウキに斬りかかる。咄嗟に受けとめるが、力ではヒビキのほうが上であったようで、後ろに仰け反る。「ロウキさん、あなたがこんなことをするような人じゃないのは知ってます！一体何があつたんですか！」

「さつきも言ったはずだ！これは俺の戦いだ！」

「そうですか…なら、こつちも全力でいきますよ！」

もう片方の手に握る烈火の先端から炎の剣を発動させ、横殴りにロウキに向かってふるう。しかし、ロウキも片方の手でヒビキの腕を掴み食い止める。それでも、ヒビキは力を込めて攻撃しようとする。

「ぐっ、やはり桁違いに強くなったなヒビキ。人の状態でここまでの力を出せるようになったのか…やっぱりお前」

以前ヒビキと相對したところのあるロウキ。以前とは比べ物にならないほどの力に感心しながらも、どこかヒビキに対し、思う節を伺わせるロウキ。

「俺のことはいいんですよ、こつちは何が起きてるのか知りたいくらいなんですから！かつて師事してくれてたとはいえ、理由によつては容赦しませんよ」

「言つたな、青二才！」

腕に力を込めて、ヒビキを切り払おうとする。だがヒビキもロウキの力を物ともせず断固として動こうとしない。逆にロウキの方を切り払おうと音叉剣に力を込めていく。

「ちよつと、さつきと片付けなさいよ!!」

「!!」

割りこむように横から現れたドウメキが手に持つ鉄扇でヒビキに攻撃する。突然の割り込みに、ヒビキとロウキはお互い後ろに飛ぶ。

「なんの真似だドウメキ」

「それはこつちの台詞よ。何モタモタしてくれてるわけ？私もあまり時間ないのよね。早めのことを済ませて儀式を終わらせたいから」

「儀式だど？一体なに企んでやがる！」

「教えてほしかったら、ここで死になさい…鬼神！」

鉄扇を横に振ると、針のようなものが飛んでくる。ヒビキは針を

避けるも、後ろにあつた木に針が刺さると、ジユウつと何かが溶けるような音になる。

「針に酸でも仕込んでんのか？」

「ご明察。ついでに速攻性の毒も仕込んでるからかすりでもしたら即あの世いきよ」

撫でるように鉄扇に手をあてて、憎たらしい表情を浮かべるドウメキ。そしてもう1つの鉄扇を懐から取り出す。

2つの鉄扇を仰ぐように振ると、無数の針がヒビキに迫り来るのだった。

第三十八ノ卷 《血塗れのネギ》

4月2日（水） 22：42

関西呪術協会。西日本に勢力を置く、魔術師たちの総本山ともいえる場所。そこは選りすぐりの優秀な呪術者を配置している拠点でもあり、そこに攻撃を行うようなものはそれ相応の覚悟を持って挑まなければならぬ。たとえ敵対視している関東魔法協会、そして猛士であつてもだ。

だが、その覚悟もなしにこの関西呪術協会を襲撃し、壊滅させるべく現れた敵がいた。

「ぐああつ!?あ、足があ!!」

「あがあああああああつ!」

聞こえてくる阿鼻叫喚の数々。4月の頭となれば総本山に植えられた桜が見頃を迎え、地面には桜の花びらで出来た綺麗な花びらロードが見ることが出来る。しかし、今見えるものは鮮血による血だまり、人の物であろう肉片の数々、数体の石像に、腕や足を失った者達の苦しむ有様。建物は損壊し、襲撃により発生した火災で黒煙が上がっている。

「長!!このままでは、総本山が壊滅します!!」

「二体、なんなのですか。あの化け物は…!!」

1人の部下による報告を受け、関西呪術協会の長である近衛詠春は目の前で殺戮広げているキメラのような怪物にただ呆然とすることしかできない。僅か数分前に召喚されたように現れた怪物。赤黒い球体に目玉のような模様があり、そこから突出するように化け物たちの頭部が飛び出している。これに察知した呪術士、神鳴流剣士、暗部の者達は迎撃しようとするも、気による封魔の札、神鳴流による奥義などほぼ受け付けず、瞬く間に返り討ちにしては、手当たり次第に捕食していく。

「何としてもここで食い止めるのだ!これ以上犠牲者を出してはならん!!」

長の相談役である大河原甚之助が声を張り上げて士気が下がり始

めている呪術士たちに喝を入れる。これ以上損害を関西呪術協会が被れば再起不能にまでなり、事実上の壊滅状態になる。しかし、そんなのを尻目に1人、また1人と怪物の腹に収まるか、引き裂かれていく。

「(協力的な結界の張っている総本山にどうやって現れた?)」

総本山に張っている結界には、襲撃に備えてあらゆる術を練りこませた物を使用しており、陰陽術による式神の召喚はもちろん、西洋魔術師が使用する召喚魔法に対する対抗呪術もその内の1つ。今の今までこの関西呪術協会に直接敵が出現したことなどなかったからだ。しかし、現実に今こうして怪物が現れ関西呪術協会は壊滅の危機に陥っている。もはや誰が襲撃云々など考えている暇はないかもしれない。

「あれはヤマアラシの頭か?他にも見覚えのある魔化魍の部分…」

遠目から見ている甚之介はいびつな形をしている怪物の一角に魔化魍ヤマアラシの姿を目撃する。他に飛び出ている頭部にも以前見せてもらった魔化魍の資料に載っていたのと似ているのも何体か確認できる。だとすれば暴れまわっている怪物の正体は魔化魍ということになるのか。だが、他には明らかに魔族を思わせる姿をしたまである。こちらが攻撃を加える際も、魔法障壁のようなものを展開し、石化させる光線まで出している。正体云々などわからずとも、あのキメラのような集合体の殆どが魔化魍だとすればここに所属している者で太刀打ちできない。

「長よ。あれは恐らく魔化魍の可能性がかなり高い。封印処理班を呼んで、あれを即座に封印した方が得策かもしれん。このままでは無駄に血を流すだけだ」

「っ!!魔化魍…ですか。しかしあれを封印するためには、専用の封印石が必要になります。その場所まで向かうには最低でも30分以上はかかる可能性が…」

関西呪術協会に所属する呪術士は、鬼もとい音撃戦士のように魔化魍を清めるための音撃を放つ者などおらず、魔化魍を倒す唯一の方法は封印術によるものしかない。しかし、魔化魍を封印するためには封

印石と呼ばれる石が必要であり、それを精製している場所が最悪なことに総本山から離れた位置にあるのだ。

「だからあれほど、総本山に封印石を置けと前々から言っておったのだ!!」

甚之介が呆れるように吐き捨てる。もともと、総本山にも設置すべきだと言ってきたのだが、幹部の大半は総本山に魔化魍の襲撃はありえないと豪語していたのが殆ど。創設以来、魔化魍が京都に現れることがあれど、関西呪術協会総本山に直接襲撃したことがなかったことも関連している。しかし、ここ数年の魔化魍の異常活動もあり、いつ何時魔化魍が襲ってくるかもしれないことを警告していたのだ。そしてその魔化魍の襲撃を軽んじて幹部の殆どが、優秀な呪術士たちを護衛にさっさと逃げ出している始末。

「事態は緊急を要するぞ長。暗部を寄越し、至急かつて儂が住職を務めていた寺院に送り、そこにいる鬼たちに救援を呼ぶのだ」

「なんですって!?!お言葉ですが、甚之介殿!!鬼をこの総本山に寄越すなど正気ですか!!それに鬼とは、猛士と内通していたということ、それが一体どれほどの」

「今言っておる場合か!!目の前で繰り広げている光景を見て尚もメンツにこだわるか!!わからぬのか若造!!今まさに関西呪術協会は壊滅の危機に貧しているのだ!!鬼であろうが、なんだろうが、少しでも血が流れぬようにすることができれば、なら儂はそれに掛ける!!それが嫌だというのなら無駄口を叩く前に動きを止め、封印処理班を呼んでこい!!」

口を挟んできた神鳴流剣士に怒声を浴びせる甚之介。あまりの気迫にその場に居合わせた他の呪術士や詠春までもが息を呑む。緊迫した状況。正直に言えばこんなことを言っていることすら時間の無駄に思えてくるも、話のわからぬ者達にははつきり言ったおかねばならない。猛士と内通していることが今回の件で明るみになることになるが正直どうでもいい。少しでも希望の光が見えるのなら、集結させている鬼に救援を呼ぶことに躊躇いはなかった。

「……わかりました。大至急暗部を指定した場所に急行させます」

「長!？」

「全ての責任は関西呪術協会長の近衛詠春が引き受けます。今はこの事態を解決するのが先決です!!急ぎなさい!!」

甚之介の言葉を聞き、覚悟を決めた詠春。部下の何人かがまだ納得できないと言った表情であるが、もはやどうすることもできない状態。部下たちも各々が屈辱的な表情を出すも、長である詠春の命もあり、暗部に連絡を入れるためにその場を後にしていく。

「甚之介さん、ここの指揮を頼みます。私も彼らの援護に向かいます」
「長、引退した身で正気か!」

「時間稼ぎ程度はできます。何も魔化魍相手が初めてではありませんし、私もかつては鬼と共に戦った身です」

いくら詠春といえど、魔族や妖怪の類を斬り捨てることはできません、魔化魍相手では手傷を負わせる程度しかできない。引退し、現場に何年も出てない身だが、時間稼ぎ程度はできると言って鞘から太刀を抜く。

「ここで無茶をするでない。この京都には”鬼神”も来ておる。彼は必ず儂らの力になってくれるはずだ」

「ええ、彼は”あの人”の弟子ですから…」



同日 22:46

「どうしたのネギ?さっきから山の方見ちゃって」

「いえ、何か多くの気や魔力のような流れを感じてしまって…」

月光りが綺麗な時間帯。誠が来るのを待っている廃寺で先ほどからネギの姿が見えない明日菜は探しまわっており、ようやく寺院の縁側で見つけたと思ったら、山の方に目を向けている姿。別に山が好きなのよなようでなかったネギに不思議に思った明日菜は質問する。どうやら、ネギのしている山の奥の方で幾人の気の流れを感じ取っていたようだ。

「ネギくんも何か感じているのね?」

「カンナツキさんも何か感じるんですか?」

「ええ、魔力云々かはわからないけど、何か嫌なものを感じるの。それ

にあの方角は…」

縁側の廊下から歩いてきたカンナヅキがネギの言葉に同調するよう山の方を向く。魔力云々については鬼であるカンナヅキにとってまだ最近知ったことであるため、不明なのだが、目を向けている山のほうで何か邪悪な気配を感じる。そして今向けている山の方には。「この日本に古くからいる東洋魔術の組織。西に関東魔法協会とくれれば、東に関西呪術協会。あの山の向こうにはその関西呪術協会の総本山がある」

同じくその後ろから付いて来ていたチシキがネギと明日菜に説明するように言う。チシキもまた、ネギやカンナヅキと同様に何かしらの気配を感じていたのだ。しかし、なぜ関西呪術協会の方からその気配が感じるのかはここについては全くわからない。

「ところで、正文にミナヅキの姿がないんだが誰か知らないか？」

「いえ、さっきまで広間のところにいたはずなんですけど…」

「それがいないんだ。探してるんだが、どうもな。それにミナヅキに頼んでいたはずのディスクアニマルが飛ばされていなんだ」

「え、それどういうこと？」

「それはこっちがしりたいよ。お陰で俺がいまから飛ばさないといけなくなっただからな」

愚痴をいいながらも、ミナヅキに頼んでいたはずのディスクアニマルが入ったケースを床に置くチシキ。定期連絡がないので可笑しいと思ったチシキが、ミナヅキに頼んだはずのディスクアニマルのケースが放置されたままなのを見つけて、散開させるために持ってきたのだ。

「ミナヅキちゃんには飛ばすよに伝えたはずんだけど」

「それは俺も可笑しいと思ったよ。あいつは真面目だし、頼んだことはきちんとこなしてきたからな」

カンナヅキもチシキも、ミナヅキが礼儀正しく、言われたことがきちんとこなしていたことを知っているため、どこかしら腑に落ちない心情だった。自分たちの状況がわからないわけでもないはずであり、何かあったときのためにディスクアニマルを飛ばすことにしていた

からだ。

「とりあえずその2人は私達でなんとか見つけるわ。2人は部屋に戻って、ヒビキくんが来るのを待ちましよう？ニシキくんや木乃香ちゃんも待ってるんだから」

「いやその近衛のお嬢ちゃんならもう寝てるみたいや」

「え？」

襖を開けて、出てきたニシキはすでにカンナツキの言った木乃香がすでに眠ってしまったことを告げる。それとほぼ同時にディスクアニマルをセッティングしていたチシキの手が止まる。何かに気づいたのか、立ち上がると、寺の正面の門へと視線を向ける。カンナツキ、そして出てきたニシキも同じ方向を見る。

「え、3人ともどうしたんですか？何かあるんですか？」

事態を呑む込めない明日菜。当たりをキョロキョロとするも、夜のために暗く月明かりがあるとはいえ何があるかなどわからなかった。しかし、隣にいたネギも3人の見る方向に何かを感じ取っている。いつの間に現れたのか、先ほどまでは全く感じなかったのだ。

「どないする？いきなり気配を感じたんやけど」

「恐らく認識障害の呪術でも使ってる可能性があるな。あの3人が急に眠ったのも、何かしらの術かもしれない」

「ディスクアニマルを飛ばす必要がなくなつたってわけね。明日菜ちゃんは私と一緒に木乃香ちゃんがいる部屋に行きましょう。ネギくんはサポートをお願い」

すでに敵だと判断した3人。カンナツキは安全を確保するために、明日菜とネギに木乃香たちが眠っている部屋に向かうように誘導する。

「チシキさんとニシキさんは…」

「任しとき、俺がこの場におけるんやから。何も心配あらへんで」

自分に指をさして自信満々に言うニシキ。一方隣にいたチシキはため息混じりに呟く。

「はあ、俺は研究屋だから、肉体労働は得意じゃないんだけどな」

「鬼に変身できるくせに何言つとるんや！」

「つたく、誠の奴早くこいよなく。どこで油売ってんだよ」

「俺がおるやないか!!この関西支部最強《関西三暴鬼》の1人がおるんやで。この異名はな、ヒビキが名乗つとる鬼神にも匹敵するんやで!!」

「ああ、馬鹿が3人集まって破壊しまくる迷惑三兄弟だろ。本部でも盛り上がってるぞ。損害費が馬鹿にならないから関西支部は年中貧困だつてな」

「なんやてえ!？」

「ちよつとこんな時にコント広げてるどうするのよ!!」

毒舌な発言が多いチシキなために、頭に血が上りやすいニシキとは中々相性がよくないのか。見かねたカンナツキが止めに入る。

「魔力!?来ます!!」

ネギが真正面から何ものかの魔力の反応を感じ警告する。その瞬間、チシキ、ニシキ、カンナツキのいた足元から複数の鋭い石の槍が伸びてくる。寺院の縁側諸共破壊し、3人を襲う。咄嗟に別々の方向に飛び回避する。

「いきなりご挨拶やないか!!」

「分厚い板敷きを貫通して石の槍を出してくる。魔法って奴か…興味深いな」

いきなり奇襲を受けたにも関わらず、飛び出してきた石の槍に興味を示すチシキ。科学者としての知的好奇心ゆえなのか。

「石の槍…かなりの高位魔法の一種です。使う魔法使いもそこまで多いとは聞きませんし」

「それほどの魔法使いを駆使してでも木乃香ちゃんを狙ってきたってこと?..」

実際に初めて見る魔法であるが、地の属性を有する攻撃魔法なのは間違い。昔魔法学校で閲覧した魔法書の中で見た魔法の中にあつたのを思い出すネギ。少なくとも並大抵の魔法使いが扱える代物ではないのは確かであり、嫌な冷や汗が流れる。

「まさか避けられるとは思わなかったよ。確実に串刺しにできる位置だったのに、鬼って奴は反射神経が鋭いようだ」

途端に空から聞こえてきた声の主に全員が上空を見上げる。そこにいたのは見た目はネギくらいの子供であり、銀髪にどこかの制服のようなものを着用している。

「こ、子供!？」

「なんや、空飛んでるやないか!!どこの羽撃鬼さんやあんだ!？」

「そこツッコむところじゃないでしょ!？」

思わず突っ込まずにはいられなかったニシキ。子供でしかも、空中を静止している姿に驚く。空を飛ぶのはニシキが知っている限りでは、九州にいる羽撃鬼と呼ばれる飛行能力を持った鬼しか知らなかったからだ。こんなところまでボケるといふ受けしかできなかったカンナヅキが半ギレ気味に言う。

「さっきの攻撃はお前がやったのか?随分と血気盛んな小僧だな。串刺しにしたいならまず逃げ道潰してからやることだろうがよ。見た目相応に考えが幼稚すぎるようだが、勝負でも焦ったか?」

挑発するように言いながら、飛び出ている石の槍にノックするように叩く。流石に子供相手に言い過ぎではないかとカンナヅキが止めに入る。

「ちよつと流石に子供相手にそこまで…」

「馬鹿、見た目に騙されるな。さっきはああ言ったが、あの槍は本気で俺たちを殺すつもりをやつた。それにわからないか、あの感じ。あのガキは本気でやらないとヤバイ」

口ではああ言ったが、上空を平然と静止している少年の力量を測っていたチシキ。その風貌から想像もできないほどの力を感じ取っていた。子供の風貌とは思えぬ、見えない迫力が空中で静止している少年からは出ていた。

「安い挑発に乗るきはないけど。雇い主が急かしてるからね。とりあえずここら一体を綺麗に掃除をしたほうがやりやすいだろうから」
「何かする気です!!」

そう言って少年の魔力が上がり出したのを感じたネギ。銀髪の少年は詠唱呪文を始めると、空中に次々と巨大な漆黒の一枚岩が現出する。

「ヴィシユ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト。おお地の底にオー・タル・タローイ
ケイメノン・バシレイオン・ネクローン
眠る死者の宮殿よ」

「あいつなんかいいでしたぞ!!」

「詠唱呪文ってやつか! いくぞ!!」

それと同時にチシキ、ニシキ、カンナヅキは変身音叉、鬼笛を響鳴
させて額へとかざしていく。

「っ!!」

「ネギ!？」

「明日菜さんは僕の後ろにいてください!! 出来る限り攻撃を阻止しま
す!!」

ネギもその3人が鬼に変身するとわかり前が出る。そして、杖を構
えて少しでも被害を少なくしようとする。魔力を高めて呪文を唱える。

「ラス・テル マ・スキル マギステル!! 来れ 雷精ウエニアント・スピーリトウス
アエリアレス・フルグリエンテス

風の 精!!! 雷を纏いて《クム・フルグラティオーニ》! 吹き

すさべ《フレット・テンペスターズ》! 南洋の嵐《アウストリーナ》!!」

「凄い…これが魔法…!」

ネギの周りから風と稲妻が交差しながら、溢れ出してくる。ネギか
ら溢れ出る魔力を肌で感じ取り驚くカンナヅキにニシキ。上空では
すでに銀髪の少年が詠唱を終えようとしている。

「我らの下に姿を現せ《ファインサストー・ヘーミン》冥府のホ：モノリトス
キオン・トウ・ハイドウ
石柱」

詠唱を終えた瞬間、手をかざした方向へと空中に現れた巨大な石柱
が一齐に寺院一体を破壊しようとする。それとほぼ同時に
詠唱を終えたネギが反撃にしようとする。

「はああああああああああ!! 雷ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンテスの 暴 風!!」

稲妻を帯びた巨大な竜巻が『冥府の石柱』へと向かっていく。

閃光と爆発、そして凄まじい地響きが周辺一帯を襲う。



「な、なんだいこれは!？」

「寺院の方か…」

ネギ達のいる寺院へと続く道で、誠の行く手を阻んでいたドウメキ

とロウキが突然起きた地震と閃光に困惑する。森の隙間からでも見えるほどの閃光などに驚いた鳥などが一斉に羽撃き始め、近く動物たちも慌ただしく動き始める。

「小娘1人捉えるにしては随分と派手にやるんだな。周辺を焼け野原にするほどの威力だぞ」

「冗談じゃないわ。別に四肢がもがれようが生きてさえいけば問題ないとは言ったけど、あそこまで派手にやれとは言ってないわよ。はっ、それより鬼神は!!」

振るんだ誠に毒針をしこんだ攻撃を放ったドウメキだが、それとほぼ同時に起きた先ほどの閃光や地響きのせいで気を取られてしまったようだ。そして気づいた頃にはすでに誠の姿はなく、木に刺さっている。刺さった気は毒針を受け、幹が溶け出している。

「もう気配はない。針を放った瞬間に神威で飛んだんだろう。随分と使いこなしてるみたいだな」

走って逃げたのなら近くに気配を感じるはずだが、周辺に誠の気配を全く感じない。どうやら直前に鬼導眼の瞳術である神威で回避したと推測するロウキ。それを聞いたドウメキは別段悔しがる様子もなく、現状を整理する。

「(ここで鬼神を殺せるなんて端から思ってたからその辺は問題無いわ。心配なのは近衛木乃香の生存よ。あの小娘が死んだら、計画が大幅に狂うはめになるんだから。すでに関西呪術協会には又エを送ったっていうのに、少しでもそっちの方に目を向けさせて猛士の鬼たちを誘導するのがパーになるわ)」

ドウメキ自身も、流石にあそこまで大規模な攻撃を加えるとは思ってなかったらしく、内心冷や汗を書いていた。こんなことになるのなら、天ヶ崎千草を早い内に洗脳なりなんなりしておけばよかったと思ってしまう。

「ロウキ。アンタは引き続き鬼神の追撃に出なさい。私は寺院に行つて近衛木乃香を祭壇上に連れて行くわ」

「生きているのか？」

「四肢がもげようが、生きていれば問題無いわ。どうせ用済みになっ

たら魔化魍の餌にでもするつもりだから。他にも鬼がいたようだけど、大方無傷で済んでるはずだから奪うのは容易なはずだし」

「ふん、好きにしろ」

それだけ言うと、瞬時に消えてしまった口ウキ。1人残ったドウメキは砂煙と爆煙が混じった煙が上がっている寺院へと向かっていく。「そういえば、あのオカマくんたちは協会幹部の始末は終わったかしら」



「くそつたれ…あんな馬鹿でかい質量の塊出しやがって」

フェイトが放った冥府の石柱により、周囲が完全に瓦礫と衝撃で盛り上がった土などで荒れ果てている。間一髪で鬼に変身を果たしていた知鬼チシキは辺りを見渡す。ネギが咄嗟に最大魔法で衝撃を緩和してくれたとはいえ、流石に全てとはいかないようだった。

「ネギくんたちは…」

地面から吹き上がる粉塵をかき分けながら、全員の無事を確認しようと立ち上がる。

「チシキくん、無事!？」

「ええなんとか。そつちはどうですか?」

「見ての通り、一応は無事よ」

真っ白な身体に紫色の洩のある鬼面をした少しばかり神秘的な体つきをした鬼が現れる。まるで鶴をモチーフとした顔の形状をしていて背中に翼がある姿をしているのは、音撃戦士・神無月鬼カンナツキ。彼女も知鬼と同じように鬼へと変身し、辺りを探しているようだった。

「見て!西鬼くんじゃない?」

神無月鬼がふと目に入った先に鬼に変身した西鬼が倒れているのを見つめる。2人は急いで駆け寄るなり、抱き起こす。すぐ近くには寺院の中で突然眠ってしまった木乃香の姿がある。

「う…」

「しっかりと西鬼くん!」

ぐったりしている西鬼を抱き起こすも、かなりのダメージを受けて

おり、顔の変身が解かれ頭からは出血している。

(あの状況で木乃香ちゃんを助けにいったのか。大した奴だよ全く)

近くに倒れている木乃香には傷一つなく、恐らくあの土壇場で中にいる庇つたと推測する知鬼。ともあれ、西鬼は急いで手当しなければいけない状況に変わりはない。更にまだ近くにいるはずのネギの姿も見当たらない。敵に見つかる前にこの粉塵を隠れ蓑にして即座に動く必要があった。

「全く、フェイトはん何ちゆう無茶をしてくれるんや！木乃香お嬢様まで吹き飛ばしたらどないするつもりやったんや！」

「ちゃんと無事を確認したんですから、それでいいでしょ」

「はあ、手負いの敵を斬るんは何も面白みもないんやけどな」

声が聞こえる方を振り向くと2人。そこにはこの状況を創り出した張本人である白髪の少年《フェイト・アーフェルクス》に、刀を二振握るゴスロリ服を来た眼鏡をかけた少女《月詠》、そして巫女服のような服装なれど胸元を強調し、月詠と同じくメガネをかけた女性《天ヶ崎千草》の姿。

「ちつ、こんな時にチョロチョロと増えやがって」

この状況下での最悪な登場に思わず舌打ちをする知鬼。

「さあ鬼さんたち。今ここで木乃香お嬢様を渡すんなら、命まではとらへんから。賢明な判断をするならわかっとなるやろ？」

「お前の思考回路は配線間違ってるじゃねえのか？俺が綺麗につきなぎ直してやってもいいぞ」

「言うてくれるやんけ。あんたらの実力はすでにこっち調査済みや、アタッカーの西鬼はすでに戦闘不能。アンタは本来は裏方側の技術屋で魔化魍ならまだしも、対人戦の戦いには不向き。実力持つ神無月鬼も、多種多様の攻撃を放つウチ等3人を相手にするにはキツイんじゃないか？ましてやお荷物を抱えたら」

「こいつら、そこまでの情報を…」

千草の口から語られた情報に驚きを隠せない神無月鬼。言う通り、手負いの西鬼は状況でわかるにしても、知鬼や自分のことまで見透かしているのはどうしてなのか疑問に残る。知鬼の技術屋発言など猛

士の人間がよく言っている言葉。

「はっ、情報つてのはな日々更新されていくんだ。今この瞬間もな。お前ら持つてる状況は古臭いんだよ全部が」

「ほな証明してもらおうやないか？言つとくきますけど、鬼神を待つてもきやしませんで。こちらが足止めしとるさかい」

こちらに急行しているはずの誠は現在、千草の仲間である百目鬼の部下が阻んでいる手筈。今の状況でも現れていないということは足止めが成功しているということ。実力が未定ながらも、鬼神という肩書を持つ以上は警戒に越したことはない。目の前にいるのは確かに鬼なれど、実質向こうは負傷者に眠ってしまった木乃香一人。もはや勝ったも同然と言った流れになっている。

「知鬼くん…」

「俺は猛士一の科学馬鹿《科学の鬼》の通名持つてるんですよ。これ以上やられっぱなしにいくはけにはいかない。技術屋だとか抜かしているアイツらに痛い目を見てもらおう」

絶望的状况下でも、決して諦めない意思を持つ知鬼。腰にぶら下げている待機状態のディスクアニマル三枚を手取る。

「俺が作ったもうひとつのディスクアニマルの実験に付き合ってもらうぜ!!」

そう言うなり、ディスクアニマルを千草たち目掛けて投げつける。三枚はそれぞれ銀色のオオザル、タカ、オオカミへと変形し、千草たちに飛翔し突進していく。

「あははは!!:なんや結滞なことをするかと思えば、そんなおもちゃで何をするつもりかいな。ウチらの式神のほうはまだ強力や」

「どうやらおもちゃじゃないみたいですよ」

鬼が使うディスクアニマルのことは大方知っていたために対した戦力じゃないとたかをくくっていた千草。だが無表情のフェイトはすぐに変化に気づき、ボソッと報告する。

「えっ…なっ!?!」

みるみる内に巨大化していくではないか。手のひらサイズどころではない、こつちのほうが手にひらサイズの大きさに千草は顔を強張

らせる。

「ちよ、ちよつと何あれ!!」

「今説明してる暇ないんで。要はディスクアニマルを巨大化するのを開発しててね。太古の音撃戦士は呪術でやってたみたいんですけど!あとあんまり持続時間がないんで」

突然巨大化を果たしたディスクアニマルに驚いていたのは千草だけではなかったようだ。

「ほえ〜。大きい鳥さんたちですね〜。斬りがいがありそうやわ〜」

どうやら大きくなったこと驚いているのは千草だけのようであり、月詠に至っては見世物を見るかのような対応をしている。右手に大刀、左手に小刀を構え突撃してくる巨大なディスクアニマルを迎え撃つ態勢をとる。

「冗談やあらへん!御札さん御札さん、邪なやつらを押し流しておくれや!」

焦った千草は漢字の並んだ陰陽師用の御札を3枚を投げつけ、空中に張り付くように並列に展開する。文字が光りだし、ダム放流の如く水が溢れ出る。

「やれやれ、お姫様も一緒に流すつもりですか?人のこと言えないんじゃないかな?」

「わかつとるなら早くいきい!!」

千草に言われて空中に飛翔するフェイト。押し寄せる濁流を踏ん張る巨大なディスクアニマルの後方にいる知鬼と神無月鬼に手をかざす。

「まずは邪魔な鬼から排除を……!?!」

残った鬼を排除するため、石化の魔法を放とうとした瞬間。突然ディスクアニマルが轟音と共に大爆発を起こしたではないか。押し寄せていた濁流が爆発の反動でフェイトがいる高さまで舞い上がる。「まさか……囹か。なんだ」

異変はまだ終わらない。今度は濁流が一瞬で凍りついていき、水に被っているフェイトの体を拘束していく。千草の放った水がまるで巨大な氷壁に変わっていく。

「なんやこれは……これも鬼の力かいな!？」

こつちまで凍りつくほどの寒さが千草の息を白くしていく。さきほどまでいたはずの知鬼たちの姿が氷壁で完全に見えず、断絶させられてしまった。

「流石ですね。あれだけの水を一瞬で凍らせるとは。俺のデータ通りだ」

「鬼法術・氷水ひょうすいの息吹。凍鬼さんや吹雪鬼さんほどじゃないけど、これくらいなら私にもできるわよ。でもまさか、ディスクアニマルが大爆発するなんて」

「まだ開発段階なんで、虚仮威し程度です。悪いなこんなことになって……」

飛んできた部品を手に取る知鬼。折角作ったものだが、開発とは日々こうして発展していくものなのだろう。それはディスクアニマルとて同じこと。

「それより早くここから撤退しましょう。咄嗟に思いついた作戦があれでしたから。最もあの眼鏡女が水まで出してくるのは俺の唯一の計算違いですたけど」

おかげで逆手に利用して氷壁までつくれたので、まさに柵からぼた餅だろう。

「ネギくんたちも早く探さないよ」

「わかって「神鳴流奥義……」上!!」

神無月鬼が作り出した氷壁とは別方向から聞こえた声の主。そこにいたのは、漆黒の翼を生やし、目を虚ろにさせた桜咲刹那の姿だった。

「極大・雷鳴剣」



「ネギ、大丈夫なの?」

「は、はい。なんとか……」

知鬼たちのいる場所から少し離れた場所にネギと明日菜の姿があった。2人は別方向に飛ばされていたようであるものの、大きな怪我などはなかった。だが、放った魔法が大きかっただけに魔力消耗が

激しい。それほどまでに先ほどの冥府の石柱という魔法が強大なのかを身にしみてわかったネギ。あの高等魔法を当たり前のように出してきた西洋魔術師は恐らく自分よりも遥かに強いと。

「明日菜さん急いでチシキさんたちを探しましょう。木乃香さんたちのことでもあります」

「う、うん。わかったわ」

「そうはいかへんで！」

「っ!？」

ひとまず近くにいないニシキたちや木乃香たちの方を探そうと移動しようとした瞬間、巻き上がる粉塵を切り裂くように1人の少年が襲撃してきた。咄嗟に反応したネギは明日菜を力いっぱい弾く。『きゃ』と悲鳴を上げる明日菜だが、ネギの方は襲撃してきた少年の拳を杖で受け止めた。ネギと同じくらいの背丈で年齢も然程変わりはない。黒い学ランにボサボサの黒髪からはまるで犬の耳のようなものが出ている。

「咄嗟に反応して俺の拳受け止めたんか。おもたより勘の鋭い魔術師やな」

「き、君はっ!」

「今から死んでく奴に名乗る名前はないで!!」

「があっ!？」

学ランの少年はその言葉と共にネギの脇腹に蹴りをいれる。対応しきれなかったネギはモロに受けてしまい、軽くふっ飛ばされる。よほどの痛みだったのか、倒れたネギは脇腹を抑えて詰まった息を吐きだしている。

「ネギ!!」

心配した明日菜はすぐにネギのところへ駆け寄るなり、襲撃してきた少年を睨みつける。

「なんなのよアンタ!ただでさえネギは疲れてるのに、こんな!」

「あほちゃうか姉ちゃん?これは仕事なんやから、敵が疲れてろうが関係あらへんのや。な、俺としてはそんな弱っち西洋魔術師を倒しても何もうれしくないんやけど。最強の魔術師《ナギ・スプリング

『フィールド』の息子って聞いたから、どれほどの奴やと思ったら、女に守られてまともに立てないお子ちゃま魔法使いとはな」

拍子抜けと言った感じで明日菜に介抱されているネギを軽蔑の眼差しで見る学ランの少年。そんな態度をする学ランの少年に明日菜は怒りを覚える。

「何よ、アンタだってガキじゃないの！偉そうに言って！」

「ガキやから、それがどないしたんや？裏の世界にガキだんだとかはないんやで、殺るか殺られるかの世界なんや。偉そうも何も、そういう世界にいるんやから。何も知らずに入ってきた姉ちゃんのほうがよっぽどガキに見えるで？」

ネギと同じくらいの年齢と思えないくらいに裏世界のことを淡々と語る学ランの少年。悔しいが言っていることは正しい。明日菜もその場の流れがあるが、自分からこの世界に入ってきたもの。誠やネギを手伝いたい。刹那を奪われ、悲しみにくれる親友の木乃香の助けになりたい。そう思っていただけに明日菜は自然と唇をギュツと閉じてしまう。

「ほら姉ちゃんときい？一応俺も女には手え出さへん主義やから。俺はこの英雄の息子を再起不能にしろっていわれとるさかい」

「どけって言われてどくバカがいるわけないでしょ！」

「話のわからん姉ちゃんやなく。仕方あらへん」

そう言うのと、学ランから符のような物を取り出すとそれを空中に放り投げる。次の瞬間、符が姿を変えて巨大な蜘蛛の化け物に変わっていく。

「雇い主から貰った札の1つやけど安心し、動きを封じるだけやから」
凶暴な面構えをする蜘蛛の化け物に明日菜は怯んでしまうも、絶対にここを離れまいとネギの体を強く抱きしめる。

「大丈夫です明日菜さん、僕が絶対に守りますから」
「ネギ！」

痛みもおさまりゆっくりと立ち上がっていくネギ。長い杖を本来の目的ともいえる杖代わりにし、真っ直ぐと学ランの少年を見やる。
「なんや。慌てんでも、すぐに始末してやるんな。お前を殺ったあ

とは他にいる鬼たちをまとめて相手をしないといけないんや。そつちの方が多少なりに手応えありそうやからな。そやからさつさと殺るで英雄の息子?」

「僕は英雄の息子なんかじゃない。そんなのは周りの大人たちが勝手に言ってることなんだ。僕はネギ・スプリングフィールド。麻帆良学園の教師で、明日菜さんたちの担任で、西洋魔術師で、ヒビキさんの……弟子だ!そんな肩書は僕にはいらぬ!」

学ランの少年の言葉を全否定し、今持っている自分の全てを言うネギ。臨戦態勢を取れるよう杖を構える。しかし、学ランの少年の方はネギの言葉を聞き少しばかり固まっていた。

「お前が……あのヒビキの……弟子やて。く、あはははははっ!こりや傑作やで!西洋魔術師が鬼に!しかも、あの……」
「な、何が可笑しいんだ!」

突然声を上げて笑い始める学ランの少年に少しばかり苛立ちを隠せないネギ。しかし次の瞬間、笑みを浮かべていた表情から一変して冷酷で怒りに震える顔つきになる。

「あのヒビキの……えせ鬼神の弟子やおおおお!!」

怒りに震える学ランの少年の言葉に呼応するように、全身から赤いオーラを吐き出す。そのオーラの形がまるで鬼のような姿にも見えなくもない。

「ええか?弟子ならお前も知ってると思うが、アイツが名乗つとる鬼神っちゅう名はな。本当ならあないな雑魚が持ってるいいものやないんや!!」

「な!?!お兄ちゃんは、ヒビキさんは雑魚じゃない!鬼神の名を持つに相応しい力を持つてる!」

「違う!鬼神の名は俺の師匠。《龍鬼》さんが本来持つに相応しい称号なんや!」

「りゅ、龍鬼……それに君も鬼の弟子」

ネギの反論をはつきりと斬り捨てる学ランの少年。その言葉に出てきた言葉にネギは驚愕するも、話を読めない明日菜には誰なのかわからない。同時に目の前の少年が自分と同じく鬼の弟子だと衝撃の

第三十九ノ卷 《狼の鬼》

「はあ……はあ……」

関西呪術協会から離れた位置にあるとある滝壺。ロウキとドウメキとの戦闘を回避するために発動した神威により移動していたヒビキ。鬼力を急激に消費する鬼導眼の連続使用の影響なのか、肩を上下に上げ、まるで体全体で息をしているかのような疲労だった。

「あの黒煙。関西呪術協会の方角か。それに……」

東の空を見るなり、夜でもわかるほどの黒煙が立ち上っている。その方角が関西呪術協会の場所だと理解したヒビキだが、同時に反対方向からも黒煙が立ち上っているのが見える。ネギや明日菜たちのいる寺院で何かあったのは間違いない。しかし、力を使いすぎて消耗しているため、身体が思うように動かないでいた。

「力を分けてくれ……」

そう言うと、ヒビキは地面に片手を置く。数秒も経たぬうちに、ヒビキの身体から淡い光が地面から吸い取られるように流れていく。すると先程までの疲労困憊だったヒビキの表情が徐々に優れていく。

「やはり、お前は鬼の枠を超えているんだな。ヒビキ」

「こんな無防備な状態の俺を攻撃しないなんて、やっぱり何かあるんですね……ロウキさん」

近くにある茂みから現れてくる人物。つい数分前まで対峙していたロウキだった。すでに気配を感じていたのか。別段驚く様子を見せないが、念のために音叉剣を解放させて構える。

「今のは、自然界……いやこの星そのものからエネルギーを取り込んで回復していたな？それは人の身で行える所業ではないぞ。ましてや、人を超えた鬼ともいえど」

「……今は俺の話なんかいいでしょ。そこを退いてください」

ロウキに言われ、話題を無理やり変えようとするヒビキ。眉を少しばかり引きつかせていることから、あまり触れられたくないことだったのかもしれない。だが、ロウキは臆せず話を続ける。

「ふん、相変わらず自分の話になると避けたがるなお前は。自分の身

に起きている事態を把握しておくのも鬼の努めたぞヒビキ。いや鬼神。その名を先代たちから引き継いだからにはそれ相応の責任が伴うぞ」

「ドウメキとかいうイカれた連中と付き合ってるあなたが言っても説得力ないですよ。あなたがあんな連中と付き合ってるのに正直驚いてるんですから」

「俺が誰と付き合おうが勝手だろう。俺だって名前通りに一匹狼ってわけにはいかなんでな。がちりとした足場がほしくなっただけさ」

両手を上げて、寂しさを現すポーズをとるロウキ。しかしそんな姿を見ても、ヒビキは信用しようと思わず。

「その足場を支えてる支柱がああ連中なんて笑える冗談じゃないですよ。もつと他に理由があるでしょう。俺の知ってるあなたはもつと孤高の鬼だったはず」

かつて一時的に師事した鬼・狼鬼^{ロウキ}。元々は100年以上も昔に関東支部に所属していた鬼だったが先天的に持っていた能力を危険視され、当時の猛士上層部に追放された過去を持つ。それ以来は何らかの方法で現代まで生き、魔化魍を討伐する日々を送っている。猛士の記録ではすでに抹消されている人物ではあるが、一部の鬼はロウキの存在を知っている者もあり、接触を凶り教えなど乞おうとする者も少なからずいた。最も、先程のヒビキの言うとおり、他人との接触を嫌う彼にとってあまり相手にしてもらおうのはほぼない。一匹狼とはまさに彼のためにあるようなものと、どこかの甘味処の主が言ったこともあるほど。群れるのを嫌う彼が、あろうことか残忍さを持つドウメキ率いる集団といるのが信じられないのが率直な考えだった。

「理由が言えないなら別にそれでも構いませんよ。俺には行かないといけない場所があります。どかないならなぎ倒してでも行きますから」

「わかってるさ。だが、今から向かって近衛木乃香はすでにあいつらが奪取してるはずだ」

「…何でわかるんですか。あそこにはニシキやチシキだって……」

すでに木乃香は連れられていると言うロウキ。その言葉に疑問を

抱くしかできないヒビキは反論の言葉を述べるも、ロウキも目を細めて説明する。

「あの天ヶ崎千草という女。一体どこからあんなやつを連れてきたのか」

「あんなやつ?」

「お前も対峙したはずだ。銀髪の少年。《フェイト・アーウエルンクス》だ」

「フェイト……アーウエルンクス。あの時の魔法使いが?」

ロウキに言われ、京都に入った際に対峙した銀髪をした少年のことを思い出す。ネギと然程変わらない風貌をしているが、底知れない力を持つていることを感じていた。

「お前だって薄々気づいてるだろ?あの小僧が、ただの小僧じゃないのを」

「……………」

「沈黙は肯定ってやつでいいか?奴は間違いなく西洋魔術師。恐らく最高位に立つほどのな。そしてあの寺院がある方向で起きた爆発。あれもあの小僧がやったんだろ」

「なぜです。今回の件、協会の封眼寺派の連中が噛んでいるのなら西洋魔術師がいるなんて可笑しいでしょ。アイツらは西洋魔術師を嫌悪する一派のはずだ」

「さあな。理由まで知らん。俺はただお前を足止めしろと言われただけだからな」

「……………なら俺はあなたをなぎ倒して進むだけです」

その言葉と共に、音叉を共鳴させ額にかざす。音叉による共鳴波はヒビキに響き渡るように流れる。その呼応するかのように全身から炎が勢い良く燃え上がる。

「お前にも引けない理由があるか。だが、それは俺も同じだ。あいつを一人にさせないためにもな」

ヒビキの変身に答えるように、ロウキは懐から三日月形をした変身鬼笛・魔笛を取り出す。口元に持っていていき、不思議な音色を放つと、ヒビキと同様に額へとかざす。まるで漆黒の霧のようなものがロウキ

を包み込んでいく。

「ああああああああああ!!はっ!!」

紫色の炎を振り払う”響鬼”。

「ふっ!!」

漆黒の霧を手刀で切り払う”狼鬼”。

鋭い一本角、口元に無数の牙、そして銀色に輝く鬣を有す。その姿はまるで鬼というよりも狼男を連想させるかのような容姿。全身には呪文処理での施されたような入れ墨が、そこから放たれるオーラは数百年を行きた者にしか放てないものだった。

「……」

「……」

響鬼と狼鬼。

たった睨み合うだけで、周辺の木々が揺れ、空気がピリピリと張り詰めている。二人が同時に自身の武器、鳴刀・音叉剣と魔笛を変異させ合体させた三日月型をした鳴刀『月血』を構える。

次の瞬間、衝撃で地面が陥没するほどの突進を始めた響鬼。ピキピキと口元が開放されていき、まるで獲物を噛み砕く歯が頭になる。

「!?」

突っ込んできたこととつさに防御の体勢をとる狼鬼。しかし響鬼の変化に気づいた瞬間、目の前を覆い尽くすほどの炎の壁が迫っていた。鬼法術・鬼火。響鬼が会得している専用の基本技であるが、特殊な動作もなしに出せる技だけに反応が一瞬遅れる。

「はあっ!!」

狼鬼が横一文字に月血を振るい、鬼火を文字通り切り裂く。

「おおおおおおおー!」

しかし響鬼は構わずに切り裂かれた鬼火から現れるように迫ってくる。ガキン!!ツと、刃と刃が交差する音が森の響き渡る。火花が飛び散る中、お互い一步も引かない鏝迫り合い。狼鬼の武器に対し、響鬼の音叉剣はあまりにサイズ違いな武器だが、その細身の刀身は決して折れることもなく、必死に月血に食らいつこうとしていた。

「っ!!」

「どうした、乗り越えられない壁は乗り越えるんじゃないのか？」

「その…つもりだ!!」

「何!？」

再度響鬼は口元を開き、鬼火を狼鬼に浴びせる。

「ぐっ!？」

さすがの狼鬼ももろに食らっては耐えきれず、一旦響鬼と距離をとるために後退する。追撃と言わんばかりに、音撃棒・烈火を一本握りしめ、炎の刀身を発現させる。そのまま後退する狼鬼に向かおうとする。

「!？」

そう思った矢先に突然の何かが爆発するような揺れに思わず足を止める響鬼。ネギたちのいる寺院の方に顔を向けると、巨大な煙が再度上がっている。

「この揺れ方…：さつきとは違う」

「どうやら、あの小僧の魔法でも炸裂したようだな…」

「いや違いますよ。チシキのとおっておきでも”爆発”したんでしよう」

確証はない。だが、響鬼の直感がそう言っていた。おそらくチシキが何かしたのだと。

「あの年中探究小僧のことか」

響鬼の炎を月血で振り払った狼鬼がゆっくりと歩み寄ってくる。

「狼鬼さん。あなたもかつては人々のために戦っていたのなら、あいつらの暴挙をほっとけはおけないはずだ」

「人助けはつとくの昔にやめた。今の俺はお前の敵・狼鬼だ!」

「ぐうっ!」

「どうした響鬼。一分一秒も惜しいんだろ。だったら、そんな馬鹿げたことをいつている暇があったら俺を倒す算段でも考えたらどうだ」
「なっ! 話を振ってきたのはアンタのほうだろうが!!」

印を結び、息を大きく吸い込むと開いた口から火薬を帯びた高熱の灰を吐き出す。

「この術は…：目眩ましのつもりか？」

視界を覆うほどの灰が広範囲に広がり、周りが全く見えなくなる。

「影引……」

月明かりで映る狼鬼の影が微かに揺れ始めると、まるでブラックホールのように広範囲に広がっていた灰の煙が吸い込まれていく。狼鬼が使用する鬼法術の一つである『影引』は、自身の影を異空間へとつなげて引き釣りこませたり、身を隠したりするなどの幅広い応用の効く鬼法術でもある。長年の使用して来た狼鬼にとっては、対象を選んで影に吸い込ませたりできるほど。神威を使って行方をくらました響鬼をすぐに追いかけることができたのはこの術のお陰でもあったのだ。

「また行ったか……」

煙を吸い込み終わるころには、すでに響鬼の姿がなくなっているのを確認する。どうやら初めから術を炸裂させる気などなく、あくまで目くらましのためだけに放ったようだった。

『狼鬼さん。あなたもかつては人々のために戦っていたのなら、あいつらの暴挙をほっとけはおけないはずだ』

「そんなことわかっていさ。だが……」

さきほど響鬼から言われた言葉を思い出していた狼鬼。無論、狼鬼とて鬼の端くれ。猛士から追い出され、人間に家族を奪われた狼鬼だが、百目鬼のような連中を黙って見過ごせるなどできるはずもなかった。そして何より

「響鬼。お前も”妹”を人質に取られれば、俺の気持ちができるか？」



「こ、これは……どういふことなんだあ!？」

「んくもう！そんなデカイ声出さないでくれる？耳に来たじゃない」

関西呪術協会総本山より少し離れたとある臨時支所には、襲撃により身の危険を感じた協会幹部たちが避難している。だが、逃げるように避難して来た幹部に待ち受けていたのは、地獄への片道切符だっ

た。

臨時支所で待機していた陰陽術師たちがすでに全員事切れており、その中央には血で汚れている顔をまるで化粧直しでもしているかのように、コンパクトミラーで入念にチェックしているカマキの姿。

「こ、ここにいた陰陽師たちはどうしたのだ!! 貴様らは近衛の娘を拐いに行ったのではなかったのか!？」

周囲に横たわる無残な死体の数々。関西呪術協会副長を努めている菅原忠昭はただただ目の前で起きている事態を飲み込めないでいた。天ヶ崎千草の話では、近衛木乃香のいる寺院には全員で向かうと話を聞いていたはず。そして時を合わせるように、関西呪術協会総本山に魔化魍を数体侵入させ、猛士からの抜鬼ばっきである百目鬼とその仲間たちが総本山に攻め入り、長である近衛詠春を混乱に乗じて殺害する計画だったはず。

だが今日の前にいるカマキはこともあろうに臨時支所を襲撃し、詠春を蹴落とすための同志を皆殺しにしているではないか。計画していた内容と全く違うことに、忠昭は混乱するほかなかった。

「アタシたちはそんな話知らないわよ。指示されたのはここにいる陰陽師を始末してっただけ。まっ、こんな不細工しかない連中殺しても、つまらないの一言だったわ。やっぱり時代はイケメンね♡」

懐から誰かの写真を取り出し、唇を突き出してキスをするカマキ。そんな馬鹿馬鹿しいことをしていることに憤慨した忠昭は声を荒げる。

「ふざけるな!! 天ヶ崎め、自分の駒すら満足に扱えぬのか! これまで練りに練った作戦がぶち壊しではないか!! 所詮金で雇われた連中、私の偉大なる革命を理解できんとは!」

「はあ、アンタ哀れね。革命の前に関西呪術協会は明日にも猛士の下部組織になつてるわよ。急激な組織の弱体化でね」

「ど、どういう意味だ! なぜ数百年に渡る歴史を誇る関西呪術協会が猛士などに!!」

「そんなの知らないわ。雇い主から聞いた話だから、細かいことには興味ないの」

それを言うなり、まるで地べたに横たわっている死体を避けるからのように身体をくねらせながらゆっくりと歩いてくる。

「貴様ら！この鬼を排除しろ!!」

何かを察した忠昭は、近くにいる部下に命令を出す。すぐさま部下たちはここが持つ陰陽道を使用し、目の前にいるカマキを滅する……「何をやっている！早くせぬか!!」

ことはせず。何も行おうとせず、なぜか沈黙するようにただ突っ立っているのみ。いくら忠昭が話しかけても、陰陽術師たちは反応はなかった。

「あらあ？もう術にかかっているのかしらあ？アンタはブサイクな小娘にしか興味なかったんじゃないの？」

「俺だつてこんな男連中弄んでも嬉しくねえよ。だがらさっさと片付けて、あの寺にいる可愛こちゃんたちのところに行くんだよイヒヒヒ」

まるで話かけるように上を見上げるカマキ。それに答えるように、広がる森の茂みからキミの悪い笑い声と共に現れる一人のやせ細つた男の姿。

「全くアンタの性癖は理解に苦しむわインキ？」

「それはこっちの台詞だ！何が好きで男を好きになるんだ。理解できねえよ」

「ちよつとおアンタア!!アタシのどこが変ですつてええ!!」

「そこまで言つてねえだろうがよ！」

いきなり始まった下らない言い争い。どうやら忠昭の部下が突然案山子のようになったのはインキの呪術によるものらしい。最もかけた本人はとて不満げな表情をしており、男などより女の方がよかったという始末。

「どういうことだ！こいつらに何をした!!」

「何をしたあ？そんなの今からお前に降りかかることを身にしみて理解するんだな」

「何。一体それ……ゴハッ…ガハッ!」

インキに食つて掛かろとした瞬間、身体から鮮血が走る。忠昭の護

衛についていた神鳴流剣士が切りつけたのだ。

全身から血が吹き出し、吐血をしながら倒れる忠昭。

「き、きさまらあ……」

飛び散った血飛沫がカマキのいるところまで飛んでくる。靴に少しついたカマキはすぐさまハンカチで綺麗に拭き取り始める。

「やだあ、血がかかっちゃったじゃないのお！せつかくネギきゆんに会うのに!!あらっ?」

「この揺れは、それにあの煙は俺の可愛こちゃんがいる寺院のほうか?」

突然起きる地震に反応するカマキとインキ。同時に千草たちが先行して行っている寺院の方から再び煙が上がっているのが見えていた。

「きつとフェイトきゆんよ!やだあ、私の獲物をとるときかしらあ!はやく行かないとお!」

なぜフェイトがやったとわかったのかは謎であるが、カマキ自身の理解できない思考がそういった結果に持っていたのかもかもしれない。すでに依頼にあった関西呪術協会の臨時支部を壊滅させる作戦は完遂しているため、これ以上の長居は無用だと判断したのか。さつさとこの場をあとにしていくカマキ。

「ケツ!あの小僧に俺の獲物をとられてたまるか!」

インキもカマイに送れまいと暗闇の中へと姿を消していく。

「グアツ!ブホツ!……ぐうううううう……」

残された忠昭はインキに呪術を掛けられた部下たちに次々と斬りつけられていく。立てる力もなくなり四つん這いに倒れる。純白を基調とした礼服は赤い血の色に染まりきっていた。息も絶え絶えになり、彼の命はまさに風前の灯火。だが、決して消えること無く低い唸り声を上げ、執念に満ちた表情を上げる忠昭。

(あのような輩に、この関西呪術協会を……この関西呪術協会を……この関西呪術協会をおお)

ここまで練り上げてきた関西呪術協会を掌握し、日本に巢食う西洋魔術師をこの日本から追い出し、本来あるべき姿をとりもどすために

ここまでの地位に上がった。そのために忌み嫌う鬼たちと手を組んでまで。だが、もうすぐ手に入れられる関西呪術協会の長の座が、このような形で終わらせるわけにはいかなかった。

「許さんぞ。許さんぞおおおおおおおー！」

絶叫にも近い声を張り上げる。どこから出したのか、五芒星の呪符を取り出し空へと投げつける。

「蒼撃符・青龍!!」

呪符が青く輝いた瞬間、忠昭の周りにいた部下たちがまるで衝撃波でも受けたかのように吹き飛ばされていく。

「(…)ここで終わる……私ではない!!かならず……」

血塗れのまま、己の本能で気力を保つ忠昭。ゆっくりと足取りで森の中へと消えていったのだった。

第四十ノ卷 《囚われた姫》

4月2日（水） 22：45 炫畏古社跡

「ネギ！ネギ！しっかりしなさいよ!!」

「うう…」

鮮血が飛び散り、横たわるネギを必死に呼びかける明日菜だが、小太郎の爪により全身を切り刻まれ、息も絶え絶えだ。

「やめときや姉ちゃん。無理に動かしたら傷が広がって危険になるさかい。まあほつといても死ぬんやけどな」

千草からもらった護符の蜘蛛の上に乗る、明日菜の無駄な努力を止めている小太郎。もつとも小太郎自身はあまりの呆気なさに意気消沈気味であり、ネギに対しての興味がなくなってしまうっている。

「アンタ、こんなことしてよくそんなこと言ってられるわね!!」

「はあ？何言ってんねん姉ちゃんは。さっきも言ったやろ。これが裏世界の現状なんやから。何も知らんで生きとる姉ちゃんたちとは違うんや。弱いやつが死んでいく。現実はこれなんやで」

「くっ…」

なんとか言い返した明日菜だが、言っていることが最もなのだろうと頭の中で理解してしまい、悔しそうに涙ろ堪える。何の力もない自分では何もできない。それが堪らなく悔しかった。

「うっ、明日菜…さん」

「ネギ！大丈夫なの!!」

「ま、魔力で、切れた血管を塞いでいます。致命傷ではありません」

薄っすらと目を開けるネギ。そのまま文字通りナギの杖を支えにゆっくりと立ち上がる。先程まで出血していた傷口はネギの魔力で塞くという荒業でなんとか凌いでいた。そして再び

「大した生命力やないか。正直アレで終わつたらホンマに拍子抜けやったからな」

再度立ち上がったネギに素直に賛辞を送る小太郎。そのまま護符の蜘蛛から飛び降り地面に着地するなり、構える。再び鬼人化きしんかを発動させ、赤いオーラが小太郎を纏っていく。それだけではなく、小太郎

の牙や爪がみるみる内に鋭くなつていく。《犬上小太郎》、狗族と人間のハーフの彼は“獣化”という特殊能力を持ち合わせていても不思議ではない。

「最もこれで終いや西洋魔術師。次は傷が塞ぎきれんぐらい、体を真つ二つにしたるさかい!!」

「ネギ!!」

「くっ」

―来る!―

ネギの直感がそう告げた。あの獣化の上に鬼人化までしている小太郎の力ならば、自分だけではなく明日菜まで“殺される”。ヒビキとの約束のためにも、絶対に明日菜を、そして木乃香を守らなければいけない。

「風花・風障アエリア!!うわっ?!」

「な、何や?!」

「きやあああ!!」

瞬間、突如ネギたちのいる場所から遠くはない場所で大爆発が起きる。地面が揺れ、なぜか空から雨が降り出している。何が起きたのかわからないが爆風が発生し、一瞬ではあるが小太郎の動きが止まった。

「(今なら!)ラス・テル マ・スキル マギステル!!」

小太郎の攻撃を防ぐため、防御の魔法障壁を発動させようとしたネギだが、即座に攻撃用呪文の詠唱を唱える。

「魔法の射手・戒めの風矢!!」

「何?!コンのおおおおおおお!!」

駆け出し捕縛用の魔法の射手を小太郎にお見舞いするネギ。咄嗟のことに反応できず、何本の風の矢が小太郎を拘束していく。だが、獣化に加え鬼人化までしている小太郎に通じるのは精々数秒程度。必死にもがく小太郎に、間髪入れずネギは次なる呪文を完成させていく。

「ラス・テル マ・スキル マギステル!!闇夜切り裂く、ウーヌス・フルゴル 一条の光。コンキデンス・ノクテム
イン・メア・マヌー・エンズイニミークム・エダット 我が手に宿りて敵を喰らえ!!フルグラティオー・アルピカンス 白キ 雷!!!」

右手を小太郎の掲げ、放たれた白き雷が小太郎を撃ち抜く。

「ぎっ!?!があっ!?!」

直撃をモロに受け、全身に雷が駆け巡っていく感覚が小太郎を襲う。そのまま吹き飛ばすように後方にいる護符の蜘蛛目掛けて飛ばされる。

「はあ…はあ…うっ」

「ネギ!!大丈夫!?!」

「は、はい…なんとか」

力を一気に使い、跪くネギ。魔力を消費し塞いでいた傷口から血が滲み出る。なんとか気合を入れて、再度魔力で傷口を抑えていく。だが、ヒビキのように傷を完全に完治できるほどの力はまだネギにはない。早めに治療しなければ命の危険がある。

「早く、チシキさんたちのところに行きましょう。木乃香さんたちが心配です」

(ネギ…)

それでもネギは自分のことよりも、木乃香たちの方を心配する。何か言いかけようとするも、明日菜はそれをグツと抑える。

(何やってのよ。私は…!)

何もできない自分が悔しかったのかもしれない。

「明日菜さん?」

「う、うん。ほら私に掴まって」

ネギを支えるように明日菜が寄り添う。

「待たんかい。今のは効いたで…西洋魔術師!!」

砂煙舞う中から声が聞こえる。瞬間、目に見える気の波動が砂煙を消し飛ばしていく。少しばかり焼け焦げた小太郎が青筋立てて、睨みつけていた。

「ア、アンター!あれだけ食らってまだ動けるの!」

「用意しとった守護の護符がなかったら、今頃黒焦げやったで。やつてくれるやないか!!」

ネギの攻撃の直撃を受けてもまだ動ける様子を見せた小太郎に驚く明日菜。それに答えるかのように、学ランのポケットから焼け焦げ

た護符を見せる小太郎。どうやら念の為に準備していた護符が咄嗟に発動し、小太郎を守ったようだ。

「くっ」

ほぼ無傷の小太郎の姿に歯を噛みしめるネギ。一方小太郎は両手をポキポキと音を立てながら、ゆっくりと近づいてくる。

「一瞬の隙について攻撃をやったんは褒めたるで。弱っちいからちつとばかしお前のことを舐め取ったわ。でも、二度目はあらへん。ありがたく思い、この礼は倍返しで返したるわ」

爪を構え、再度構え直す小太郎。恐らくさきほどのようなことは「明日菜さん下がっててくださいー!」

「いやよ! 私だつてアンタを護ることくらいできるわ!!」

「明日菜さん……」

「はっ!! 下手な三文芝居眼の前で起こされても、うざいだけやで!!」
(は、速い!?)

足に力を込め、一瞬で間合いを詰めてきた。さきほどの速さの比ではない。ネギの思考はわかっているけども、傷だらけの体では満足に動くことはできない。再び鮮血が舞い、悲痛な叫びだけが聞こえるだけ。「ぐえ!? ぐはあああああああああ!」

だが、次に聞こえてきたのは小太郎の情けない声だけだった。とんでもない威力のパンチが小太郎の顔面に突き刺さり、衝撃で真横に滑るように飛ばされる。

「悪いネギ、明日菜。遅くなった」

「お兄ちゃん!!」

「誠先生!!」

紫色の二本角の鬼。そしてあの大きな背中では二人のよく知る響鬼の姿だ。すぐにネギの方へ振り向き、手を肩へと持っていく。淡い光がネギに注がれていき、小太郎の攻撃で受けた傷がみるみる内に治癒していく。

「傷が……」

「俺の生命力を分け与える術だ。それよりも、早くチシキや木乃香たちよっ。」

「多分、あっちの方に。さつき爆発が起きて」

「早く行こ」

「待たんかい!!!」

響鬼の言葉[!]を掻き消すように小太郎の怒号が木霊する。赤く頬が腫れ上がり、口元からは口内を切ったのか血がこびり付いていた。だが、その表情はやられた怒りと同時に歓喜に打ちひしがれている。

「あははははは!!まさかこないに早くに会えるとはな!!響鬼い!!その称号、大人しく龍鬼^{リュウキ}さんに渡さんかい!!疾空黒狼牙!!」

響鬼ではない。師である”龍鬼”と呼ばれる音撃戦士こそが、《鬼神》の名に持つに相応しいと。興奮状態の小太郎は複数の狗神を発動させ、漆黒の狼たちは響鬼を噛み砕こうと向かってくる。

(鬼火!!)

すでに常時戦闘モードだけに、すでに開口している口からノーマーションで放たれる響鬼の鬼法術《鬼火》が向かってくる狗神を一瞬でかき消していく。

「もろたで!!がっ!?!」

狗神に気を取られていた響鬼に追撃しようと両腕に気を張らせた小太郎が炎の中から現れる。だが次の瞬間、腹部の激痛と共に小太郎の世界が暗転し、気づけば響鬼から彼方に衝撃と共に先ほどと同じように飛ばされていた。何か特殊な攻撃でもされたのか。よく見れば響鬼の右足が前に突き出している。

(たかが蹴りで!?)

小太郎に対して前蹴りをしただけだった。ネギに続き再三に渡り吹き飛ばされる小太郎。なんとか態勢を立て直し、滑るように地面に膝をつく。

「狗族のハーフか。それに鬼人化まで会得。お前が龍鬼の弟子か何か?」

「へっ、そうや!!俺は龍鬼さんがただ一人認めてくれた最初で最後の弟子、犬上小太郎や!!そして響鬼!!お前が名乗ってる”鬼神”の称号は最強の鬼の龍鬼さんが名乗るに相応しいんや!」

「それは決闘で勝ったお兄ちゃんが名乗ることに決まったのを知らな

いのか君は！」

小太郎の言葉に反論するようにネギが口を出す。かつて響鬼自身から語られた話。誠の師であり、先代の響鬼であると同時に先代鬼神である日高仁志の遺言により、後継者として指名された誠。だがそれを異に唱える一部の上層部たちの意向により、候補に音撃戦士・龍鬼が推薦され、鬼神の名をかけて決闘が行われた。無論、それに勝利したのは現鬼神である誠であることは明白。

「その決闘は何かの間違いなんや。あの人、負けるわけないんや!!」
「結局は師匠自慢か。お前が知ってるどうかは知らないが、アイツはただ力だけに固執し、自分の都合だけで戦っているやつだ。そのためならこの京都に封印された”スクナ”を利用してもな。悪いがこれ以上はお前の長話に付き合うつもりはない。さつきは手加減したが、まだ向かってくるなら今度は体が動かないように拘束させてもらおうぞ」

両手を組み、音撃戦士・木鬼秘伝の鬼忍術《木遁》を発動させようとする響鬼。ネギも続くように及ばずながらも、杖を構える。

「悪いな響鬼。俺はその西洋魔術師共々、お姫様を奪取するまで適当に相手しとけて言われてるんや」

「木乃香をどうするつもりよクソガキ!!」

「姉ちゃんまだおったんか。忘れとったわ。ん?どうやらその作業もひとまず終わりみたいやな」

「何?」

先程までの興奮状態が嘘かのように、落ち着いた小太郎が突然、獣化と鬼人化を解除する。そして先程爆発が起きた方へと顔を向ける。
「ようやったで犬上小太郎。一足遅かったな鬼神?木乃香お嬢様はたった今、ウチらが手に入れましたからなく」

煙から出てきたのは、したり顔で現れた天ヶ崎千草と雇われたフェイト、月詠。

「刹那さん」

明日菜に呼ばれても反応を示さない、桜咲刹那の姿。

「チシキたちは……」

「中々手こずってくれたけど、ウチらの敵やなかったってことですね」

千草が後ろに顔を向けた先には、かつて麻帆良学園にて刹那によって響鬼も苦しめられた“鬼封じ”と呼ばれた勾玉により苦しんでいる知鬼たち鬼たちの姿が映っていた。



同時間 吉野ノ里《猛士総本部》

「動き出したか」

「はっ。すでに関西呪術協会は魔化魍を始め、複数の抜鬼たちが襲撃を開始したとのことです」

猛士副本部長室にて、専用の鬼密班の一人から報告を受けていた段木團蔵。言うまでもなく内容は関西呪術協会が魔化魍を含む勢力から襲撃を受けているということ。日本東洋呪術の最大拠点が襲撃を受けているならば、猛士として可及的速やかに行動を起こす必要があるはずだが、副本部長である團蔵は動こうとしなかった。いや、動く必要がなかった。

「ヒビキたちの動きは？」

「交戦状態です。特に鬼神はドウメキ、そしてロウキによって動きを封じられていますですがそれ以上は接近できず詳細は不明です。」

「ドウメキめ。ロウキを連れ出してくるとはな。一体何を吹き込んだのか……それで、この情報は関東魔法協会にも入っているのだな」

「はい。ですが、情報が錯綜しており行動を起こすのは時間がかかると思われれます」

「ふん。意地の張り合いが最悪の結果を招いているわけだ。義理の息子に傀儡政治をさせるから、こうした事態が起きるのだろう。あの近右衛門にはいい薬になったはずだ」

関西呪術協会がすでに長である《近衛詠春》は形だけの長であることを察していた團蔵。下の連中が近々クーデターを起こることも把握していただけに、皮肉るように切り捨てる。

「時間が経てば何も知らん封眼寺派の小娘がアレを復活させるであろう。そうなれば多少なりに京都が火の海になる可能性がある。事態

調査のために、すでに鬼密班が動いているのだろうか」

「はっ。すでに組頭である《隼人》が本部長の命を受け、数名を派遣しています。表でも威吹鬼を始め数名の鬼も現場に急行しているとのことですよ」

「想定通りだな。瑠鬼^{ルキ}、お前は引き続き関西呪術協会の動向を監視しろ。くれぐれも伊十郎たちには悟られるな。儂も時期そちらに動く」
「了解しました。團蔵さま」

その言葉と共に瑠鬼^{ルキ}と呼ばれし女性は、軽く音をたて、煙と共に消えていた。恐らく分身を連絡係として派遣していたのだ。誰もいなくなった部屋に團蔵はただ一人、月明かりが指す窓の方に顔を向ける。

「平安から始まる長き因縁もようやく終わる。一つの歴史が終わり、新たな歴史が始まるのだ。この猛士がな」

第四十一ノ巻 《明かされた目的（嘘）》

4月2日（水） 22:40 猛士総本部

「京都への応援部隊、さつき出たみたいよ隼人」

「ああ、未確認の魔化魍の襲撃に抜鬼ぼつきの登場となれば猛士が黙って見
てるわけにはいかないだろう」

猛士総本部を見下ろせる丘から状況を報告する一人の狐の面をつ
けた女性《羽根井 恵》。すぐそばには、茶髪に肩まで掛かる頭髪に黒
を基調としたコートを羽織った青年《鷹羽 隼人》。猛士の密偵部隊
《鬼密班》に所属する伊賀忍者であると同時に、《人間変身の秘術》と
呼ばれる術により”化身忍者”に変身することが出来る忍者でもあ
るのだ。

「研究用に保管してた装甲声刃アームドセイバーも誠さ…じゃなくて、ヒビキさんに渡
すために引つ張りだされて持っていつてるみたい」

ヒビキの名前である誠と叫びかけた恵。今更ではあるが、誠をヒビ
キ呼びするのはあまり馴染んでいない。当の本人も自覚しているが、
先代の響鬼ヒビキの印象が強いのも影響しており、本来ならば誠も響鬼以外
の鬼名を持つている。だが、先代との約束によりヒビキと言う名を名
乗っているのが現状だ。それもあつてか、ずっと名前呼びしていた恵
はあまりなれていなかったりする。

「結局先代の響鬼ヒビキと誠以外には扱えなかったあの武器か。量産目的
で返却されたって聞いていたが」

恵の言い直しに少しばかり、薄ら笑いを浮かべる隼人。最も隼人自
身は今でも誠のことを”誠”と呼んでいる。話を戻すように、すぐに
猛士が開発した武器《音撃增幅剣・装甲声刃アームドセイバー》の話題に入る。技術部
に所属する小暮耕之助が開発した当時”最強”と呼べる音撃武器で、
楽器から通して放つ音撃を自身の声に変換し、増幅させ斬撃などで放
つことができるトンデモ武器。だが、色々詰め込みすぎた結果、
装甲声刃アームドセイバーから放たれる波動が”人間”に波長を合わせることができ
ず、唯一合わせることでできたのが先代の響鬼と弟子である誠のみ
で、今では実質誠の専用武器というのが通っている。なぜ波長をあわ

せられたのか未だに明らかにされていない。開発した小暮耕之助の考察では『鍛え方がたらんからだ』とのこと。

「ん」

何かを感じ取ったのか、目を閉じる隼人。

「どうしたの？」

「俺の分身体が京都に入ったようだ。なるほど、周囲には認識阻害の結果が張り巡らせてるようだ」

忍者である隼人は、任務を行う際は忍法・影分身を使い分身体を向かわせている。20代という若さでわずか2人しかいない甲賀上忍であると同時に鬼密班の組頭をしている隼人。命令を伝える以上、遊撃部隊にいるヒビキように自由に動けるわけでもないため、分身体を使って任務を遂行している。因みにヒビキも使える忍法・影分身は隼人が伝授したのもでも。ヒビキは三体ほどが限界ではあるが、隼人は数十人規模に分身させることができるほど。

「じゃあ、まだ一般人には知られていないってこと？」

「ああ。だが、いつまでも本山の結果が持つわけじゃない。現に今も襲撃を受けて、長の近衛詠春たちが食い止めている。補助的に結界忍術で上書きするしかないな」

「ヒビキさんたちは？」

「まだわからん。アイツやニシキたちがそう簡単にやられるとは思えないが。それに正文からの定時連絡もきていない」

「同行しているミナツキの動きを見る話だったけど、まさか…」

すでに鬼密班によって、ミナツキこと御影美緒がドウメキと内通していることが伝令されている。決定的な情報がなかっただけに、伝令が遅れてしまいミナツキを京都へと派遣することがいつの間にか決定していた。正文に極秘で内偵するよう仕向けるも、定時連絡になっても正文から連絡はなかったのである。

「今の俺達にできるのはアイツの無事を祈るだけだ。それにすでに本部はミナツキの捕縛、もしくは鬼祓いの命令を出してる。俺たち鬼密班にもな」

「上層部は、猛士の鬼」が連中に関わるのを何としてももみ消したい

つもりなのかしら」

「たとえそうだとしても、与えられた任務である以上やるしかない。京都で戦っているヒビキたちにまで重荷は背負わせないさ。そういう汚い仕事は俺達だけで十分だ」

「あんまり詰め込みすぎると”嵐”^{疾嵐}みたいな世界に飛び出したくなるわよ」

「……アイツは血車党の残党狩りに出てるだけだ。俺には関係ないだろ」

「(まだ関係は悪いまま…か)」

嵐とは、隼人と同じもうひとりの若き甲賀上忍であり、初代変身忍者・嵐であるハヤテの子孫の一人《鷹矢 疾風》のこと。”嵐”の名は受け継ぐ際に、同じく子孫である隼人と決闘を行い、それ以来関係が疎遠になってしまい、嵐を襲名した疾風は世界中に散らばった血車党の残党を狩るために世界中を旅している。この構図は、同じく”鬼神”の名を受け継ぐ際に決闘を行った響鬼と龍鬼に似ていたりしている。

「被害阻止とミナヅキ拿捕を同時に動く。悪いが恵、お前も京都へ向かってくれ。戦力は一人でも多いほうがいい」

「いいの?ここもいつ襲撃されるかわからないのよ?」

「俺は鬼密班組頭であると同時に変身忍者・隼^{はやぶさ}だ。二度と突破なんてさせん」



同日 22:55 炫畏古社跡

「ぐっ?」

「うう…!!!」

「(こ、これが、ヒビキの言ってた鬼封じとかいうやつか。ははは、実際に食らってみてわかる!!これは…!!)」

知鬼と神無月鬼は体全体に電撃が走るほどの痛みが渡る。まるで、鬼の力そのものを封じ込める鉱物《殺生石》似た性質を持つものを感じる知鬼。自らが体感することで物の本質を理解することを持ち合わせているだけに、激痛の状況でも観察を辞めない科学の鬼と言われ

る戦士。

「(ヒビキは気合で打ち破ったって言ってたな。生憎俺はヒビキのよ馬鹿力うな能力は持ち合わせてねえ……だが、俺の後ろにはそれを持つやつがいる!!)」

顔を向け、気絶したまま勾玉を取り付けられている西鬼を見る。
知鬼知識の名の下に、猛士の鬼のデータは頭に叩き込んでいる。《関西の三暴鬼》の異名を持つ一人である西鬼ならば、ヒビキに匹敵する火事場の馬鹿力を持ち合わせている。

「ぐあっ!!」

思考しようとするも、激痛が脳まで響き渡る。すでに自分たちを戦闘不能と判断し、目も向けない千草たちは響鬼たちと相對しているのが目に入る。木乃香を捕らえられ、人質にされ響鬼も手も足も出ない状況だ。

「チシキ!!お前っ!!」

あの勾玉の力が身を裂くほどの痛みを知っていただけに、それを平然と行う千草に怒りを燃やす響鬼。音撃棒・烈火を構え、鬼石から豪炎の剣を発生させる。

「おっと、下手に動くと木乃香お嬢様や後ろにいる鬼たちに更なる苦痛を与えることになりますえ」

「卑怯な……」

木乃香に頬を舐めるように触る千草。こちらから何かすれば即座に木乃香や知鬼たちに危害を加えると発言したことにネギが非難する。

「卑怯も何もあらへんって言うたろうが、忘れたんかネギ!」

「っ……」

小太郎から言われ言葉が詰まるネギ。こちらが何を言おうと向こうは裏社会の人間たちだ。基本的に温室育ちのネギにはまだ早い世界なのかもしれない。

「はあく。斬りたかったんやけど拍子抜けですく」

「俺は遊べたから満足やけどな。まあえらい拍子抜けやったけど」
「…」

完全に手詰まりな状態へと陥ってしまい、戦力もこちらはネギとヒビキのみ。向こうは千草を始め、狗族の小太郎、メガネを掛けてニコニコ笑っている月詠、ドウメキの洗脳化にある刹那、そしてロウキが警戒していた西洋魔術師であるフェイト。

「(紅に変身したら、ネギたちまで巻き込む。神威で消し飛ばすにも、時間がかかりすぎる。木遁や火遁もそうだ。どうする…)」

打開する方法はいくつか思い浮かぶも、全てが周囲に被害を齎す技ばかりなだけにネギや明日菜、苦しんでいるチシキ、そして人質として囚われている木乃香を巻き込むなどできない。

「おほほ！なんや鬼戦士最強と言われてるからどんな化物かと思えば、大したことあらへん青二才なようやな。おまけにそのちっこいのはあの千の魔法使いサウザンドマスターの息子やないか。警戒はしとったけどまだガキなんやなあ」

鬼神と呼ばれるヒビキを最も警戒していただけに、こちらがいざ人質をとれば何もできない甘ちよつろい青二才だと罵る。そして魔法界では知らない者はいないと言われる魔法使いである千の魔法使いサウザンドマスターナギ。スプリングフィールドの息子であるネギも同様な感じだった。

「何よあの女！好き勝手言ってー！」

「よせ明日菜。あの女の言う通りだ。下手に刺激するな」

「自分の状況がわかつとるやないか。ならご褒美にウチの目的をチラツと教えるさかい」

「木乃香を狙った理由か」

完全にこちらが勝利と確信したのか、有頂天になり自分の目的を暴露する。

「この先の湖にある封印石の封印を開放し、伝説のリョウメンスクナノカミを復活させることや」

「リョウメンスクナノカミ？」

「な、何よそれ」

初めて聞く言葉に疑問を浮かべるネギと明日菜。だが、ヒビキはその言葉を聞き驚愕の表情を浮かべる。

「バカな！あれはもう!!」

「あははは!!驚くのも無理はないなあ。リョウメンスクナノカミは伝説の飛驒の大鬼神。あんたの持つてる“鬼神”の肩書きなんぞ小さいほどのものや」

「違う。スクナは…」

「おつとウチの話はここまでや。あまり言うところで誰が聞いたるかわからんからなく」

目的がここ京都に封印されている大鬼神《リョウメンスクナノカミ》を復活させることらしいが、何の目的でスクナを復活させるかまでは言うつもりはない千草。だが、ヒビキとしては千草のしようとしているのがすでに無意味なことを知っていたからだ。

「人の話を聞け!!あそこにお前の望むものはない!知らないのか!スクナは!!…」

「アンタの話はもう終わりや。さて、折角やから、手土産に木乃香お嬢様の力でも見せなあかなあ」

何かヒビキが言おうとするがまるで聞く気のない千草。調子に乗って、木乃香の力を見せびらかそうとまで言い出す始末。これ以上は埒が明かないと、動き出そうとする響鬼。

「んぐっ…どあああ!!」

ここに来てようやく意識を取り戻した西鬼。しかし、起きた瞬間に凄まじい激痛を感じ取り苦しみ始める。そもそもすでに食らっており今まで目を覚まさなかつたのが不思議ではあるが。

「お、起きた途端に電撃攻撃とか、俺に対するちよ、挑戦や!!」

鬼としての属性が雷なだけに、自身に走る痛みを勝手に雷に攻撃だと断定する西鬼。

「別に電撃攻撃じゃねえよ。ぐっ…」

「知鬼くん…ぐうう!!」

西鬼、知鬼、神無月鬼は鬼封じの勾玉に抵抗しようとするも、中々鬼力を上げることができない。だが、これは最大のチャンスと見た知鬼は、西鬼に体を向けて叫ぶ。

「おい、西鬼!!お前も関西の暴れ馬って言われてんだろ!!」

「う、うるさいわい。誰が暴れ馬や!!こんのおおお!!」

知鬼が焚きつけるように言う。必死に力を込める西鬼だが、まだ足りない。

「なんやうるさい思たら、もう一匹の鬼が目覚めたんかいな」

後ろから声が聞こえたのに気づいた千草はモゾモゾと動いている西鬼たちに気づく。しかし、鬼封じをしているだけに余裕を見せ、すぐに響鬼たちの方を見る。

「う、おおおおおおおおお」

体から稲妻が発生し始める西鬼。鬼力を高め、かつて響鬼がしたように気合で弾き

「何かするみたいだけど、少し黙らせておこうか。ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト」

西鬼に妙な力の流れを感じたフェイトは石化の魔法で追い打ちをかけようと詠唱を始める。それに気づいた西鬼は一気に気合を入れう。

「ぐおおおおおおおおああああああ!!関ツ西ツの鬼を、舐めんなやああああああ!!」

鬼力を極限まで高め、西鬼から放たれた雷撃が空まで天に上る龍のように舞い上がる。同時に西鬼たちに取り付いていた勾玉が亀裂が入り粉々に砕け散っていく。

「どわっ!?!」

「はえ〜」

後方からの衝撃に驚く小太郎と月詠。

「驚いたね。これほどの力を出せるなんて…」

溢れ出た力に感心するフェイト。正直ここまでの力は残っていないとばかり思っただけに、ますます鬼と呼ばれる存在に興味を示す。

「アイツ、またこんな馬鹿力な技を」

電撃合わせの力技に若干呆れるもどこか嬉しさがある響鬼。因みに響鬼自身も大概な気がするが。

「な、なんや。あの女!あれは鬼に有効やから使える言うつつたんに!!」

一方千草は、西鬼の爆発的な力の解放に驚愕する。ドウメキから確実に鬼を足止めできると言われ、信頼していただけに衝撃が大きかったようだ。慌てて腕に抱きかかえる木乃香に何か記載された御札を貼る。人質にとっているのが優位なのは変わりはないが、祭壇の儀式もあるため慌てて強硬手段に走る。

「アイツ何する気よ」

「オンッ!!」

何か始めた千草に気づく明日菜。だが、先に呪文を唱え始めると、木乃香から魔力が溢れ出てきている。同時に周辺から何かの文字が記された陣から光の柱が展開している。その光の柱は数え切れないほどに。

「凄い魔力だ！これが木乃香さんの」

木乃香から溢れ出る魔力に驚きを隠せないネギ。これほどの力を有していることに純粹に驚きを隠せなかったのだろう。そうしているうち、陣から異形の者たちである鳥族や狗族、式神である鬼などが次々と召喚されていく。吹き飛ばされ空き地同然と化していた社跡を埋め尽くすほどに。その数はもはや軍勢と言っても差し支えないほど。

「木乃香の魔力で手当たり次第に召喚しやがったか」

「なんて数なんだ…」

尋常ではないほどの数に思わず息を呑むネギ。かつて、自分の故郷が魔族に襲撃された時のように、縦横無尽に。そのことを思い出し手に持つ杖に思わず力が籠ってしまう。

「いくらアンタラでもこれだけの数相手なら少しは骨が折れるやろ！」

召喚した式神たちが時間稼ぎをしてくれれば何の問題もない。

「アンタらはここであの鬼どもを殺つとき。ウチは祭壇で復活の儀式を行うさかい」

そう召喚した式神群に命令すると、そのまま護衛を任せたフェイトの魔法で上空へと飛び去っていく。

「待てっ!!木乃香さんと刹那さんを!!」

「ネギ！姉ちゃんを取り戻したかったら、必ず追いつくんやな!!」
「くっ!!」

同じく千草の護衛役である小太郎も共に向かっていく。ネギに対する対抗心からか挑発まがいの言葉をかけ、歯を噛みしめるネギ。

「はあはあ……なんとかなったで」

「俺の推測通りだな」

「お陰で助かったけど、こっちも少しばかり痺れたわ」

「さっきの比べれば全然マシでしょ」

知鬼と神無月鬼の勾玉も余波で破壊され、ようやく開放される。少しばかり電撃で痺れる感覚はあるも、周囲も状況を見る知鬼。

「召喚された式神か。こりやまた偉い数で。百鬼夜行どころかじやないなこれは。インテリの俺にはキツイかもな」

「なに言うてんねん。腰からぶら下げた実験道具音撃武器一杯見せてから」

「まあそれはおいおい。ヒビキにも俺からのお土産もあるしな」

そう言って待機状態のディスクアニマルを取り出す。

敵は数知れないほど。おまけに天ヶ崎千草の狙いが木乃香を利用してのリョウメンスクナノカミの復活と知らされ、時間もあまりない状態。

「……」

ただ一人。戦力になれないでいた明日菜。友達は攫われ、この状況では自分が一番足手まといでしかない。勢いよくついていくと言いつつ、何もできない自分が本当に嫌になった。

「ネギ……」

だからこそ、明日菜は決意する。

いつもまでも守られてばかりでいたくない。

「案外いくものね。天ヶ崎千草」

近くにいる木陰から響鬼たちの動向を観察していたドウメキ。す

でに響鬼が到着する前に来ていたのだが、事態は自身の想定通りに動いていたので静観することにしたのだ。

「多少予定は狂ったけど、上手く祭壇上に向かったわね。ふふっ、天ヶ崎千草。せいぜい浮かれていればいいわ」

笑みを浮かべるドウメキ。すでに千草は自分の手のひらで踊らせることに気づいていない。このまま封印石がある湖の祭壇へと向かい、リヨウメンスクナノカミ

「アンタが復活させるスクナは”もういない”。そこにいるのは……」

「神と呼ばれる魔化魍の一角。麒麟神獣なんだから」

第四十二ノ巻 《従者・神楽坂明日菜》

「ネギ、私と仮契約して」
バクテイオー

「明日菜さん!？」

仮契約という言葉事態は前にカモが明日菜や木乃香に話したことは覚えていたが、ここでその言葉が出たことに驚くネギ。思わず振り向くと、そこには真剣な表情の顔をした明日菜の姿。

「何言ってるんですか明日菜さん!!仮契約って、明日菜さんが戦う必要なんて…」

「わかってるわよそんなこと。でも、もうここに来て足手まといなんでいやよ!!アンタや誠先生も、チシキさんたちだって…それに目の前で友達が攫われたのに何もできないなんて耐えられないのわ!!」

「明日菜さん…」

目に涙を溜めてそう叫ぶ明日菜。本当に明日菜が戦う必要があるのかなんてわからない。だが、何もしないままいるのがいやだったのだ。

「いいのか明日菜。仮契約ってことはお前も本当の意味でこういう世界に入っていくってことだぞ」

音撃棒二本重ねにして作り出した燃え上がる大剣《大烈火剣》で敵を纏めて切り裂く響鬼。時折、明日菜の方を向きながら忠告にも似た言葉を送る。力を手に入れて一緒に戦いたい。だがそのためには現実ではない世界が待ち構えているということを理解しなければならぬ。すでに明日菜は力はないが、普通の世界ではないものを見てきた。でも、まだ完全には踏み込んではいないのだ。

「覚悟はしてます。私だってこのままじゃいやだから」

「……俺にそれを止める権限はない。それを言うのはネギだ」

正直に言えば明日菜の覚悟を無為にできる権利は自分にはない。本来なら止めるべきなのだろうが、それを言うのは自分ではなく契約を行うネギが決めること。

そのまま響鬼は大烈火剣を解くと、鬼石に火球を展開させる。

「はあっ!!」

鬼棒術・烈火弾を周囲にばら撒いていく。

「ネギ、明日菜!! 時間はあまりない! 決めるなら早めにやるんだ!!」

木乃香を利用して封印を解こうとする千草を止めるにはあまりここで時間を潰している暇はない。

「わかった!! ラス・テル・マ・スキルー」

時間が押しているのはネギもわかっていて。仮契約をするにしても、ここは外部と一度状況を断つ必要があると判断し、魔法詠唱を始める。

ウエルタートウル テンベスターズ・ウエーリス ノーピス プロテクティオーネム・アエリアーレム
ウエンティ・ウエルテンティス
「逆巻け 春の嵐 我らに風の加護を。 風花旋風・
風障壁!!」

ネギと明日菜を中心に巨大な竜巻が巻き起こる。

「な、なんや!?!」

「きつとネギくんの魔法ね」

突如舞い上がった竜巻に気づいた西鬼と神無月鬼。何が起こるのはわからないが、ともかく周囲に召喚された式神たちをなんとかしてはいけない。

先手とばかりに勢いよく駆け出していく西鬼。

「いくでえ!! 虎雷拳!!」

バチバチと閃光走る右手を目の前にいる巨大な式神鬼にぶつける西鬼。一瞬拳が虎の幻影にも見えたと思った瞬間悲鳴すら上げる暇なく周囲の敵を巻き込みながら爆散していく。と言っても、倒されても死ぬのではなく、元ある場所へと帰っていくだけであるが。

「(鬼闘術・雪羽!!)」

一方神無月鬼は背中に収めている羽を展開させ、空中に飛翔する。翼を大きく広げ、地上にいる敵めがけて羽ばたくと、放たれた羽が矢のように向かっていく。

「ゴアツ!! 体ガ!!」

刺さった羽から氷結していき全身を氷漬けにしていく。刺さった箇所痛みもさることながら、そこから冷たい氷が張り付いていくのはなかなか恐怖がある。

「うわっ、えぐいな技やなあ…」

「響鬼の貫樹^{つらぬきたいか}大火に匹敵する技だな。というかビジュアル的にアウトじゃね」

神無月鬼の技を見ていた西鬼と知鬼は率直に感想を述べる。ビジュアル的に言えば、今の知鬼たち鬼の姿のほうがアウトな気はするが。というより正義の味方というより悪の軍団の姿のほうが通るかもしれない。口から火や氷を吹くわ、切り裂く爪を出すわと。

「土遁・地動核！」

響鬼が地面に手を当てた瞬間前方から迫っていた大群を不意打ちに地面を下げる。突然の地面移動に驚く式神たちを尻目に、口部を開放して鬼火を吐き出し焼き尽くしていく。

「ギャアアアアアアアアアア!!」

そして神無月鬼に続くかのように、中々エグい技を繰り出す響鬼。

「アイツも十分エグかったな」

「お前も攻撃しろ知鬼!! インテリ気取ってる場合じゃねえぞ！」

「つたく、わかってるっての!!」

響鬼に言われ、腰に装着しているトランペット型の音撃管を手に取り。途端に形を変え、両手で抱えるほどの大きさに変形していき、見た目はトロンボーンのような形をした音撃管になる。中々迫力ある音撃武器である。

「それサバキさんの武器じゃないの？」

「改良型ってやつですよ。連射機能だけあげたやつでしてね」

関東支部に所属する引退間際の音撃戦士・裁鬼が使用している武器の一つにトロンボーン型の音撃管を使用していたのを思い出す神無月鬼。

「鬼石大サービスだ!!」

重たそうに銃身を式神軍勢に向けると、装填されている鬼石の弾丸を一齐に発射しまくる知鬼。普通に使用している音撃管の比ではないほどの発射速度が出ている。もはや打ち込むだけで式神たちが蜂の巣になっているではないか。

「それ完全にマシンガンじゃないの!!」

「だから実験武器なんですって。鬼石がもつたいないぜ!!」

そう言いながらも引き金を離す気はなく、一通りウチ終えると銃撃に耐え鬼石を打ち込まれた式神たち目掛けてん音撃射を炸裂する。

「音撃射・一網打尽!!」

トロンボーン型の音撃管を一気に吹かせると、先程の機関銃の如く打ち込まれた弾丸型の鬼石が共鳴し、式神たちが次々に消滅していく。

「お前だつて同じだろ…」

知鬼の話をすっかり聞いていた響鬼はボソツと言う。

「ゴ、コイツラ音撃戦士ジヤナイカ!!」

「ドウリデ人間ノニオイガセント思ツタワ!」

数体の式神たちが西鬼たちの姿を見て驚く。自分たち式神や妖とは全く異なる存在である魔化魍を唯一斃すことのできる戦士たち。ほとんど闘うことはないが、長い期間を生きる式神たちは見たことがあるだけに恐怖する。あの音撃という技はまさに一撃必殺であり、自分たちを送り返すどころか完全に浄化させてしまう技だからだ。ところで最初から人間の姿をしていないはずだったのだが。

「二気二攻メロ!!鬼ト呼バレルノガ奴ラダケデハナイコトヲ教エテヤル!!」

リーダー各の一匹がほかを焚き付け、一気になだれ込むように攻めてくる。

「うおおおお!!来たで来たでえ!!」

ひるむことなく、音撃三角・烈節を三節棍にして振り回しまくる西鬼。

「全然減る様子がないな」

かなり倒したはずだが、減る様子がまるでないことに焦る響鬼。それほどの規模の式神たちを召喚した木乃香の魔力は桁違いということになる。いくら戦闘力が高いと言っても、体力消費の激しい音撃戦士では長期戦は厳しい。正直式神たちの相手をしている暇はあまりない。

「やっぱり召喚させてあの眼鏡の女を止めるしかないな。コイツらは所詮呼び出されただけのようだし、術者本人を叩いたほうが早い」

召喚された式神を倒すではなく、召喚した千草を倒すべきだと判断する知鬼。ならば尚更、急行して千草を止めるべきだと。

「なら尚更、急行しないとな……」

改めて、烈火を握りしめ直す響鬼。

一方、竜巻の障壁の中にいたネギと明日菜。すでにネギが仮契約用の魔法陣を構築させていた。

「ふうん。あのエロオコジョがいなくても仮契約つてできるんだ」

「陣の構成とかは学校で習っていたんで……」

いつぞや突然やってきたエロオコジョことカモミール・アルメル。ネギを兄貴と慕い、色々画策していたらしいがどれもこれもアウトなばかりなものだったため、ヒビキが学園長を通して強制送還にさせられた経歴を持つ。今頃何をやっているのかは知らないが。

「明日菜さん……本当にいいんですね」

確認するように、再度戦いに加わろうとする明日菜に言う。

「うん。私もね……きつといつかこうなるって自分で思ってたんだ」

自分はジツとしていられてほど大人しい性格ではない。いずれはこうなる運命なのではないかと心の底から思った。それがなぜかはわからない。だがわからないからこそ自分なのだろうと。だから――

「ごめんネギ。私のワガママで。誠先生にも迷惑かけることになるのも……」

「……………明日菜さん」

明日菜の気持ち理解できるネギ。自分もただ黙っているだけじゃ嫌だった。

あの運命の雪の日。

突如として現れた魔族の軍勢。まさに今外で起きているようなことが起きていた。

多勢に無勢、対抗した魔法使いたちも石にされたり殺されたりと、小さかったネギにはまだ何もできなかった。

『お前のお父さんから託された杖だ。いつか少年がそれを使いこなせるようになることをきつと願ってる。じゃあな、シユツ!!』

それらをまさに鬼神の如く祓ってくれた”鬼戦士”。

そして託された父の形見の杖。

自分を守ってくれたあの鬼戦士が堪らなくカツコよかった。

自分もああいう風になりたかった。

だからこそ、力のない自分が嫌だった。何もできず失っていくことが。

「僕も明日菜さんの気持ちわかります。何もできない悔しさが…」

「ネギ?」

「……必ず皆で麻帆良学園に帰りましょう!!」

「あ、当たり前でしょ!!春休みだつて始まったばかりなんだから!!」

その言葉と共に、ネギの頬に手を置く明日菜。そのままネギの唇に顔を向けていき。

「あ、明日ーんむっ」

「んっ…」

魔法陣が光、眩い光が二人を包んでいく。ことが終わったときは、顔を真っ赤にしたネギと若干頬を赤くした明日菜の顔があった。

「あ、明日菜さん!!いきなり過ぎですよ!!」

「ごめんごめん!何か辛気臭いの苦手で。今はノーカンにしとくから」

「そういう問題なんですか」

何気にお互い初めてのファーストキス。状況が状況だけに緊急事態ということでもいいのだろう。ネギと明日菜。二人の仮契約は無事に終わったのだ。

「それよりもネギ。外で誠先生たちが戦ってるんだから。応援に行くわよ!!」

「わ、わかりました!!シス・メア・パルス契約執行180秒間!!ミニストラ・ネギイネギの従者『カグラザカアスナ神楽坂明日菜』!!」

ネギの魔力を明日菜へと送り込む。明日菜の体が淡い光で包まれていく。

同時に、ネギが発動させた風の障壁の効力が弱まってきている。

「風が止む。ネギたちは…」

それに気づいた響鬼は障壁のように顔を向ける。風が晴れた先に

はすでに、呪文詠唱を追えたネギが杖を構えていた。

ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス
「雷の暴風!!!」

もはやネギの十八番ともいえる大技の《雷の暴風》で式神たちを薙ぎ払っていく。

「本当に10歳児かあの子は!?!」

大技連発なのに、力が全く衰えないネギに素直に驚く西鬼。そもそもフェイトの冥府の石柱を食い止めたり、鬼封じを気合でふっ飛ばしたりと体力消耗しまくっても平気な顔をしている西鬼も十分驚くレベルだが。

「いくわネギ!!」

「待ってください! 従者だけが使える専用アイテムがあります! それを使ってください!!」

「武器! そんなのがあるんだ! それ頂戴ネギ!!」

「はい! 能力発動!!」

明日菜との仮契約で現出したパクティオーカードを展開させるネギ。同時に明日菜の両手に光が溢れ出す。

「おお!! 来たわよネギ!」

「あれがパクティオーカードか」

ネギから話は聞いていたが、始めて見るパクティオーカードに少しばかり興味がいく。光が収まり明日菜専用の得物が姿を現した。

「へ?」

出てきたのはなんと……巨大なハリセンだった。

「な、何よこれええええ!!」

「明日菜、お前西鬼みたいにツツコミ芸でも始める気か!?!」

思わず出てきた武器にツツコミを入れてしまう響鬼。さすがの響鬼も予想外過ぎて言ってしまったのだ。

「ち、違います!! ちよ、ちよつとネギどういこと!?!」

「オ、オカシいな。そんなはずは……」

ネギ自身も専用アイテムがハリセンであるのは予想外だったらしく首をかしげる。契約カードにはしっかりと《ハマノツルギ》と書いてるのだが。

「もうこうなったらやけくそよ!!」

「あ、待ってっ明日菜!!」

ヤケを起こして敵陣に突っ込んでいく明日菜。契約執行状態なので通常より力が上がっているとはいえ、流石にハリセンは危険すぎると止めに向かおうとする響鬼。

「ソナイナ玩具、ジャ倒セヘンデオ嬢チー」

「でりやああああ!!」

「ドワツ!!」

「何!」

明日菜がハマノツルギ(ハリセン状態)を一体の鬼を叩いた瞬間、体がまるでバターのように切れたかと思うと煙のように消えてしまった。

「斬った? いや、送り返したのか?」

普通の攻撃ではないと即座に分析する知鬼。明らかに自分たちの放った倒された方が違っていたからだ。

「こ、これなら行けるわ!!」

ただ叩くだけで敵が消滅するなら勝てると踏んだ明日菜。そんなのをただ黙ってやられているわけもない式神たちはすぐに反撃にでる。

「コノオ!! 調子ニ乗ルナ小娘!!」

「わっ!!」

一匹の鳥族が斬りかかろうとするも、後ろに高く飛び上がる。

「でやああああ!!」

「ノワツ!!」

すぐに前に駆け出し飛びかかりざまにハマノツルギ(ハリセン)で送り返す。

「ちよつと明日菜ちゃん!ほんとに素人!」

ネギの魔力で身体能力が上がっているとはいえ、それを抜いても動きや立ち回りが明らかに素人の動きではなかったからだ。空中から見ていた神無月鬼も明日菜の動きに驚く。

「女子中学生に負けてられるかい!!」

女子中学生相手に本気で対抗意識を爆発させた西鬼は、烈節を自在に振り回し式神たちを次々に

「あの暴走列車西鬼に任せれば……」

明日菜の予想外の強力な能力を見た知鬼は作戦を考え、すぐに答えを引き出す。

「行け響鬼!!こいつらの相手は俺達だけで十分だ!!お前は木乃香ちゃんの後を追え!!」

「はあ!?何言ってるんだ!!」

「明日菜ちゃんのを能力を合わせればここを切り抜ける!!安心しろ!絶対ここを切り抜けてすぐに応援に向かう!」

「…知鬼、わかった!!行くぞ、ネギ!!」

「で、でも明日菜さんが!!」

「ネギ!ここは大丈夫だから!!」

「今度こそ守ってみせるわネギくん!!」

「神無月鬼さん……わかりました!!皆さんご無事で!!」

杖に跨がり一足先に空中に飛翔する。響鬼も腰にぶら下げている《緑黄大鷹》を展開させ、響鬼・翔へと形態変化フォームチェンジを果たす。

「さすがみどりさん。完璧だな」

間近で見た装甲響鬼を参考に開発されたディスクアニマルとの合体して果たす形態変化フォームチェンジを見た知鬼。

「響鬼!!これを持っていけ!!」

腰にあるディスクアニマルの一枚を響鬼に投げ渡す知鬼。

「これは?」

「みどりさんと同じ物だ!今お前が纏っているものと同じのな!!」

「また実験体かよ!!」

「バカ、俺のももつと強力だ!!」

「無茶すんなよ!!」

新たな力と共に、空中へと羽ばたく響鬼。

「それはこっちのセリフだったの」